

國學院大學文学部考古学実習報告 第21集

長野県木曾郡開田村

柳又遺跡 A地点

YANAGIMATA - A SITE

第2次発掘調査報告書

1992

國學院大學文学部考古学研究室

國學院大學文学部考古学実習報告 第21集

長野県木曾郡開田村

柳又遺跡 A地点

YANAGIMATA - A SITE

第2次発掘調査報告書

1992

國學院大學文学部考古学研究室

監 修

小林 達雄

構成・編集

谷口 康浩

本文執筆

伊藤 昌広・上松 寿明・岡崎 友子・荻野 早苗

小林 理恵・佐藤多佳子・杉山 真理・橋 史夏

中田 真弓・成沢 美奈・水野 晴美・山内 利秋

山口真由美・山本 みき・若泉 亮

遺物写真

若泉 亮

序

柳又遺跡A地点の第2次発掘調査の報告書をここに完成上梓する運びとなった。出土品の全てを整理し、観察し、実測し、説明し、若干の考察を加える作業は、思いの外手間どった。なすべきことがどんどん膨らんで、時間がいくらでも欲しい、そんな気分が襲われる。これは力不足のせいだけなのではなく、逆にむしろそれだけ力がついてきていることの証なのかもしれないのである。ちょうど小学生の時には、あっという間にいくつもの絵が描けたのに、小学生から上級になるにつれて、かえって一枚の絵の完成に長い時間がかかるようになってしまう、あの思い出に似ている。内容が深められ、充実していくこととは、そうしたことなのであろう。

本書の出来栄えには、勿論不満も残るが、実習生を中心とする大勢の汗と力の結晶であり、心が込められたものであることを、誇りに思っている。この上に諸賢の研究の資となれば、幸甚である。また忌憚のない御叱声を賜わらば、有難い限りである。

開田高原に考古学実習の場を求めて5年である。長野県教育委員会文化課をはじめ、開田村の関係機関や村民の方々の御理解と御力添えに改めて感謝申し上げる次第である。また、宿舍として利用させていただいている市邨学園開田高原研修センターの効用は計り知れないものがあり、末岡熙章理事長に衷心より感謝申し上げます。

なお、開田村は西野に所在する山下家のお蔵を改造して、考古資料館を開設する計画をされ、これまでの因縁からその構想、実施計画に協力させていただくことになった。即ち森嶋稔委員長および神村透、山下生六、山下千一委員に、本学からは青木豊主任学芸員、谷口康浩助手、内川隆志学芸員が参画したのである。考古学実習による成果もまた、これに盛り込まれており、一般に公開利用していただくこととなった。本書がお手元に届くころには、この考古資料館も完成しているはずである。大方の見学を期待するものである。

平成3年10月31日

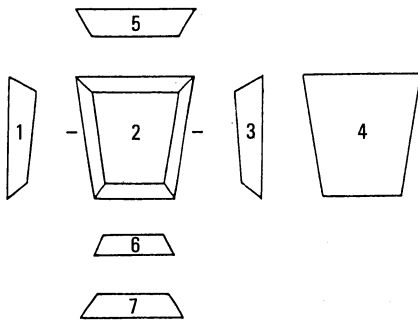
考古学研究室 小林 達雄

例 言

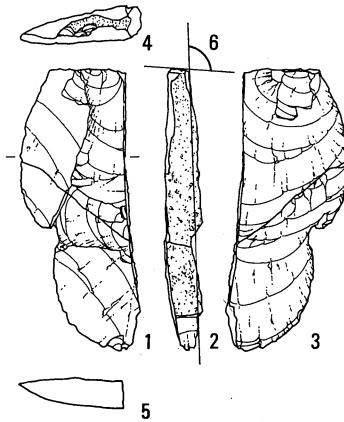
1. 本書は國學院大學文学部が考古学実習の一環として実施した長野県木曾郡開田村柳又遺跡 A地点における第2次発掘調査の報告書である。
2. 柳又遺跡 A地点の地籍は、長野県木曾郡開田村大字西野6503-1番地である。今回は村上和幸氏所有の畑地108㎡を発掘調査の対象とした。
3. 発掘調査は國學院大學文学部長金田弘が主体者となり、文学部教授小林達雄が担当した。文学部助教授吉田恵二・考古学資料館学芸員青木豊・文学部助手谷口康浩が指導にあたり、考古学実習生15名が発掘に従事した。
4. 第2次発掘調査は、1990年9月8日から9月17日まで、10日間にわたり実施した。
5. 本発掘調査の実施にあたっては、1990年5月12日付國考発第1号にて文化庁長官宛発掘届を長野県教育委員会を経由して提出、委保第5の969号にて発掘届受理の通知があった。
6. 調査の計画・実施にあたり、長野県教育委員会・開田村教育委員会・学校法人市邨学園より指導・協力を得た。
7. 発掘調査および整理作業には、実習生のほか多くの方々の参加協力を得た。また、発掘調査・整理作業の過程で多数の見学者各位より種々の御教示を賜った。芳名を巻末に記して謝意を表する次第である。
8. 出土遺物・記録類の整理作業は、國學院大學考古学実習室において行った。
9. 本書の執筆は、谷口康浩の指導のもと、実習生15名が分担した。各文末に執筆分担者名を明記した。
10. 本書の構成・編集は谷口康浩が行い、小林達雄が監修した。
11. 遺跡付近の地図は国土地理院発行の5万分の1木曾福島の一部を転載した。
12. 石器および礫・碎片の石質鑑定は、東京都立青山高等学校教諭柴田徹氏に依頼した。
13. 本発掘調査によって出土した遺物および記録類は、國學院大學において保管している。

凡 例

1. 石器の実測は原則として第三角投影図法に拠った。
2. 石器器種の各部の名称と計測基準は別図に示した通りである。
3. 母岩別資料を除く石器実測図には、文化層毎に通し番号を付した。本文中および遺物分布図・石器一覧表にある石器番号は、この通し番号を示す。
4. 石器実測図には、石質と出土地点・出土層位を併記した。石質記号は以下の通りである。
an : 安山岩 *ch* : チャート *gla* : 玻璃質安山岩
hor : ホルンフェルス *ob* : 黒曜石 *rhy* : 濃飛流紋岩
san : 砂岩 *sh* : 珪質頁岩 *sla* : 粘板岩 *tuf* : 凝灰岩
5. 石器実測図の白抜きの部分は耕作・発掘による破損を示す。
6. 遺物の分類にある「碎片」は、主にチャートの礫が節理面に沿って角状に細かく砕けたもので、人為的な打撃による剝離面を具えていないものを指す。
7. 第1次発掘調査報告書で暫定的に「第VI層上部文化層」として把握された石器群は、第2次調査の結果、第VI層中位～下部に包含される文化層であることが確認されたため、本書では「第VI層文化層」と名称を改めた。詳細については第七章を参照されたい。
8. 本文中の註は各章毎に通し番号を付し、章末に掲載した。引用参考文献は257～261頁に掲載した。

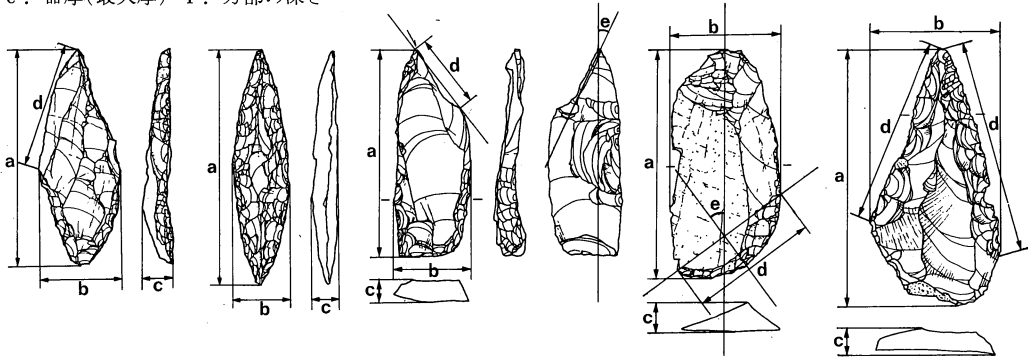


- 1. 左側面
- 2. 正面
- 3. 右側面
- 4. 裏面
- 5. 上面
- 6. 下面
- 7. 断面

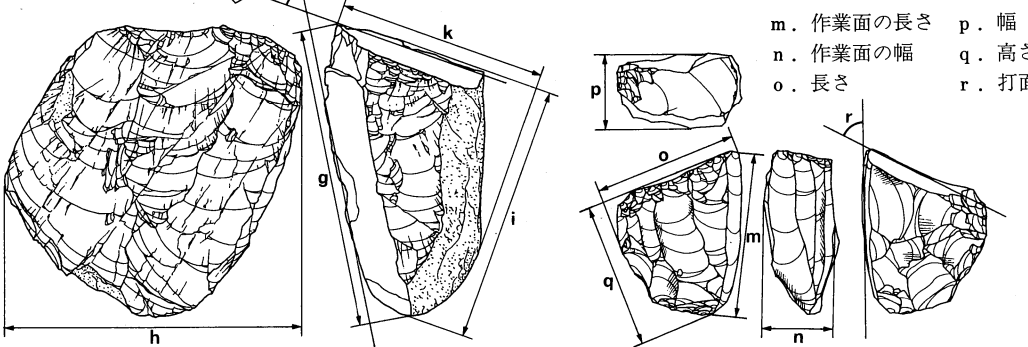


- 1. 背面
- 2. 右側面
- 3. 腹面
- 4. 打面
- 5. 断面
- 6. 剝離角

- a. 器長
- b. 器幅
- c. 器厚(最大厚)
- d. 刃部の長さ
- e. 刃部の傾斜角
- f. 刃部の深さ



- g. 作業面の長さ
- h. 作業面の幅
- i. 高さ
- j. 幅
- k. 厚さ
- l. 打面角



- m. 作業面の長さ
- n. 作業面の幅
- o. 長さ
- p. 幅
- q. 高さ
- r. 打面角

石器各部の名称・計測部位

目 次

第 I 章 調査の目的と経過	1
第 1 節 調査の目的	1
第 2 節 第 1 次調査の概要	2
第 3 節 第 2 次発掘調査と整理作業の経過	3
(1) 第 2 次発掘調査	3
(2) 整理作業の経過	5
第 II 章 開田高原と柳又遺跡	8
第 1 節 柳又遺跡の位置と地理的環境	8
(1) 柳又遺跡の位置と地点	8
(2) 柳又原の地質と形成年代	8
第 2 節 開田高原の遺跡	15
(1) 開田高原における考古学的調査	15
(2) 開田高原と周辺の遺跡	17
第 III 章 遺跡の概要	28
第 1 節 遺跡の立地と発掘調査区域	28
(1) 遺跡の地形	28
(2) 発掘調査区域の設定	28
第 2 節 層序と文化層	31
(1) 基本層序	31
(2) 文化層	34
第 IV 章 縄文時代草創期の遺物	38
第 1 節 土器	38
第 2 節 石器	38
(1) 石鏃	38
(2) 有舌尖頭器	38
(3) 槍先形尖頭器	40
(4) 両面調整石器	40
(5) 細部調整剥片	40
第 V 章 第 IV 層文化層	41
第 1 節 遺物の分布	41

第2節	石器	41
(1)	槍先形尖頭器	41
(2)	石刃	41
(3)	搔器	44
(4)	細部調整剥片	44
第VI章	第V層文化層	46
第1節	概要	46
第2節	遺物の分布とユニット	47
(1)	層位と遺物の分布状態	47
(2)	ユニット1	66
(3)	ユニット2	68
第3節	礫群・配石	70
(1)	第1号礫群	70
(2)	第1号配石	75
第4節	石器	80
(1)	石器組成	80
(2)	細石刃石核	81
(3)	細石刃石核原形	83
(4)	打面形成削片	83
(5)	稜付削片	85
(6)	細石刃	85
(7)	槍先形尖頭器	90
(8)	搔器	90
(9)	削器	91
(10)	細部調整剥片	94
(11)	石刃・石刃状剥片	100
(12)	石核	107
(13)	礫器	111
(14)	打製石斧	111
第5節	第1次調査出土資料	122
(1)	概要	122
(2)	細石刃石核と関係資料	122
(3)	細石刃	127

第6節	母岩別資料	129
	(1) 母岩別資料 1	129
	(2) 母岩別資料 2	129
	(3) 母岩別資料 3	138
	(4) 母岩別資料 4	143
	(5) 母岩別資料 5	147
	(6) 母岩別資料 6	152
	(7) 母岩別資料 7	154
第Ⅶ章	第Ⅵ層文化層	164
第1節	概要	164
第2節	遺物の分布とユニット	165
	(1) 層位と遺物の分布状態	165
	(2) ユニット 1	175
第3節	礫群	178
	(1) 規模と形状	178
	(2) 礫の分析	178
	(3) 礫の接合	179
第4節	石器	184
	(1) 石器組成	184
	(2) ナイフ形石器	185
	(3) 鋸歯状石器	186
	(4) 採錐器	187
	(5) 細部調整剥片	187
	(6) 石刃	188
	(7) 敲石	188
	(8) 石核	189
第5節	第1次調査出土資料	197
第6節	母岩別資料	204
	(1) 母岩別資料 1	204
	(2) 母岩別資料 2	215
	(3) 母岩別資料 3	220
第Ⅷ章	表面採集資料	229
第Ⅸ章	旧石器文化に関する考察	234

第1節	細石刃の形態的考察	234
	(1) 石材別の大きさ	234
	(2) 折断の部位と大きさ	234
	(3) 折断方向の傾向	235
	(4) 側辺の細部調整	235
第2節	第V層文化層の石器組成について	237
第3節	細石刃文化の礫群・配石	240
	(1) はじめに	240
	(2) 資料集成	240
	(3) 細石刃文化の遺構	247
第4節	第VI層文化層におけるナイフ形石器の形態組成	249
	(1) ナイフ形石器の形態分類	249
	(2) ナイフ形石器の素材	250
	(3) 相模野台地・武蔵野台地との編年的比較	250
第X章	第2次調査の成果と問題点	254
	引用参考文献	257
	発掘調査参加者・関係者一覧	262

挿図目次

第1図	柳又遺跡の位置と周辺の遺跡	9
第2図	長野県の地形と水系	10
第3図	木曾川流域の河成段丘地形模式図	12
第4図	御岳山周辺地域の河成段丘地形	13
第5図	新期御岳テフラ層上部テフラ柱状模式図	14
第6図	柳又遺跡A地点の石器群	20
第7図	柳又遺跡B地点の石器群	21
第8図	岐阜県高根村池の原遺跡B地点出土の石器(1)	24
第9図	岐阜県高根村池の原遺跡B地点出土の石器(2)	25
第10図	遺跡周辺の地形と発掘調査区域	29
第11図	地形断面図	30
第12図	発掘区域と調査層位	30
第13図	遺跡の基本層序	32
第14図	発掘調査区域の層序(1)	33
第15図	発掘調査区域の層序(2)	34
第16図	文化層と編年	35
第17図	縄文時代草創期の遺物	39
第18図	第IV層文化層遺物分布図	42
第19図	第IV層文化層C-7・8区遺物分布図	43
第20図	第IV層文化層T・U-11区遺物分布図	43
第21図	第IV層文化層の石器(1)	44
第22図	第IV層文化層の石器(2)	45
第23図	第V層文化層遺物分布図	49
第24図	第V層文化層石器器種別分布図(1)	52
第25図	第V層文化層石器器種別分布図(2)	53
第26図	第V層文化層石器器種別分布図(3)	54
第27図	ナイフ形石器・槍先形尖頭器の分布	55
第28図	第V層文化層 礫・碎片分布図	56
第29図	石器・剥片の接合関係	57
第30図	礫・碎片の接合関係	58

第31図	C-7区・C-8区遺物分布図	59
第32図	C-9区・C-10区遺物分布図	60
第33図	C-11区・C-12区遺物分布図	61
第34図	C-13区・C-14区遺物分布図	62
第35図	Z-11区・Y-11区遺物分布図	63
第36図	X-11区・W-11区遺物分布図	64
第37図	UV-11区・T-11区遺物分布図	65
第38図	第V層文化層ユニット1遺物分布図	67
第39図	第V層文化層ユニット2遺物分布図	69
第40図	第V層文化層第1号礫群	72
第41図	第1号礫群 構成礫の重量・被熱・接合関係	73
第42図	第1号礫群 構成礫の内訳	74
第43図	第1号礫群 構成礫の重量別内訳	74
第44図	第V層文化層第1号配石	76
第45図	第1号配石 構成礫の重量・被熱・接合関係	77
第46図	第1号配石 構成礫の内訳	78
第47図	第1号配石 構成礫の重量別内訳	78
第48図	第V層文化層の石器組成と石材別内訳	80
第49図	第V層文化層の石器 細石刃石核・稜付削片	82
第50図	第V層文化層の石器 打面形成削片・細石刃石核原形	84
第51図	第V層文化層の石器 細石刃	86
第52図	第V層文化層の石器 細石刃	87
第53図	第V層文化層の石器 細石刃	88
第54図	第V層文化層の石器 細石刃・槍先形尖頭器	89
第55図	第V層文化層の石器 搔器	92
第56図	第V層文化層の石器 搔器	93
第57図	第V層文化層の石器 削器	95
第58図	第V層文化層の石器 削器・細部調整剥片	96
第59図	第V層文化層の石器 細部調整剥片	97
第60図	第V層文化層の石器 細部調整剥片	98
第61図	第V層文化層の石器 細部調整剥片	99
第62図	第V層文化層の石器 石刃	101
第63図	第V層文化層の石器 石刃・石刃状剥片	103

第64図	第Ⅴ層文化層の石器	石刃・石刃状剥片	104
第65図	第Ⅴ層文化層の石器	石核	105
第66図	第Ⅴ層文化層の石器	石核	108
第67図	第Ⅴ層文化層の石器	石核	109
第68図	第Ⅴ層文化層の石器	石核・打面再生剥片	110
第69図	第Ⅴ層文化層の石器	礫器・打製石斧	112
第70図	第Ⅴ層文化層の石器	礫器	113
第71図	第Ⅴ層文化層の石器	礫器	114
第72図	第1次調査出土資料	細石刃石核・原形	124
第73図	第1次調査出土資料	打面形成削片・打面再生剥片	125
第74図	第1次調査出土資料	細石刃石核原形・細石刃石核調整剥片	126
第75図	第Ⅴ層文化層母岩別資料1		130
第76図	第Ⅴ層文化層母岩別資料1	接合資料	131
第77図	第Ⅴ層文化層母岩別資料1	分布図	132
第78図	第Ⅴ層文化層母岩別資料2		134
第79図	第Ⅴ層文化層母岩別資料2		135
第80図	第Ⅴ層文化層母岩別資料2	接合資料	136
第81図	母岩別資料2	接合資料白図	137
第82図	第Ⅴ層文化層母岩別資料2	分布図	137
第83図	第Ⅴ層文化層母岩別資料3		139
第84図	第Ⅴ層文化層母岩別資料3		140
第85図	第Ⅴ層文化層母岩別資料3	接合資料	141
第86図	第Ⅴ層文化層母岩別資料3	分布図	142
第87図	第Ⅴ層文化層母岩別資料4		144
第88図	第Ⅴ層文化層母岩別資料4	接合資料	145
第89図	第Ⅴ層文化層母岩別資料4	分布図	146
第90図	第Ⅴ層文化層母岩別資料5		148
第91図	第Ⅴ層文化層母岩別資料5	接合資料	149
第92図	第Ⅴ層文化層母岩別資料5	接合資料	150
第93図	第Ⅴ層文化層母岩別資料5	分布図	151
第94図	第Ⅴ層文化層母岩別資料6		153
第95図	第Ⅴ層文化層母岩別資料6	分布図	154
第96図	第Ⅴ層文化層母岩別資料7		155

第97図	第V層文化層母岩別資料7 接合資料	156
第98図	第V層文化層母岩別資料7 分布図	156
第99図	第VI層文化層遺物分布図	166
第100図	第VI層文化層 礫・碎片分布図	167
第101図	第VI層文化層石器器種別分布図(1)	168
第102図	第VI層文化層石器器種別分布図(2)	169
第103図	A-10区・B-10区遺物分布図	170
第104図	A-11区・B-11区遺物分布図	171
第105図	A-12区・B-12区遺物分布図	172
第106図	A-13区・B-13区遺物分布図	173
第107図	A-14区・B-14区遺物分布図	174
第108図	第VI層文化層ユニット1の検出層位	176
第109図	ユニット1における遺物の層位別出土頻度	176
第110図	ユニット1における礫群と接合資料の分布	177
第111図	第VI層文化層第1号礫群	180
第112図	第1号礫群 構成礫の重量・被熱	181
第113図	第1号礫群 構成礫の接合関係	182
第114図	第1号礫群 構成礫の内訳	183
第115図	第1号礫群 構成礫の重量別内訳	183
第116図	第VI層文化層の石器組成と石材別内訳	184
第117図	第VI層文化層の石器 ナイフ形石器	186
第118図	第VI層文化層の石器 ナイフ形石器	187
第119図	第VI層文化層の石器 揉錐器・鋸歯状石器・細部調整剥片	188
第120図	第VI層文化層の石器 石刃	189
第121図	第VI層文化層の石器 石核	191
第122図	第VI層文化層の石器 石核	192
第123図	第VI層文化層の石器 石核・敲石	193
第124図	第VI層文化層の石器 石核	194
第125図	第1次調査出土資料 ナイフ形石器・槍先形尖頭器・彫器	198
第126図	第1次調査出土資料 削器・搔器・石刃	199
第127図	第1次調査出土資料 石核	200
第128図	第1次調査出土資料 石核	201
第129図	第1次調査出土資料 石核	202

第130図	第1次調査出土資料 敲石	203
第131図	第VI層文化層母岩別資料1	206
第132図	第VI層文化層母岩別資料1	207
第133図	第VI層文化層母岩別資料1	208
第134図	第VI層文化層母岩別資料1 接合資料	209
第135図	第VI層文化層母岩別資料1 接合資料	211
第136図	第VI層文化層母岩別資料1	212
第137図	第VI層文化層母岩別資料1 分布図	213
第138図	第VI層文化層母岩別資料2	214
第139図	第VI層文化層母岩別資料2	215
第140図	第VI層文化層母岩別資料2 接合資料	216
第141図	母岩別資料2 接合資料白図	217
第142図	第VI層文化層母岩別資料2 接合資料	218
第143図	第VI層文化層母岩別資料2 分布図	219
第144図	第VI層文化層母岩別資料3	221
第145図	第VI層文化層母岩別資料3 接合資料	222
第146図	第VI層文化層母岩別資料3 分布図	223
第147図	表面採集資料(1)	231
第148図	表面採集資料(2)	232
第149図	表面採集資料(3)	233
第150図	細石刃各部位の大きさ・石材別の大きさ	236
第151図	第V層文化層の石器組成(1)	238
第152図	第V層文化層の石器組成(2)	239
第153図	ナイフ形石器の形態分類	250
第154図	ナイフ形石器の形態組成	251

表 目 次

第1表	整理作業の経過	6
第2表	第V層文化層石器器種別一覧表	115
第3表	第V層文化層母岩別資料1一覧表	157
第4表	第V層文化層母岩別資料4一覧表	157
第5表	第V層文化層母岩別資料2一覧表	158
第6表	第V層文化層母岩別資料3一覧表	159
第7表	第V層文化層母岩別資料5一覧表	160
第8表	第V層文化層母岩別資料6一覧表	161
第9表	第V層文化層母岩別資料7一覧表	161
第10表	第VI層文化層石器器種別一覧表	195
第11表	第VI層文化層母岩別資料1一覧表	224
第12表	第VI層文化層母岩別資料2一覧表	226
第13表	第VI層文化層母岩別資料3一覧表	227
第14表	細石刃文化の礫群・配石	241

写真図版目次

図版1	1. 柳又原の地形と遺跡 2. 西野川と遺跡の立地	図版7	3. 11区第V層遺物出土状態
図版2	遺跡の現状	図版8	1. 第VI層文化層ユニット1 2. 第VI層文化層第1号礫群
図版3	1. 御岳山眺望 2. 遺跡付近の露頭	図版9	1. 縄文時代草創期の遺物 2. 第IV層文化層の石器
図版4	1. 基本層序(A-22) 2. 調査区の層序(A-10)	図版10	第V層文化層の石器 1. 細石刃石核・細石刃石核原形 2. 細石刃石核原形・打面形成削片 細石刃石核調整剥片
図版5	発掘区域と遺物出土状態	図版11	第V層文化層の石器 1. 細石刃 2. 細石刃・槍先形尖頭器
図版6	1. 第V層文化層第1号配石 2. 第1号配石遺物出土状態		
図版7	1. A・B区第VI層遺物出土状態 2. C区第V層遺物出土状態		

- 図版12 第V層文化層の石器
1. 搔器
2. 削器・細部調整剥片
- 図版13 第V層文化層の石器 細部調整剥片
- 図版14 第V層文化層の石器 石刃
- 図版15 第V層文化層の石器 石核
- 図版16 第V層文化層の石器 礫器
- 図版17 1. 第V層文化層母岩別資料1
2. 母岩別資料1 接合資料
- 図版18 1. 第V層文化層母岩別資料2
2. 母岩別資料2 接合資料
- 図版19 1. 第V層文化層母岩別資料3
2. 母岩別資料3 接合資料
- 図版20 1. 第V層文化層母岩別資料4
2. 母岩別資料4 接合資料
- 図版21 1. 第V層文化層母岩別資料5
2. 母岩別資料5 接合資料
- 図版22 第VI層文化層の石器
1. ナイフ形石器・槍先形尖頭器
2. 彫器・搔器・削器・鋸齒状石器・
揉錐器
- 図版23 第VI層文化層の石器
1. 石刃
2. 石核
- 図版24 第VI層文化層の石器
1. 石核
2. 石核・敲石
- 図版25 第VI層文化層母岩別資料1
- 図版26 第VI層文化層母岩別資料1 接合資料
- 図版27 1. 第VI層文化層母岩別資料2
2. 母岩別資料2 接合資料
- 図版28 1. 第VI層文化層母岩別資料3
2. 母岩別資料3 接合資料
- 図版29 表面採集資料
- 図版30 発掘調査スナップ
- 図版31 発掘調査スナップ
- 図版32 整理作業スナップ

第Ⅰ章 調査の目的と経過

第1節 調査の目的

國學院大學文学部考古学研究室では、考古学実習の一環として毎年各地で学術発掘調査を実施しており、1979年度から5年次にわたって行った新潟県中魚沼郡中里村壬遺跡の発掘を皮切りに、これまで山形県長井市北堂C遺跡、千葉県富津市森山塚古墳、東京都三宅島物見処遺跡等の調査を行ってきた。そして、1987年からは、調査地の一つを長野県の本曾開田高原に求め、縄文時代草創期の小馬背遺跡ならびに西又遺跡の発掘調査を1987・88年度にかけて行ったところである。89年度に開始した柳又遺跡A地点の発掘も、小馬背・西又遺跡の研究を受け継ぐ一連の調査であり、開田高原における旧石器文化ならびに縄文草創期文化の様相とその変遷等の解明を目的としたものである。

本曾御岳山の北東麓に位置する開田高原には、旧石器時代および縄文時代草創期を中心とする多数の遺跡が残されている。1956年に藤沢宗平ほか信州ローム研究会が行った古屋敷遺跡の発掘は、開田高原における本格的な考古学研究に先鞭をつけるものであった。この時発見された大形の槍先形尖頭器を主体とする石器文化は、「信州ローム」誌上に報告され、旧石器文化と縄文文化の起源研究のフィールドとしての開田高原の重要性を強く印象づけることとなった。また、それに続いて1959年から4年次にわたり、柳又遺跡調査会によって行われた柳又遺跡A地点・B地点の発掘調査では、細石刃やナイフ形石器とともに、「柳又ポイント」の通称で知られる有舌尖頭器が発見され、旧石器時代から縄文時代への移行過程の様相解明に大きく貢献したのである。さらに、続いて行われた小馬背・西又遺跡の発掘調査においても、隆起線文系土器に伴い、有舌尖頭器・片刃打製石斧など縄文時代草創期の石器が多数発見され、該期の研究の進展に裨益するところが少なくなかった。

本学考古学研究室では、このような経緯を踏まえて、開田高原における考古学的調査を当面継続して行っていく方針をたて、1987年4月に遺跡の分布と現状を把握するための予備的な踏査を行い、最初の調査地として縄文時代草創期の小馬背遺跡を選定した。しかし、2年次にわたる調査の結果、遺跡の遺存状態が壊滅的であることが確認された。また、これと並行して調査が進められた西又遺跡についても、既に遺物包含層が大きく攪乱されていることが判明したため、この両遺跡の調査は1988年度をもって一応の区切りがつけられることになった。一方、柳又遺跡については、1979年の御岳山噴火降灰罹災に伴う土地改良工事や耕作等によって、遺物包含層は既に壊滅したものと考えられていた。しかし、小馬背遺跡の第2次調査と並行して実施した周辺遺跡の調査の際に、柳又遺跡A地点の村上和幸氏所有の畑地に、旧石器時代を中

第I章 調査の目的と経過

心とする遺物が散乱しているのが発見され、それらが最近の深耕によるものであることも判明した。そこで急遽同地点の試掘を行ったところ、幸運にも旧石器時代の遺物包含層が大きな攪乱を受けずに保存されていることが確認され、同地点を新たな調査対象とする方針が固められたのである。

1989年8月27日から9月5日にかけて実施した第1次発掘調査では、旧石器時代の遺物包含層の保存状態と土層の基本層序を確認するとともに、細石刃を主体とする第V層文化層、ナイフ形石器を伴う第VI層上部文化層の二面の文化層を検出するなどの成果を得た。これを受けて今回の第2次調査では、第V層・第VI層の各文化層における遺物の平面的な広がり追求と石器組成の把握を主な目的として、調査計画が練られることになった。また、第VII層以下のさらに古い文化層の有無についても、確認する必要があった。1990年4月30日～5月2日には、小林達雄教授・青木豊考古学資料館学芸員・谷口康浩助手が現地に出向し、発掘地点の選定と調査期間等について、関係諸機関ならびに地主村上氏との間で事前協議を行った。そして農作物の収穫時期と市邨学園開田高原研修センターの利用日程の都合から、調査期間は9月8日～9月17日と決定した。

なお、今回の調査の実施にあたっては、いつもながら長野県教育委員会ならびに開田村教育委員会より御指導と御協力を賜った。また、地主村上和幸氏には調査の趣旨を御理解いただき、発掘調査を快く承諾していただいた。学校法人市邨学園理事長末岡熙章氏（73期院友）には、同学園の開田高原研修センターを調査団の宿舎として提供していただいたばかりでなく、現地まで調査団の激励にお出でいただいた。嶽見旅館ならびにたけみ商店には、調査団の食事と送迎を御世話いただき、例年多大なる御協力を頂戴している。また神村透先生・山下生六先生をはじめ、遠路激励にお出で下さった見学者各位にも、さまざまな御支援をいただいた。ここに謝意を表する次第である。（水野）

第2節 第1次調査の概要

1988年9月4日から9月13日にかけて実施した小馬背遺跡第2次調査の際に、柳又遺跡A地点において、旧石器を含む遺物の散布が認められたため、9月8日～10日・12日の4日間、同地点の現状把握を目的とする試掘調査を行った。柳又遺跡一帯では、御岳山噴火降灰罹災後の土地改良工事などによって、既に遺物包含層は壊滅したものと考えられていた。しかし、A地点では、縄文時代草創期以降の包含層は攪乱されていたものの、旧石器時代の遺物包含層は破壊を免れ、保存されていることが確認された。

この調査結果を踏まえて、翌1989年8月27日から9月5日にかけて、A地点の第1次発掘調査を実施した。発掘区域は、1959年から62年にかけて樋口昇一・森嶋稔らによって調査が行わ

第2節 第1次調査の概要

れたA I地点の東側の畑地にあたり、その位置関係は第10図のようである。調査区は1グリッド2×2mとして、計23グリッドを設定した。グリッドの名称は東から西へA・B列、南から北へA列5～16区・B列6～16区とした。さらに基本層序を確認するためA-22区に試掘区を設定した。その結果、調査区は合計24グリッド、調査面積は96㎡となった。

不安定な天候に悩まされながらも、この調査では旧石器時代の二面の文化層が確認され、上位から第V層文化層・第VI層上部文化層として把握された。第V層文化層は細石刃を主体とする石器文化であり、主な遺物として細石刃75点・細石刃石核2点・同原形2点・同打面形成削片3点・同調整剥片5点等が出土した^①。細石刃はA・B-9・10区に集中して分布することが確認され、全体としてそれらの細石刃関係資料がB列側（西側）に偏って分布する傾向が把握された。また、その他の石器器種として、搔器・削器・細部調整剥片・石刃等が共伴することも確認された。一方、第VI層上部文化層^②は、ナイフ形石器を伴う石器文化であり、ナイフ形石器30点をはじめ、槍先形尖頭器・彫器・搔器・細部調整剥片・石刃・石核・敲石等が出土した。そしてA・B-11～13区に中心をもつ礫群が検出され、石器・剥片類がこの礫群に付随するようにA・B-13・14区に集中して分布する状況が確認された。また、石器製作の基盤となる剥片剥離技術の分析・復元を行いうるだけの比較的まとまった母岩別資料も得られた。しかし、日程の都合から第VI層上部の層位で調査を中断せざるを得ず、当該文化層の全容解明は第2次調査以降に持ち越されることとなった。

発掘区の最も北側にあたるA-22区では、旧地形が埋没谷状に落ち込んでいることが判明し、耕作による土層の攪乱を受けていない当区において、遺跡の基本層序と層位名称を確定した。当区では、第Ⅲ層中から19点の縄文土器片が出土したほかは、第IV層以下から遺物が出土せず、旧石器時代の遺構・遺物はA・B-15・16区付近を境として地形の傾斜する北側には分布していないことが確認された。なお、縄文時代の遺物としては、第I層中から有舌尖頭器9点・石鏃3点・石匙1点が得られたほか、A-22区第Ⅲ層から早期の土器片19点が出土した。また、A-5区の南際から縄文時代早期頃の土坑が1基検出されている。（山内）

第3節 第2次発掘調査と整理作業の経過

(1) 第2次発掘調査

第2次調査は、1990年9月8日から9月17日までの10日間にわたり実施した。今回の調査では、① 第V層文化層における遺物の分布状況と石器組成の把握、② A・B-10～14区において検出された第VI層文化層の礫群およびユニットの完掘、③ 第VII層以下における文化層の有無の確認の3点を基本方針とする調査計画を立て、27グリッド合計108㎡の発掘に着手した。しかし、10日間の日程と天候条件から、①・②を辛うじて遂行するにとどまった。発掘調査に

第I章 調査の目的と経過

は、考古学実習生15名のほか、本学史学科、大学院、青山学院大学、駒沢大学、東京女子大学、富山大学からの特別参加もあり、総勢60余名による大掛かりな調査となった。前半は好天に恵まれ発掘が順調に進んだが、後半の約4日間は雨天のため現場での作業が大幅に遅れ、当初計画していた第Ⅶ層以下の調査は断念せざるを得ず、次年度に持ち越された。調査期間中には約70名の見学者が来訪、9月15日には宿舎において出土資料の説明会と懇親会が盛大に催された。

9月7日(晴) 発掘機材を車に積み込み、先発隊として小林達雄・谷口康浩の2名と実習生の測量班3名が開田村へ向けて出発した。

9月8日(晴) 発掘参加者41名が午前9時、本学本館玄関前に集合、総務課斉藤広吉運転手の運転するバスに乗車して午前9時30分に大学を出発、午後5時頃に宿舎の市邨学園開田高原研修センターに到着した。先発の測量班は、発掘区のグリッド設定を完了した。夕食後、実習生を中心に翌日からの作業の打ち合せを行った。

9月9日(晴) 今回の調査では、第1次調査で確認された第Ⅴ層および第Ⅵ層上部文化層の各文化層における遺物の分布状態と石器組成の把握などを主眼に置き、第1次調査の発掘区域から東西にそれぞれグリッドを拡張して合計100㎡を発掘する方針を立てた。第Ⅴ層文化層については、第1次調査の所見からB-8~11区に細石刃・搔器・削器等の遺物の集中箇所が認められ、さらに西側に分布が広がることが予想されたため、新たにC-7~14区を設定し、ユニットの検出を目指した。また、東側への遺跡の広がりを確認するために、11列を東側に7グリッド拡張した。一方、第Ⅵ層上部文化層については、第1次調査において、A・B-11~12区を中心とし、礫群を伴う直径約10mのユニットが検出されたため、今回は同ユニットの完掘を目指し、A・B-10~14区の第Ⅵ層中部以下を継続して掘り下げることにした。A・B・C列の第Ⅰ層の掘り下げから作業を開始し、これを完了した。

9月10日(晴) 第Ⅴ層文化層では、C-10・11区を中心として、比較的大型の礫を円形状に配置した配石遺構が検出され、その周囲から細石刃・細石刃石核・同原形・搔器・削器・細部調整剥片・石刃・礫器等が集中的に出土した。これは、第1次調査で確認されたB-8~11区の細石刃等の集中地点に連続するユニットであり、配石遺構を中心とするユニットの状態が次第に明らかになってきた。一方、第Ⅵ層文化層ではA・B-12区を中心として130~140点のチャートの礫・碎片が新たに出土した。

9月11日(晴) C列および11列における第Ⅴ層の掘り下げ、A・B列における第Ⅵ層の掘り下げを継続し、午後から各層毎に遺物の出土位置の計測と取り上げを行った。第Ⅴ層文化層では、V-11区~Y-11区にかけて新たに礫群1基が検出され、それに付随する遺物のユニットが確認された。また、T-11区から東側に向かって旧地形が傾斜していることが明らかとなり、遺物の分布が希薄であることも確認した。第Ⅵ層文化層では、A-13区から揉錐器、B-10区から鋸歯状石器、B-12区からナイフ形石器等が出土した。その他注意すべき所見として、C-

第3節 第2次発掘調査と整理作業の経過

7・8区の周辺に部分的に遺存する第IV層中から、槍先形尖頭器2点・搔器1点・石刃2点等が出土し、細石刃文化に後続する新たな文化層の存在が予測されるに至った。なお、遺跡の北側の客土中から、縄文時代草創期に属する珪質頁岩製の石鏃が採集されたため、新たにT・U-28区(8㎡)を設定し発掘したが、縄文草創期の遺物包含層は確認されなかった。

9月12日(晴時々曇) 第V層・第VI層の掘り下げを継続するとともに、A-10区において基本層序の記録と第VII層以下の遺物の包含層の有無を確認するため、深掘りを行った。しかし、当該グリッドでは、第VII層以下の文化層は確認されなかった。

9月13日(曇のち雨) 朝から空が厚い雲に覆われ、各グリッドとも急いで遺物の出土位置の計測を行い、遺物を収納した。昼食後、雨が降りだしたため作業を中断し、宿舎に戻った。

9月14日(曇のち雨) 朝から曇天のため、急ピッチで作業を行った。第V層文化層については、C列での第V層の完掘を目指し、C-10・11区で検出された配石遺構の実測と、出土遺物の記録・取り上げを行った。また、T-11区～Z-11区にまたがる礫群と遺物のユニットの写真撮影を行った。

9月15日(雨のち曇) 雨のため現場での作業を中止し、宿舎において遺物の水洗と注記を行った。午後から測量班が雨の合間を縫って地形測量に向かった。夕方から、約60名の見学者を交えて出土遺物の説明会と懇親会が盛大に催された。

9月16日(雨) 一日中雨が降り続いたが、現場での遺物の取り上げ・収納・土層断面図の実測と宿舎の清掃・機材の清掃・梱包を分担して行った。雨を押して実習生が現場へ出発し、第VI層文化層の礫群の実測・遺物の出土位置の記録・写真撮影と土層断面図の実測を敢行、夕方5時過ぎにすべての作業を完了した。

9月17日(曇) 10日間の日程を終え、発掘参加者は迎えのバスに乗り込み、午前9時45分に市邨学園研修センターを出発、午後3時50分に大学に到着した。後期の授業開始日であったため、実習生は野帳をノート代りに第5時限の授業に出席した。小林・青木・谷口の3名は、開田村教育委員会、地主村上和幸氏に発掘終了の挨拶をした後、長野県教育委員会を經由して、翌18日に大学に帰還した。(若泉)

(2) 整理作業の経過

発掘調査を終えて翌日の9月18日より、考古学実習室において出土遺物・記録類の整理作業を開始した。整理に着手してから本書の編集・刊行に至るまでの経過は第1表に示した通りであり、およそ1ヵ年を費やした。

9月21日、整理作業計画について第1回目の打ち合わせを行った。出土遺物の水洗と注記から作業を始め、最初に遺物の種別作業と遺物台帳を作成した。そして、それが完了した段階の10月12日に、その後の作業進行計画を立てた。出土遺物や記録類が多く、報告書作成のための作業が多岐にわたるため、役割分担を決め、①石器の実測、②石器・剥片の母岩別分類と接

第1章 調査の目的と経過

第1表 整理作業の経過

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
器種分類・台帳作成														
石器接合														
分布図作成														
石器実測														
トレース														
原稿執筆														
版下作成														
編集作業														

合作業、③ 礫・碎片の接合と礫群の分析、④ 遺物の平面分布図・垂直分布図等の図面作成、⑤ 遺跡周辺の地形図・地質図・土層図の作成、⑥ 写真整理・遺物の写真撮影の各作業を6つの班が分担して行うことにした。

このうち最も困難を極めたのは、231点もの石器の実測であった。10月16日に実測を開始したが、すべての実測が完了したのは翌1991年の7月下旬であり、整理作業期間の大半が費やされた。石器・剥片の母岩別分類と接合作業は12月末で終了し、母岩別資料の実測は翌年1月から行った。礫・碎片の接合もほぼ12月で作業を終了させ、以後、礫群の分析のための分布図作成や集計作業を進めた。遺物の平面分布図・垂直分布図の作成は2月で終了し、レイアウトや遺物の集計作業などを行った。遺跡周辺の地形図などの作成や写真整理の作業は10月末に一旦終了し、担当者は石器実測の作業に加わった。

2月4日に編集会議を開き、報告書の構成と目次および執筆分担を決定した。この段階からは、石器の実測・トレースや版下作成等の作業と原稿執筆を並行して行うことになった。春季休暇中も連日作業を行い、4月から分布図など図面類の版下作業に入った。5月の連休以降には、石器の実測とトレースを同時に進行させ、版下のレイアウト作業にも着手した。また一連の作業を進める一方、原稿の読み合わせを行い、推敲を重ねた。

整理作業は夏期休暇中も延々と続き、7月下旬に至ってようやく石器の実測を終了した。以後石器実測図のトレースに重点をおいて作業を進め、大学一斉休暇となる8月中旬には、一時的に学外に作業場を移動し、版下作成を集中的に行なった。遺物の写真撮影が8月24日に終了、8月26日には挿図用のすべての版下が完成した。第3次調査期間中には、一チームが実習室で版下の写植指示等を続ける一方、4名が一年振りに再び訪れた市邨学園開田高原研修センターにおいて、原稿の添削や表組み等の最終的な取りまとめを行った。大学に戻って10月30日に本書の割り付け、編集作業を完了した。入稿は、12月16日であった。(中田)

第3節 第2次発掘調査と整理作業の経過

註

- (1) 第1次調査報告書による集計は、細石刃75点、細石刃核2点、細石刃核素材4点、削片4点、細石刃核調整剥片7点となっているが、うち細石刃核素材2点、削片1点、細石刃核調整剥片2点については同定に疑問が残るため、ここでは確実な資料のみを集計している。また、名称も細石刃核を細石刃石核、細石刃核素材を細石刃石核原形と改めた。
- (2) 第1次調査報告書では、第VI層上部から検出された石器群を「第VI層上部文化層」として捉えたが、これは第VI層上部で調査を中断したため暫定的に用いたもので、第2次調査の結果これを「第VI層文化層」と訂正した。詳細については第VIII章第1節を参照されたい。

第Ⅱ章 開田高原と柳又遺跡

第1節 柳又遺跡の位置と地理的環境

(1) 柳又遺跡の位置と地点

柳又遺跡A地点は、長野県木曾郡開田村大字西野6503-1番地に位置し、木曾川支流の西野川の右岸に形成された河成段丘上に立地している。開田村は長野県の南西部、標高1000mを越える高地に位置する。柳又遺跡の東側を流れる西野川は木曾川水系に属し、北から南へ流れながら開田高原を二分して、木曾福島町で木曾川に合流する（第1図・第2図）。

開田高原は、御岳山（標高3067m）の北東麓に位置し、北・東・西側を山地に囲まれた、平均標高約1100mの高原性盆地である。南側は西野川の開析谷によって三岳村へ通じている。西野川は開田高原をほぼ南北に貫流し、この地域の地形を東西に分けている。その西側は支流の冷川によってさらに南北に二分されており、北側を下の原、南側を恩田原という。そして恩田原の東北隅一帯を柳又原と呼んでいる。

開田高原は主に西野川と末川によって開析されている。西野川は開田村の北方に水源を発し、藤沢川・西又川・冷川などの支流を集めて北から南へ貫流している。末川も同様に開田村の北方から始まり、髭沢川・把之沢川などが順次合流して北東から西側へと流れている。この2つの河川は、柳又の集落の南側、三岳村との村境付近で合流し、さらに三岳村で玉滝川と合流したのち、木曾福島町で木曾川に合流する。

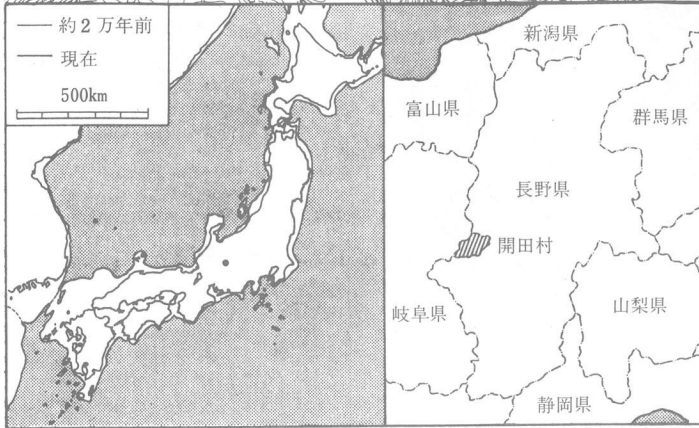
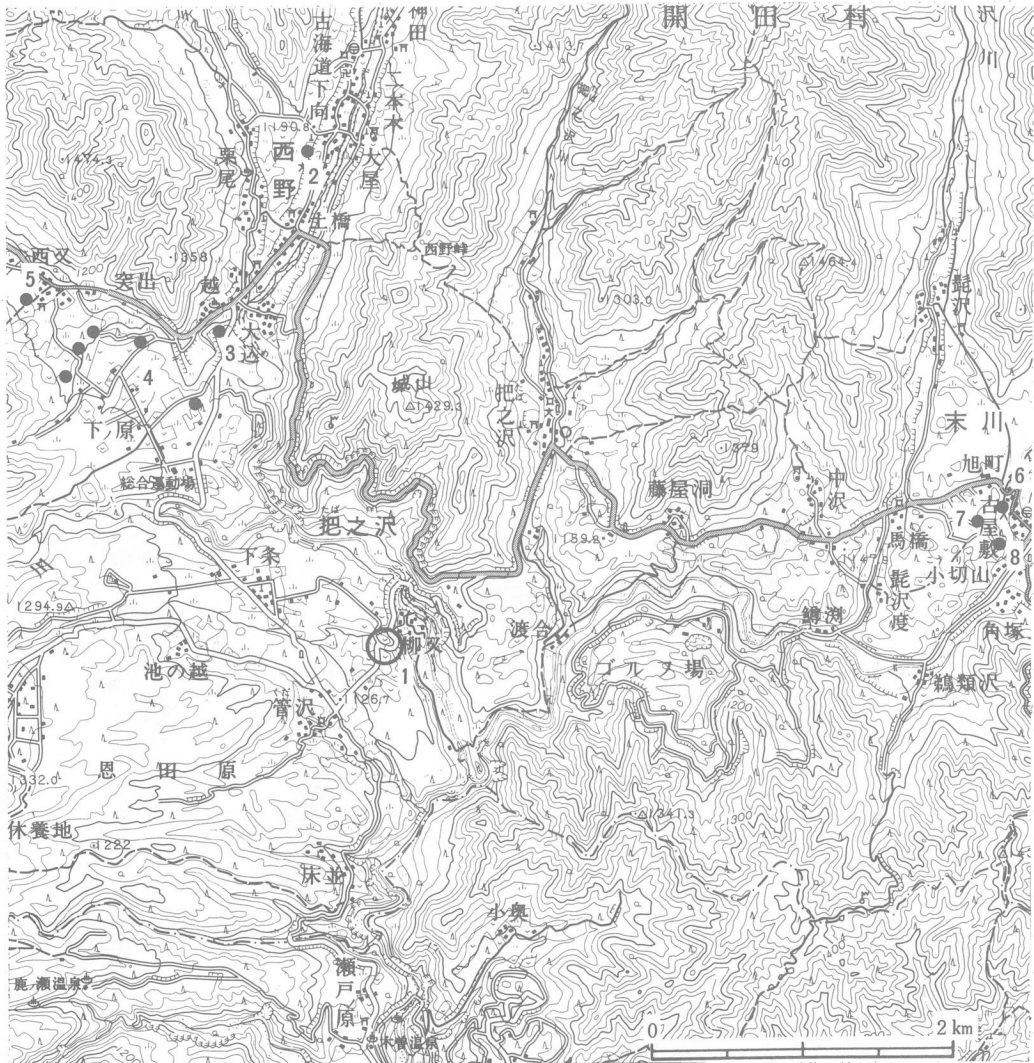
柳又遺跡一帯には、A地点のほか、A地点の南側約90mにC地点、さらにその150m程南にB地点、そこから小さな沢を隔てた台地上に柳又西遺跡が近接して存在する。いずれも西野川によって形成された河成段丘の縁辺部に並ぶように位置し、時期的にも相互に関連の深い一つの遺跡群をなしている。

(2) 柳又原の地質と形成年代

御岳山の火山活動

御岳火山の活動史に関する研究は、主に小林武彦らによってなされている（小林ほか 1967・1975）。それによると、御岳火山の活動は、飛騨山地―木曾山地の急激な上昇運動に伴って地蔵峠火山岩類堆積面が開析された後の洪積世中期、今から約80万年前に始まった。そして以後、約2万年前までを活動期として捉え、これを次のような4つの時期に区分した。第1期は現在の御岳山の山頂部のほぼ真下に火口を開いて活動を始めた。ここには断層があると推定されており、性質の異なる堆積物が接している。東側には最終的にジュラ紀に形成された美濃帯の中・古生層、西側には白亜紀の濃飛流紋岩類が基盤岩として存在する（松本盆地団研木曾谷サブグ

第1節 柳又遺跡の位置と地理的環境



1. 柳又遺跡群
2. 小馬背遺跡
3. 越遺跡
4. 下の原遺跡群
5. 西又遺跡
6. 古屋敷遺跡A地点
7. 古屋敷遺跡B地点
8. 古屋敷遺跡C地点

第1図 柳又遺跡の位置と周辺の遺跡

ループ 1985・植村ほか編 1988)。この時期には活発な火山活動が行われ、普通輝石カンラン石玄武岩・普通輝石角閃石紫蘇石流紋岩を大量に噴出し、大成層火山を形成した。その後10万年前後の非常に長い休止期をはさんで、第1期に形成された山体が強い浸蝕作用を受けた後、継母岳火山の活動により流紋岩が噴出した。これが第2期とされている。他の時期の噴出物がスコリア主体であったのに対して、この時期に限って主に軽石（パミス）が噴出した。ちなみにこの第2期は、下末吉ローム期（約9万年～6万5千年前）に比定されている（竹本ほか 1987）。第3期には、摩利支天火山が活動して複輝石安山岩質噴出物による成層火山を形成した。第2期と第3期は岩石学的にも著しい相違を示している。第3期は下末吉ローム期後半（約6万5千年～5万5千年前）に相当する（小林ほか 1977・竹本ほか 1987）。この第3期の後半に、木曽川泥流が木曽川流域に沿って愛知県小牧市付近まで流下し、堆積した。第4期は比較的短期間の浸蝕期を経た後、山頂部にほぼ南北方向に並ぶ火口群が活動して安山岩を噴出した。この時期の火口群は、現在の四ノ池・一ノ池・二ノ池・三ノ池・五ノ池の順に活動した。第三期とは噴火口の位置の違いによって区別されている。この第4期は武蔵野ローム期から立川ローム期（約5万5千年～2万年前）に当たる（小林ほか 1977・竹本ほか 1987）。

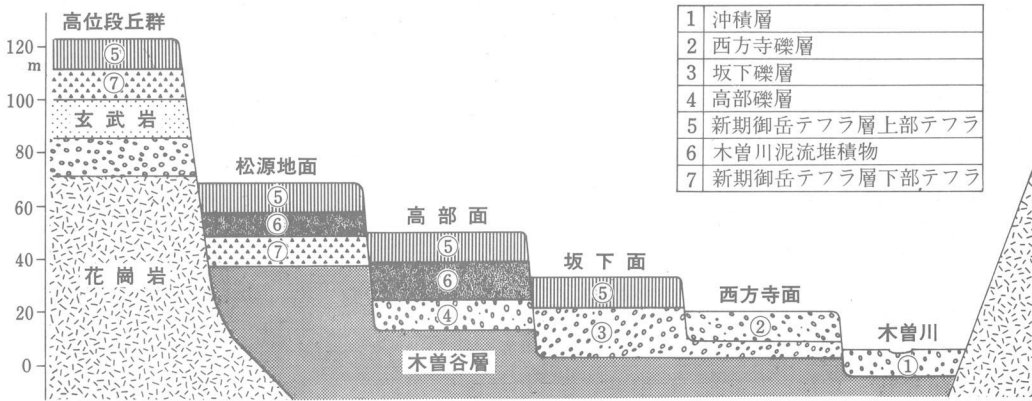
一方、従来のこの4期区分に対して、最近では古期・新期の2期区分が新たに提唱されている（小林ほか 1977・竹本ほか 1987）。これは第1期の後の10万年間ともいわれる長い休止期を境として、火山活動史を古期と新期に大別するもので、第1期を古期御岳火山、第2期～第4期を新期御岳火山としている。なお、御岳山は第4期の活動が約2万年前に停止した後は死火山になったとされていたが、1979年10月に有史以来初めて地獄谷付近で噴火した。

御岳テフラ層

御岳山を起源とする火山噴出物は、長野県地方に広範囲にわたって分布し、従来信州ロームと呼ばれてきた。そして下位より古期・中期・新期ロームと区分されてきた。しかし、上述のように御岳火山の活動期が古期・新期に大別されたことに伴って、古期ロームを古期御岳テフラ層、中期・新期ロームを新期御岳テフラ層と称することが一般化してきている（小林ほか 1977・竹本ほか 1987）。また、新期御岳テフラ層のうち、中期ロームを下部テフラ、新期ロームを2分して中部・上部テフラと捉え直すことが提唱されている（小林ほか 1977）。下部テフラは流紋岩質で、下位よりPm-I'・Pm-I・Pm-II'・Pm-II・Pm-III'・Pm-III軽石層および福島層を含んでいる。中部テフラは千本松・三岳・屋敷野の各スコリア層を含む。上部テフラは掛川・小木曾・柳又・開田・境峠の各テフラ層よりなる。中部・上部テフラは安山岩質である。これを前述の4期区分に照らし合わせると、下部テフラが第2期、中部テフラが第3期、上部テフラが第4期の噴出物に対応する。

河成段丘地形（第3図・第4図）

木曽川流域の河成段丘地形面の形成史に関する研究は、木曽谷第四紀研究グループなどによ



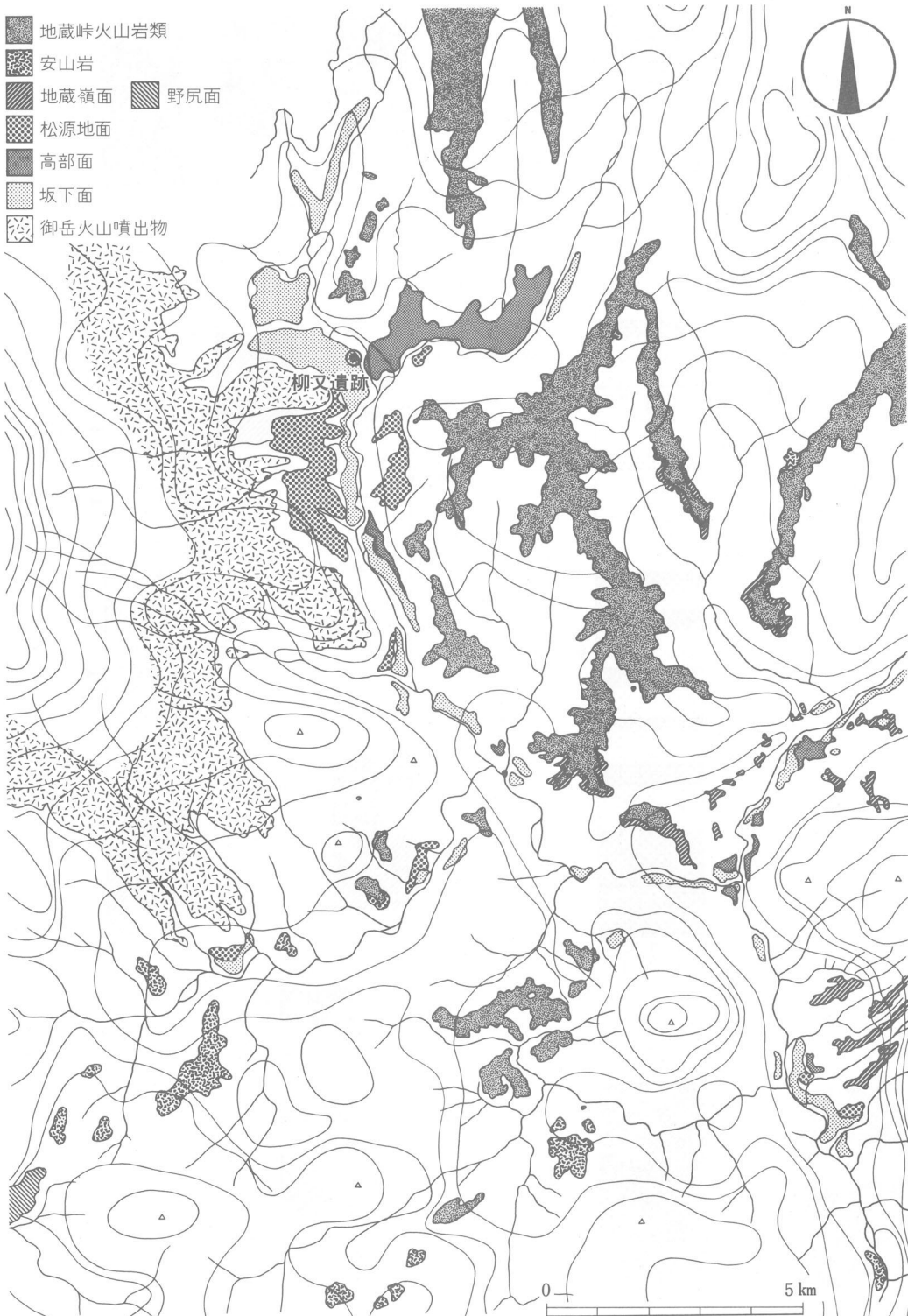
第3図 木曽川流域の河成段丘地形模式図

てなされている(酒井 1963a・b, 木曽谷第四紀研究グループ 1967, 島田 1969)。木曽谷の段丘面は、上位より地蔵嶺面・野尻面・松源地面・高部面・坂下面・西方寺面等が確認されている(第3図)。これらの各段丘面の形成時期は、御岳山の火山活動の4期区分に対比することができる(島田 1969)。地蔵嶺面は御岳山が活動する以前の先御岳期に相当し、野尻面は第1期、松源地面は第2期、高部面は第3期、坂下面・西方寺面は第4期にそれぞれ該当する。

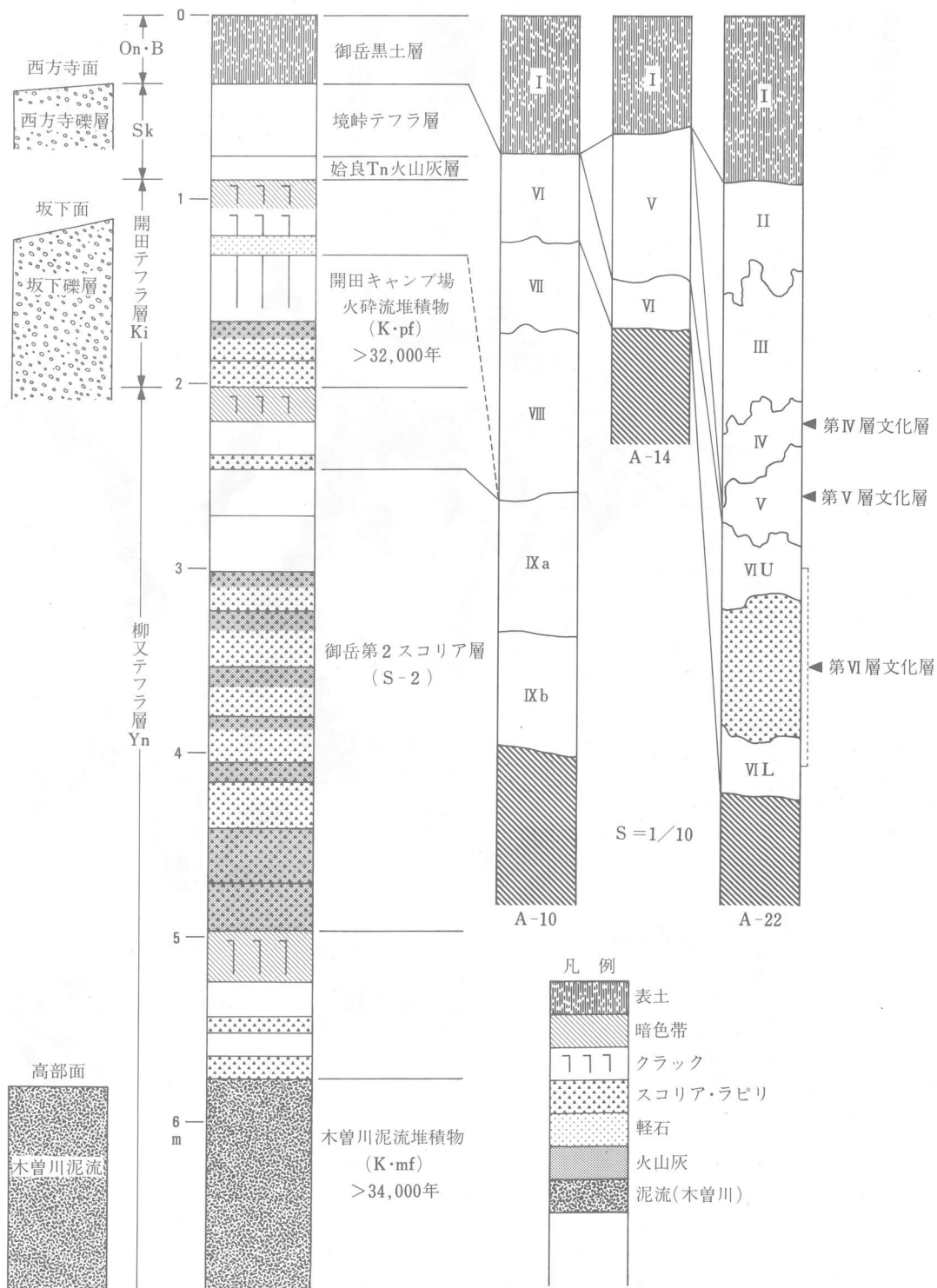
御岳山の周辺地域では、御岳火山の活動以前、約100万年程前に開田村・奈川村・高根村の境に位置する鎌ヶ峰付近で最初の火山活動があり、地蔵峠火山岩類が噴出した(開田村誌編纂委員会編 1980)。その後木曽川が現在の河流パターンをとるようになって、約9～8万年前に堆積作用が始まり、約6～5万年前には下刻に転じ、段丘化していたと考えられている(竹本ほか 1987)。地蔵嶺面は、地蔵峠火山岩類が河川によって開析されてできた、主に泥流上堆積物より構成される段丘面であり、段丘面上には古期御岳テフラ層が堆積している。野尻面は断片的かつ局所的に分布しており、わずかに残存するにすぎないが、Pm-0 軽石層を包含する古期御岳テフラ層上部を乗せる。松源地面は、砂層を主とする木曽谷層の堆積面である。新期御岳テフラ層の下部テフラ上部・木曽川泥流・中部および上部テフラが乗っている。開田村柳又より上流部では、これに該当する段丘面は残っていない。高部面は、木曽谷上部層(高木 1980)を浸蝕して、木曽川泥流に埋積された堆積面であり、上部テフラを乗せている。木曽川泥流堆積物は、¹⁴C年代測定法による分析の結果、27,800±2,000y.B.P.および26,600±1,600y.B.P.の年代が与えられている(酒井 1963a)。坂下面は、主に花崗岩からなる扇状地性の礫層堆積面であり、上部テフラが乗っている。西方寺面は沖積段丘群の一つであるが、段丘としてはあまり発達しておらず、現在の河床礫に似た礫層が乗っている。この段丘面にはテフラ層は堆積していない。

柳又遺跡の位置する柳又原一帯は、坂下段丘面に該当する(第4図)。坂下面を構成する坂下礫層には、層中に浸蝕されたところがあり、その堆積時期は寒冷期(海面低下期)に一致す

第1節 柳又遺跡の位置と地理的環境



第4図 御岳山周辺地域の河成段丘地形(木曾谷第四紀研究グループ1967に加筆)



第5図 新期御岳テフラ層上部テフラ柱状模式図

第2節 開田高原の遺跡

るとみられている。そして木曾川泥流よりも新しいことから2万年前以後に形成されたものと考えられてきた。しかし、木曾川泥流堆積物の噴出年代については、最近再検討がなされており、3万4千年～4万5千年前にまで古く遡るものと推定されている。これに加え、その上位に堆積する開田キャンプ場火砕流堆積物についても、 $>32,000\text{y.B.P.}$ という ^{14}C 年代測定値が得られている。このことから、高部面の段丘形成年代は約4万5千年前となり、さらに坂下面の形成も3万年～2万5千年前に遡る可能性が考えられている(竹本ほか 1987)。

当該段丘面には、上部テフラが堆積しており、10m以上に及ぶところもある(第5図)。鍵層となるテフラ層としては、下位から木曾川泥流(K・mf)⁽¹⁾・御岳第2スコリア層(S-2)⁽²⁾・開田キャンプ場火砕流(K・pf)⁽³⁾が含まれている。開田キャンプ場火砕流の上位には、スコリアを多く含んだロームおよび御岳黒土層(On・B)が乗る(小林ほか 1977・竹本ほか 1987)。

(伊藤)

第2節 開田高原の遺跡

(1) 開田高原における考古学的調査

開田高原における考古学的調査は、1911年8月に東京帝国大学の松村瞭が、開田村管沢付近で採集した石鏃を人類学雑誌に紹介したことに始まる(松村 1911)。1924年には、三岳村三尾小学校長の三輪重一らにより、西筑摩郡考古資料調査が行われ、冊子「西筑摩郡教育部会」には洞・古屋敷・管沢・柳又・上の原・藤屋洞等の出土資料についての記載があり、管沢遺跡から出土した有舌尖頭器も掲載されている。また1931年に藤森栄一が作成した「西筑摩郡石器時代地名表」(藤森 1933)によると、開田村内にはこの当時12の遺跡が確認されていた。

戦後になると、開田高原においても本格的な学術発掘調査が行われるようになった。その嚆矢となったのは、1949・50年に、信州ローム研究会の藤沢宗平らによって実施された古屋敷遺跡の発掘調査であった。古屋敷遺跡は、翌1951年にも御岳総合調査の一環として、木曾教育会によって発掘調査が行われた⁽⁴⁾。その結果、縄文時代早期の条痕文系土器が出土したほか、ローム層中から神子柴・長者久保文化の段階に属すると考えられる、大形の槍先形尖頭器が多数出土した(藤沢ほか 1956)。1957年には、当時木曾東高等学校に赴任していた樋口昇一によって、管沢遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代前期有尾式期の堅穴住居址が検出された。

以上のような成果にもまして、開田高原における考古学的調査の大きな転機となったのは、柳又遺跡の発見と発掘調査であった。柳又遺跡が発見されたのは1957年前後のことであり、管沢遺跡の調査と前後して行われた周辺遺跡の分布調査の際に、樋口が柳又の台地でナイフ形石器を含む旧石器を採集したことに端を発する。一方、これとは別に当時開田東小学校に赴任していた森嶋稔も、開田村内で精力的に遺跡の踏査を続けており、その成果を「木曾教育」に紹

介した(森嶋 1959)。これが木曾谷を訪れていた國學院大學大学院生小林達雄らの注意を引き、小林は樋口と連絡を取って森嶋を訪ね、柳又遺跡で採集された資料の中から有舌尖頭器を見出したのである。このような経緯から、樋口・森嶋・小林らが共同して柳又遺跡の発掘調査を行うことになった。この調査の詳細については後述する。

1967年には、長野県教育委員会による開田高原遺跡分布調査が神村透らを中心として実施され、縄文時代草創期の小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡などが確認された(樋口ほか 1968)。そして翌1968年には、木曾教育会の山下生六・神村透らによって小馬背遺跡の発掘調査が行われ、隆起線文系土器とともに有舌尖頭器や槍先形尖頭器が多数出土した。また1968年には、木曾教育会の山下生六・伊深智らによって西又Ⅱ遺跡が発掘調査され、小馬背遺跡と同様に隆起線文系土器に伴って有舌尖頭器および槍先形尖頭器などが出土した。なお、この両遺跡は1987・88年に國學院大學文学部が再調査を行っている(小林編 1988・1989)。

1985年には、国道361号線に接続する道路の建設に伴って大原遺跡の発掘が行われ、縄文時代早期の押形文土器やこれに伴う石器などが出土した(神村編 1986)。また1989・90年には、村道2-8号線付け替え工事に伴い、開田村教育委員会・柳又遺跡調査会によって柳又遺跡C地点の発掘調査が行われた。その結果、細石刃文化、槍先形尖頭器を主体とする文化、ナイフ形石器を主体とする文化、角錐状石器および切出形石器に特徴づけられる文化の存在が確認された。同遺跡では、このような4群以上の文化層が層位的に重複して把握されており、中部地方における旧石器文化の研究上、きわめて注目すべき成果が挙げられた。

開田高原では、これまでに47遺跡の存在が確認されている。その中には古屋敷・柳又・小馬背・西又遺跡をはじめ、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての重要な遺跡も多数含まれている。それらの遺跡の多くは、現在水田や畑地となっているが、一方では、最近の観光地化政策や道路整備等に伴って年々開発も進行してきており、開田高原でも埋蔵文化財の保護対策が緊急の課題となりつつある。(伊藤)

柳又遺跡の調査

当遺跡の発見は、1957年に樋口昇一らが管沢遺跡の発掘調査を行った際に、柳又原地区内で数点の石器を採集したことに端を発する。樋口は、それらの中に旧石器が含まれていることを予見し、採集地点での発掘調査を計画していた。一方、森嶋稔も、それとは別に柳又遺跡の存在を知り、当時勤務していた開田村東小学校所蔵の遺物調査や村内の遺跡の踏査を行い、その結果を1959年に「開田高原のアルケオロジカル散歩」(森嶋 1959)に報告した。この報文を契機として、1959年に樋口昇一、森嶋稔、小林達雄、尾崎英雄らが共同して柳又遺跡の最初の調査を行うことになったのである。とりわけ小林らの注意を引いたのは、採集遺物の中に含まれていた有舌尖頭器であった。北海道蘭越町立川遺跡で初めて有舌尖頭器が発見されてから僅か3年後のことであり、当時は数例も依然として少なかったため、この有舌尖頭器を伴う石器文

第2節 開田高原の遺跡

化の追求が柳又遺跡の発掘調査の中心課題とされたのである。

まず1959年7月26日～8月1日⁶⁾に樋口昇一らによってA地点の第1次発掘調査が実施された。出土した遺物の内容は、ナイフ形石器を中心とする第I群石器、旧石器時代終末期の細石刃を主体とする第II群石器に分けて捉えられた。また、同時にB地点の予備調査が並行して行われ、有舌尖頭器・槍先形尖頭器等が検出された。第2次発掘調査は、B地点を対象として翌1960年7月30日～8月3日にかけて、再び樋口らによって実施され、有舌尖頭器・槍先形尖頭器などが得られた。その後1961年7月28日～8月7日には、名古屋大学の澄田正一らによって、A・B地点の第3次発掘調査が行われた。その結果、ナイフ形石器・有舌尖頭器などの石器と隆起線文系土器が出土した。第4次発掘調査は、1962年7月30日～8月5日にかけて、樋口・森嶋らによって、再びA・B地点で実施された。そしてこの調査の結果、両地点における旧石器時代から縄文時代草創期にかけての石器群の変遷過程が層位的に把握され、A I（ナイフ形石器を中心とするもの）→B I（ナイフ形石器を中心とするもの）→A II（細石刃を中心とするもの）→B II・A III（有舌尖頭器を中心とするもの）の編年が提示されたのである。

有舌尖頭器は、1960年に行われた北海道蘭越町立川遺跡の調査を通じて既にその重要性が指摘されていたが、有舌尖頭器に土器が伴う事実はまだ知られていなかった。そうした状況下において柳又遺跡の調査は、1つには柳又ポイントという有舌尖頭器の独特の型式を明らかにしたこと、2つにはそれに隆起線文系土器が伴う事実に明らかにしたこと、さらに第3点としてそれらと細石刃文化の編年的関係を出土層位に基づいて明らかにしたこと、この3点において画期的な成果を挙げ、縄文文化の起源に関する研究に大きな弾みを与えたのである。（佐藤）

(2) 開田高原と周辺の遺跡

1. 概要

御岳山麓に広がる開田高原には、柳又遺跡や小馬背遺跡・西又遺跡をはじめ数多くの遺跡が残されている。開田村内では、現在までに47遺跡が確認されているが、その時期別の内訳をみると、旧石器時代から縄文時代前期までの各時期の遺跡が多い（神村編 1986）。

a. 旧石器時代

これまでに確認された旧石器時代の遺跡としては、柳又遺跡A地点・B地点・C地点・下の原遺跡A地点・B地点・古屋敷遺跡A地点・B地点・C地点・越遺跡がある。

このうち柳又遺跡A地点・B地点・C地点・下の原遺跡A地点・古屋敷遺跡C地点では、ナイフ形石器を主体とする石器群が出土しており、これらがこの地域では最古の段階に属するものと考えられる。柳又遺跡A地点・B地点から出土した石器群は、それぞれA I群（第6図19～23）・B I群（第7図15～27）と仮称されており、樋口昇一らによると、A I群がより古段階に位置付けられている（樋口・森嶋・小林 1965）。A I群には、両面調整の槍先形尖頭器が共伴したことが報告されており、ナイフ形石器文化の後半にその編年的位置が求められよう。

一方、柳又遺跡C地点からも、ナイフ形石器を主体とする複数の文化層と、角錐状石器・切出形石器を特徴的に伴う文化層が層位的に重複して検出されている。後者は、ナイフ形石器を伴う文化層の中でも最下位から検出された一群であり、現段階では開田高原における最古の石器群として位置付けられるものである。

ナイフ形石器を主体とする石器文化の後半段階には、石器組成に槍先形尖頭器が加わり、主要な狩猟具として定着することが知られている。柳又遺跡C地点では、ナイフ形石器を主体とする文化層の上位から、この段階の文化層が検出されており、両面調整・片面調整を含む多数の槍先形尖頭器が出土した。また、これに伴い、小形の拇指状搔器やナイフ形石器等も出土している。この石器群は、A・B地点のAⅠ群・BⅠ群石器よりも後出の段階に属するものであり、ナイフ形石器文化の最終段階に位置付けられる。

旧石器時代終末期の細石刃文化については、柳又遺跡A地点とC地点でそれぞれまとまった資料が得られている。C地点から出土した細石刃石器群は、野岳・休場型細石刃石核を主体とするものであり、西南日本的な細石刃文化の様相を呈している。これに対して、A地点の細石刃文化は、削片系の楔形細石刃石核に特徴づけられるものであり、湧別技法に連絡する北方系の細石刃剝離技術を有している（森嶋 1985・谷口 1991）。A地点と同様の北方系細石刃文化は、開田村の西北に隣接する岐阜県大野郡高根村の池の原遺跡B地点でも発見されており、楔形細石刃石核や打面形成削片、細石刃石核原形等が出土している（高根村史編集委員会 1984、麻生ほか 1991）。このように、開田高原の一帯には、系統の異なる二つの細石刃文化が存在する。このことは、日本の細石刃文化の地域性や編年を考察する上でも重要な新知見であり、今後の調査・研究の進展に期待が持たれる。

b. 縄文時代草創期

縄文時代草創期の遺跡としては、大原遺跡・古屋敷遺跡A地点・柳又遺跡A地点・B地点・小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡が挙げられる。

古屋敷遺跡A地点・大原遺跡からは、大形の槍先形尖頭器を中心とする石器群が出土しており、神子柴・長者久保文化の段階に属するものと考えられる。ちなみに今回の柳又遺跡A地点の調査では、細石刃を主体とする文化層の上位から、両面調整の槍先形尖頭器を伴う第Ⅳ層文化層が確認されているが、具体的な石器組成とその編年的な位置については今後の調査の課題である。

柳又遺跡A地点・B地点・小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡・大原遺跡では、有舌尖頭器を主体とした石器群が検出されており、柳又遺跡・小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡ではそれらに隆起線文系土器が共伴して発見されている。これらの各遺跡から出土した有舌尖頭器は、いずれもいわゆる柳又ポイントに含められるものであるが、遺跡によって有舌尖頭器の形態組成に変化がある。なかでも柳又遺跡A地点出土の有舌尖頭器は、柳又遺跡B地点・小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡出土の

第2節 開田高原の遺跡

それと比較しても最小の部類に属し、編年的には最も新期に位置付けられるものと考えられる(小林編 1990)。なお、小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡出土の土器については、細隆起線文土器に併行する編年の位置が考えられている(小林編 1988・89)。(水野)

2. 柳又遺跡B地点(第7図)

柳又遺跡は、開田村中央部をほぼ南北に貫流する西野川の右岸、柳又原台地の縁辺部に立地している。標高は1122mで、西野川の現河床面からの比高差は約70mを測る。遺跡の付近一帯は現在畑地となっている。

柳又遺跡は、正確には単一の遺跡ではなく、関連の深い数遺跡から成る遺跡群をなしている。現在までのところでは、柳又原台地の崖線に沿って、北側よりA地点・C地点・B地点・西遺跡の4地点が区別されている⁹⁾。前節で既に触れたように、柳又遺跡での計4回に及ぶ調査の結果、A地点・B地点から時期と内容の異なる5群の石器文化が発見された(森嶋 1983)。すなわち、A地点におけるAⅠ群・AⅡ群・AⅢ群とB地点におけるBⅠ群・BⅡ群である。

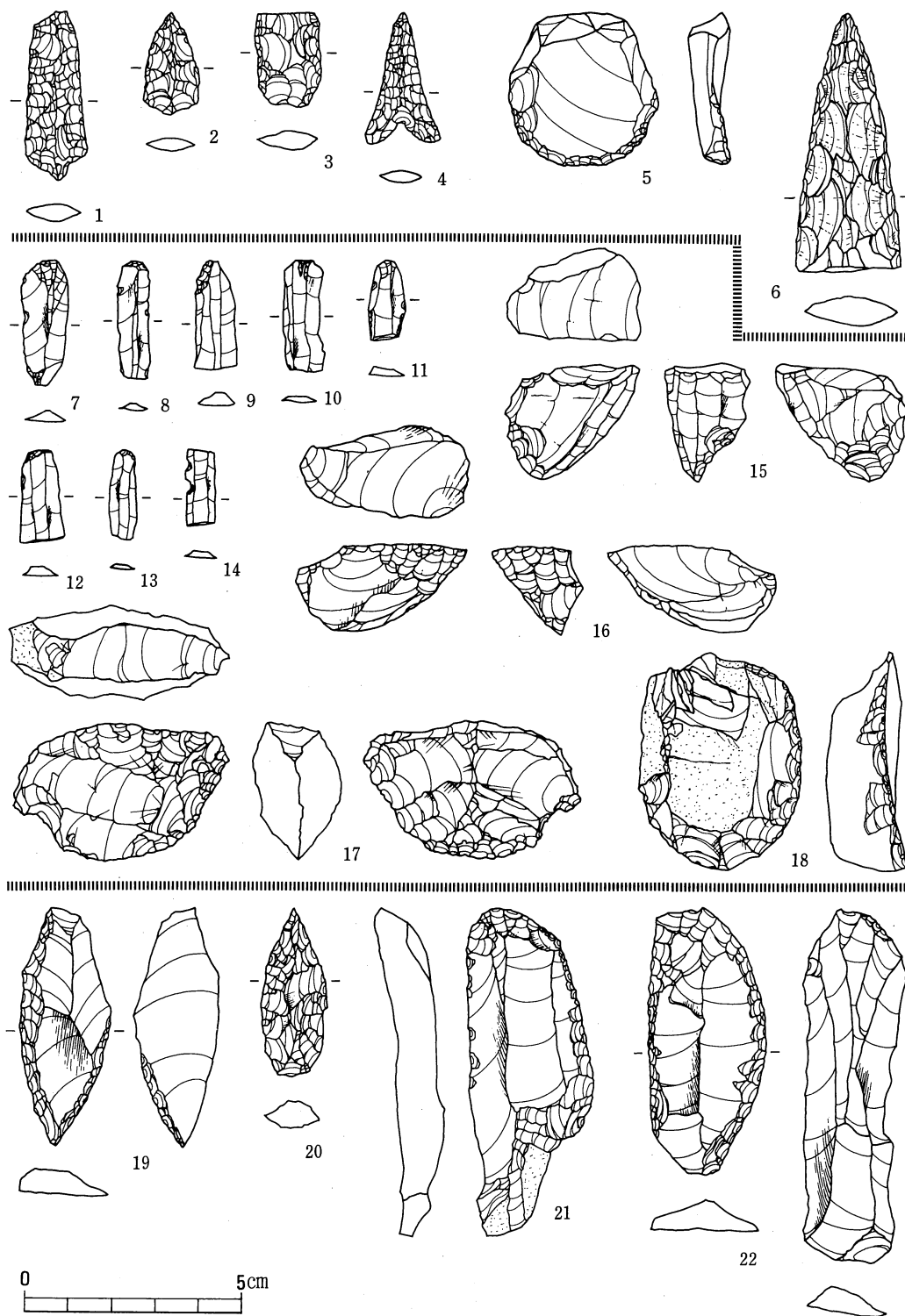
B地点のBⅠ群は、ローム層中10~15cmの層位から出土した旧石器文化であり、ナイフ形石器・彫器・搔器・石刃・石核・礫器等から構成される(第7図15~27)。第1次調査の際に約100個の拳大の自然礫が3m四方の広さに集中しているのが確認され、その周囲からこれらの石器が検出されたという(樋口・森嶋 1959)。ナイフ形石器には、二側縁調整・切出形が含まれる。また、スクレイパーも多く、先刃搔器・周刃搔器・抉入石器等が出土している。BⅡ群は漸移層から黒土層中にかけて出土した縄文時代草創期の石器文化であり、有舌尖頭器・槍先形尖頭器・両面調整石器・搔器・石鏃等が含まれる(第7図1~14)。また、これらに伴い、土器が出土している。この一群を特徴づけるのは、逆三角形の舌部を持つ有舌尖頭器であり、これがいわゆる柳又ポイントの標式資料となっている。また、有舌尖頭器以外の槍先形尖頭器も多数出土している。その他搔刃部を作り出した非常に小形の剥片が多数含まれていることも注意される。伴出した土器は3類に分けられている。1類は器壁に繊維の圧痕を有する無文のもの、2類は隆起線文土器に類似するもの、3類は、爪形文土器に類似するものである。ただし、1・2類は、胎土の特徴から同一個体と考えられている(樋口 1961、樋口・森嶋・小林 1965、森嶋 1983)。(水野)

3. 柳又遺跡C地点

柳又遺跡A地点とB地点のほぼ中間、村道の南側約90mの台地上に立地し、標高は1122.3m(最高点)である。村道2-8号線の付け替え工事に伴い、1989年4月29日から5月4日にかけて、開田村教育委員会の委託を受けた柳又遺跡調査会によって試掘調査が行われた。これにより旧石器時代の遺構・遺物が検出されたため、1367.56㎡の範囲が本調査の対象となり、翌1990年4月21日から6月17日にかけて発掘調査が行われた。

C地点では、層厚約70cmの遺物包含層の上部から順に、以下のような石器群が確認された。

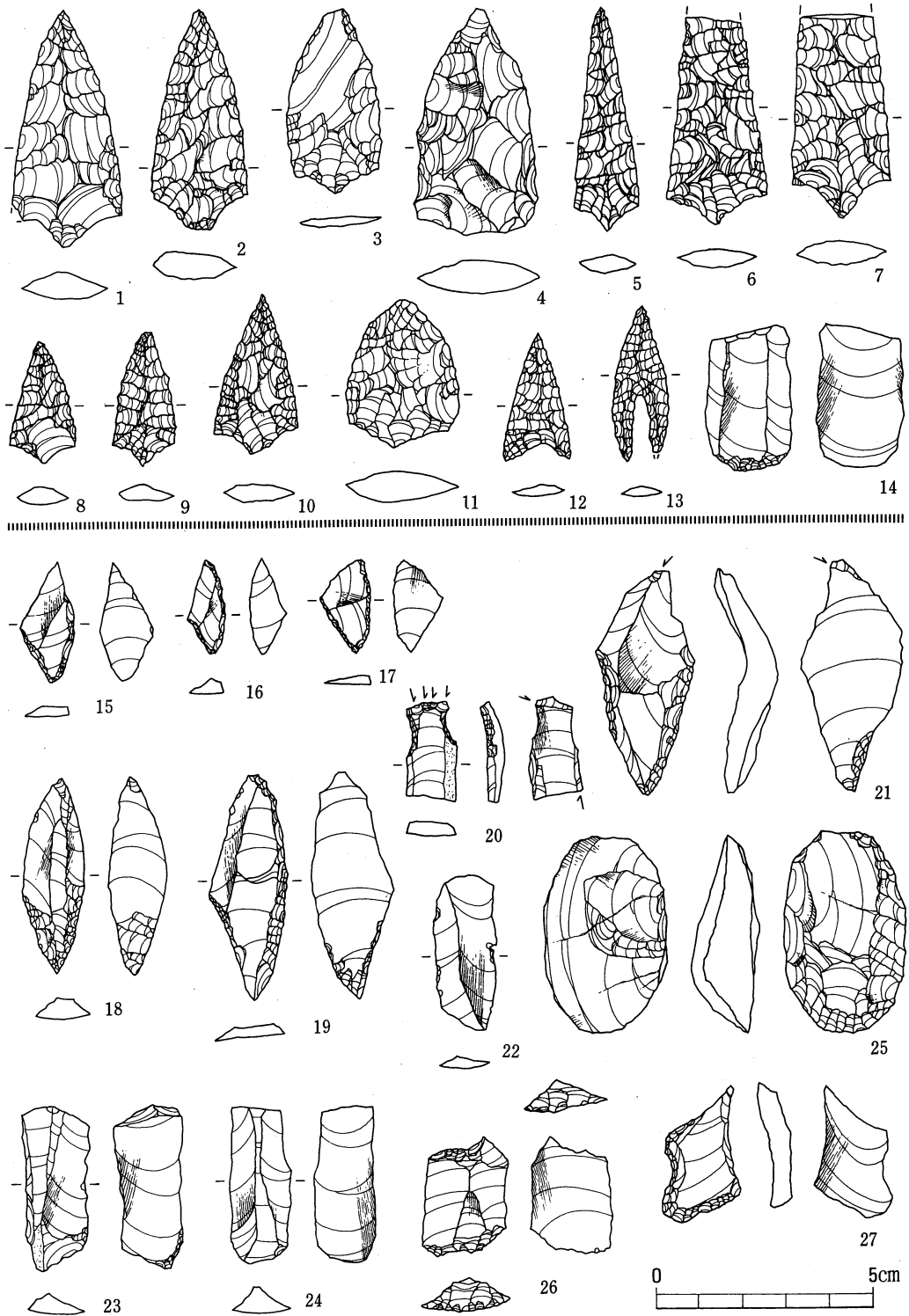
第二章 開田高原と柳又遺跡



第6図 柳又遺跡A地点の石器群(長野県史考古資料編より)

23

第2節 開田高原の遺跡



第7図 柳又遺跡B地点の石器群(長野県史考古資料編より)

2つの細石刃文化、すなわち削片系細石刃石核を伴う一群および野岳・休場型細石刃石核を伴う一群、槍先形尖頭器を主体とする一群、そしてナイフ形石器を主体とする複数の文化層、角錐状石器・切出形石器に特徴づけられる一群である。この調査によって、C地点は隣接するA・B両地点とも密接に関連する、旧石器時代の大規模な遺跡であることが判明した。なお、C地点の遺物整理は柳又遺跡調査会において続行中であり、今後その詳しい内容が明らかにされていく筈である。

(伊藤)

4. 小馬背遺跡

小馬背遺跡は、西野川上流の下向(西野2633番地)に所在し、西野川右岸の河成段丘上に立地している。現河床面との比高差は約10mである。

小馬背遺跡は、1967年に樋口昇一らの行った御岳高原観光開発地域内分布調査によって発見され、有舌尖頭器の散布が確認された(樋口ほか 1968)。翌1968年には、木曾教育会・同郷土館調査部の山下生六・伊深智・神村透らによって発掘調査が行われ、長楕円形の土抗1基とその周辺から多数の遺物が出土した。長さ約3mの土抗内外からは、有舌尖頭器・加工の粗雑な槍先形尖頭器を中心に、石鏃・片刃打製石斧等の石器と隆起線文系土器が出土している(神村 1970・1988)。1987・88年には、國學院大學が本遺跡の再調査を実施した。2年次の調査の結果、有舌尖頭器・槍先形尖頭器を含む約1800点の石器・剥片が出土したが、遺物包含層は耕作と土地改良工事によって著しい攪乱を受けており、遺物は原位置を留めていなかった(小林編 1988・1989)。

(成沢)

5. 西又遺跡

西又遺跡は、開田村北西部の西野馬里に所在し、西野川右岸に向かって緩やかに傾斜した河成段丘の最も山寄りの地点に立地している。遺跡は西又Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡と区別されているが、両遺跡間の距離は約29mであり、同一の遺跡である可能性も指摘されている(樋口ほか 1968)。西又Ⅰ遺跡は未調査であり、その実態はよく把握されていない。

西又遺跡も小馬背遺跡と同様に、1967年の御岳高原観光開発地域内分布調査によって発見された。そして1969年に、小馬背遺跡に次いで木曾教育会・同郷土館調査部の伊深智および神村透・樋口昇一らによって発掘調査が行われた。その結果、6m四方に台石を3個配置した石器製作址と考えられる遺構が検出され、その周囲から有舌尖頭器等に伴って約7個体分に相当する合計97点の隆起線文系土器が出土した。その他の出土遺物には、槍先形尖頭器・尖頭器状素材・片刃打製石斧・石鏃等がある(神村 1970、伊深 1971・1974、小林編 1989)。こうした石器組成の在り方は、小馬背遺跡に概ね共通するものである。また多量の剥片の中には、槍先形尖頭器の製作過程で生ずる調整剥片が特徴的に含まれており、当遺跡において槍先形尖頭器を集中的に製作していたことが推定される。小馬背遺跡と比較しても遺物の出土量が抜群に多く、柳又遺跡B地点などと共に、開田高原における草創期の拠点的な石器製作址であったも

のと推定される。なお1988年には、國學院大學の小馬背遺跡発掘調査に併せて、西又Ⅱ遺跡の試掘調査が行われた。その結果、耕作土の直下には全面にわたってローム層が露出しており、草創期の包含層は既に剝離され、現存していないことが確認された（小林編 1989）。（成沢）

6. 古屋敷遺跡

古屋敷遺跡は、開田村東部の末川古屋敷に所在し、末川右岸の河成段丘上に立地する。同一台地上にA地点・B地点・C地点の3地点が確認されている。

A地点は1947年、藤沢宗平らによって、縄文早期の遺物散布地として確認された（藤沢 1951）。その後1949・50・51年に発掘調査が行われ、縄文時代早期の条痕文系土器等が多数出土した。中でも1950年の調査では、ローム層中に掘り込まれた小竪穴の側壁から黒曜石製の槍先形尖頭器が検出され（藤沢 1951、1955a）、この調査結果を受けて、1955年には信州ローム研究会によって、旧石器文化の解明を目的とした発掘調査が実施された。出土遺物には、神子柴・長者久保文化の段階に属すると考えられる硬質砂岩製の木葉形槍先形尖頭器・黒曜石製の小型柳葉形尖頭器・半月形石器・削器などの20数点の石器がある。また槍先形尖頭器の出土した下面から自然礫が集中して発見されており、当時の生活面と推定されている（藤沢 1955b、藤沢・小林 1956、藤沢ほか 1956）。その後1961年に行われた発掘調査では、縄文時代早期の粕畑式やいわゆるオセンベ土器などが多数出土したが、縄文時代草創期に属する遺物は確認されなかった（藤沢 1961）。

B地点は、A地点南方約200mの同一台地上に位置しており、森嶋稔らにより発見された。約30m四方の範囲から、黒曜石・チャート・安山岩製の槍先形尖頭器・石刃・石核等が採集されている。C地点は、B地点西方の同一台地上に位置しており、搔器・削器・石刃・石核等が採集されている（樋口・森嶋・小林 1965）。（成沢）

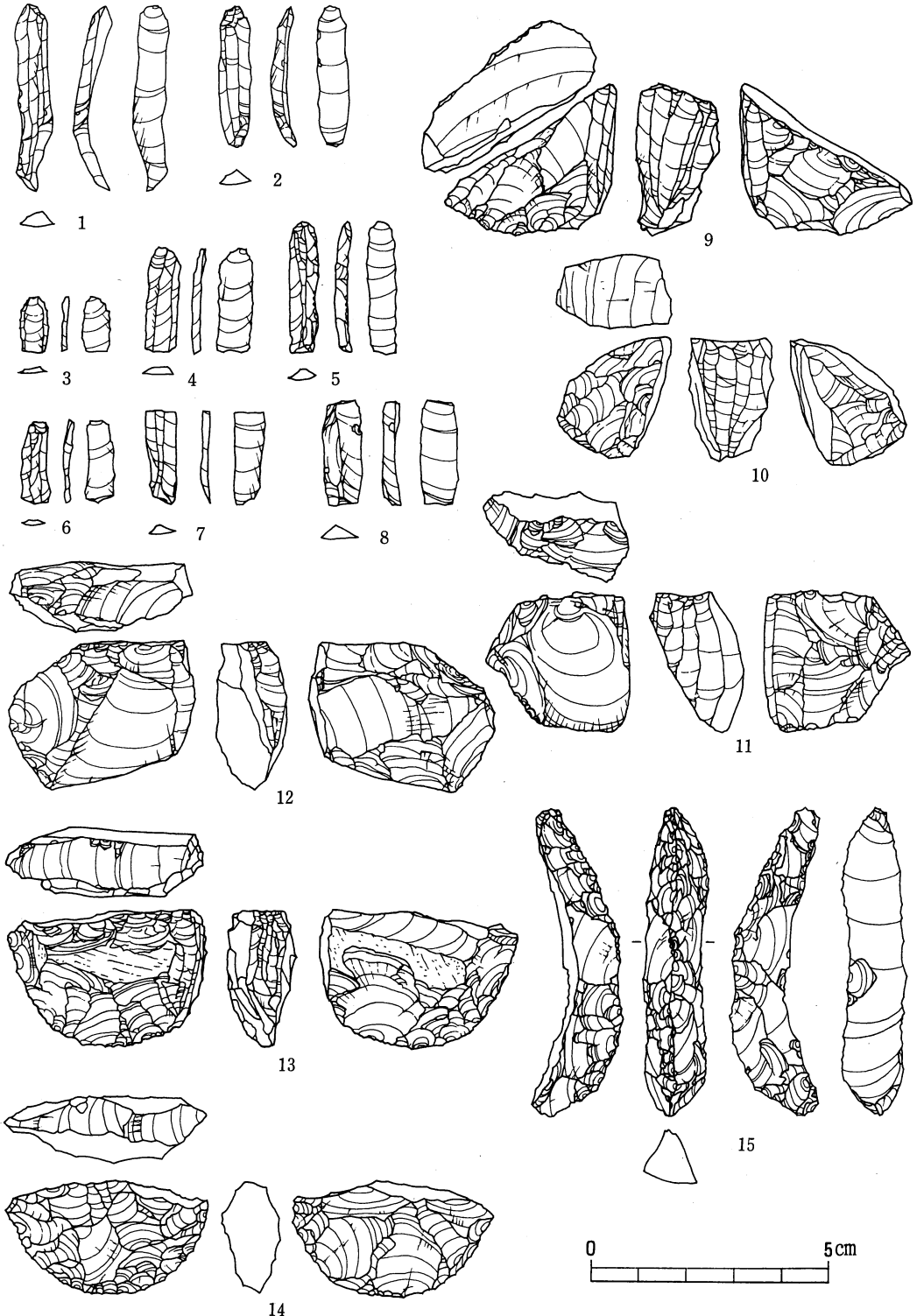
7. 下の原遺跡

西又遺跡と同じく下の原台地の西野下の原に所在する。下の原台地に沿ってA・B地点が確認されている⁷⁾。

A地点からは、ナイフ形石器・抉入石器・剥片が採集されているが、数量は少ない。ナイフ形石器は柳又BⅡ群に比定されるものと考えられている（樋口・森嶋・小林 1965）。B地点は、A地点の南方約200mに所在する。浸触のため地表に包含層が露出しており、槍先形尖頭器・半月形石器・荒屋型彫器・黒曜石製の彫器・搔器等が採集されている。黒曜石製の彫器は、両面調整の尖頭器を素材として、その先端部に近い側縁に彫刻刀面を作出したものである（樋口・森嶋 1959、樋口・森嶋・小林 1965）。（成沢）

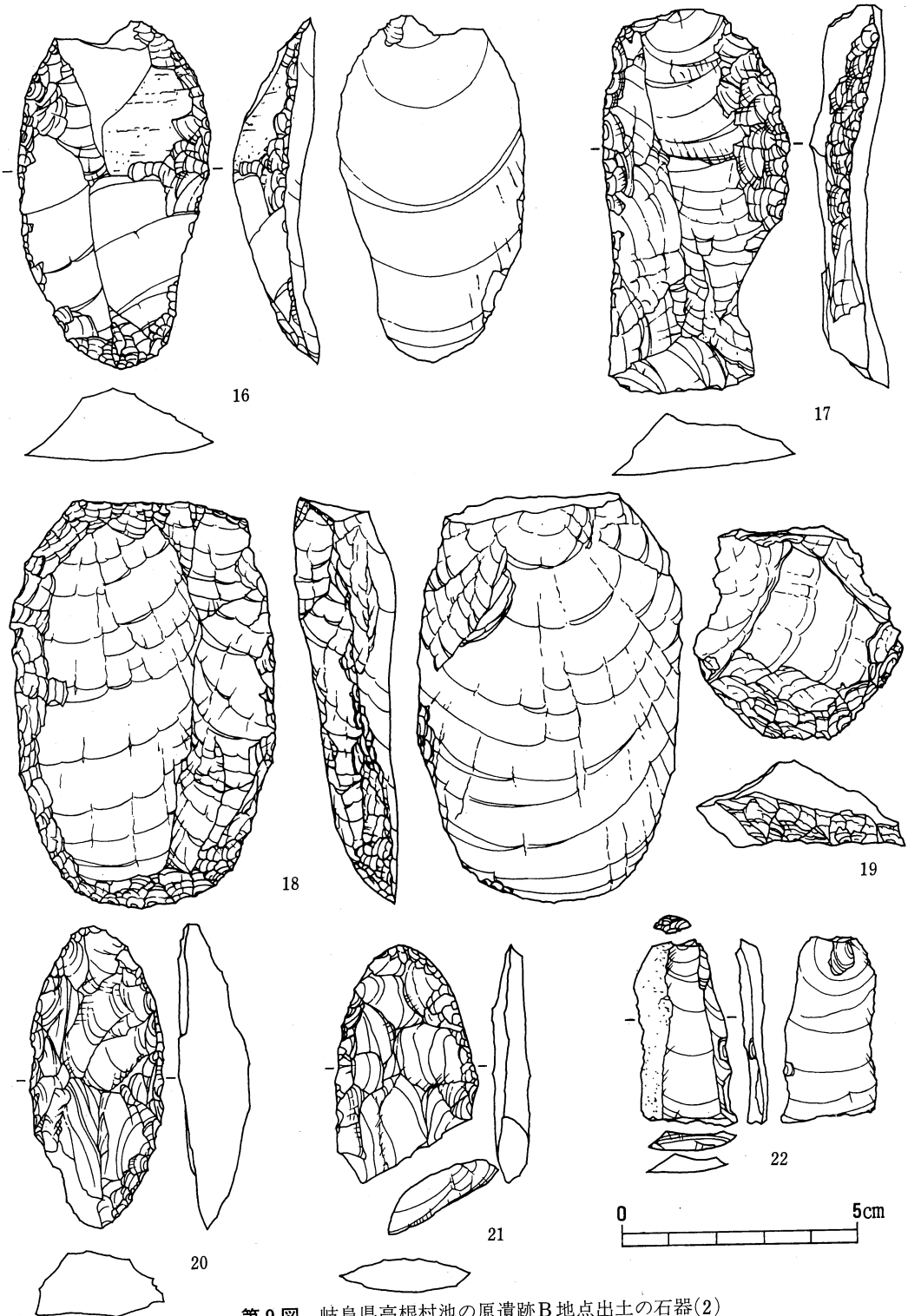
8. 大原遺跡

大原遺跡は、開田村の東部にあたる末川地区の末川大屋に所在し、末川左岸の河成段丘の縁辺部に立地している。標高は1176mである。



第8図 岐阜県高根村池の原遺跡B地点出土の石器(1)

第2節 開田高原の遺跡



第9図 岐阜県高根村池の原遺跡B地点出土の石器(2)

採集された遺物には、旧石器時代および縄文時代草創期の石器が含まれており、有舌尖頭器・槍先形尖頭器・先刃搔器・拇指状搔器・削器・石刃状剥片・石鏃等がある。黒曜石製の槍先形尖頭器には、先端部から槌状剝離が加えられたものがある（樋口・森嶋・小林 1959・1962、樋口・森嶋・小林 1965）。1985年には、国道361号線建設工事に伴い、開田村教育委員会による発掘調査が行われ、集石遺構に伴い縄文時代早期の高山寺式を中心とする押型文土器と石鏃・搔器・特殊磨石等の石器約220点が出土している（神村編 1986）。

9. 池の原遺跡B地点（第8図・第9図）

池の原遺跡は、岐阜県大野郡高根村の日和田高原に位置し、幕岩川とその支流によって開析された南北に細長く延びる舌状の台地上に立地している。標高は約1300mであり、旧石器時代の遺跡の中でも最も高地に立地するものの一つである。

当遺跡は『高根村史』にも紹介されているように、楔形細石刃石核・同素材・円錐形細石刃石核と槍先形尖頭器、削器、搔器、彫器等が採集されており、これらは柳又遺跡A地点との関連をみる上で注目されていた（高根村史編集委員会 1984）。

1989年に千葉大学考古学研究室の麻生優を代表とする研究班は、平成2年度文部省科学研究費による「日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究」の一環として、同遺跡の学術発掘調査を行った。その結果、細石刃（1～8）、楔形細石刃石核（9～14）、同打面形成削片をはじめ、搔器（16・18・19）、削器（17・23）、槍先形尖頭器（20・21）、石刃（22）等が出土した（麻生 1991）。その他、2点のナイフ形石器も得られている。池の原遺跡B地点の細石刃文化は、柳又遺跡A地点ときわめて類似した様相を示しており、北方系細石刃文化に属する削片系細石刃石核とその技法の地理的な南限を示す資料として、重要視されるものである。（佐藤）

註

- (1) 柳又テフラ層の最下層に位置する泥流堆積物。垂角礫と少量の円礫および多量の赤色スコリアより構成される。御岳火山を起源とし、西野川・王滝川・木曾川流域に分布する。木曾川の下流では、愛知県小牧市付近まで分布することが確認されている。末川泥流とも呼ばれる。高部面を構成する高部礫層の上位に乗る。その年代については、 $27,800 \pm 2,000 \text{ Y. B. P.}$ 、 $26,600 \pm 1,600 \text{ Y. B. P.}$ （酒井 1963a）の ^{14}C 年代が与えられていたが、近年では $>34,000 \text{ Y. B. P.}$ の年代測定値も得られており、噴出年代の見直しがなされている（竹本ほか 1987）。
- (2) 柳又テフラ層中部のYn-3層に含まれる。全体に赤褐色を呈し、中・下部に赤色スコリアが顕著に見られ、中粒の火山灰が含まれる。御岳山の東麓で発達しているが、松本盆地や伊那谷にも分布している。そのためテフラ層の地域間対比の指標となりうる（酒井 1963a）。
- (3) 開田テフラ層のKi-2層直下に認められる火砕流堆積物。軽石および粗粒の火山灰より構成される。堆

第2節 開田高原の遺跡

積物中の炭化木片より、 $>32,000$ Y. B. P. の ^{14}C 年代が与えられている（小林ほか 1977・竹本ほか 1987）。

- (4) 古屋敷遺跡はその後1961年にも藤沢宗平らによって発掘調査が行われ、縄文時代早期の条痕文系土器等が出土している（藤沢 1961）。
- (5) 第1次～第3次調査の調査期間は文献によって異なっている。第1次調査は長野県教育委員会（1971）によるもので、樋口・森嶋（1967）によれば7月31日～8月4日とある。第2次調査は樋口・森嶋（1967）によるもので、森嶋（1960）によれば8月7日～10日、樋口（1961）によれば8月7日～11日、長野県教育委員会（1971）によれば8月8日～13日とある。第3次調査は長野県教育委員会（1971）によるもので、樋口・森嶋（1967）によれば7月29日～8月3日とある。
- (6) 柳又遺跡4地点のうちA地点については3箇所に分ける可能性が指摘されている（樋口・森嶋 1959）。また柳又西遺跡については、1967年度の御岳高原観光開発地域内埋蔵文化財分布調査の際に確認された当初は柳又B西遺跡とされていたが（樋口ほか 1968）、文化庁が1983年に発行した全国遺跡地図「長野県」では柳又西遺跡とされ、また大原遺跡発掘調査報告書所収の開田村遺跡分布図では柳又西南遺跡となっている（神村編 1986）。
- (7) 樋口ほか（1968）および神村編（1986）によると、1～5地点まで分布することが確認されているが、樋口昇一らによるA・B地点との対応関係については明らかでない。

第三章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地と発掘調査区域

(1) 遺跡の地形 (第10図・第11図)

柳又遺跡は、西野川の右岸に形成された坂下面に該当する河成段丘上に立地している。遺跡の標高は1123.9m (最高点) であり、西野川の現河床面との比高差は約70mに達する。遺跡の位置する柳又原一帯は、巨視的には開田高原恩田原の南西部に位置し、御岳山麓からなだらかにのびた高原状の裾野の末端にあたる。その東側には、高原地形の縁辺を下刻しながら、西野川が北から南に向かって流れている。遺跡の付近には、西野川に向かって緩やかに傾斜する起伏の少ない地形が広がっている。

A地点は、西野川の崖線から西に約75mを隔てた台地上に占地している。遺跡の北側には、西から東に向かって蛇行しながら沢が流れ、支谷が形成されている。また、南側にも小規模な谷が入り込んでおり、遺跡のある台地は、この2本の谷によって区切られ、舌状台地状の地形をなしている (第10図)。現在、その台地の裾部をU字状に取り囲むように、村道2-8号線が建設されている。台地上は主に畑地として開墾されている。今回の発掘地点は、1959年から1961年にかけて発掘調査されたA I地点の東側に隣接する畑地である。

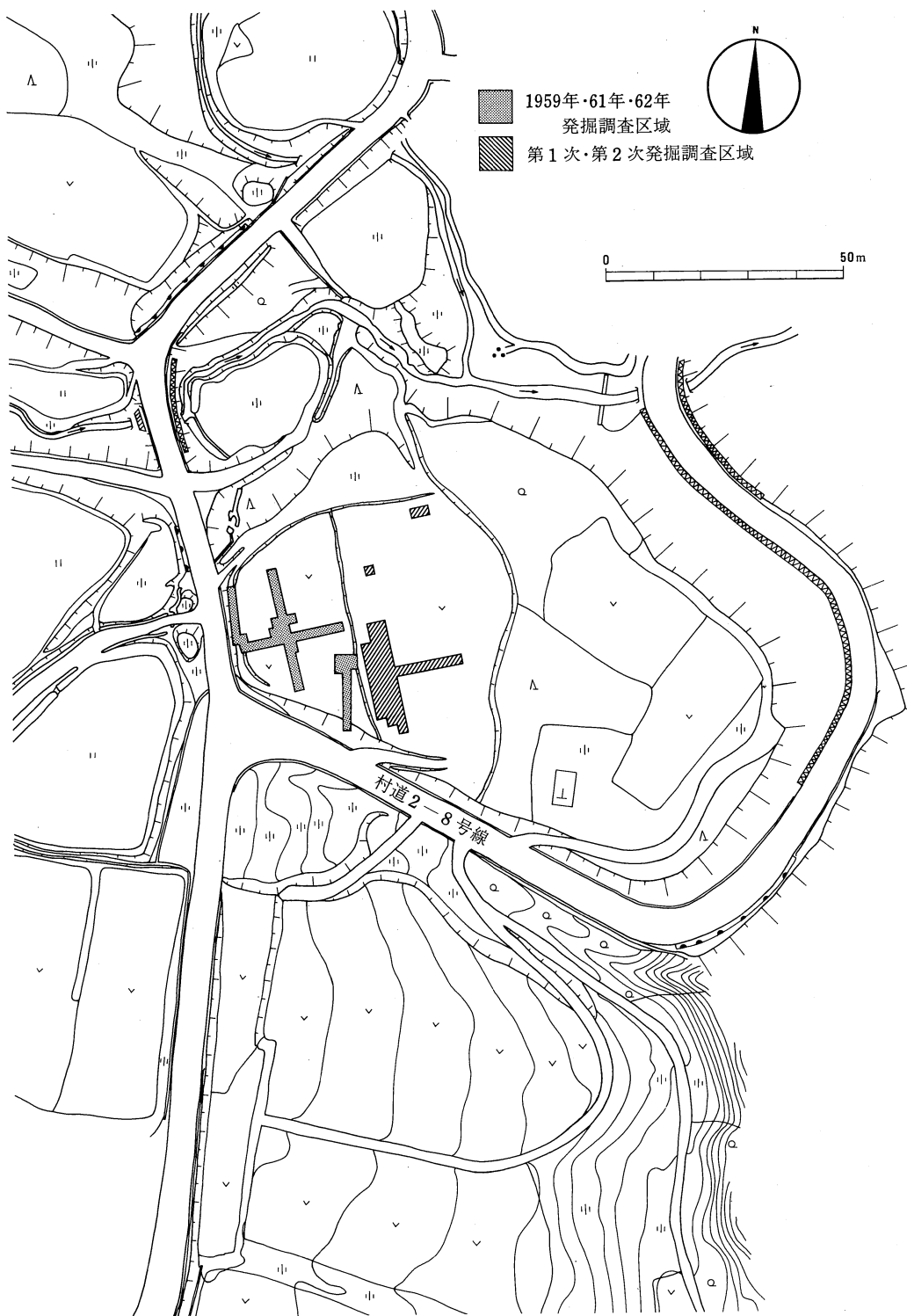
(2) 発掘調査区域の設定

第1次調査では、A-5~16、B-6~16、およびA-22区の合計96㎡を発掘した。この結果を受けて、第2次調査では、第V層・第VI層文化層における遺物分布状態の確認と石器の器種組成等の解明を目的とし、第1次調査からの継続調査区を含め、合計27グリッド、108㎡を発掘調査した (第12図)。1グリッドは2m×2m、4㎡である。このうち今回新たに設定したグリッドは、C-7~14、Z~T-11、T・U-28区の計17グリッド、68㎡である。これは第V層文化層の遺物の平面的な広がりの確認を目的としたものである。一方、昨年度からの継続調査区域は、A・B-10~14区の計10グリッド、40㎡であり、これは第VI層文化層におけるユニットの継続調査と、さらに下位の文化層の有無の確認を目的としたものである。このように今回の調査では、第V層文化層と第VI層文化層の調査を並行して別々に進めることになった。

発掘調査区域の設定に際しては、畑地の地境および等高線に対して平行になるように南北の軸を決め、これと直交するように東西の軸を定めた。南北の軸は磁北に対してN-12° 23' 25"-Eである。また、標高原点は、A地点の立地する台地の西端部にある標高1125.700mの水準点から、畑地の南東部はずれに原点移動して設定し、1122.700mとした。

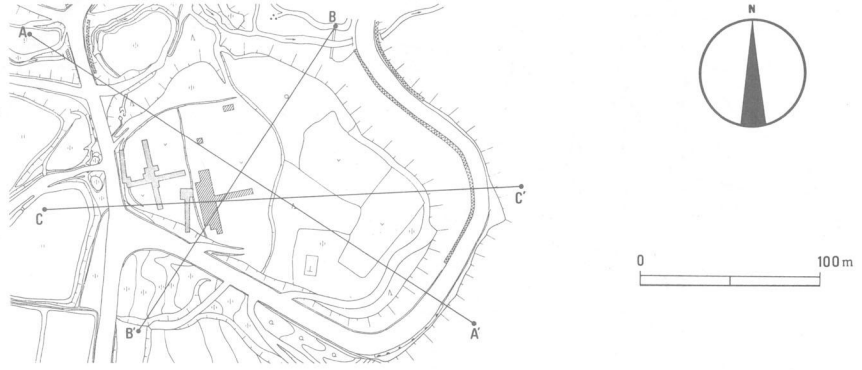
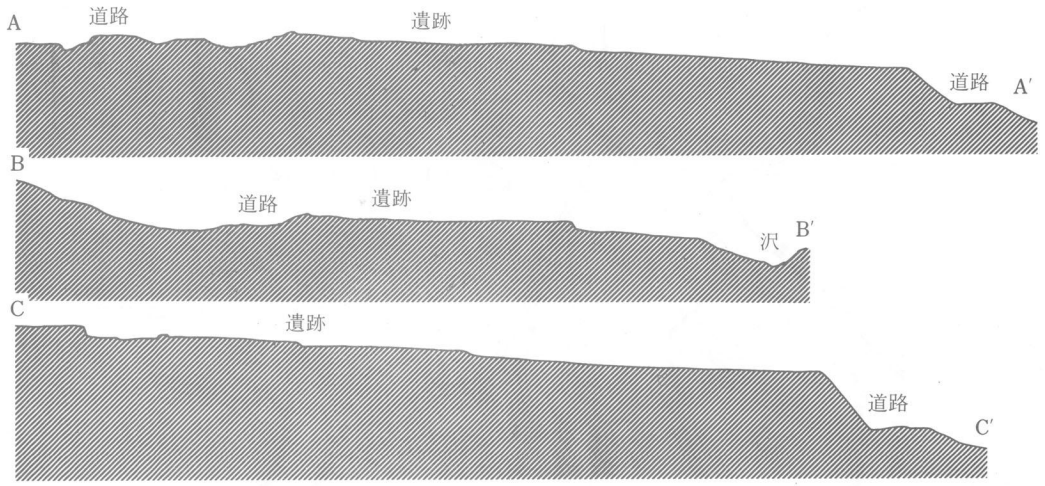
第1次・第2次調査の発掘調査区域と調査層位は、第12図に示す通りである。左図は発掘調

第1節 遺跡の立地と発掘調査区域

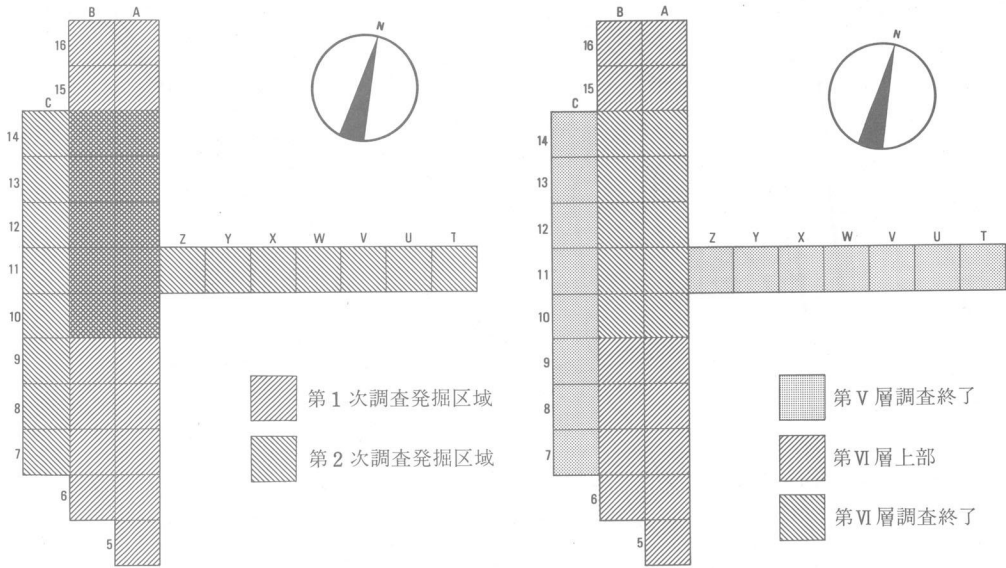


第10図 遺跡周辺の地形と発掘調査区域

第三章 遺跡の概要



第11図 地形断面図



第12図 発掘区域と調査層位

第2節 層序と文化層

査区域を示しており、右図には調査層位を図示した。第V層まで完掘した区域はC列およびT～Z-11区、第VI層上部まで発掘した区域はA-5～9・15・16およびB-6～9・15・16区、第VI層下部まで掘り下げた区域はA・B-10～14区である。

なお、今回の発掘調査区域は、1959年から62年にかけて発掘調査されたA I地点の東側に隣接する畑地にあたる。当時はA地点の東側にふくらむ等高線と平行、直交するように十字形の調査区と、畑地の地境付近に南北方向の調査区が設けられた。しかし、今回の調査区域とそれらとの正確な位置関係については確認が得られていない。また、A II・A III地点の詳細な位置についても不明である⁽¹⁾(樋口ほか 1959、森嶋 1983)。(伊藤)

第2節 層序と文化層

(1) 基本層序 (第13図～第15図)

第I層 耕作土。層厚は約20～30cm。

第II層 黒褐色土層。白色粒子を微量含む。層厚はA-22区で約15cm。

第III層 暗茶褐色土層。白色粒子を多量に含み、下部には青灰色スコリアを含む。層厚はA-22区で約20cm。

第IV層 暗褐色土層。第III層と第V層の漸移層である。白色粒子と赤色・青灰色スコリア(径2～3mm)を多量に含む。層厚はA-22区で約10cm。

第V層 明黄褐色のソフトローム層。第IV層より小粒の赤色・青色・白色スコリアを含む。色調は下半部がより明るい。層厚はA-22区で約10cm。

第VI層 暗黄褐色のハードローム層。スコリア(径10～15mm)を多量に含み、第V層に比べて赤色スコリアが径10～15mmと大きくなる。部分的にクラック帯が狭まれる。層厚はA-22区で約60cm、A-10区で約20cmである。A-22区では、この層の中位に固くしまった青灰色スコリアの密集帯が狭まれており、上下に分層することができる。この場合には、上部を第VIU層、下部を第VIL層とする。ただし、台地上部の平坦な部分にあたるA・B-10～14区では、このスコリア密集帯は見られず、分層することはできない。

第VII層 明黄白色のハードローム層。青灰色スコリア(径1～5mm)を少量含む。第VI層よりも色調が明るく、粘性があって軟質である。層厚はA-10区で約10cm。

第VIII層 スコリアを多量に含むローム層。第VII層と第IX層の漸移層である。赤色・青色・青灰色スコリア(径1～8mm)を多く含み、固くしめる。層厚はA-10区で約30cm。

第IX層 層厚約120～150cmのスコリア堆積層⁽²⁾。性状と層厚から判断して御岳第2スコリア層[S-2](木曾谷第四紀研究グループ 1967)と考えられるが、正確な同定による確認

第Ⅲ章 遺跡の概要

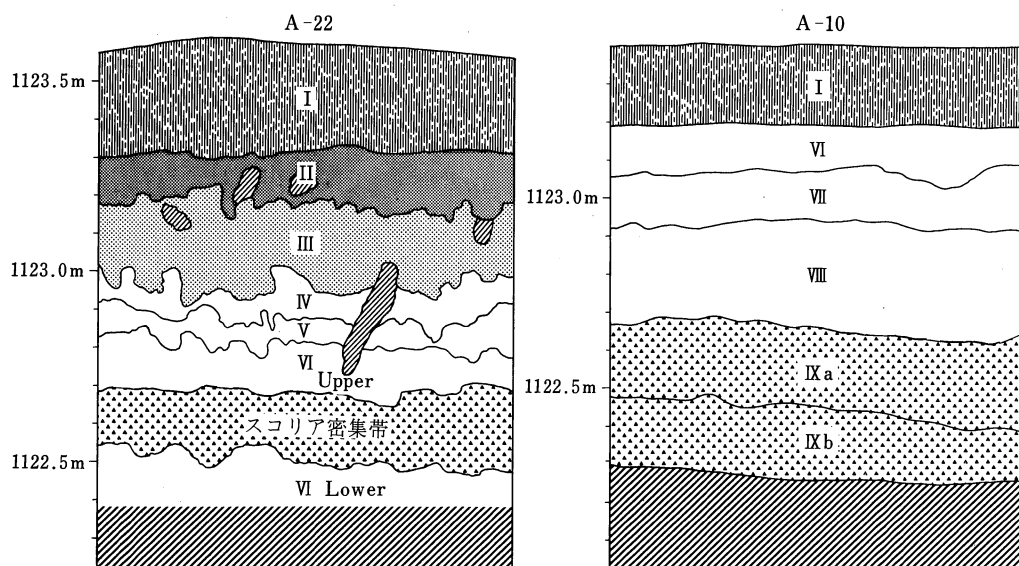
は得ていない。柳又付近の新期御岳テフラ層の基本的な柱状模式図（竹本ほか 1987）によると、御岳第2スコリア層よりも上位の柳又テフラ層の上部に開田キャンプ場火砕流（K・pf）堆積層があり、第Ⅸ層がこれに相当する可能性もある（第5図）。非常に固く、A-10区では約40cmを掘り下げたにすぎないが、最上部には次の2枚が分層された。

第Ⅸa層 細粒の青灰色スコリア（径1～10mm）を主体とし、赤色スコリア（径1～8mm）と微量の白色スコリア（径1～4mm）を含む。層厚は約20cm。

第Ⅸb層 赤色スコリア（径1～15mm）を主体とし、青灰色・白色スコリア（径3～15mm）を含む。層厚は約20cm。

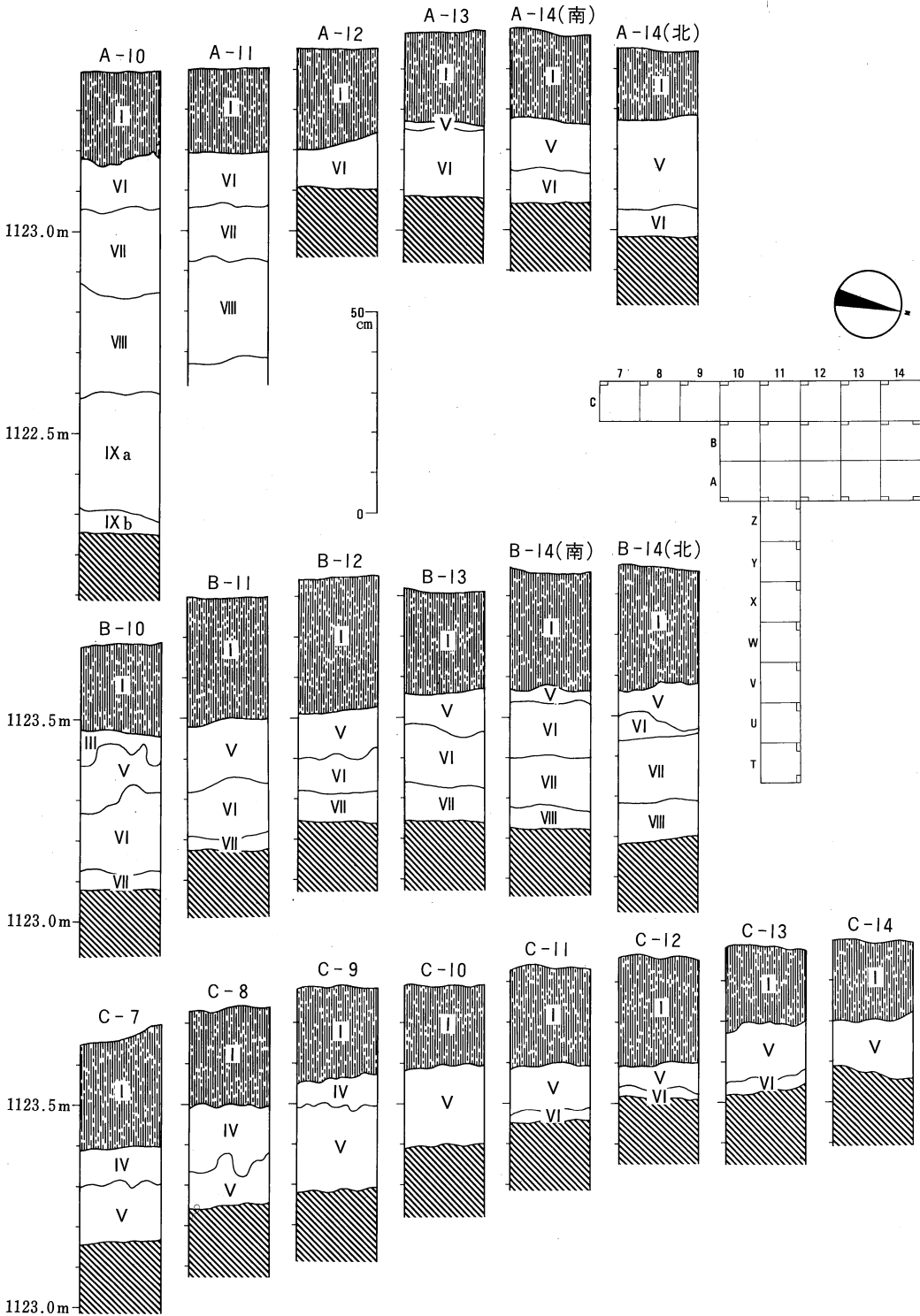
遺跡の基本層序はA-22区およびA-10区において確認した（第13図）。台地の上部にあたるA・B-11～14、C-10～14区では、耕作によって第Ⅴ層上部よりも上位の土層が削剥されているが、A-22区周辺では旧地形が埋没谷状に落ち込んでいるため、土層が攪乱を受けずに厚く整然と堆積している。第1次調査では、当区において第Ⅵ層下部までの層序を確認した。第2次調査では、さらに第Ⅵ層以下の層序を確認するために、A-10区において深掘りを行った。そして新たに御岳第2スコリア層と考えられる第Ⅸ層までを確認した。

第2次調査では108㎡の範囲を発掘調査対象としたが、第Ⅰ層から第Ⅵ層までの層序が遺存していた調査区は、T・U-28区とT-11区だけであった。T・U-28区は畑地の北東端に位置し、旧地形が北側および東側に傾斜している。T-11区は調査区の東端にあたり、西野川の方角に向かって旧地形が大きく傾斜していく部分にあたる。その他の区域では、第Ⅳ層ないし

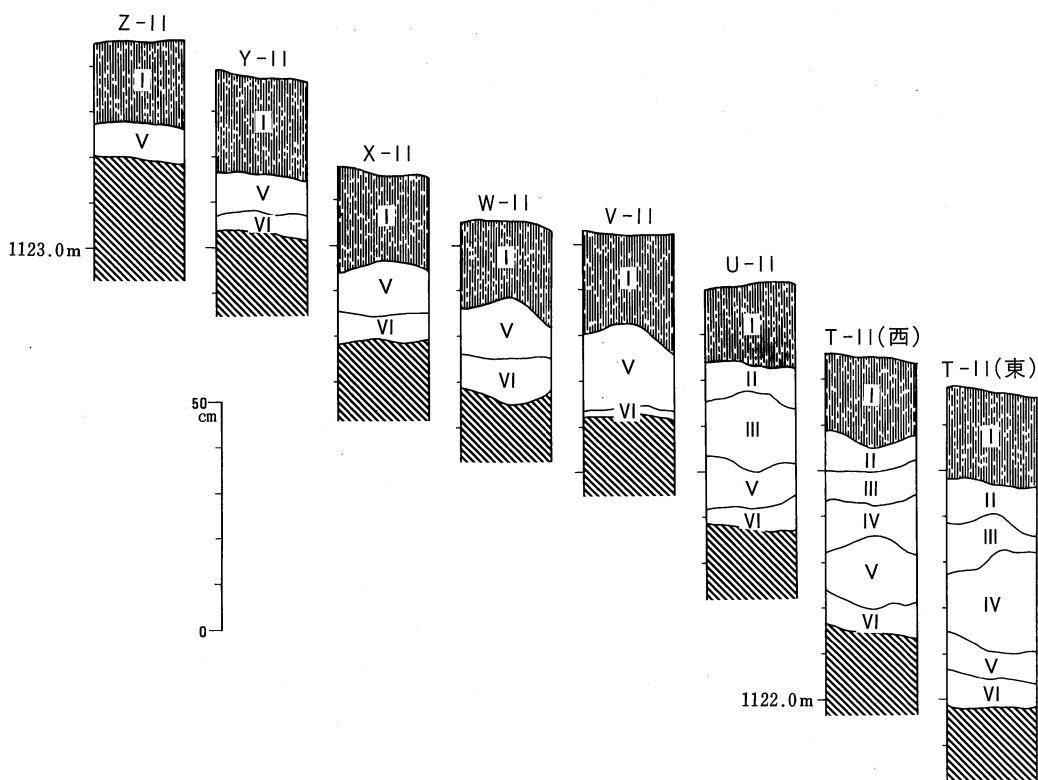


第13図 遺跡の基本層序

第2節 層序と文化層



第14図 発掘調査区域の層序(1)



第15図 発掘調査区域の層序(2)

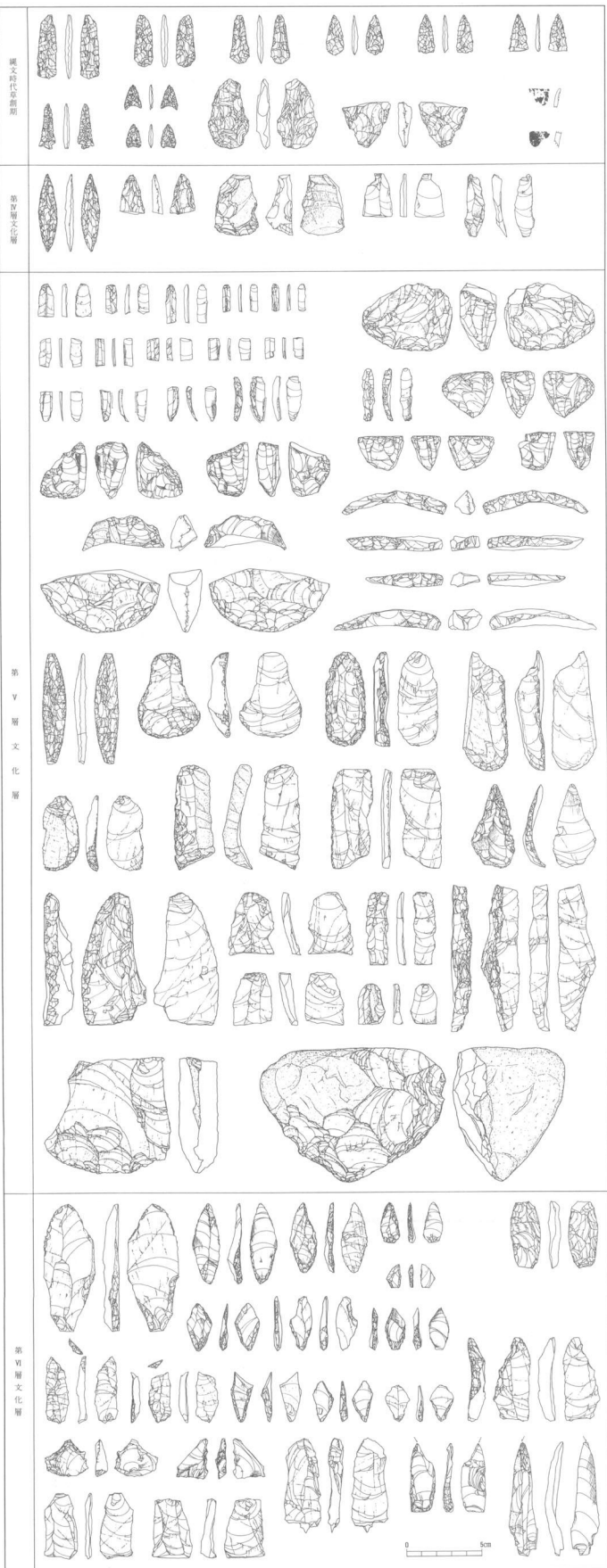
第V層までが削剥されている状況であった(第14図・第15図)。

A地点の位置する台地一帯は西野川によって開析され、東側に向かって緩やかに傾斜している。また北側は沢、南側は小支谷によって落ち込んでいる(第11図)。これを土層断面柱状図で見ると、A列はほとんど高低差がないものの、グリッドによってB列では約20cm、C列でも25cm程度の高低差がある。また、東西方向のZ～T-11区は西から東に傾斜し、最高70cm程度の高低差が認められる。

(2) 文化層(第16図)

第1次・第2次調査を通じて、旧石器時代から縄文時代草創期にわたる以下のような4面の文化層の存在が確認された(第16図)。① 有舌尖頭器を伴う縄文時代草創期の文化、② 第IV層文化層、③ 第V層文化層、④ 第VI層文化層である。

有舌尖頭器を伴う縄文時代草創期の文化は、遺跡のほとんどの部分で包含層が攪乱を受けているために、文化層の正確な層位は確認されていない。1959～62年に行われたA地点の発掘調査では、ローム漸移層から黒土層中にかけて、有舌尖頭器を主体とする石器群が出土したことが報告されており、本来の文化層は恐らく第IV層～第III層下部にあったものと推定される。該期の遺物は、第1次・第2次調査を通じて、有舌尖頭器10点、石鏃8点、槍先形尖頭器1点、



第16図 文化層と編年

第2節 層序と文化層

両面調整石器2点、土器片2点などが得られているが、その大部分は表面採集もしくは第I層中から出土したものであり、石器組成の詳しい内容は不明である。また、出土した2点の土器片も、無文の小破片であるため、どのような様式に属するものか、今のところ判然としない。

第IV層文化層は、槍先形尖頭器・搔器・石刃等を伴う石器文化であり、旧石器時代最終末期または縄文時代草創期の初頭に位置付けられる。遺物包含層である第IV層はC-7~9、T-11区の周辺に部分的に残されているにすぎず、今のところ全体像は明らかではない。土器の相伴の有無も未確認である。

第V層文化層は、細石刃を主体とする文化層であり、第1次・第2次調査を通じて合計2206点の遺物が出土した。このうち細石刃とその関係資料には、細石刃165点、細石刃石核6点、同原形3点、同打面形成削片6点、稜付削片3点、細石刃石核打面再生剥片2点、細石刃剝離作業面再生剥片2点がある。また、その他の石器器種には、搔器・削器・細部調整削片・石刃・打製石斧・礫器等がある。また、遺構として礫群および配石が各1基検出されている。当該文化層の細石刃文化に関して特筆される点は、北方系細石刃文化に属する削片系の楔形細石刃石核とその関係資料が比較的まとまって得られていることであり、それらは中部地方における細石刃文化の研究のみならず、日本の細石刃文化の地域性や編年・系統を考察する上でも、きわめて重要な資料となるものである。

第VI層文化層は、今のところA・B-11・12区を中心とするユニット1箇所を明らかにしたにすぎないが、第VI層中~下部の層準に生活面を持つ石器文化であり、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・鋸歯状石器・採錐器等の石器組成が確認された。主体となるナイフ形石器には、二側縁調整・基部調整・部分調整の各形態が含まれている。また、このユニットに伴う遺構として、礫群1基が検出されている。

なお、第VII層以下は未調査であり、今後さらに古い文化層の有無を調査していく必要がある。

(伊藤)

註

- (1) 柳又遺跡の調査を最初に行った樋口昇一らによると、A地点は遺物の分布状態からさらに3地点に区分できるとされ、A I地点の西側を通る道路の向かい側をA II地点、A I地点の中心部から北東へ約45mの休耕地をA III地点としている(樋口ほか 1959)。ただし、発掘調査が行われたのはA I地点のみである。
- (2) この層厚は、遺跡付近の露頭において略測したものである。

第IV章 縄文時代草創期の遺物

第1節 土器

第2次調査では、土器片が2点出土した(第17図1・2)。1は、無文の口縁部破片で、表面が一部剥落している。胎土には微小な白色粒や雲母、長石等が含まれており、堅緻である。器厚は薄く、3mm程度である。T-11区の第Ⅲ層より出土した。

2は、無文の胴部破片である。胎土には微小な白色粒子や雲母、長石等が含まれており、堅緻である。器厚は薄く、3mm程度である。C-9区の第Ⅴ層上部より出土した。C-9区は、第Ⅴ層文化層のユニット1の分布範囲に含まれており、細石刃および関連遺物の集中地点となっている。こうした出土状況から、この土器片が細石刃等の第Ⅴ層文化層に共伴する可能性も一応考えられるが、土器片は集中地点から少し外れた空白部から出土しており、現段階では見解を保留せざるを得ない。(杉山)

第2節 石器

縄文時代草創期の石器として、石鏃5点・有舌尖頭器1点・槍先形尖頭器1点・両面調整石器2点・細部調整剥片1点が出土した。いずれも表面採集もしくは第Ⅰ層から出土したものである。

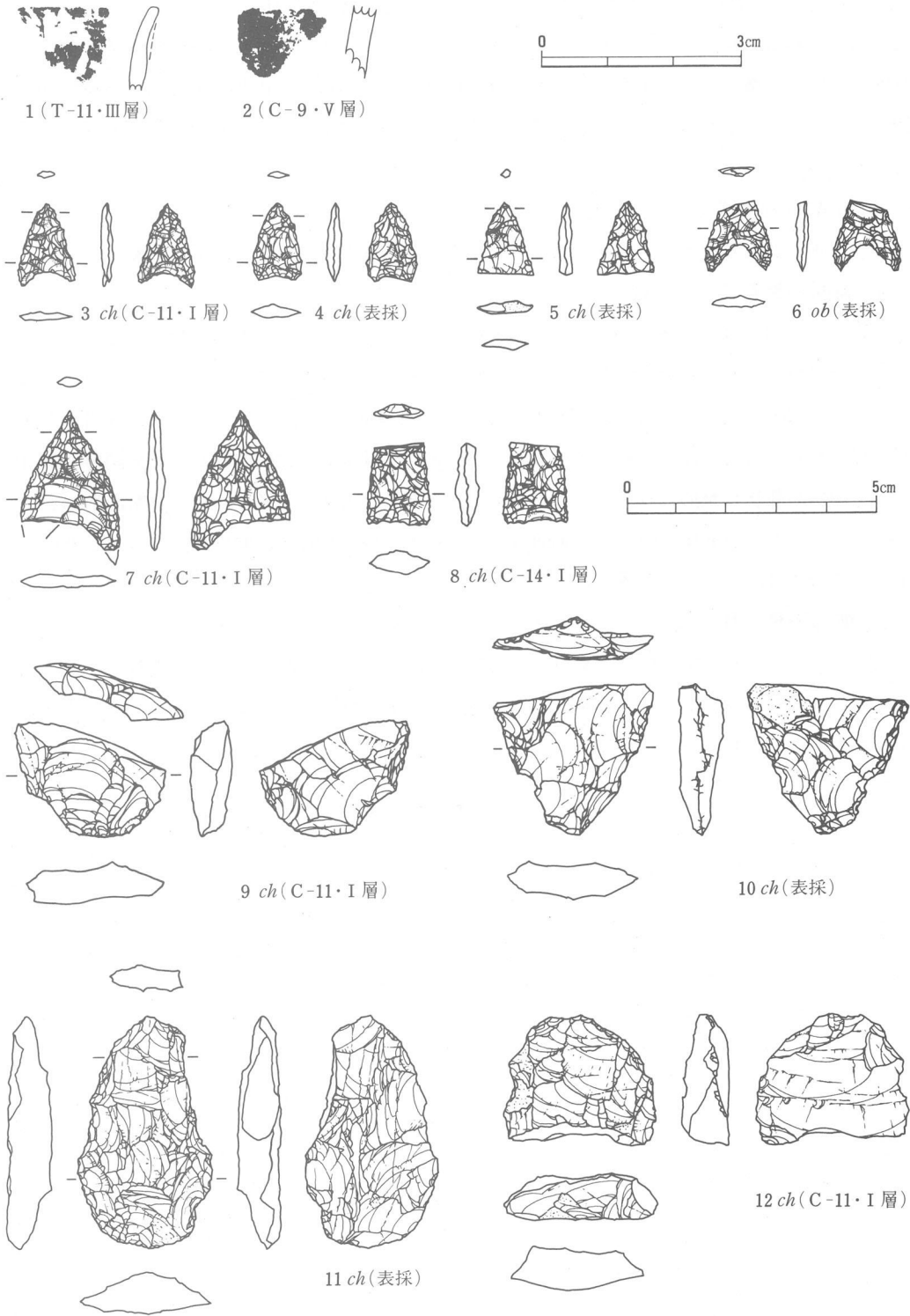
(1) 石鏃(3~7)

3は、チャート製の凹基無茎式石鏃である。基部の挟りによって左右に逆刺が作り出されている。両側縁は直線的である。長さ1.67cm、幅1.15cm、厚さ0.24cm、重さ0.29gである。4は、チャート製の凹基無茎式石鏃である。基部の挟りは小さく、逆刺は顕著でない。長さ1.54cm、幅0.99cm、厚さ0.31cm、重さ0.35gである。5は、チャート製の石鏃の先端部の破片である。現長1.44cm、現幅1.12cm、厚さ0.26cm、重さ0.36gである。6は、黒曜石製の凹基無茎式石鏃である。基部の挟りはV字状で深く、左右に鋭い逆刺が作り出されている。先端部を破損している。現長1.40cm、幅1.06cm、厚さ0.25cm、重さ0.29gである。7は、珪質頁岩製の凹基無茎式石鏃である。基部の挟りが深く長い逆刺が作り出されているが、正面左側の逆刺と右側の先端部は欠損している。両側縁が外側に緩く湾曲し、先端部が錐状に小さく尖っている形態に特徴がある。比較的大形で、現長2.75cm、幅2.00cm、厚さ0.35cm、重さ1.18gである。

(2) 有舌尖頭器(8)

8は、チャート製の小形の有舌尖頭器である。尖頭部および舌部を欠損している。現長1.62

第2節 石器



第17図 縄文時代草創期の遺物

cm、幅1.29cm、厚さ0.48cm、重さ0.90gである。これまでの調査を通じて、本遺跡から出土した有舌尖頭器は、身部の長さ・基部の幅に対して、舌部の長さが小さく、両側縁の基部側が平行的な形態に特徴がある。また、その大きさが柳又遺跡B地点や小馬背遺跡、西又遺跡の出土例に比べて著しく小形であることも指摘される。この例も、それらに共通する同一形態の有舌尖頭器である。

(3) 槍先形尖頭器 (10)

10は、両面調整の槍先形尖頭器の基部である。上部を折損している。チャート製。

(4) 両面調整石器 (9・11)

両面調整石器とは、両面調整で、尖頭器・斧形石器に分類されないものを総称する。9は、楕円形状に整形された両面調整石器の基部の破片である。断面形は扁平で、縁辺は鋭い。現長2.31cm、幅2.99cm、厚さ0.87cm、重さ5.46gである。11は扁平な楕円形状を呈する。槍先形尖頭器に見られるような尖端は作り出されておらず、正面の基部側に比較的細かい細部調整が集中し、平面形が弧状に整形されていることから、この部分が刃部とも考えられる。断面形は凸レンズ状であるが、正面側が甲高で、裏面は平坦である。長さ4.62cm、幅2.70cm、厚さ0.89cm、重さ10.46gである。チャート製。

(5) 細部調整剥片 (12)

12は、チャート製の縦長剥片を素材とし、その打面方向と左側縁から背面を調整し、また腹面にも打面部を取り去るような調整を加えている。下部を折損している。現長2.62cm、幅3.06cm、厚さ0.92cm、重さ8.66gである。 (杉山)

第V章 第IV層文化層

第1節 遺物の分布

第1次・第2次調査の発掘区域では、第IV層は大部分が耕作によって削剥されている状態であり、僅かにA-16区およびC-7～9区、T-11区周辺に部分的に残されているにすぎない。第1次調査では、同層からの出土遺物が極めて少なかったため、一つの文化層として認定するには至らなかったが、今回は、C-7・8区を中心に遺物の集中箇所が確認され、出土遺物の内容の検討から一文化層を認定した。

第IV層文化層に該当する遺物には、槍先形尖頭器2点、搔器1点、細部調整剥片1点、石刃2点、剥片15点、礫・碎片14点の計35点がある。これらの石材別の内訳は、チャート14点、黒曜石4点、珪質頁岩3点、ホルンフェルス1点、玻璃質安山岩2点、凝灰岩1点、安山岩3点、不明7点となっている。なお、土器の共伴の有無は今回確認することができなかった。

それらの分布は第18図に示したように、A-16区とC-7・8区周辺に分かれているが、これは単に包含層の遺存する部分を反映した見かけ上の集中にすぎない。槍先形尖頭器がC-7・8区からそれぞれ1点ずつ、石刃がC-7・8区からそれぞれ1点ずつ、搔器がC-8区から1点、細部調整剥片がC-7区から出土した。また、礫・碎片がA-15区から2点、A-16区から5点、B-16区から2点、C-7区から1点、U-11区から4点、剥片はA-16区から4点、B-16区から1点、C-7区から3点、C-8区から5点、U-11区から3点出土した(第19図・第20図)。

今回確認された第IV層文化層が縄文時代草創期に属するものか、旧石器時代の最終末期に位置付けられるものかについては、今のところ確定できず、見解を保留しなければならない。

(山本)

第2節 石器

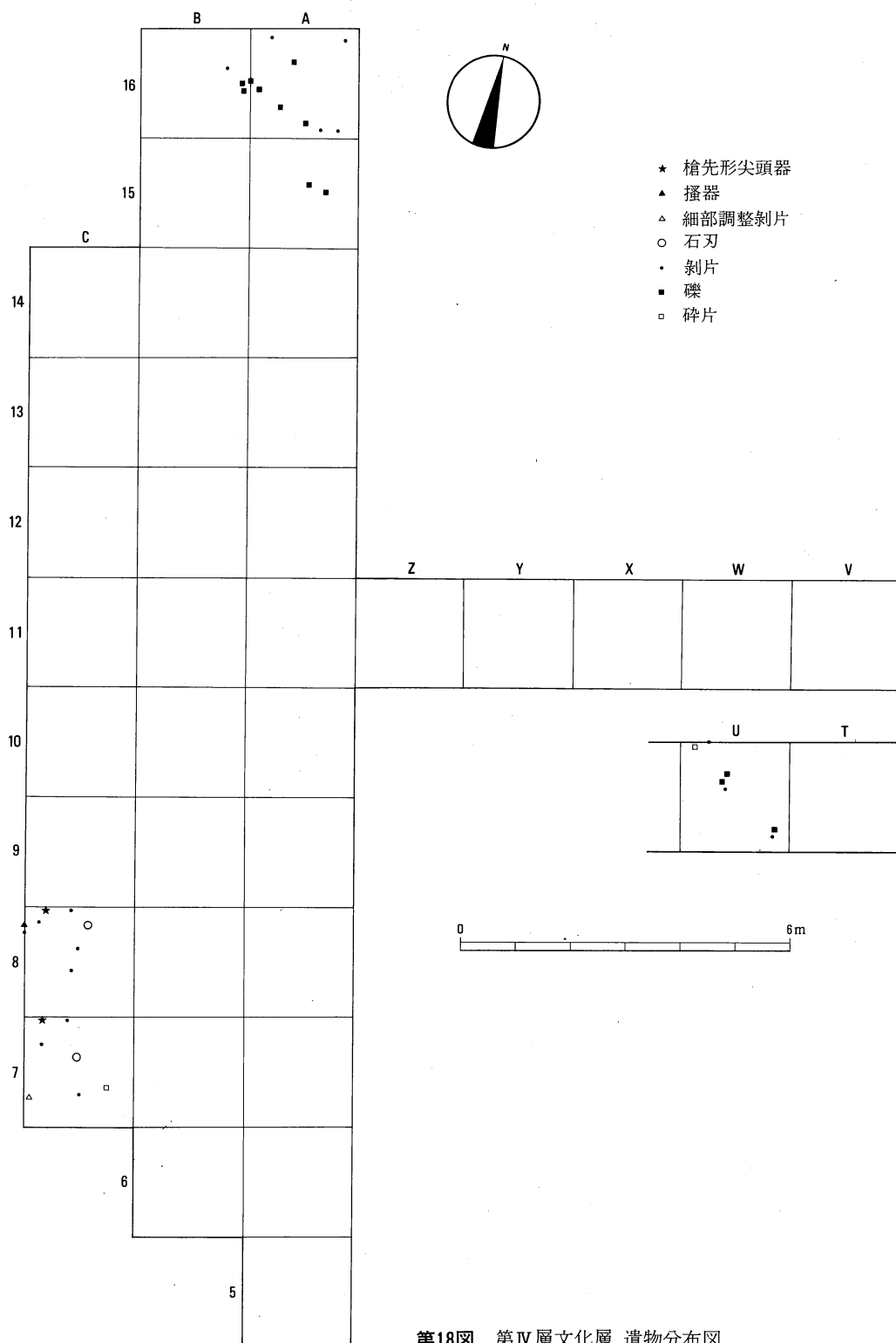
(1) 槍先形尖頭器 (1・2)

槍先形尖頭器は2点出土した。1はチャート製で、細身の柳葉形状を呈する両面調整の槍先形尖頭器である。裏面に素材の平坦な剝離面を部分的に残しているが、ほぼ全体に調整が加えられている。2は凝灰岩製で、両面調整の槍先形尖頭器の先端部の破片である。

(2) 石刃 (3・4)

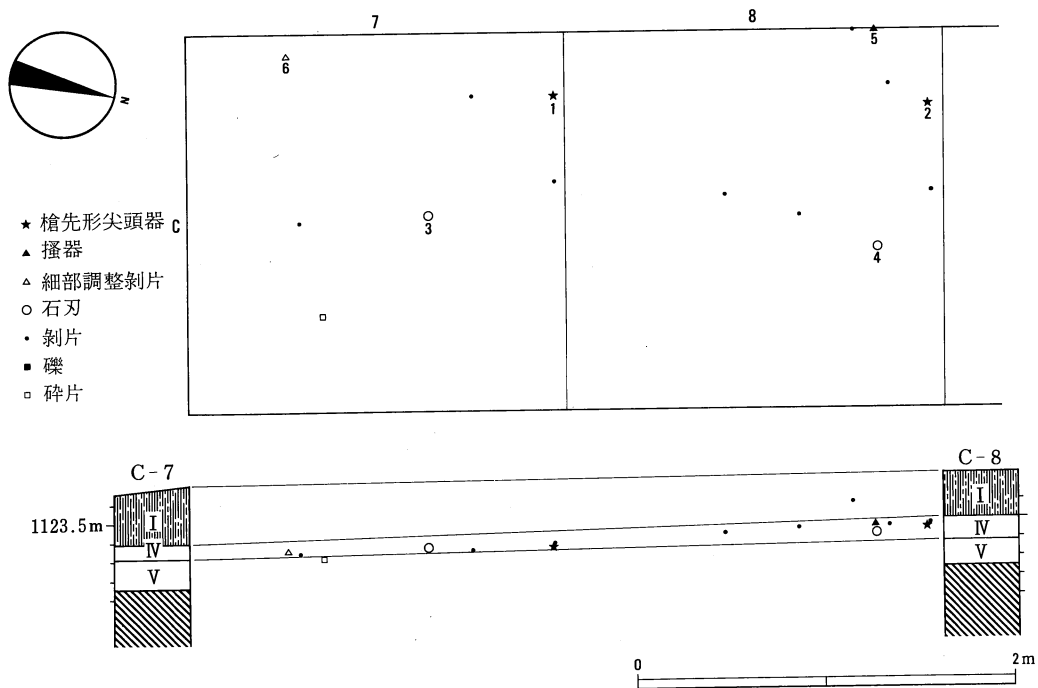
石刃³⁾は2点出土した。3は黒曜石製で、上部を折断している。背面は上方向から剝離され

第V章 第IV層文化層

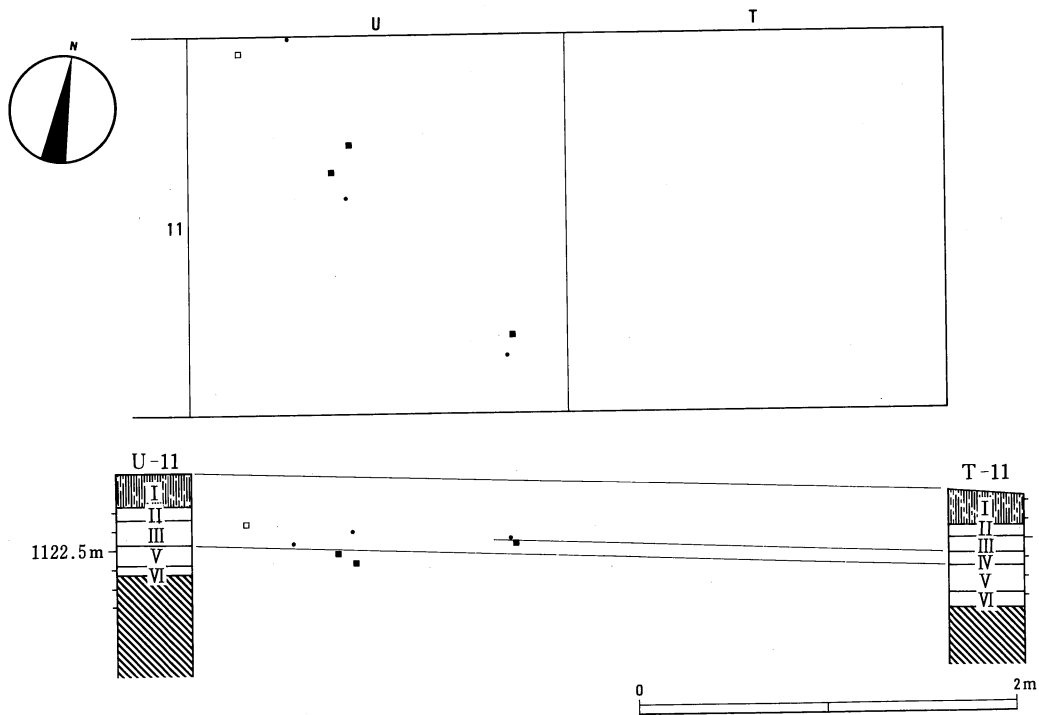


第18圖 第IV層文化層 遺物分布図

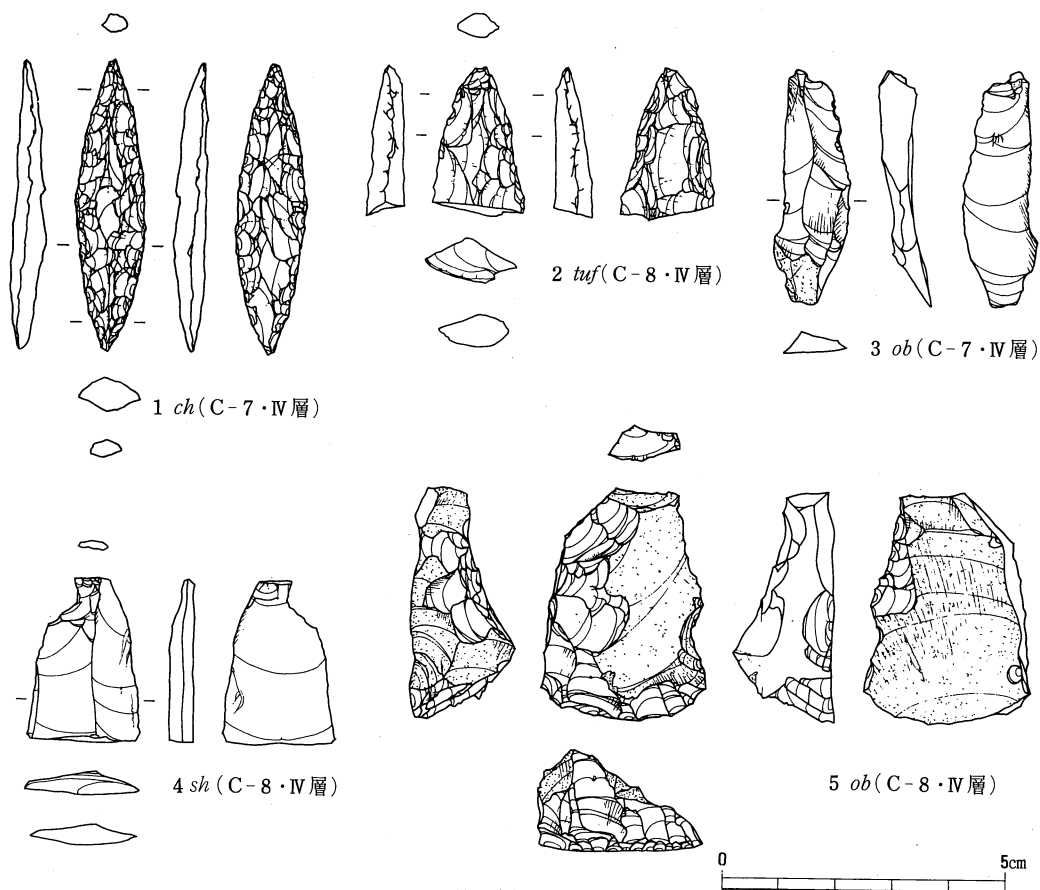
第2節 石器



第19圖 第IV層文化層C-7・8区 遺物分布図



第20圖 第IV層文化層T・U-11区 遺物分布図



第21図 第IV層文化層の石器(1)

た4面の剥離面から構成され、下端に部分的に原礫面が残る。4は珪質頁岩製の石刃である。打面は非常に小さく、背面の上端に石核の頭部調整が認められる。打面調整は認められない。下部を折断している。背面は同一打面から、左から右方向へ順次剥離された3面の剥離面から成り、両側縁に平行する2本の稜線が形成されている。

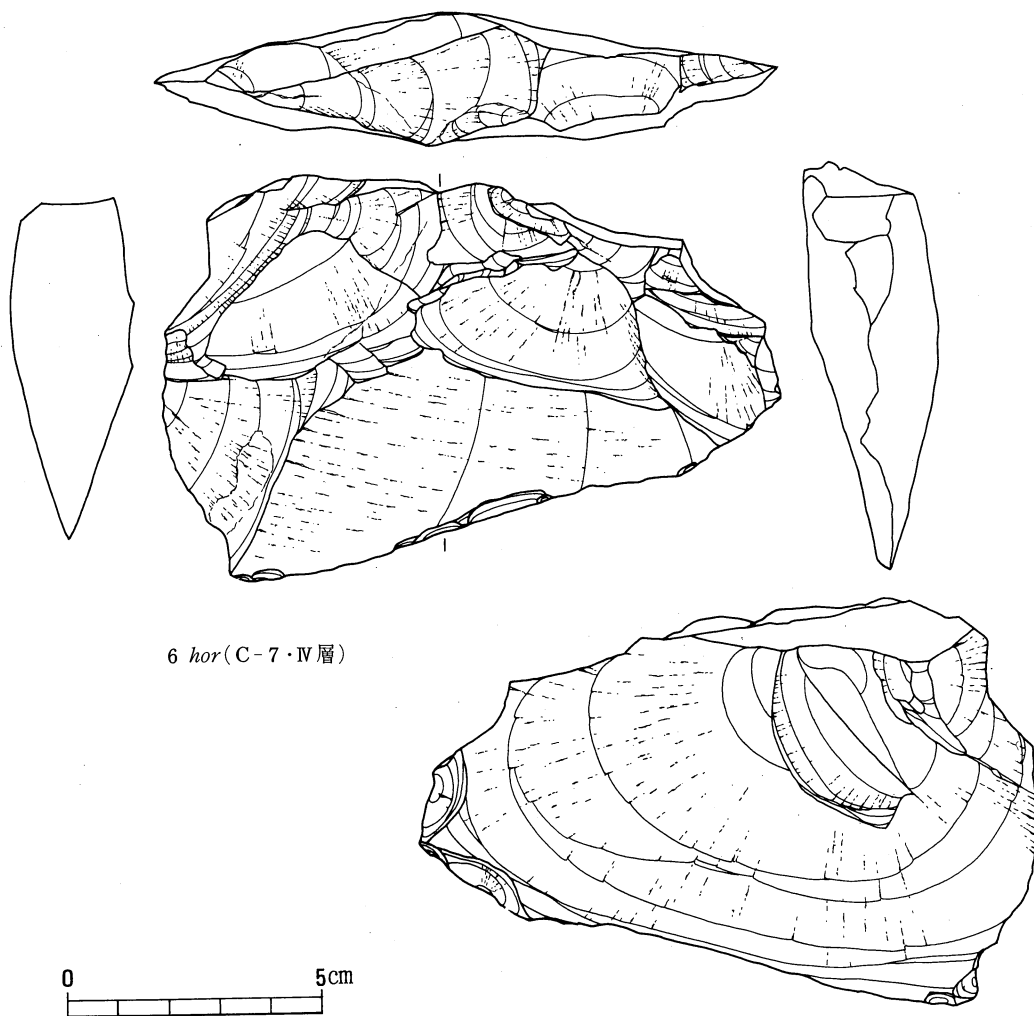
(3) 搔器 (5)

5は剥片状の黒曜石の礫を素材とし、その一端に急斜度の調整により弧状の刃部を作り出している。表面には、素材の高まりを取り去るような左横方向からの調整と左側面に部分的な調整が見られる。表面の右側縁および裏面の左側縁に見られる調整状の小剥離面は、刃部の調整面に比べ明らかに風化が進行しており、これが人為的な調整でないか、あるいはさらに古い時期の剥片石器が再利用された可能性も考えられる。

(4) 細部調整剥片 (6)

6はホルンフェルス製の大型の横長剥片を素材とし、その末端の直線的な一辺と腹面の右側に細部調整を加えている。素材の打面は比較的大きな剥離面からなる複剥離面打面である。背

第2節 石器



第22図 第IV層文化層の石器(2)

面は、同一打面から剥離された比較的新しい面と、左横方向から剥離されたより大きい剥離面から構成される。背面と打面部を構成する剥離面の剥離方向と順序から、90度方向の打面転位を繰り返しながら剥片剥離が進められたことがわかる。(山口)

第VI章 第V層文化層

第1節 概要

第1次調査の結果、細石刃75点・細石刃石核2点・細石刃石核原形2点・細石刃石核打面形成削片3点等が出土し、第V層に包含される細石刃文化の存在が確認された。最も重要な成果として、削片系の楔形細石刃石核とその製作過程で生ずる打面形成削片、細石刃石核原形等の関係資料が得られ、北方系に属する細石刃剥離技術の存在が立証されるとともに、これによって中部地方南部における細石刃文化の系統と編年に関しても、重要な問題が提起されたのである。しかし、当該文化層における遺物の分布状態や石器組成、剥片剥離技術の様相等については、十分に内容を解明することができなかった。そこで第2次調査では、それらの内容の解明と遺跡の広がり の把握とを目的として、第1次調査の所見から遺物の広がることが予想されたB列の西側にC列を設定し、また11区を東側に14m延長し、新たに調査区に加えた。C-7～14区およびT～Z-11区の計15グリッドを設定し、60㎡を発掘した。第1次調査の発掘区域を含めると、当該文化層の調査面積は合計156㎡となった。

その結果、第2次調査では、石器175点、剥片867点、礫・碎片319点、計1361点の遺物が出土し、第1次調査出土資料を含めると合計2195点の資料が得られた¹⁾。今回出土した主要な石器には、細石刃90点・細石刃石核4点・細石刃石核原形1点・細石刃石核打面形成削片3点のほか、搔器7点・削器5点・細部調整剥片21点・石刃20点・石刃状剥片5点・石核10点・打製石斧1点・礫器3点がある。また、石器・剥片類の母岩別分類・接合作業の結果、7個体の母岩別資料が識別された。

それらの遺物の平面的な分布状態に関しては、第1次・第2次調査で得られた資料が、大きく2つのユニットを構成するように分布していることが確認された。ユニット1は、C-7～11区、B-6～11区、A-6～10区の計16グリッドを中心に広がるもので、1358点の石器・剥片・礫からなり、その範囲はさらに西側の調査区域外に及んでいる。このユニットに伴い、C-10・11区から比較的大型の礫を円形状に配置した配石遺構が検出された。そして、細石刃72点をはじめ細石刃石核・同原形を含む細石刃生産に関わる石器と、搔器・削器・細部調整剥片・石刃・石核・打製石斧・礫器が、この配石遺構を中心として周囲から出土した。

一方、ユニット2は、その一部を明らかにしたにすぎないが、V-11～Z-11区の計5グリッド、約20㎡に広がるもので、166点以上の礫から構成される礫群が検出され、その範囲から細石刃5点・細石刃石核1点・稜付削片1点と削器・細部調整剥片・石刃・石核等が出土した。

(杉山)

第2節 遺物の分布とユニット

(1) 層位と遺物の分布状態

1. 遺物の分布とユニット (第23図)

第V層文化層では、第1次・第2次調査を通じて合計2197点の遺物が出土した³⁾。その内訳は、第1次調査出土が835点、第2次調査出土が1362点となっている。

第V層から出土した2089点の平面分布状態は第23図に示す通りである³⁾。遺物全体としては、調査区西側のC-7~10区周辺と、東側のY-11~V-11区周辺とに大きく分かれて分布する状態が確認された。C-7区からC-11区周辺に中心をもつ遺物のまとまりを第V層文化層ユニット1、Z-11区からV-11区にひろがる遺物のまとまりをユニット2と呼ぶことにする。ユニット1の範囲は第23図を見るかぎりではやや不明瞭であるが、遺物のなかで主体となる細石刃とその関係資料、主要な石器器種の分布や、母岩別資料・接合資料の分布状態から総合的に判断すると、C-7区からC-11区を中心とし、B-6区~B-11区、A-6区~A-10区を含む約64㎡のひろがりが見込まれる。一方、ユニット2は、その一部を明らかにしたにすぎないが、Z-11区からV-11区にかけて20㎡以上のひろがりを持ち、その範囲は調査区域の南北の10列・12列にもさらに延びている筈である。なお、A-12区周辺にもややまとまった分布が認められるが、その範囲が第VI層文化層ユニット1と重なることから、それらは第VI層文化層に属するものと考えられる。

以下、石器器種別、剥片、礫・碎片の順に分布状態を記述する。なお、各項に示す出土総数は、表面採集および第I層出土の該当資料を加えた数である。

2. 石器器種別の分布 (第24図~第30図)

a. 細石刃・細石刃石核・同原形・打面形成削片・稜付削片・細石刃石核調整剥片 (第24図)

細石刃およびその関係資料は、第1次調査で87点、第2次調査で102点の計189点が出土した。その内訳は、細石刃165点、細石刃石核6点、同原形3点、同打面形成削片6点、稜付削片3点、細石刃石核打面再生剥片2点、細石刃剥離作業面再生剥片2点、細石刃石核調整剥片2点となっている。

第V層から出土した92点の平面分布状態は第24図に示す通りである⁴⁾。細石刃は、ユニット1の中央部にあたるC-9・11区、B-10区でまとまって出土しており、C-10~11区南側に位置する配石を取り囲むように分布している。細石刃石核・削片等の関係資料は、細石刃と同様にC-9区周辺に比較的まとまった分布をみせながらも、広範囲に点在する傾向が認められた。

b. 搔器・削器・細部調整剥片・彫器・礫器・打製石斧 (第25図)

搔器・削器は、第1次調査で9点、第2次調査で12点の計21点が出土した。その内訳は、搔器11点、削器10点となっている。第V層から出土した17点の平面分布状態は第25図に示す通り

第VI章 第V層文化層

である。搔器は7～15区にかけて比較的広範囲に分布するが、C-10～11区の配石周辺にまとまった分布が認められる。また、大部分がユニット1からの出土であり、ユニット2では出土しなかった。削器はすべてユニット1・2から出土し、ユニット1の配石周辺にまとまって分布する傾向が認められた。細部調整剥片は、第1次調査で8点、第2次調査で21点の計29点が出土した。第V層から出土した26点の平面分布状態は第25図に示す通りである。6・14区を除いた全グリッドから出土しており、比較的広範囲にわたる分布となっている。このうちユニット1の西側にあたるC-8～11区では、9点がまとまって出土しており、搔器・削器と同様にC-10～11区の配石周辺に分布がまとまる傾向が認められた。彫器は、第1次調査において第V層から1点出土した。第2次調査では出土しなかった。第25図に示した通り、A・B-16区境からの出土である。

礫器および打製石斧は、第2次調査において計4点出土した。いずれも第V層からの出土である。平面分布状態は第25図に示す通り、すべてユニット1に属し、礫器3点はC-10区北西部に、打製石斧1点はC-7区北西部に分布する。このうち礫器はC-10・11区の配石内部から出土した。

c. 石刃・石核・剥片 (第26図)

石刃および石刃状剥片は、第1次調査で9点、第2次調査で26点の計35点が出土した。その内訳は、石刃23点、稜付石刃3点、細部調整石刃4点、石刃状剥片5点となっている。第V層から出土した32点の平面分布状態は第26図に示す通りである⁶⁾。石刃は6～14区にかけての比較的広範囲に分布するが、大部分がユニット1から出土した。特にB・C-9～10区にまとまった分布が認められる。石刃状剥片はC列に分布している。

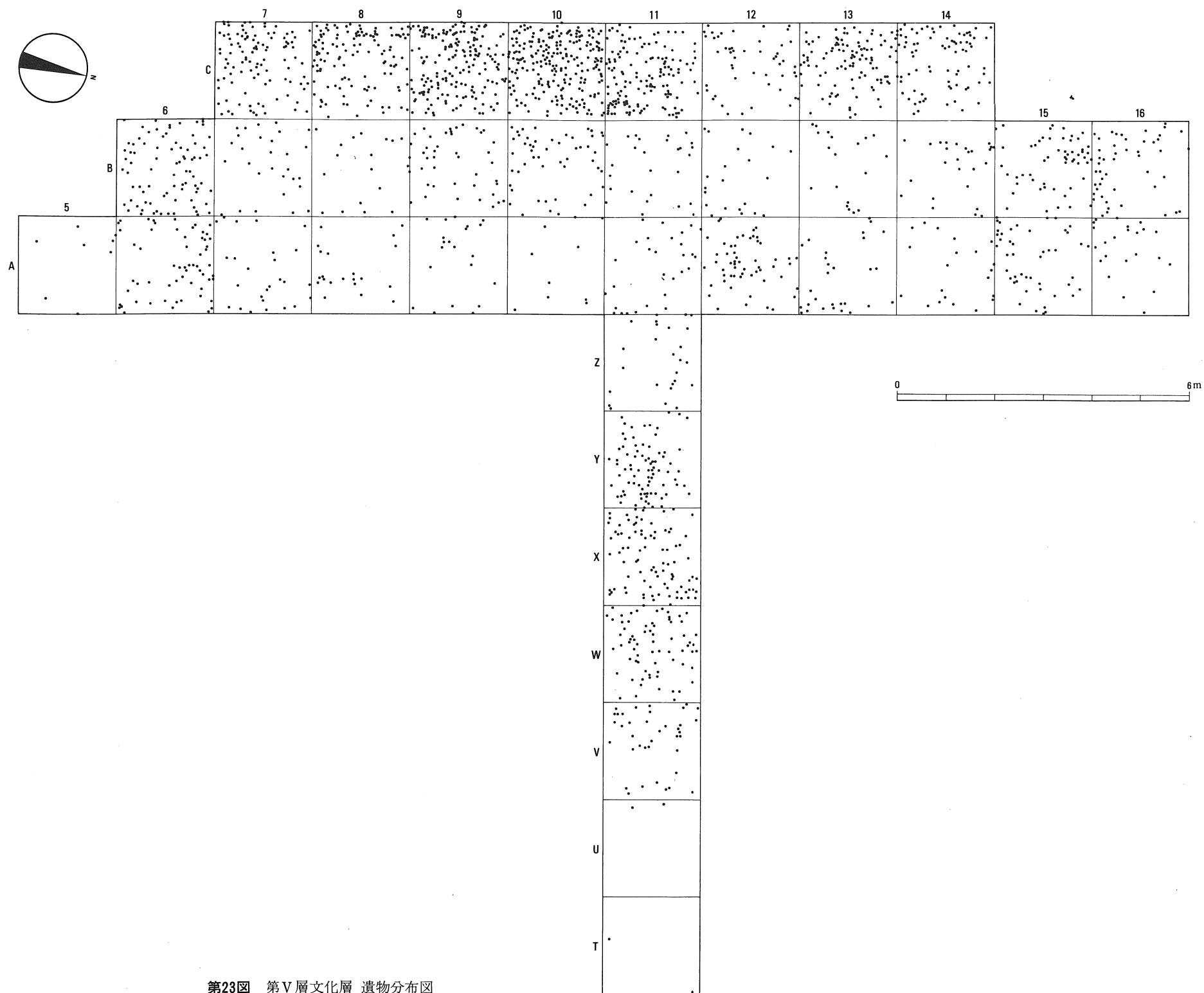
石核は、第1次調査で7点、第2次調査で10点の計17点が出土した。第V層から出土した17点の平面分布状態は第26図に示す通りである⁶⁾。9～16区にかけての比較的広範囲から出土しているが、C-9・10区に分布がまとまる傾向が認められた。

剥片は、第1次調査で520点、第2次調査で867点の計1387点が第V層から出土した。平面分布状態は第26図に示す通りである。T-11区を除いた全グリッドから出土しているが、C-7～11区、A・B-6区、A・B-15～16区、V～Z-11区の4箇所集中している。特にユニット1の西側のC-9～11区では、約400点にのぼる集中的な出土がみられた。

d. ナイフ形石器・槍先形尖頭器 (第27図)

参考までに、第V層から出土したナイフ形石器・槍先形尖頭器の分布状態を第27図に示した。ナイフ形石器は、調査区北側の13～16区に分布がまとまる傾向が認められた。この範囲は、第VI層文化層のユニット1の範囲と一部重複する地点であり、これらのナイフ形石器が第VI層文化層に帰属することを示している。第V層文化層のユニット1・2の範囲では、分布が希薄である。槍先形尖頭器は、A-7区、B-8・12区から出土しており、ユニット1の周縁に分布

第2節 遺物の分布とユニット



第23図 第V層文化層 遺物分布図

している。

e. 礫・碎片（第28図）

礫・碎片は、第1次調査で191点、第2次調査で319点の計510点が第V層から出土した。その内訳は、礫が262点、碎片が248点となっている。平面分布状態は第28図に示す通りである。全体的にはユニット1の西側にあたるC-7～11区の範囲と、ユニット2のV～Y-11区の範囲に大きく分かれて分布する状態が確認された。前者の集中箇所では、B・C-7～11区を中心とする範囲で配石遺構1基が検出された。V～Y-11区の礫・碎片の集中は、ユニット2に伴う礫群である。なお、A-12区周辺にも分布のまとまりが認められるが、これは第VI層文化層ユニット1の礫群を構成する礫が一部第V層中に浮上したものである。

f. 石器・剥片の接合関係（第29図）

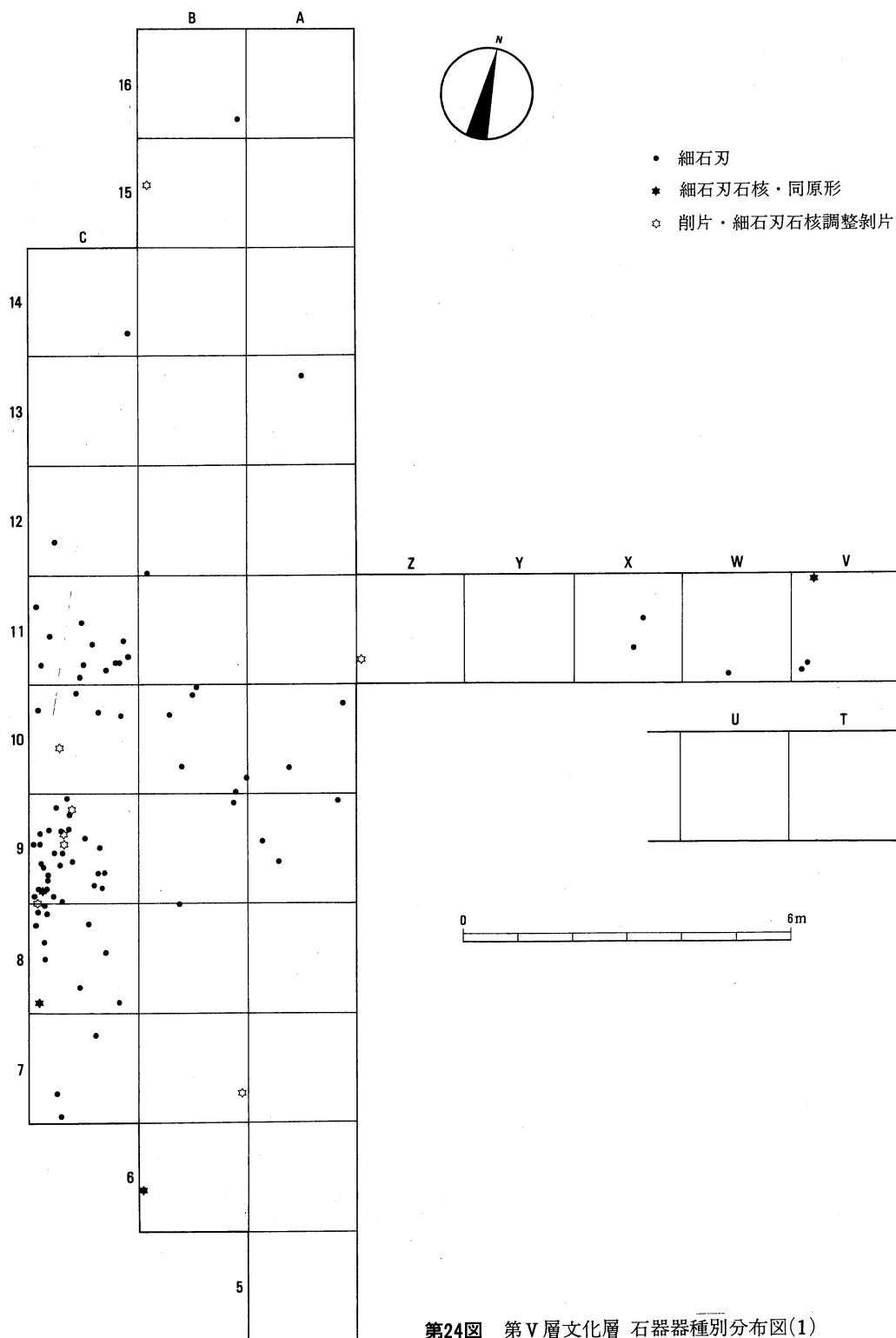
第1次・第2次調査で出土した石器・剥片1693点について母岩別分類と接合関係を調べた結果、65点・20例の接合関係が確認された。それらの平面分布状態は第29図に示す通りである。特にユニット1の中心部にあたるC-7～10区において、集中的な接合関係が認められている。一方、ユニット2では、剥片の接合資料は1例が確認されたにすぎない。なお、母岩別資料・接合資料の詳細については本章第6節を参照されたい。

g. 礫・碎片の接合関係（第30図）

第1次・第2次調査で出土した礫・碎片のうち、52点、23例の接合関係が確認された。それらの平面分布状態は第30図に示す通りである。接合資料は、ユニット1のC-10・11区周辺と、ユニット2の礫群とに大きく別れて分布しており、特に、ユニット2のV～Y-11区の範囲に集中して分布している。なお、詳細については本章第3節を参照されたい。

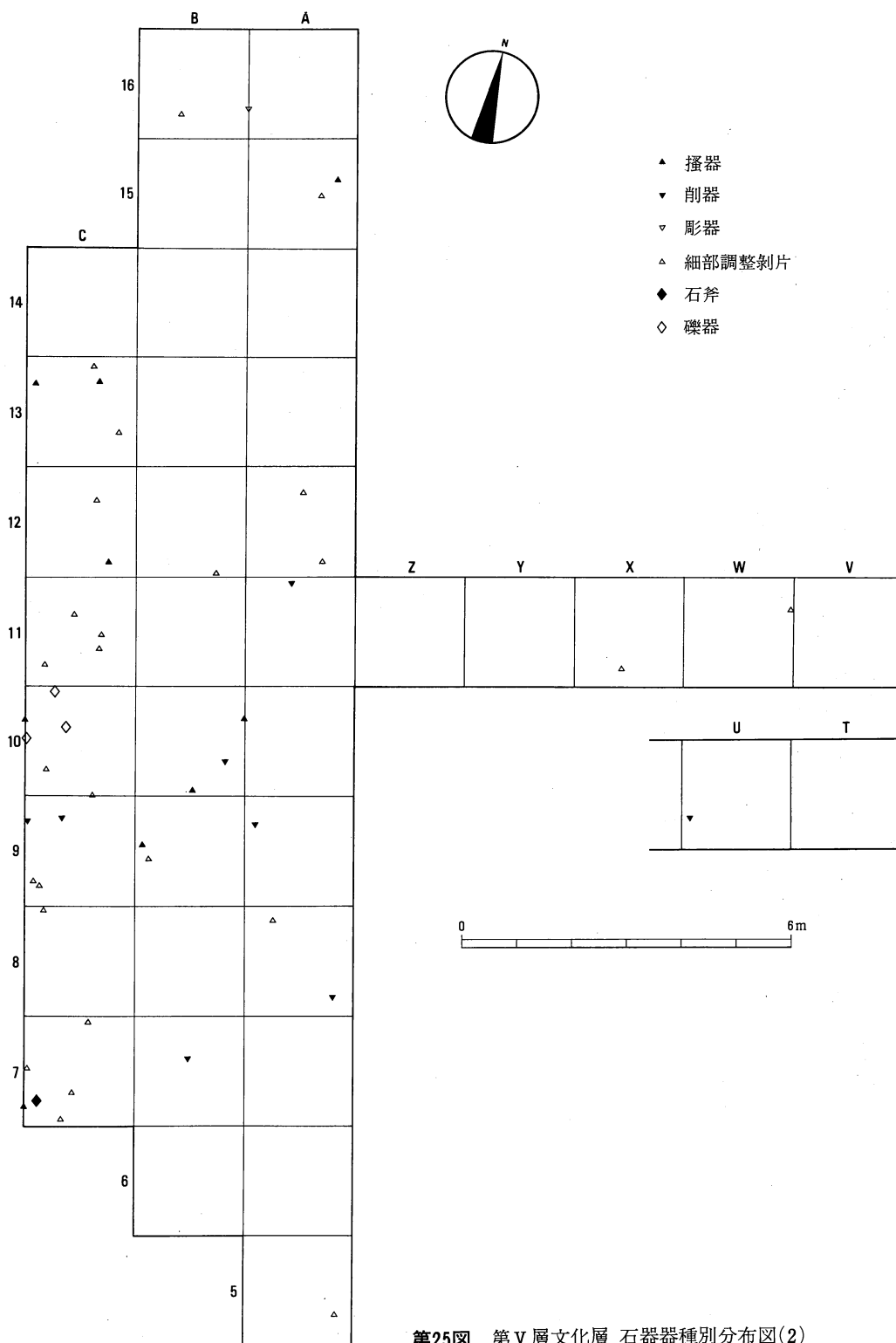
3. 検出層位（第31図～第37図）

第2次調査の結果、第V層文化層に該当する資料として計1362点の遺物が出土した。それらの出土層位別の内訳は、表面採集および第I層出土が39点、第IV層出土が3点、第V層出土が1317点、第VI層出土が3点となっている。第IV層・第V層・第VI層から出土した1323点の垂直分布状態は第31図～第37図に示す通りである。C-7～14区は同区西壁、T～Z-11区は同区北壁への投影となっている。発掘調査区の地形は、南北・東西方向にそれぞれ若干傾斜しているが、遺物包含層の中心となる第V層は、C-10～14区、X～Z-11区において上部が耕作によって削剥されているものの、層厚が各区とも約10～15cmで、ほぼ一定した堆積状態を示している。当該文化層の遺物は、この第V層を中心として、第IV層から第VI層上面にわたる層位から出土しており、全体の出土層位に約15～20cmの垂直分布幅が認められた。第V層中においては、その上部から下部にかけて遺物が包含されており、石器群の出土レベルに顕著なピークは認められなかった。第V層文化層として捉えられる石器群の生活面の層位の確定は、第3次以降の継続調査の中で果たしていかななくてはならない。（橘）



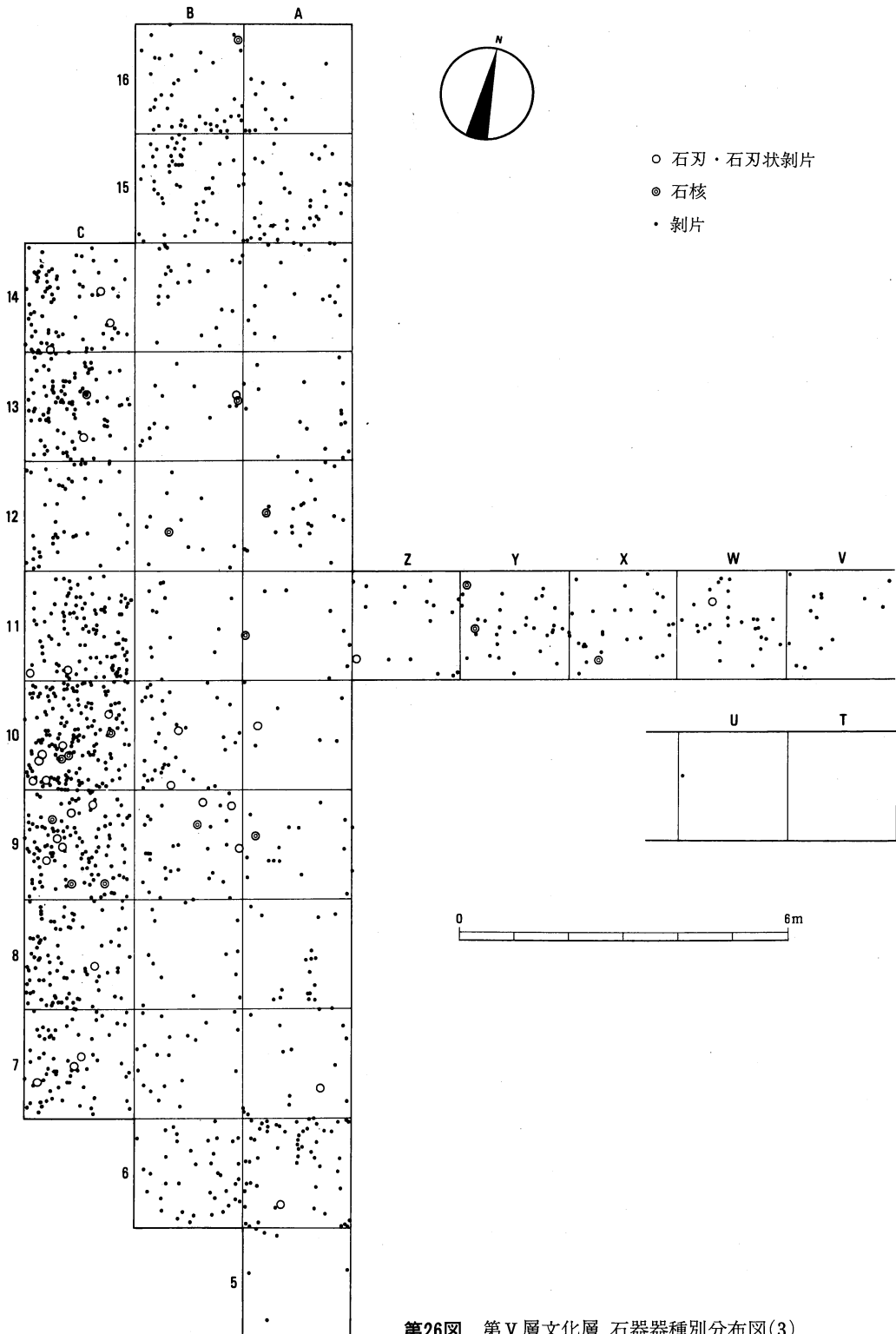
第24図 第V層文化層 石器器種別分布図(1)

第2節 遺物の分布とユニット



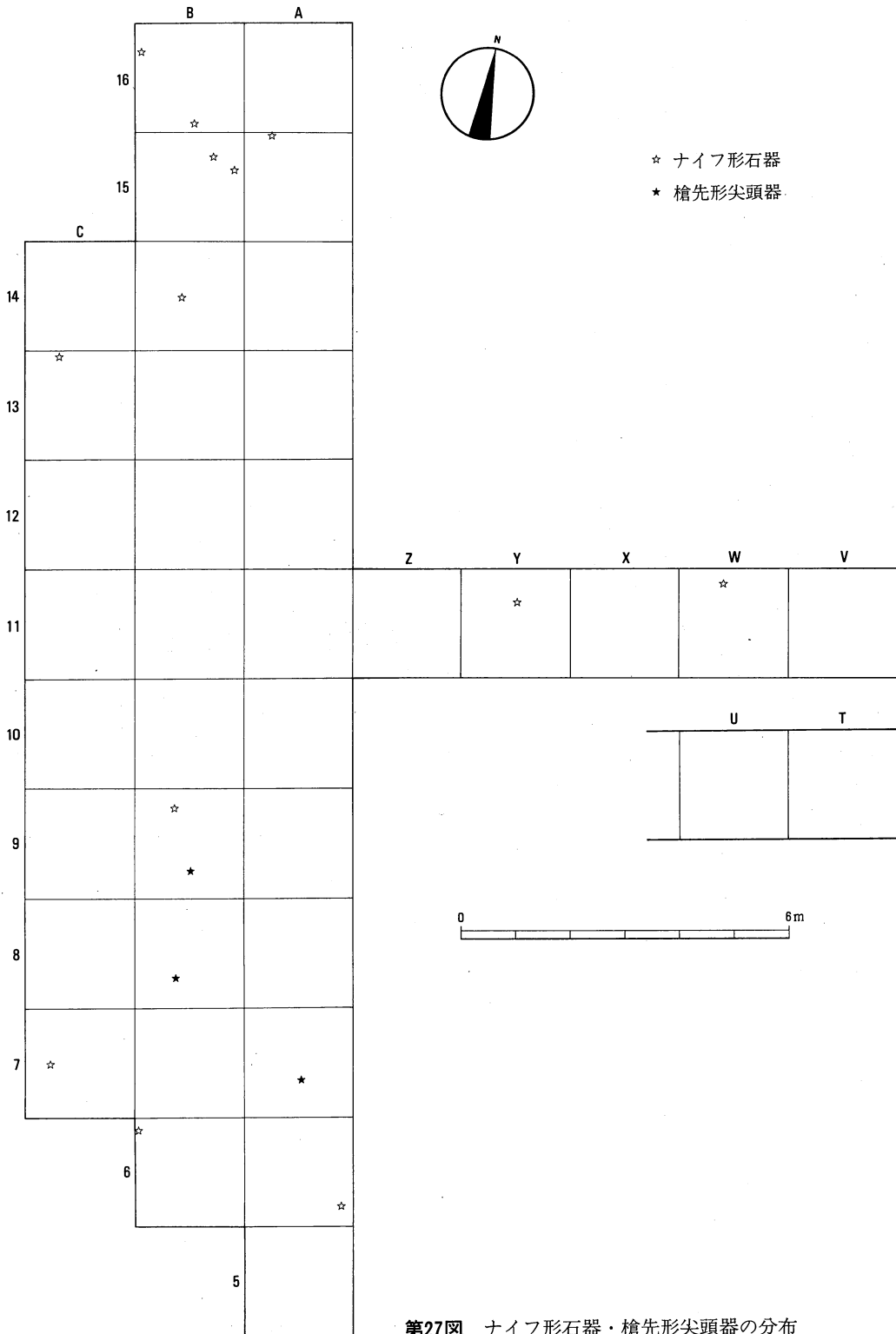
第25図 第V層文化層 石器器種別分布図(2)

第VI章 第V層文化層

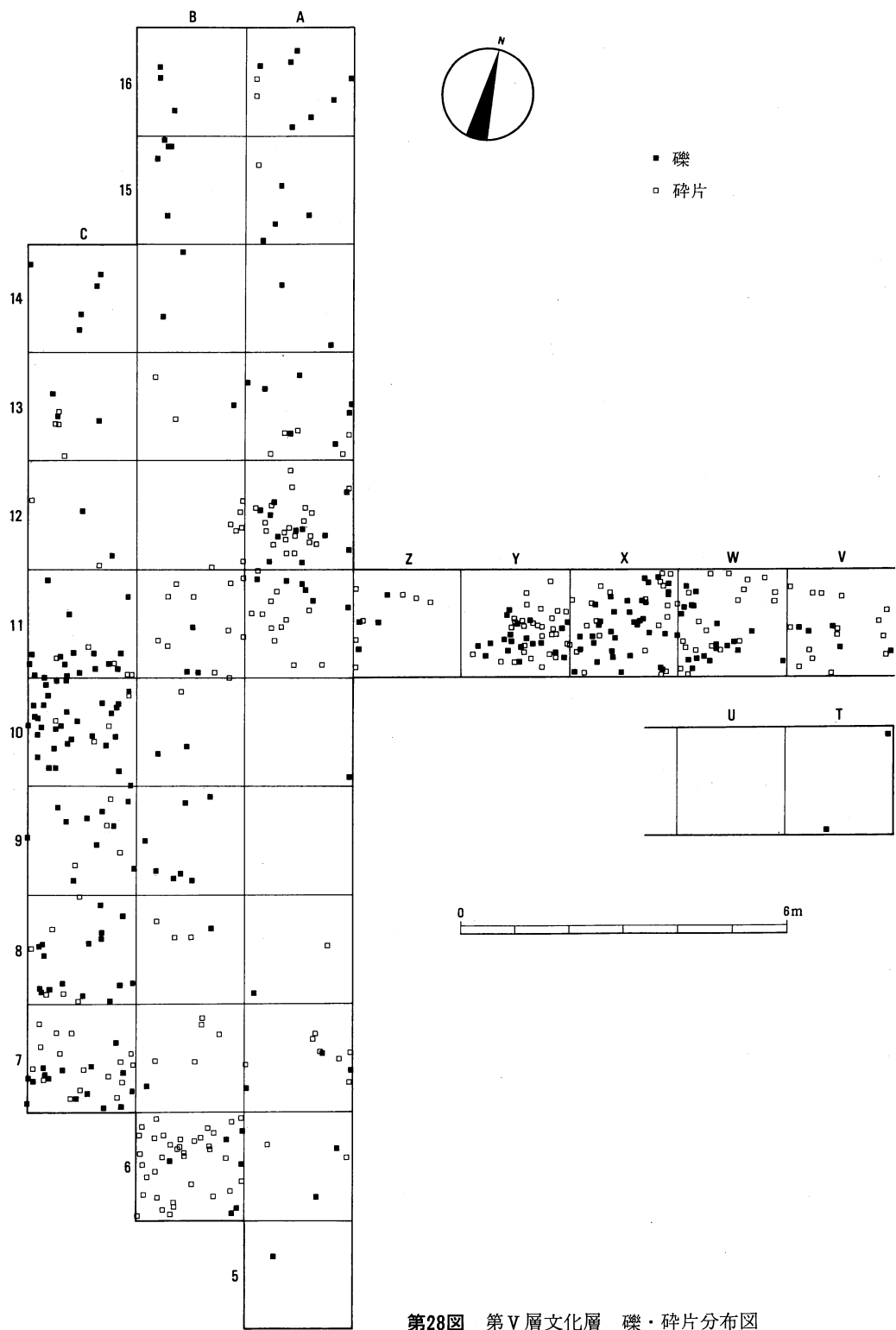


第26図 第V層文化層 石器器種別分布図(3)

第2節 遺物の分布とユニット

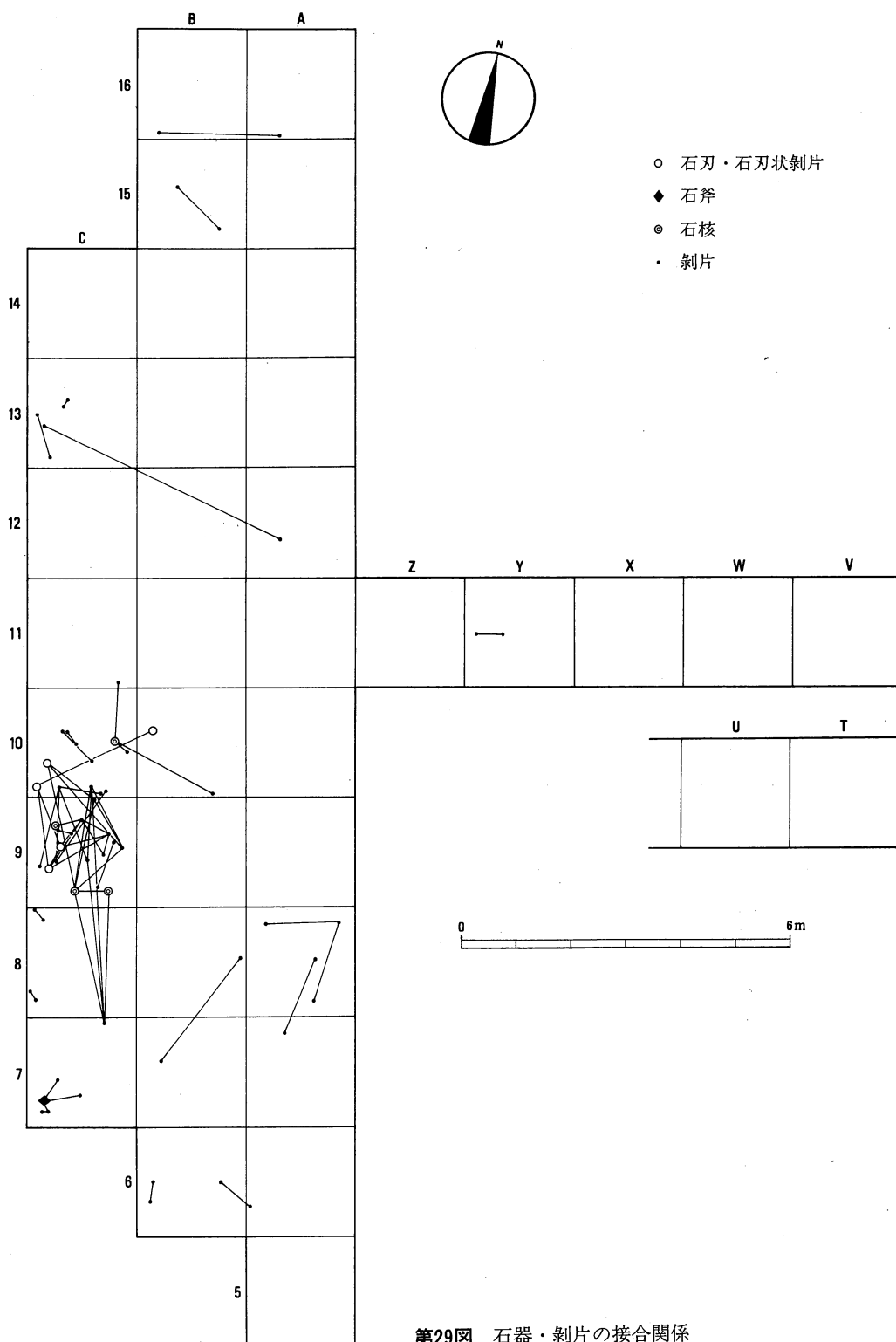


第VI章 第V層文化層

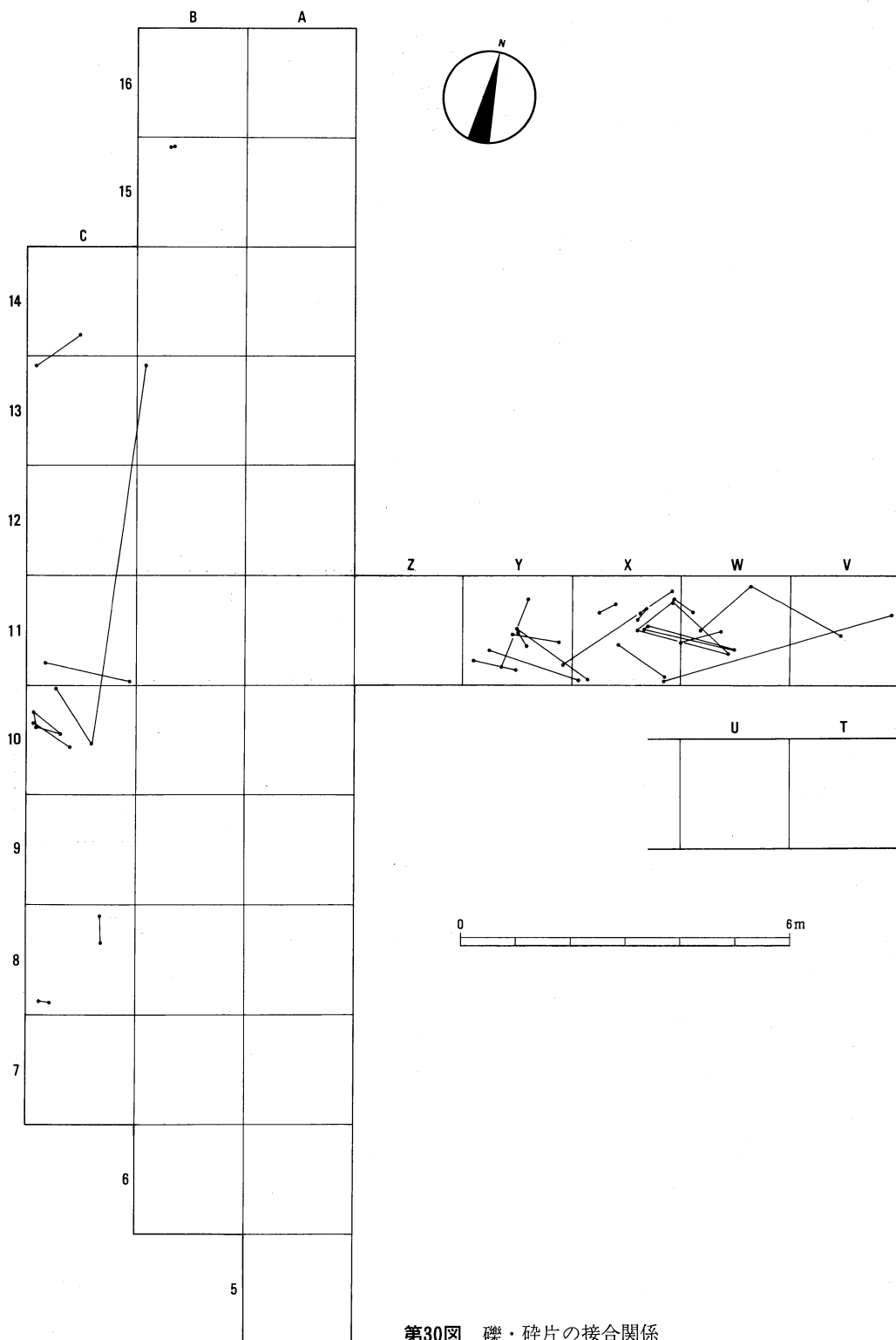


第28圖 第V層文化層 礫・碎片分布図

第2節 遺物の分布とユニット

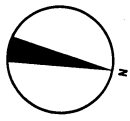


第29図 石器・剥片の接合関係

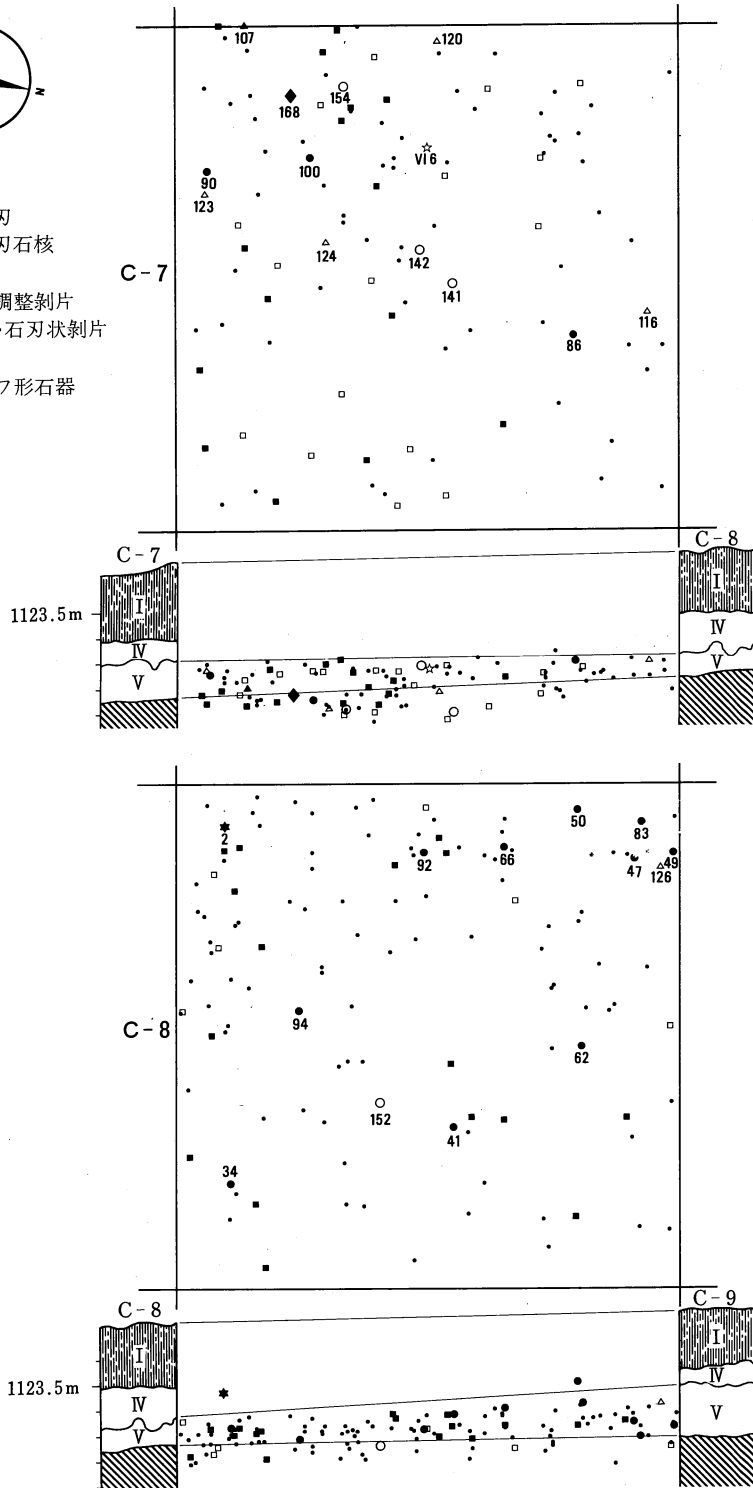


第30図 礫・碎片の接合関係

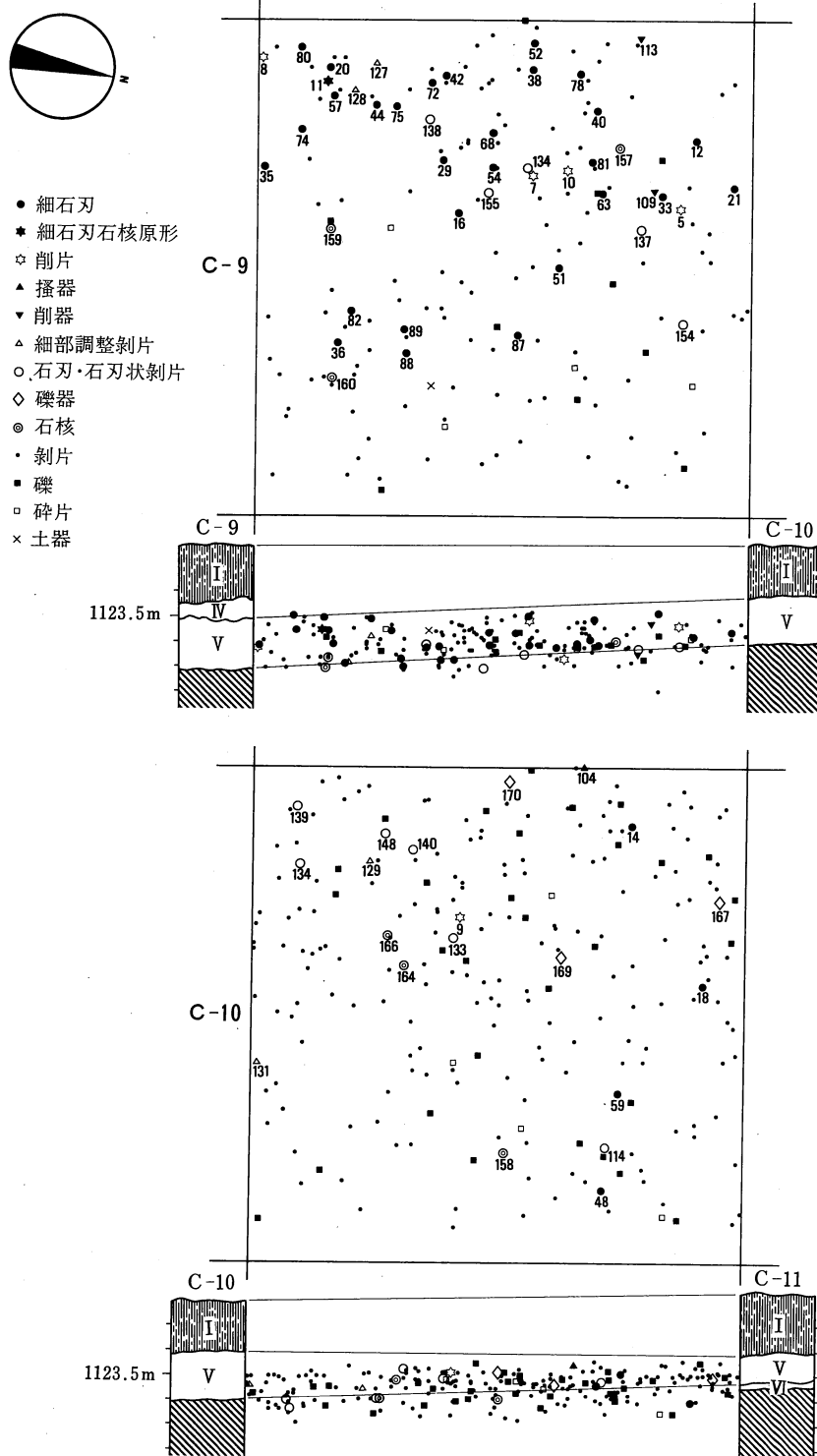
第2節 遺物の分布とユニット



- 細石刃
- ★ 細石刃石核
- ▲ 搔器
- △ 細部調整剥片
- 石刃・石刃状剥片
- ◆ 石斧
- ☆ ナイフ形石器
- ・ 剥片
- 礫
- 碎片

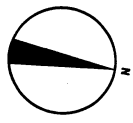


第31図 C-7区・C-8区 遺物分布図

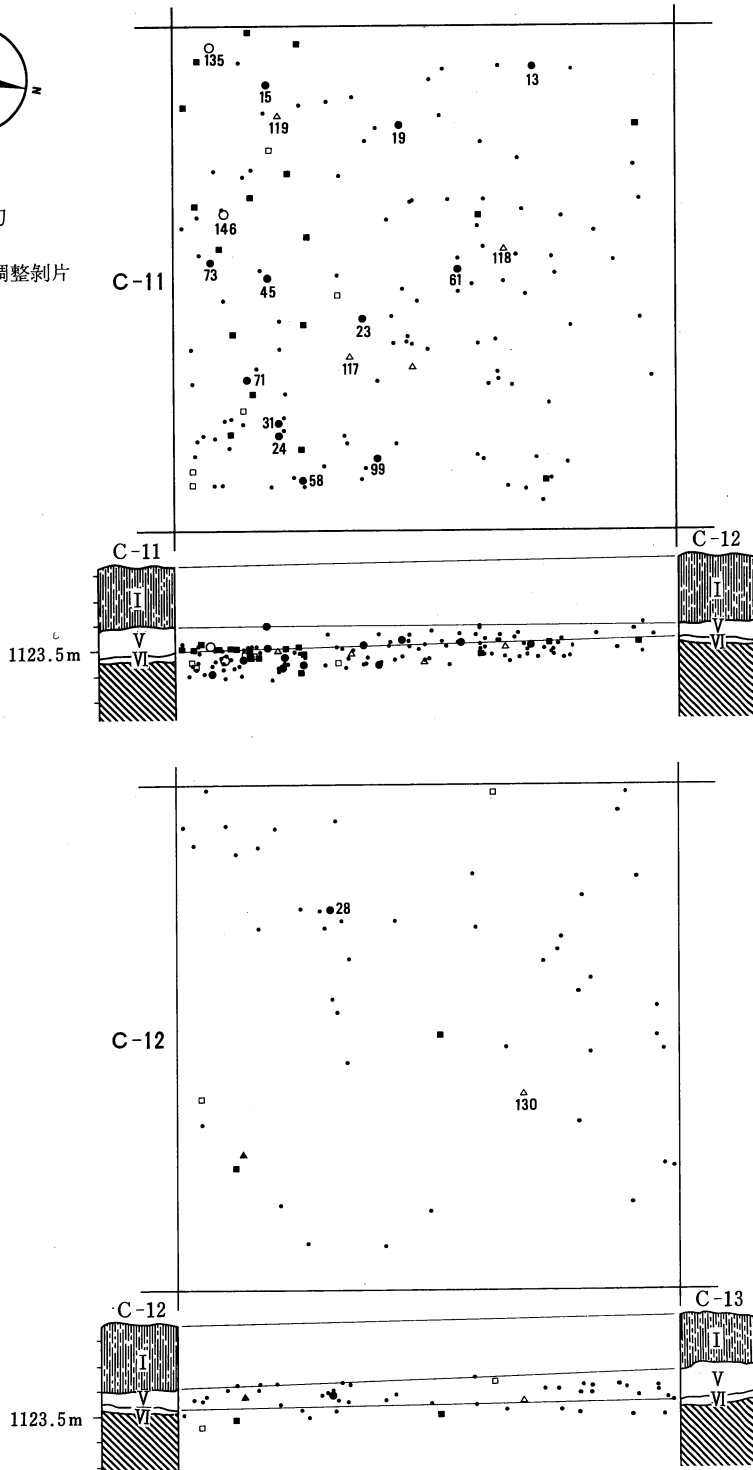


第32図 C-9区・C-10区 遺物分布図

第2節 遺物の分布とユニット

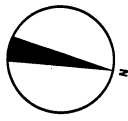


- 細石刃
- ▲ 搔器
- △ 細部調整剝片
- 石刃
- ・ 剝片
- 礫
- 碎片

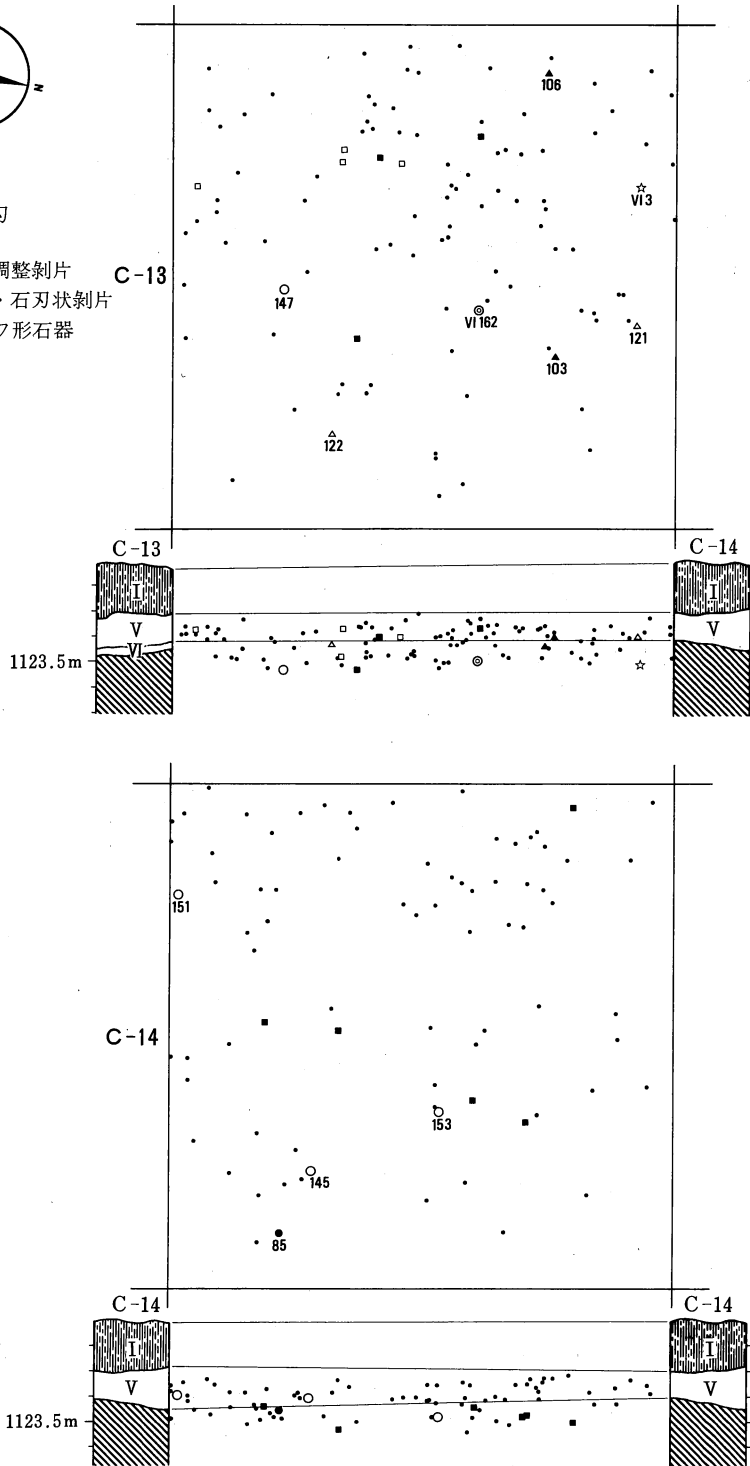


第33図 C-11区・C-12区 遺物分布図

第VI章 第V層文化層

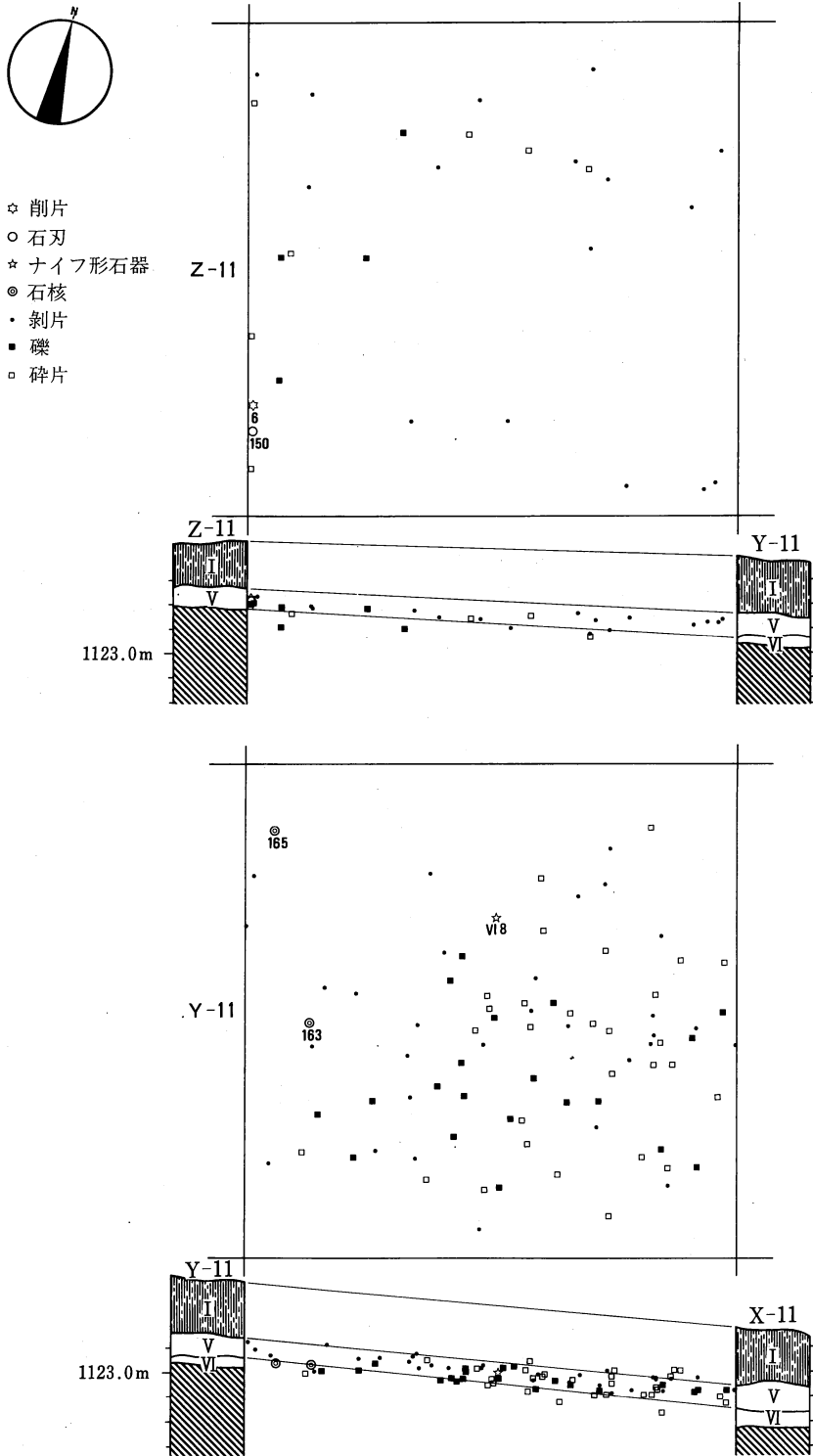


- 細石刃
- ▲ 搔器
- △ 細部調整剥片
- 石刃・石刃状剥片
- ☆ ナイフ形石器
- ・ 剥片
- 礫
- 碎片

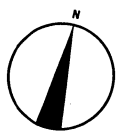


第34図 C-13区・C-14区 遺物分布図

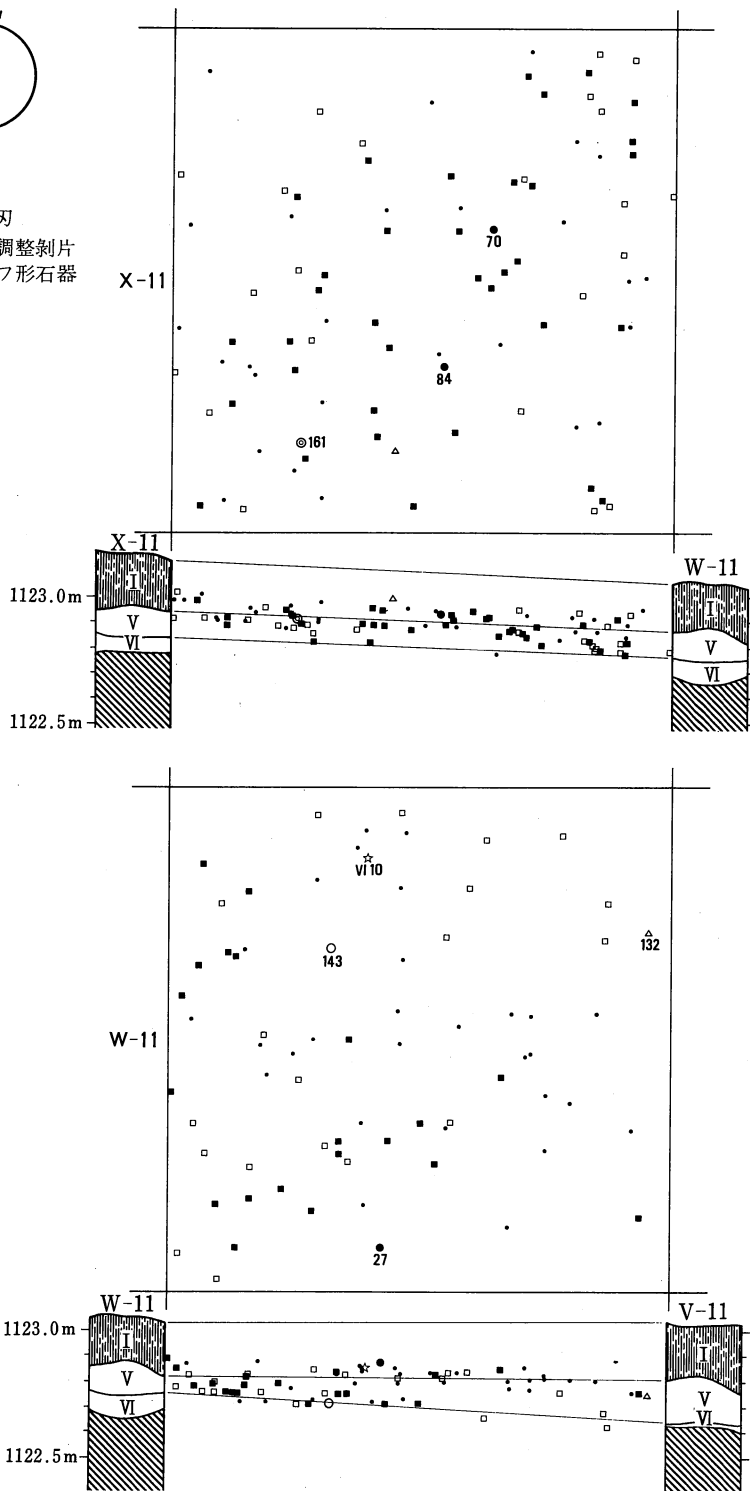
第2節 遺物の分布とユニット



第35図 Z-11区・Y-11区 遺物分布図

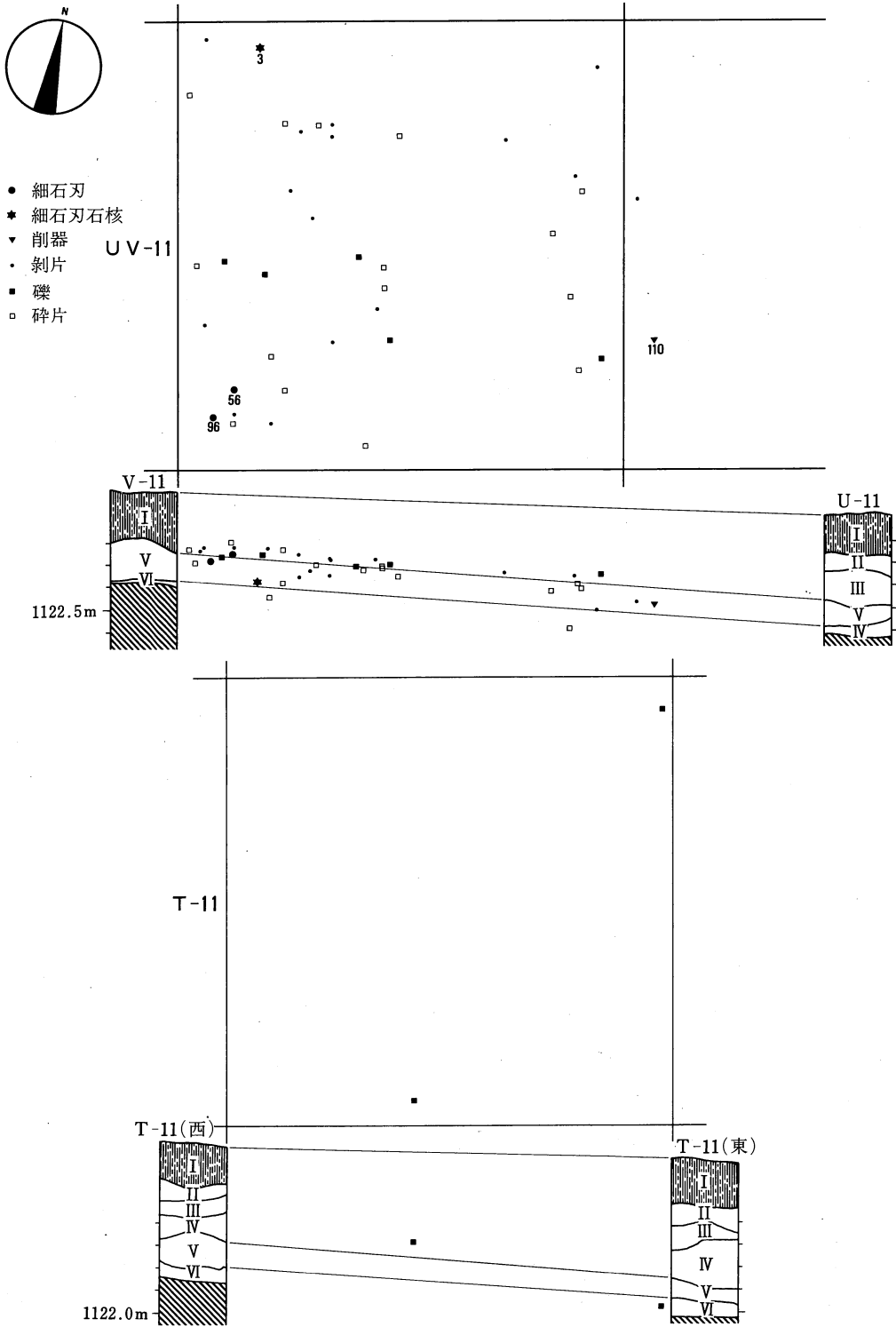


- 細石刃
- △ 細部調整剥片
- ☆ ナイフ形石器
- ◎ 石核
- ・ 剥片
- 礫
- 碎片



第36図 X-11区・W-11区 遺物分布図

第2節 遺物の分布とユニット



第37図 UV-11区・T-11区 遺物分布図

(2) ユニット1

1. 位置と規模 (第38図)

ユニット1は、A-5~12区・B-6~12区・C-7~12区の範囲に広がる大きなまとまりで、C-7区からC-11区周辺に遺物分布の中心を持つ。ユニットの範囲は第38図を見るかぎりではやや不明瞭であるが、遺物の主体をなす細石刃とその関係資料、主要な石器器種の分布や、母岩別資料・接合資料の分布状態から総合的に判断すると、概念的にはC-7区からC-11区を中心とし、B-6区~B-11区、A-6区~A-10区を含む約64㎡の広がりが見込まれる。ただし、遺物の分布は西側に著しい偏りを見せており、ユニットの範囲はC列よりもさらに西側の未調査区域に延びているものと予想される。

ユニット1では、中央部に位置する配石遺構を中心として、合計1358点の遺物が出土した⁷⁾。その内訳は、石器が217点、剥片が862点、礫・碎片が279点となっている。石器の器種別の内訳は、細石刃122点、細石刃石核4点、同原形3点、同打面形成削片3点、稜付削片2点、細石刃石核打面再生剥片1点、細石刃剥離作業面再生剥片1点、細石刃石核調整削片1点、槍先形尖頭器4点⁸⁾、搔器8点、削器6点、細部調整削片21点、石刃26点、石核11点、礫器3点、打製石斧1点である。

2. 遺構

ユニット1では、遺物の集中範囲を取り囲むように、C-8~11区・B-9・10区の計6グリッドを中心とする範囲で配石遺構1基が検出された(第1号配石)。特にC-10~11区南側で、約50点の比較的大型の礫が円形状に配置されており、この部分が配石遺構の中核と考えられる。なお、詳細については本章第3節を参照されたい。

3. 遺物の分布状態 (第38図)

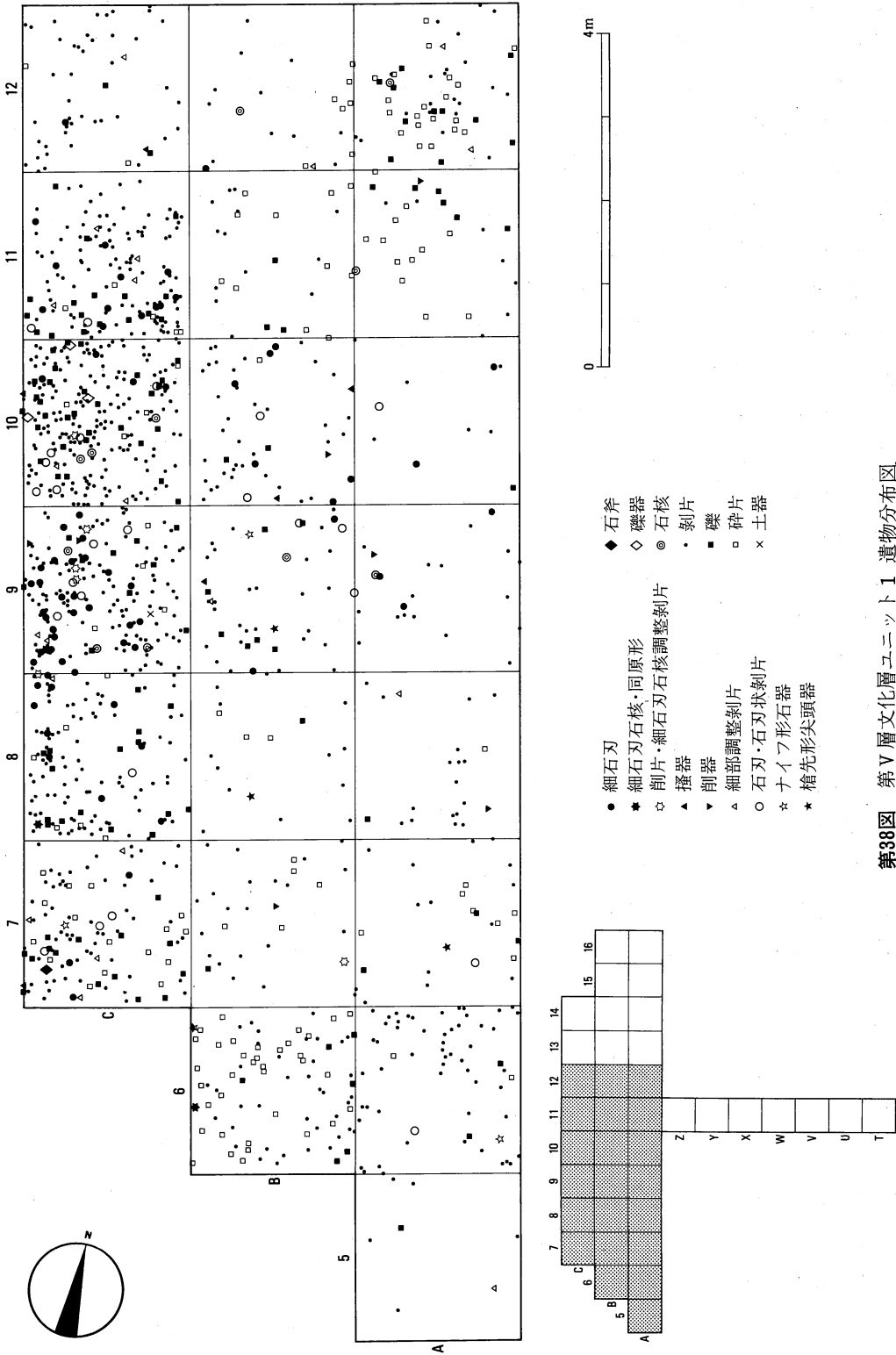
第V層から出土した1296点の平面分布状態は第38図に示す通りである⁹⁾。巨視的に見るとC-7~11区・B-9~10区と、A・B-6区に遺物の集中が認められる。前者は第1号配石のほぼ中央部に当たり、石器には細石刃・細石刃石核・同原形・同打面形成削片・稜付削片・細石刃剥離作業面再生剥片・搔器・削器・細部調整削片・石刃・礫器・打製石斧が含まれている。A・B-6区では、大部分が剥片と碎片であり、石器は細石刃石核原形と石刃の2点のみである。なお、A-11~12区にもややまとまった分布が認められるが、その範囲が第VI層文化層ユニット1と重なることから、それらは本来第VI層文化層に帰属するものと考えられる。

以下、石器器種、剥片、礫・碎片の順に分布状態を記述する。なお、各項に示す出土総数は第V層出土の数であるが、細石刃については第VI層出土の1点を含めた数となっている。

a. 細石刃・細石刃石核・同原形・打面形成削片・稜付削片・細石刃石核調整削片

細石刃およびその関係資料は、第1次調査で16点、第2次調査で65点の計81点が出土した。その内訳は、細石刃72点、細石刃石核1点、同原形2点、同打面形成削片3点、稜付削片2点、

第2節 遺物の分布とユニット



第38図 第V層文化層ユニット1 遺物分布図

細石刃剥離作業面再生剥片1点となっている。細石刃はC-10~11区南側に位置する第1号配石を取り囲むように分布しており、B-10区で6点、C-9区で28点、C-11区で12点出土したほか、C-7~12区、B-8~12区、A-9・10区の13グリッドから計72点が出土した。細石刃石核・打面形成剥片等の関係資料は、C-9区で4点、C-8・10区で各1点出土しており、細石刃と同様に第1号配石の中心部に集中する傾向が認められた。その他、B-6区から細石刃石核原形1点、B-7区から細石刃剥離作業面再生剥片1点が出土した。

b. 搔器・削器・細部調整剥片・礫器・打製石斧

搔器はB-10区で2点、B-9区・C-7・10・12区で各1点が出土しており、やや散漫ではあるが第1号配石を取り囲むように分布する状況が認められた。削器はA-8・9・11区、B-7・10区で各1点、C-9区で2点出土した。細部調整剥片はユニット1のほぼ全域に分布しているが、第1号配石の範囲に比較的集中しており、C-7区で4点、C-8区で1点、C-9区で2点、C-10区で2点、C-11区で4点、B-9区で1点出土した。礫器3点はC-10区、打製石斧1点はC-7区から出土した。礫器3点は、C-10区からC-11区にかけて大型の礫を環状に配置した配石の内部から検出されたものであり、打製石斧は、C-7区南西部において、細石刃・細部調整剥片・石刃などと共に出土した。

c. 石刃・剥片・石核

石刃および石刃状剥片は、C-7~11区・B-9・10区の7グリッドから計22点が出土し、遺物が最も密集するユニットの中心部分に集中して分布する傾向が認められた。剥片は第1次調査で306点、第2次調査で586点の計892点が出土した。全グリッドに分布しているが、ユニット西側のC-7~11区周辺に著しい集中が認められる。特に第1号配石の中央部にあたるC-9・10区から約300点の剥片が密集して出土しており、配石を中心としたこの地点で、剥片剥離作業が頻繁に行われていたことが窺える。その他、A・B-6区にも若干の集中が認められる。石核は9~12区の範囲から計11点が出土したが、そのうち6点は第1号配石の中央部にあたるC-9・10区から出土し、その他の5点はユニットの周辺部から検出された。

d. 礫・碎片

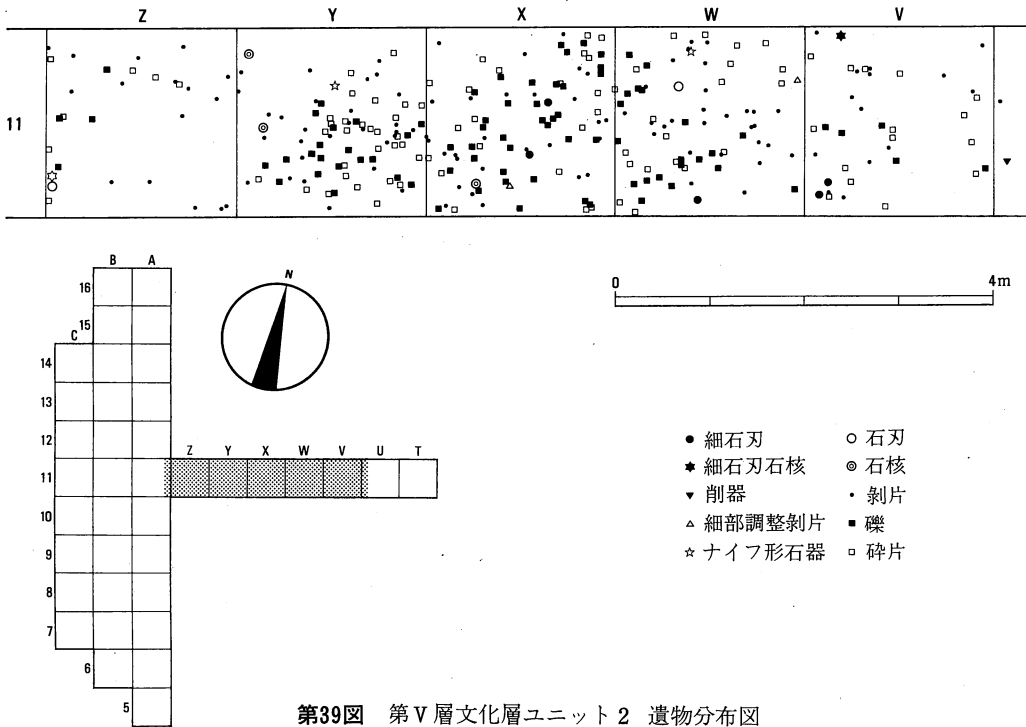
礫・碎片は、第1次調査で150点、第2次調査で129点の計279点が出土した。礫・碎片は、全体としてユニットの西側に分布が濃密で、東側では希薄である。C-7~11区およびB-9・10区に見られる礫の集中は、第1号配石の構成礫であり、ユニットの外郭を形成する遺構として捉えられる。これに対してB-6区にも集中が認められるが、そのほとんどは被熱した碎片であり、第1号配石とは直接関連のない、別単位の集中として理解される。(橘)

(3) ユニット2

1. 位置と規模(第39図)

ユニット2は、U-11区西側からZ-11区にかけて広がる比較的小さいユニットで、面積は

第2節 遺物の分布とユニット



第39図 第Ⅶ層文化層ユニット2 遺物分布図

現状で約20㎡である。ただし、第2次調査ではその一部を明らかにしたにすぎず、遺物の分布範囲は調査区域の南北の10列・12列にもさらに延びている筈である。ユニット2では、中央部から第1号礫群が検出され、合計315点の遺物が出土した¹⁰⁾。その内訳は、石器が21点、剥片が116点、礫・碎片が178点となっている。

2. 遺構

ユニットのほぼ中央部にあたるV～Y-11区の範囲で、礫群1基が検出された(第1号礫群)。礫群は約170点の礫・碎片から構成され、特にX-11区では約60点の礫・碎片が集中して出土した。詳細については本章第3節を参照されたい。

3. 遺物の分布状態(第39図)

第Ⅶ層から出土した309点の平面分布状態は第39図に示す通りである。ユニット2は、今回の調査でその一部を明らかにしたにすぎないが、遺物全体としては第1号礫群に重複するようにV～Y-11区に集中して分布している。Z-11区では遺物の分布がやや散漫であり、また東側に向かって地形が急傾斜するT・U-11区では遺物が希薄となる。

a. 細石刃および関係資料

細石刃およびその関係資料は計7点出土した。その内訳は、細石刃が5点、細石刃石核が1点、稜付削片1点である。細石刃はV-11区で2点、W-11区で1点、X-11区で2点出土し、第1号礫群の範囲に比較的まとまって分布している。細石刃石核はV-11区で1点、稜付削片

はZ-11区で1点出土した。

b. 削器・細部調整剥片

U-11区から削器が1点、W・X-11区から細部調整剥片が各1点出土した。

c. 石刃・剥片・石核

石刃は2点、剥片は116点、石核は3点出土した。石刃はW-11区・Z-11区で各1点、石核はX-11区で1点、Y-11区で2点出土した。剥片はユニット全域から出土しており、特に第1号礫群に重複する範囲にまとまった分布を示す。W-11区の28点、X-11区の27点、Y-11区の30点などである。

d. 礫・碎片

礫・碎片は計178点出土した。その内訳は礫が86点、碎片が92点である。礫・碎片はV-11区からX-11区にかけて分布しているが、W-11区西側からY-11区にかけて分布が濃密であり、この範囲が第1号礫群の中心部と考えられる。V-11区では分布がやや散漫であり、西側のZ-11区では希薄となる。(橘)

第3節 礫群・配石

第V層文化層に伴う遺構として、礫群・配石⁰⁰各1基が検出された。第1号礫群はユニット2のほぼ中央部に位置し、X-11区を中心として直径約6mの規模を持つ。第1号配石は、C-10・11区の集中地点を中心として、比較的広い範囲に分布している。以下、各遺構について、規模と形状ならびに礫の接合関係、礫の性状を分析する。

(1) 第1号礫群 (第40図)

第1号礫群は、V-11区～Z-11区に広がるユニット2のほぼ中央部から検出された⁰²。礫はV-11区～Y-11区に特に集中しており、その範囲は発掘区域の外側の南北にさらに広がるものと思われる。

1. 規模と形状 (第40図)

規模は、現状で最大径が約7m、面積約12㎡である。本礫群はX-11区に中心をもつが、周辺部はさらに未調査区域に広がっていると考えられ、今回の調査では全体の形状は把握できなかった。なお、垂直分布図に見られる通り、礫は地形の傾斜に沿って、ほぼ同レベルで分布している。検出された礫の総数は166点で、総重量14326.32g、平均重量約86.30gである。

2. 礫の分析

a. 完形礫と破碎礫 (第42図)

本礫群を構成する礫166点のうち、140点が破碎した礫であり、完形礫は26点(15.7%)にす

第3節 礫群・配石

ぎない。完形礫のうち明らかに被熱しているものが8点ある。残りは被熱の痕跡が明らかでない。完形礫は、W-11区西側からX-11区東側を中心とするまとまりと、Y-11区東南部を中心とするまとまりをそれぞれ取り囲むように位置している。石質別の割合を見ると、完形礫28点のうち20点(76.9%)がチャート以外の礫で占められており、安山岩が15点含まれている。一方、破碎礫は、チャートが88点(62.9%)を占めている(第42図)。

b. 焼け礫(第41図)

構成礫166点のうち49点(29.5%)に、被熱による表面の赤色変化³⁾が認められた。そのうち完形礫は8点、破碎礫は41点である。第41図に見られるように、焼け礫はX-11区を中心として礫群全体の範囲に分布している。被熱による赤色変化は肉眼で判別しており、不明確な場合は便宜的にすべて被熱していない礫に含めているが、チャートの碎片には、被熱により破碎したものが多くと推定され、砂岩などに比べチャートは赤色変化しにくい性質を持つことも考慮すると、本来の被熱礫の割合はさらに高いものと考えられる。また、表面の風化が著しい安山岩等の礫も、判別困難なものが多く、被熱していない礫として扱った。なお、17点(10.2%)の礫にタール状の黒色付着物が認められた。本礫群の範囲から炭化物は検出されていない。

c. 重量(第41図・第43図)

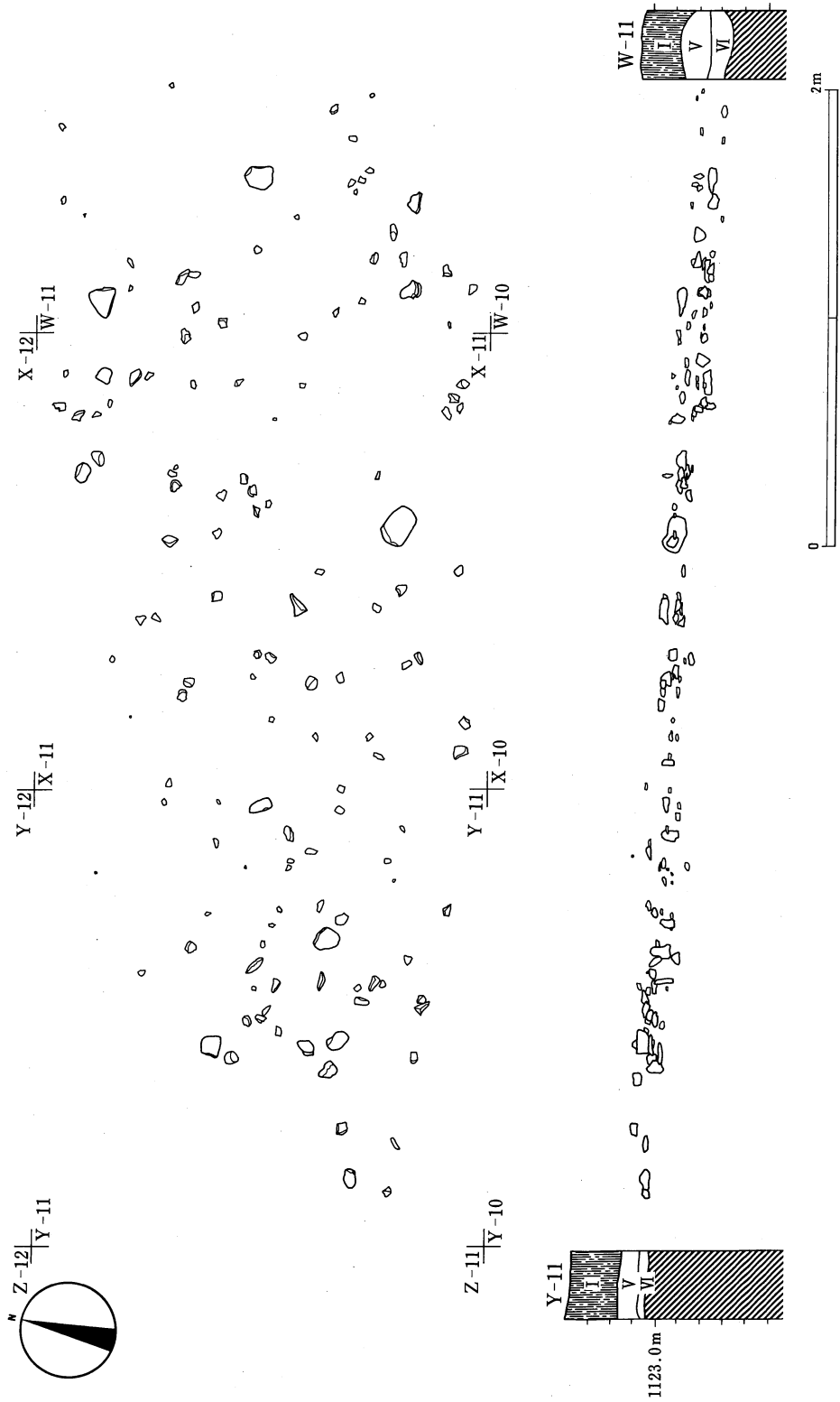
礫の重量別の頻度は第43図に示した通りである。完形礫・破碎礫ともに200g以下の礫が大部分を占めている。完形礫には重い個体が多く、500g以上が5点含まれている。なかでも967.40g(安山岩)と2120.70g(砂岩)の2点が際立って大きい。一方、破碎礫では、140点のうち126点(90%)が100g以下であり、そのうち2点は10g以下の微細な破片である。破碎礫の中にも921.61gを計る大形の礫(安山岩)が1点ある。大形の礫はW-11区西側からX-11区東側を中心とするまとまりと、Y-11区東南部を中心とするまとまりのそれぞれの周辺部に分布している(第41図)。礫の総重量は14326.32g、平均重量は約86.30gである。完形礫の総重量は7911.00g、平均重量は約304.27g、破碎礫はそれぞれ6415.32g・約45.82gである。

d. 石質(第42図)

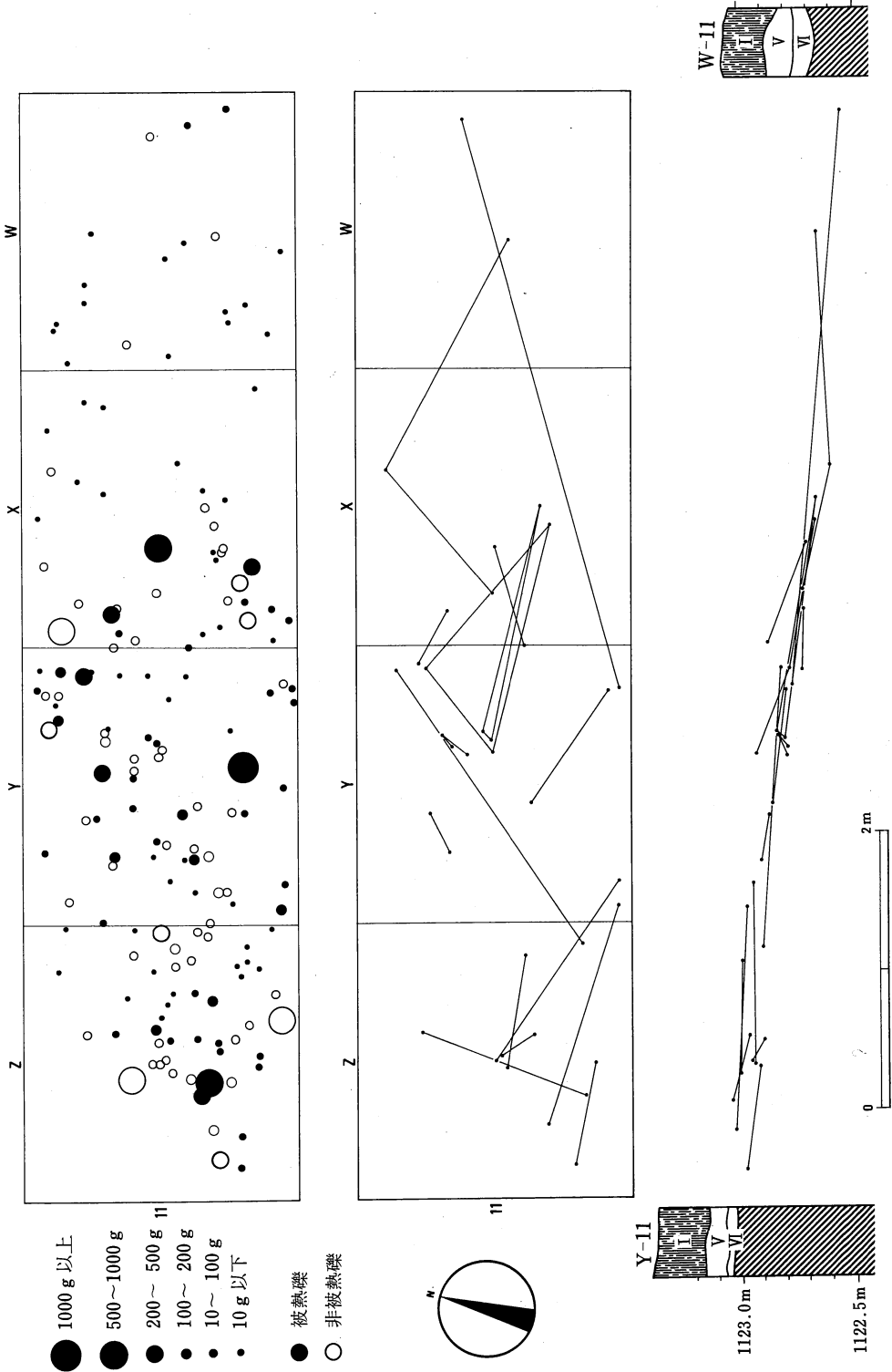
礫の石質とその比率は第42図に示した通りである。全体の約60%をチャートが占め、完形礫・破碎礫を別々に見ると、完形礫ではチャートは25%に満たず、安山岩が約58%を占めている。「その他」の中には、流紋岩と礫岩が1点ずつ含まれている。一方、破碎礫ではチャートが65%を占めている。これは加熱等などによりチャートが割れ易いことを示す存在であろう。

3. 礫の接合(第41図)

第41図に礫の接合関係を示した。破碎礫140点のうち38点から17例の接合関係が確認された。破碎礫の点数に対する接合した点数の比率(接合率)は27.1%である。礫群全体にわたって接合関係が認められるが、W-11区東側からX-11区西側にかけてのまとまりと、Y-11区東南部を中心とするまとまりの内部で接合するケースが多い。接合によって完形に還元された例は

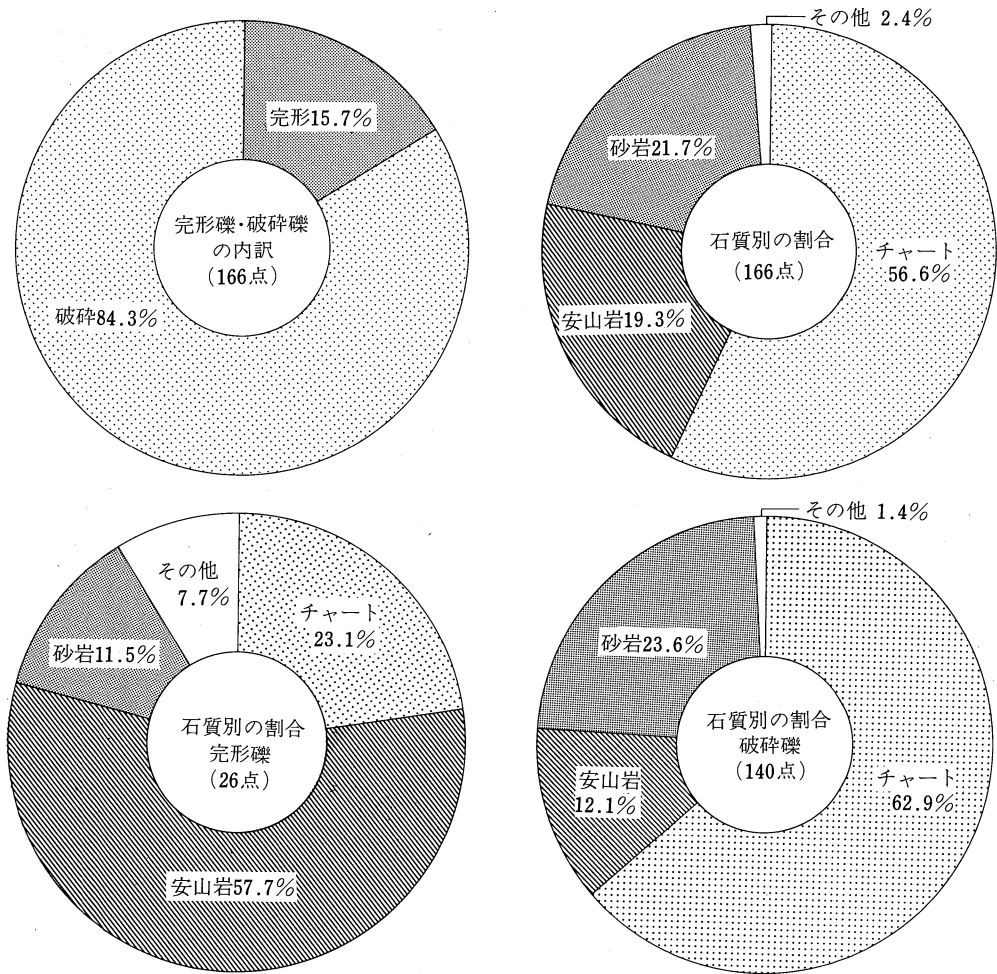


第40图 第V層文化層第1号磔群

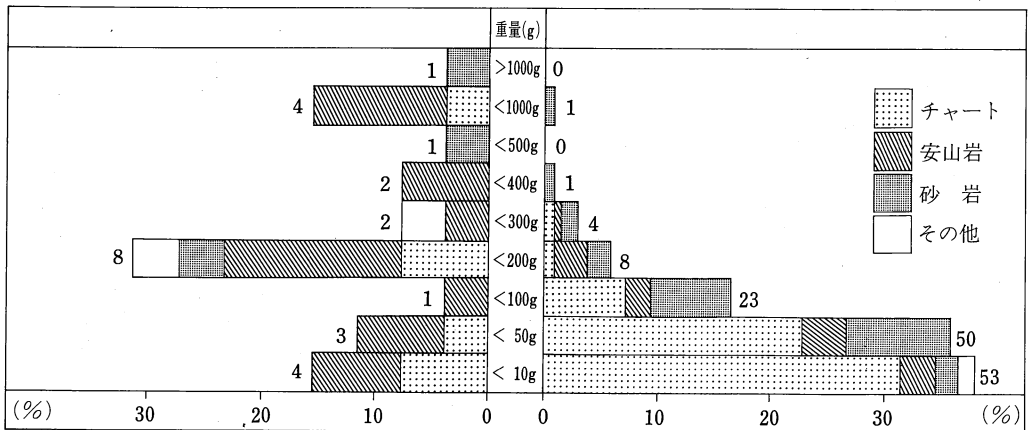


第41図 第1号礫群 構成礫の重量・被熱・接合関係

第VI章 第V層文化層



第42図 第1号礫群 構成礫の内訳



第43図 第1号礫群 構成礫の重量別内訳

第3節 礫群・配石

ない。また、接合前と後での重量の変化を比較したが、ほとんど変化が見られない。なお、当該文化層では、ユニット1において配石1基が検出されているが、本礫群との礫の接合関係は見られない。

(2) 第1号配石 (第44図)

第1号配石は、A-5~12区・B-6~12区・C-7~12区に広がるユニット1の範囲とほぼ重なるように検出された。礫はC-10~11区を中心に分布している⁹⁰。南側・西側は未調査のため全体の形状は明らかでないが、C-8・9区で検出された細石刃とその関係資料の集中地点を取り囲むように礫が配置されている。

1. 規模と形状 (第44図)

第1号配石は、C-8~11区・B-9・10区の合計6グリッドの範囲を中心として検出された。特にC-10・11区に比較的大型の礫の集中が認められ、C-8・9区にかけて検出された細石刃およびその関係資料の集中地点を取り囲むように、大型の礫が直径約8mの半円形状に配置されている点が注意される(第44図)。その他、B-6区にも礫の集中箇所が見られるが、配石を構成する礫が概して大型かつ完形で被熱していないのに対して、この地点の礫はほとんどが破碎し被熱しているものが多いことから判断すると、これを第1号配石の範囲に含めることには疑問がある。南側・西側が未調査であり、一概には言えないが、配石とは別個の遺構を構成する可能性がある。一方、A・B-11区の周辺にも若干の礫の集中が認められるが、これは第VI層文化層に属する第1号礫群の範囲と重なっており、その構成礫が一部第V層に浮上したものと見られる。従って、これについても第1号配石から除外すべきものである。以上の点を考慮して、配石の範囲はC-7~11区・B-7~10区にまたがる約36㎡として捉え、以下、礫の総数等を示す場合は便宜的に該当する9グリッドから集計する。

第1号配石を構成する礫の総数は、現状で145点である。礫の分布密度は1㎡あたり約4個と比較的散漫である。総重量は9850.63g、平均重量約67.9gである。

2. 礫の分析

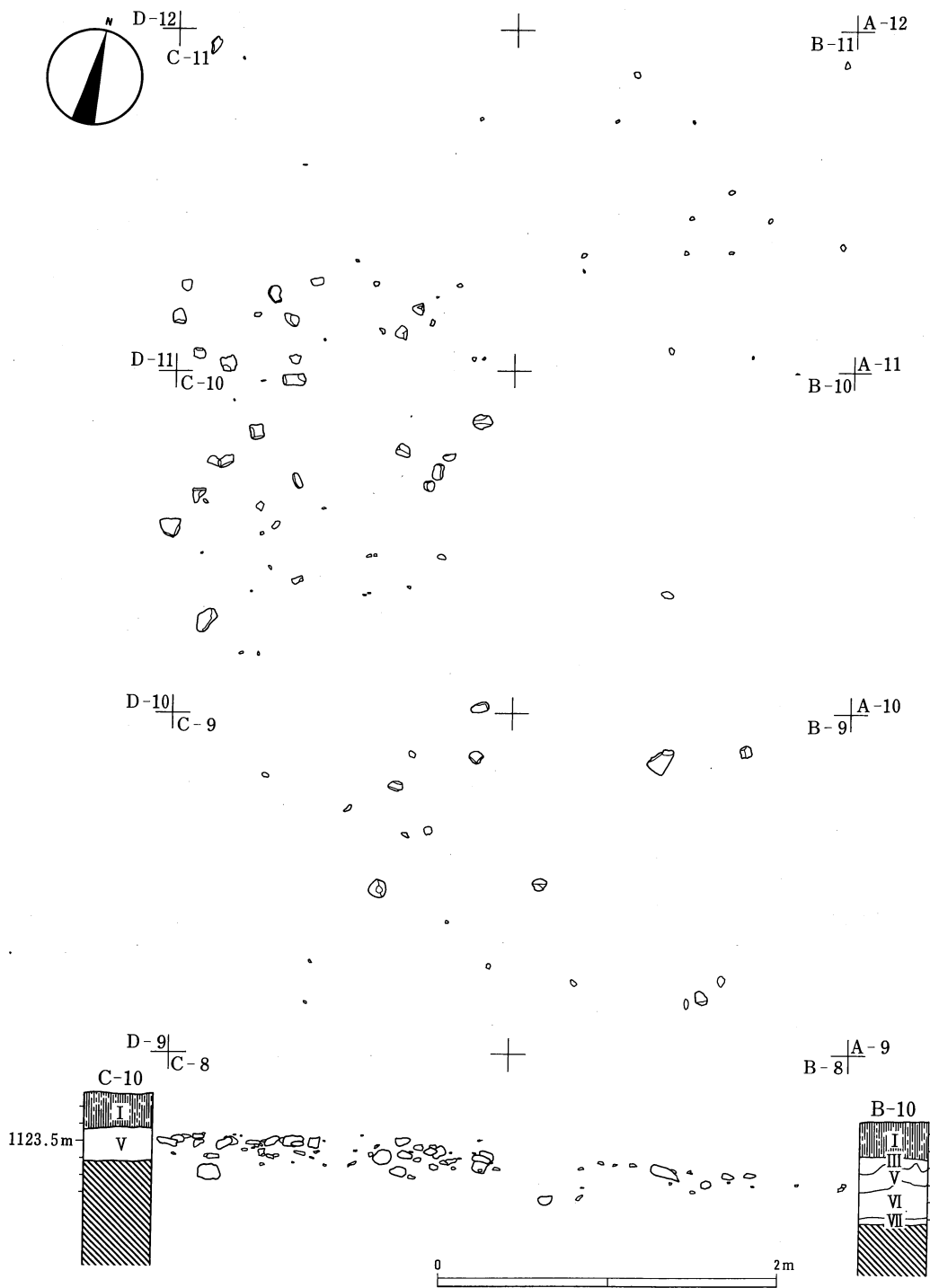
a. 完形礫と破碎礫 (第46図)

配石を構成する礫145点のうち完形礫は47点(32.4%)を占めており、残りは破碎礫である。第1号礫群に比べて完形礫の割合が高い点に特徴がある。完形礫は主としてC-8・9区の細石刃とその関係資料の集中地点を取り囲むように分布しており、特にC-10・11区の集中箇所に多数存在する。また、C-7区にも比較的多い。石質別の比率を示すと、完形礫では安山岩が55%以上を占めるほか、チャート以外の礫が74.5%を占めている。一方、破碎礫では、チャートが約45%、安山岩が約25%を占めている。

b. 焼け礫 (第45図)

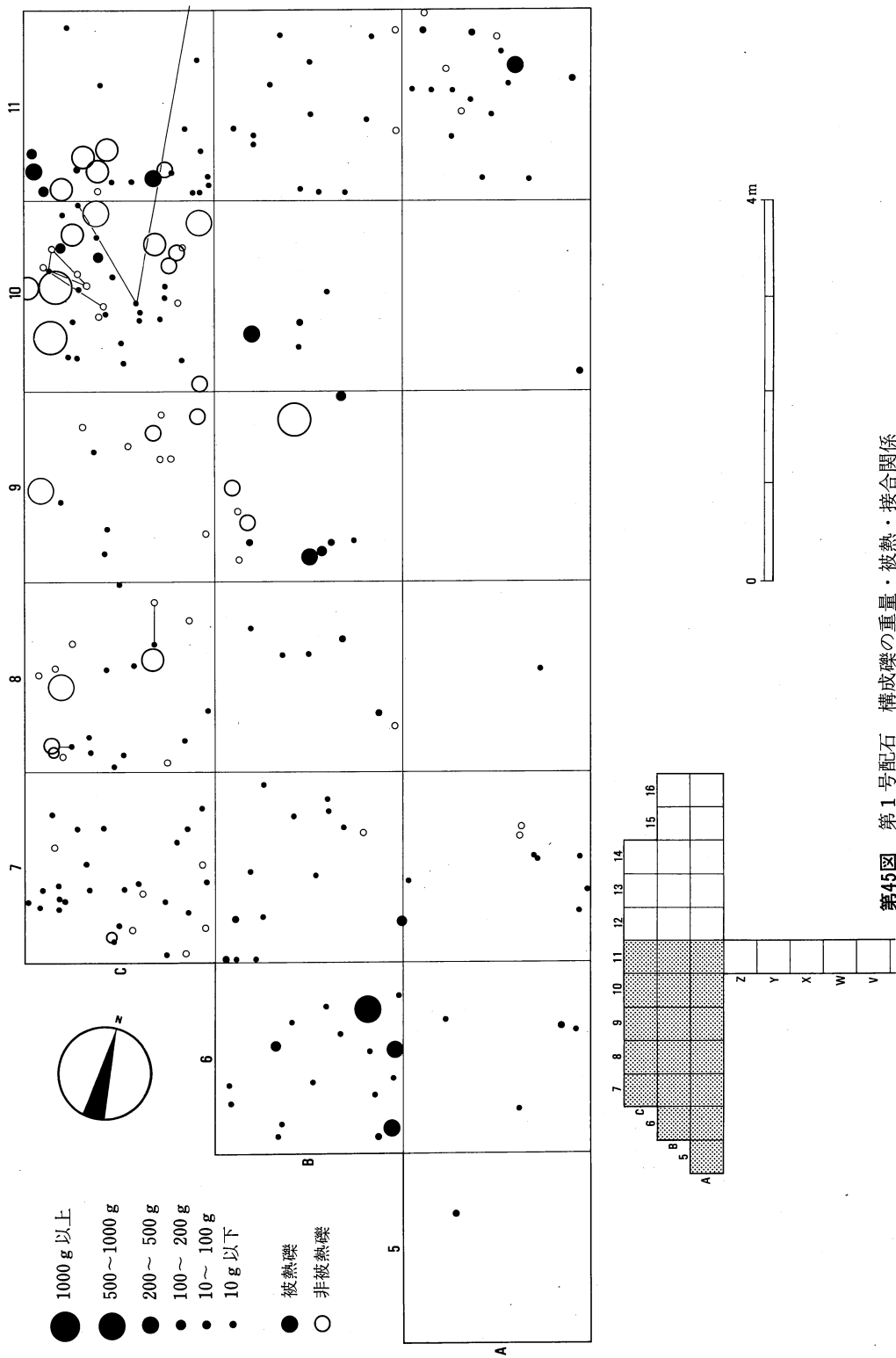
構成礫145点のうち17点(11.7%)に被熱による表面の赤色変化が認められる。その内訳は

第VI章 第V層文化層



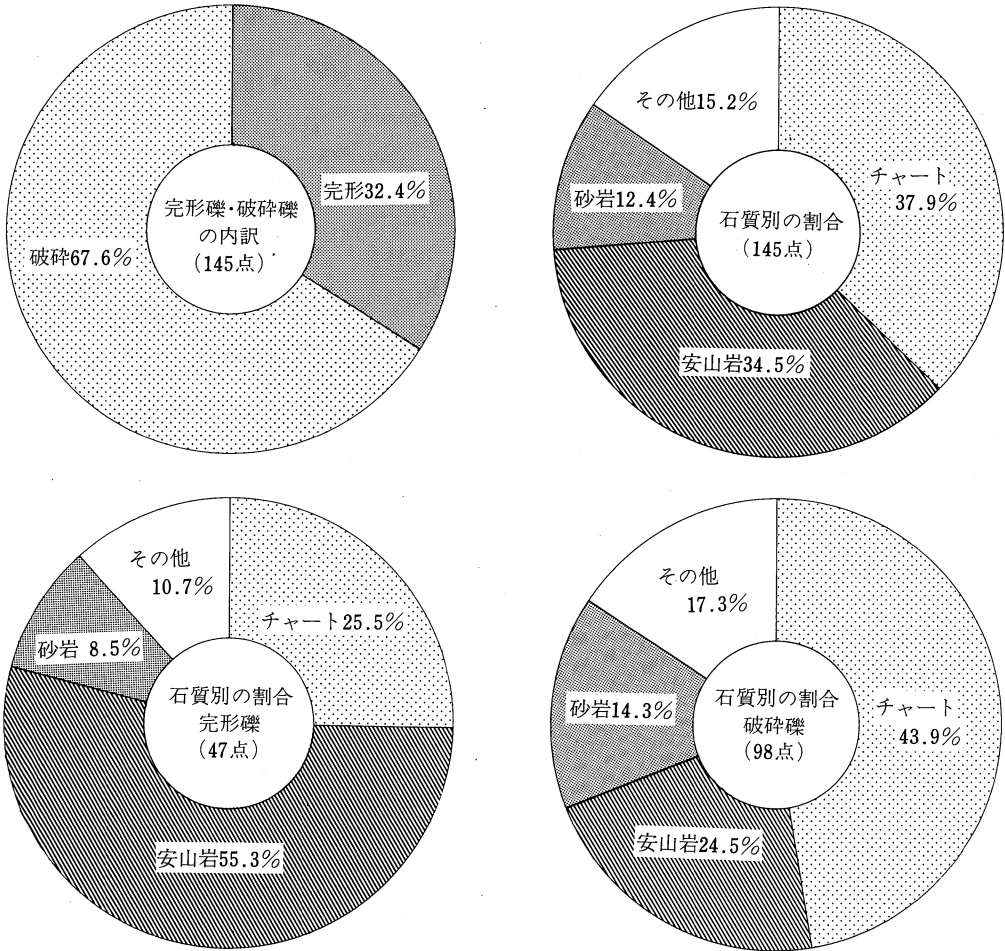
第44图 第V層文化層第1号配石

第3節 礫群・配石

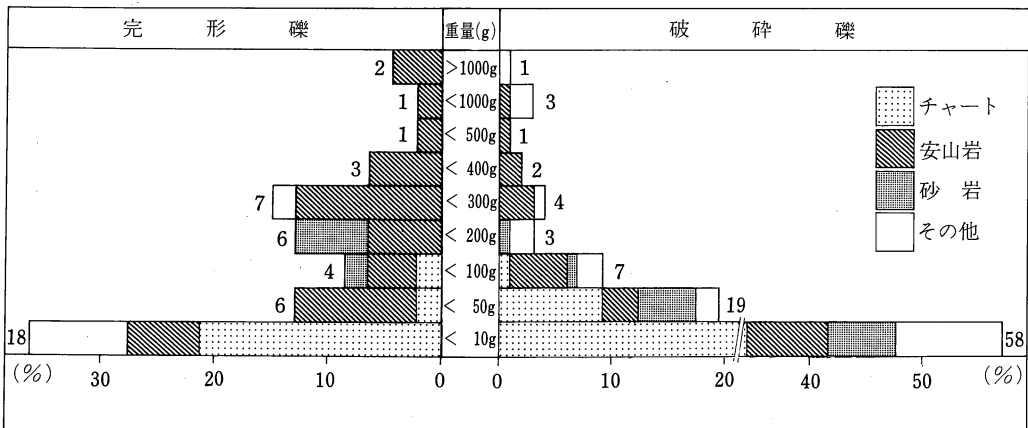


第45図 第1号配石 構成礫の重量・被熱・接合関係

第VI章 第V層文化層



第46図 第1号配石 構成礫の内訳



第47図 第1号配石 構成礫の重量別内訳

第3節 礫群・配石

完形礫が6点、破碎礫が11点である。焼け礫は配石遺構の周辺部に散在しており（第45図）、C-10・11区に集中して分布している。なお、タール状の黒色付着物が認められた礫は5点（0.2%）のみである。第1号礫群に比べて、被熱した礫や黒色付着物のある個体の割合が低い点が指摘される。配石の周辺から炭化物は検出されていない。

c. 重量（第45図・第47図）

第45図に示したように、重量が200gを越える比較的大型の礫は、主にC-8・9区で検出された細石刃とその関係資料の集中地点の周囲に分布しており、特にC-10・11区に著しい集中が認められる。完形礫には500g以上の礫が4点含まれ、1635.4g（安山岩）・1073.2g（同）の2点は特に重い。一方、破碎礫では98点中75点が50g以下の微細な碎片であるが、500g以上の礫を4点（安山岩3点・石質不明1点）含んでおり、うち1点は1147.8gである。構成礫全体の総重量は9850.63g、平均重量は約67.9g、完形礫の総重量は4879.67g・平均重量は約103.82g、破碎礫はそれぞれ4970.96g・約50.72gである。第1号礫群と比べて、構成礫の平均重量が重いこと、礫の総数に対して重量の大きな礫の占める割合の高いことが特徴として挙げられる。

d. 石質（第46図）

礫の石質別の内訳は、チャートが38.6%、安山岩が34.5%、砂岩が11.7%となっている（第46図）。チャート以外の礫の割合が比較的大きい。これを完形礫・破碎礫に分けてみると、完形礫ではチャートが25.5%に対して、安山岩が55.3%を占めている。一方、破碎礫では、チャートが約45%を占めており、安山岩は約25%にすぎない。「その他」の中には凝灰岩・頁岩が各2点、流紋岩が1点、石質不明の礫が含まれる。

3. 礫の接合（第45図）

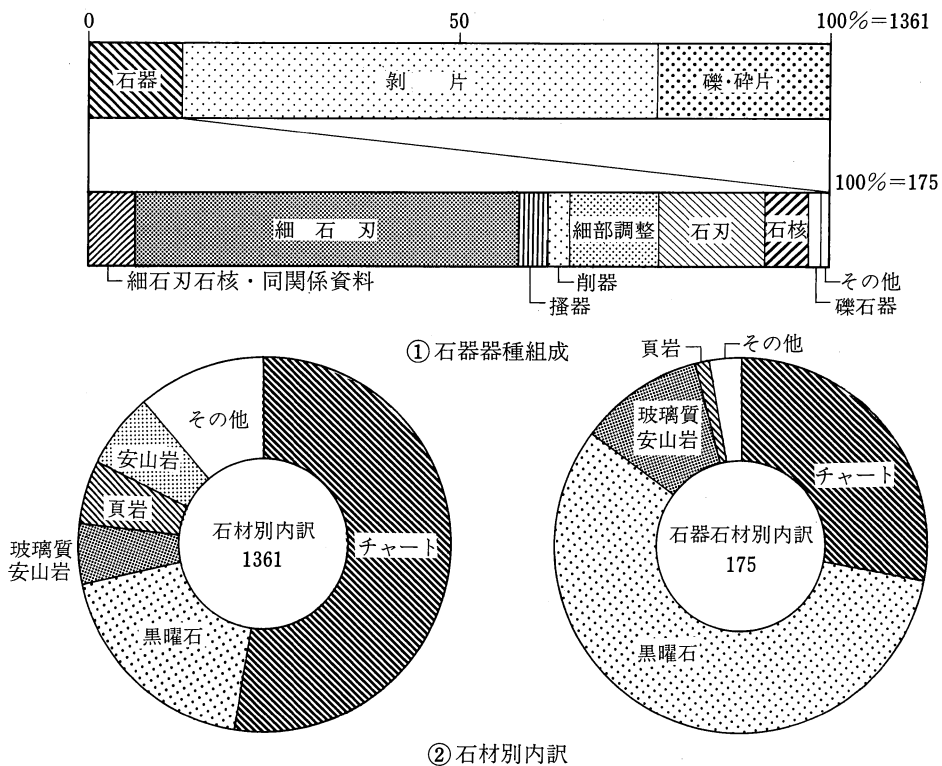
破碎礫145点のうち16点から7例の接合関係が確認された。接合率は11.0%である。第45図にその平面分布図を示した。遺構の範囲が未調査区域に広がる点を考慮しなければならないが、接合例の少ない点が注意される。第45図に見る限りでは、遺構全体にわたって接合関係が認められるわけではなく、直線距離で約7m離れた例が1例あるが、局部的に近接する碎片が接合したケースが多い。接合によって完形に復元された例はない。また、接合前と後での重量の変化はほとんどない。なお、本遺構と第1号礫群との間の礫の接合関係は認められなかった。

（上松）

第4節 石器

(1) 石器組成

第2次調査の結果、第V層文化層に該当する遺物として石器175点、剥片866点、礫および碎片319点の合計1360点が出土した。そのうち第V層から出土した遺物は石器135点、剥片865点、礫・碎片318点の計1318点であり、これに第I層出土および表面採集による細石刃石核2点・細石刃石核調整剥片1点・細石刃25点・槍先形尖頭器1点・搔器2点・削器2点・細部調整剥片3点・石刃2点・細部調整石刃1点を加えて総数を集計している。それらの内訳は第48図①の通りである。石器175点の内訳は、細石刃90点・細石刃石核4点・細石刃石核原形1点・細石刃石核打面形成削片3点・稜付削片3点・細石刃石核調整剥片1点・槍先形尖頭器1点・搔器7点・削器5点・細部調整剥片21点・石刃20点・石刃状剥片5点・礫器3点・打製石斧1点・石核10点である。石器の主体をなす器種は細石刃であり、第1次・第2次調査を通じてこれまでに合計165点が得られたほか、細石刃石核4点・同原形1点・同打面形成削片3点をはじめとして、細石刃生産の過程で生ずる関係資料も比較的まとまって出土している。また、細石刃に伴うその他の石器の器種組成も概ね明らかとなった。その他の石器の中で数量が多く主体的



第48図 第V層文化層の石器組成と石材別内訳

第4節 石器

な器種には、搔器・削器・細部調整剥片・石刃があるが、特に石刃または石刃状の縦長剥片を素材とした定型的な搔器・削器に特徴的なものがある。彫器は今のところ明確な共伴例が得られていない。そのほか、今回の調査で新たに礫器3点と打製石斧1点の共伴が確認された。なお、B-8区第V層から両面調整の槍先形尖頭器1点(102)が出土したが、現時点ではこれについても当該文化層に伴う石器として捉えている。第V層文化層では、今回2箇所のユニットの存在が確認されたが、第2節でも述べたように、石器のほとんどはユニット1の範囲内から出土したものである。

石器の石材別の内訳では、第48図②に示したように黒曜石・チャートが主に用いられており、他に玻璃質安山岩・頁岩・ホルンフェルス・安山岩・砂岩・濃飛流紋岩等が使用されている。第V層文化層出土の総資料の割合と比較すると、石器ではチャートの割合が低く、黒曜石の割合が大幅に増加しているが、これは石器の約半数を占める細石刃の多くが黒曜石製であることによるものである。

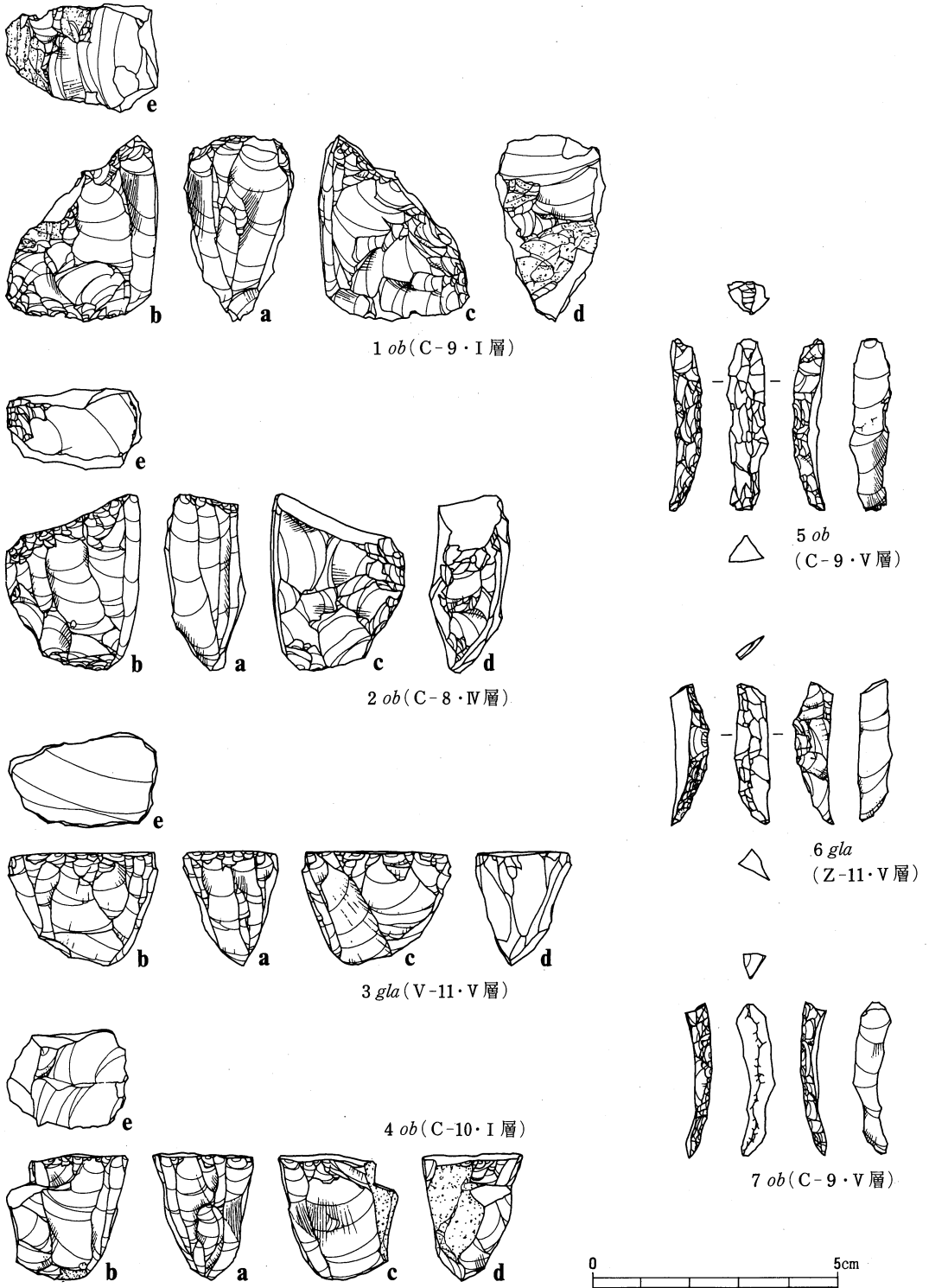
以下に第V層文化層出土の主要な石器170点を図示し、器種別に記述する。石器実測図には、第49図1から第71図170の通し番号を付してあり、番号に添えて石器の石質と出土地点・出土層位を併記した。本文中の石器番号はそれに該当する実測図の通し番号を示すものである。また、石器についての詳細なデータは石器一覧表1に示してある。(小林)

(2) 細石刃石核(1~4)

細石刃石核は4点出土した。1~3は全体が打面・細石刃剥離作業面・左側面・右側面の4面からなり、打面部の末端から作業面の下端にかけて、意図的に整形された稜線を有する楔形細石刃石核であるが、その製作工程に定型的な削片の剥離を伴わないものである。細石刃剥離は細長い打面の一端において、打面を徐々に後退するように行われるが、打面端部の細調整⁹⁵は行われていない。

1は黒曜石製の典型的な楔形細石刃石核である。打面は平坦な原礫面から素材の長軸方向に薄い剥片を剥離して作出されており、打面形成後、両側面の調整が行われている。b面側は下縁と打面から、c面側は主に打面からの調整が加えられている。打面の末端部と両側面の一部に、素材の原礫面が残る。作業面は長さ3.50cm、幅2.14cmで、打面角⁹⁶は約49°である。2は黒曜石製で、整った楔形の形状を持つ。打面は、両側面の調整に先立って準備されたネガティブな剥離面で、打面形成後、主に背縁・下縁と打面から側面が調整されている。c面の調整は比較的粗く、a面方向からの剥離が見られるが、いずれも打面形成後の剥離面である。b面側は、縁辺に稜を作出した後、打面から石核の側面を集中的に調整している。作業面は長さ3.62cm、幅1.53cmで、打面角は約68°である。3は玻璃質安山岩製の比較的小形の楔形細石刃石核である。素材のポジティブな剥離面を打面とし、この打面から断面形が楔形となるように両側面を調整している。作業面は長さ2.43cm、幅1.83cmで、打面角は約72°である。4は黒曜石の

第VI章 第V層文化層



第49図 第V層文化層の石器 細石刃石核・稜付削片

第4節 石器

角礫を断ち割った部厚い剥片を素材とし、その主剥離面を打面として両側面を調整している。背面（d面）とb面の下端に原礫面が残されているが、両側面が打面側から調整されている点と、下縁に稜を有し断面形が楔形をなす点は、3に共通する。作業面は長さ2.66cm、幅2.00cmで、打面角は約77°である。なお、1・4には、両側面が細石刃剥離作業面に接する部分などに、固定装置への着痕と見られる微細な稜線の潰れが観察される。

以上の4点の細石刃石核は、その形状と素材・細石刃石核原形の製作工程の特徴から、次の2類型に分類することができる。

① 打面・細石刃剥離作業面と左右二側面からなる楔形細石刃石核で、背縁から下縁にかけて稜を有する。打面は、両側面の調整に先立って準備された平坦な1面の剥離面であり、打面作出の後、断面形が楔形となるように、主に打面・背縁・下縁から両側面が調整される。細石刃剥離は、細長い打面の短辺の一端において、打面を徐々に後退するように行われる。1・2が該当する。

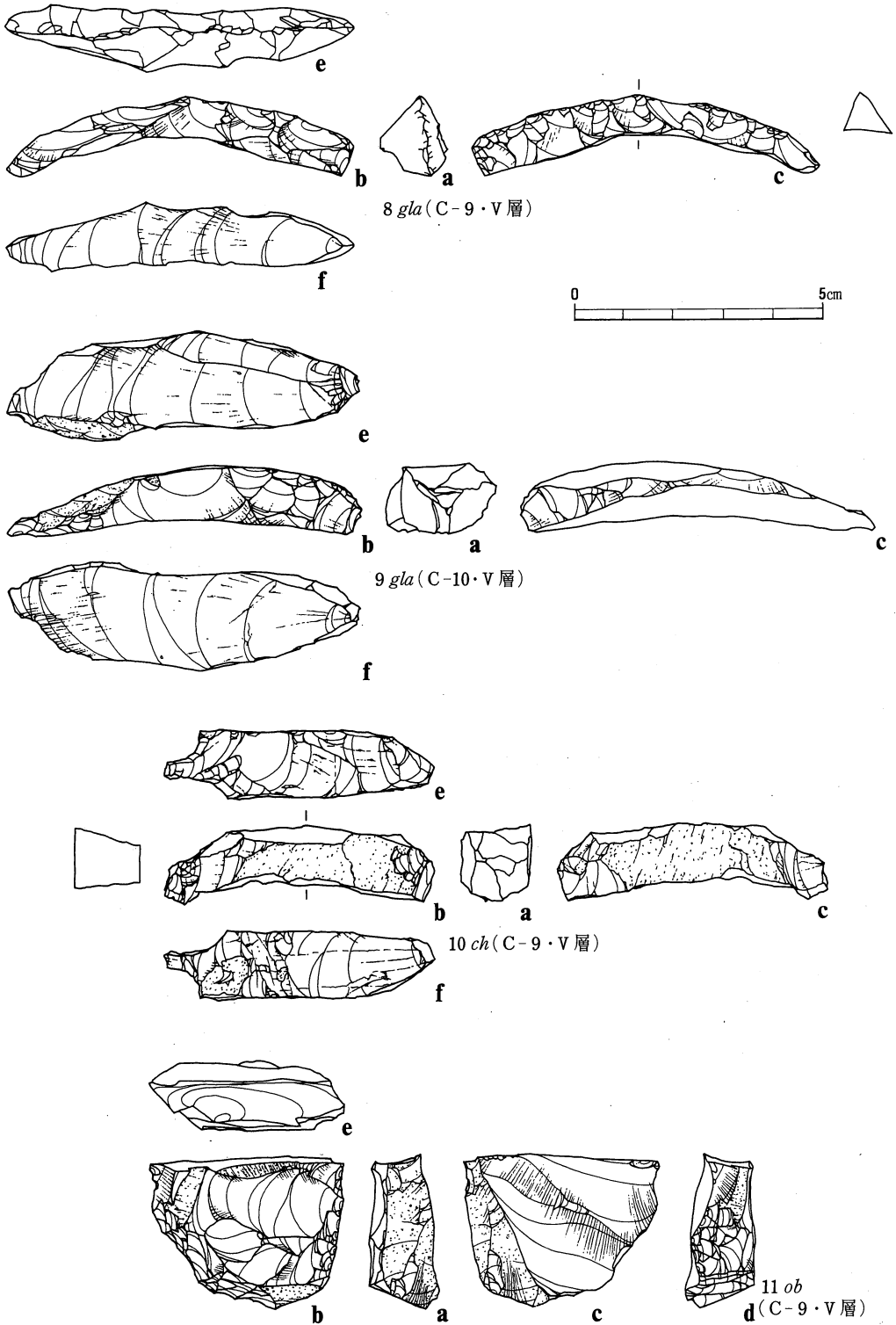
② ①と同様の4面から構成される比較的小型の楔形細石刃石核。部厚い剥片を素材とし、その平坦な剥離面を打面として、両側面を調整する。下縁部に稜を有するが、稜の形成を目的とした縁辺部からの調整は、部分的であるか行われない。細石刃剥離は細長い打面の短辺の一端で行われる。3・4が該当する。（荻野）

(3) 細石刃石核原形 (11)

11は細石刃石核の原形または素材と考えられる。黒曜石の角礫から剥がされた部厚い剥片を素材とし、その表面に調整を加えて板状に整形したものである。打面に相当するe面はb面調整後の折れ面、細石刃剥離作業面に相当するa面は原礫面、c面は素材の主剥離面である。b面の調整は、a面を打面として素材の厚みを一定に調整した後、稜を作るように背面・下縁を調整している。（荻野）

(4) 打面形成削片 (8～10)

打面形成削片⁹⁾は3点出土した。8は両面調整素材の縁辺部から最初に剥離された、素材の縦割りの第一段階に生ずる稜付きの打面形成削片である。玻璃質安山岩製で、上縁に入念に調整された素材の稜を残し、打点の直上に尖った素材の先端がある。素材の調整はc面側が細かく、b面側は比較的粗い。9は削片剥離が2回以上にわたって行われた場合の第二打目以後に生ずるスキー状スポールである。玻璃質安山岩製で、打点側に両面調整素材の稜を留めている。上面には2面の削片剥離面が見られる。e面を打面とした両側面の再調整は行われていない。素材の調整は比較的粗く、上方・側方からの剥離面で構成される。10は断面形が台形状を呈するチャート製の縦長剥片で、打面形成削片の可能性もある。両側面は節理に沿って分割された平坦面であり、長軸上の二方向から部分的に調整が加えられている。上面の剥離はやや不規則であるが、先端・末端方向からの二方向の剥離面から構成されている。（荻野）



第50図 第V層文化層の石器 打面形成削片・細石刃石核原形

第4節 石器

(5) 稜付削片 (5～7)

稜付削片は3点出土した。5～7は両面調整素材の断面形が楔形をなす細石刃石核原形から、細石刃剥離の最初の一打で剥ぎ取られた稜付削片である。5は黒曜石製である。完形で、長さ3.47cm、幅0.83cm、厚さ0.71cmである。打面部は微細な剥離によって潰れており、打面形成削片にあるような稜は見られない。6は玻璃質安山岩製で、打面側を折断している。背面の中央に原形の鋭い稜を留めており、左右にこの稜から剥離された石核の整形面が見られる。現長は2.88cm、幅0.70cm、厚さ0.61cmである。7は黒曜石製で、打面側を折断している。現長は3.10cm、幅0.81cm、厚さ0.58cmである。(荻野)

(6) 細石刃 (12～101)

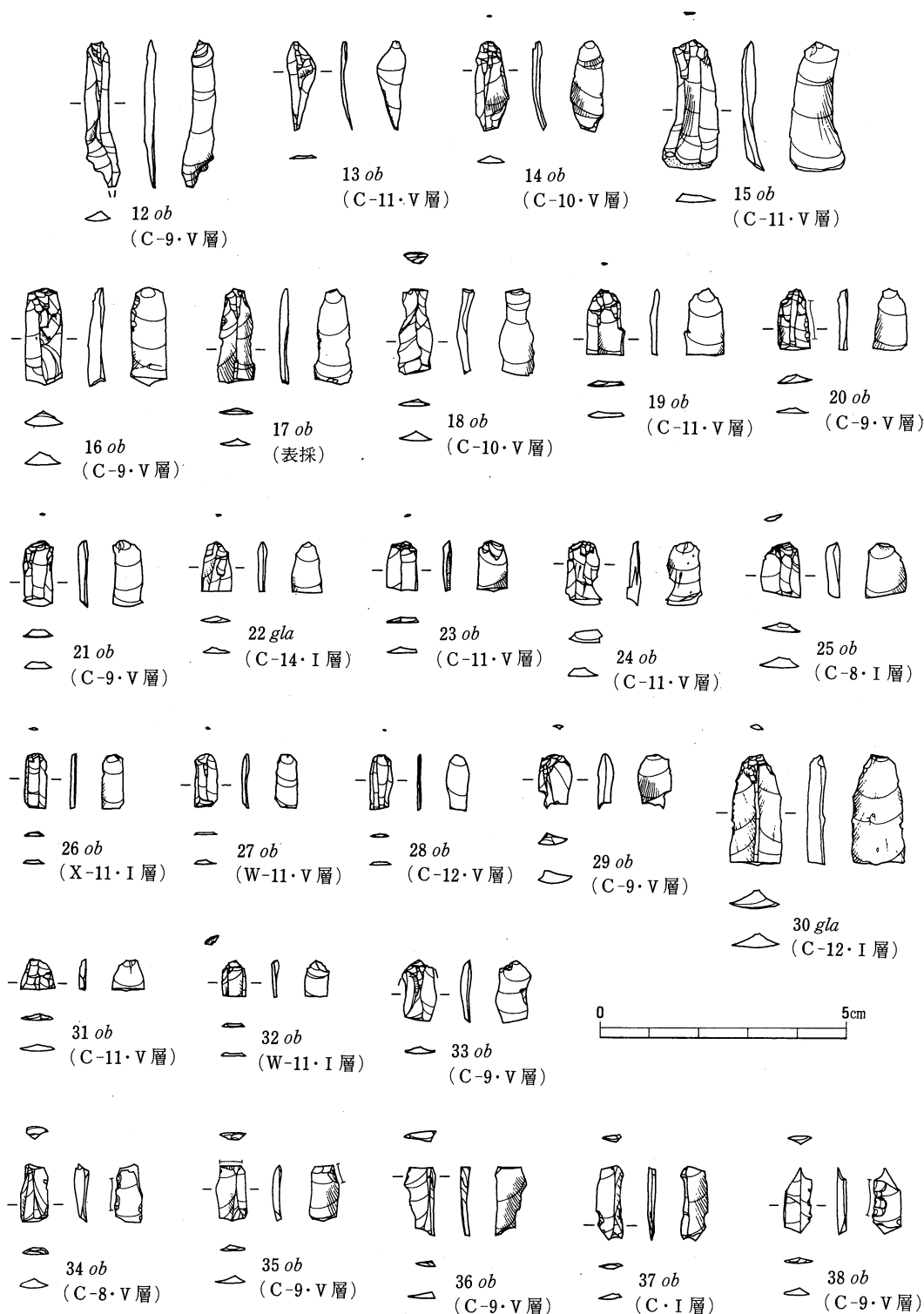
細石刃は90点出土した。石材別の内訳は、黒曜石製79点(87.8%)、玻璃質安山岩製10点(11.1%)、チャート製1点(1.1%)である。90点のうち完形例は4点、折断例は83点あり、その他破片が2点ある。折断された細石刃については、次のように分類基準を定めた。まず、第1次・第2次調査で出土した細石刃石核の作業面に残る細石刃剥離痕の大きさを計測し、その長幅比の平均値4.01を求めた。そして、個々の細石刃について幅×4.01の値を計算し、長さがその値の2/3未満の場合は、それぞれ頭部・中間部・末端部とし、2/3以上の場合は末端折断・頭部末端折断・頭部折断とした。なお、側縁部に細部調整が加えられたものは、実測図の該当する部位に矢印で表示してある。以下、各部位ごとに記述する。

完形(12～15) 完形は4点ある。14は末端を僅かに折損している。15の背面末端には原礫面が残る。14を除く3点の長さの平均は2.44cm、4点の幅・厚さの平均はそれぞれ0.74cm・0.16cmである。

頭部(16～33) 頭部は18点ある。ただし33は左右側辺と下端を折損しており、厳密には部位を確定できないが、便宜的にこれに含めている。細部調整が加えられた例が1点(20)ある。背面に石核調整面を残すものが3点(16・29・33)、原礫面を残すものが2点(23・26)ある。下端の折れ面の折断方向は、33を除く17点のうち、背面から腹面のもの(以下、背→腹とする)が11例、腹面から背面のもの(以下、腹→背とする)が6例であった。33を除く17点の長さ・幅の平均はそれぞれ1.28cm・0.66cm、18点の厚さの平均は0.17cmである。

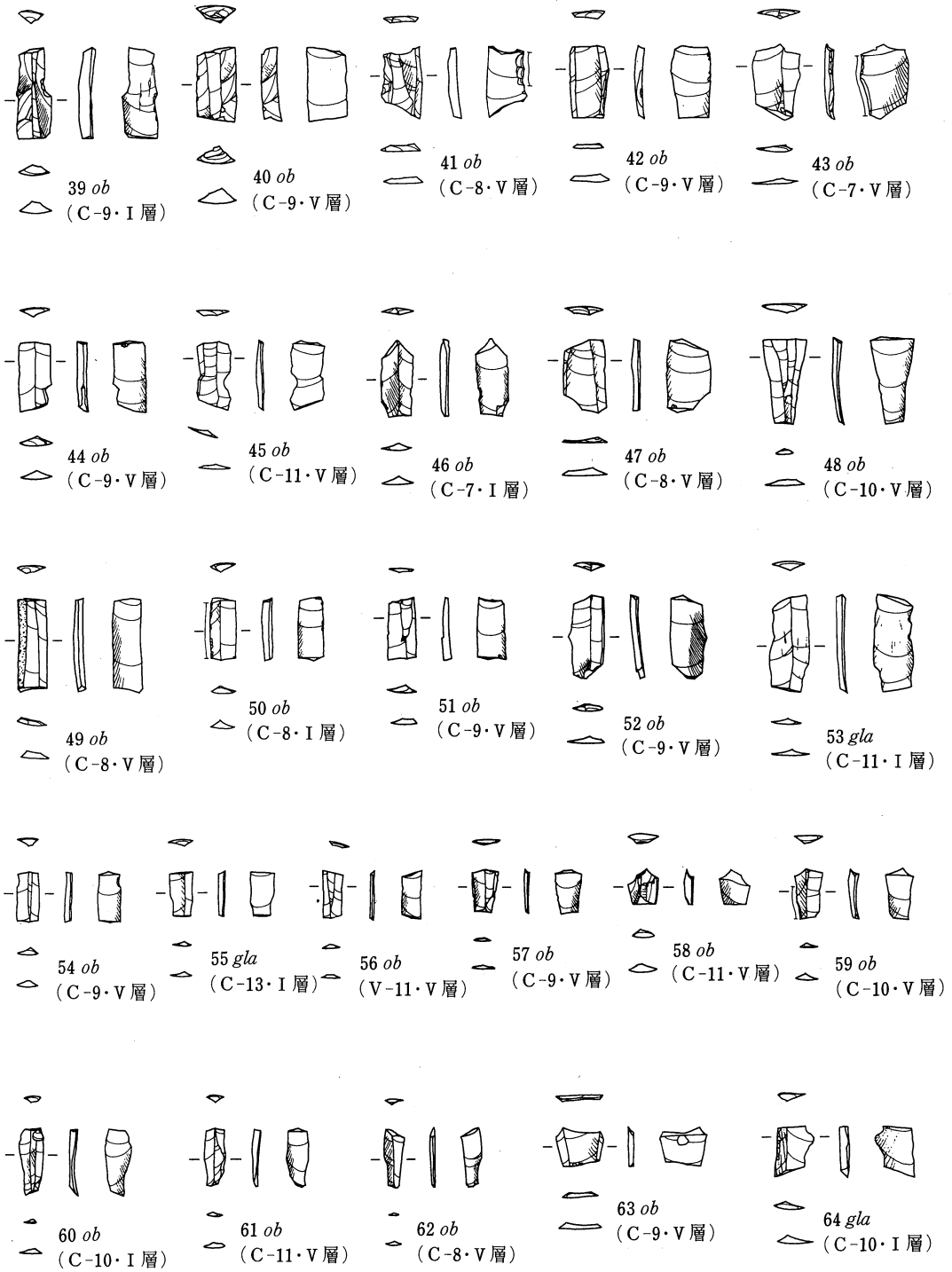
中間部(34～64) 中間部は31点あり、最も多く残存する部位で、全体の約34%を占めている。細部調整が加えられた例が7点(34・35・38・41・43・50・59)ある。背面に石核調整面を残すものが3点(36・39・58)、原礫面を残すものが1点(49)ある。上下の折れ面の折断方向は、上下とも背→腹が11例、上下とも腹→背が6例、上端が腹→背で下端が背→腹が2例、上端が背→腹で下端が腹→背が11例である。そのほか、下端は背→腹であるが、上端が不規則な折れ方をしているものが1例(46)見られた。31点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ1.28cm・0.64cm・0.16cmである。

第VI章 第V層文化層



第51図 第V層文化層の石器 細石刃

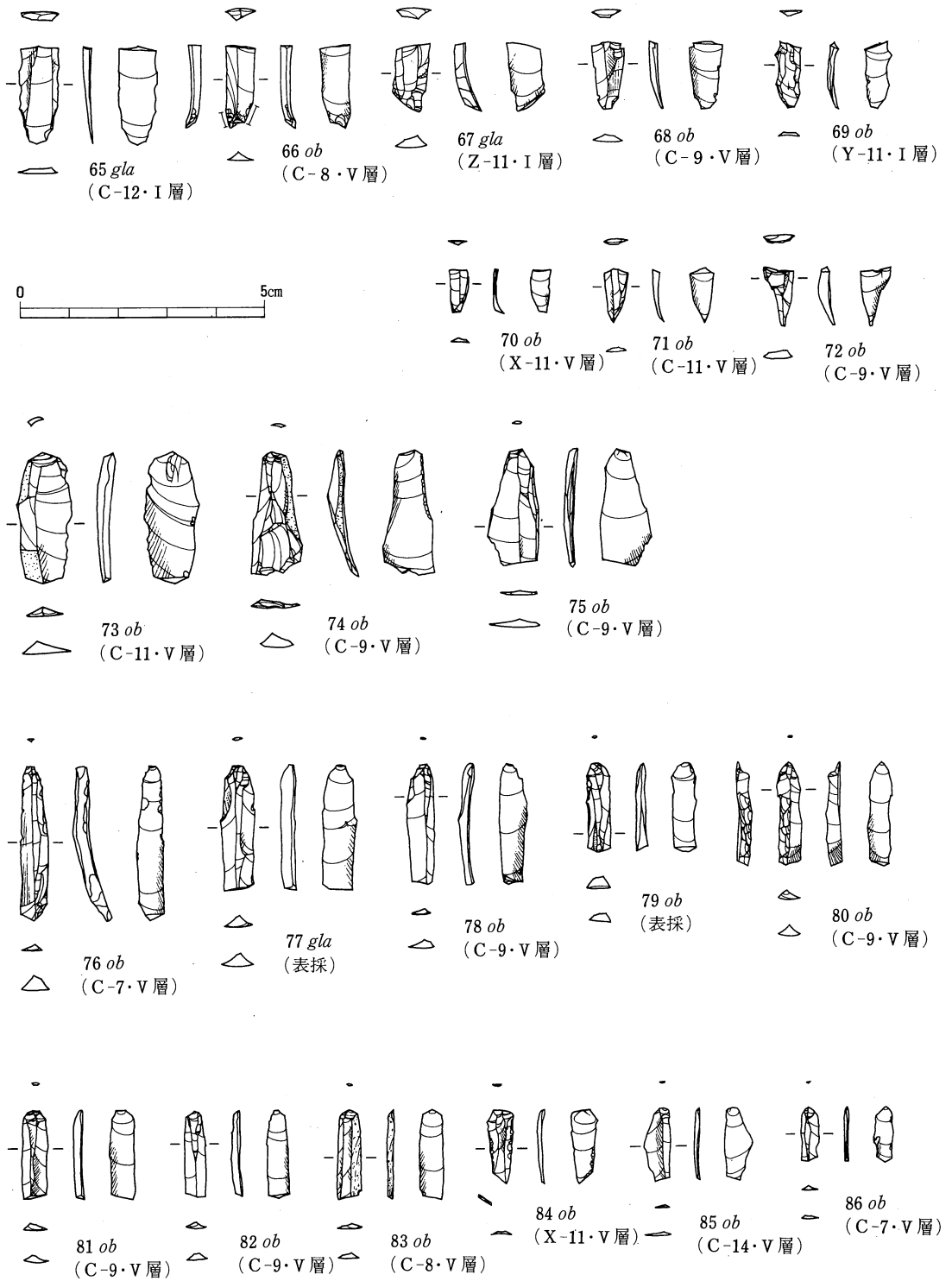
第4節 石器



0 5cm

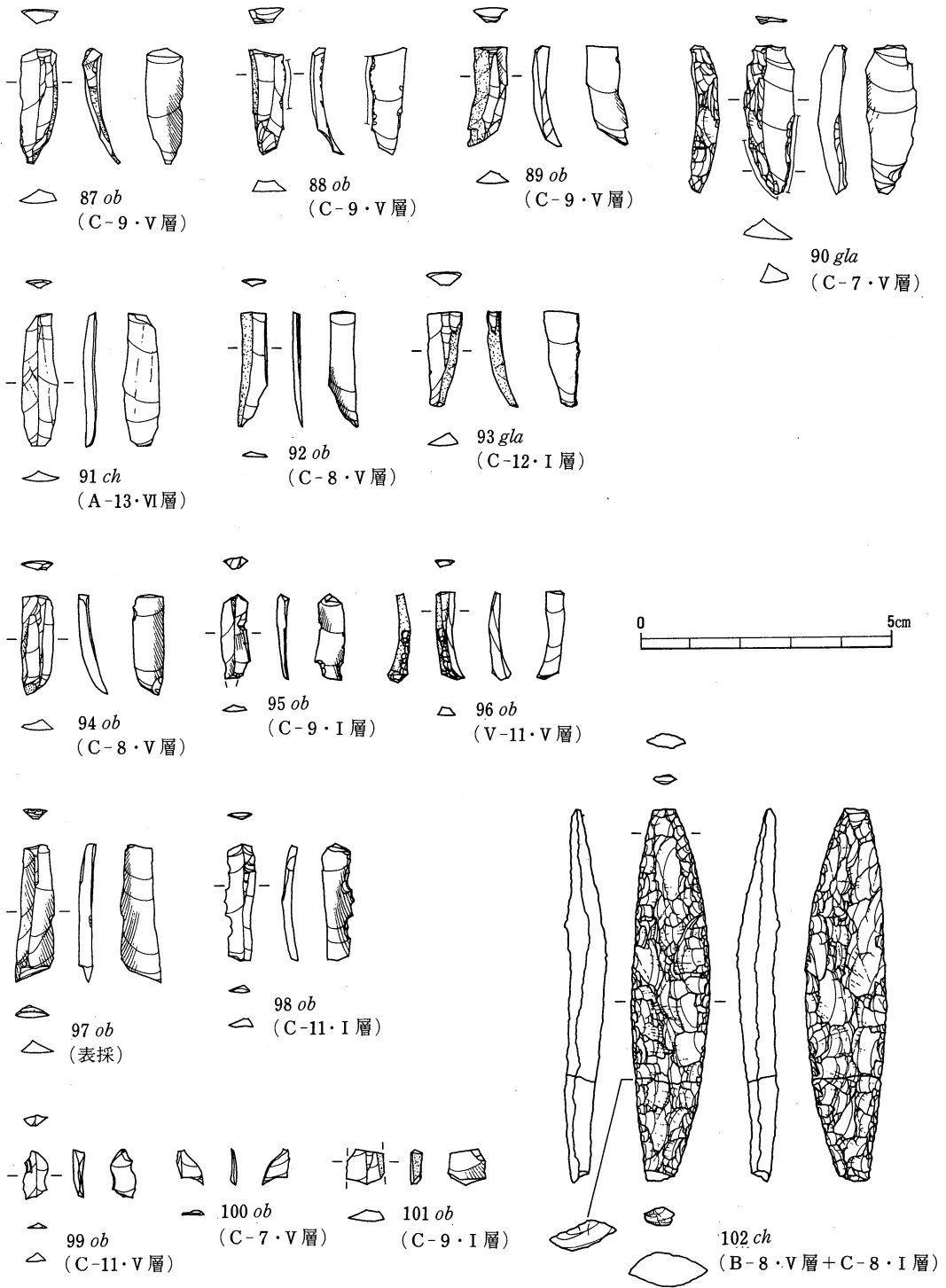
第52図 第V層文化層の石器 細石刃

第VI章 第V層文化層



第53図 第V層文化層の石器 細石刃

第4節 石器



第54図 第V層文化層の石器 細石刃・槍先形尖頭器

末端部 (65~72) 8点あるうち、細部調整が加えられた例が1点 (66) がある。背面に石核調整面を残すものは2点 (66・67) がある。上端の折れ面の折断方向は、背→腹が4例、腹→背が4例であった。8点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ1.37cm・0.61cm・0.16cmである。

末端折断 (73~86) 末端折断は14点ある。背面に石核調整面を残すものが1点 (75)、原礫面を残すものが1点 (83)、石核調整面と原礫面を共に残すものが3点 (73・74・79)、石核再調整面⁹⁸が見られるものが、1点 (80) がある。下端の折れ面の折断方向は、背→腹が10例、腹→背が4例であった。14点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ2.06cm・0.64cm・0.18cmである。

頭部折断 (87~96) 頭部折断は10点で、細部調整が加えられた例が2点 (88・90) がある。背面に石核調整面を残すものが1点 (93)、原礫面を残すものが4点 (88・89・92・94)、石核調整面と原礫面を共に残すものが2点 (87・96)、石核再調整面が見られるものが1点 (90) がある。上端の折れ面の折断方向は、背→腹が6例、腹→背が3例で、その他不規則な折れ方をしているものが1例 (95) であった。10点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ2.17cm・0.68cm・0.24cmである。

頭部末端折断 (97・98) 2点のみである。97は上端を折損しているが、現長2.76cmである。98の折れ面の折断方向は、上下とも腹→背である。97が上端を折損しているため、長さの平均は求められないが、幅・厚さの平均はそれぞれ0.68cm・0.24cmである。

破片 (99~101) 破片は3点ある。101は背面に原礫面を残している。破片のため長さ・幅の平均は求められないが、厚さの平均は0.16cmである。

細石刃90点を総合してみると、細部調整が加えられた例は11点あり、全体に占める比率は12.2%である。細部調整が加えられた部位は、背面左側辺2点 (50・59)、腹面左側辺3点 (34・38・43)、背面右側辺1点 (20)、腹面右側辺1点 (41) であり、背面・腹面共に左側辺が多い。そのほか、表裏から一側辺を調整した例が1点 (88)、末端2点 (66・90)、上端1点 (35) となる。背面に石核調整面・原礫面・石核再調整面を残すものは27点あり、全体の30.0%を占める。折断例83点のうち、端部を折損している2点を除く81点の総計は、背→腹が66例、腹→背が44例、折れ方が不規則なものが2例であった。端部を折損している5点を除く85点の長さの平均は1.57cm、側辺を折損している4点を除く86点の幅の平均は0.65cm、90点の厚さの平均は0.18cmである。 (荻野)

(7) 槍先形尖頭器 (102)

102は細身の柳葉形状を呈する両面調整の槍先形尖頭器である。チャート製。基部側で折損しており、第1次調査のB-8区第V層出土の上半部と今回C-8区第I層から出土した基部が接合した。先端部および基部を折損している。側面形は全体が緩く湾曲している。 (山口)

(8) 搔器 (103~108)

搔器は7点出土した。石材別の内訳はチャート製6点、黒曜石製1点である。ここでは6点

を図示した。

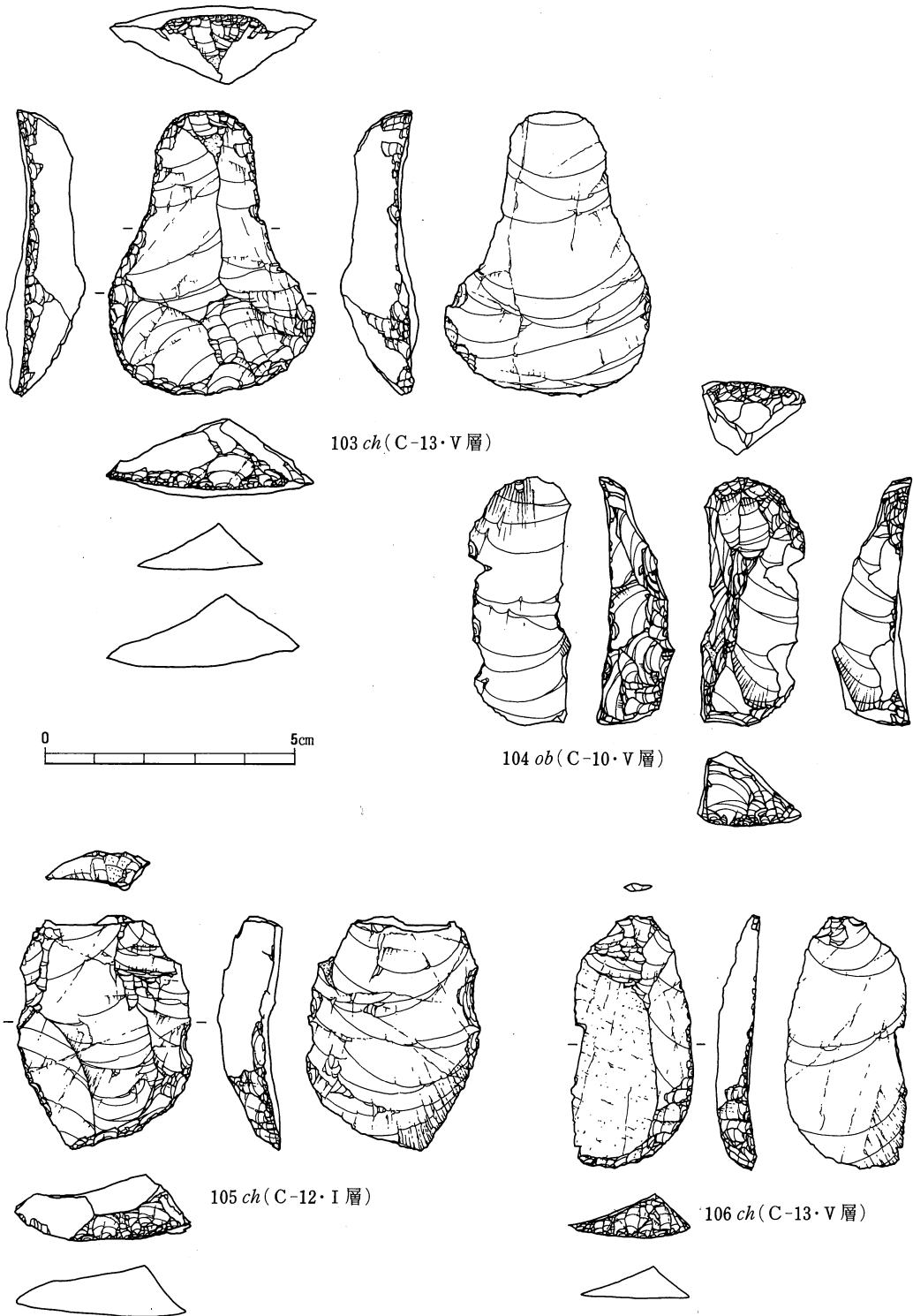
103はチャート製の縦長剥片を素材とし、その形状を利用して、長軸上の下端および上端にそれぞれ急斜度の調整によって弧状の刃部を作り出した複刃搔器²⁰⁾である。左右の側縁にも部分的な調整が加えられている。素材の背面を構成する剥離面は、上下二方向からの剥離によるもので、一部に原礫面が残る。刃部の断面角は上端約75°・下端約50°である。104は直方体状に整形された石核の稜を残す、断面三角形の黒曜石製の縦長剥片を素材とし、その長軸上の両端に急斜度の調整によって弧状の刃部を作り出した複刃搔器である。刃部の断面角は上端約65°・下端約80°である。105はチャート製の縦長剥片を素材とし、その長軸状の一端に急斜度の調整によって直線状の刃部を作り出している。左側縁の表裏にも部分的な調整が加えられている。上部は節理面に沿って折損しており、素材の打面は残されていない。刃部の断面角は約60°である。106は、背面に原礫面を残す縦長剥片を素材とするチャート製の搔器である。長軸状の末端に、急斜度の調整によって弧状の刃部を作り出している。刃部の断面角は約60°、刃部の傾斜角は素材の長軸に対して約36°である。右側縁部にも部分的に微細な調整が加えられている。素材の打面を残す。107は背面・打面に原礫面を大きく残すチャート製の縦長剥片を素材とし、その長軸状の一端に急斜度の調整によって直線状の刃部を作り出している。刃部の断面角は約85°である。中間部で折損している。刃部である下端にも原礫面を留めており、高さ約7cmのチャートの角礫から剥がされた表皮の部分を素材としたものである。母岩別資料3に属する。108は、背面に部分的に原礫面を残すチャート製の縦長剥片を素材とし、その長軸上の一端に、急斜度の調整によって弧状の刃部を作り出している。刃部の断面角は約75°である。右側縁にも部分的な調整が加えられている。素材の打面を残す。打面調整は認められない。素材の背面上部に石核の頭部調整が認められる。(山口)

(9) 削器 (109~113)

削器²⁰⁾は5点出土した。石材別の内訳はチャート製3点、黒曜石製2点である。

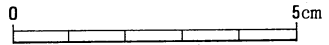
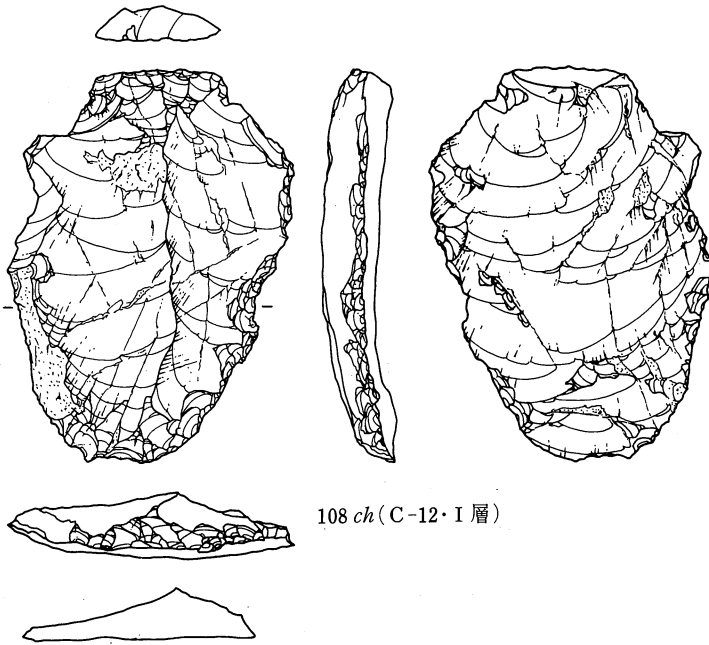
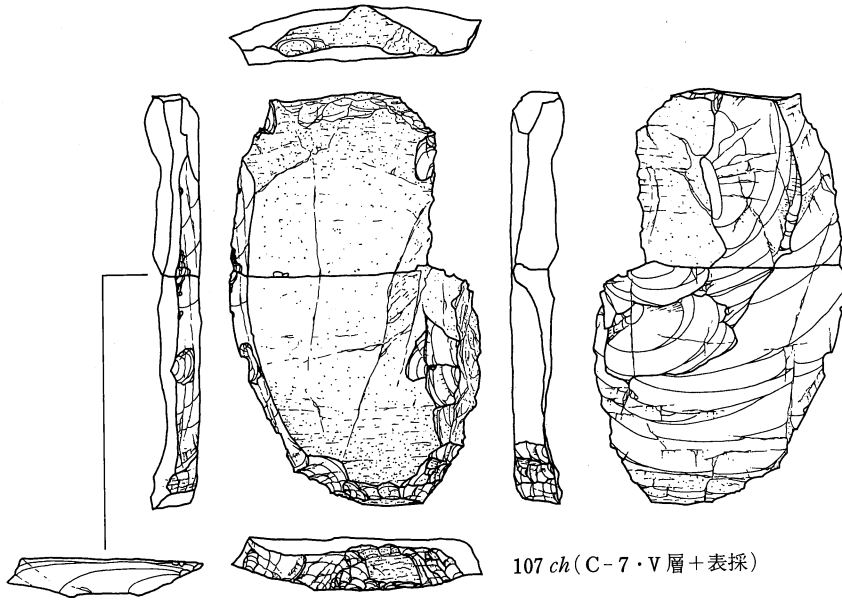
109はチャート製の剥片を素材とし、その左側縁に急斜度調整を加え、直線状の刃部を作り出した縦形削器である。右側縁にも部分的な調整が見られる。素材の打面を残す。打面調整は認められない。刃部の断面角は約45°である。110は気泡の多い黒曜石製の剥片を素材とし、その左側縁に直線状の刃部を作り出した縦形削器である。素材の小さな打面が残るが、打面調整は認められない。刃部の断面角は約55°である。111はチャート製の縦長剥片を素材とし、その右側縁に急斜度の深い調整によって緩い弧状の刃部を作り出した典型的な縦形削器である。上下を折損している。左側縁の裏面側や折れ面に接する裏面上端に、部分的で微細な調整が認められる。刃部の断面角は約40°である。112は「し」の字状に湾曲した黒曜石製の縦長剥片を素材とし、その打点側の二側縁に比較的平坦な調整によって尖頭形の刃部を作り出した複刃削器²¹⁾である。左側縁の下部は破損している。刃部の断面角は右側約55°、左側約40°で

第VI章 第V層文化層



第55図 第V層文化層の石器 搔器

第4節 石器



第56図 第V層文化層の石器 搔器

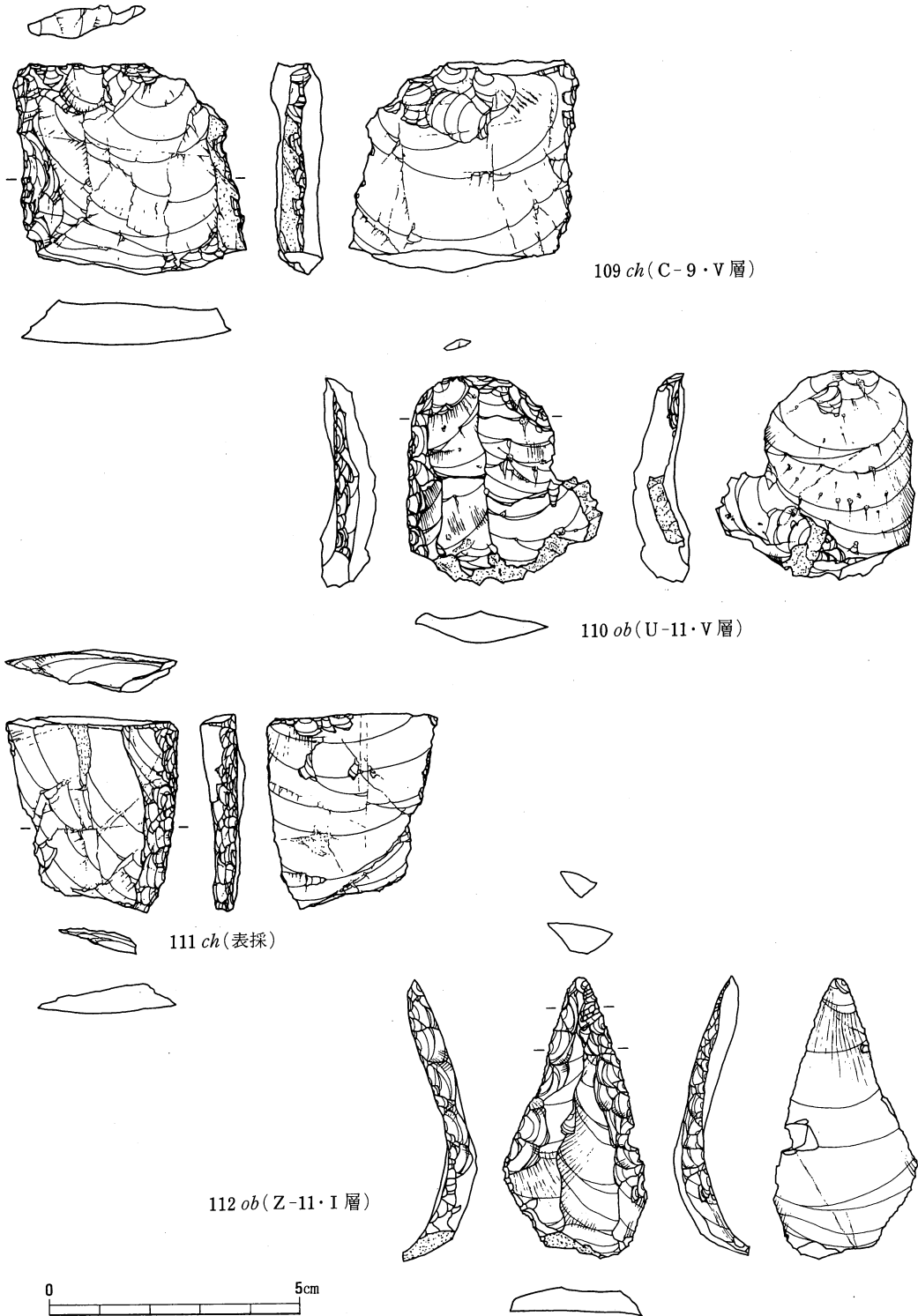
ある。113はチャート製の剥片を素材とし、その左側縁に急斜度の深い調整によって刃部を作り出した縦形削器である。下部を折損している。素材の打面が残る。打面調整は認められない。第1次調査出土資料の中に同一母岩の石刃を素材とした典型的な縦形削器がある（同報告書第54図17）。刃部の断面角は約53°である。（山口）

(10) 細部調整剥片 (115~132)

細部調整剥片⁽²²⁾は21点出土した。石材別の内訳は、チャート製13点、黒曜石製5点、玻璃質安山岩製1点、珪質頁岩製1点、不明1点である。ここでは18点を図示した。

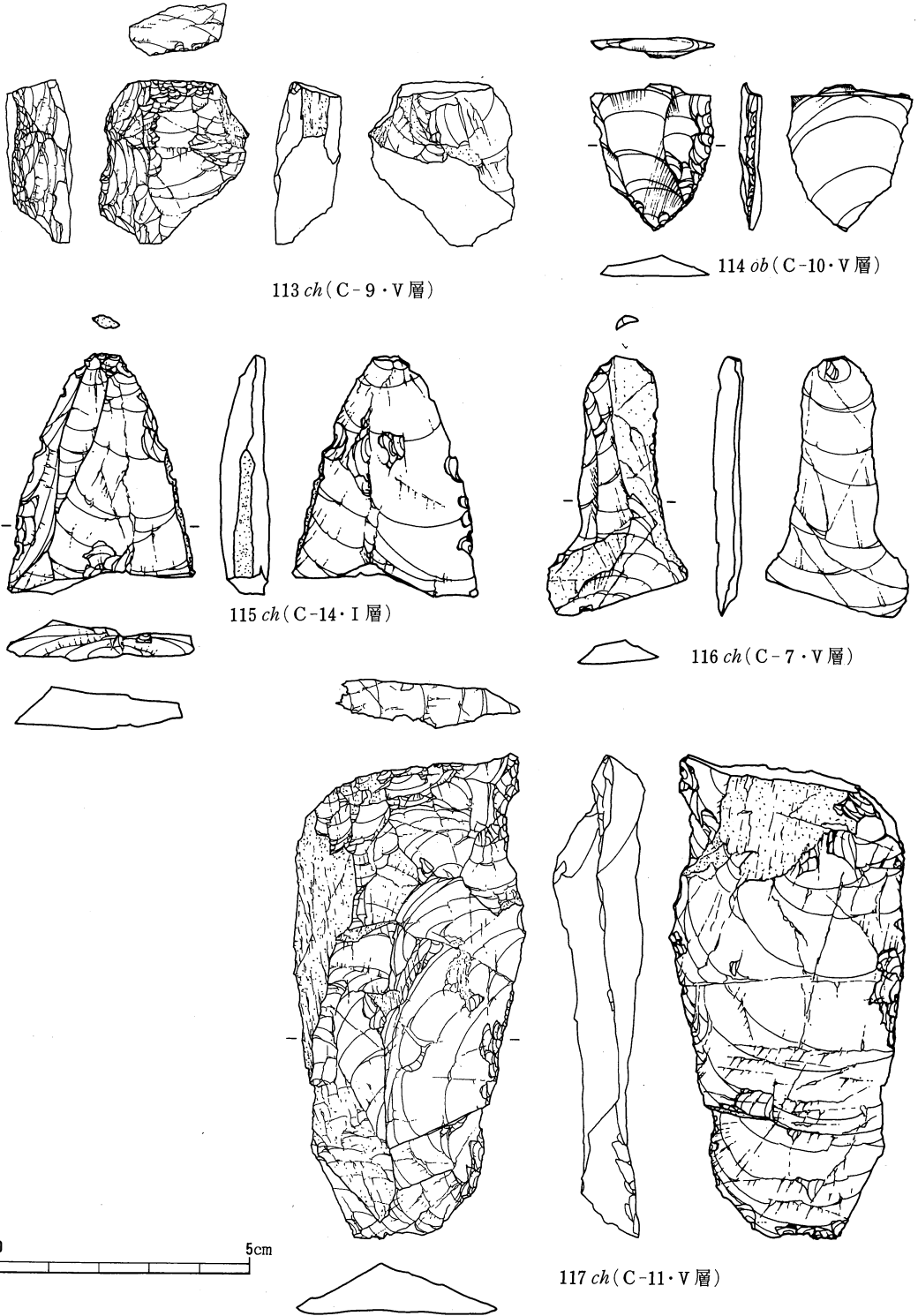
115はチャート製の縦長剥片を素材とし、その鋭利な左側縁に部分的な細部調整を加えている。素材の打面は原礫面である。下部を折断する。116はチャート製の縦長剥片を素材とし、緩く湾曲する右側縁に微細な細部調整を加えている。素材の打面を残す。打面調整は認められない。117は背面の一部に原礫面を残すチャート製の大型の縦長剥片を素材とし、その背面の右側縁および腹面の右側縁・末端に部分的な細部調整を加えている。素材の打面を残す。打面は横方向から剥離された平坦な1面の剥離面であり、打面調整は行われていない。118はチャート製の縦長剥片を素材とし、右側縁の下部に微細な細部調整を連続的に加えている。素材の打面を残す。打面調整は認められない。腹面の上半部から背面の一部にかけて、タール状の黒色付着物が認められる。119はチャート製の剥片の左側縁に微細な細部調整が連続して加えられており、調整後、下部を折損している。打面部は破碎している。120はチャート製の剥片の末端の鋭利な縁辺に微細な調整を加えている。上部と右側を折損している。121は背面に原礫面または節理面を残すチャート製の縦長剥片を素材とし、その右側縁の下部に部分的な細部調整を加えている。素材の打面は、節理面に沿って破碎している。122は表面に原礫面を残すチャート製の剥片を素材とし、その腹面の末端に細部調整を加えている。123は表面に原礫面を残す黒曜石製の剥片を素材とし、その打面側を折り取り、腹面の一部を剥離した後、末端の直線的な一辺に、背面と腹面側から錯交剥離を加えている。124は直方体状に整形された石核の稜の部分から剥ぎ取られた断面三角形状の縦長剥片を素材とし、上部を折断した後、右側縁に部分的に細部調整を加えている。125は黒曜石製の部厚い剥片を素材とし、断面形が直角的な厚い末端部の一辺に急斜度の調整を加え、搔器状の刃部を設けた石器である。右側縁にも部分的な調整が加えられている。126は黒曜石製の剥片を素材とし、その腹面側に部分的で不規則な細部調整を加えている。素材の打面は原礫面であり、多数の敲打痕が認められる。背面の剥離面を打面として、打面の一部が剥離されている。127は打面と背面に原礫面を残す黒曜石製の剥片を素材とし、その末端の直線的な一辺に、微細な細部調整を連続的に加えた横形削器状の石器である。また、腹面の右側縁にも細部調整が認められる。128は黒曜石製の剥片を素材とし、その末端に腹面側から部分的な細部調整が加えられている。129は玻璃質安山岩製の剥片を素材とし、その腹面の右側縁部に打瘤を取り去るような平坦な調整が加えられている。素材の打

第4節 石器



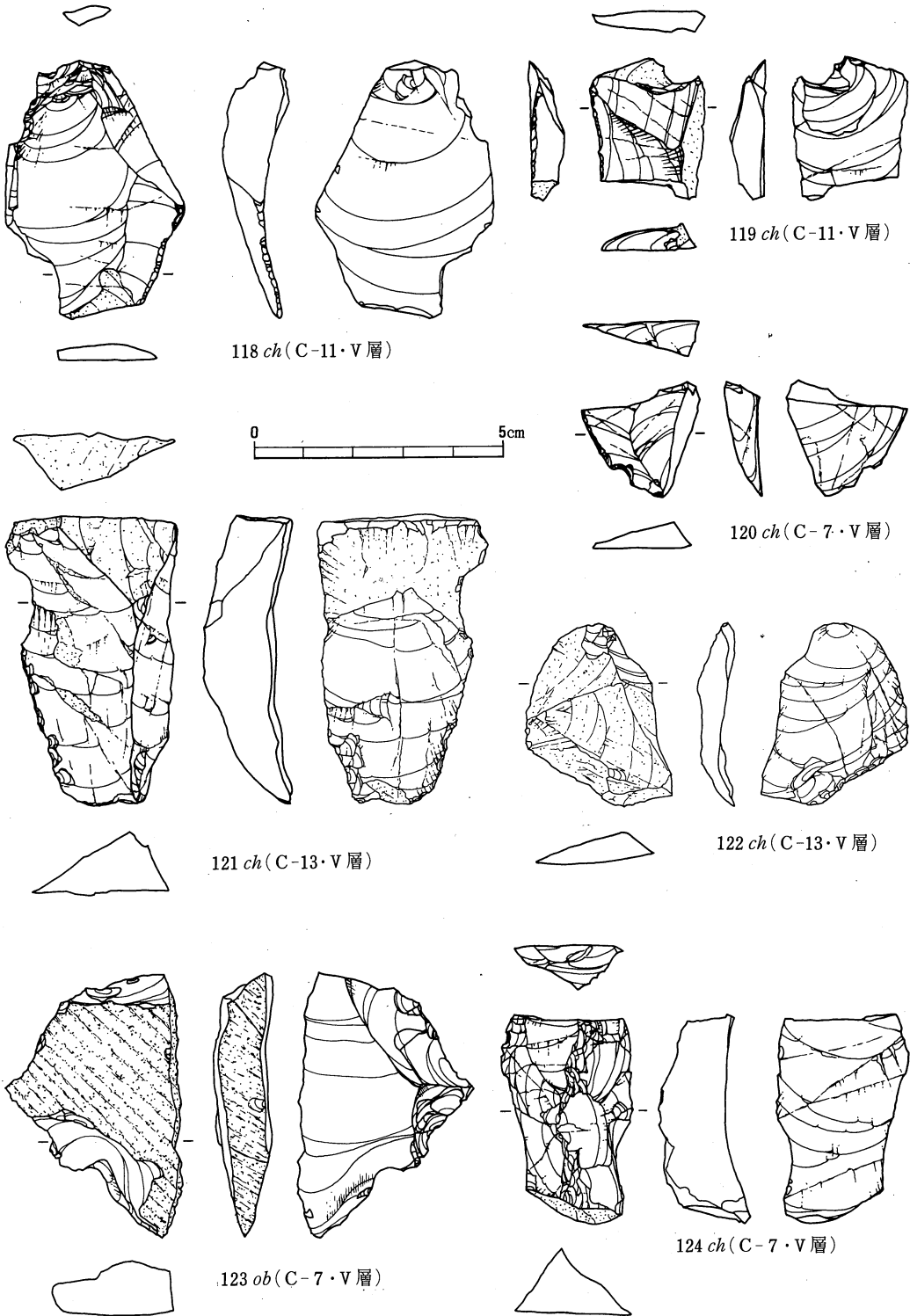
第57図 第V層文化層の石器 削器

第VI章 第V層文化層



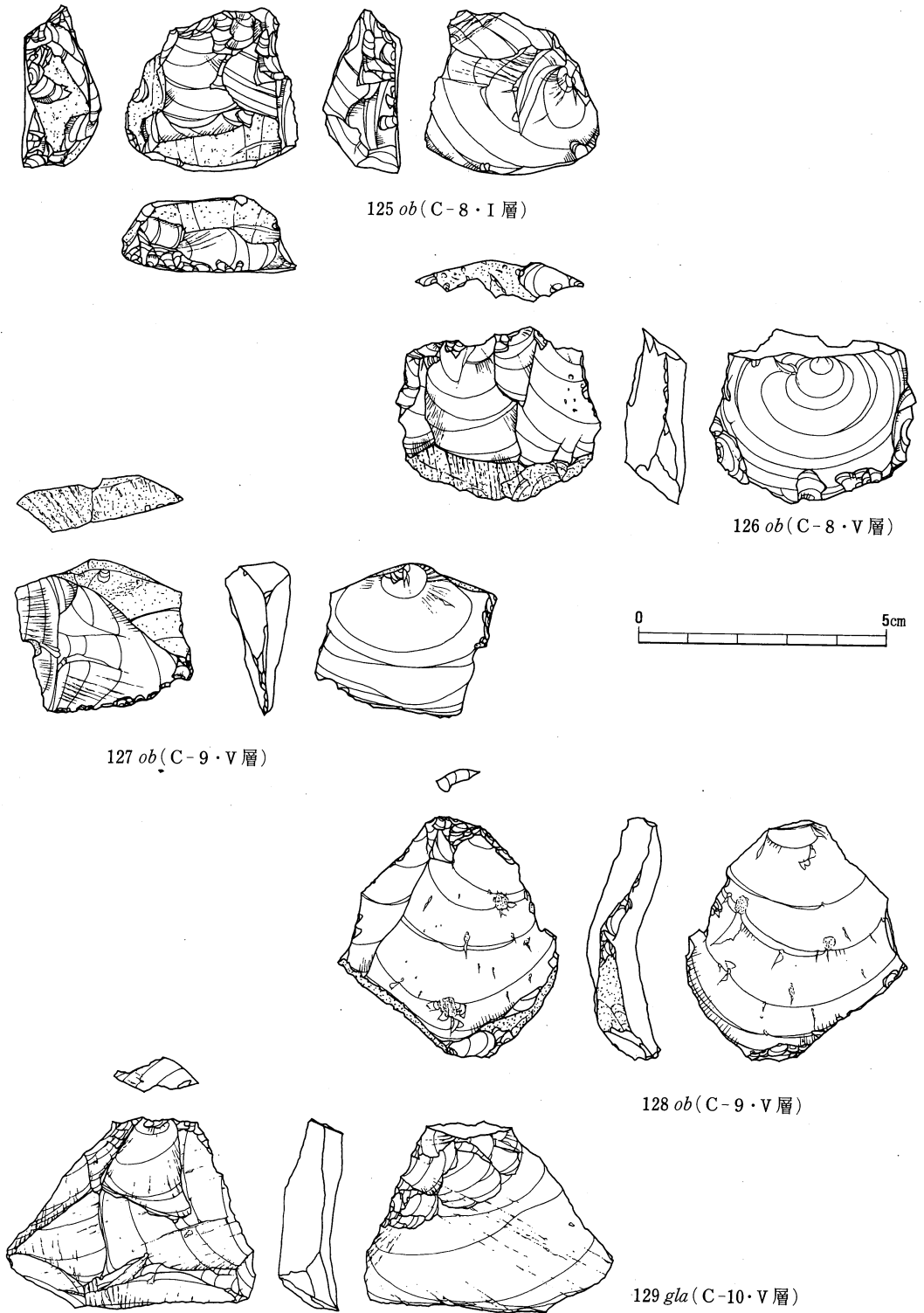
第58図 第V層文化層の石器 削器・細部調整剥片

第4節 石器



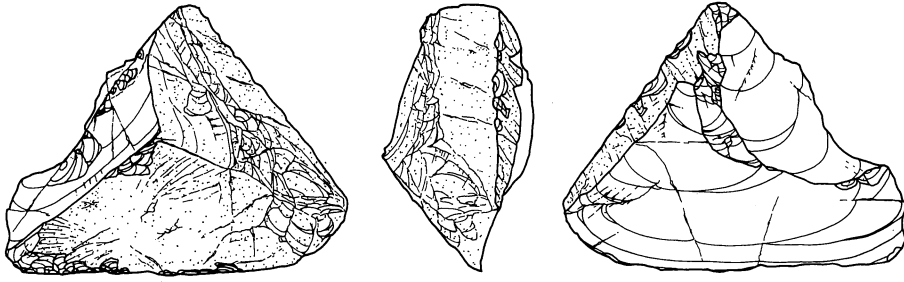
第59図 第V層文化層の石器 細部調整剥片

第VI章 第V層文化層

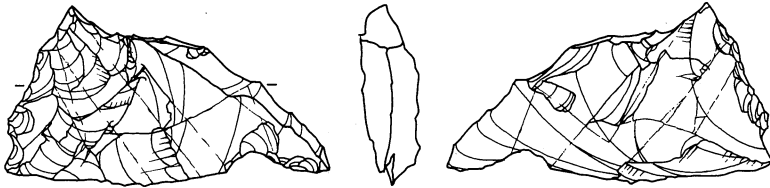


第60図 第V層文化層の石器 細部調整剥片

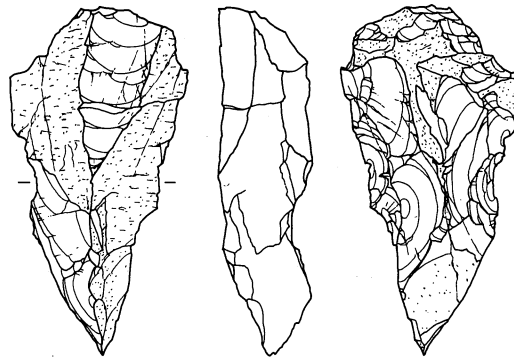
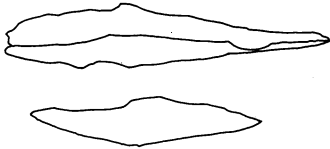
第4節 石器



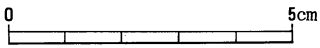
130 ch (C-12・V層)



131 ch (C-10・V層)



132 ch (W-11・V層)



第61図 第V層文化層の石器・細部調整剥片

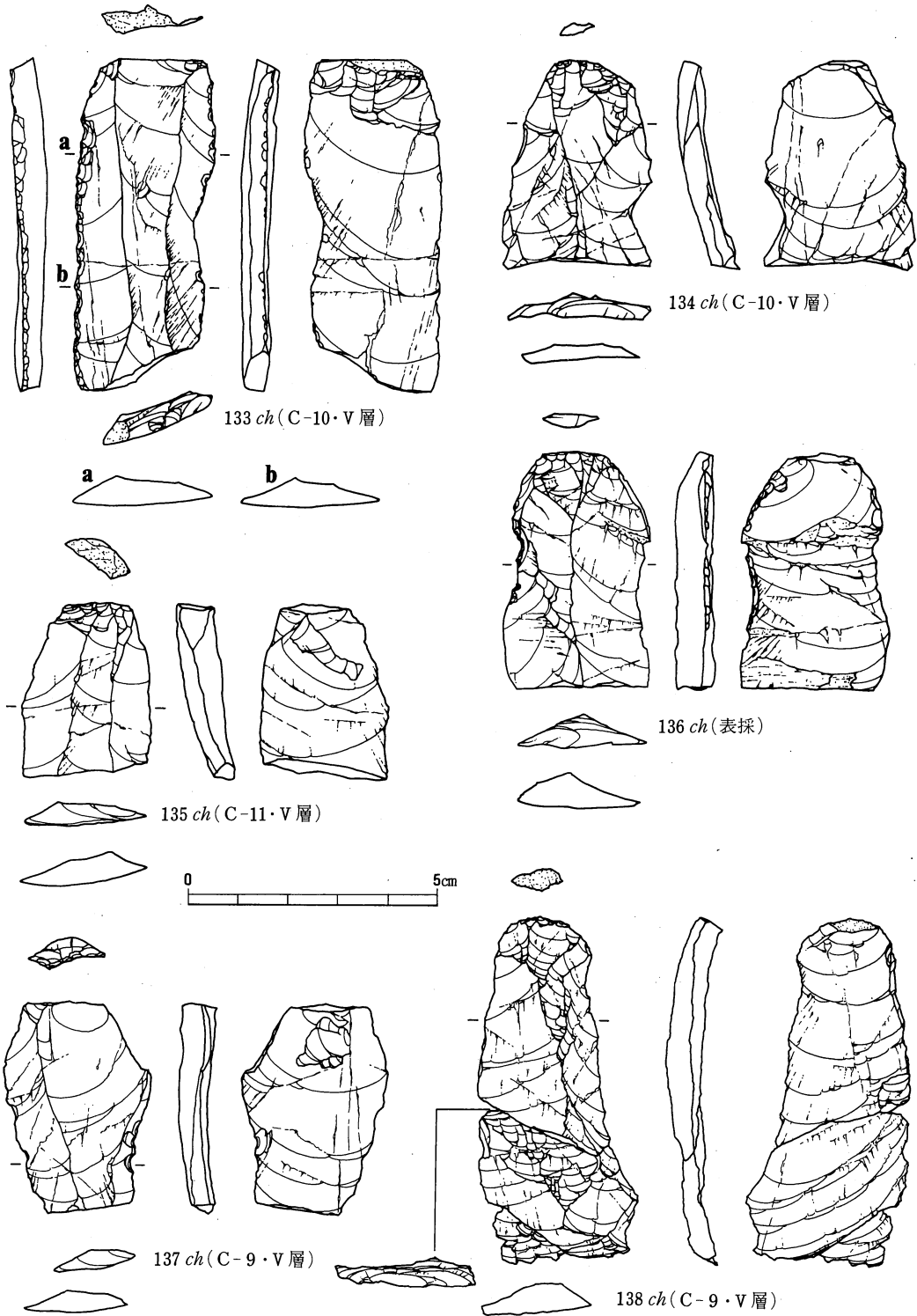
面を残すが、打面調整は認められない。130は背面に原礫面を残すチャート製の部厚い剥片を素材とし、その末端の直線的な一辺に細部調整を加えている。131はチャート製の剥片を素材とし、その右側縁と下縁の一部に細部調整を加えている。132は節理面に沿って不規則に破碎したチャート製の剥片から、数面の小形剥片を剥離している。(山口)

(1) 石刃・石刃状剥片 (114・133～156)

石刃・石刃状剥片⁽²³⁾は合計25点出土した。石刃は14点(134・135・137～139・144・146～152・154)、石刃状剥片は5点(140・142・145・153・155)、側縁に細部調整が加えられた細部調整石刃は4点(114・133・136・141)、稜付石刃⁽²⁴⁾は2点(143・156)出土した。石材別の内訳は、チャート製14点、黒曜石製7点、玻璃質安山岩製3点、珪質頁岩製1点である。なお、折れ面で破片が接合した138・139は、それぞれ1点として集計している。

114は黒曜石製の石刃を素材とし、その打面側から一側縁にかけて細部調整を連続的に加えている。この調整の後、下部を折損している。刃部の断面角は約35°で鋭利である。133はチャート製の石刃を素材とし、その左側縁に浅い調整剥離によって刃部を作り出した削器状の石器である。右側縁にも部分的な細かい調整が見られる。打面部は節理面の部分で破碎し、失われている。また、左側縁の細部調整の後、下部を折損している。背面を構成する3面の剥離面は、左から右方向にすべて上方向から順次連続的に剥離されている。側縁の腹面側には、刃こぼれ状の微細な剥離痕が認められる。134はチャート製の石刃である。打面を残しているが、打面調整は認められない。下部を折断する。背面は上方向から剥離された4面以上の剥離面で構成され、打面に接する上端部には石核の頭部調整が認められる。135はチャート製の石刃である。打面は原礫面である。下部を折断する。背面には、左から右に同一打面から順次剥離された3面の剥離面によって、両側縁に平行する2本の稜線が形成されている。また、打面に接する上端部には、石核の頭部調整が認められる。136はチャート製の石刃状剥片を素材とし、背面の左側縁と腹面の左側縁にノッチ状の細部調整を加えている。下部を折断する。素材の打面を残すが、打面調整は認められない。打面に接する背面の上端には、石核の頭部調整が認められる。137はチャート製の石刃である。下部を折断する。打面を残し、作業面に接する打面の端部に細かい打面調整が加えられている。背面は同一打面から剥離された3面の剥離面から構成され、側縁にほぼ平行する2本の稜線が形成されている。右側縁に部分的な細部調整が見られる。138はチャート製の石刃である。母岩別資料4に属する。中間部と末端部で折損しており、左側縁の一部も折損している。背面を構成する剥離面はすべて上方向から剥離されている。打面に接する背面の上端に石核の頭部調整が認められる。打面は節理面であり、打面調整は認められない。139も母岩別資料4に属する石刃である。背面を構成する剥離面はすべて上方向から剥離されており、両側縁に平行する2本の稜線が形成されている。打面部は破碎している。頭部と中間部に折断されており、C-9・10区出土の2点が接合した。下部も折断している。背面の

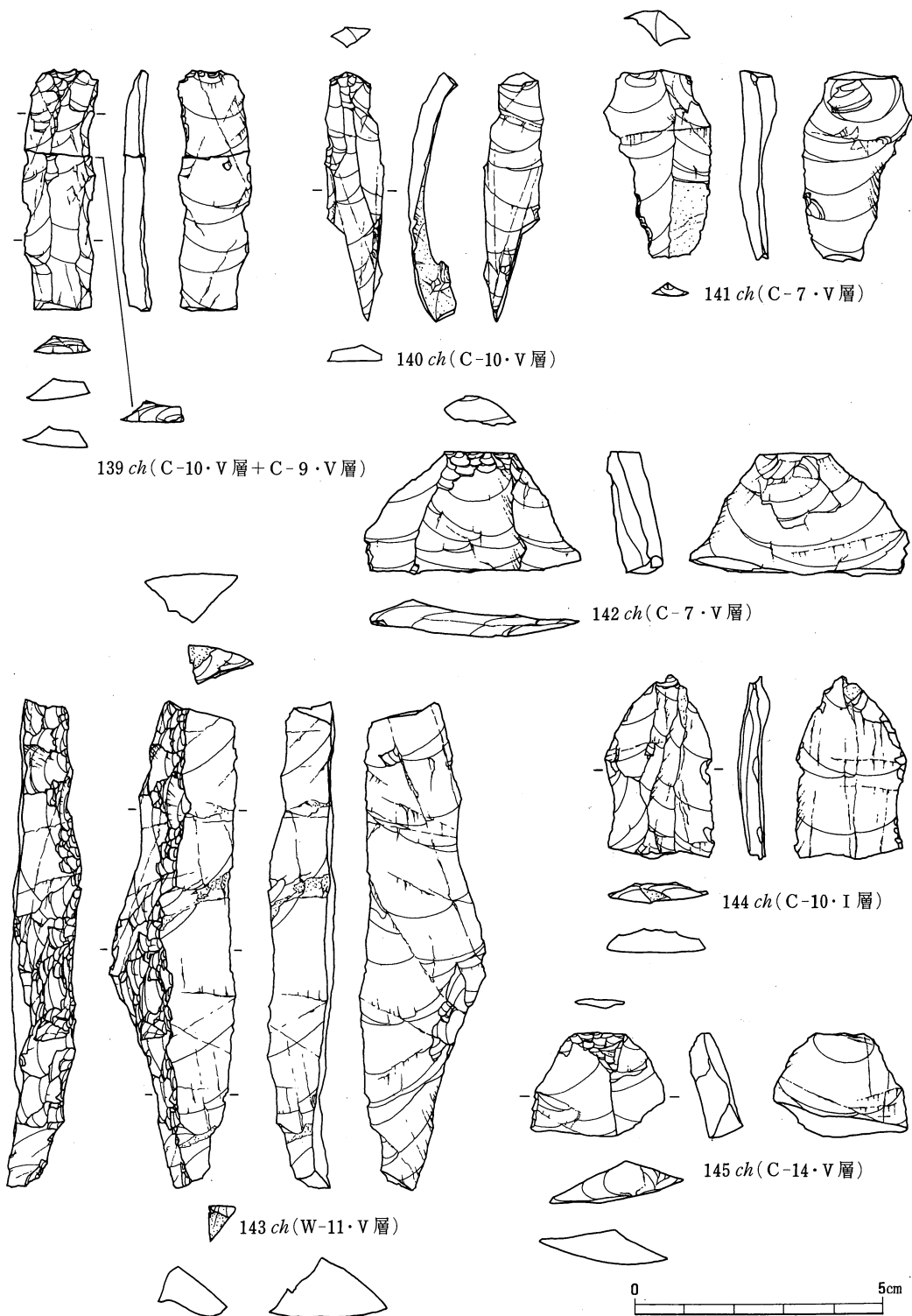
第4節 石器



第62図 第V層文化層の石器 石刃

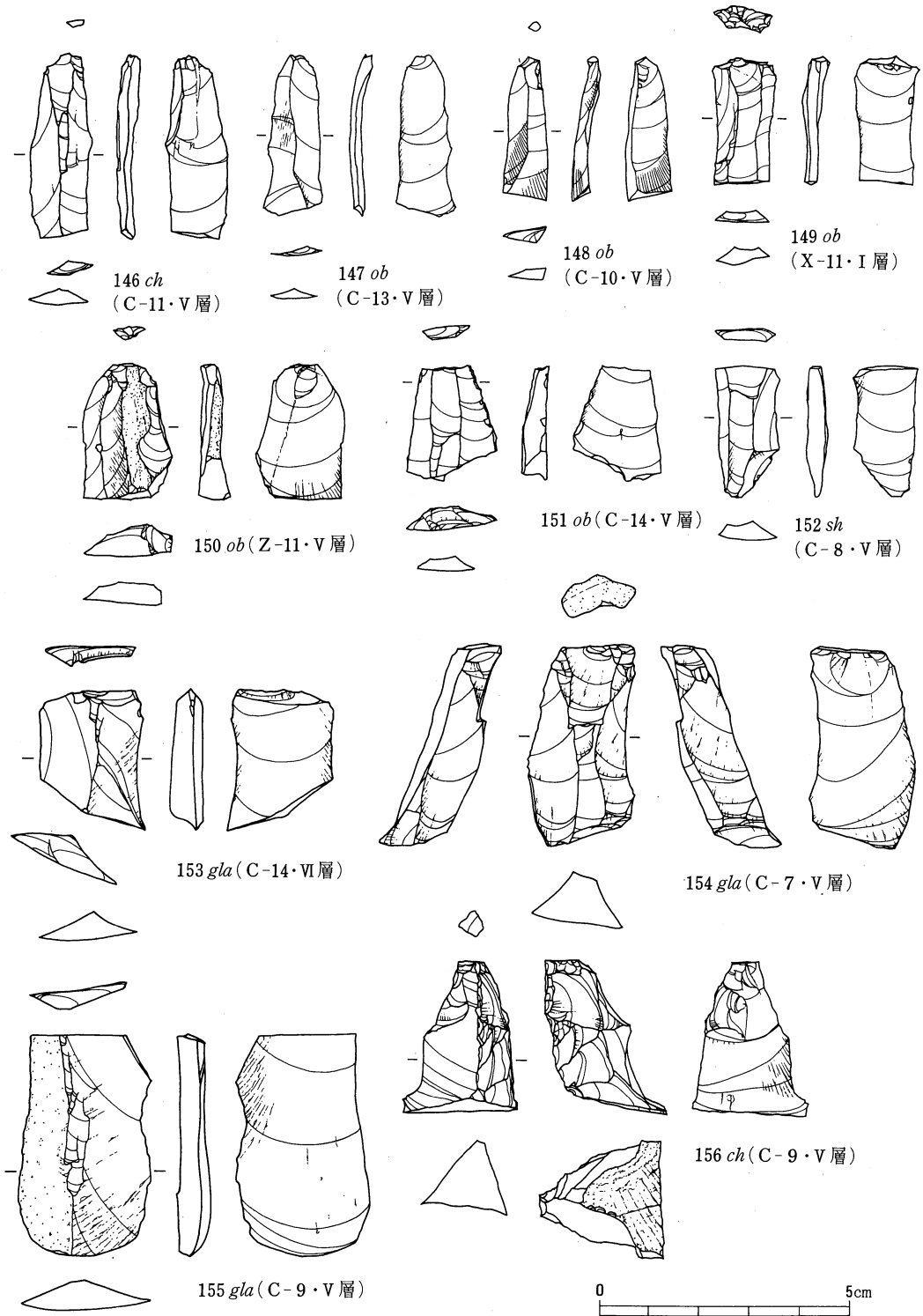
上端に石核の頭部調整が認められる。140はチャート製の石刃状剥片で、背面には同一打面から剥離された縦方向の平行的な剥離面が見られる。石核の頭部調整が認められる。打面は単剥離面打面で、打面調整は行われていない。右側面に原礫面を残している。母岩別資料2に属する。141は背面の一部に原礫面を残すチャート製の石刃状剥片を素材とし、その左側縁の下部に微細な細部調整を加えている。下端を折断する。素材の打面を残す。打面調整は認められない。背面は、同一打面から縦方向に剥離された複数の面からなる。142はチャート製の石刃状剥片である。下部を大きく折断しており、全体の形状は不明である。打面を残す。打面調整は認められない。背面には同一打面から剥離された3面の剥離面によって2本の稜線が形成されているほか、打面に接する上端に石核の頭部調整が認められる。143は、直方体状に整形された石核の稜の部分から最初に剥ぎ取られた断面三角形の稜付石刃である。チャート製。打面部および下端の一部をそれぞれ節理に沿って折損する。背面の右側面は平坦な一面の剥離面であり、この面を打面として石核が直方体となるように左側面部を横方向に剥離し、さらに入念な細かい調整によって直線的な稜を作り出している。大型で、現長9.77cmである。144はチャート製の石刃である。打面は節理の部分で破碎している。下部を折断する。背面はすべて上方向からの剥離面で構成されている。145はチャート製の石刃状剥片である。下部を折断する。打面を残す。打面調整は認められない。背面の上端には、左右の剥離面によって形成された稜を取り去るように頭部調整が加えられている。左側縁に部分的な細部調整が認められる。146はチャート製の石刃である。打面部は破碎している。下端を折断する。背面は上方向からの剥離面で構成されている。147は黒曜石製の石刃である。打面部は破碎している。下端を折断する。背面は対向する上下二方向からの剥離面で構成される。148は黒曜石製の石刃である。右半分を折損し、下端を折断している。打面を残すが、打面調整の有無は明らかでない。背面は同一打面からの剥離面より構成される。149は黒曜石製の石刃である。打面を残し、作業面に接する端部を中心に細かい打面調整が認められる。下部を折断する。背面は対向する上下二方向からの剥離面で構成されており、両設打面石核から剥離されたことがわかる。150は黒曜石製の石刃である。打面の端部に細かい打面調整が認められる。下部を折断する。背面から右側面にかけて原礫面を残す。151は黒曜石製の石刃である。上部・下部を折断する。背面はすべて上方向からの平行的な剥離面で構成され、両側縁に平行する稜線が形成されている。右側縁に部分的な細部調整が認められる。152は珪質頁岩製の石刃である。上部を折断する。背面には上方向から剥離された平行的な剥離面が見られ、その右側にはそれ以前に横方向から剥離された石核の調整面を留めている。153は玻璃質安山岩製の石刃状剥片である。上部・下部を折断する。154は玻璃質安山岩製の石刃である。完形。打面は風化が著しく、原礫面と考えられる。背面は同一打面から剥離された平行的な剥離面から構成されるが、左側縁の下端部や下面部には複数の方向から直交的に剥離された石核の調整面が見られる。155は玻璃質安山岩製の石刃

第4節 石器



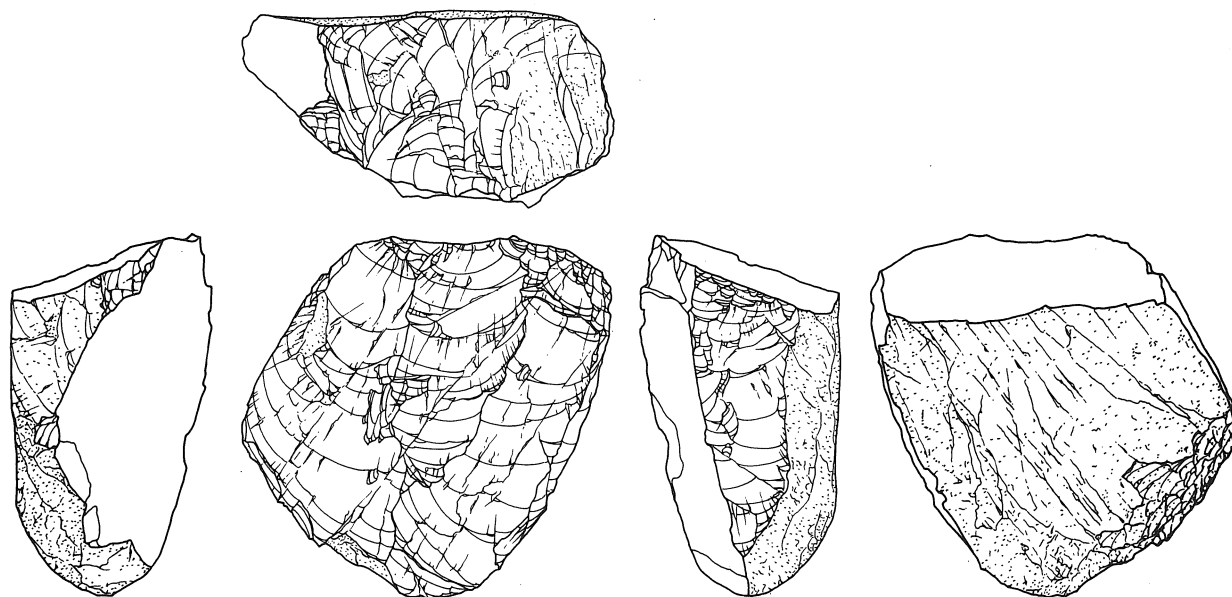
第63図 第V層文化層の石器 石刃・石刃状剥片

第VI章 第V層文化層

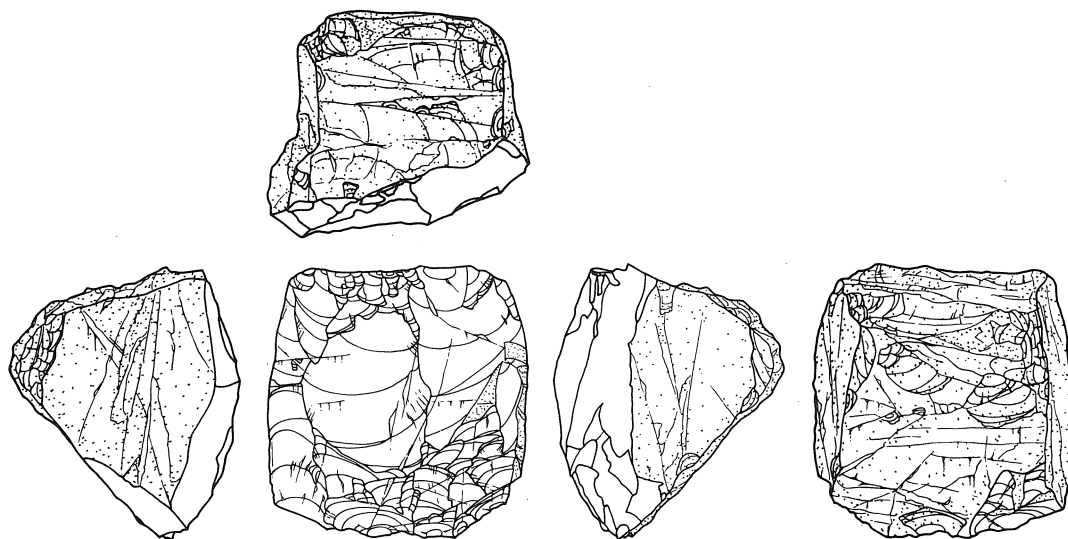


第64図 第V層文化層の石器 石刃・石刃状剥片

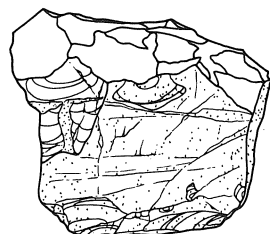
第4節 石器



157 ch (C-9・V層)



158 ch (C-10・V層)



第65図 第V層文化層の石器 石核

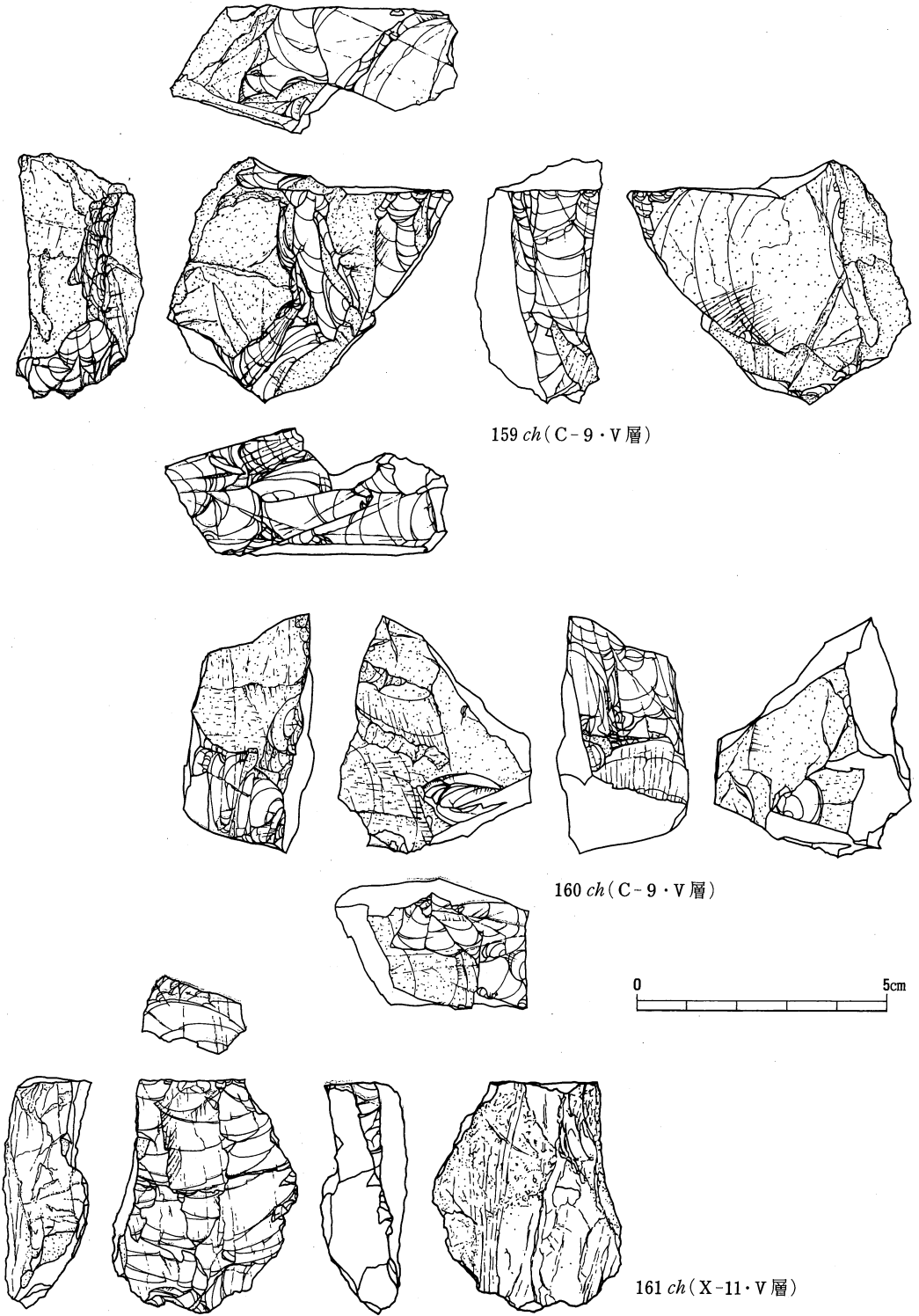
状剥片である。上部を折断する。背面に原礫面が残る。156は黒曜石製の稜付石刃である。右側面に稜の部分から横方向に剥離された石核の調整面が見られる。打面を残す。打面調整は認められない。下部に打面とほぼ平行する平坦な原礫面を残し、高さ3cm前後の小形の石核が想定される。

これらの石刃については、細石刃の場合と同様に、折断された例の多い点が注意される。背面を構成する剥離面の剥離方向に着目すると、同一打面より上方向から連続的に剥離されたケースが多いが、147・149は対向する上下二方向からの剥離面を留めており、両設打面石核から剥離されたことがわかる。137・149・150には打面調整が認められるが、全体的には打面調整を行わず、単剥離面打面または原礫面打面から剥離されたものが卓越する。石核の頭部調整は比較的顕著である。(岡崎)

(12) 石核 (157~165)

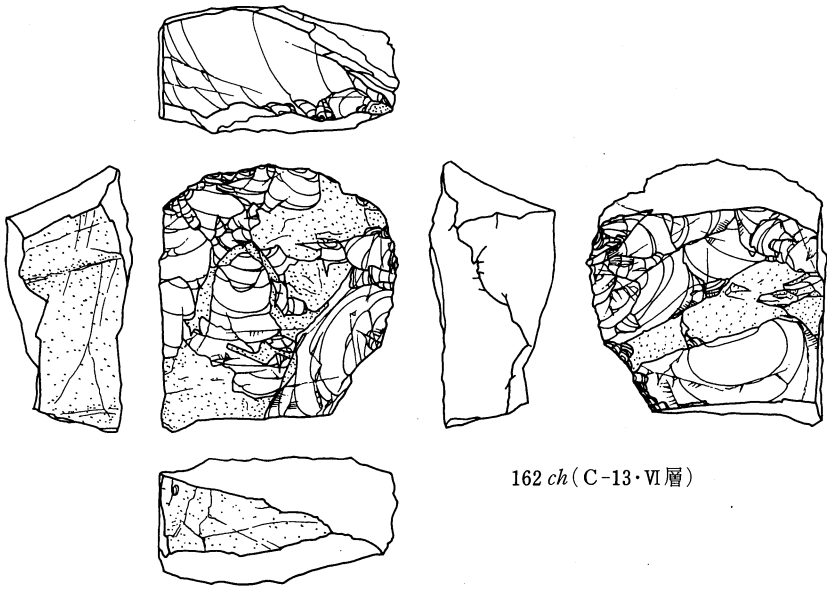
石核は10点出土した。157はチャートの角礫を素材とした単設打面石核である。打面は素材の上部を節理面に沿って大きく剥離した単剥離打面であり、打面調整は行われていない。裏面から下面の一部に原礫面を大きく残す。また、左側面に打面形成以前の素材の分割面が残る。正面から右側面にかけての範囲で、石刃および縦長剥片が剥離されている。打面角は正面で約60°、右側面で約70°である。打面に接する作業面の上端には、剥片剥離によって生じた稜を取り去るための頭部調整が加えられている。母岩別資料4に属する。158はチャートの角礫を素材とした両設打面石核である。上下の打面はともに平坦な原礫面である。上設の打面では、打面調整は行われていない。下設の打面には、剥片剥離の過程で作業面から剥離された部分的な調整が認められる。両側面の原礫面はほぼ平行しており、この二側面に挟まれた1面において、上下の打面から石刃および縦長剥片が連続的に剥離されている。上設打面に対する打面角は約95°、下設打面に対する打面角は約115°である。母岩別資料5に属する。159は両側面が平行する板状のチャートの角礫を素材とし、その細長い上面に長軸方向から剥離を加え、打面を形成した単設打面石核である。剥片剥離は打面の端辺の一端において、打面を徐々に後退するように進められている。打面調整は行われていない。石材の節理によって不規則な割れが部分的に生じているが、目的とされた剥片は石刃状の狭長な縦長剥片である。左右側面と裏面に素材の原礫面を大きく残している。母岩別資料2に属する。160は板状のチャートの角礫を分割した多面体状の素材の一端から、原礫面を打面として小型の剥片を剥離したものである。両側面と裏面に原礫面を大きく残している。159と同じく、母岩別資料2に属する。161はチャート製の部厚い剥片を素材とした単設打面石核である。打面は素材の腹面方向から剥離された単一の剥離面であり、打面調整は行われていない。この打面から、図の正面において石刃状の縦長剥片が連続的に剥離されている。正面の左下には、素材の主剥離面が部分的に残る。左側面から裏面にかけて原礫面を残している。打面角は約75°である。162はチャート製の比較的小型

第VI章 第V層文化層

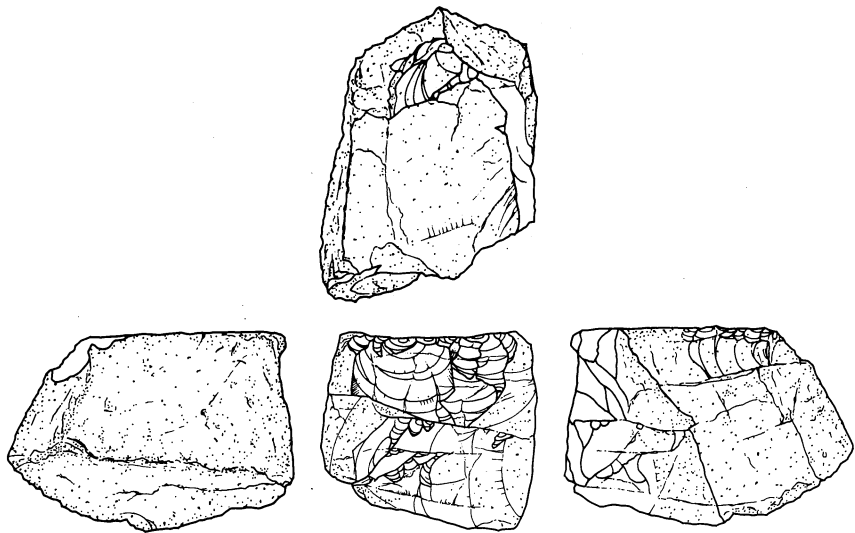


第66図 第V層文化層の石器 石核

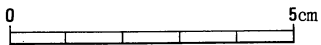
第4節 石器



162 ch (C-13·VI層)

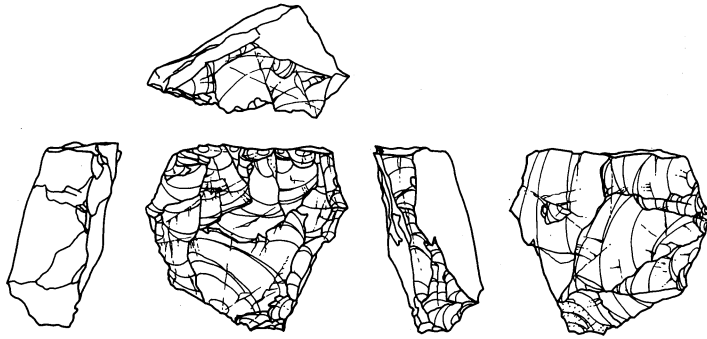


163 ch (Y-11·V層)

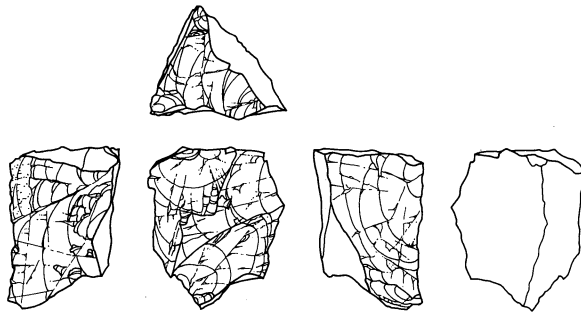


第67図 第V層文化層の石器 石核

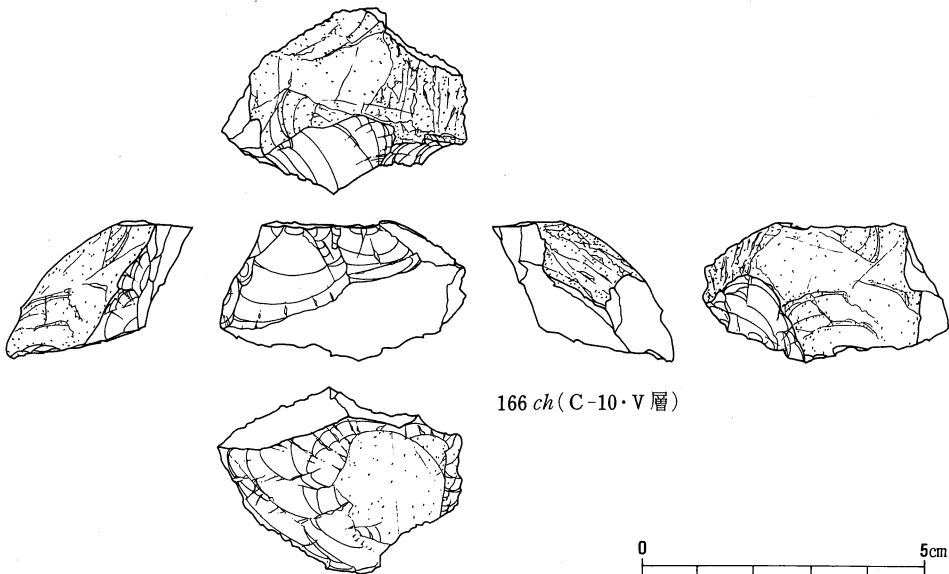
第VI章 第V層文化層



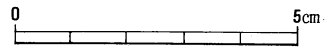
164 ch (C-10・V層)



165 ch (Y-11・V層)



166 ch (C-10・V層)



第68図 第V層文化層の石器 石核・打面再生剥片

第4節 石器

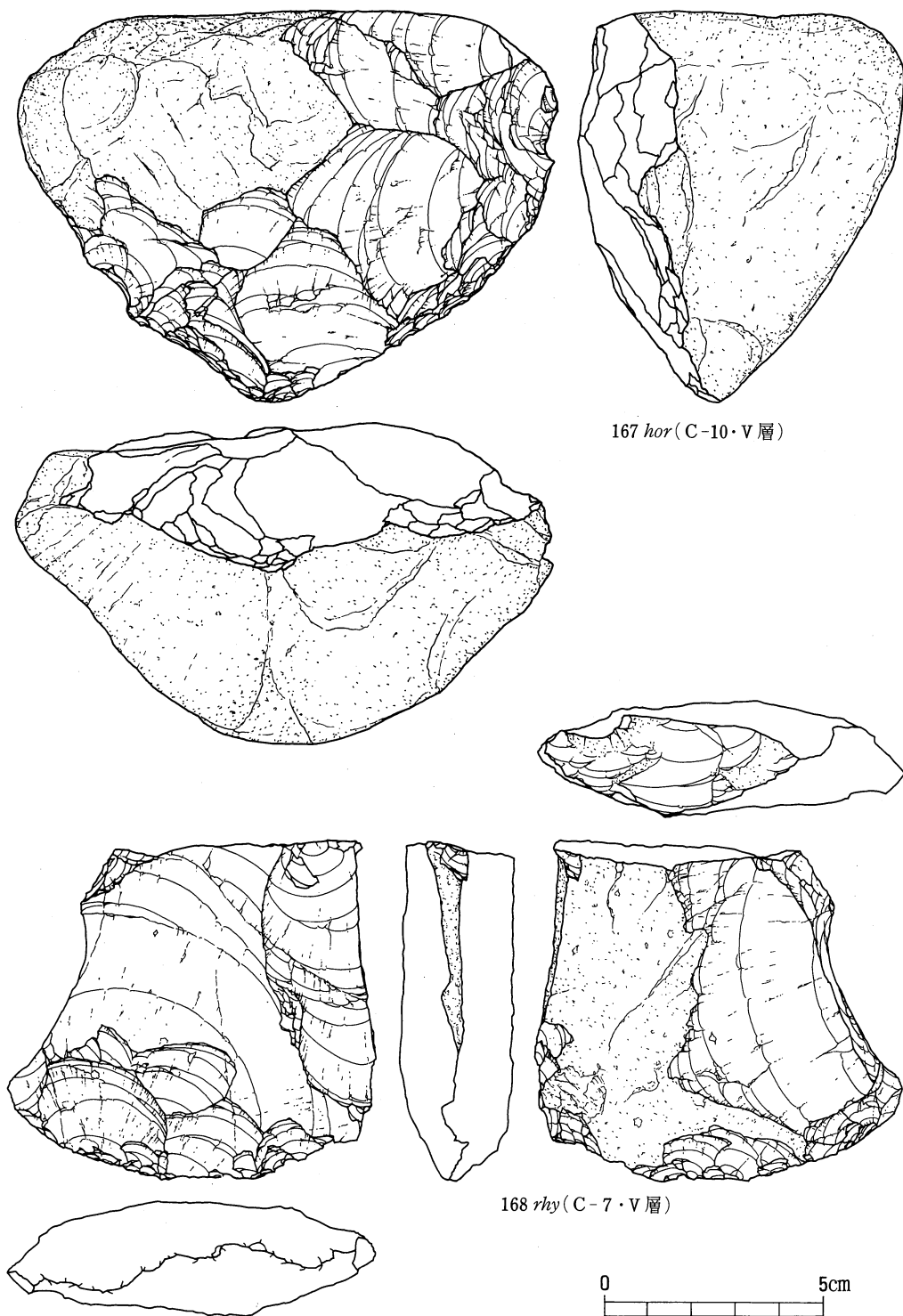
の石核で、図の正面と裏面の一部において小型の不定形剥片が剥離されている。左側面は原礫面、下面は平坦な節理面である。母岩別資料3に属する。163は六面体状を呈する比較的小型のチャートの角礫を素材とし、その平坦な原礫面を打面として一面において不定形剥片を剥離している。打面調整は行われていない。打面角は約 52° である。母岩別資料6に属する。164は上下に打面を設けたチャート製の両設打面石核であり、上設の打面は2面の剥離面からなるが、打面調整は行われていない。下設の打面は単一の剥離面である。剥片剥離は主に図の正面で行われているが、最終的には打面を転位し、正面の作業面を新たな打面として図の裏面から剥片剥離が行われている。165はチャート製の剥片を素材とする小型の石核である。正面に上面と左側面を打面とする剥離面が見られる。右側面は素材の主剥離面である。166はチャート製の石核の上部を輪切り状に剥離した打面再生剥片である。単剥離面打面から剥離された2面の剥離痕が作業面に残る。打面調整は認められない。打面角は約 70° である。背面に原礫面を大きく残しているが、左側面部に横方向から剥離された石核の調整面が残る。(岡崎)

(13) 礫器 (167・169・170)

礫器は3点出土した。これらはいずれも第1号配石の中から検出された。167は三角錐状のホルンフェルスの礫を素材とし、その2稜から正面の一面に大きく調整を加え、下端で交叉する凸形の刃部を作りだした片刃礫器である。刃部の断面角は下端の部分で約 80° である。刃部の二側縁には階段状剥離による比較的小さい調整または刃こぼれが認められる。長さは8.91cm、幅は12.29cm、厚さは7.27cm、重量は856.90gである。169は比較的小さい扁平な安山岩の大型の礫を素材とし、下部を断ち割るように裏面から大きく調整を加え、刃部を作りだした片刃礫器である。刃部の正面形は緩い弧状を呈し、断面角は下端の部分で約 65° である。刃部の裏面にも比較的小さい調整または刃こぼれが認められる。長さは11.74cm、幅は13.39cm、厚さは5.97cm、重量は1324.50gである。170は、断面形が四角形状をなす砂岩の礫を素材とし、それを大きく二分した後、その分割面に部分的に調整を加えた片刃礫器である。刃部の裏面の右半分に刃こぼれと見られる細かい剥離痕が認められる。刃部の断面角はその部分で約 80° である。長さは12.57cm、幅は12.05cm、厚さは8.04cm、重量は1635.40gである。(若泉)

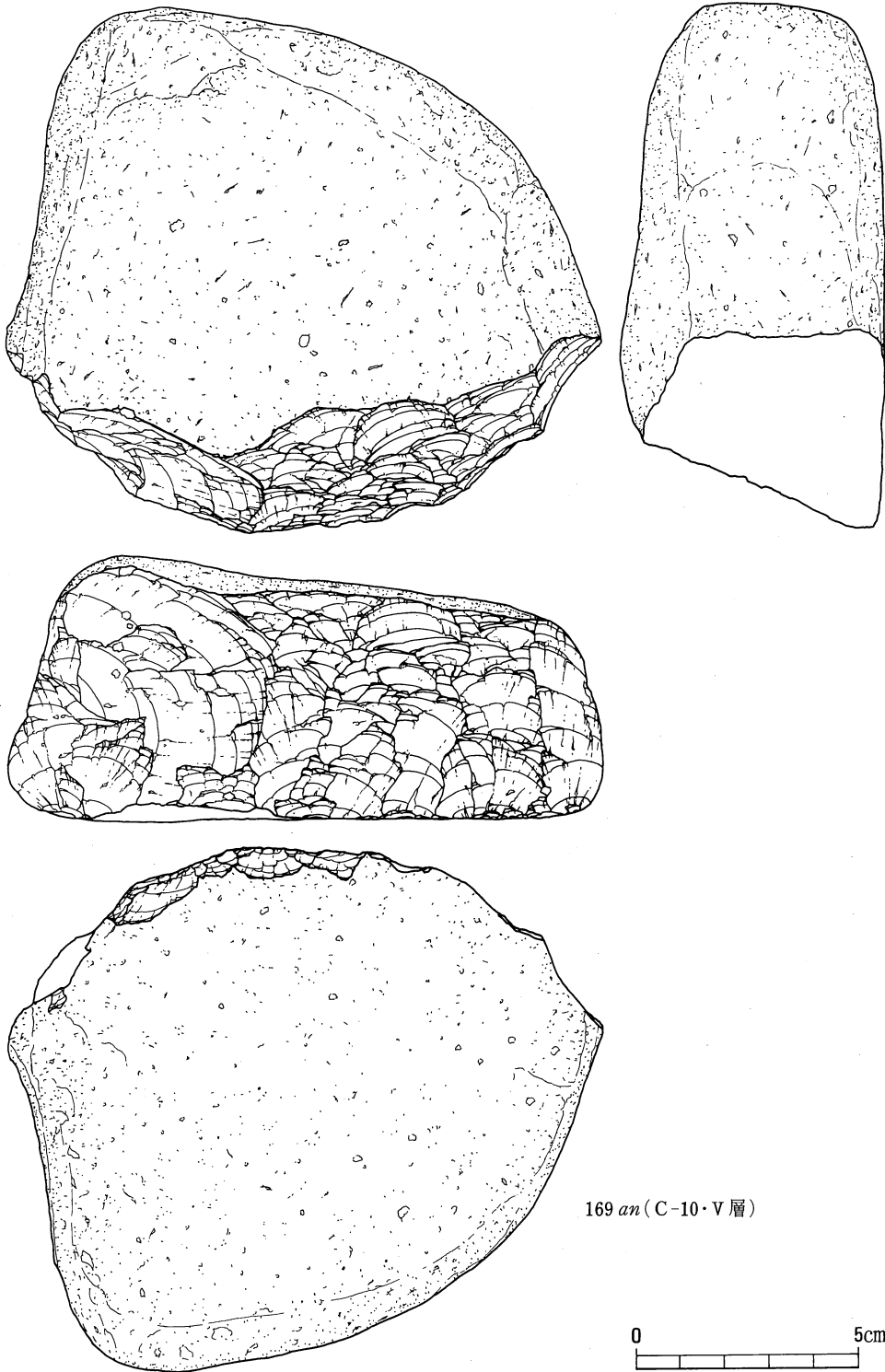
(14) 打製石斧 (168)

背面に原礫面を残す濃飛流紋岩製の大型の剥片を素材とし、その打面側に表裏両面から細部調整を加え、刃部を作り出した両刃の斧形石器。正面に素材の主剥離面を大きく留め、裏面には原礫面が残る。右側面部は、節理状の原礫面である。刃部の平面形は緩い弧状をなすが、正面形は大きく蛇行している。上部を折断しており、折断後、その折れ面を打面として正面右側から縦長剥片が剥離されている。なお、刃部の調整の過程で生じた剥片1点と、上部の折れ面を打面とする縦長剥片の2点が接合した。その他に、接合しないが同一母岩の刃部の調整剥片が1点ある。(若泉)

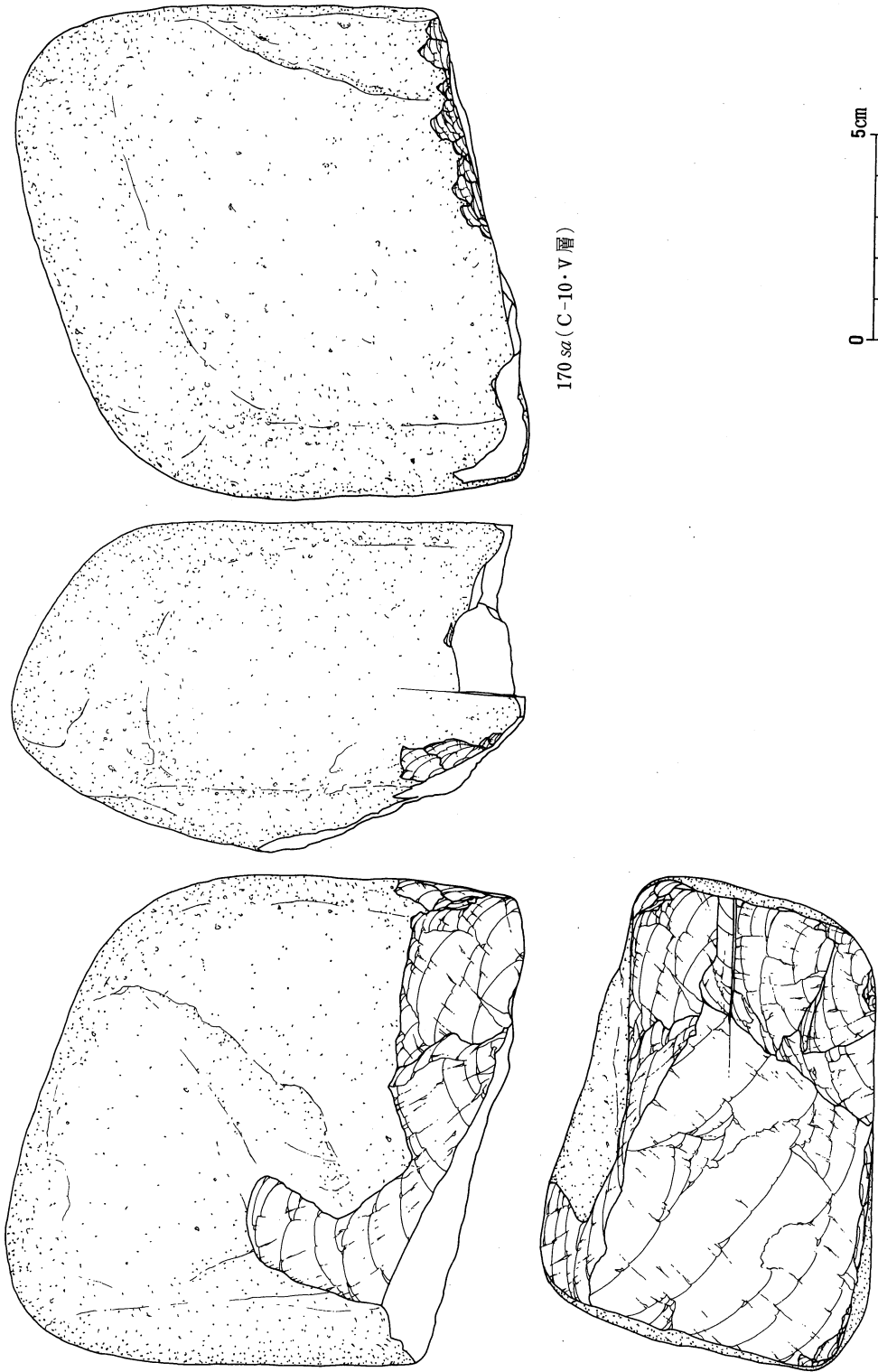


第69図 第V層文化層の石器 礫器・打製石斧

第4節 石器



第70図 第V層文化層の石器 礫器



第2表 第V層文化層 石器器種別一覽表

細石刃石核關係資料

挿図番号	種別	グリッド	登録番号	層位	石質	作業面長(cm)	打面角	長 (cm)	幅 (cm)	高・厚(cm)	重量(g)	遺存状態
1	第49図 1 細石刃石核	C-9	—	I層	ob	3.50	49°	4.21	2.20	2.75	22.54	完形
2	" 2 細石刃石核	C-8	1	IV層	ob	3.62	68°	3.18	1.65	3.28	16.40	完形
3	" 3 細石刃石核	V-11	31	V層	gla	2.43	72°	3.04	1.93	2.31	12.75	完形
4	" 4 細石刃石核	C-10	—	I層	ob	2.66	77°	2.45	2.04	2.56	12.54	一部欠
5	" 5 稜付削片	C-9	34	V層	ob			3.47	0.83	0.71	1.11	完形
6	" 6 稜付削片	Z-11	5	V層	gla			(2.88)	0.70	0.61	0.61	頭部欠
7	" 7 稜付削片	C-9	36	V層	ob			(3.10)	0.81	0.58	0.53	頭部欠
8	第50図 8 打面形成削片	C-9	71	V層	gla			6.94	1.39	0.98	6.52	完形
9	" 9 打面形成削片	C-10	30	V層	gla			7.08	2.21	1.14	15.13	完形
10	" 10 打面形成削片	C-9	160	V層	ch			5.44	1.39	1.20	13.12	完形
11	" 11 細石刃石核原形	C-9	22	V層	ob			3.93	1.40	3.07	17.34	完形
12	" 12 細石刃石核調整削片	C区	—	I層	gla			2.52	0.64	0.60	0.47	完形

細石刃 (1)

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	部位	細部調整	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)
1	第51図 12 C-9	62	V層	完形		ob	2.96	0.61	0.21	0.27
2	" 13 C-11	44	V層	完形		ob	1.76	0.57	0.09	0.07
3	" 14 C-10	96	V層	完形		ob	1.78	0.66	0.15	0.15
4	" 15 C-11	1	V層	完形		ob	2.59	1.10	0.18	0.58
5	" 16 C-9	119	V層	頭部		ob	1.95	0.76	0.30	0.44
6	" 17 —	—	表採	頭部		ob	1.91	0.78	0.16	0.21
7	" 18 C-10	192	V層	頭部		ob	1.71	0.70	0.19	0.19
8	" 19 C-11	40	V層	頭部		ob	1.33	0.78	0.15	0.17
9	" 20 C-9	157	V層	頭部	背面右側辺	ob	1.20	0.66	0.16	0.16
10	" 21 C-9	80	V層	頭部		ob	1.31	0.57	0.16	0.17
11	" 22 C-14	—	I層	頭部		gla	0.99	0.62	0.12	0.08
12	" 23 C-11	27	V層	頭部		ob	1.02	0.62	0.15	0.12
13	" 24 C-11	146	V層	頭部		ob	1.30	0.66	0.28	0.24
14	" 25 C-8	—	I層	頭部		ob	1.07	0.84	0.19	0.20

細石刃 (2)

押図番号	グリッド	登録番号	層位	部位	細部調整	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)
15	第51図26	—	I層	頭部		ob	1.12	0.46	0.10	0.07
16	" 27	11	V層	頭部		ob	1.09	0.50	0.11	0.03
17	" 28	8	V層	頭部		ob	1.10	0.45	0.05	0.02
18	" 29	118	V層	頭部		ob	1.08	0.66	0.25	0.16
19	" 30	—	I層	頭部		gla	2.21	1.06	0.33	0.81
20	" 31	142	V層	頭部		ob	0.64	0.66	0.14	0.66
21	" 32	—	I層	頭部		ob	0.72	0.50	0.11	0.03
22	" 33	35	V層	頭部		ob	(1.20)	(0.66)	0.15	0.14
23	" 34	47	V層	中間部	腹面左側辺	ob	1.16	0.55	0.22	0.18
24	" 35	73	V層	中間部	上端	ob	1.09	0.61	0.18	0.14
25	" 36	140	V層	中間部		ob	1.38	0.61	0.19	0.12
26	" 37	—	I層	中間部		ob	1.48	—	0.17	0.12
27	" 38	14	V層	中間部	腹面左側辺	ob	1.38	0.57	0.15	0.10
28	第52図39	—	I層	中間部		ob	1.79	0.70	0.28	0.34
29	" 40	12	V層	中間部		ob	1.49	0.75	0.30	0.45
30	" 41	16	V層	中間部	腹面右側辺	ob	1.39	0.79	0.17	0.22
31	" 42	107	V層	中間部		ob	1.41	0.77	0.17	0.24
32	" 43	—	I層	中間部	腹面左側辺	ob	1.48	0.98	0.19	0.27
33	" 44	26	V層	中間部		ob	1.35	0.65	0.17	0.17
34	" 45	17	V層	中間部		ob	1.36	0.66	0.11	0.05
35	" 46	—	I層	中間部		ob	1.50	0.63	0.17	0.15
36	" 47	75	V層	中間部		ob	1.48	0.85	0.16	0.23
37	" 48	84	V層	中間部		ob	1.69	0.84	0.15	0.20
38	" 49	125	V層	中間部		ob	1.82	0.60	0.15	0.22
39	" 50	2	IV層	中間部	背面左側辺	ob	1.20	0.50	0.18	0.12
40	" 51	129	V層	中間部		ob	1.19	0.55	0.15	0.11
41	" 52	109	V層	中間部		ob	1.62	0.71	0.14	0.18
42	" 53	—	I層	中間部		gla	1.88	0.79	0.16	0.24
43	" 54	70	V層	中間部		ob	0.96	0.44	0.15	0.03
44	" 55	—	I層	中間部		gla	0.87	0.48	0.12	0.05

第4節 石器

45	第52圖56	V-11	8	V層	中間部			ob	0.96	0.40	0.10	0.01
46	"	C-9	60	V層	中間部			ob	0.85	0.53	0.08	0.02
47	"	C-11	125	V層	中間部			ob	0.67	0.60	0.21	0.06
48	"	C-10	194	V層	中間部	背面左側刃		ob	0.98	0.53	0.16	0.07
49	"	C-10	—	I層	中間部			ob	1.30	0.49	0.13	0.08
50	"	C-11	59	V層	中間部			ob	1.12	0.42	0.13	0.05
51	"	C-8	14	IV層	中間部			ob	1.14	0.38	0.08	0.02
52	"	C-9	76	V層	中間部			ob	0.74	0.93	0.13	0.10
53	"	C-10	—	I層	中間部			gla	0.98	0.81	0.16	0.11
54	第53圖65	C-12	—	I層	末端部			gla	1.99	0.81	0.14	0.26
55	"	C-8	22	V層	末端部	背面末端		ob	1.70	0.62	0.24	0.22
56	"	Z-11	—	I層	末端部			gla	1.40	0.72	0.22	0.28
57	"	C-9	30	V層	末端部			ob	1.37	0.66	0.16	0.14
58	"	Y-11	—	I層	末端部			ob	1.37	0.61	0.14	0.09
59	"	X-11	14	V層	末端部			ob	0.90	0.40	0.06	0.03
60	"	C-11	70	V層	末端部			ob	1.08	0.48	0.08	0.04
61	"	C-9	62	V層	末端部			ob	1.17	0.06	0.20	0.09
62	"	C-11	135	V層	末端部			ob	2.65	1.14	0.24	0.76
63	"	C-9	24	V層	末端折斷			ob	2.56	1.05	0.29	0.60
64	"	C-9	27	V層	末端折斷			ob	2.36	1.04	0.18	0.42
65	"	C-7	—	I層	末端折斷			ob	3.14	0.61	0.31	0.54
66	"	—	—	表採	末端折斷			gla	2.52	0.73	0.23	0.49
67	"	C-9	110	V層	末端折斷			ob	2.42	0.58	0.17	0.24
68	"	—	—	表採	末端折斷			ob	1.78	0.49	0.23	0.20
69	"	C-9	59	V層	末端折斷			ob	2.08	0.50	0.25	0.25
70	"	C-9	69	V層	末端折斷			ob	1.81	0.52	0.16	0.18
71	"	C-9	136	V層	末端折斷			ob	1.73	0.44	0.16	0.14
72	"	C-8	73	V層	末端折斷			ob	1.75	0.49	0.12	0.12
73	"	X-11	10	V層	末端折斷			ob	1.50	0.56	0.08	0.08
74	"	C-14	60	V層	末端折斷			ob	1.46	0.50	0.08	0.05
75	"	C-7	43	V層	末端折斷			ob	1.08	0.37	0.08	0.04
76	第54圖87	C-9	47	V層	頭部折斷			ob	2.31	0.78	0.27	0.47

細石刃 (3)

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	部位	細部調整	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)
77	第53図88	145	V層	頭部折断	背面右側辺・腹面左側辺	ob	2.14	0.70	0.24	0.44
78	"	134	V層	頭部折断		ob	2.00	0.73	0.27	0.41
79	"	32	V層	頭部折断		gla	2.93	0.98	0.42	1.12
80	第54図91	203	VI層	頭部折断	背面末端	ch	2.62	0.72	0.21	0.43
81	"	82	V層	頭部折断		ob	2.25	0.54	0.14	0.17
82	"	—	I層	頭部折断		gla	1.96	0.70	0.26	0.33
83	"	39	V層	頭部折断		ob	2.01	0.65	0.20	0.30
84	"	—	I層	頭部折断		ob	1.67	0.56	0.20	0.17
85	"	25	V層	頭部折断		ob	1.78	0.41	0.23	0.19
86	"	—	表採	(頭部末端折断)		ob	(2.76)	0.77	0.23	0.51
87	"	—	I層	頭部末端折断		ob	2.32	0.59	0.24	0.28
88	"	127	V層	破片		ob	0.92	—	0.19	0.07
89	"	69	V層	破片		ob	—	—	0.07	0.02
90	"	—	I層	破片		ob	—	0.76	0.22	0.12

槍先形尖頭器

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	遺存状態
1	第54図102	—	I層	ch	(7.36)	1.60	0.85	1.54	先端基部欠・折損

搔器

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	母岩番号	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	刃部傾斜角	刃部断面角	重量(g)	遺存状態
1	第55図103	22	V層	ch	資料3	5.67	4.14	1.45	上 0° 下114°	上 75° 下 50°	23.76	完形
2	"	231	V層	ob		4.95	2.07	1.45	上115° 下 15°	上 65° 下 80°	11.54	一部欠損
3	"	—	I層	ch		4.15	3.49	1.30	35°	60°	18.70	完形
4	"	74	V層	ch		5.01	2.45	0.64	36°	60°	8.69	完形
5	第56図107	60	V層	ch	資料3	7.27	4.42	0.84	8°	85°	34.22	折損
6	"	—	I層	ch		6.94	5.09	0.97	30°	75°	35.50	完形
7	"	22	V層	ch		(1.88)	(1.13)	(0.69)			0.98	刃部破片

削器

	挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	母岩番号	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	刃部長(cm)	刃部断面角	重量(g)	遺存状態
1	第57図109	C-9	78	V層	ch		4.19 (4.17)	4.62	0.89	3.61	45°	23.92	完形
2	" 110	U-11	1	V層	ob		(3.95)	3.91	0.97	3.30	55°	12.34	完形
3	" 111	—	—	表採	ch		5.59	3.45	0.81	3.86	40°	11.50	下部折損
4	" 112	Z-11	—	I層	ob			3.89	0.59	右 4.72 左 4.25	右 55° 左 40°	9.28	欠損
5	第58図113	C-9	179	V層	ch		3.26	2.42	1.25	2.23	53°	12.15	下部欠損

細部調整剥片

	挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	母岩番号	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	剝離角	遺存状態
1	第58図115	C-14	—	I層	ch		(4.80)	(3.71)	0.99	16.21	107°	折損
2	" 116	C-7	13	V層	ch		5.17	2.81	0.57	5.80	103°	完形
3	" 117	C-11	26	V層	ch		9.64	4.65	1.66	60.44	57°	完形
4	第59図118	C-11	61	V層	ch		5.15	3.59	1.19	14.09	115°	一部欠損
5	" 119	C-11	37	V層	ch		(2.83)	2.30	0.69	3.94		折損
6	" 120	C-7	64	V層	ch		(2.31)	(2.35)	0.75	2.25		上部・右側折損
7	" 121	C-13	21	V層	ch		5.82	3.41	1.41	26.50		完形
8	" 122	C-13	26	V層	ch		3.67	2.96	0.61	5.63		完形
9	" 123	C-7	9	V層	ob		5.26	3.54	1.25	18.89		完形
10	" 124	C-7	79	V層	ch		(4.16)	2.65	1.85	15.23		上部折損
11	第60図125	C-8	—	I層	ob		3.31	3.49	1.59	18.57		完形
12	" 126	C-8	21	V層	ob		3.54	4.13	1.21	15.65	128°	完形
13	" 127	C-9	20	V層	ob		3.10	3.62	1.31	10.45	100°	完形
14	" 128	C-9	106	V層	ob		4.86	4.48	1.05	19.03		完形
15	" 129	C-10	107	V層	gla		4.99	3.82	0.24	17.20	119°	完形
16	第61図130	C-12	18	V層	ch		4.73	6.04	3.60	52.92		完形
17	" 131	C-10	72	V層	ch		3.17	5.73	1.08	13.54		完形
18	" 132	W-11	33	V層	ch		6.14	3.16	1.66	22.52		完形
19		C-10	—	I層	ch		(4.32)	4.33	0.92	16.67		上端
20		C-11	129	V層	不明		(1.22)	0.93	0.37	0.38		完形
21		X-11	9	V層	ch		(4.29)	5.75	0.93	19.90		上・下端欠

石刃・石刃状剥片

挿入番号	グリッド	登録番号	層位	部位	細部調整	石質	母岩番号	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	剝離角
1	第58図114	78	V層	上部折損	○	ob		(2.92)	(2.47)	0.46	2.59	
2	第62図133	31	V層	末端折斷	○	ch		(6.63)	2.78	0.63	14.92	
3	" 134	220	V層	下部折斷		ch		(4.18)	2.99	0.60	7.98	120°
4	" 135	144	V層	下部折斷		ch		(3.51)	2.57	0.69	6.87	
5	" 136	—	表採	下部折斷	○	ch		(4.75)	(2.95)	0.80	12.05	115°
6	" 137	127	V層	末端折斷		ch		(4.21)	2.94	0.56	6.97	100°
7	" 138	116	V層	完形		ch	資料4	6.90	3.24	0.73	13.40	120°
8	第63図139	121	V層	末端折斷		ch	"	(4.84)	1.50	0.48	3.99	
9	" 140	22	V層	完形		ch	資料2	5.02	1.19	0.75	2.69	135°
10	" 141	112	V層	末端折斷	○	ch		3.80	2.21	0.42	3.40	103°
11	" 142	11	V層	頭部		ch		(2.47)	4.39	0.70	8.25	
12	" 143	59	V層	頭部末端折斷		ch		(9.77)	2.53	1.38	25.43	
13	" 144	—	I層	下部折斷		ch		(3.66)	2.21	0.50	4.58	
14	" 145	24	V層	頭部		ch		(2.09)	2.70	0.72	3.99	
15	第64図146	134	V層	末端折斷		ch		(3.69)	1.23	0.48	1.75	
16	" 147	85	V層	末端折斷		ob		(3.21)	1.17	0.30	0.76	
17	" 148	175	V層	破片		ob		(2.87)	(0.90)	0.31	0.81	95°
18	" 149	—	I層	下部折斷		ob		(2.53)	1.27	0.38	1.51	
19	" 150	4	V層	下部折斷		ob		(2.19)	1.79	0.63	2.91	
20	" 151	38	V層	中間部		ob		(2.30)	1.79	0.50	1.83	
21	" 152	105	V層	上部折斷		sh		(2.62)	1.26	0.48	1.41	
22	" 153	81	VI層	中間部		gla		(2.80)	2.09	0.70	3.39	
23	" 154	102	V層	完形		gla		(4.05)	2.13	1.10	9.66	110°
24	" 155	162	V層	上部折斷		gla		(4.43)	2.62	0.66	7.27	
25	" 156	83	V層	完形		ob		3.06	2.34	1.59	7.28	

石核・石核素材

	挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	母岩番号	作業面積(cm)	打面角	高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
1	第65図157	C-9	68	V層	ch	資料4	6.59	60°	5.80	6.49	4.46	159.72
2	" 158	C-10	138	V層	ch	資料5	4.76	上 95° 下 115°	4.54	4.60	3.95	96.54
3	第66図159	C-9	138	V層	ch	資料2	4.40	75°	4.88	5.75	2.52	65.31
4	" 160	C-9	147	V層	ch	資料2	2.18	65°	2.25	3.86	4.76	48.88
5	" 161	X-11	44	V層	ch		4.68	75°	4.60	2.22	1.72	29.23
6	第67図162	C-13	101	VI層	ch	資料3	4.69	62°	4.23	4.20	3.21	45.43
7	" 163	Y-11	24	V層	ch	資料6	4.22	52°	3.49	3.82	5.04	80.45
8	第68図164	C-10	49	V層	ch		3.25	70°	3.28	3.56	1.96	16.55
9	" 165	Y-11	23	V層	ch		3.23	60°	2.84	2.37	1.96	10.57
10	" 166	C-10	150	V層	ch		1.95	70°	2.44	4.31	3.22	19.90

打製石斧

	挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	母岩番号	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	遺存状態
1	第69図168	C-7	71	V層	rhy	資料1	7.71	8.38	2.60	192.09	上部折損

礫器

	挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	刃部形態	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	遺存状態
1	第69図167	C-10	157	V層	hor	凸刃片刃	8.91	12.29	7.27	856.90	完形
2	第70図169	C-10	165	V層	an	弧刃片刃	11.74	13.39	5.97	1324.50	完形
3	第71図170	C-10	162	V層	san	直刃片刃	12.57	12.05	8.04	1635.40	完形

第5節 第1次調査出土資料

(1) 概要

第1次調査では、A-5~16・22区、B-6~16区の合計24グリッドの発掘が行われた。その結果、試掘調査と表面採集の資料を含めて合計4320点の遺物が出土したが、そのうち第V層出土の遺物は、石器67点、剥片526点、礫および碎片233点の合計826点である。これに第I層出土および表面採集による細石刃・細石刃石核・同打面形成削片・同調整剥片等の関係資料を加え、さらに母岩別分類・接合作業の結果、当該文化層に属することが判明した資料を集計すると、第V層文化層として認定される資料の総数は、石器126点、剥片518点、礫・碎片191点の合計835点となる。

石器126点の内訳は、細石刃75点・細石刃石核2点・細石刃石核原形2点・細石刃石核打面形成削片3点・細石刃石核打面再生剥片2点・細石刃剥離作業面再生剥片2点・細石刃石核調整剥片1点・槍先形尖頭器3点・彫器1点・搔器4点・削器5点・細部調整剥片8点・石刃11点・石核7点である⁽²⁶⁾。このほか第V層中からナイフ形石器8点が出土しているが、それらは下層の第VI層文化層に帰属するものと考えられる。

石材別の内訳は、チャートが542点を占め、半数を越える割合となっており、その他に主な石材として黒曜石・玻璃質安山岩・頁岩が用いられている。これに対し、石器の石材別内訳は、チャート製36点、黒曜石製44点、玻璃質安山岩製49点となり、チャートの割合が減少し、3つの石材がほぼ同じ比率になっている。玻璃質安山岩は、主に細石刃の石材として用いられたものである。黒曜石に関しても、細石刃に使用される割合が高い。

第1次調査でA・B-9・10区にある程度の遺物の集中が見られたが、第2次調査の結果、A-6~12区、B-5~12区、C-7~12区の範囲を中心とするユニット1の存在が確認された。第1次調査出土資料のうち、このユニットに含まれる主な石器には、細石刃13点・細石刃石核原形1点・細石刃剥離作業面再生剥片1点・槍先形尖頭器4点・搔器4点・削器5点・細部調整剥片5点・石刃8点・石核5点等がある。(小林)

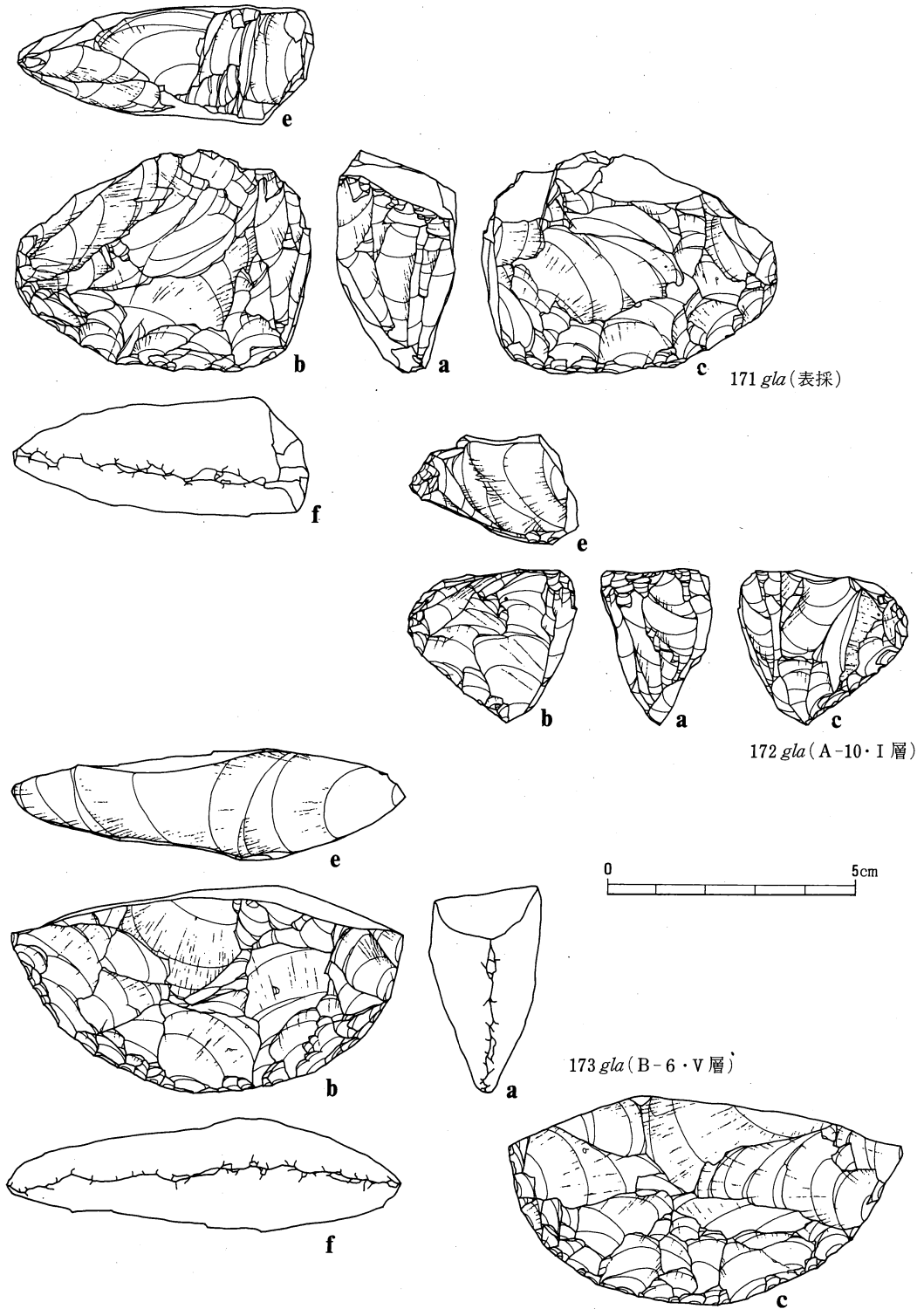
(2) 細石刃石核と関係資料 (第72図~第74図)

細石刃石核 (171・172) 171は、両面調整の素材から削片の剥離によって打面を作出した削片系細石刃石核⁽²⁶⁾である。玻璃質安山岩製。断面形は楔形をなす。両側面には、下縁・背縁側からの求心的な調整が見られるが、b面側が甲高である。削片剥離は、素材の一端から長軸方向に沿って、少なくとも2回行われている。ただし、石核のほぼ中央に石材の大きな節理があるため、いずれも削片が他端に抜け切らず、節理面の部分で折れた状態となっている。細石刃剥離作業面に接する新旧2面の打面のうち、新しい方は打点が比較的近く、打面再生が行われたことが考えられる。打面細調整は行われていない。なお、削片の剥離に先立って、b面側か

らほぼ横方向に剥離されたe面中央は、打面作出を意図したものかどうか明らかでなく、同面剥離後、背縁の端部からb面の上部に2面の槌状剥離が施されている。作業面(a面)は長さ3.04cm、幅2.38cm、打面角は約76°である。172は、全体が打面・細石刃剥離作業面・左側面・右側面の4面からなり、打面部の末端から作業面の下端にかけて、意図的に整形された稜線を有する楔形細石刃石核であるが、その製作工程に定型的な削片の剥離を伴わないものである。玻璃質安山岩製。細石刃剥離は細長い打面の一端において、打面を徐々に後退するように行われ、打面端部の細調整は行われていない。現存の打面は、両側面調整後の剥離面であり、作業面に残る細石刃剥離痕もすべてこの打面からのものであるが、これは削片の剥離によるものではなく、比較的近い打点から薄く削片を剥離した再生打面と考えられる。両側面の調整は、主に背縁部から行われており、c面に上方からの調整面が見られる。また、b面上縁に沿って背縁から3条の槌状剥離が施されており、171に共通する特徴的な調整として注意される。作業面は長さ3.19cm、幅2.24cm、打面角は約70°である。

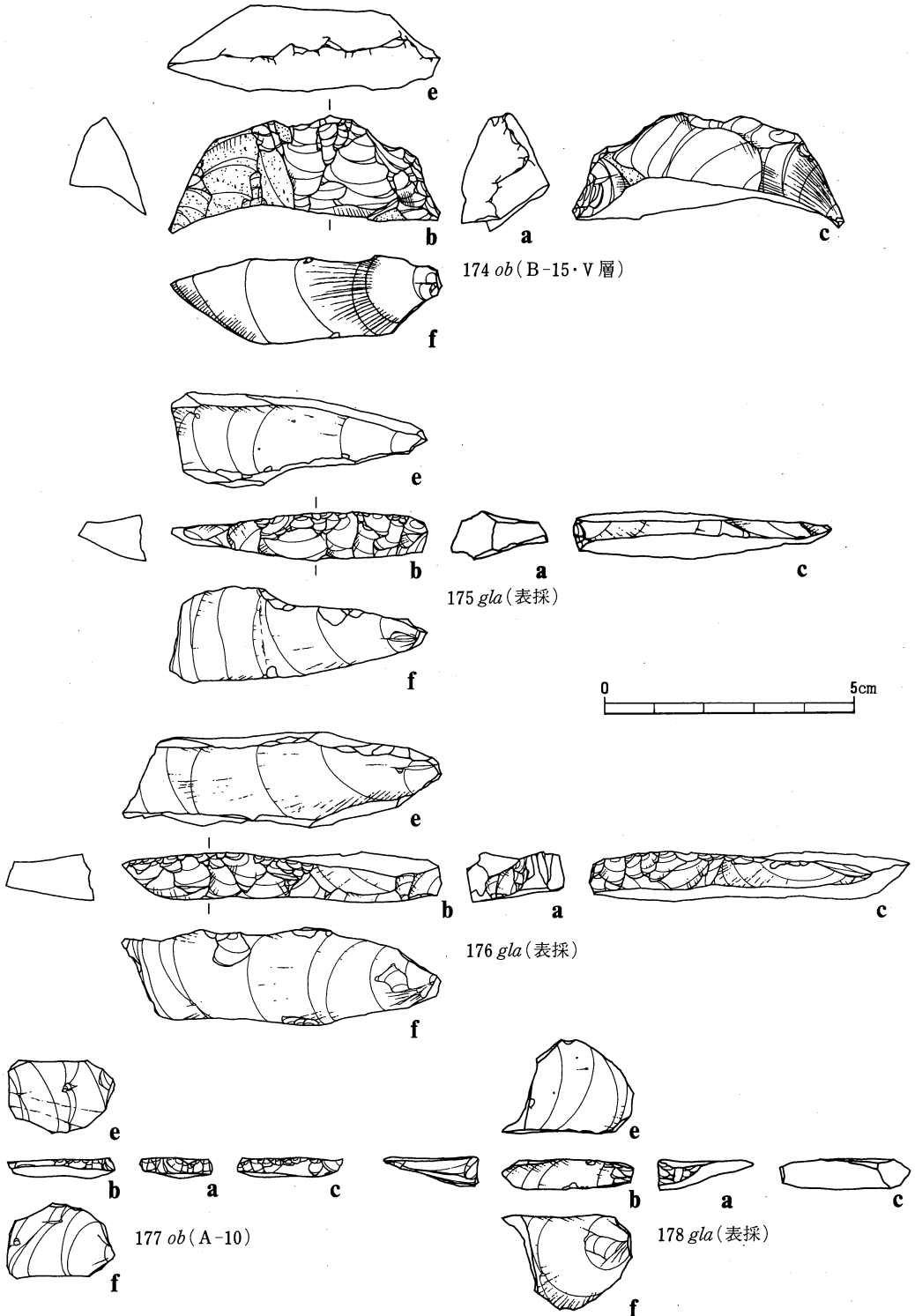
細石刃石核原形(173・179) 173は、楕円形に整形された両面調達素材の一端から、これを縦割りするように削片を剥離し、楔形に整形された削片系の細石刃石核原形⁽²⁷⁾である。玻璃質安山岩製。両側面には、素材の全周方向から剥離された、求心的で平坦な調整面が見られ、下縁からe面の両端にかけて鋭い稜が作出されている。側面観はほぼ半円形であるが、削片剥離の打点側に細かい調整が集中し、e面とのなす角度が直角的になっている。b面にe面を打面とする剥離面が1面見られるが、削片剥離後の両側面の大きな再調整は行われていない。打面(e面)の最大長は7.88cm、最大幅は2.15cm、打面から下縁までの最大高は4.18cmである。179は、チャート製の細石刃石核原形である。縦長削片の打面側を折り取り、その折れ面を打面としてb面側(素材の背面側)の上部に連続的な調整を加えている。また、この打面の長軸上の一辺から、図のa面において細石刃状の小形の縦長削片を数枚剥離しているが、この部分に石材の節理面があるため、不規則な破砕が生じている。打面部の平面形は、末端で二辺が交差する楔形で、長さ3.02cm、幅1.19cmである。全体の形状も、断面形が楔形であり、背縁のc面側の縁辺部に部分的な調整が加えられている。

打面形成削片(174~176) 174は、両面調整素材の縁辺部から最初に剥離された、素材の縦割りの第一段階に生ずる稜付きの打面形成削片である。黒曜石製で、両面に部分的に原礫面を残すことから、扁平な礫に粗々しい調整を加えた円盤状の石核素材が想定される。f面は末端に向かって大きく振れている。175・176は、削片剥離が2回以上にわたって行われた場合の第2打目以後に生ずる、いわゆるスキー状スポールである。いずれも玻璃質安山岩製で、打点側に両面調整素材の稜を留めている。175・176とも打撃が素材の他端に及ばず、途中で断ち切れたような同様の形状を呈する。いずれも、前回の削片剥離の後、その剥離面(e面)を打面として側面の再調整を行っている。これは、削片の振れによって生じた打面部のうねりを修正し、側

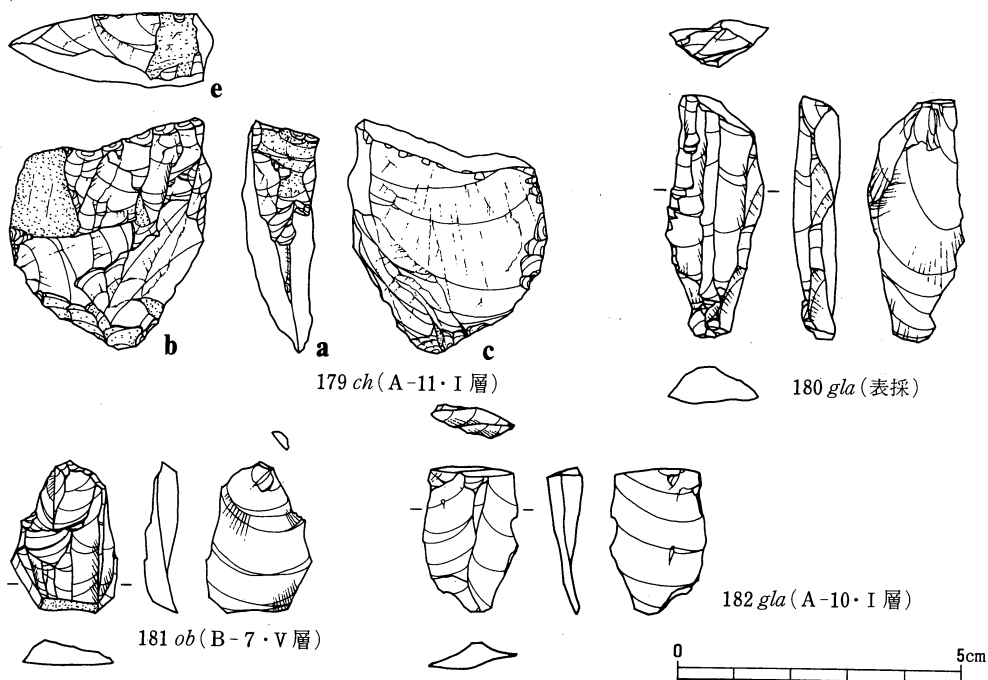


第72図 第1次調査出土資料 細石刃石核・原形

第5節 第1次調査出土資料



第73圖 第1次調査出土資料 打面形成削片・打面再生剥片



第74図 第1次調査出土資料 細石刃石核原形・細石刃石核調整剥片

縁の高まりを取り去るための調整であり、その後再び削片が剥離されている。175では、この調整によってe面の打点周辺が大きく取り去られている。175のc面に残る素材の調整面は比較的粗い。

細石刃石核打面再生剥片 (177・178) 177は、黒曜石製の打面再生剥片である。旧打面のe面は作業面の反対方向からの剥離により形成されている。末端部を折損しているが、細長い打面の短辺の一端で細石刃剥離が行われている。178は玻璃質安山岩製である。旧打面は、細石刃剥離作業面と反対の方向から剥離された平坦面で、細石刃石核の左側面 (b面) よりも新しいが、削片の剥離によるものかどうか明らかでない。細石刃剥離は、打面の短辺の一端で行われている。

細石刃剥離作業面再生剥片 (180・181) 180は、玻璃質安山岩製の楔形細石刃石核の細石刃剥離作業面再生剥片である。下端に稜を留め、右側面に下方から剥離された石核側面の調整面が見られる。打面は平坦で、打面細調整は行われていない。作業面の長さは4.26cm、打面角は約71°である。181は黒曜石製で、細石刃石核の作業面と打面・下面・左側面が残る。作業面は、正面観がほぼ方形で、並行する8条の細石刃剥離面を残し、長さ2.46cmである。左上に作業面の形状を損なう不規則な剥離面が見られる。打面は作業面に対して傾斜し、打面角は約57°、打面細調整は行われていない。下面は平坦な原礫面、左側面は打面方向からの剥離面である。

細石刃石核調整剥片 (182) 182は、玻璃質安山岩製の細石刃石核の調整剥片である。打面に細石刃の剥離面と考えられる3条の槌状剥離面が残されており、細石刃石核の作業面を打面として、その左側面部の隆起した部分を除去した再調整剥片と考えられる。

第1次・第2次調査を通じて合計6点の細石刃石核が出土しているがねそれらは素材・原形を用意する製作工程と形態上の特徴の比較から、次のような3類型に分類することができる(谷口 1991)。

I類 楕円形または尖端のある両面調整素材をあらかじめ用意し、それを縦割りするように一側縁から削片を段階的に剥離して打面を作出した楔形細石刃石核。削片の剥離は2回以上行われ、稜付きの削片とスキー状削片が生ずる。また、削片剥離後、打面部から側面の部分的な再調整が行われることがある。細石刃剥離は、削片剥離の打点側にあたる打面の一端において行われる。該当する細石刃石核は171のみであるが、この製作工程で生ずる関係資料として細石刃石核原形173と打面形成削片174～176が挙げられる。また、第2次調査出土資料では、打面形成削片2点(第50図8・9)、稜付削片3点(第49図5～7)が挙げられる。

II類 打面・細石刃剥離作業面と左右二側面からなる楔形細石刃石核で、背縁から下縁にかけて稜を有する。打面は、両側面の調整に先立って準備された平坦な一面の剥離面であり、打面作出の後、断面形が楔形となるように、主に打面・背縁・下縁から両側面が調整される。細石刃剥離は、細長い打面の短辺の一端において、打面を徐々に後退するように行われる。第4節(2)において2類型に分類したうちの①に相当するもので、該当する細石刃石核は172と第2次調査出土資料第49図1・2である。

III類 II類と同様の4面から構成される比較的小型の楔形細石刃石核。部厚い剥片を素材とし、その平坦な剥離面を打面として、両側面を調整する。下縁部に稜を有するが、稜の形成を目的とした縁辺部からの調整は、部分的であるか行われぬ。細石刃剥離は細長い打面の短辺の一端で行われる。第4節(2)において分類したうちの②に相当するもので、該当する細石刃石核は第2次調査出土資料第49図3・4である。(荻野)

(3) 細石刃

細石刃は75点出土した。石材の内訳は、玻璃質安山岩製38点(50.7%)、黒曜石製35点(46.7%)、チャート製2点(2.7%)である。今回改めて計測と観察を行い、前節第6項に定めた分類基準に従って、分類の見直しを行った。その結果部位別の内訳は、完形8点、頭部17点、中間部20点、末端部8点、末端折断12点、頭部折断3点、頭部末端折断4点となり、その他破片2点、部位不明1点がある。以下、各部位ごとに記述する。

完形 完形は8点あるが、そのうち2点は末端を僅かに折損している。側面に細部調整が加えられた例が2点あり、その部位は、背面両側面1点、末端1点である。背面に石核調整面を残すものが3点、石核再調整面を残すものが1点ある。末端を折損している2点を除く6点の長

さの平均は2.43cm、8点の幅・厚さの平均はそれぞれ0.88cm・0.21cmである。

頭部 頭部は17点あり、そのうち細部調整が加えられた例が2点含まれる。調整が加えられた部位は、腹面左側辺1点、腹面両側辺1点である。背面に石核調整面を残すものが7点、原礫面を残すものが1点ある。下端の折れ面の折断方向は、背→腹が14例、腹→背が3例であった。17点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ1.58cm・0.85cm・0.19cmである。

中間部 中間部は20点あり、最も多く残存する部位である。細部調整が加えられた例は1点あり、その部位は背面両側辺である。背面に石核調整面を残すものが3点、原礫面を残すものが1点ある。上下の折れ面の折断方向は、上下ともに背→腹が17例、上下ともに腹→背が1例、上下の折断方向の異なるものがそれぞれ1例ずつであった。20点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ1.33cm・0.73cm・0.16cmである。

末端部 末端部は8点ある。背面に石核調整面を残すものが1点、石核調整面と原礫面をともに残すものが1点ある。上端の折れ面の折断方向は、背→腹が7例、腹→背が1例であった。8点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ1.50cm・0.79cm・0.18cmである。

末端折断 末端折断は12点ある。背面に石核調整面を残すものが5点、原礫面を残すものが2点ある。下端の折れ面の折断方向は、背→腹が10例、腹→背が2例であった。12点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ2.37cm・0.84cm・0.23cmである。

頭部折断 頭部折断は3点ある。細部調整が末端に加えられた例が1点ある。背面に石核調整面を残すもの、原礫面を残すものが1点ずつある。上端の折れ面の折断方向は、背→腹が2例、不規則な折れ方をしているものが1例であった。3点の長さ・幅・厚さの平均は、それぞれ2.05cm・0.64cm・0.17cmである。

頭部末端折断 頭部末端折断は4点ある。背面に石核調整面と原礫面を残すものが1点ある。折れ面の折断方向は、上下とも背→腹が2例、上下とも腹→背が1例、上が背→腹で下が腹→背が1例であった。4点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ2.11cm・0.63cm・0.24cmである。

破片 破片は2点あり、いずれも右側辺を折損している。そのため、長さ・幅の平均は求められないが、厚さの平均は0.14cmである。

部位不明 折損のため、部位を判定できない例が1点ある。腹面左側辺に細部調整が見られる。

細石刃75点を総合して見てみると、細部調整が加えられた例は7点あり、全体に占める比率は9.3%である。細部調整が加えられた部位は、腹面左側辺2点、背面両側辺2点、腹面両側辺1点、末端2点となる。背面に石核調整面あるいは原礫面を残すものは30点あり、全体の40.0%を占める。折断例64点の統計は、背→腹が74例、腹→背が13例、不規則な折れ方が1例であり、背→腹が圧倒的に多い。端部を折損している4点を除く71点の長さの平均は1.75cm、破片2点を除く73点の幅の平均は0.79cm、75点の厚さの平均0.18cmである。なお、頭部1点、中間部1点、末端部1点の3点が接合した。

(荻野)

第6節 母岩別資料

(1) 母岩別資料1 (第75図～第77図)

石材 濃飛流紋岩。全体の色調は灰白色で、高温石英(黒点)、斜長石(白点)の斑晶を含み、全体が斑状の組織を呈する。緻密で割口は貝殻状断口を示す。

資料 第75図1は、背面の一部に原礫面を残す大型で部厚い剥片を素材とし、その打点側の両面に調整を加え刃部を設けた打製石斧である。刃部は両刃形で、平面形は緩い弧状をなすが、正面形は蛇行している。上部を折断しており、その折れ面を打面として正面から縦長剥片を剥離している。3は、打製石斧の上部の折れ面を打面として剥離された縦長剥片である。背面には同一打面からの縦方向の剥離面と打製石斧の素材の主剥離面が残されている。中間で折断した2点が接合した。4は、打製石斧の刃部の調整の過程で生じた剥片である。打面は原礫面である。背面には打製石斧の素材の主剥離面の一部が残るが、その打瘤を取り去るための階段状の調整が加えられている。5も刃部の調整剥片である。階段状剥離による両面調整によって下端に直線的な稜が形成されている。

接合資料と製作工程 打製石斧1に刃部の調整剥片4と剥片2・3が接合した(第76図)。

素材の剥片は背面に残る原礫面を打面として剥離されており、その剥離角は約25°である。素材の背面には横方向からの大きな剥離面が見られる。刃部の調整は素材の打瘤を取り去るように背面側(実測図表面)から比較的大きな剥離を加えた後、背面側の縁辺に細部調整を加えている。左側面に節理面に沿った折断が見られるが、そのほかの側縁部の調整はほとんど行われていない。素材の下端にあたる上部を折断しており、その後折れ面を打面として右側縁部から剥片3が剥離されている。剥片2は剥片3の背面に接合する。右側面の上端にも折れ面を打面とする小さい剥離面が見られる。

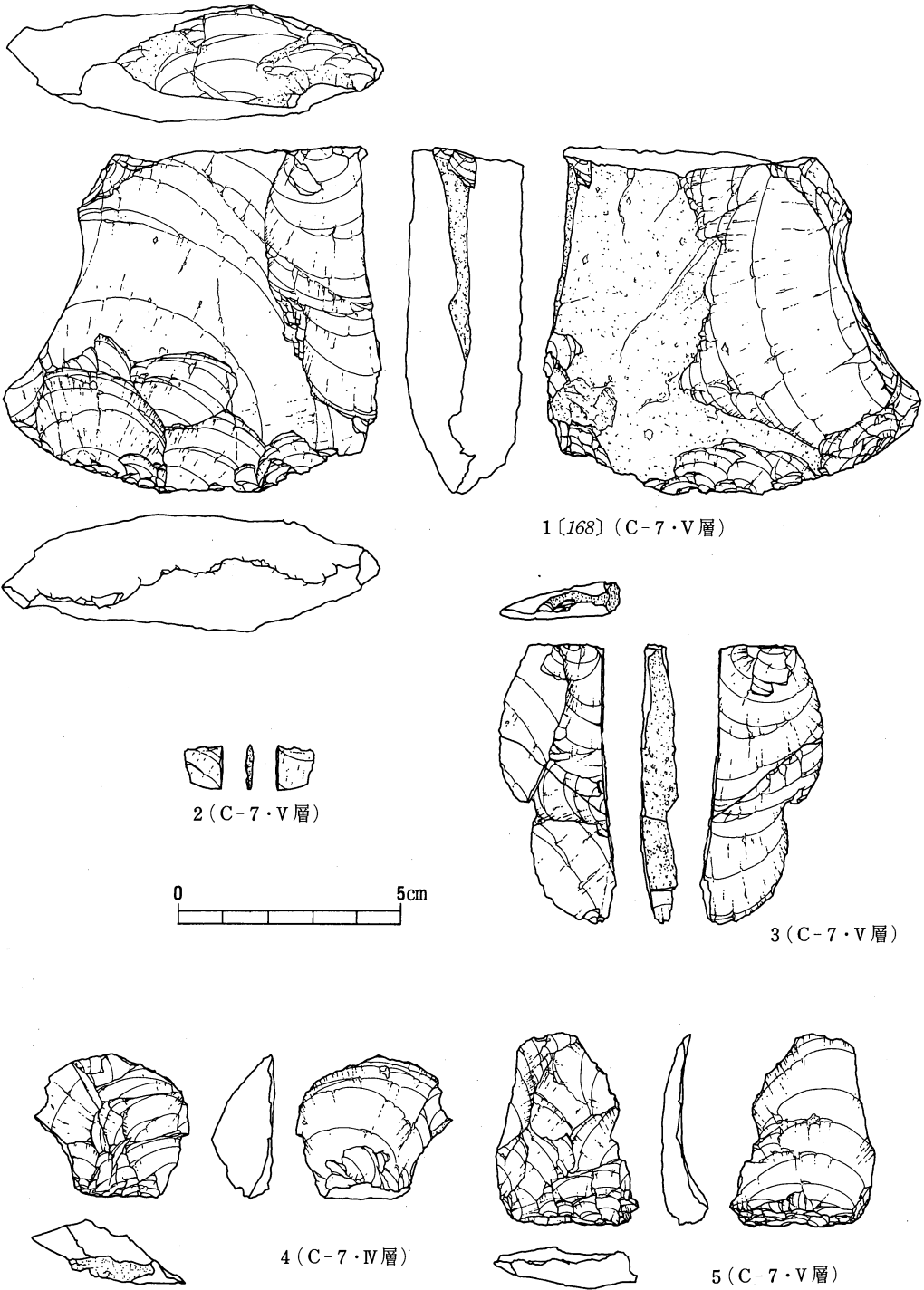
5は背面が多方向からの剥離面で構成されており、下端の稜線の両面には階段状の剥離が集中して加えられている。素材の主剥離面や原礫面をまったく残しておらず、打製石斧1の製作工程からは生じ得ない剥片である。このことから同一母岩の剥片を素材とした別個体の打製石斧が存在したことが考えられる。

分布 包含層中から出土した6点はすべてC-7区の西南側にまとまって分布しており、打製石斧を含む5点の接合が認められる(第77図)。出土層位は4が第IV層、その他はすべて第V層である。(若泉・橋)

(2) 母岩別資料2 (第78図～第82図)

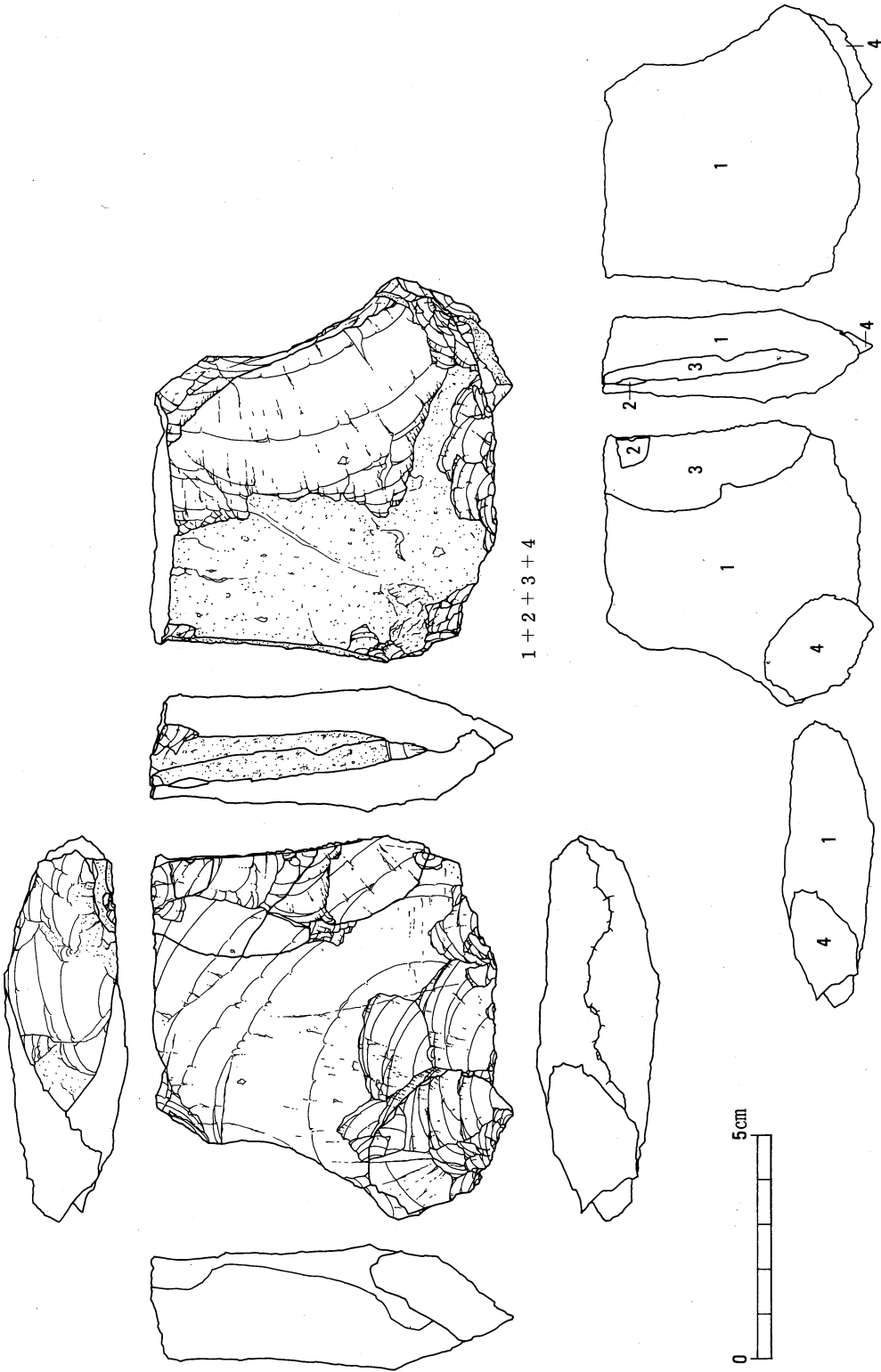
石材 チャート。石質は緻密かつ均質で、脂肪光沢を持つ。割口は貝殻状断口を示すが、同一方向の節理が多数あり、部分的に板状に破碎することがある。色調は褐色である。

資料 石核2点、石刃状剥片1点と縦長剥片4点を含む19点の剥片が出土した(第78図・第79図)。

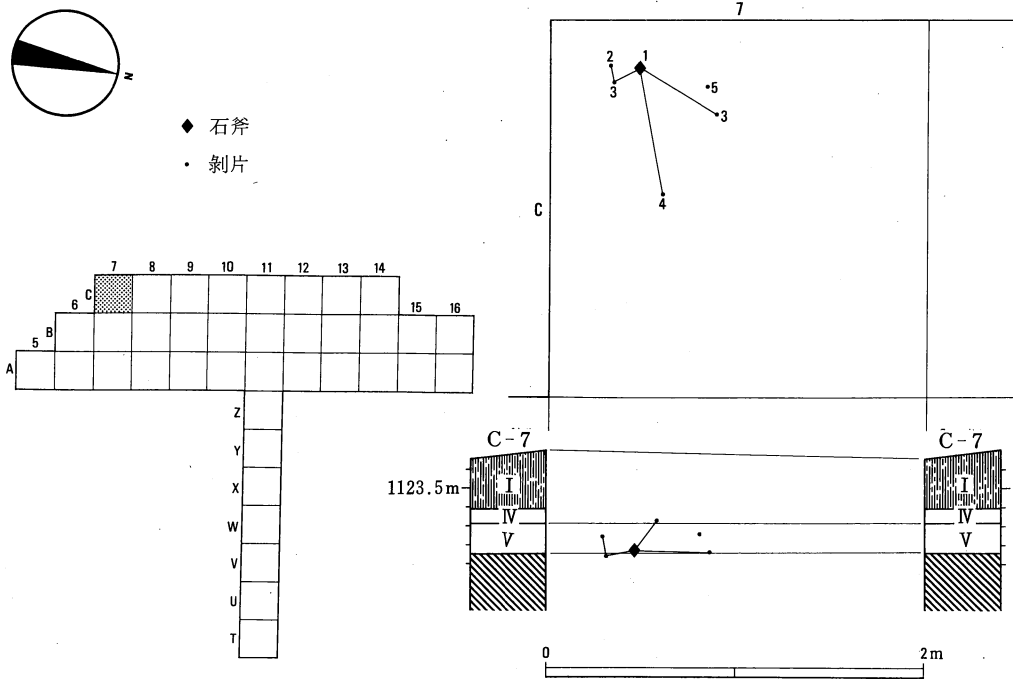


第75圖 第V層文化層 母岩別資料1

第6節 母岩別資料



第76圖 第V層文化層 母岩別資料 1 接合資料



第77図 第V層文化層 母岩別資料1 分布図

1は板状の角礫を素材とし、その細長い上面に長軸方向から剥離を加え打面を形成した単設打面石核である。剥片剥離は打面の短辺の一端で行われており、石刃状の縦長剥片が剥離されている。打面角は約75°である。打面調整は行われていない。両側面と裏面に原礫面を残している。2は板状の角礫を分割した多面体状の素材の一端から小型の剥片を剥離している。石核または石核用の素材と考えられる。8は単剥離面打面から剥離された石刃状剥片で、背面には同一打面から剥離された平行的な剥離面が見られる。右側面に原礫面を残している。9は石刃状の狭長な縦長剥片で、背面には同一打面から剥離された縦方向の剥離面が見られる。打面は単剥離面打面で打面調整は行われていない。背面の上端に石核の頭部調整が見られる。右側面に原礫面を残している。剥離角は約128°である。10は断面三角形の狭長な縦長剥片である。背面を構成する剥離面は、すべて同一打面から縦方向に剥離されたものである。右側面に原礫面を残し、左側面は節理面である。左側面の上端に作業面を打面とする横方向の石核調整が加えられており、打面が小さく残る。打面調整は認められない。14は狭長な縦長剥片で、背面には同一打面から剥離された縦長の剥離面が見られる。上部に部分的に平坦な原礫面が残されている。打面は比較的大きいネガティブな剥離面の打点付近であり、端部に細かい階段状の調整が加えられている。また、右側面部には背面側から横方向に剥離された石核の整形面が認められ、さらにこの面を打面として石核の下部の整形が行われている。剥離角は約135°である。17は石刃状の縦長剥片で、上部と下部を折断している。背面を構成する剥離面はすべて上方向か

らの剥離面である。右側面は節理面である。11～13は剥片剥離の過程で石核の頭部から剥離された小型の縦長剥片である。11・12には、単剥離面打面が小さく残されている。3～7は節理に沿って石核から板状に剥がれると同時に、折れ面状の折断面によって不規則に破碎した剥片で、正規な剥片剥離に見られるような打点や打瘤を持たないものである。いずれも表裏に節理面が見られ板状を呈している。15は単剥離面打面から剥離された不定形の横長剥片である。16も不定形剥片で、2つの打瘤を持つ。一方に残る打面は単一の剥離面である。その他に小型の縦長剥片とその破片が5点ある。

接合資料と剥片剥離工程 石核1・2に石刃状剥片1点(8)を含む7点の縦長剥片と、節理面に沿って不規則に破碎した5点の板状剥片が接合した。その他に2点の不定形の横長剥片(15・16)の接合資料がある。

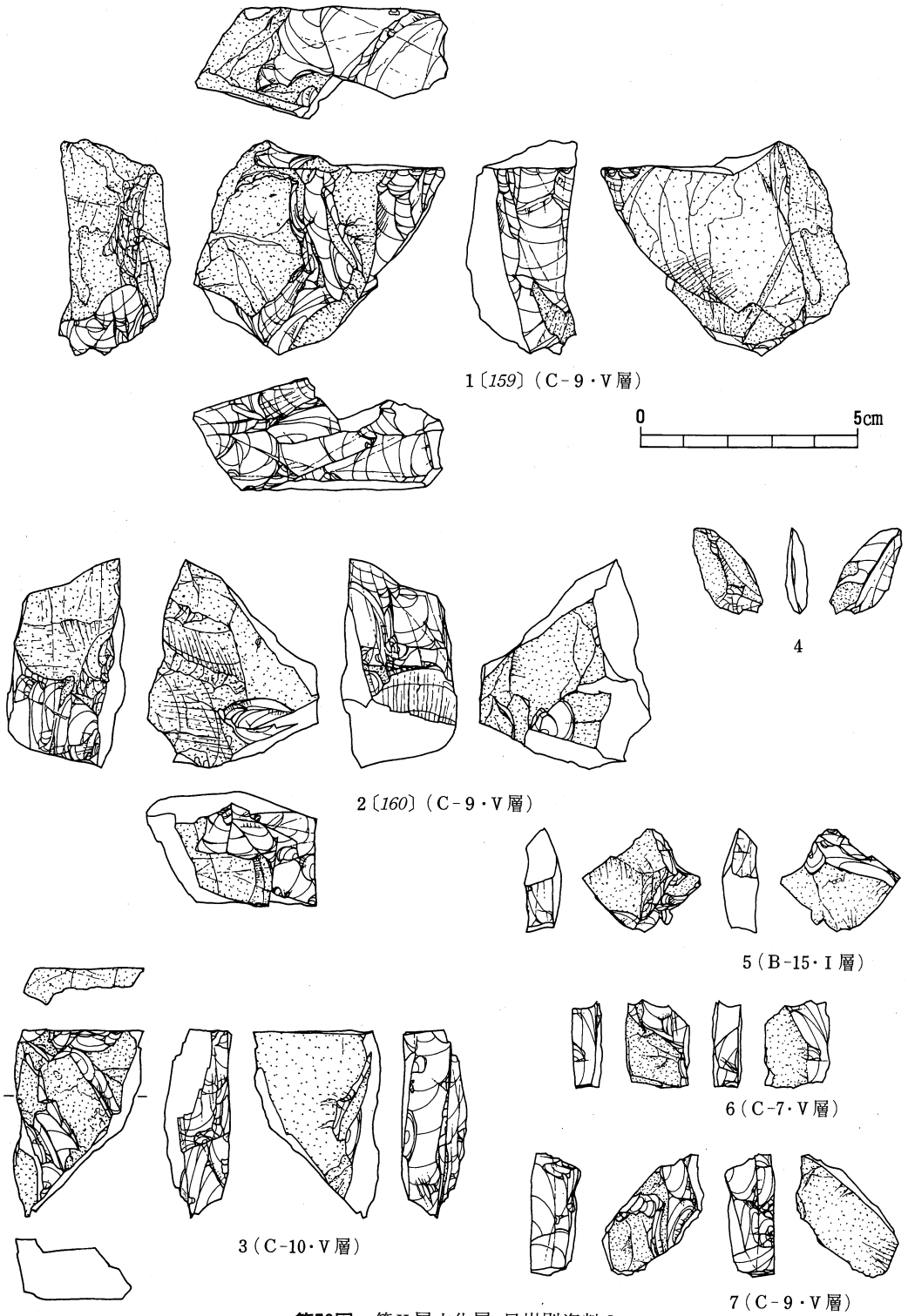
第80図は、石核1・2を含む14点の接合資料である。これらの接合関係から原礫の分割・石核の整形・打面の形成・剥片剥離に至る次のような一連の工程が明らかにされた。

厚さ3cm程度の板状の角礫を素材とし、下部を分割して、扁平な六面体状の素材を用意する。石核2はその際に分割された一片であり、折れ面状の折断面によって1の下部に接合する。その後、石核の正面から左側面を部分的に整形しているが、石核の両側面と裏面には原礫面がそのまま大きく残されている。縦長剥片14の背面には、素材の正面の原礫面と石核右側面の整形面が部分的に残されており、さらに側面の整形面を打面として石核の下面の整形が行われていたことがわかる。その後、素材の細長い上面の長軸方向の一端から剥片を剥離し、平坦な打面を形成している。14の打面には、その際のネガティブバルブが残されている。1の打面には2面の剥離面が残されていることから、打面形成を目的とする2回の剥離が行われたことがわかる。その後、この細長い打面の短辺の一端から剥片剥離を開始し、14・10・9・8に見られるような、石刃状の縦長剥片が連続して剥離されている。打面調整は行われていない。作業面の頭部調整が比較的顕著であり、剥片剥離の過程で11・12・13に見られるような小型の縦長剥片も剥離されている。目的とされた剥片は、8・9に見られるような石刃状の狭長な縦長剥片であり、剥離角が大きいことと打瘤が低く未発達である点に特徴がある。

なお、石核の両側面に平行するように多数の節理があるため、不規則な割れが生じ、作業面に階段状の段差が生じている。この段差を取り去るため、3に残る作業面から部分的な整形が加えられているが、段差を取り去ることができず、石核の右側面部から節理に沿って5点の板状剥片が剥離され、石核がさらに薄く整形されている。

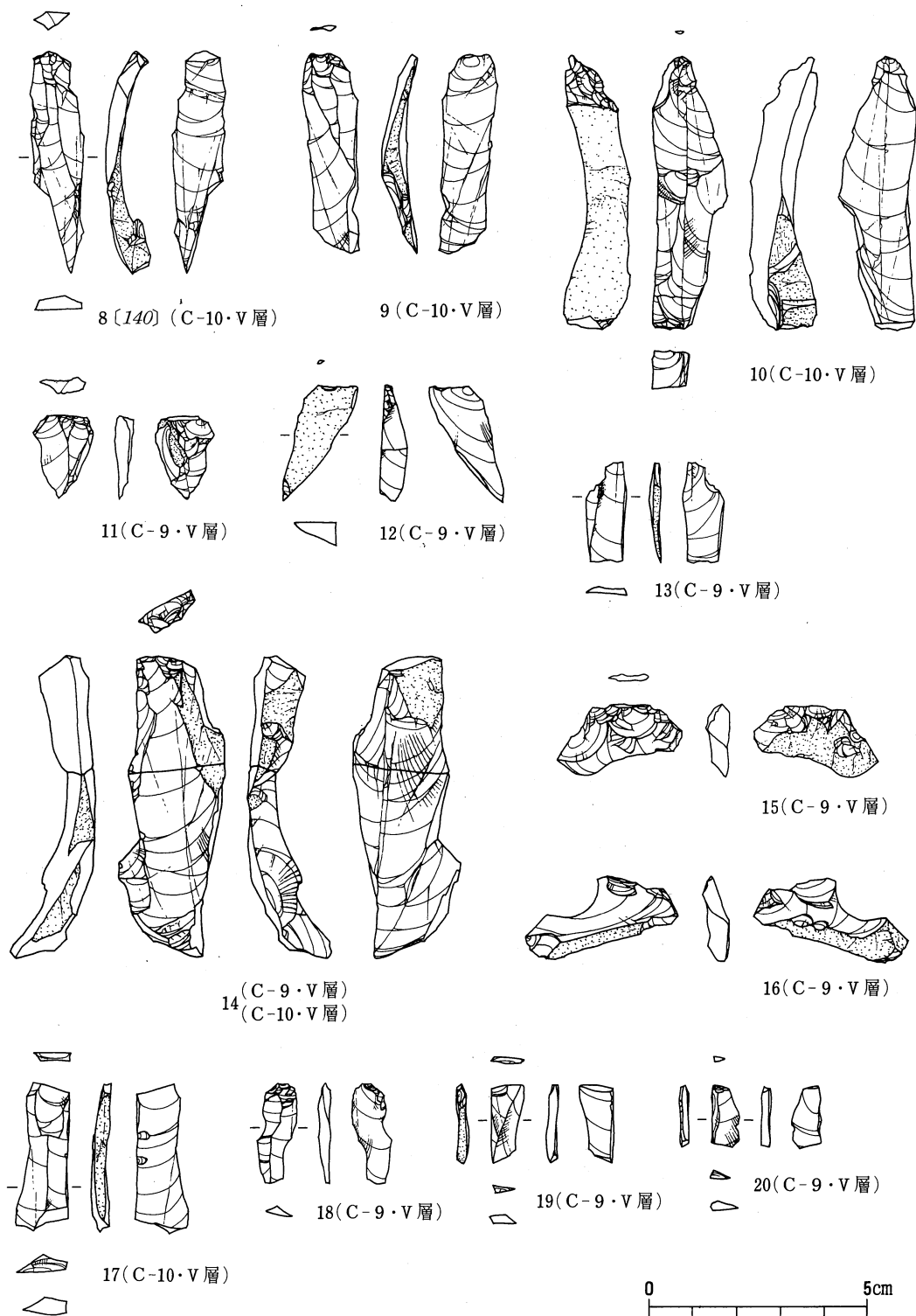
分布 計23点のうち、第V層から出土した20点は、C-7～10区の4グリッドに分布しており、C-9区を中心とする比較的狭い範囲で、石核1・2を中心とする集中的な接合関係が認められる(第82図)。出土層位は、剥片4・5を含む第I層出土の3点を除いて、すべて第V層である。(山内・橋)

第VI章 第V層文化層

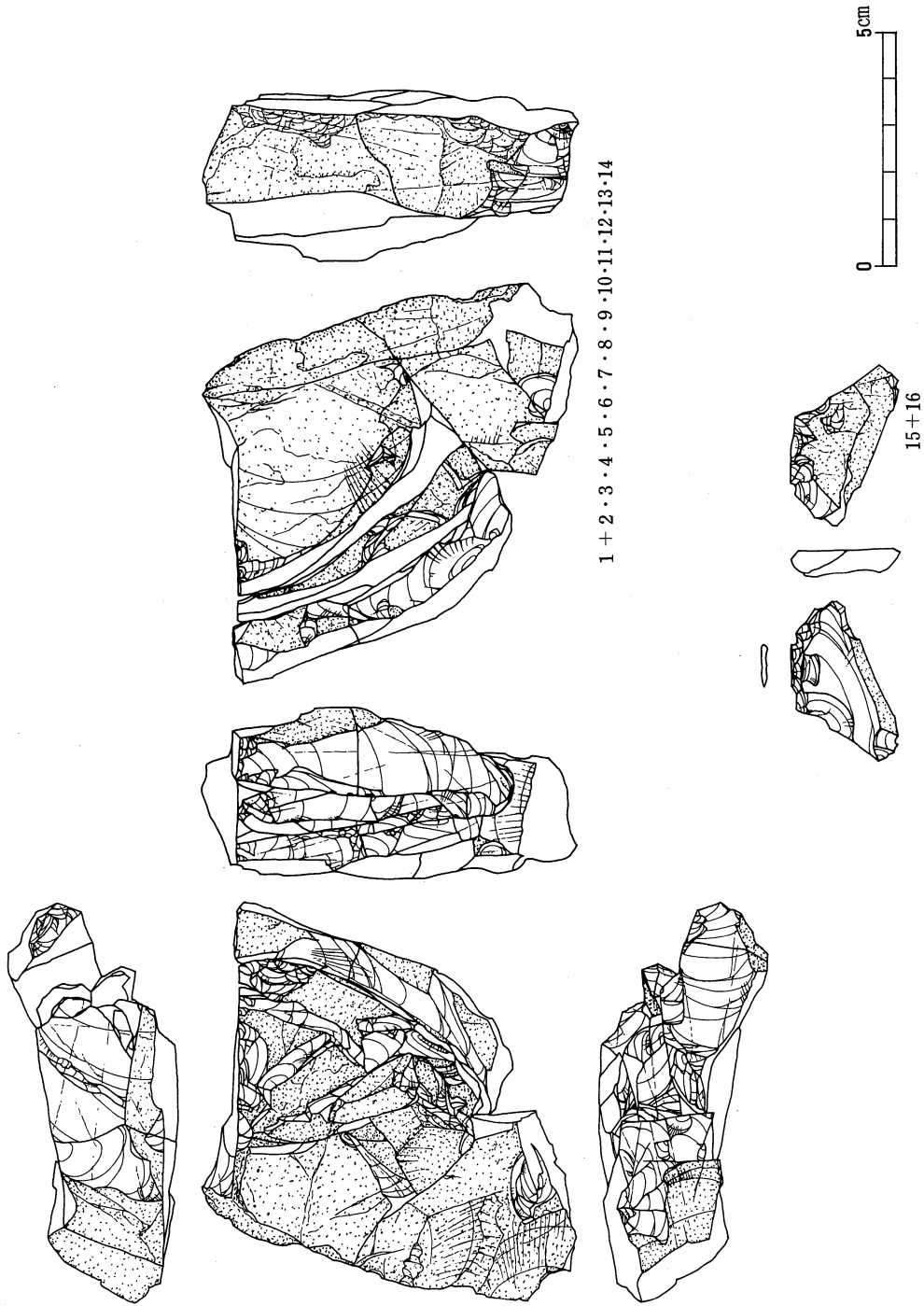


第78圖 第V層文化層 母岩別資料2

第6節 母岩別資料

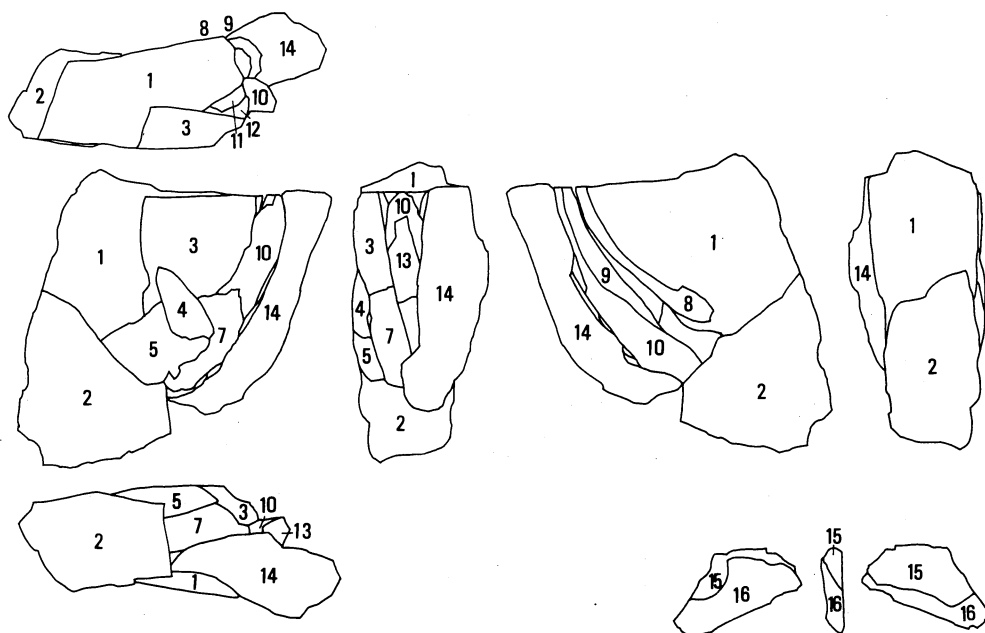


第79圖 第V層文化層 母岩別資料2

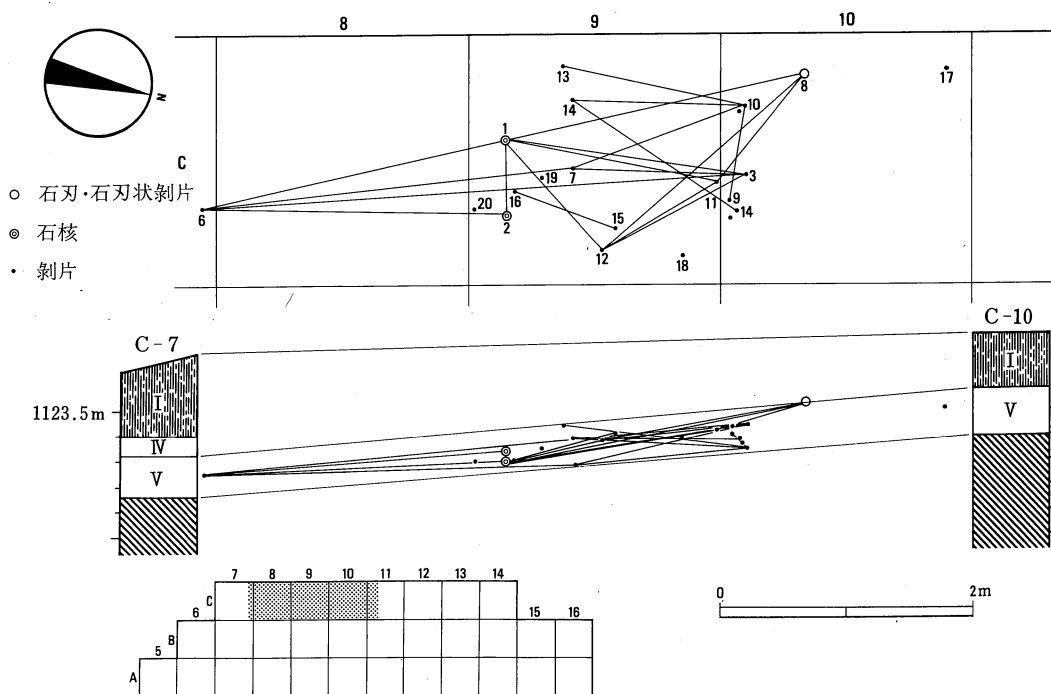


第80圖 第V層文化層 母岩別資料2 接合資料

第6節 母岩別資料



第81圖 母岩別資料2 接合資料白圖



第82圖 第V層文化層 母岩別資料2 分布圖

(3) 母岩別資料3 (第83図～第86図)

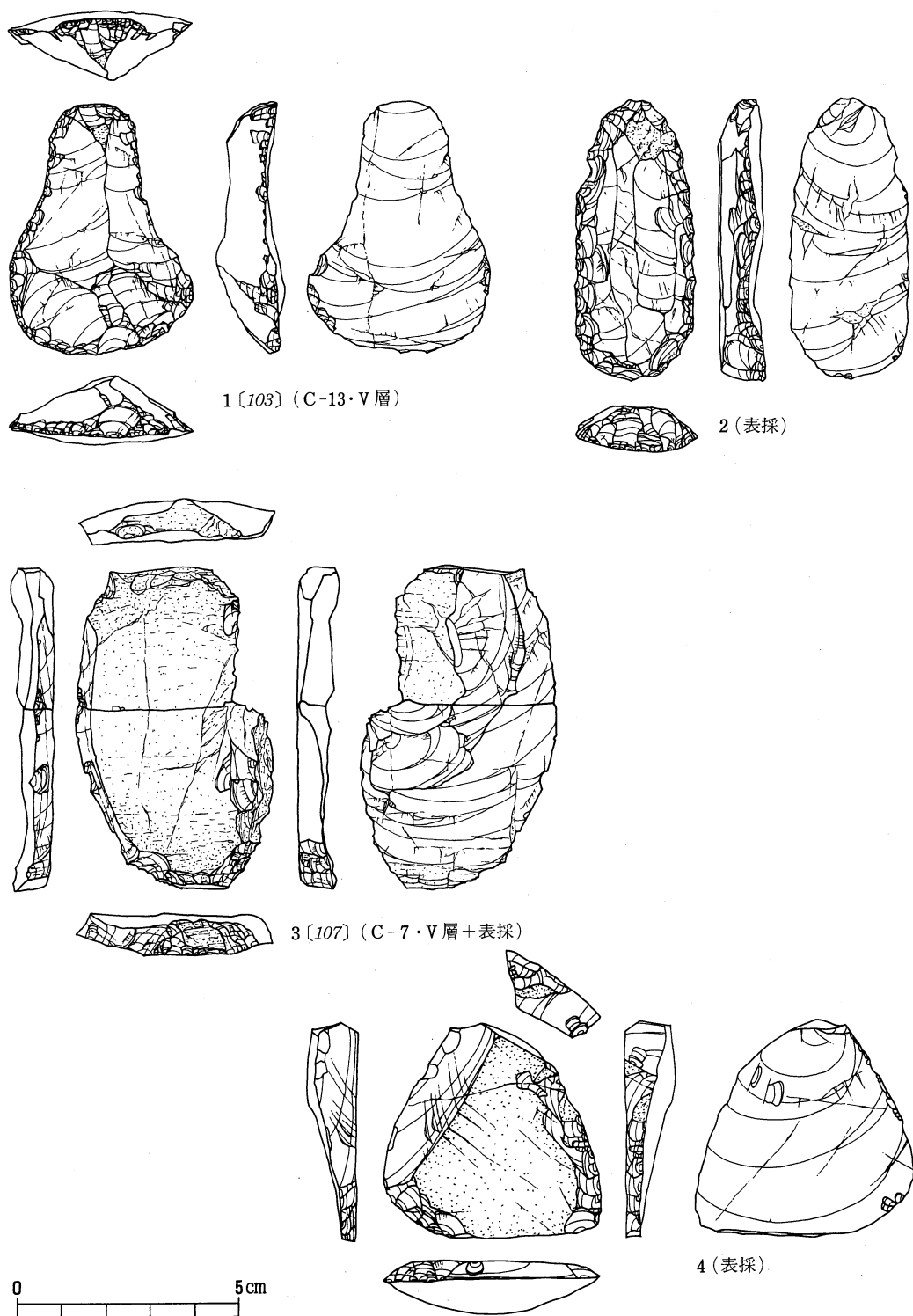
石材 縞状組織を持たない塊状チャート。縦横に節理が見られるが、石質は均質かつ緻密で、脂肪光沢を持ち、割口は貝殻状断口を呈する。全体に青緑色を呈し、処々に紺色の部分が斑状に混入している。

資料 複刃搔器1点、搔器2点、削器1点、石核2点、大型縦長剥片1点、その他の剥片12点が含まれる⁽²⁸⁾ (第83図～第85図)。

1は、末広がり縦長剥片を素材とし、その長軸上の上端と下端に弧状の刃部を作り出した複刃搔器である。両側縁にも細部調整が加えられている。素材の背面には対向する上下二方向からの剥離面が見られ、一部に原礫面が残されている。2は、背面に原礫面を残す石刃を素材とし、その末端部に急斜度の調整によって弧状の刃部を作り出した搔器である。両側縁にも比較的急斜度の連続的な細部調整が加えられている。素材の背面には、上方向から平行的に剥離された3面によって平行する稜が形成されている。素材の打面は2面の剥離面からなる。3は背面全体に大きく原礫面を残す縦長剥片を素材とし、その末端の一辺に直線状の刃部を作り出した搔器である。素材の打面と下端に、平行する平坦な原礫面を留めており、高さ約7cmの角礫から剥離されたことがわかる。背面の左側には同一打面から剥離された縦方向の剥離面が見られる。中間部で折断した2片が接合した。4は背面に大きく原礫面を残す剥片を素材とし、その下端を折断した後、右側縁および下端の一部に弧状の刃部を作り出した削器である。素材の打面に細かい打面調整が加えられている。5は比較的小型の石核で、図の正面と裏面の一部において小型の不定形剥片が剥離されている。左側面は原礫面、下面は素材を大きく分割した平坦な節理面である。6～9は小型の不定形剥片である。10は比較的大型の縦長剥片で、背面には上方向から連続的に剥離された剥離面が見られる。打面に接する背面の上部には、剥片剥離によって生じた石核の稜を取り去るための頭部調整が加えられている。打面は部分的に細かくはじけているが、単剥離面打面である。11・12は背面に原礫面を残す小型の縦長剥片である。13は縦長剥片で、下部を折断している。打面の端部に細かい調整が加えられている。14は比較的小型の石核で、図の正面、左側面と右側面の一部において比較的小型の不定形剥片を剥離している。打面は素材の角礫を節理面に沿って大きく分割した平坦面であり、打面調整は行われていない。左側面に原礫面を残す。正面の節理面も素材の分割面である。15は節理面に沿って角状に剥離した不定形剥片で、左側面に原礫面を残す。

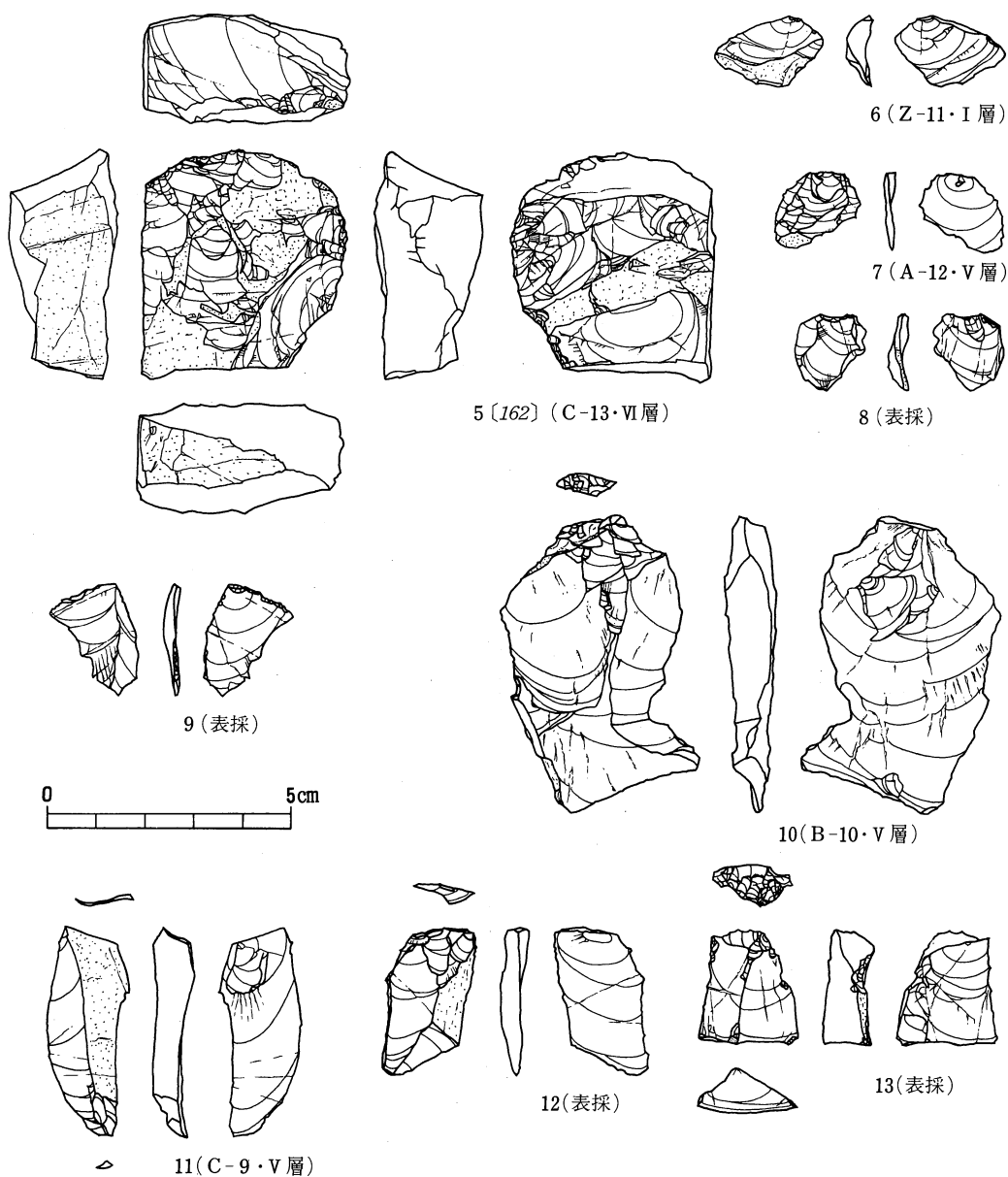
接合資料 石核14・剥片15の2点が接合した(第85図下)。15は剥片剥離の過程で節理に沿って不規則に破碎したものである。これ以外の接合資料が得られていないため剥片剥離工程の復元は難しいが、1～4の素材に見られるように、工程の初期に原礫の表面から比較的大型の縦長剥片が連続的に剥離されており、それらが搔器・削器の素材として利用されている。石核5・14には、素材の角礫を節理に沿って大きく分割した面が部分的に残されているが、これらは剥

第6節 母岩別資料



第83圖 第V層文化層 母岩別資料3

第VI章 第V層文化層



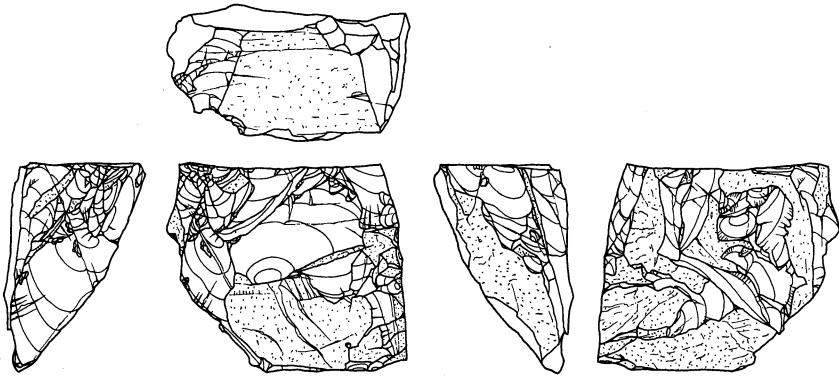
第84図 第V層文化層 母岩別資料3

片剥離工程が進んだ最終的な残核と考えられる。

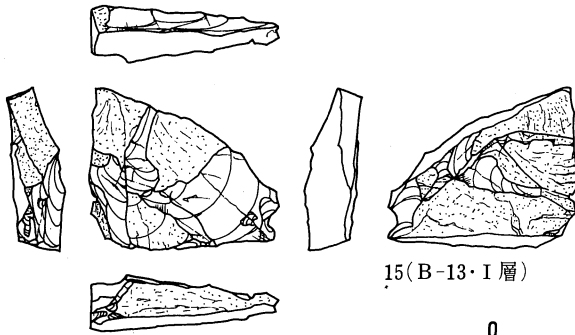
分布 計19点のうち、第V層および第VI層から出土した7点は、7～13区にかけての広範囲に分布しており、特に集中箇所は見られない(第86図)。出土層位は、1・3・7・10・11・14の6点が第V層、5が第VI層、6・15を含む7点が第I層、その他は表面採集の資料である。

(山内・橘)

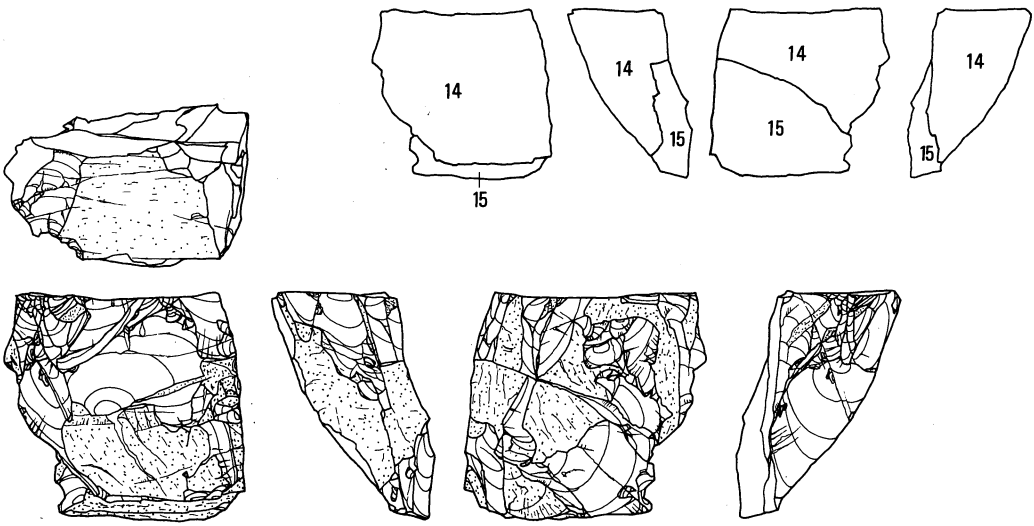
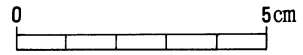
第6節 母岩別資料



14(A-12·V層)



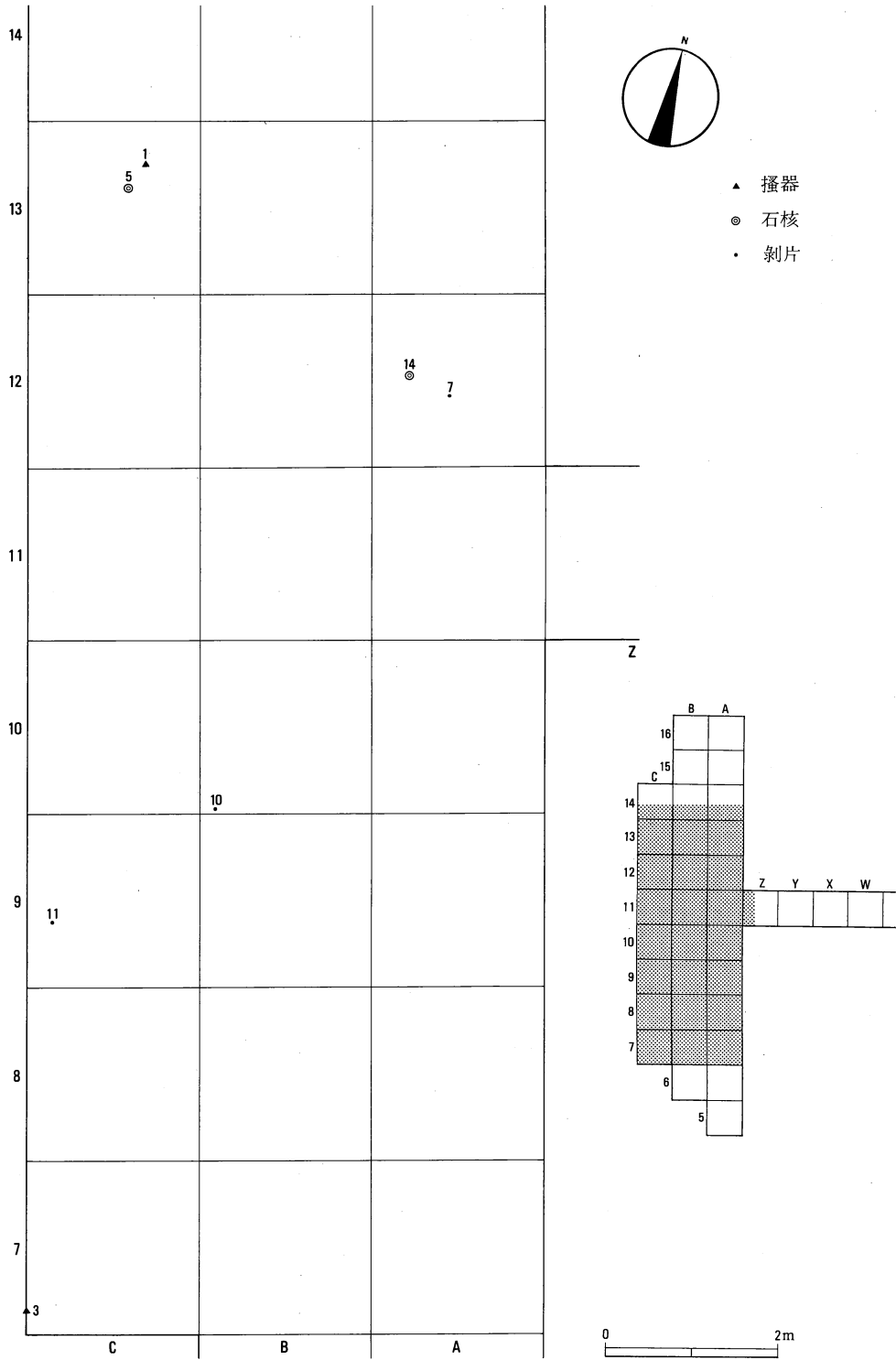
15(B-13·I層)



14+15

第85圖 第V層文化層 母岩別資料3 接合資料

第VI章 第V層文化層



第86图 第V層文化層 母岩別資料3 分布图

(4) 母岩別資料4 (第87図～第89図)

石材 チャート。緻密・均質で脂肪光沢のある比較的良質のチャートで、割口は貝殻状断口を呈する。色調は赤・青の部分が斑状に混じる。

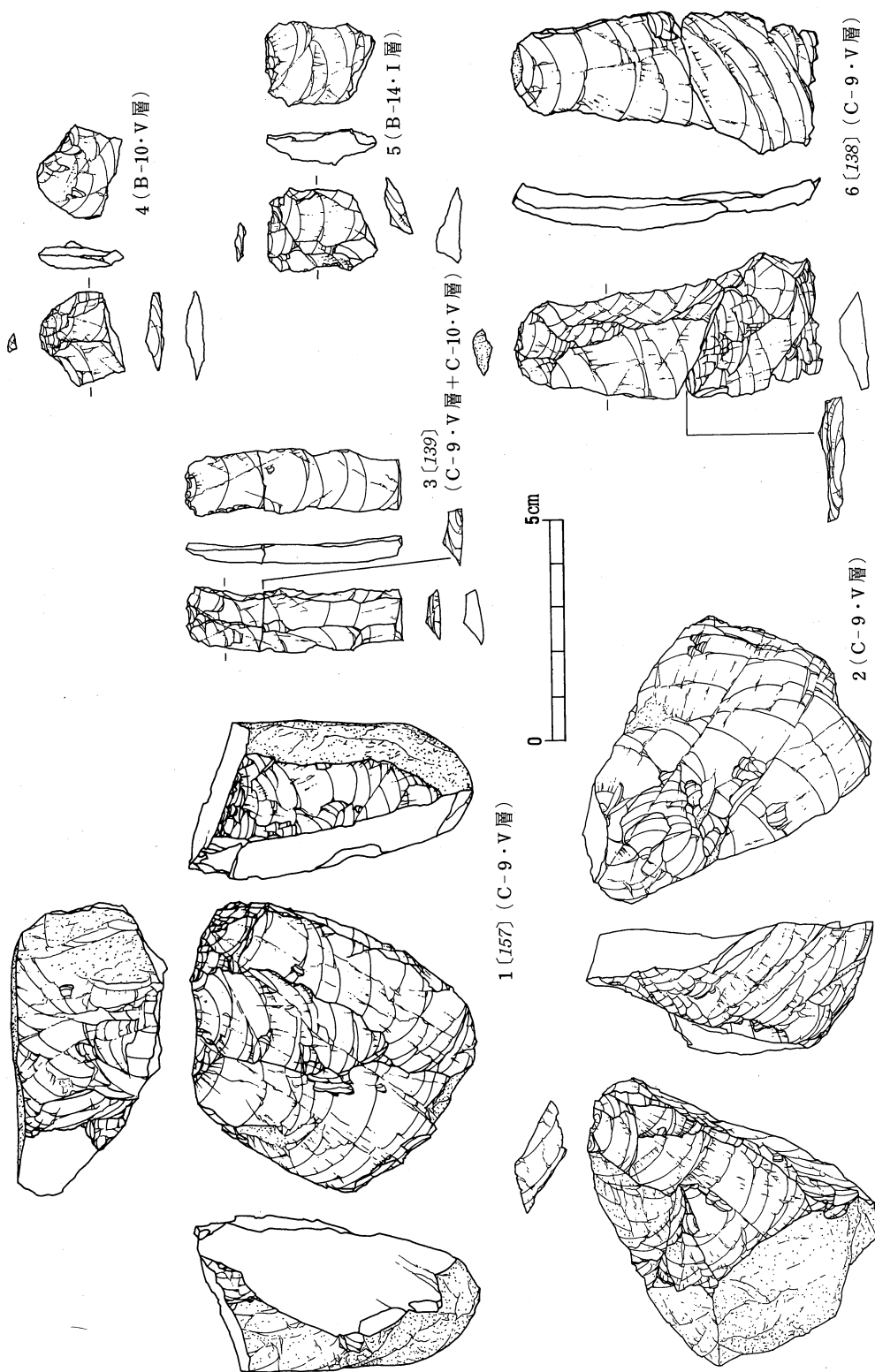
資料 石核1点、石刃4点、剥片5点が含まれる。このうち接合資料6点を図示した(第87図)。

1は単設打面石核で、図の正面から右側面にかけての範囲で石刃と縦長剥片を剥離している。単剥離面打面で、打面調整は行われていない。打面に接する作業面上端に頭部調整が加えられている。背面に原礫面を残し、左側面に打面形成以前の素材の分割面が見られる。打面角は正面で約60°である。2は部厚い不定形剥片で、背面の下部に石核の原礫面を留めている。甲高な背面には、この剥片の打面と同一の打面から石刃を剥取した縦長の剥離面が見られ、打面に接する上端部には、その剥離の過程で生じた稜の部分を取り除く頭部調整が加えられている。打面は単一の剥離面で、打面調整は行われていない。剥離角は約110°である。背面の左側に素材を分割した節理面が残る。3～6は石刃である。3は両側縁が平行する狭長で典型的な石刃である。折断した頭部と中間部が接合した。さらに末端部を折断している。背面を構成する剥離面は、すべて上方向から平行的に剥離された剥離面である。上部に石核の頭部調整が認められる。打面は破碎している。4は折断された石刃の頭部で、打面が小さく残る。打面調整は認められない。背面は同一打面からの平行的な剥離面によって構成されており、上部に石核の頭部調整が認められる。5も石刃の頭部で、下部が折断されている。打面部は剥離の時点で破碎し、幅狭い折れ面となっている。背面を構成する剥離面は、すべて上方向の同一打面からの剥離による。6は3点に折断したものが接合した。背面を構成する剥離面はすべて上方向から剥離されており、左から右に向かって剥離が進行したことがわかる。上部に石核の頭部調整が認められる。打面調整は認められない。剥離角は約120°である。

接合資料と剥片剥離工程 石核1と石刃3～6、剥片2が接合した(第88図)。

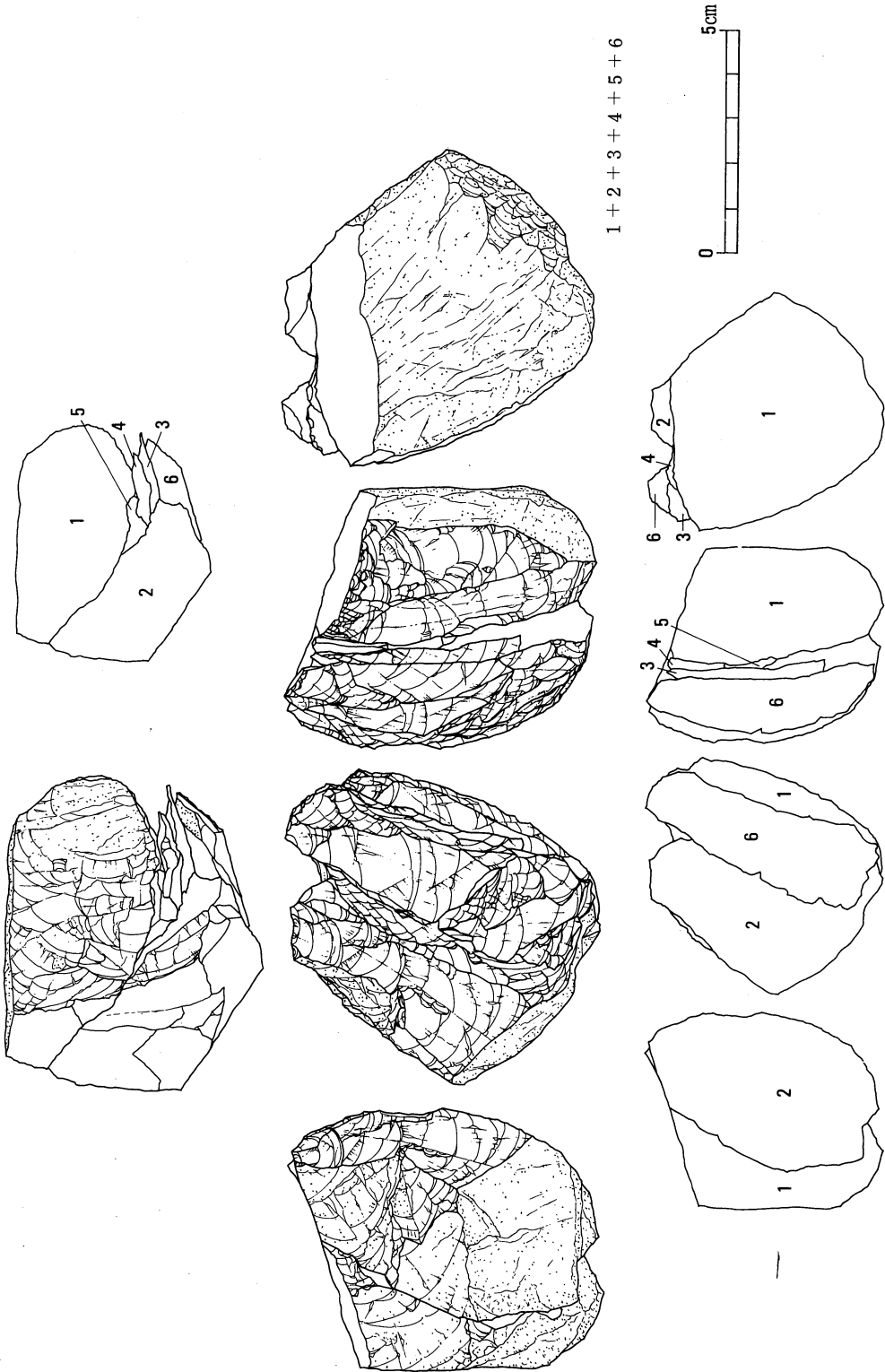
チャートの角礫を節理面に沿って分割して六面体状の素材を用意し、その上部を打割して単剥離面打面を設定している。打面調整は行われていない。側面および下面・裏面の整形は行われていない。剥片剥離は主に長方形状を呈する打面の一辺において、打面を徐々に後退するように進められているが、一部右側面部にも及んでいる。接合資料6点の剥離順序は、6→2→3→4→5であり、最初に用意された同一打面から、石核の正面において石刃を連続的に剥離したことがわかる。石刃3～6の背面は、いずれも同一打面から剥離された平行的な剥離面で構成されており、石核1の最終的な作業面にも、石刃の連続的な剥離による平行的な稜線が残されている。剥片剥離の工程で打面再生や打面転位は行われていない。一方、石刃を連続的に剥離していく過程で生じた打面端部の稜を取り去るための頭部調整は顕著である。

分布 計12点のうち、第V層および第VI層から出土した11点は、1・2・3・6を含む9点がC-9区を中心とする狭い範囲から集中的に出土し、残りの2点は比較的離れたA-14区・B-

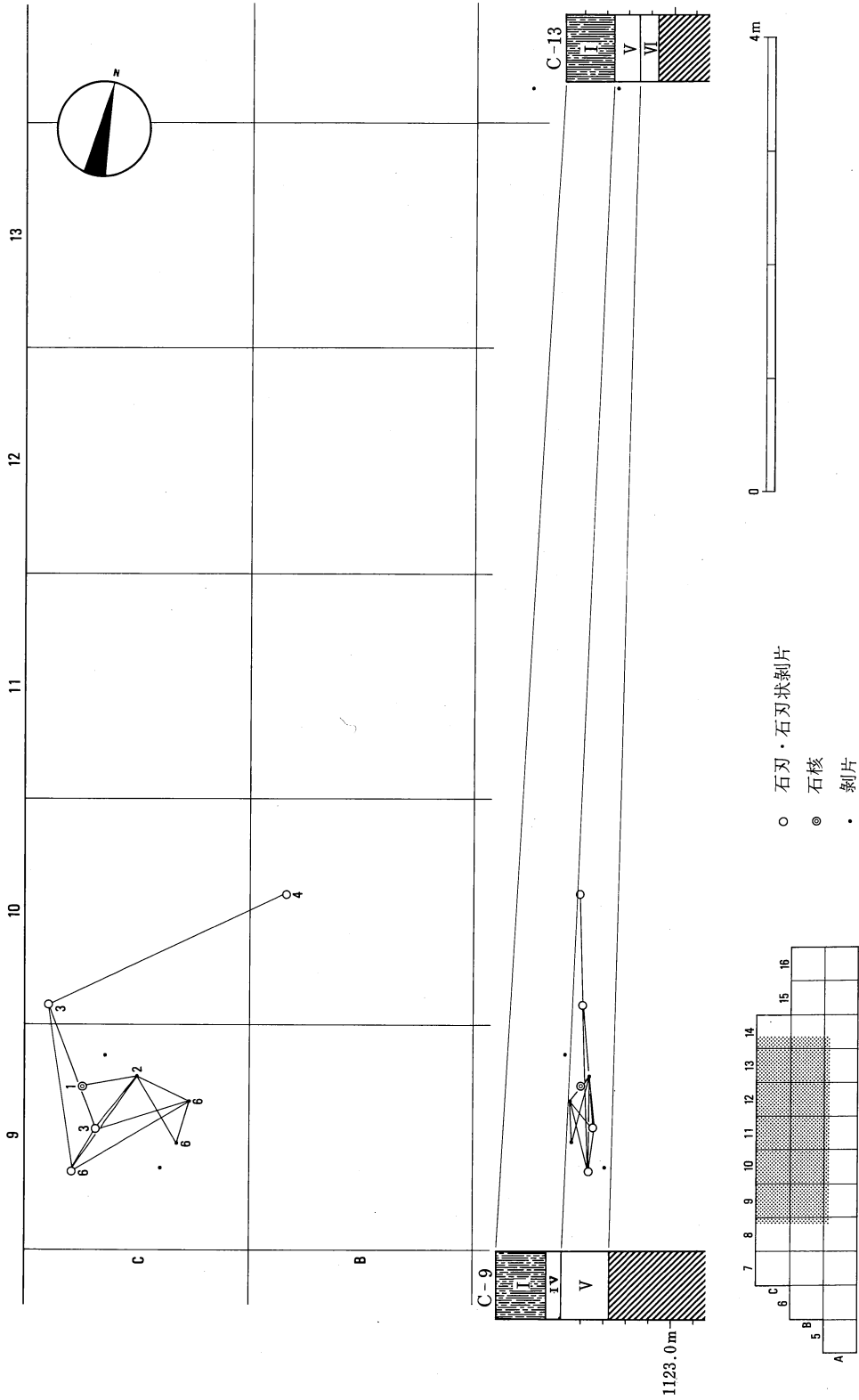


第87圖 第V層文化層 母岩別資料4

第6節 母岩別資料



第88圖 第V層文化層 母岩別資料4 接合資料



第89图 第V層文化層 母岩別資料4 分布图

10区から出土した(第89図)。このうち、石核1を中心とする石刃3～6・剥片2が、B-10区、C-9・10区において接合した。出土層位は、第VI層から出土した剥片1点と第I層から出土した石刃5を除いて、すべて第V層である。(山内・橋)

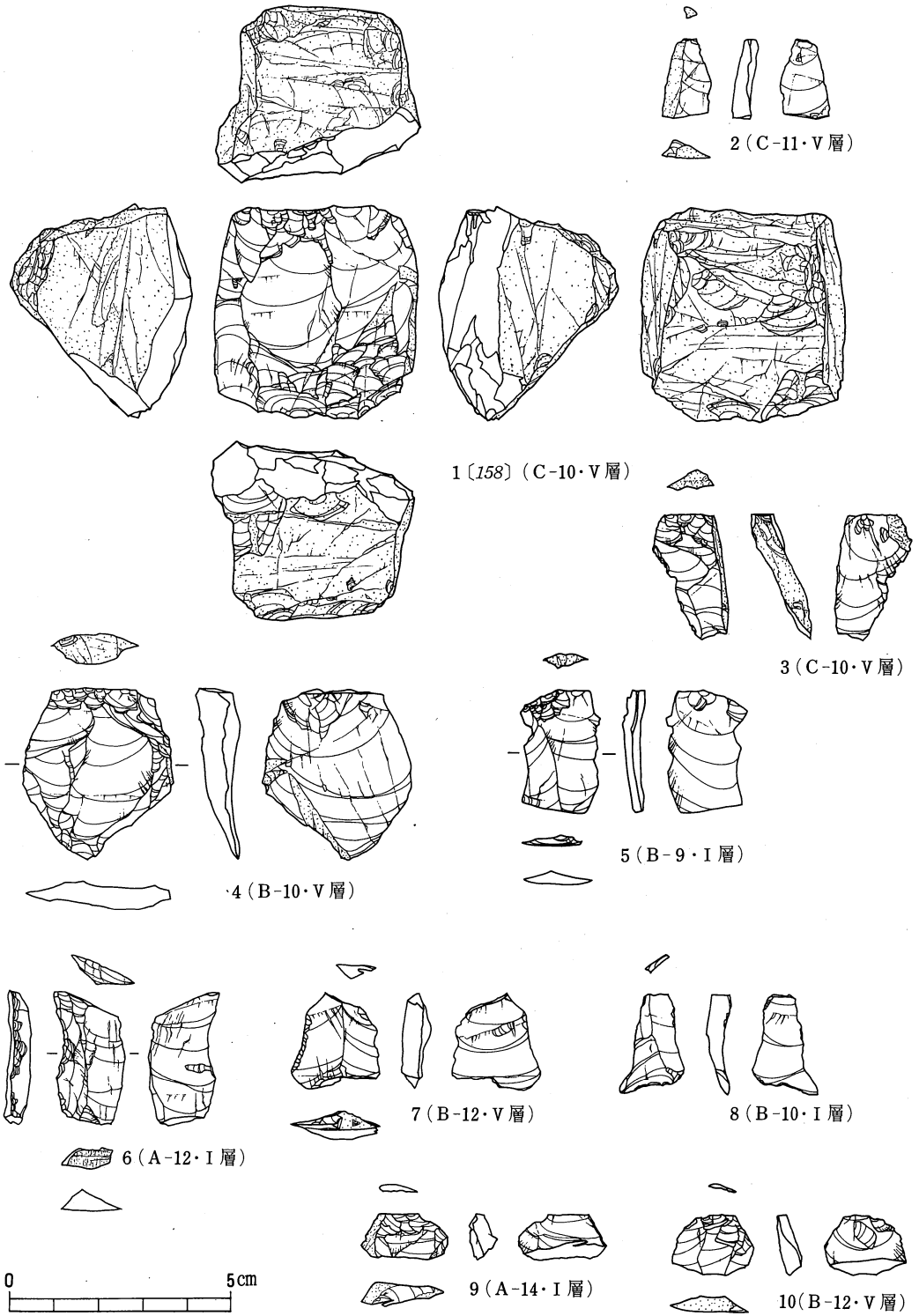
(5) 母岩別資料5 (第90図～第93図)

石材 チャート。緻密かつ均質で脂肪光沢のある剥片剥離に適した良質のチャートで、割口は貝殻状断口を呈する。剥離面の稜は鋭く、リング・フィッシャーが明瞭である。色調は青色・茶色・赤色が縞状をなしている。

資料 両設打面石核1点、縦形削器2点、挟入石器1点、細部調整剥片1点、石刃状剥片1点、剥片14点が含まれる⁽²⁹⁾(第90図・第92図)。

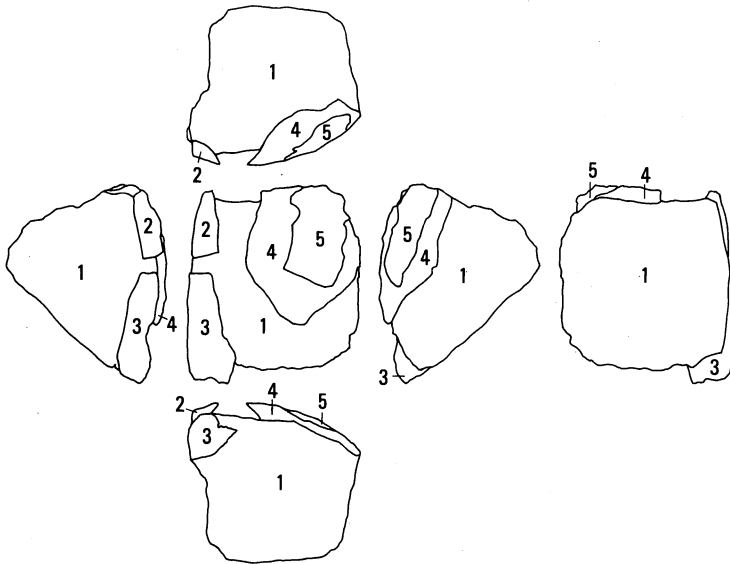
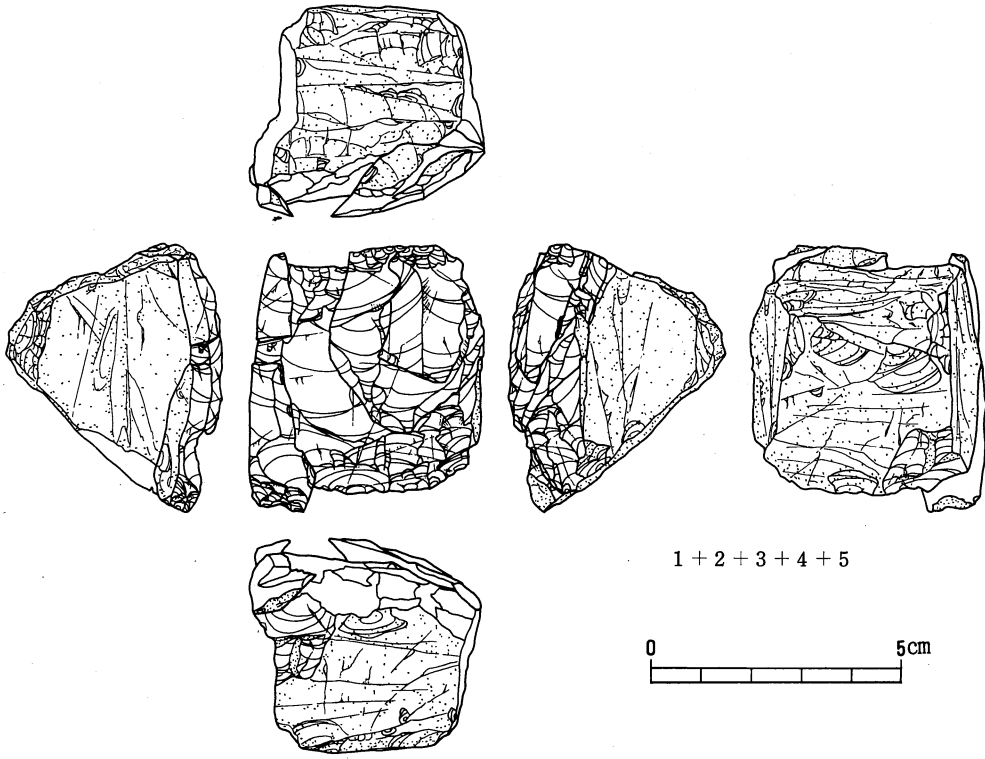
1は、角礫を素材とした両設打面石核である。上下の打面は素材の平坦な原礫面であり、二側面に挟まれた1面において剥片剥離が行われている。上設打面には打面調整がまったく行われていないが、下設打面には剥片剥離の過程で、作業面を打面として2面の剥離が部分的に加えられている。側面・背面の調整はまったく行われていない。最終的な作業面に残された剥離面を見ると、上設打面からは比較的大型の縦長剥片が剥離されているが、下設打面側では小型の不定形剥片の剥離によって作業面が階段状に潰れている。打面角は上設打面側で約95°、下設打面側で約115°である。2は原礫面打面から剥離された縦長剥片で、背面の左側にも原礫面を残す。下部は節理面に沿って破損している。打面調整は認められない。3は原礫面打面から剥離された縦長剥片で、背面の右側にも原礫面を残している。打面調整は行われていない。背面は上下二方向からの剥離面で構成されている。4は原礫面打面から剥離された剥片で、左側縁に刃こぼれとみられる微細な剥離痕が認められる。背面を構成する剥離面はすべて上方向からの剥離面であり、上端に小規模な階段状剥離が集中して残されている。打面調整は行われていない。5は原礫面打面から剥離された石刃状剥片で、下部を折断している。背面の上端に石核の頭部調整が認められる。両側縁の一部に刃こぼれとみられる微細な剥離痕が認められる。6は石刃を素材とし、左側縁の一部に凹形の刃部を設けた挟入石器である。上部・下部を折断する。7は剥片の左側縁に浅い調整を連続的に加えている。打面側と末端を折断している。8は小型の縦長剥片で、背面は上下二方向からの剥離面からなる。上部を折断している。9・10は共に下部を節理面に沿って折断しているが、背面の剥離面の構成から石刃の頭部と考えられる。いずれも打面は原礫面で、打面調整は行われていない。11は背面の一部に原礫面を残す石刃を素材とし、その左側縁に刃部を設けた縦形削器である。素材の背面に見られる剥離面は、いずれも上方向から剥離されている。打面は平坦な原礫面で、打面調整は行われていない。12も11と同様の石刃を素材とし、その左側縁に比較的浅い調整によって刃部を設けた縦形削器である。上部を折断している。13は石刃の末端部の破片と考えられる。上部は節理面に沿って破碎している。背面の右側から下部に原礫面を残している。このほか小型の不定形剥片と折断し

第VI章 第V層文化層



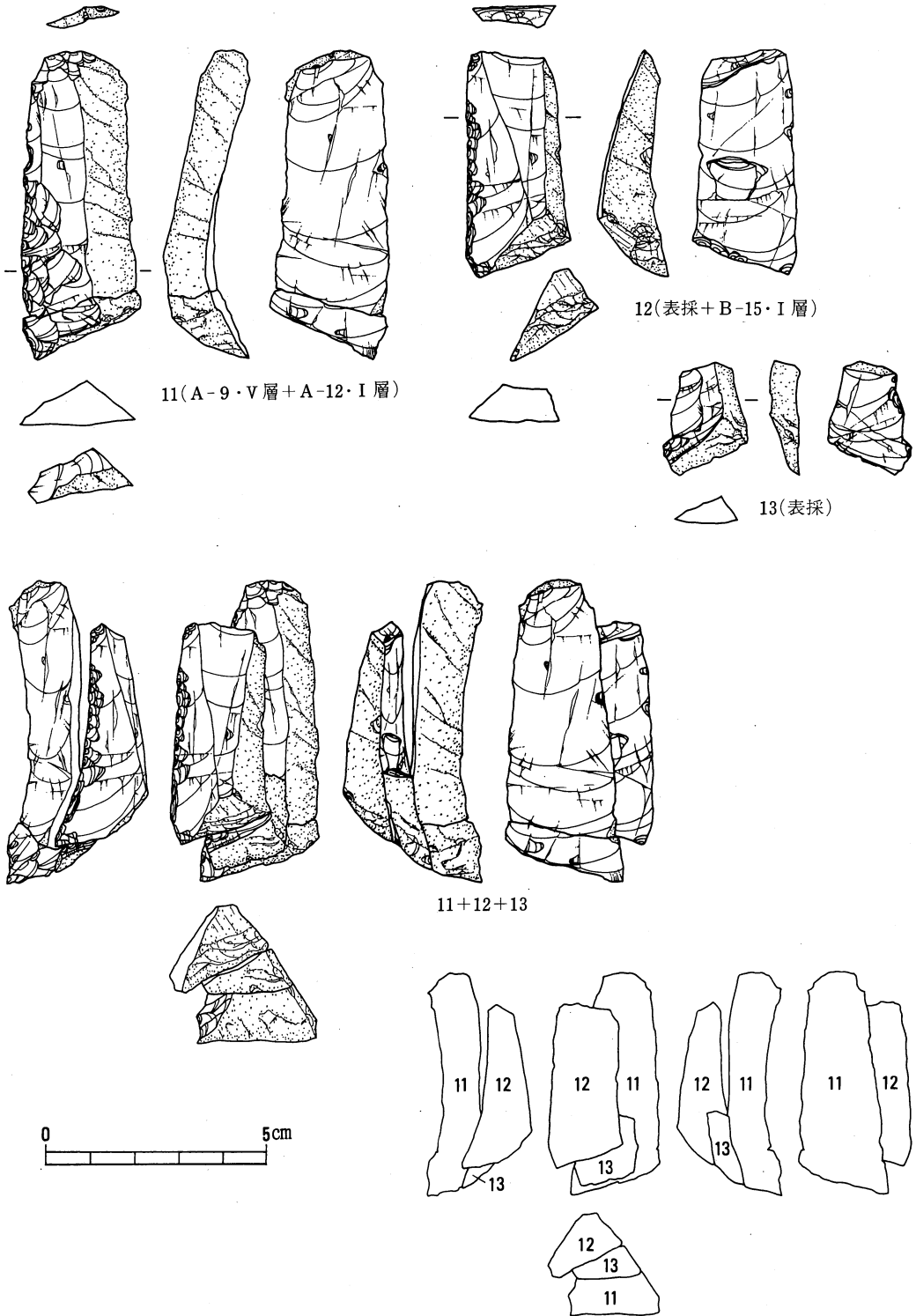
第90圖 第V層文化層 母岩別資料5

第6節 母岩別資料



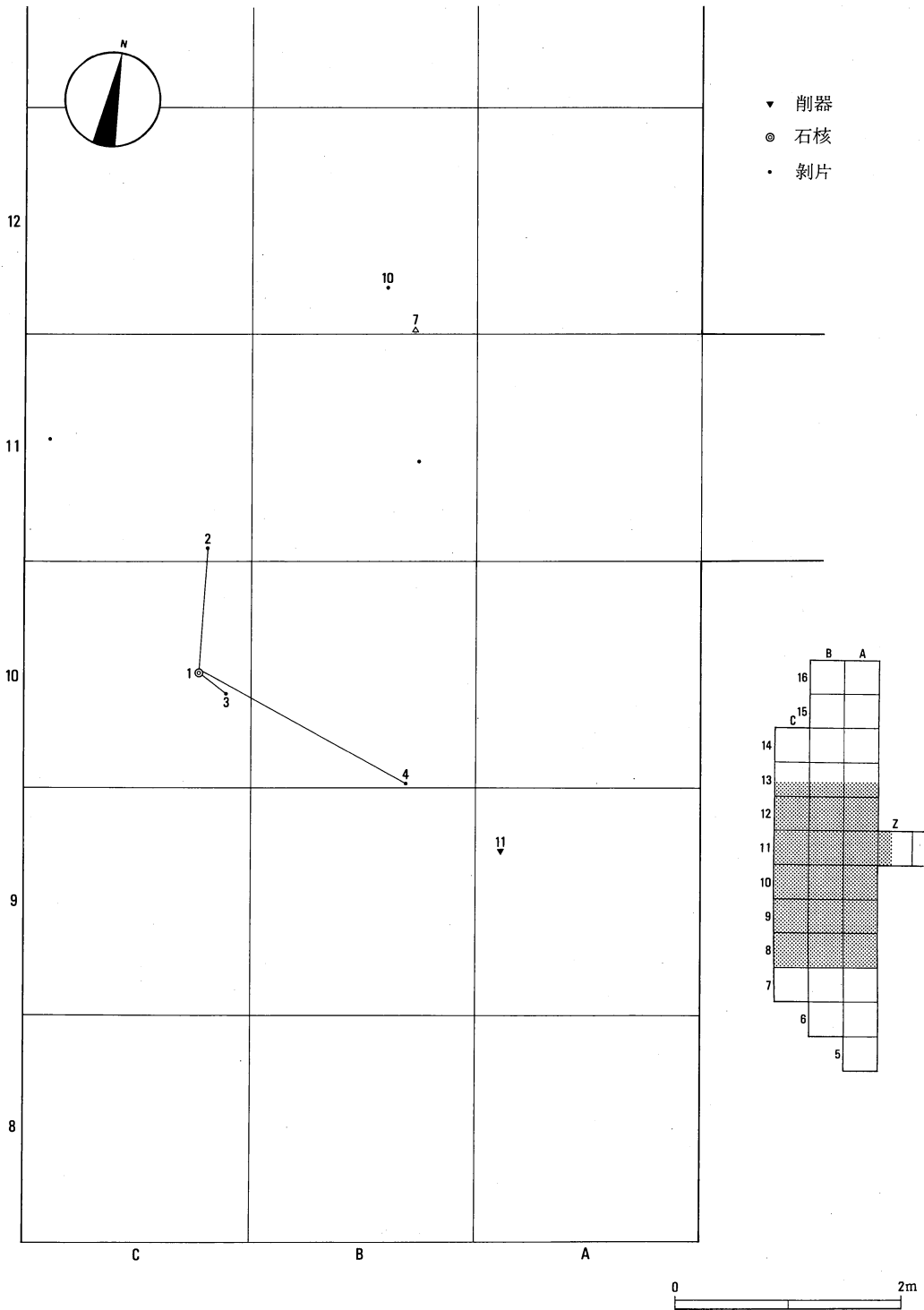
第91圖. 第V層文化層 母岩別資料5 接合資料

第VI章 第V層文化層



第92圖 第V層文化層 母岩別資料5 接合資料

第6節 母岩別資料



第93圖 第V層文化層 母岩別資料5 分布圖

た破片が7点ある。なお、4～13は第1次調査の出土資料である。

接合資料と剥片剥離工程 石核1、剥片4、石刃状剥片5、剥片2・3の5点の接合資料（第91図）と、縦形削器11・12、剥片13の3点の接合資料（第92図）が得られた。この2例の接合資料は現段階では接合しないが、概ね次のような剥片剥離工程を復元することができる。

比較的大型の角礫を素材とし、その平坦な2面の原礫面を上下の打面として、二側面に挟まれた正面の一面において剥片剥離を行っている。石核の側面・裏面の整形はほとんど行われていない。また、打面調整も上設打面ではまったく行われておらず、下設打面でも剥片剥離の過程で部分的な調整が加えられているにすぎない。剥片剥離の初期には、縦形削器11・12の素材に見られるような石刃や狭長な縦長剥片が連続的に剥離されたものと考えられる。しかし、石核1とその接合資料に示される終盤の段階では、定型的な石刃を剥取することができず、短い石刃状剥片5が剥離されているものの、大部分は比較的小型の縦長剥片と不定形剥片となっている。

分布 計24点のうち、第V層および第VI層から出土した9点は、9～12区にかけて分布し、C-10・11区、B-10区の接合資料を中心としてその周辺から同一母岩の剥片が出土している（第93図）。このうち、石核1・石刃状剥片5・剥片2～4が、B-10区、C-10・11区において接合した。出土層位は、1～4・7・10・11を含む8点が第V層、剥片1点が第VI層、5・6・8・9・11・12を含む11点が第I層、その他は表面採集による。（山内・橘）

(6) 母岩別資料6（第94図・第95図）

石材 チャート。緻密で脂肪光沢のある比較的良好なチャートで、割口は貝殻状断口を示す。色調は濃青緑色で均質である。

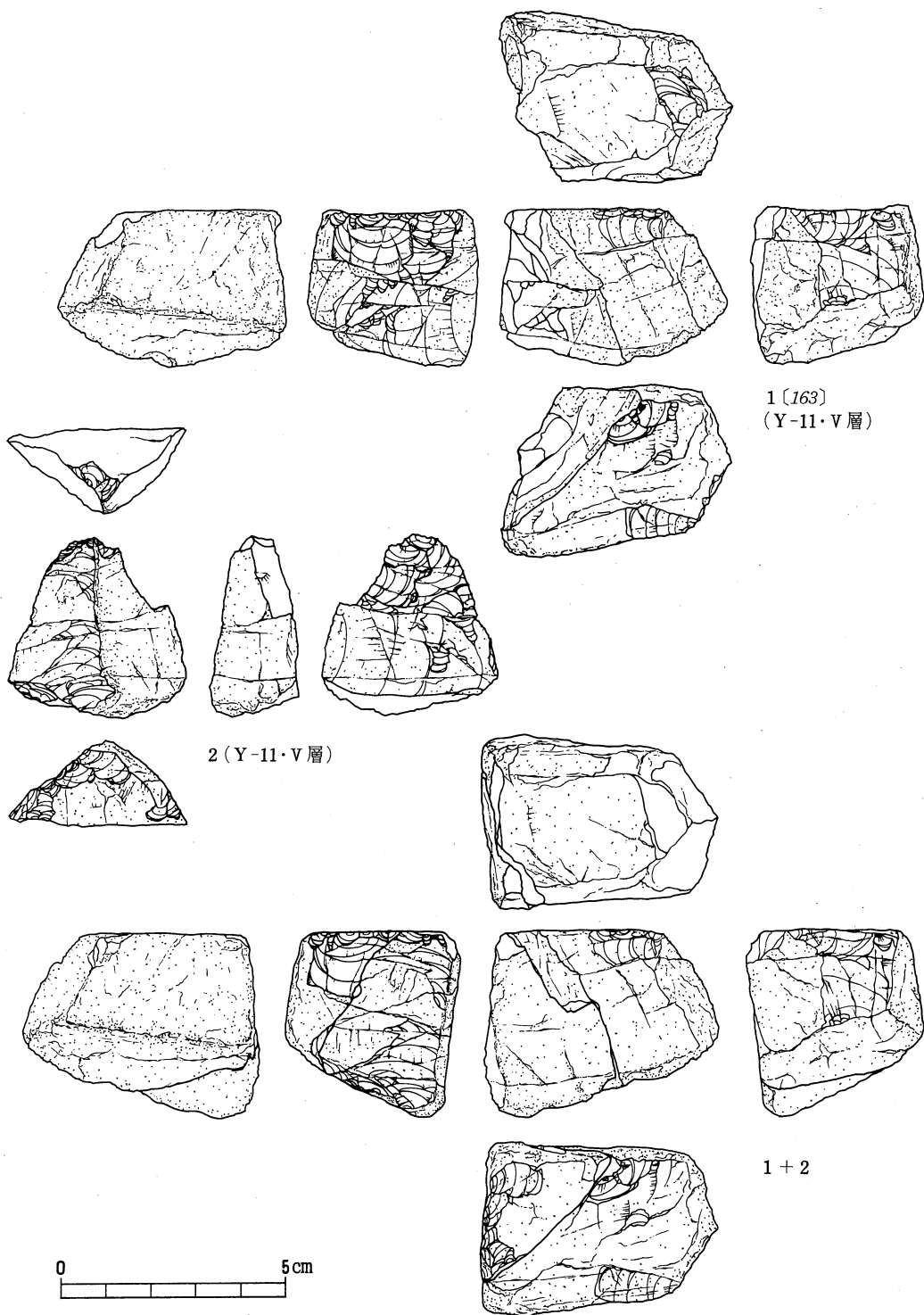
資料 石核1点と不定形剥片1点が含まれる（第94図）。

1は六面体状のチャートの角礫を素材とした石核で、剥片剥離は平坦な原礫面を打面として、その木口にあたる一面で行われている。2は素材の稜の部分から最初に剥ぎ取られた不定形剥片である。打面は打撃によって破碎し、小さな貝殻状断口となっている。剥離角は約128°である。

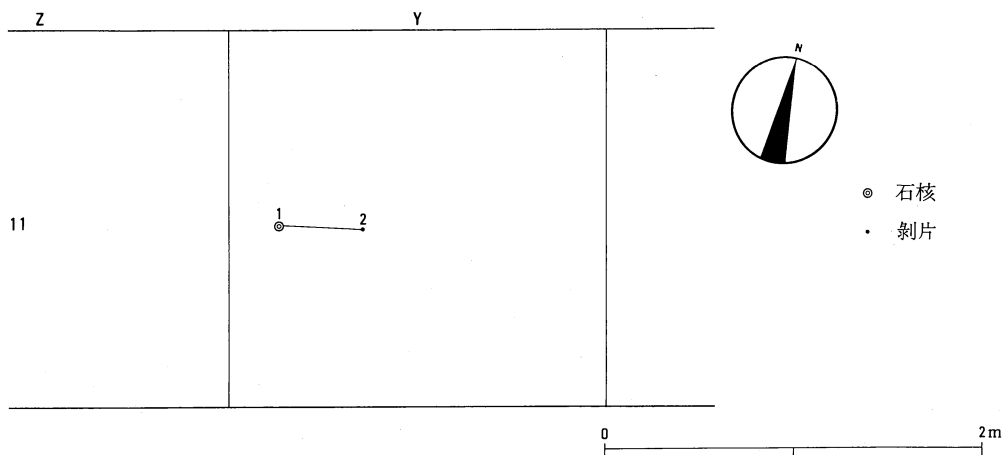
接合資料と剥片剥離工程 石核1と剥片2が接合し、素材の原礫の状態にほぼ復元された。比較的小型の角礫を素材とし、その平坦な原礫面を打面として素材の一面において剥片剥離が行われている。石核の背面の一部が節理面によって破碎しているが、それ以外の石核の整形はまったく行われていない。剥片2の剥離後、数枚の小型の不定形剥片が剥離されている。

分布 石核1と剥片2の2点は、いずれもY-11区西側から出土した（第95図）。出土層位は第V層である。（山内・橘）

第6節 母岩別資料



第94圖 第V層文化層 母岩別資料6



第95図 第V層文化層 母岩別資料6 分布図

(7) 母岩別資料7 (第96図～第98図)

石材 チャート。全体に赤色の均質かつ緻密な石質で、所々に石英脈が網状に貫入する赤白珪石である。脂肪光沢をもち、割口は貝殻状断口を呈する。

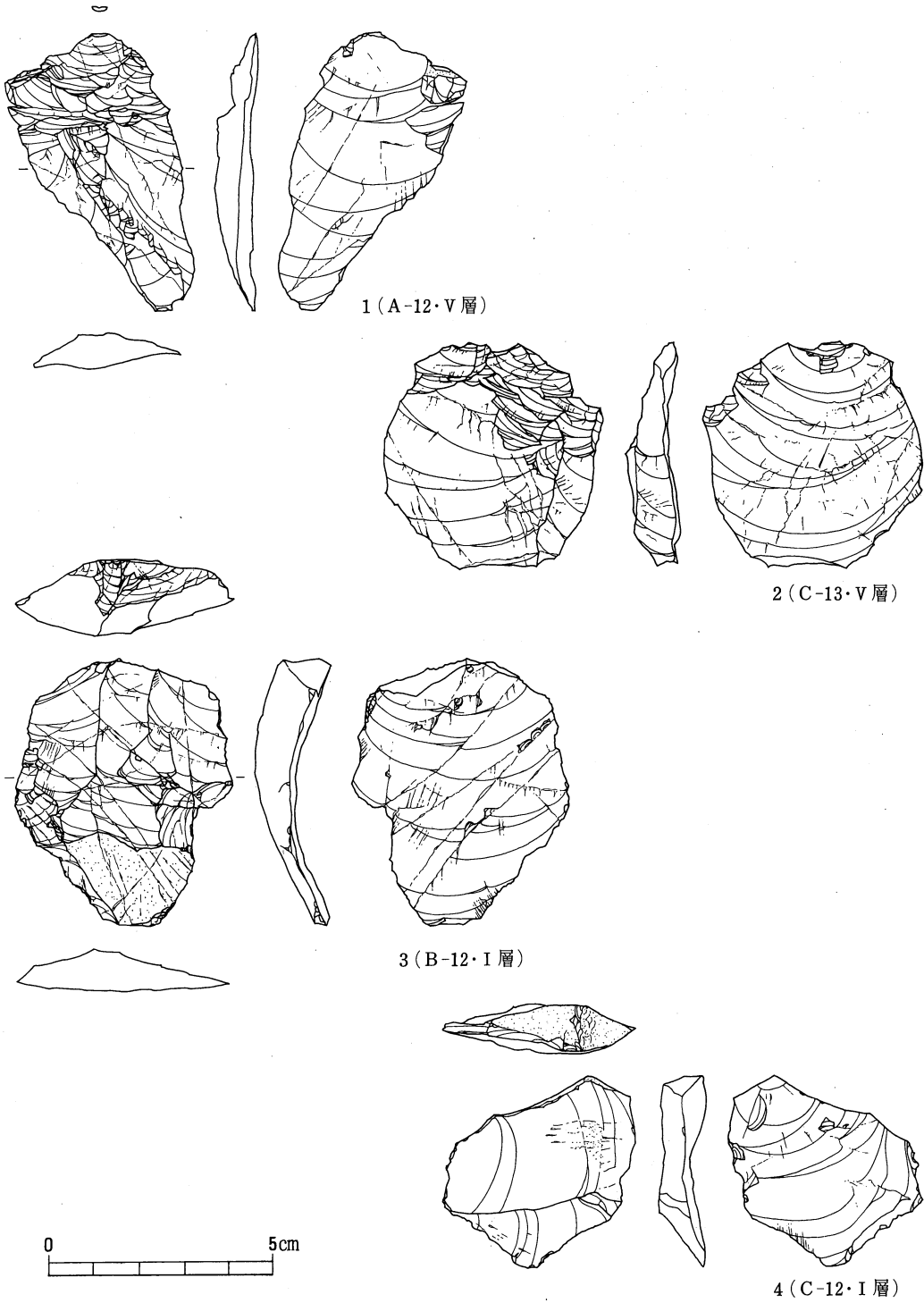
資料 剥片10点が含まれる。そのうち4点を図示した(第96図)。

1は縦長剥片で、背面には上方向からの比較的大きな3面の剥離面が見られる。背面上部には階段状剥離が認められる。打面が小さく残る。打面調整は認められない。2は長幅がほぼ同じで、背面には上方向から剥離された2面の広い剥離面と打面側に細かい階段状剥離が見られる。打面は破碎している。左側縁と下端を折断している。3は背面に原礫面を残す縦長剥片で、上部を折断している。背面には上方向からの並列する剥離面と下方からの剥離面が見られる。4は、原礫面の稜の部分の打点として剥離された剥片で、背面には左横方向からの剥離面が見られる。

接合資料と剥片剥離工程 剥片1の背面に剥片2が接合した(第97図)。2点の剥片は同一打面から剥離されており、それらの背面に残る剥離面もすべて同一打面からの剥離を示している。階段状剥離による打面側の調整に特徴がある。

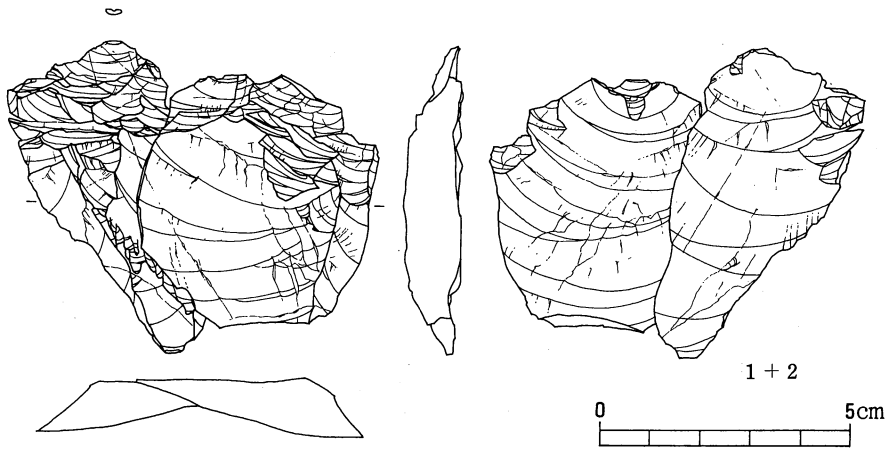
分布 計10点のうち、第V層および第VI層から出土した5点は、10～15区にかけて出土し、また第98図では省略したが、B-6区からも1点出土した(第98図)。このうち1と2がA-12区・C-13区の間で接合した。出土層位は、1・2を含む4点が第V層、2点が第VI層、3・4を含む4点が第I層である。(山本・橋)

第6節 母岩別資料

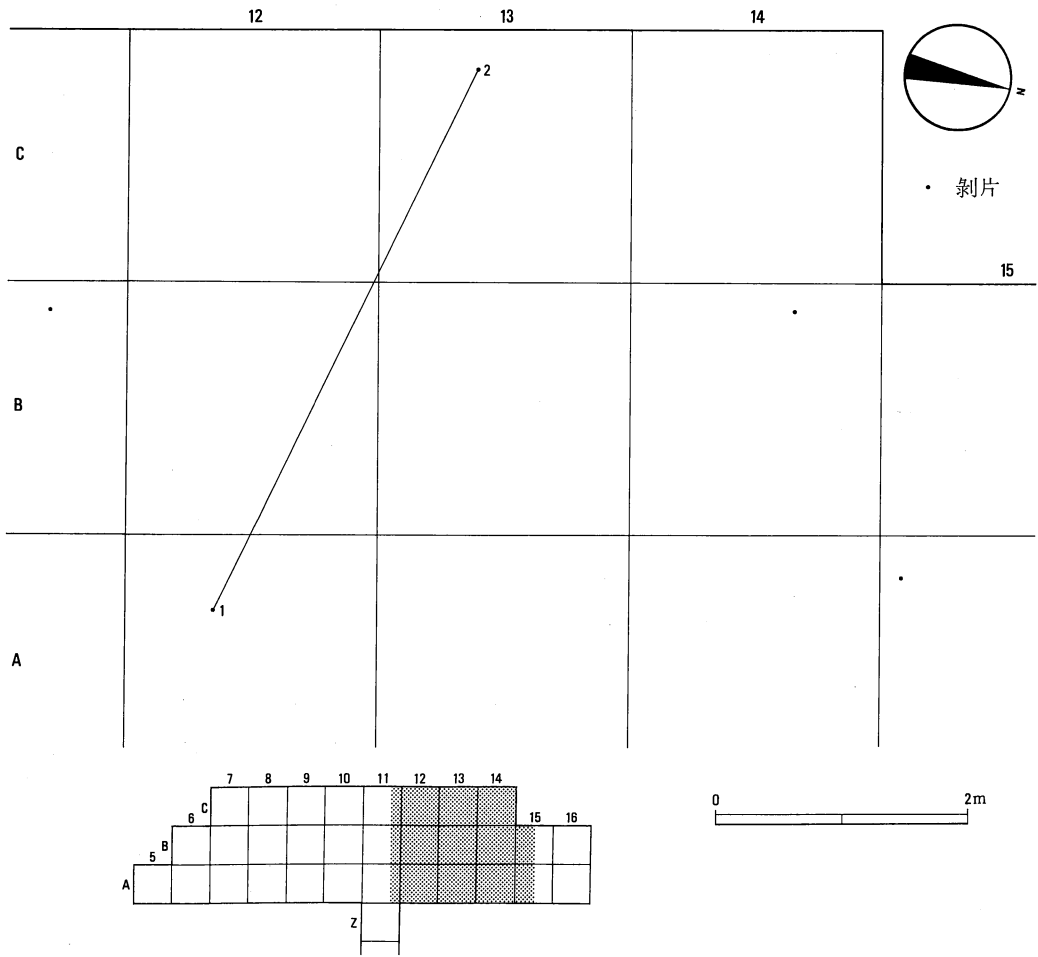


第96圖 第V層文化層 母岩別資料7

第VI章 第V層文化層



第97圖 第V層文化層 母岩別資料7 接合資料



第98圖 第V層文化層 母岩別資料7 分布圖

第 3 表 第 V 層文化層 母岩別資料 1 一覽表

挿図番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	打面角	剝離角	重量 (g)
1	打製石斧	C-7	71	V層	7.71	8.38	2.60			192.09
2	剝片	C-7	31	V層	1.00	0.87	0.17			0.15
3	[剝片	C-7	72	V層	6.17	2.68	0.81		95°	10.05
4		C-7	62	V層						
5	剝片	C-7	10	IV層	3.16	3.44	1.44		127°	8.34
6	剝片	C-7	27	V層	4.26	3.68	0.93			7.52

第 4 表 第 V 層文化層 母岩別資料 4 一覽表

挿図番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長・高 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	作業面長 (cm)	打面角	剝離角	重量 (g)
1	石核	C-9	68	V層	5.80	6.49	4.46	6.49	60°		159.72
2	剝片	C-9	84	V層	6.45	6.45	2.76			110°	91.92
3	[石刃	C-9	121	V層	4.84	1.50	0.48				3.99
4		C-10	213	V層							
5	石刃	B-10	26	V層	(1.90)	2.15	0.42				1.90
6	石刃	B-14	—	I層	(2.47)	1.93	0.73				3.05
7	[石刃	C-9	116	V層	6.90	3.24	0.73			120°	13.40
8		C-9	46	V層							
9	石刃	C-9	48	V層							
10	剝片	A-14	30	VI層	1.46	1.47	0.53			110°	1.20
11	剝片	C-9	33	V層	(3.29)	(1.37)	0.34				1.28
12	剝片	C-9	165	V層	0.97	2.03	0.22				0.33
13	剝片	—	—	表採	1.48	1.14	0.19			106°	0.22

第5表 第V層文化層 母石別資料2 一覽表

挿図番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長・高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	作業面積(cm)	打面角	剝離角	重量(g)
1	石核	C-9	138	V層	4.88	5.75	2.52	5.75	75°		65.31
2	石核	C-9	147	V層	2.25	3.86	4.76	4.74	65°		48.88
3	剝片	C-10	71	V層	4.28	2.89	1.50			95°	17.77
4	剝片	—	—	I層	1.95	1.60	0.51				1.11
5	剝片	B-15	—	I層	2.68	2.35	0.80				3.65
6	剝片	C-7	49	V層	2.00	1.50	0.65				10.61
7	剝片	C-9	180	V層	2.80	2.30	1.09				6.44
8	石刃状剝片	C-10	22	V層	5.02	1.19	0.75			135°	2.69
9	剝片	C-10	137	V層	4.55	1.30	0.58			128°	2.75
10	剝片	C-10	221	V層	6.20	2.18	1.45			125°	12.29
11	剝片	C-9	81	V層	1.88	1.34	0.42			97°	0.77
12	剝片	C-9	153	V層	2.62	1.70	0.56			105°	1.44
13	剝片	C-9	18	V層	2.27	0.96	0.24				0.43
14	剝片	C-9	117	V層	6.80	2.45	1.10			135°	15.34
15	剝片	C-10	199	V層							
16	剝片	C-9	93	V層	1.62	2.85	0.55				1.69
17	剝片	C-9	164	V層	1.90	3.50	0.50				1.99
18	剝片	C-10	97	V層	(3.34)	1.19	0.43				1.84
19	剝片	C-9	177	V層	2.25	0.90	0.28				0.33
20	剝片	C-9	135	V層	(1.78)	0.77	0.25				0.33
21	剝片	C-9	139	V層	(2.39)	(0.67)	0.22			120°	0.19
22	剝片	C-9	—	I層	0.82	1.84	0.45				0.75
23	剝片	C-10	73	V層	1.00	1.54	0.56			115°	0.83

第6節 母岩別資料

第6表 第V層文化層 母岩別資料3 一覧表

挿入番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長・高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	作業面積(cm)	打面角	剝離角	重量(g)
1	第83図1	撻器	C-13	22	V層	5.67	4.14	1.45			23.76
2	" 2	撻器	—	—	表採	6.34	2.70	1.00		105°	20.64
3	" 3	撻器	C-7	60	V層	7.27	4.42	0.84		95°	34.22
4	" 3	撻器	—	—	表採						
5	" 4	削器	—	—	表採	4.90	4.87	0.82		75°	26.66
6	第84図5	石核	C-13	101	VI層	4.23	4.20	3.32	4.20	62°	45.43
7	" 6	剝片	Z-11	—	I層	1.45	2.22	0.37			0.78
8	" 7	剝片	A-12	60	V層	1.57	1.72	0.15		92°	0.30
9	" 8	剝片	—	—	表採	1.54	1.43	0.30			0.48
10	" 9	剝片	—	—	表採	2.25	1.80	0.27			0.58
11	" 10	剝片	B-10	1	V層	5.91	3.89	0.99		110°	17.65
12	" 11	剝片	C-9	105	表採	4.25	1.64	0.65		110°	3.67
13	" 12	剝片	—	—	表採	3.02	1.93	0.40		95°	2.23
14	" 13	剝片	—	—	表採	2.32	2.05	0.93			3.84
15	第85図14	石核	A-12	74	V層	4.10	4.79	2.78	4.79	95°	50.39
16	" 15	剝片	B-13	—	I層	3.21	3.75	1.05			11.52
17		剝片	A-5	—	—	(1.22)	3.30	0.92			3.10
18		剝片	A-8	—	—	1.48	1.30	0.37		115°	0.85
19		剝片	A-12	—	—	(1.32)	1.36	0.50			0.56
20		剝片	A-12	—	I層	(1.47)	1.15	0.36			0.29
21		剝片	A-13	—	I層	1.54	3.41	1.02			3.93

第VI章 第V層文化層

第7表 第V層文化層 母岩別資料5一覽表

挿入番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長・高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	作業面積(cm)	打面角	剝離角	重量(g)
1	石核	C-10	138	V層	4.54	4.60	3.95	4.60	上 95° 下 115°		96.54
2	剝片	C-11	138	V層	1.70	1.10	0.43			90°	0.78
3	剝片	C-10	88	V層	2.84	1.75	0.50			110°	2.69
4	剝片	B-10	4	V層	3.85	3.36	0.81			105°	8.65
5	石刃状剝片	B-9	—	I層	2.76	1.80	0.43			90°	1.85
6	抉入石器	A-12	—	I層	(2.96)	1.59	0.50				2.49
7	細部調整剝片	B-12	9	V層	(2.15)	1.97	0.44			95°	1.85
8	剝片	B-10	—	I層	2.25	1.43	0.40				0.68
9	剝片	A-14	—	I層	(1.03)	1.90	0.53				0.93
10	剝片	B-12	12	V層	(1.35)	1.82	0.50				0.98
11	[削器	A-9	3	V層	6.90	2.68	1.30			95°	20.26
12	[削器	A-12	—	I層							
13	[削器	B-15	—	I層	(5.06)	2.40	1.30				14.56
14	[削器	—	—	表採							
15	[剝片	—	—	表採							
16	剝片	A-8	—	I層	2.50	1.92	0.60				2.60
17	剝片	B-11	—	I層	0.70	1.76	0.30			95°	0.35
18	剝片	B-11	59	VI層	1.25	1.60	0.47				0.80
19	剝片	B-12	—	I層	2.54	2.18	1.02				3.80
20	剝片	B-13	—	I層	1.87	0.71	0.30			60°	0.38
21	剝片	C-10	—	I層	(1.82)	1.00	0.28				0.48
22	剝片	C-10	—	I層	2.04	2.52	0.63			120°	2.47
23	剝片	C-11	90	V層	(1.46)	1.62	0.34				0.44
24	剝片	—	—	表採	1.68	1.50	0.31			103°	0.85
				表採	1.59	0.91	0.35			95°	0.42

第8表 第V層文化層 母岩別資料6一覽表

挿図番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長・高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	作業面積(cm)	打面角	剝離角	重量(g)
1	石核	Y-11	24	V層	3.49	3.82	5.04	3.82	52°		80.45
2	剝片	Y-11	31	V層	3.98	3.90	1.95			138°	23.31

第9表 第V層文化層 母岩別資料7一覽表

挿図番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	剝離角	重量(g)
1	剝片	A-12	4	V層	6.14	4.19	0.87	60°	14.70
2	剝片	C-13	70	V層	5.01	4.85	1.04		23.04
3	剝片	B-12	—	I層	5.92	4.81	1.22		26.66
4	剝片	C-12	—	I層	4.21	4.27	1.10	80°	15.28
5	剝片	A-15	3	V層	(2.12)	1.69	0.35	60°	
6	剝片	B-6	68	V層	(0.86)	(2.31)	(0.30)		
7	剝片	B-11	46	VI層	(1.41)	(1.46)	0.39	100°	
8	剝片	B-14	119	VI層	2.83	1.79	0.72		
9	剝片	C-13	—	I層	(2.79)	(2.98)	0.90		
10	剝片	C	—	I層	(1.49)	3.34	0.95		

註

- (1) 2195点のうち第V層から出土した遺物の点数は、石器184点、剥片1387点、礫・砕片510点の計2081点である。これに第I層出土および表面採集の細石刃・細石刃石核・同打面形成削片の関連資料と、該当する母岩別資料を加え総数を集計している。
- (2) この総数には、第V層から出土した2082点のほか、第IV層出土の細石刃2点と細石刃石核1点、第VI層出土の細石刃2点と石刃状剥片・石核各1点、第I層出土および表面採集の細石刃85点、細石刃石核4点、同原形1点、同打面形成削片2点、同打面再生剥片2点、細石刃剝離作業面再生剥片1点、細石刃石核調整剥片2点、搔器2点、削器2点、細部調整剥片3点、石刃3点、槍先形尖頭器1点を含めている。なお、接合した3個体6点については、接合したものを1点として数えるのが原則であるが、本節では第23図に図示した数に従い、各1点ずつ個別に集計した。
- (3) この2089点には、第IV層出土の細石刃2点と細石刃石核1点、第VI層出土の細石刃2点と石刃状剥片・石核各1点を含めている。
- (4) この92点には、第IV層出土の細石刃2点と細石刃石核1点、第VI層出土の細石刃2点を含めている。
- (5) この32点には、第VI層出土の石刃状剥片1点を含めている。
- (6) この17点には、第VI層出土の1点を含めている。
- (7) この1358点は、第38図に示したA-5~12区・B-6~12区・C-7~12区の範囲で集計したものである。なおこの総数には、第V層から出土した1292点のほか、第IV層出土の細石刃2点と細石刃石核1点、第VI層出土の細石刃1点、第I層出土および表面採集の細石刃50点、細石刃石核3点、同原形1点、同打面再生剥片1点、同調整剥片1点、槍先形尖頭器1点、搔器2点、細部調整剥片2点、石刃1点を含めている。参考までに、概念的に捉えられるC-7~11区・B-6~11区・A-6~10区の64㎡の範囲で集計すると、総数は1197点となる。
- (8) 第V層文化層として捉えられる細石刃文化に槍先形尖頭器が共伴するかどうかという問題は、重要な検討課題の一つである。槍先形尖頭器4点のうち第V層から出土した3点の出土地点を見ると、2点は遺物の集中範囲からやや離れており、細石刃等と共伴したものかどうか判定できないが、B-8区出土の1点(第54図102)は、ユニット1の中心部分から出土しており、現時点では当該文化層に伴うものと捉えている。
- (9) この1296点には、第IV層出土の細石刃2点と細石刃石核1点、第VI層出土の細石刃1点を含めている。
- (10) この総数には、第V層から出土した309点のほか、第I層出土および表面採集の6点を含めている。
- (11) 礫群・配石の定義は、「野川先土器時代遺跡の研究」(小林・小田ほか 1971)に基づき、拳大の礫が密集するものを礫群、幼児の頭大の礫が点在するものを配石とする。
- (12) 第1号礫群の平面分布図・垂直分布図(第40図)には、中心部分のY-11区からW-11区西側の範囲を示した。
- (13) 礫表面の「赤化」については、「野川先土器時代遺跡の研究」の中で少なくとも600℃以上の熱を受けていることが検証されている。
- (14) 第1号配石遺構の平面分布図・垂直分布図(第44図)には、礫が最も集中しているC-9~11区とB-9~11区の範囲を示した。
- (15) 細石刃剝離作業の過程で、打点となる打面端部に加えられる微細な調整剝離をさす。
- (16) 打面と細石刃剝離作業面との二面のなす角度。剝離角と補角の関係をなす。実際の計測にあたっては、細石刃剝離面のネガティブバルブおよび湾曲する下端の一部を除く平面で打面角を求めている。
- (17) 楕円形または尖頭器状に整形された両面調整素材の一端から、細石刃剝離の打面を形成する目的で剝離された定型的な削片をさす。素材の縦割りの第一段階に生ずる稜付きの削片と、第二打目以後に生ずるスキーク状削片がある。ここでは、両面調整素材の細石刃石核原形から細石刃剝離の最初の一打

で剥ぎ取られた稜付削片は区別している。

- (18) 細石刃剥離の過程で行われる石核側面および作業面の微細な再調整で、打面再生や作業面再生とは区別される。
- (19) 素材剥片の長軸上の両端に急斜度の調整によって刃部を作り出したものを複刃搔器とする。
- (20) 削器の定義は、素材の剥片の側縁に1/2以上の長さにわたって急斜度の連続的な調整を加え、厚く長い刃部を作り出した石器とする。縦長剥片を素材とした縦形削器と、横長剥片を素材とした横形削器とに大別される。刃部の調整が浅く鋭角的で、素材の縁辺の断面角をほとんど変えていない場合や、調整が不連続で短いものは、削器の刃付けとは区別し、「細部調整剥片」に含めた。
- (21) 素材剥片の二側縁に急斜度の連続的な調整によって刃部を作り出したものを複刃削器とする。
- (22) 細部調整剥片とは、剥片の縁辺の一部に微細で浅い調整が加えられているものを便宜的にまとめたものである。第1次調査報告書では「二次調整剥片」と称したが、「二次調整」の語義が曖昧なため、本報告書では「細部調整剥片」と改称した。
- (23) ここでは、幅の2倍以上の長さを持ち、二側縁が平行する定型的な縦長剥片で、同一方向または対向する二方向からの平行的な剥離によって背面に両側縁と平行する数条の稜が残されているものを石刃とする。これに対し、稜が1条のもので、背面の剥離方向が不統一なものや、形状に問題のあるもの、下部を折断・折損した頭部の破片などを便宜的に石刃状剥片とした。
- (24) 直方体状に整形された石核の稜の部分から、石刃生産の最初の一打で剥ぎ取られた定型的な縦長剥片を稜付石刃とする。断面は三角形状で、背面の中央に横方向の調整によって直線的な稜が形成されている。
- (25) 第1次調査報告書に掲載された細石刃関係資料のうち、細石刃核素材2点（同報告書第34図7・8）、削片1点（第34図9）、打面再生削片1点（第35図11）、細石刃剥離作業面再生削片1点（第35図17）は、種別同定に疑問が残るため、ここでの集計から除外した。
- (26) 定型的な削片の剥離によって打面形成を行う細石刃石核を総称する。楔形の形態に特徴がある。
- (27) 第1次調査報告書では「細石刃核素材」と称したが、削片を剥離する以前の両面調整の素材と、削片剥離後の細石刃石核の原形を区別する必要があり、「細石刃石核原形」と改称した。
- (28) この母岩別資料は、第1次調査報告書所載の「母岩別資料D」である。第2次調査の出土資料を追加して改めて報告する。
- (29) この母岩別資料は、第1次調査報告書所載の「母岩別資料B」である。第2次調査の出土資料を追加して改めて報告する。

第Ⅶ章 第Ⅵ層文化層

第1節 概要

第1次調査では、時間的な制約から第Ⅵ層上部で一応調査を中断したが、今回第Ⅵ層中に含まれる石器文化の内容の把握を目的として、40㎡について第Ⅵ層の継続調査を行った。調査の対象としたのは、第1次調査の段階で遺物が集中し礫群の存在が確認されていた地点を中心とする、A・B-10～14区の合計10グリッドである。今回同区域の第Ⅵ層を完掘した結果、礫群1基を中心とする石器ユニットの全体像とその層位を把握することができ、これらの石器群を1面の文化層として認定した。第1次調査報告書では、この石器群を暫定的に「第Ⅵ層上部文化層」として位置付けていたが、当該ユニットにおける遺物の層位的なピークは、後述するように第Ⅵ層中位ないし下部にあり、ここでは「第Ⅵ層文化層」と訂正し、第1次調査の出土資料を含めて改めて報告する。

検出されたユニットは、A・B-10～14区の範囲に及び、特にA・B-11・12区を中心として直径約4mの円形状の集中地点が認められる。ユニットを構成する遺物の総数をA・B-10～14区の遺物の集計によって示すと、石器51点・剥片498点・礫および碎片1145点の合計1694点となっている。石器の内訳は、ナイフ形石器13点（うち第1次調査出土資料8点）・槍先形尖頭器2点（2点）・彫器2点（2点）・搔器2点（2点）・削器1点（1点）・鋸歯状石器1点（0点）・揉錐器1点（0点）・細部調整剥片6点（1点）・石刃11点（6点）・石核10点（6点）・敲石2点（1点）である。本文化層はナイフ形石器を伴う石器文化であり、特に石刃を素材とした二側縁調整・部分調整のナイフ形石器に特徴がある。

ユニットのほぼ中央に存在する礫群は、12区を中心とする長径約6mの不整楕円形状を呈し、1084個の礫・碎片からなる。一方、石器・剥片は、この礫群の北側にあたるA・B-13・14区を中心として礫群の周囲を取り巻くように分布しており、礫群を挟んで対向する位置での石核・剥片の接合関係等も捉えられた。礫群とその周辺では、10点の石核と敲石2点が出土しており、礫群の周囲で剥片生産と石器製作を行っていたことが窺える。（岡崎）

第2節 遺物の分布とユニット

(1) 層位と遺物の分布状態

1. 平面分布状態とユニット (第99図～第102図)

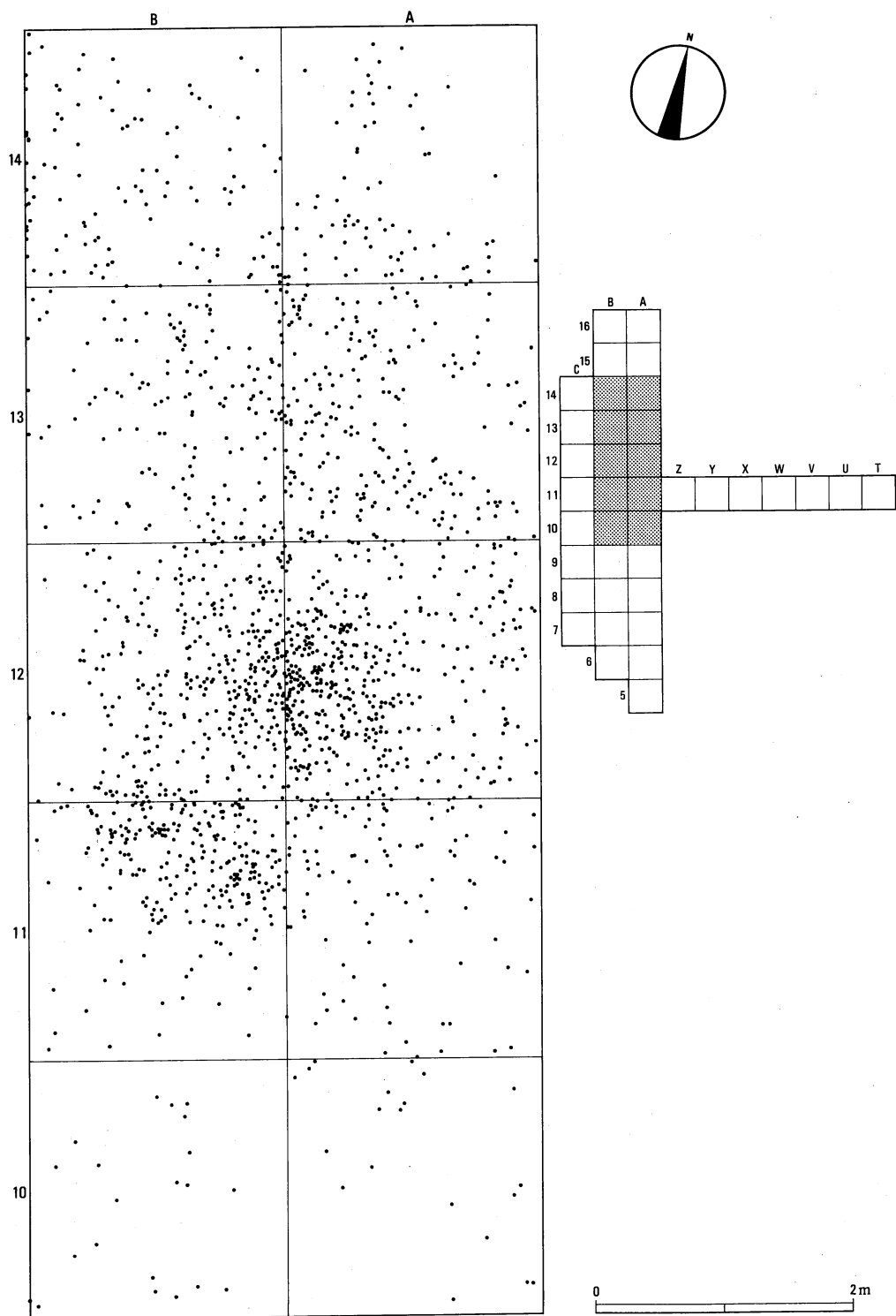
第1次調査ではA-5～16区、B-6～16区の合計23グリッドの調査を行ったが、日程の都合上第VI層上部で調査を中断した。今回の調査では、最も遺物が集中していたA・B-10～14区の調査を再び行い、第VI層を完掘した。その結果、第1次調査の出土資料を含め、A・B-10～14区の第VI層文化層中から合計1694点の遺物が出土した¹⁰⁾。それらの分布状態は第99図に示す通りであり、A・B-11・12区を中心としてA・B-10～14区の計40㎡に広がるユニットが検出された。

礫・碎片の平面分布状態は第100図に示す通りである。礫は289点、碎片は856点、合計1145点出土した。それらはA・B-11～13区の範囲に集中的に分布しているが、A-12区西側とB-12区東側に特に密集しており、この部分を中心として長径約6mの不整楕円形状の広がりをもつ礫群が検出された。第1次調査の段階でもこの礫群の存在が確認されていたが、今回の調査で第VI層を完掘したことにより、礫群全体の構成やユニットとの関係が明らかとなった。

石器・剥片の平面分布状態は第101図と第102図に示す通りである。石器は51点、剥片は498点出土した。これらは礫群の周囲を取り囲むように分布しており、特に調査区の北側にあたるA・B-13・14区から21点の石器が出土するなどまとまりが認められる。一方、礫群の南側の調査区ではそれほど石器・剥片の密集は見られないが、鋸歯状石器等を含む11点出土した。また、礫群とその周囲から石核10点と敲石2点出土しており、礫群の周囲で剥片生産が行われていた状況も確認された。石核10点のうち4点は礫群内部から、6点はその周辺部から出土している。

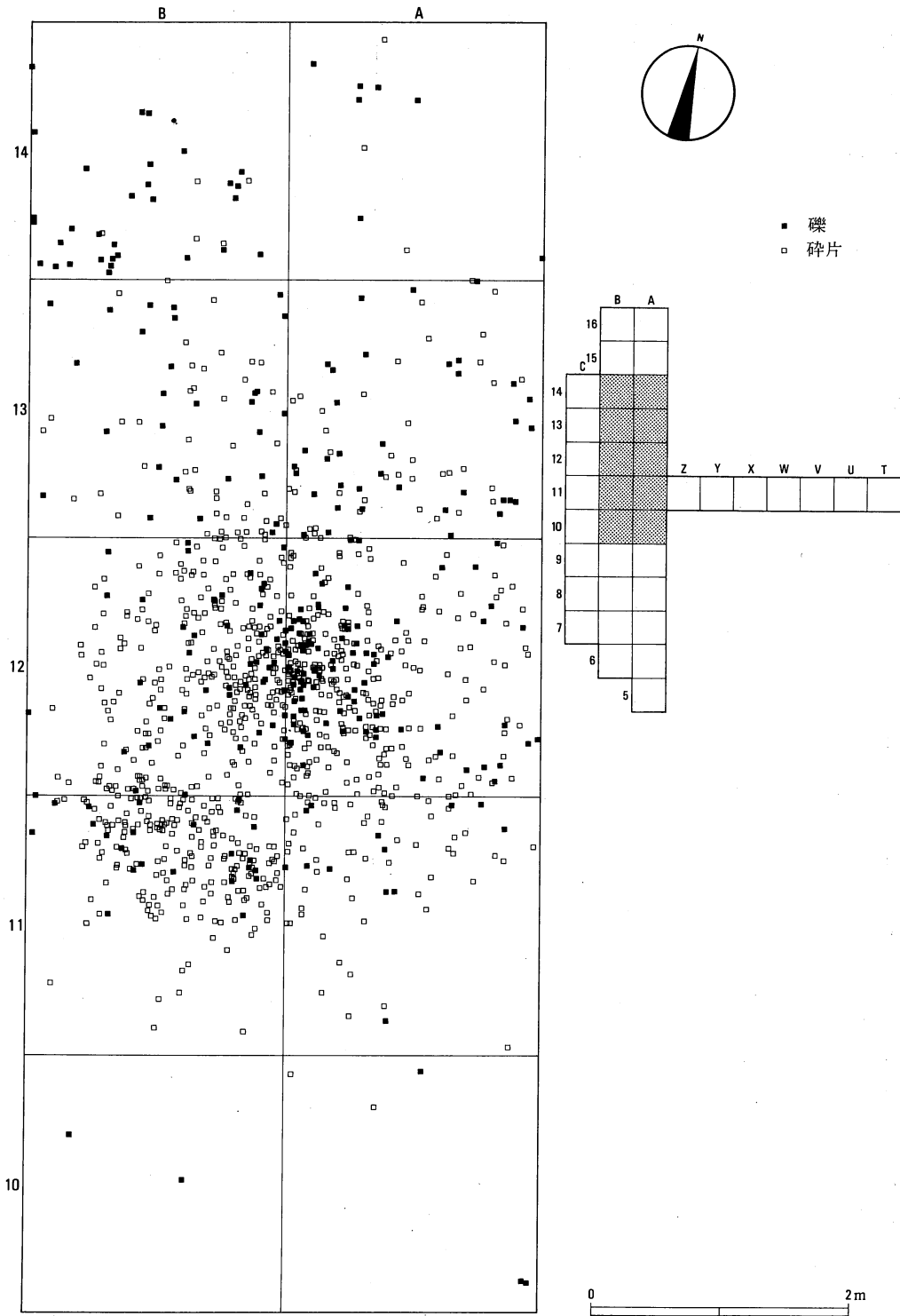
石器・剥片の分布状況は全体的に礫群の周辺にまとまりが認められ、特に剥片は13・14区に多く見られるが、礫群から南側の10区には非常に少ない。10区は剥片だけでなく礫・碎片も少なく、ユニットの中心から離れているが、石核や鋸歯状石器など4点の石器が出土した。ナイフ形石器は13点出土した。ユニット全体にわたって広く分布しているが、B-13区北西側に5点出土するなど、礫群の周辺にある程度のまとまりが認められる。槍先形尖頭器は第1次調査出土の2点で、B-11区西側とB-12区から出土した。スクレイパー類では、B-10区西側から搔器が1点、B-10区北側から鋸歯状石器が1点出土した。また、ユニットの北側にあたるA-13区南東側から揉錐器1点、A-13区の東側と西側から彫器2点出土したほか、13・14区から細部調整剥片が5点出土した。石刃は11点出土した。ユニット全体に広く分布しているが、礫群の範囲に重なるようにA・B-11～13区に比較的まとまって出土している。

2. 検出層位 (第103図～第109図)



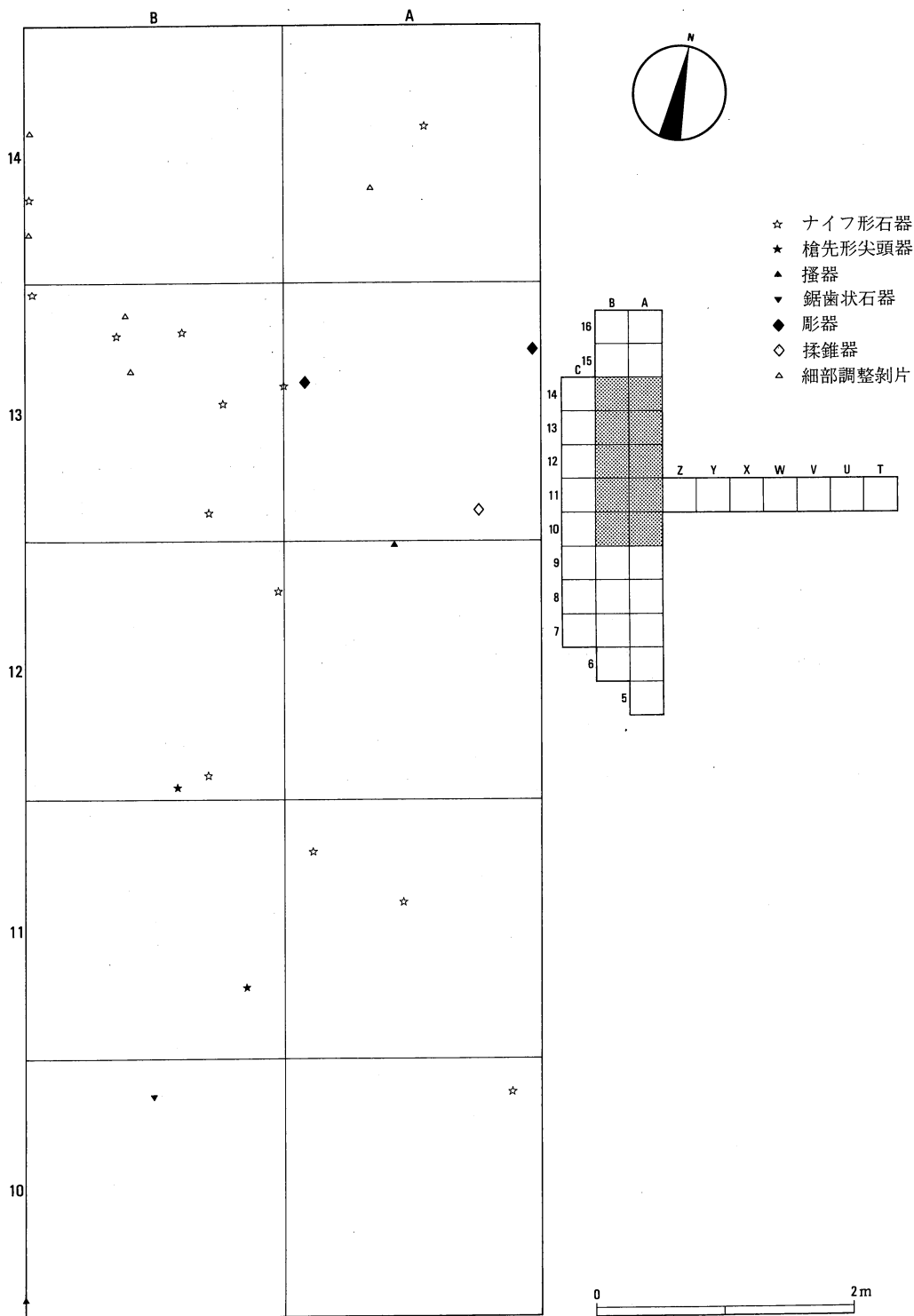
第99図 第VI層文化層 遺物分布図

第2節 遺物の分布とユニット



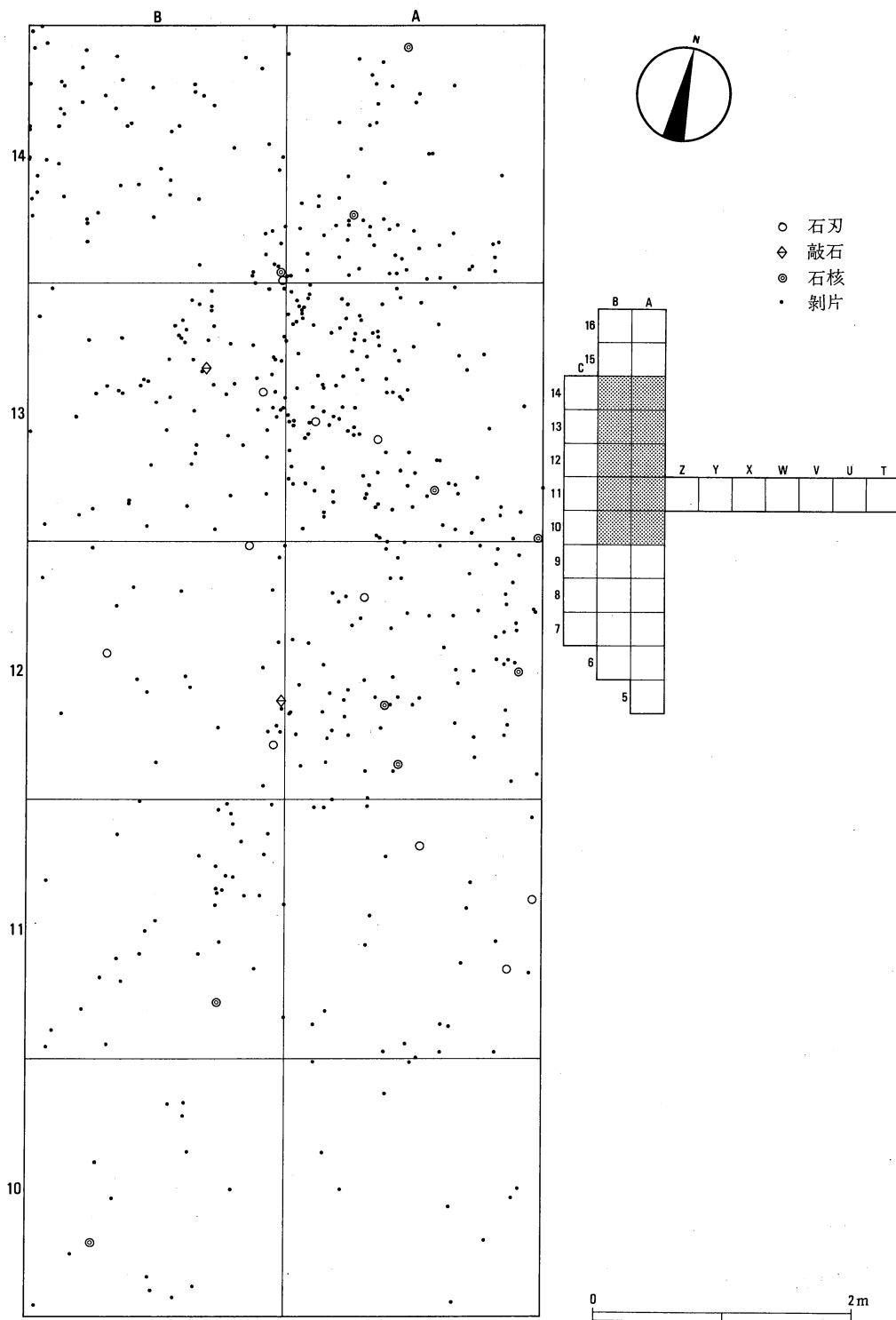
第100図 第VI層文化層 礫・碎片分布図

第Ⅶ章 第Ⅵ層文化層

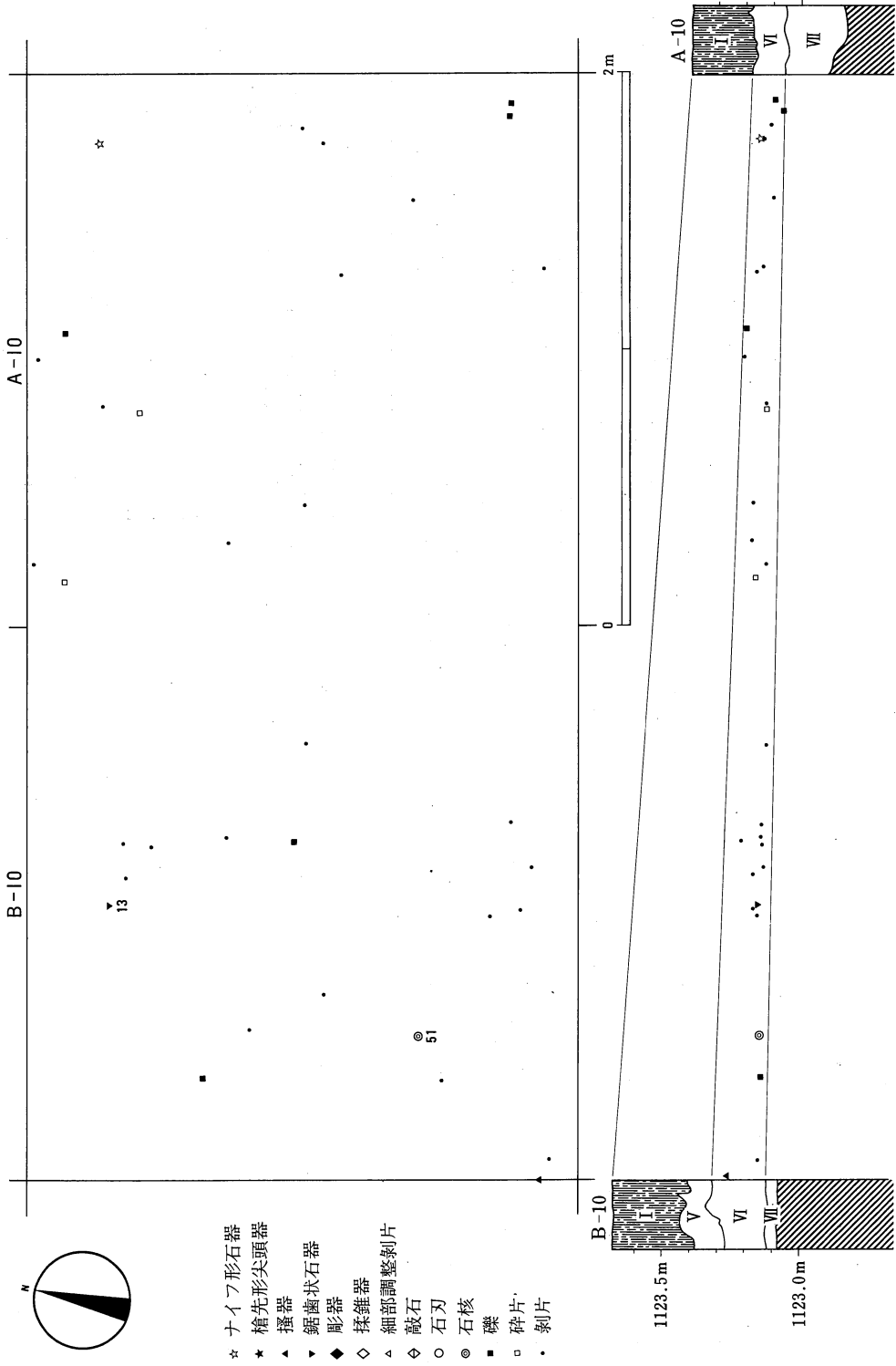


第101図 第Ⅵ層文化層 石器器種別分布図(1)

第2節 遺物の分布とユニット

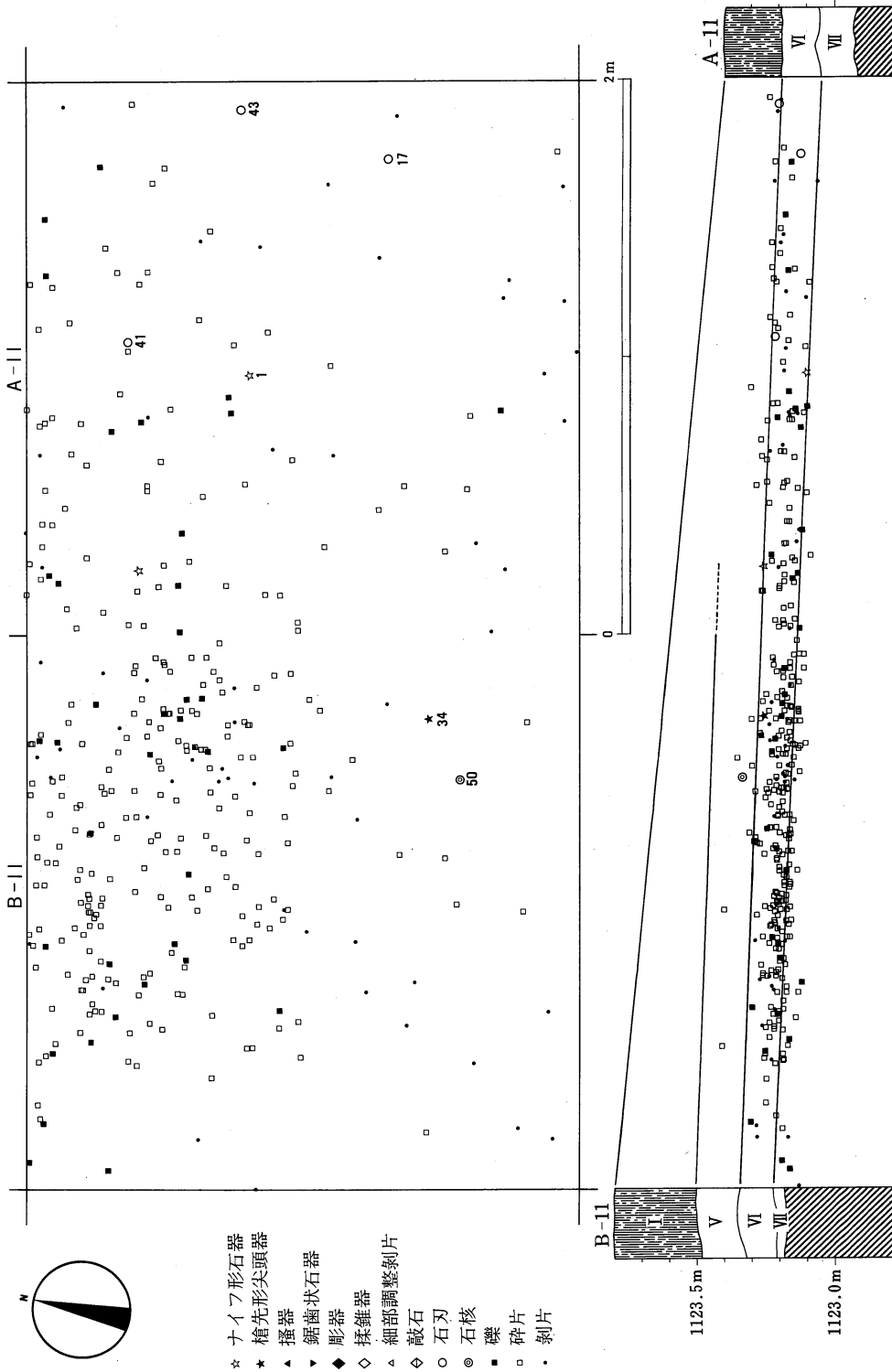


第102図 第VI層文化層 石器器種別分布図(2)

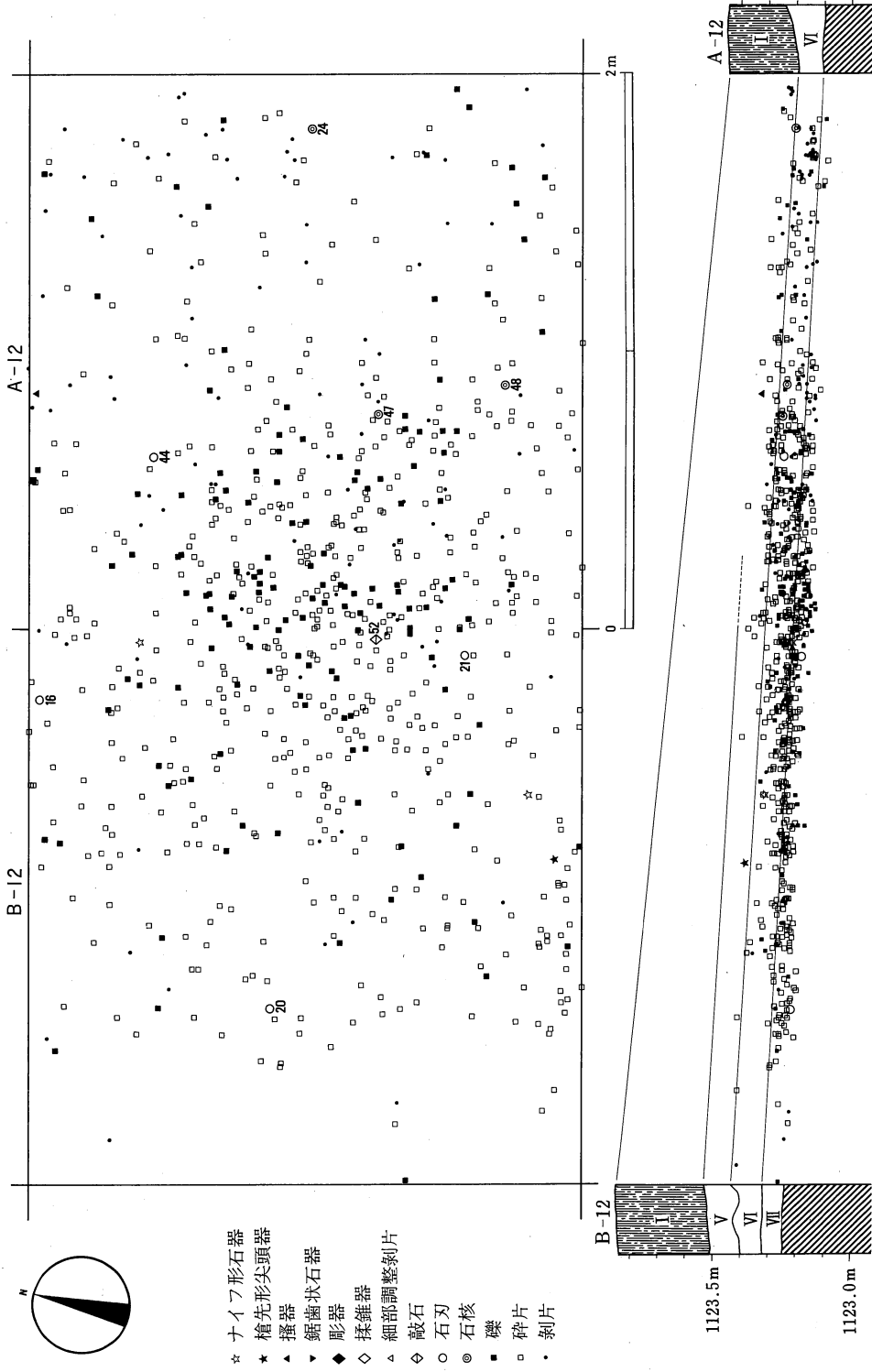


第103図 A-10区・B-10区 遺物分布図

第2節 遺物の分布とユニット



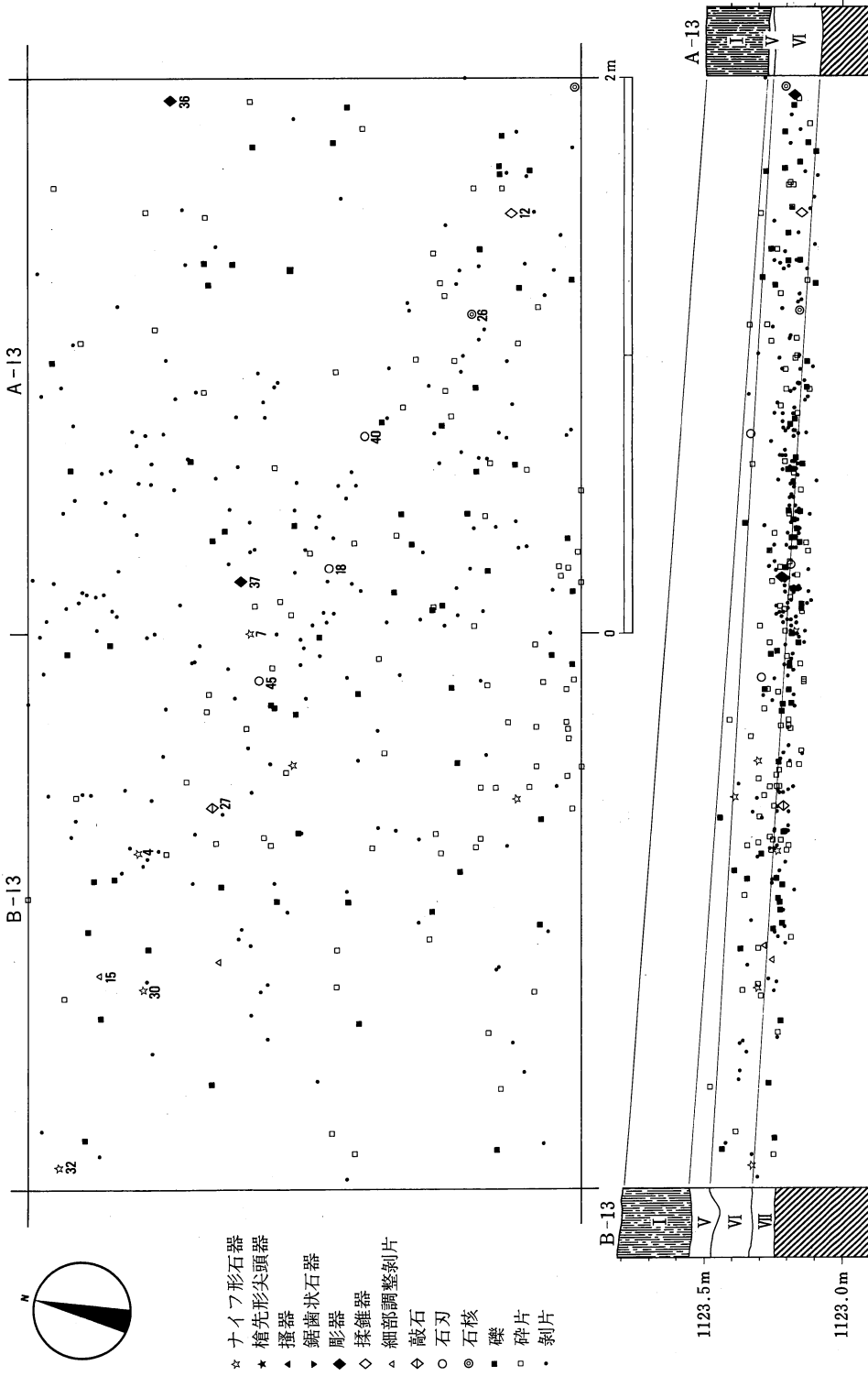
第104図 A-II区・B-II区 遺物分布図



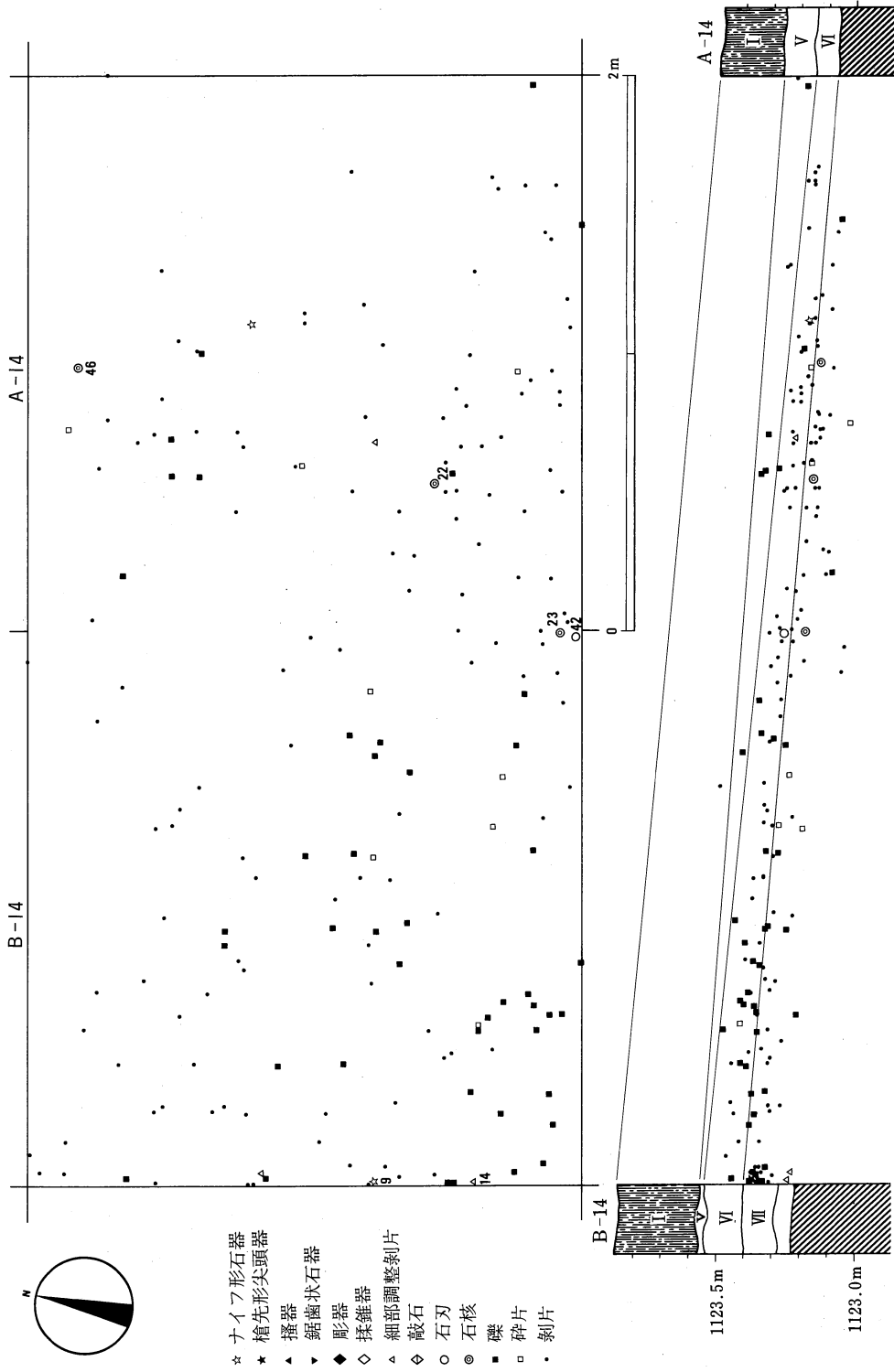
- ☆ ナイフ形石器
- ★ 槍先形尖頭器
- ▲ 搔器
- ▼ 鋸齒状石器
- ◆ 彫器
- ◇ 捺錐器
- △ 細部調整剥片
- ◇ 敲石
- 石刃
- ◎ 石核
- 礫
- 碎片
- 剥片

第105図 A-12区・B-12区 遺物分布図

第2節 遺物の分布とユニット



第106図 A-13区・B-13区 遺物分布図



第107図 A-14区・B-14区 遺物分布図

第2節 遺物の分布とユニット

A・B-10～14区の第VI層に属する遺物の平面分布図、および垂直分布図は第103図～第107図に示す通りである。調査区の西から東へ向かって緩やかな地形の傾斜が見られ、ほぼその傾斜に沿って遺物が分布している。また、同調査区の北から南方向にも若干の傾斜が見られる。

第VI層文化層のユニットの遺物全体の層位別出土頻度は、第108図のグラフに示す通りである。ここではユニット内で最も遺物が集中しているA・B-11～14区の出土資料より集計を行った。ただし、石器器種別の層位別出土頻度はA・B-10区を含めたユニット全体のものである。土層の柱状図は、A・B-11～13区の土層柱状図から各層位の上下のレベルの平均値を求め、地形の高低を考慮して模式的に表したものである。グラフに見られるように、遺物の出土レベルには約50cmの垂直分布幅が認められるが、第VI層中位から下部付近において最も出土頻度が高く、この層位に本来の生活面が求められる。第1次調査の段階では第VI層上部で一旦調査を中断したため、第VI層出土の石器群に対し「第VI層上部文化層」と仮称したが、このように当該文化層の層位は第VI層中位から下部に求めるのが妥当であり、本報告書ではこれを「第VI層文化層」と訂正した。

石器・剥片、および礫・碎片の層位別出土頻度は第109図に示す通りである。図中の網点の帯は、A・B-11～13区の土層柱状図から平均的に求めた第VI層の層位を図示したものである。石器・剥片の出土層位のピークは、第VI層の下部にみられる。礫・碎片もほぼ同様であり、第VI層中位から下部に出土層位のピークが求められる。石器器種別の垂直分布では、器種による出土層位の偏りは認められない。 (中田)

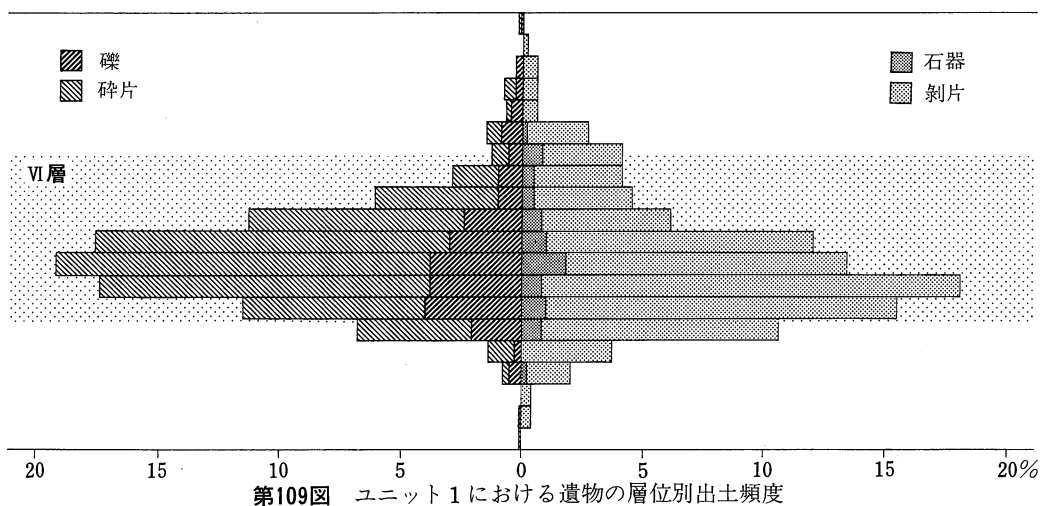
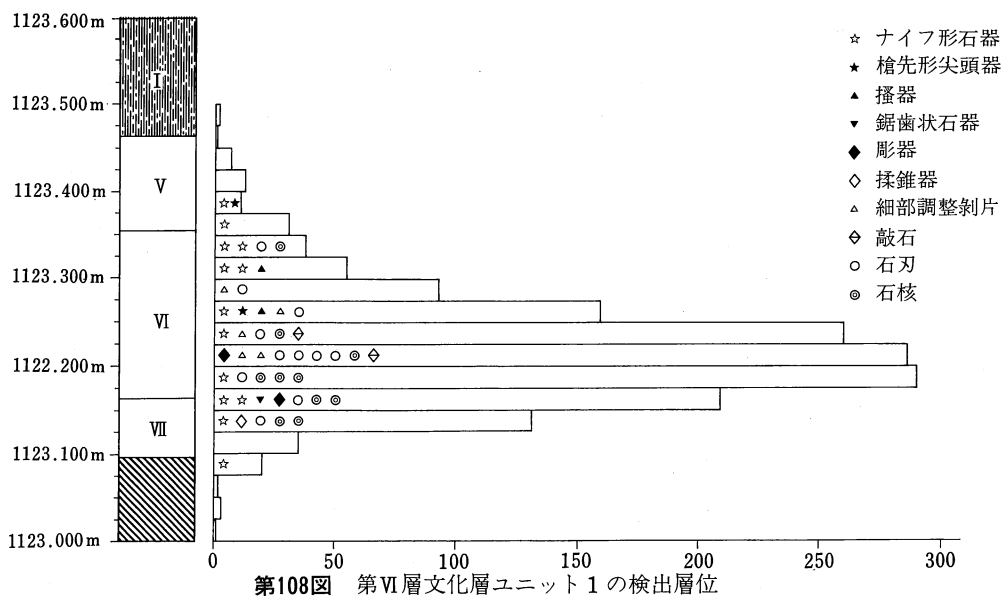
(2) ユニット1

検出されたユニットは、A・B-11・12区を中心としてA・B-10～14区の範囲に及んでいる。これを第VI層文化層のユニット1とする。ユニットを構成するA・B-10～14区の遺物の総数は、石器51点、剥片498点、礫289点、碎片856点の合計1694点である。石器の内訳はナイフ形石器13点、槍先形尖頭器2点、彫器2点、搔器2点、削器1点、揉錐器1点、鋸歯状石器1点、細部調整剥片6点、石刃11点、石核10点、敲石2点である。

ユニットのほぼ中心に位置する礫群は、第1次調査で既にその存在が確認されていたが、今回の調査によりユニットと礫群との位置関係が明らかとなった。礫群はA・B-12区を中心にA・B-11～13区に広がっており、その周囲を石器・剥片が取り囲むように分布している。石器・剥片はユニットの北側のA・B-13・14区を中心として、礫群の周辺部にまとまって分布している。ユニットの南側にあたるA・B-10・11区では、剥片は少なく、特にA・B-10区は出土遺物も非常に少ない。ただ石器のまとまりから比較的離れているにもかかわらず、石核や鋸歯状石器など4点の石器が出土している。

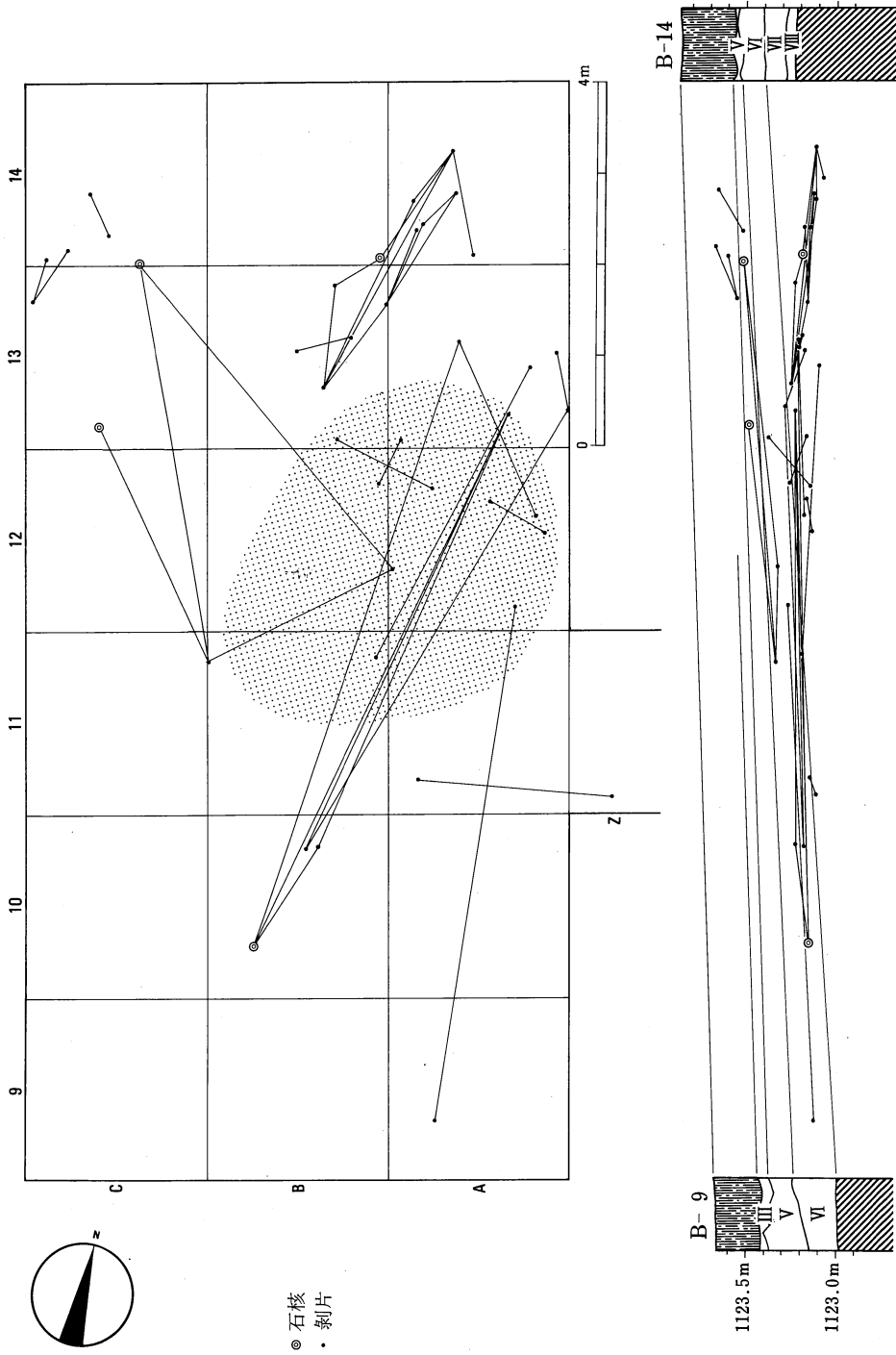
石核と剥片の母岩別分類と接合関係を調べた結果、3つの母岩別資料が得られた。接合資料はいずれも礫群の周囲に分布しており、母岩別資料1では礫群を挟むようにしてA-13区とB-

第Ⅶ章 第Ⅵ層文化層



10区に分布する石核・剥片が多数接合した(第110図)。その他、ユニット内から石核10点、敲石2点が出土した。石核はB-10区から1点出土したほかは、礫群内部からの4点を含め5点がいずれも礫群の周辺から出土した。また、敲石は礫群内のB-12区から1点、礫群の北側のB-13区から1点出土している。こうした状況から礫群の周囲で剥片剥離が行われ、この地点が石器製作の場になっていたものと考えられる。(中田)

第2節 遺物の分布とユニット



第110図 ユニット1における礫群と接合資料の分布

第3節 礫群

第2次調査の結果、ユニット1に伴って検出された礫群を第Ⅵ層文化層第1号礫群とする。

第1号礫群は、A・B-10～14区の範囲に広がるユニット1のほぼ中央部に位置し、A・B-11～13区にわたって1084点の礫・碎片が分布している。特に、A-12区西側からB-12区東側の部分に濃密であり、この部分が中心部分と考えられる。第1次調査の報告書はB-14区の礫の集中について言及しているが、これが独立した礫群であるか否かについては、B-15区およびC列の第Ⅵ層の調査を行わなければ判定できない。ここでは当該礫群に付帯する小群として理解しておく。

なお、本礫群を構成する礫・碎片は、第Ⅵ層上部から同下部にかけて約50cmの垂直分布幅の中から検出されているが、分布のピークは第Ⅵ層の中位から下部に認められる。

(1) 規模と形状 (第111図)

検出された礫の総数は1084点である。総重量は38014.31 g・平均重量は約35.07 gである。

礫はA・B-11区の北側からA・B-13区にかけて密集した状態で分布している (第111図)。規模は長径約6 m、面積は約20㎡である。形状はA-12区西側からB-12区東側を中心とし、北東-南西方向を軸とする不整楕円形状を呈する。A-12区西側からB-12区東側にかけての範囲とB-11区北側の部分に小群が認められ、それらの小群を取り巻くように礫が散在し、周辺部を形成している。また、B-13・14区にも小規模なまとまりが見られる。

(2) 礫の分析

a. 完形礫と破碎礫 (第114図)

本礫群は合計1084点の礫・碎片から構成されている。完形礫はわずかに40点 (3.7%) で、残りは破碎した碎片である。完形礫はA-12区西側からB-12区の東側の集中部分を取り囲むように分布している。

b. 焼け礫 (第112図)

構成礫1084点のうち115点 (10.6%) に明らかな被熱の痕跡が認められた。その内訳は完形礫12点・破碎礫103点である。第112図に見られるように、それらの焼け礫はA-12区に比較的まとまってはいるものの、特別な集中は示さず、礫群全体に分布している。また、22点 (2.0%) にタール状の黒色付着物が認められた。ただし、肉眼判定に限界があり、石質の大部分を占めるチャートが赤色変化しにくい性質をもつ点を考慮すれば、被熱礫の占める割合はさらに大きく見積もる必要がある。なお、今回の調査では検出されなかったが、第1次調査ではB-8から9・10区にかけて炭化物の分布が認められた。

c. 重量 (第115図)

礫の重量別の頻度は第115図の通りである。完形礫には500 g以上の個体が8点 (20.0%) 含

第3節 礫群

まれており、1471.10 g (安山岩)・1007.69 g (石質不明)の2点は特に重い。これらの重い礫は一箇所に集中することはなく、礫群全体に散在している(第112図)。一方、破碎礫では1044点のうち998点(95.6%)が100 g以下であり、そのうちの710点は10 g以下の微細な碎片である。ただし、1131.9 g (安山岩)・940.0 g (チャート)という大型の例も含まれている。

礫の総重量は38014.31 g、平均重量は約35.07 gである。完形礫の総重量は11092.58 g、平均重量は277.31 g、破碎礫はそれぞれ26921.73 g・約25.79 gである。

d. 石質(第114図)

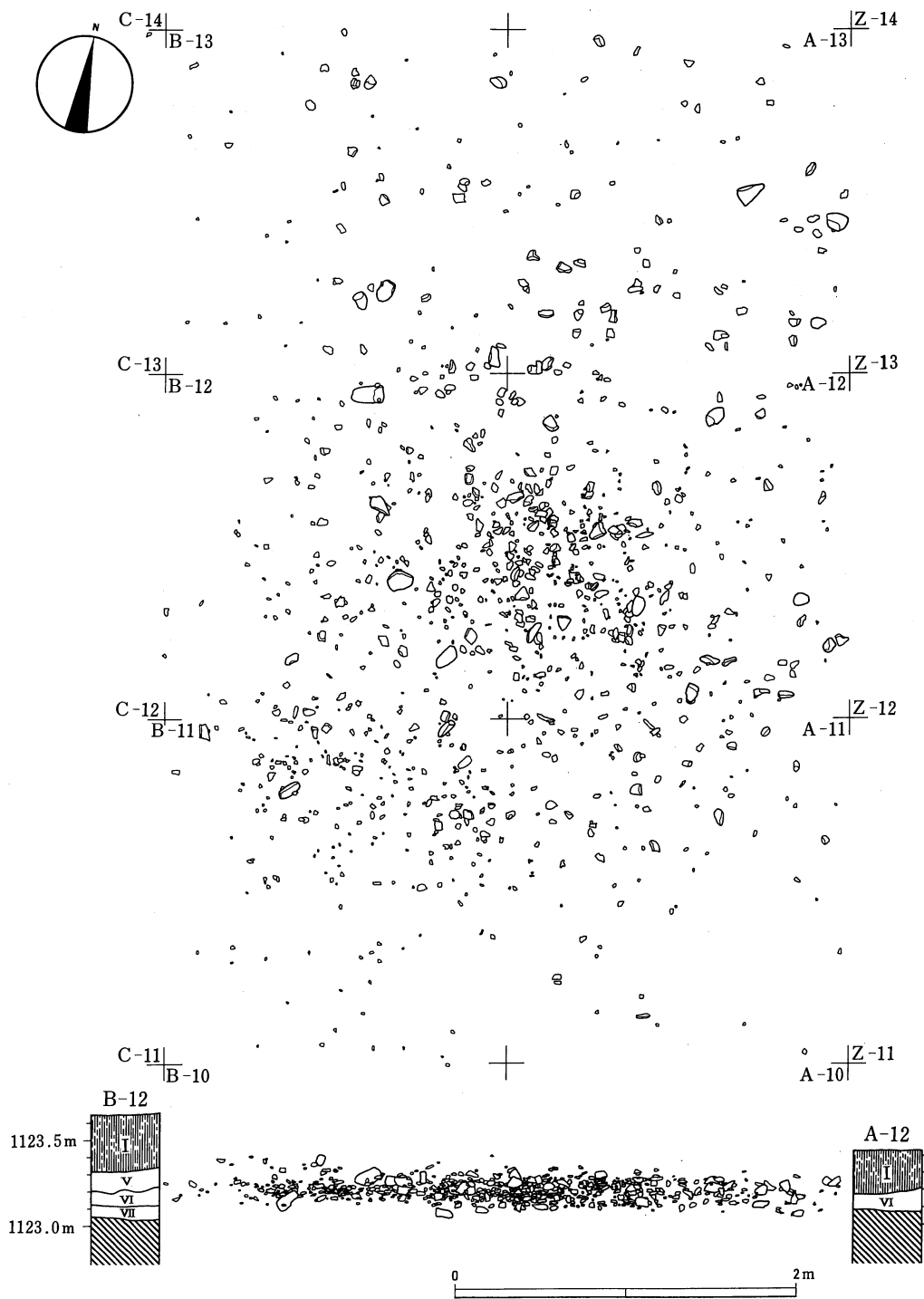
礫の石質別の内訳は第114図の通りである。全体の80%以上をチャートが占め、ほかに安山岩が3.3%、砂岩が8.1%含まれる。完形礫・破碎礫を別々に見ると、第114図のように完形礫ではチャートは12.5%にすぎず、安山岩および「その他」が合計87.5%を占めている。一方、破碎礫ではチャートが85.9%以上を占めている。

(3) 礫の接合(第113図)

第113図に礫の接合関係を示した。破碎礫1044点のうち331点から121例の接合関係が確認された。破碎礫の個数に対する接合した個数の比率(接合率)は37.1%である。

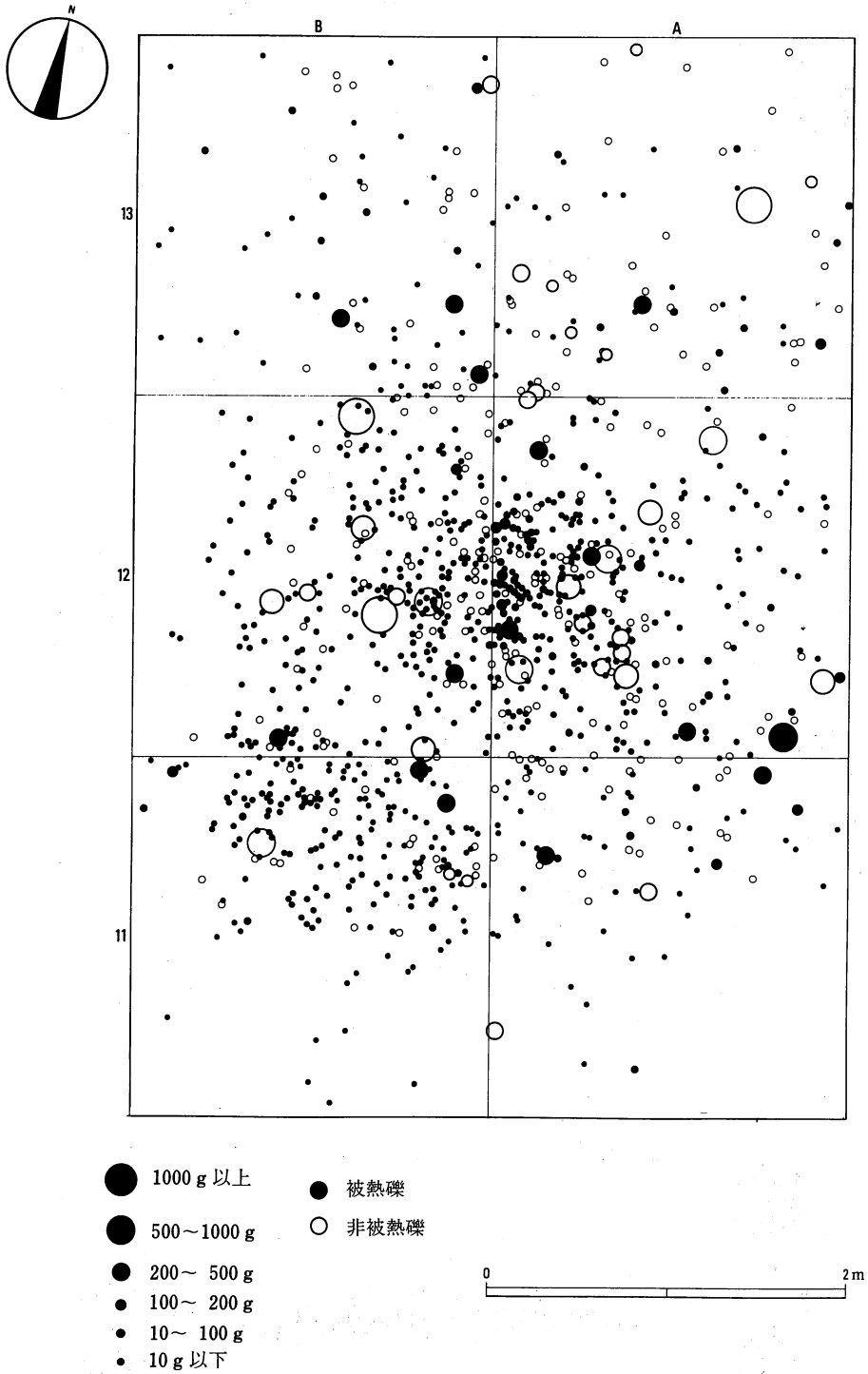
礫群全体にわたって接合関係の広がり認められるが、特に礫の密集する小群の内部に著しい。接合によって完形に還元された個体はない。また、接合前後の重量の変化を比較したが、ほとんど違いが認められなかった。なお、B-14区の集中部分での破碎礫の接合状況を調べてみると、その範囲内での接合関係だけが認められる点に注意される。(上松)

第Ⅶ章 第Ⅵ層文化層



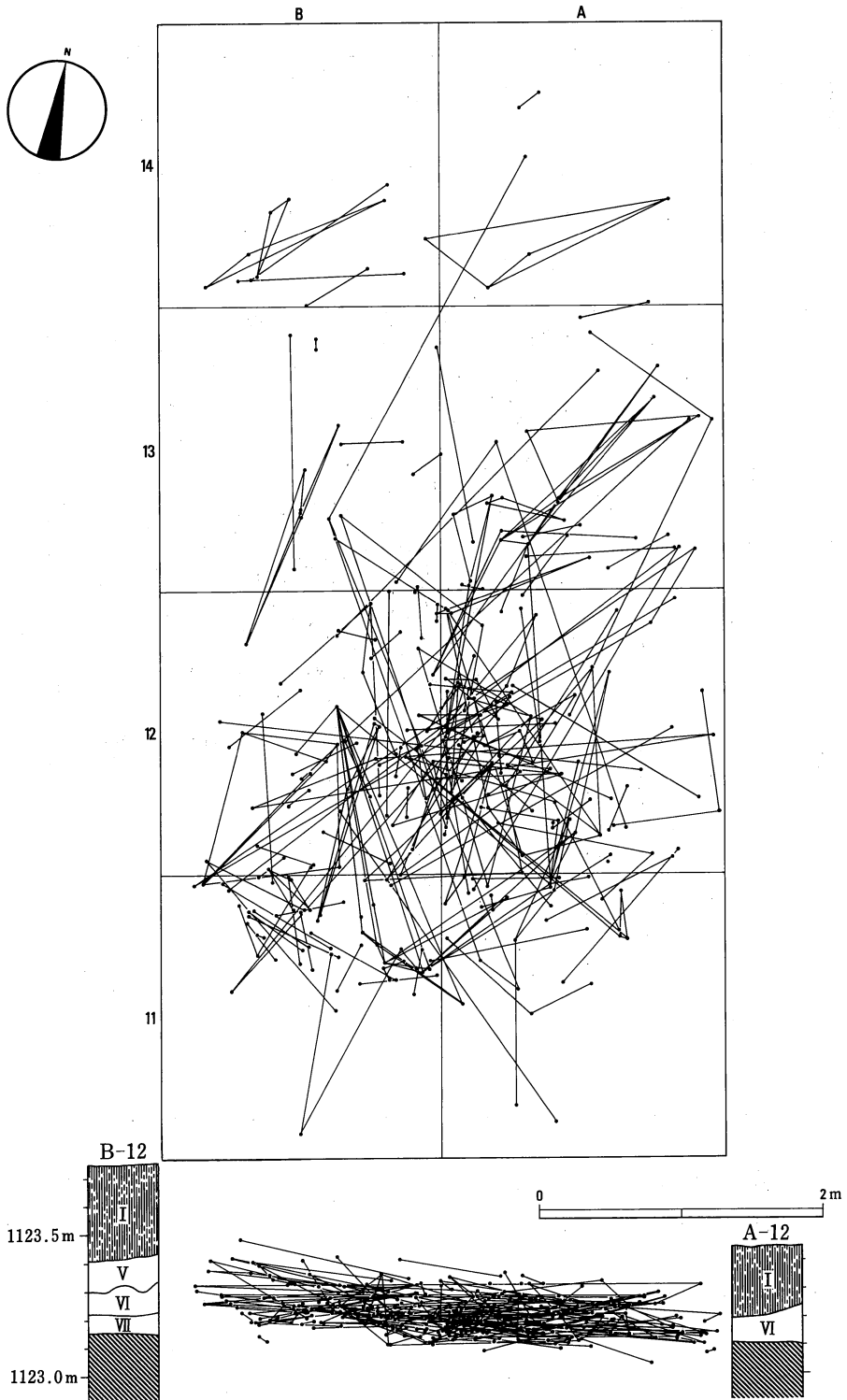
第111图 第Ⅵ層文化層第1号磔群

第3節 礫群



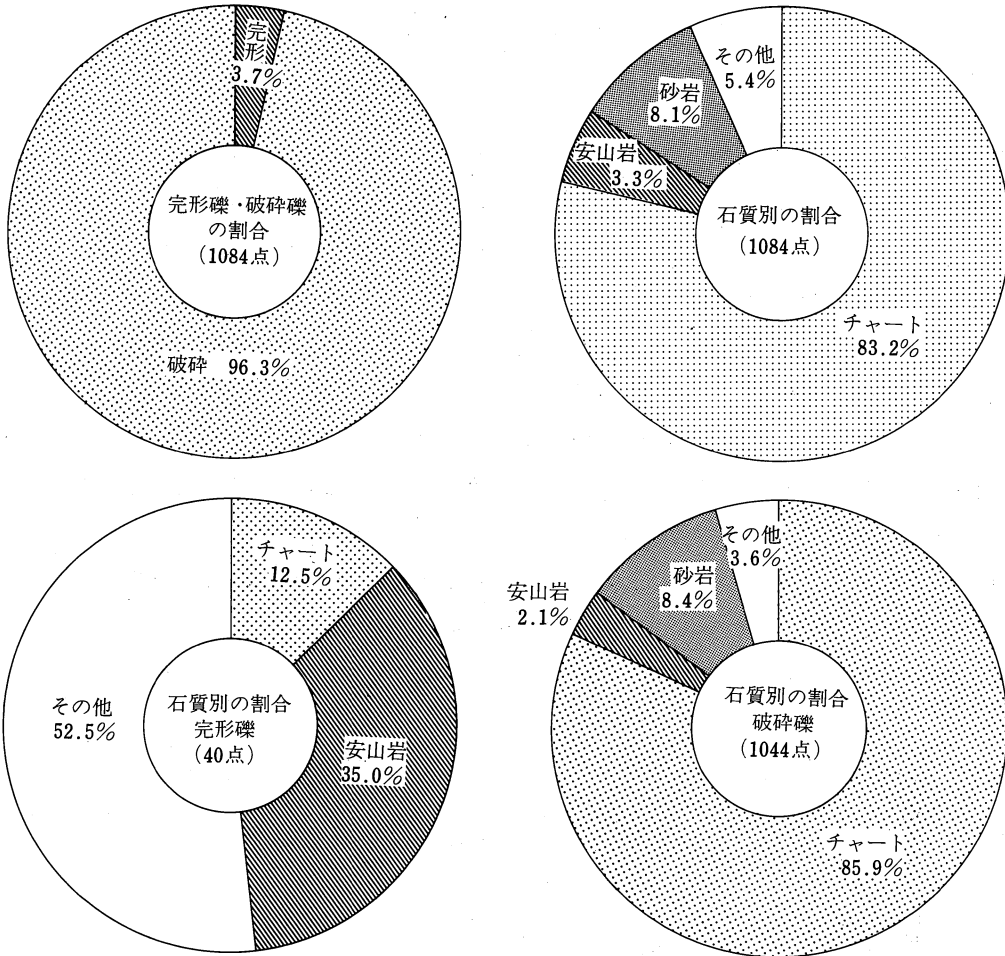
第112図 第1号礫群 構成礫の重量・被熱

第七章 第VI層文化層

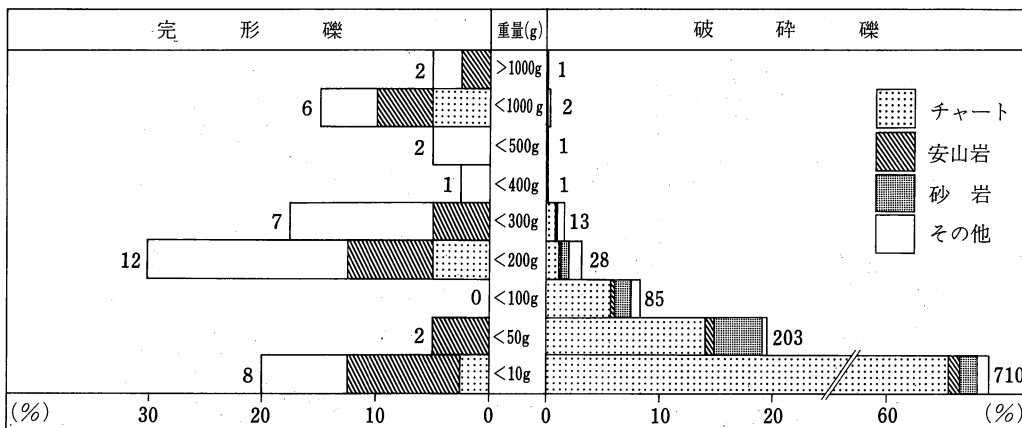


第113図 第1号磔群 構成磔の接合関係

第3節 礫群



第114図 第1号礫群 構成礫の内訳



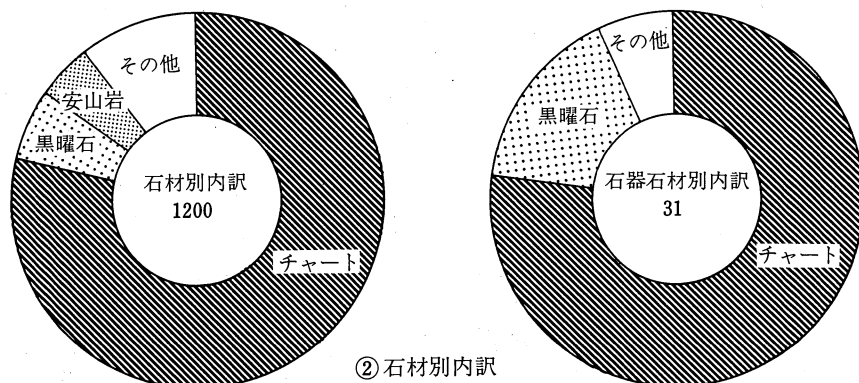
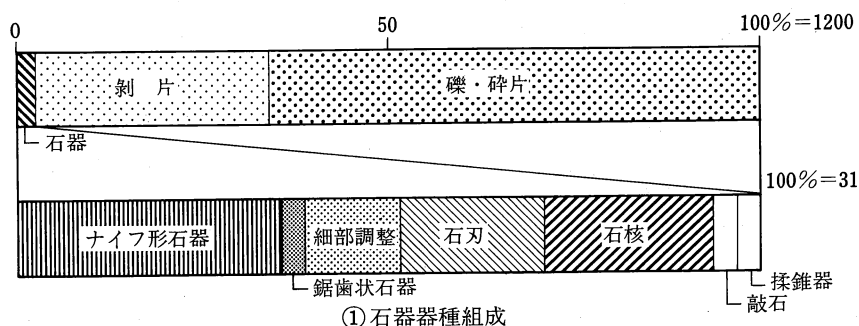
第115図 第1号礫群 構成礫の重量別内訳

第4節 石器

(1) 石器組成

第2次調査の結果、第Ⅵ層文化層に属する遺物として、石器31点、剥片376点、礫および碎片793点の合計1200点が出土した。このうち第Ⅵ層から出土した遺物は、石器27点、剥片376点、礫および碎片793点の合計1196点であり、これに第Ⅴ層出土のナイフ形石器4点を加えて総数を集計している。それらの内訳は第116図①の通りである。石器31点の内訳は、ナイフ形石器1点・鋸歯状石器1点・揉錐器1点・細部調整剥片4点・石刃5点・細部調整石刃1点・石核5点・石核素材2点・敲石1点となっている。

第Ⅵ層はユニット1を中心に40㎡を発掘したにすぎず、出土した石器は31点にとどまったが、主要な器種としてナイフ形石器が11点出土した。第1次調査出土の資料を含めると計19点となり、第Ⅵ層文化層がナイフ形石器を主体とする文化層であることが改めて確認された。また、31点の石器のうち24点はユニット1に含まれる。石器の石材の内訳は、第116図②に示されるように約77%がチャートであり、その他黒曜石・玻璃質安山岩・砂岩が用いられている。第Ⅴ層文化層の石器の石材では黒曜石製が大きな比率を占めるのに対し、第Ⅵ層文化層ではチャー



第116図 第Ⅵ層文化層の石器組成と石材別内訳

第4節 石器

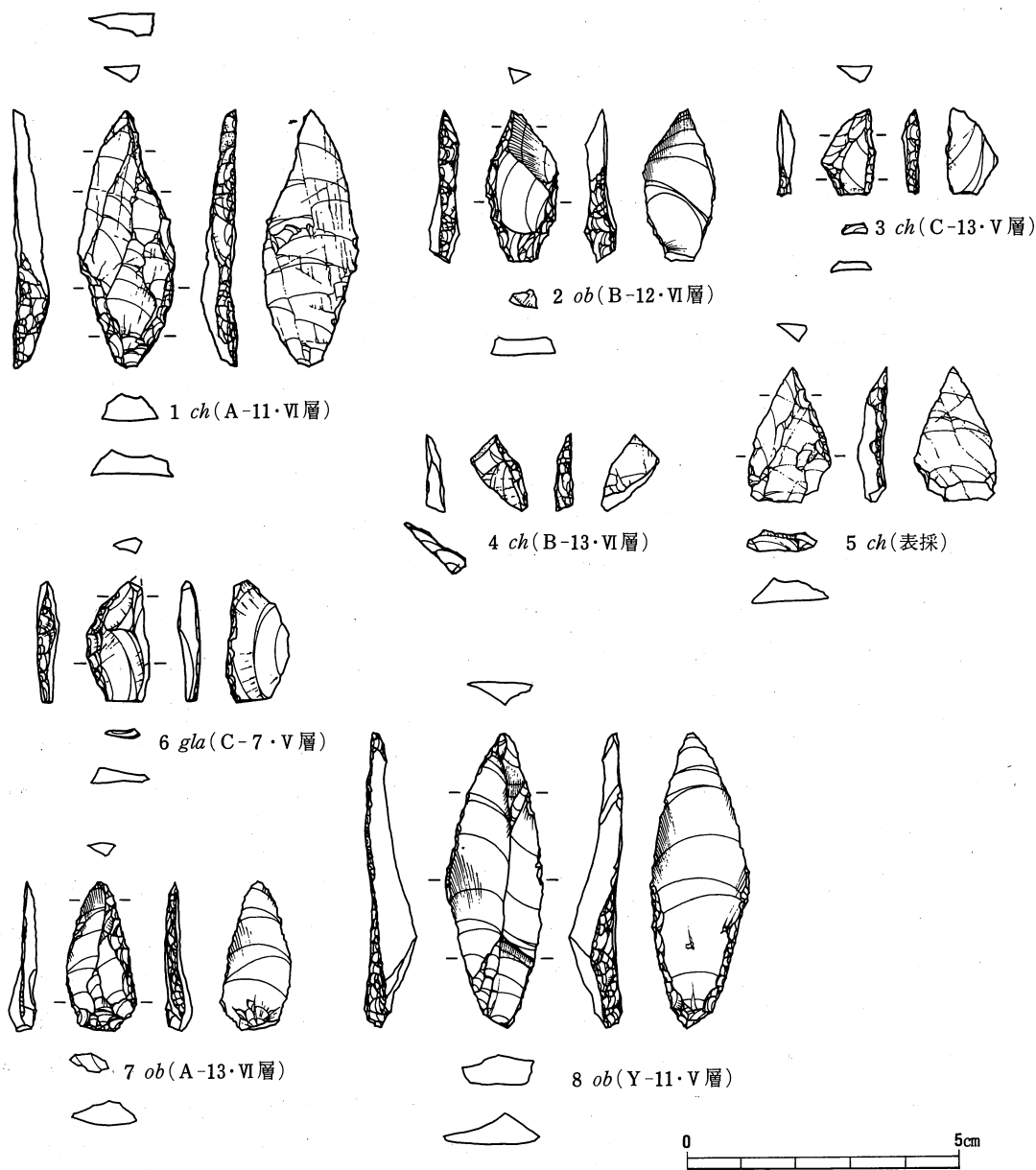
ト製が主体である。また、第V層文化層には頁岩製の石器が含まれていたが、第VI層文化層では第1次・第2次を通じてまったく出土しなかった。

ここでは第VI層文化層に属する主要な石器29点を図示し、器種別に記述する。本文中の石器番号は、石器実測図（第117図～第130図）の通し番号を示すものである。石器についての詳細なデータは石器一覧表（195～196頁）に示してある。

(2) ナイフ形石器（1～11）

ナイフ形石器は11点出土した。そのうちの4点は第V層出土で、5点が第VI層出土である。これに第I層出土の1点と表面採集の1点を加えた合計11点を第VI層文化層に帰属するナイフ形石器として認定した。石材別の内訳は、チャート製が7点、黒曜石製が3点、玻璃質安山岩製が1点である。

1はチャート製の石刃を素材とし、素材を斜めに切断するように二側縁を調整した左刃形のナイフ形石器である。素材の打面は残されていない。素材の背面の剝離方向はすべて同一で下方向から剝離されている。刃潰しは腹面側から行われている。先端のなす角度は約60°である。2は黒曜石製の剝片を素材とし、二側縁に刃潰しを加えた右刃形のナイフ形石器である。基部に素材の打面を残す。打面調整は認められない。刃潰しは腹面側から行われている。先端のなす角度は約75°、長軸と刃部との挟角は約35°である。3はチャート製の剝片を素材とし、その打点側を先端として二側縁に刃潰しを加えた左刃形の小型のナイフ形石器である。基部を折損している。長軸と刃部の挟角は約35°で、切出形を呈する。4は先端部の破片。チャート製で左刃形のナイフ形石器である。先端のなす角度は約80°である。5はチャート製の石刃を素材とし、素材を斜めに切断するように右側縁部に刃潰しを加えた左刃形のナイフ形石器である。基部を欠損しているため、全体の形状は不明である。刃潰しは腹面側から行われている。6は玻璃質安山岩製の横長剝片を素材とし、素材の打面部を取り去るように腹面側から刃潰しを加えている。右側縁の腹面側にも微細な調整が加えられており、ナイフ形石器として分類するには疑問が残る。基部を折損している。7は黒曜石製の石刃状剝片を素材とし、右側縁に刃潰しを加えた左刃形のナイフ形石器である。左側縁の基部側にも浅い刃潰しを加えられている。基部に打面を残す。打面調整は認められない。8は黒曜石製の石刃を素材とし、基部の両側縁に器長の約半分にあわせて背面側から刃潰しを加えた尖頭形のナイフ形石器である。左側縁の上半部にも腹面側から浅い刃潰しを加えられている。基部にも背面側から調整が加えられており、素材の打面部が取り除かれている。素材の背面の剝離方向は、素材の上下方向から剝離された対向する二方向を示している。先端のなす角度は約50°である。9はチャート製の石刃を素材とし、急斜度の調整によって先端を斜めに切断した部分調整のナイフ形石器である。基部に素材の打面を残す。打面調整は認められない。素材の背面の剝離方向は同一ですべて下方向からである。10はチャート製の石刃を素材とし、急斜度の調整によってその打面側を長軸に対して



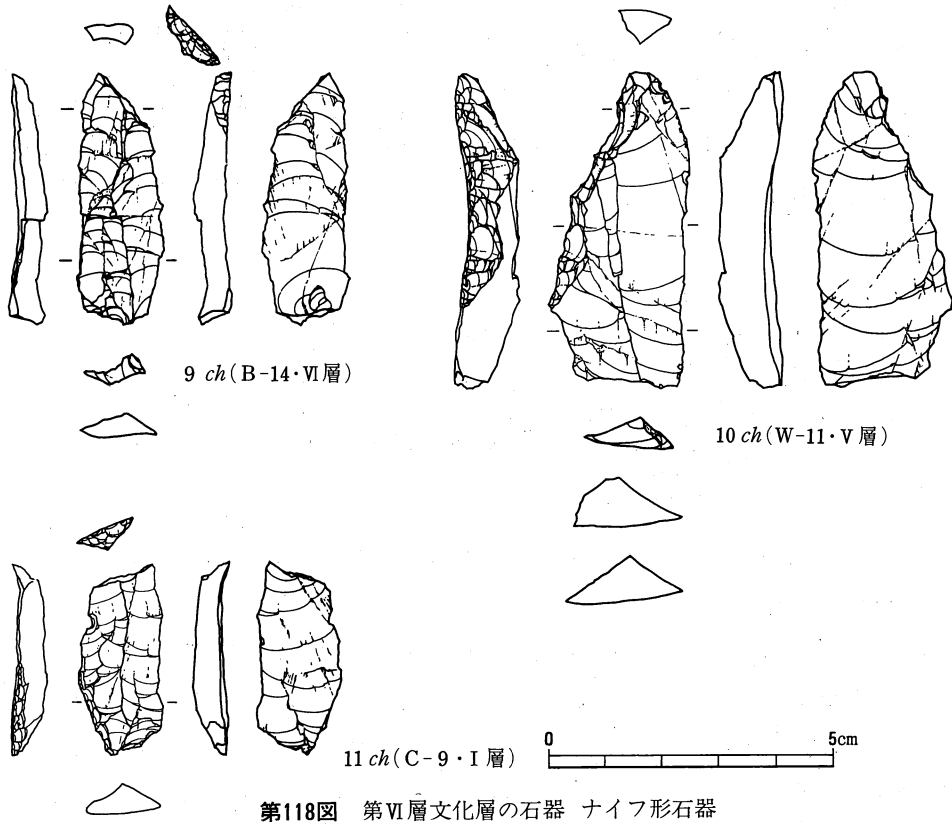
第117図 第Ⅵ層文化層の石器 ナイフ形石器

斜めに切断した部分調整のナイフ形石器である。切断は腹面側からなされている。基部側を切断している。11はチャート製の石刃を素材とし、その打面側にあたる先端部を斜めに切断し、左側縁の基部側に刃潰しを加えた部分調整のナイフ形石器である。刃潰しは腹面側から行われている。(小林)

(3) 鋸齒状石器 (13)

鋸齒状石器は1点出土した。13は黒曜石製の横長剥片を素材とし、その打面部を取り去るよ

第4節 石器



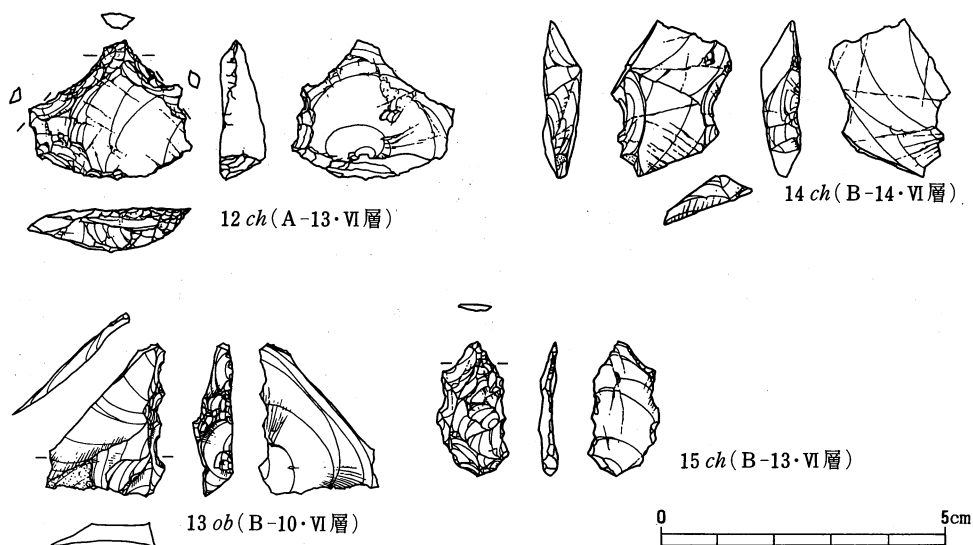
うに腹面から粗い細部調整を加え、鋸歯状の刃部を作り出している。素材の末端部を折断している。(山口)

(4) 揉錐器 (12)

揉錐器は1点出土した。12はチャート製の剥片を素材とし、主に、腹面側からの調整によって3箇所を錐状の尖った刃部を作出している。正面右側には腹面側・背面側からの錯交剥離によってベック状の刃部を作出している。素材の打面を大きく残す。打面は複剥離面打面であり、端部に打面調整が加えられている。(山口)

(5) 細部調整剥片 (14・15)

細部調整剥片は4点出土した。すべてチャート製である。ここでは2点を図示した。14はチャート製の剥片を素材とし、その上下を折断した後、一辺に素材の鋭利な縁辺を残して二側縁に腹面側から粗い調整を加えた石器である。鋭い縁辺部に微細な剥離痕が認められる。15はチャート製の小型の剥片を素材とし、正面の先端から左側縁部にかけて背面と腹面に互いに交叉するように錯交剥離を加え、2箇所小尖端を作り出した石器である。そのほか腹面の基部等にも細部調整が加えられている。(山口)



第119図 第Ⅵ層文化層の石器 揉錐器・鋸齒状石器・細部調整剥片

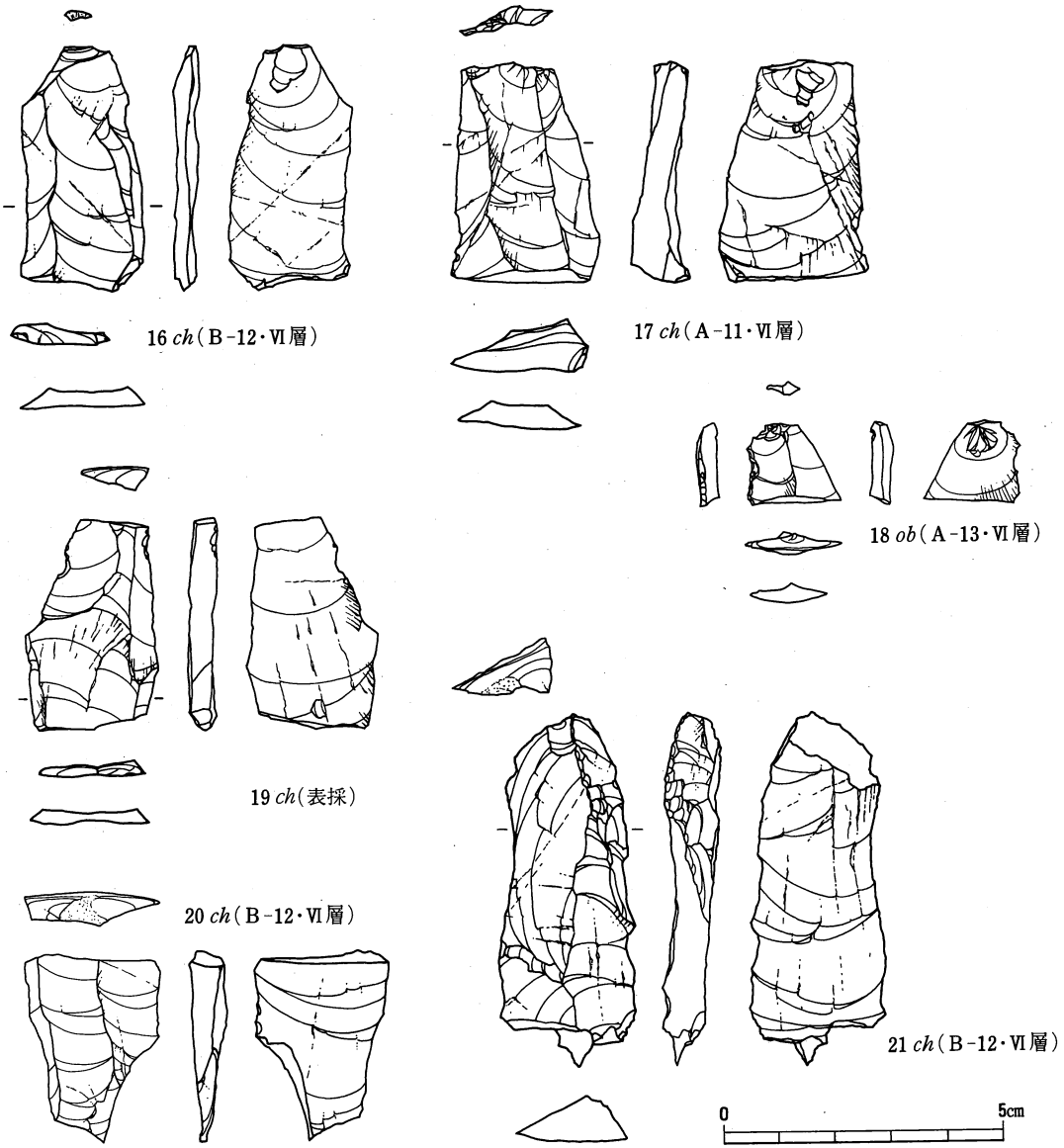
(6) 石刃 (16~21)

石刃は6点出土した。16はチャート製で、打面を小さく残す。打面は原礫面または節理面であり、打面調整は認められない。下端を折断する。背面は同一打面から剥離された2面以上の平行的な剥離面から構成され、両側縁に平行する2本の稜線が形成されている。17はチャート製で、下部を折断する。打面を残し、打面調整が認められる。背面は上方向から剥離された3面の剥離面から構成され、両側縁に平行する2本の稜線が形成されている。18は黒曜石製の石刃を素材とし、その左側縁に細部調整を加えており、調整後下部を折損している。素材の打面を残す。打面調整は認められない。19はチャート製で、上部および下部を折断する。背面には上および下方向の対向する二方向から交互的に剥離された5面以上の剥離面が見られ、両設打面石核から剥離されたことがわかる。20はチャート製で、上端を折断する。下端は不規則に破損している。背面は4面の剥離面から構成され、それらはすべて主剥離面と同じく上方向から剥離されており、左から右へ順を追って石刃が連続的に剥離されたことがわかる。21はチャート製で、背面に横および縦方向から剥離された石核の調整面とそれによって形成された稜を残し、上部は断面三角形状をなす。右側面側に比較的細かい連続的な石核調整が認められる。その稜を剥ぎ取るように下方から1枚の石刃が剥離されており、上下に打面をもつ両設打面石核から剥離されたことがわかる。(岡崎)

(7) 敲石 (27)

27は砂岩製の敲石である。比較的細長い礫を素材としており、その稜の交叉する上端部に著しい敲打痕が見られ、その部分は敲打によって平坦に摩耗している。B-13区出土の2点が接合したが、下部が大きく破碎して失われている。また、表面に被熱による赤色変化が認められ

第4節 石器



第120図 第VI層文化層の石器 石刃

る。重量は現状で76.25 gである。

(岡崎)

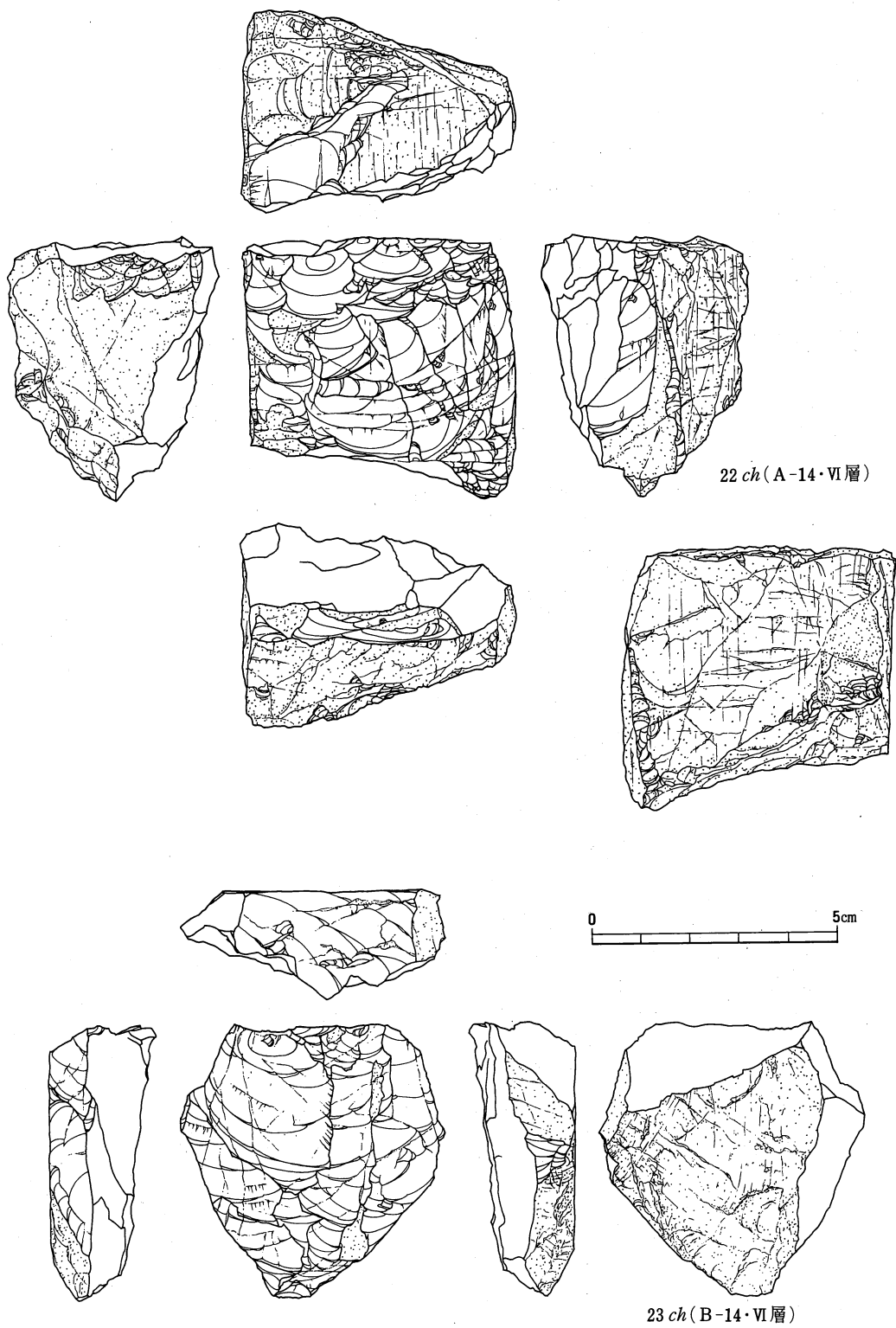
(8) 石核 (22~26・28・29)

石核は7点出土した。22はチャートの角礫の上部を節理面に沿って平坦に打ち割り、打面を設けた単設打面石核である。打面の大部分は節理に沿った最初の分割面であるが、作業面の方向から1面の剝離が加えられている。打面調整は行われていない。図の正面および右側面において石刃と縦長剝片が連続的に剝離されている。打面角は約65°である。左側面・右側面・背面・下面に素材の原礫面を大きく残している。23はチャート製の単設打面石核である。打面は

正面方向から剥離された単一の剥離面である。打面調整は行われていない。この打面から正面の作業面において縦長剥片を剥離しており、剥片剥離の進行の結果、扁平な残核となっている。打面核は約 60° である。右側面から背面には原礫面が大きく残るが、背面の右側に下方向からの剥離面が残されている。母岩別資料2に属する。24はチャート製の複設打面石核である。剥片剥離の過程で打面転位を頻繁に行った結果、多方向からの剥離面で構成される多面体状を呈する。正面の作業面では右横方向から剥離された上面を打面として縦長剥片・不定形剥片が剥離されているが、これらの剥離の後、この作業面と背面の原礫面等を打面として左側面・右側面において剥片剥離が行われている。25は節理面に沿って六面体状に分割されたチャートの角礫を素材とし、上面の節理面を打面として正面で不定形剥片が剥離されている。打面角は約 48° である。また、裏面には左側面を打面とする横方向の剥離面が見られる。打面調整は行われていない。26はチャートの角礫を素材とした単設打面石核である。打面は平坦な節理面であり、打面調整は行われていない。図の正面において不定形剥片が剥離されている。打面角は約 35° である。背面には原礫面が大きく残る。28は節理面に沿って大きく分割されたチャートの角礫の側縁から数枚の不定形剥片を剥離している。上面・下面・背面は原礫面である。石核用の素材と考えられる。母岩別資料3に属する。29は節理面に沿って大きく分割されたチャートの角礫を素材とし、その側縁から数枚の不定形剥片を剥離している。石核用の素材と考えられる。母岩別資料3に属する。

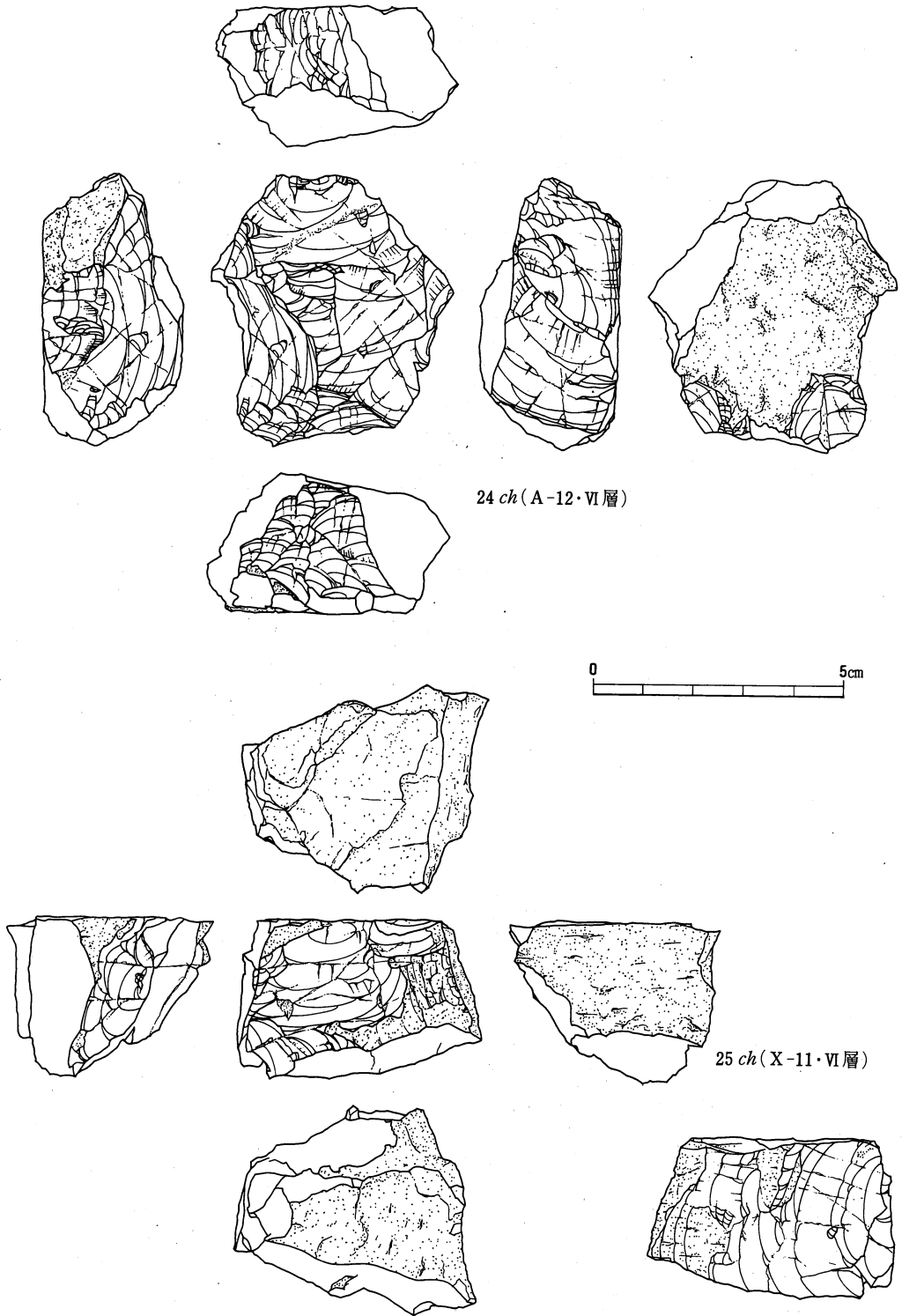
(岡崎)

第4節 石器



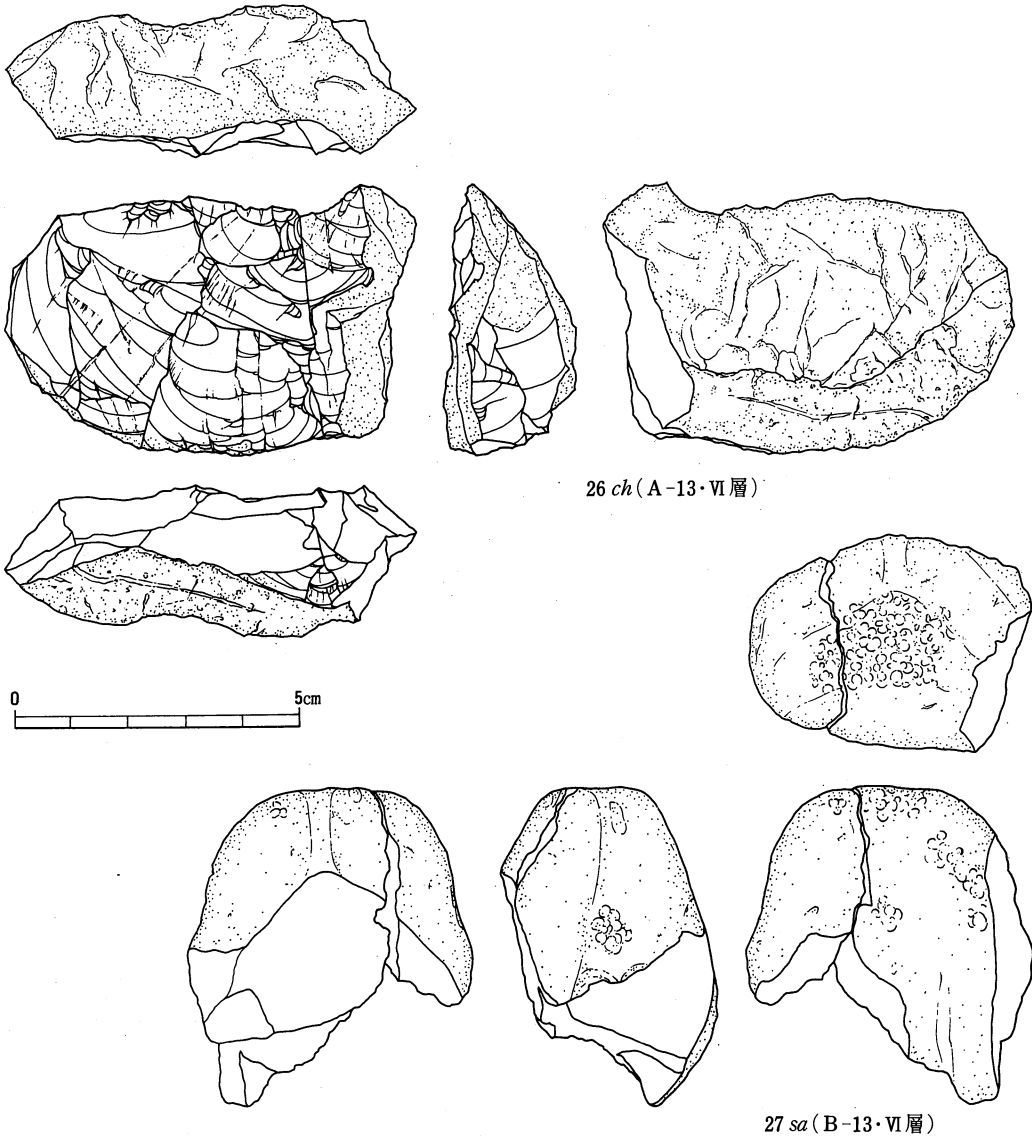
第121図 第VI層文化層の石器 石核

第Ⅶ章 第Ⅵ層文化層

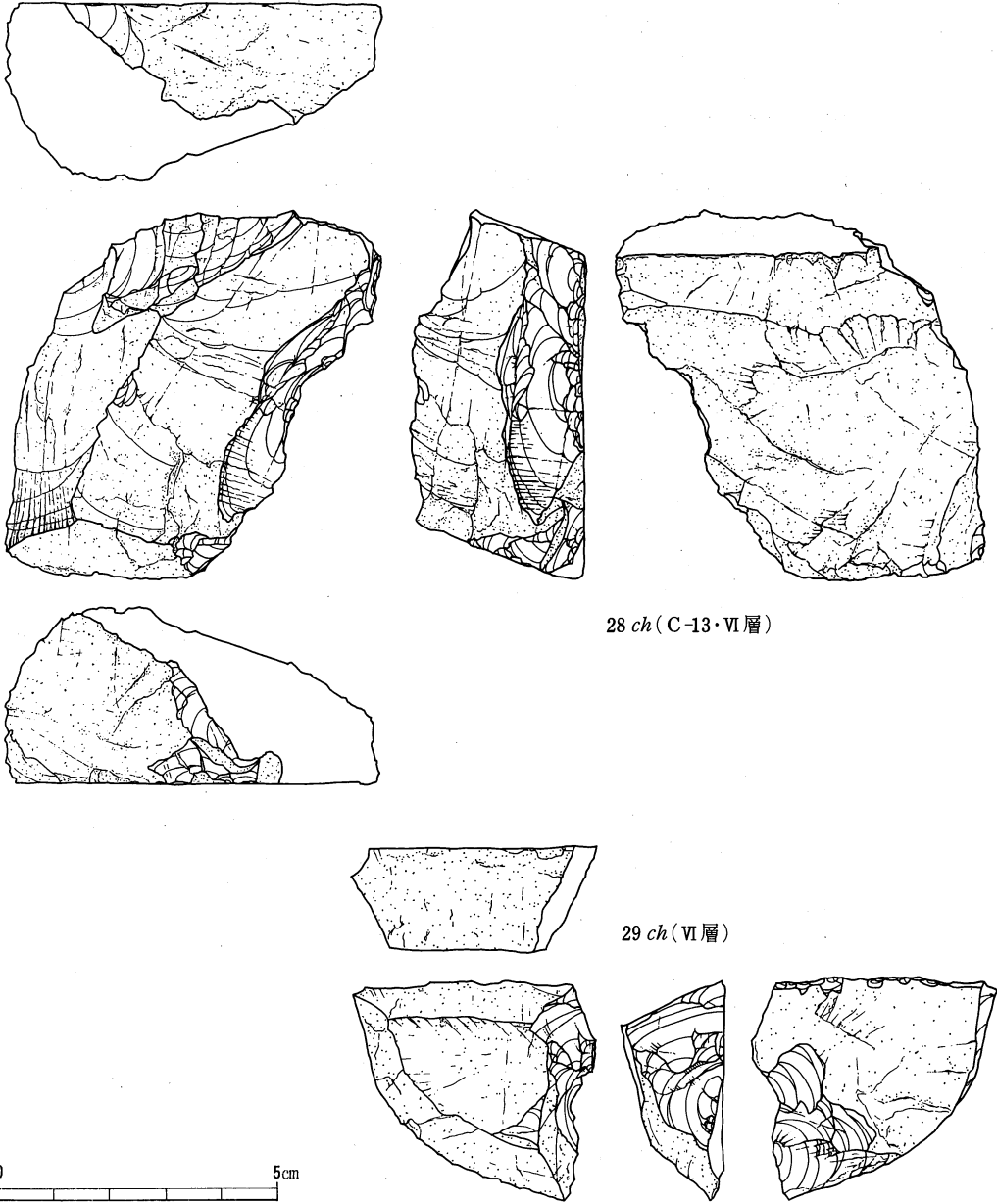


第122図 第Ⅵ層文化層の石器 石核

第4節 石器



第123図 第VI層文化層の石器 石核・敲石



第124図 第VI層文化層の石器 石核

第10表 第VI層文化層石器器種別一覧表

ナイフ形石器

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	刃部長(cm)	先端角	重量(g)	遺存状態
1	A-11	141	VI層	ch	4.71	1.77	0.50	2.78	60°	4.08	完形
2	B-12	149	VI層	ob	2.79	1.32	0.34	1.31	75°	1.51	完形
3	C-13	76	V層	ch	1.58	0.98	0.30	1.31	70°	0.38	折損
4	B-13	114	VI層	ch	(1.40)	(1.05)	(0.34)	—	80°	0.26	破片
5	—	—	表採	ch	2.47	1.52	0.46	—	55°	1.49	折損
6	C-7	33	V層	gla	2.21	1.15	0.29	—	55°	0.83	基部折損 先端折損
7	A-13	251	VI層	ob	2.74	1.27	0.45	1.70	70°	1.10	完形
8	Y-11	11	V層	ob	5.39	1.81	0.55	2.76	50°	0.10	完形
9	B-14	141	VI層	ch	4.44	1.54	0.34	1.35	70°	2.87	完形
10	W-11	7	V層	ch	5.56	2.48	0.87	4.32	60°	11.00	完形
11	C-9	—	I層	ch	3.37	1.50	0.54	1.13	75°	2.41	完形

鋸齒状石器

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	遺存状態
1	B-10	65	VI層	ob	2.56	2.08	0.69	1.90	上部折損

採錐器

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	剝離角	遺存状態
1	A-13	159	VI層	ch	2.46	2.86	0.79	4.97	90°	完形

細部調整剥片

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	遺存状態
1	B-14	139	VI層	ch	2.76	2.11	0.69	3.62	完形
2	B-13	84	VI層	ch	2.39	1.27	0.38	0.79	完形
3	B-13	106	VI層	ch	5.58	3.84	1.64	40.55	完形
4	B-14	147	VI層	ch	1.85	3.99	1.46	7.74	完形

石刃

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	部位	細部調整	石質	母岩番号	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	斜離角
1	第120図16	203	VI層	末端折断		ch		(4.35)	2.18	0.38	4.00	95°
2	" 17	120	VI層	末端折断		ch		(3.92)	2.65	0.80	10.30	
3	" 18	132	VI層	上部折断	○	ob		(1.46)	(1.72)	0.39	0.76	105°
4	" 19	—	表採	頭部		ch		(3.75)	2.34	0.52	4.49	
5	" 20	247	VI層	中間部		ch		(3.36)	2.39	0.60	4.58	
6	" 21	341	VI層	上部折断		ch		(6.26)	2.43	0.98	12.47	

敲石

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	遺存状態
1	第123図27	119	VI層	san	(5.64)	5.06	3.35	76.25	破損

石核・石核素材

挿図番号	グリッド	登録番号	層位	石質	母岩番号	作業面幅	打面角	高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
1	第121図22	55	VI層	ch		5.49	65°	5.34	5.58	4.22	139.30
2	" 23	136	VI層	ch	資料2	5.74	60°	5.06	5.39	2.96	61.77
3	第122図24	402	VI層	ch		4.53	70°	5.45	4.86	2.84	75.21
4	" 25	51	VI層	ch		4.12	48°	3.19	4.89	4.17	62.16
5	第123図26	201	VI層	ch		4.65	35°	3.06	7.21	4.31	78.97
6	第124図28	94	V層	ch	資料3	—	—	6.68	6.71	3.19	139.25
7	" 29	66	V層	ch	資料3	—	—	3.95	4.36	1.84	33.84

第5節 第1次調査出土資料

第125図から第130図に、第1次調査出土資料のうちユニット1に含まれる石器23点を再録した²⁰。31はユニットの範囲から外れて出土したものであるが、関連資料として掲載した。

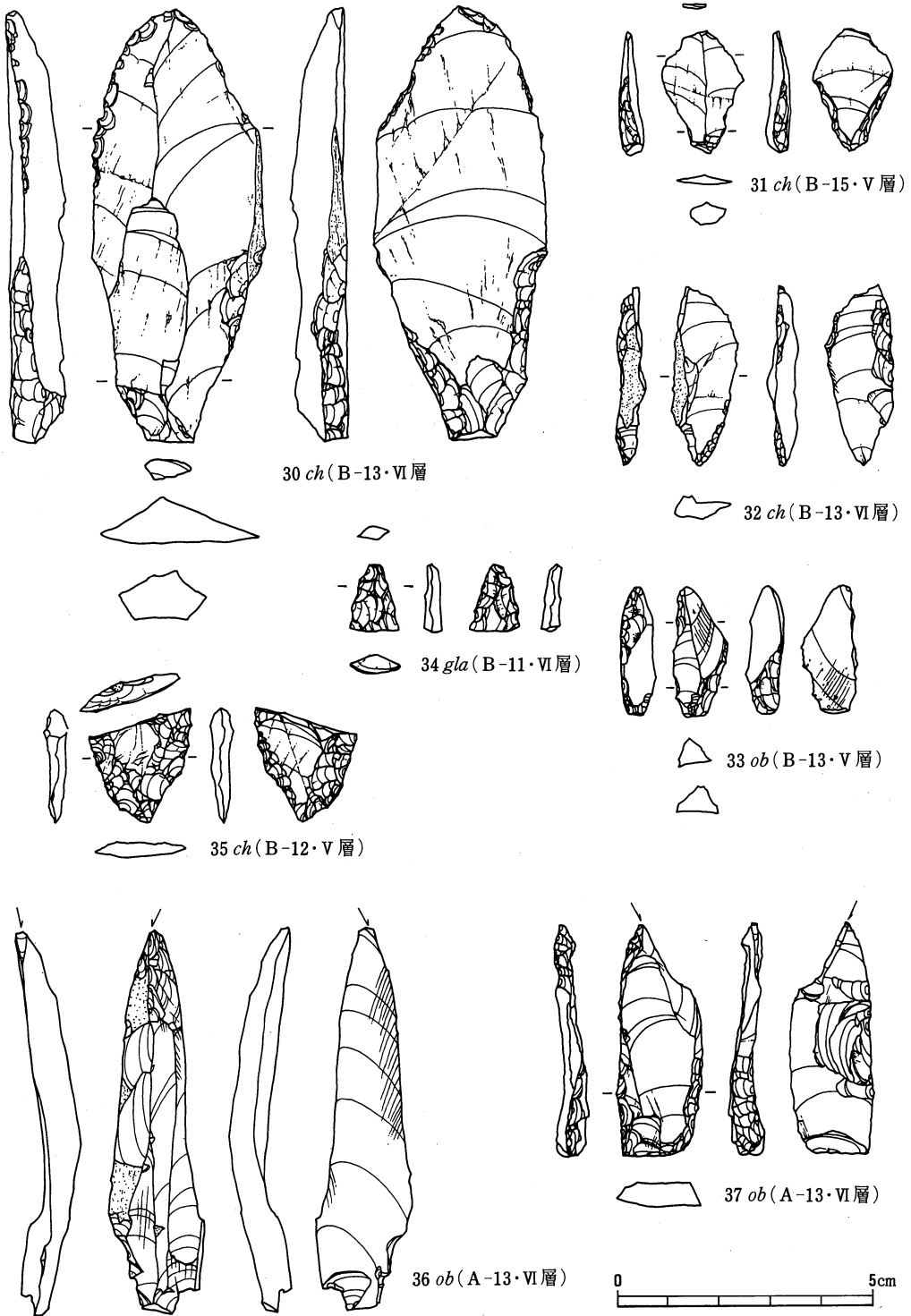
30～33はナイフ形石器である。30はチャート製の石刃を素材とし、その腹面の基部の両側縁に調整を加えている。この基部調整は典型的な刃潰し加工とは異なり、剝離角が比較的鋭角である。基部の断面形は厚い台形状を呈する。左側面の表裏と右側縁の裏面にも浅い調整が加えられている。最も大型で、長さ8.5cm、幅3.4cmである。基部に素材の打面を残す。打面調整は認められない。31はペン先状のナイフ形石器で、30と同様に素材の腹面の基部の両側縁に背面側から調整を加えている。チャート製。先端部を折損している。素材の打面は除去されている。33は左側縁と右側縁の下部に急斜度の刃潰しを加えた二側縁調整のナイフ形石器である。先端部を僅かに欠損している。黒曜石製。34・35は両面調整の槍先形尖頭器である。34は先端部の破片である。玻璃質安山岩製。35はチャート製の剝片を素材とし、周縁から両面に調整を加えているが、表面に素材の腹面、裏面に素材の背面を留めている。

36・37は彫器である。36は断面三角形の狭長な石刃を素材とし、その尖った先端部の左側に彫刻刀面を作出している。彫刻刀面打撃のための端部の調整は認められない。黒曜石製。37は黒曜石製の縦長剝片を素材とし、その背面の左側縁と右側縁の下半部に刃潰し状の急斜度の調整を加えた後、左上端から右肩にかけて約60°の角度で打撃を加え、彫刻刀面を作出した斜刃形の彫器である。彫刻刀面の傾斜角は約30°である。素材の打面側にあたる基部は、左側縁の調整後に折断されており、その折れ面を打面として右側縁の下端が部分的に調整されている。また、左側縁の調整後に裏面に平坦な調整が加えられている。38はチャート製の縦形削器で、母岩別資料1に属する。39は背面に原礫面を残す黒曜石製の石刃状剝片を素材とし、その末端に急斜度の調整によって緩い弧状の刃部を作出した搔器である。40～45は石刃である。いずれも背面を構成する剝離面の打撃方向は腹面と同一方向を示している。40・41・42・44は下部を折断している。43・45は完形である。

46～51は石核である。47・48は同一母岩であり、51は母岩別資料1に属する。すべてチャート製で、角礫を素材とした単設打面石核が多い。49・51は単剝離面打面、46・48・50は複剝離面打面であるが、いずれの場合にも打面端部の細調整は行われていない。石核の側面・裏面には素材の原礫面や粗割りの節理面を留めているものが多く、石核の形状調整をほとんど行わない点にも共通した特徴がある。

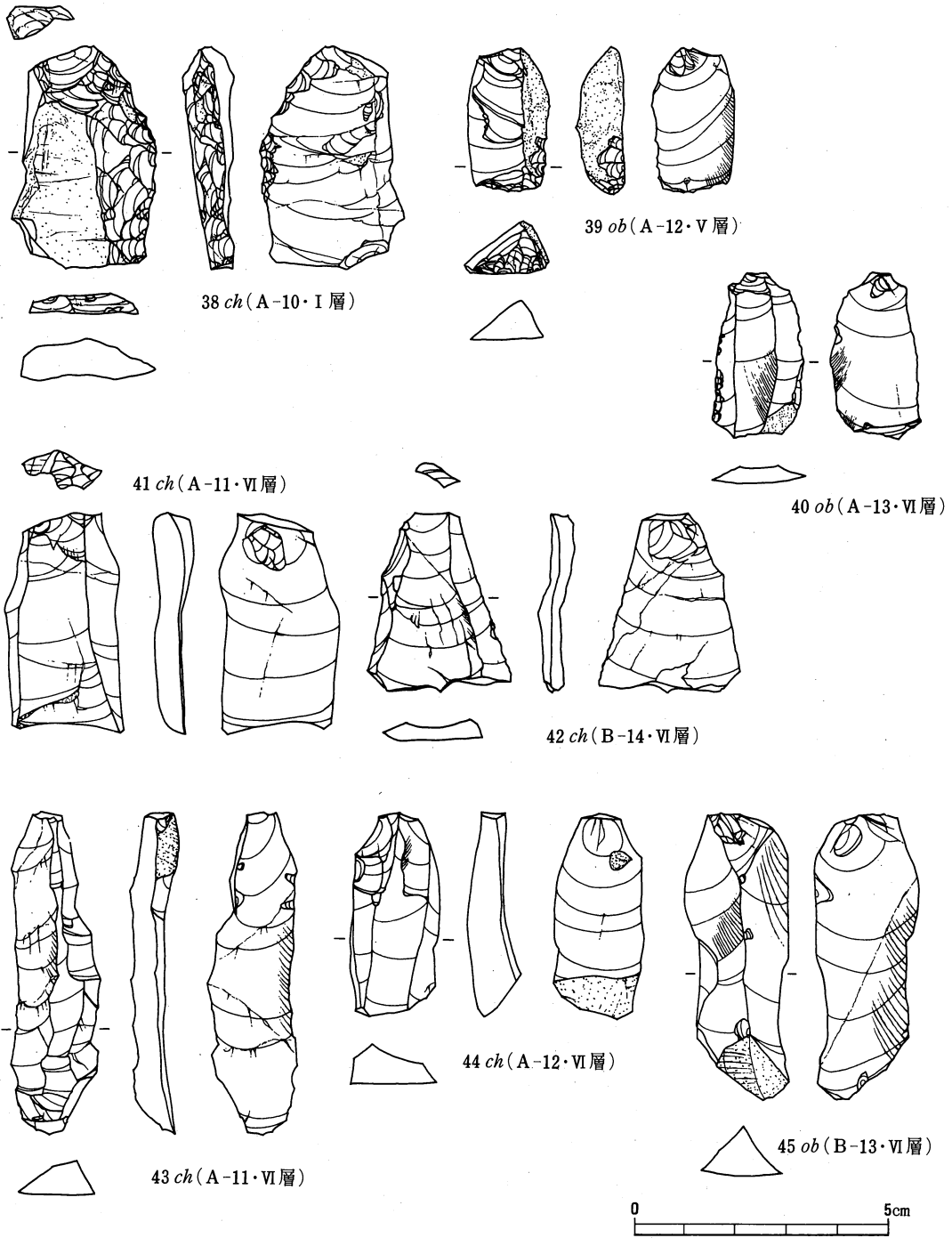
52は砂岩製の敲石で、稜線の交差する角の4箇所に敲打による破碎痕が見られる。重量は17.8.40gである。

(若泉)

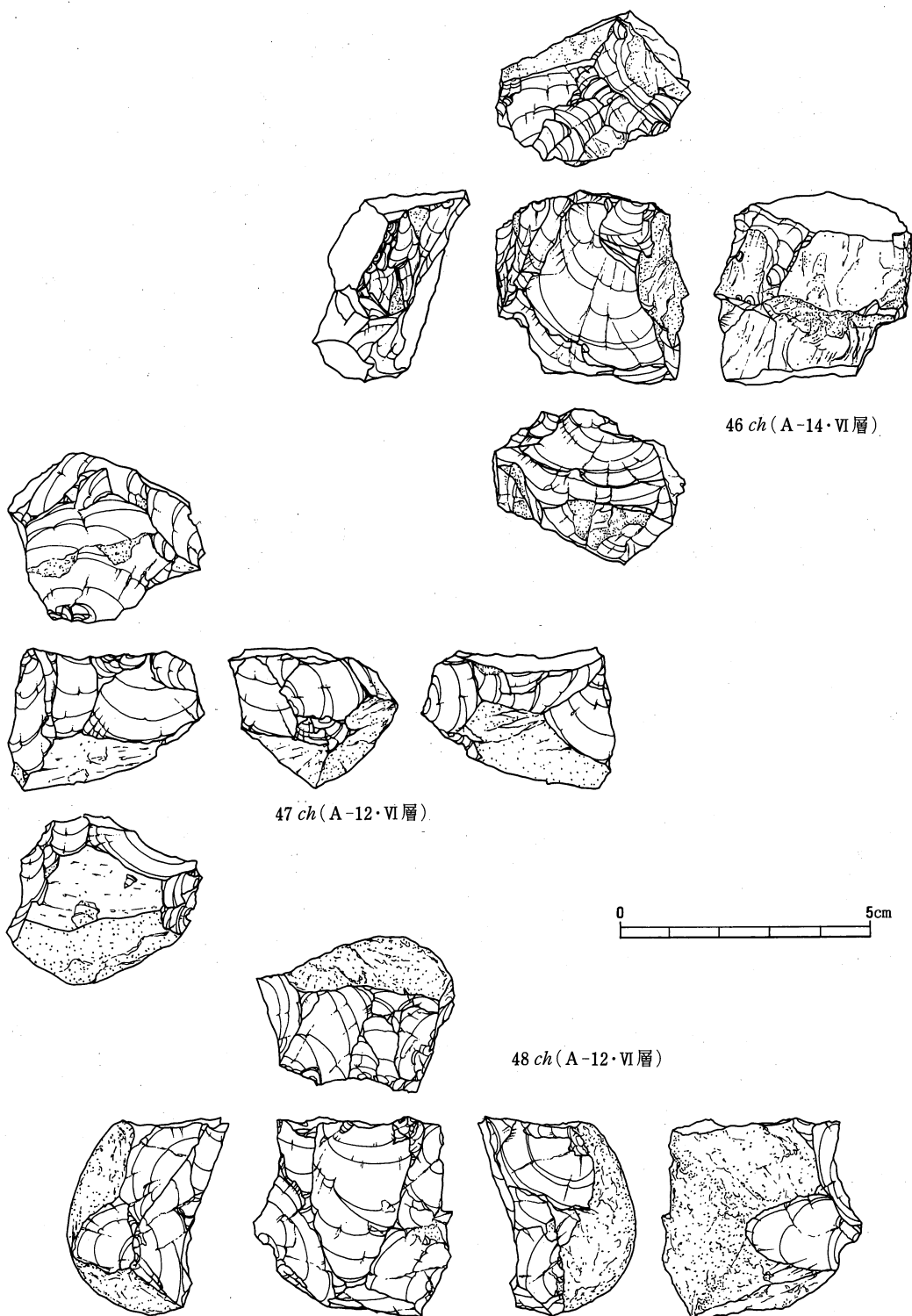


第125図 第1次調査出土資料 ナイフ形石器・槍先形尖頭器・彫器

第5節 第1次調査出土資料

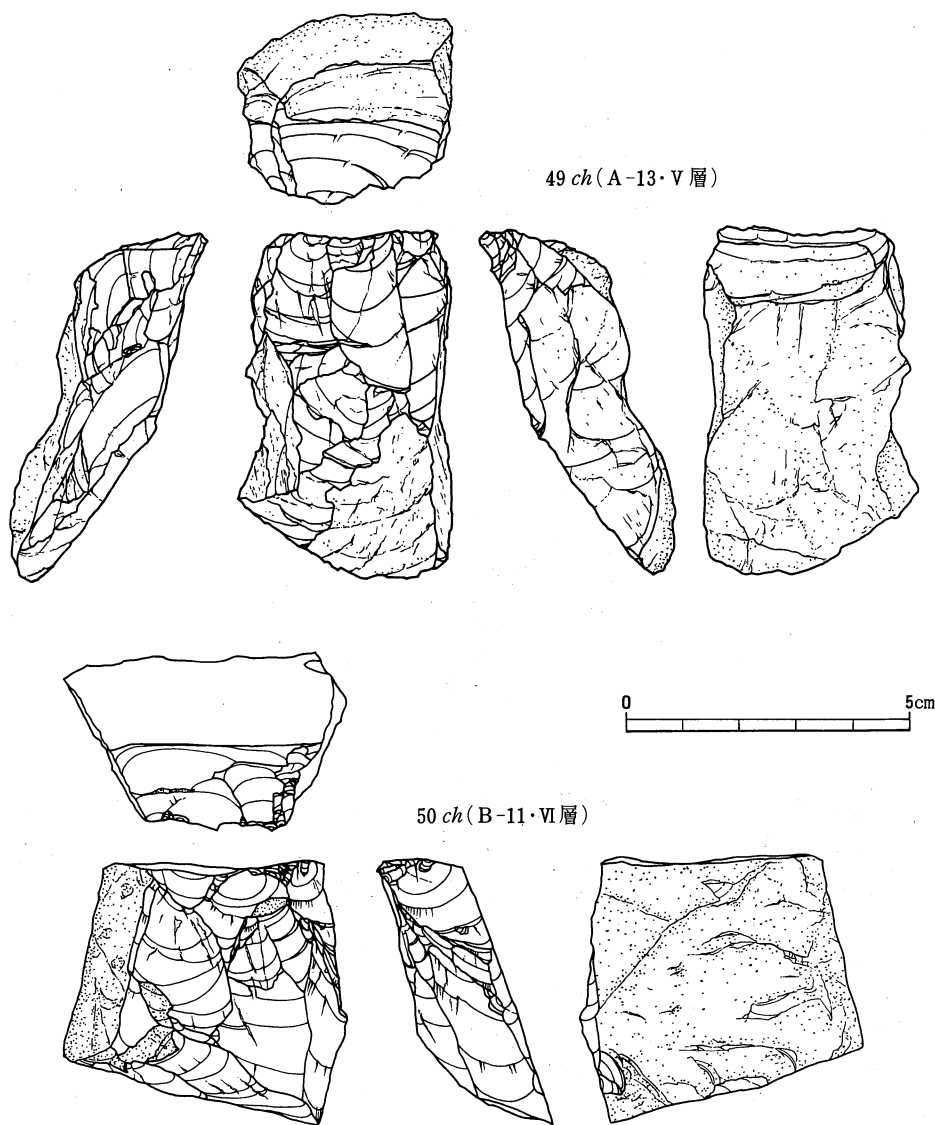


第126圖 第1次調査出土資料 削器・搔器・石刃

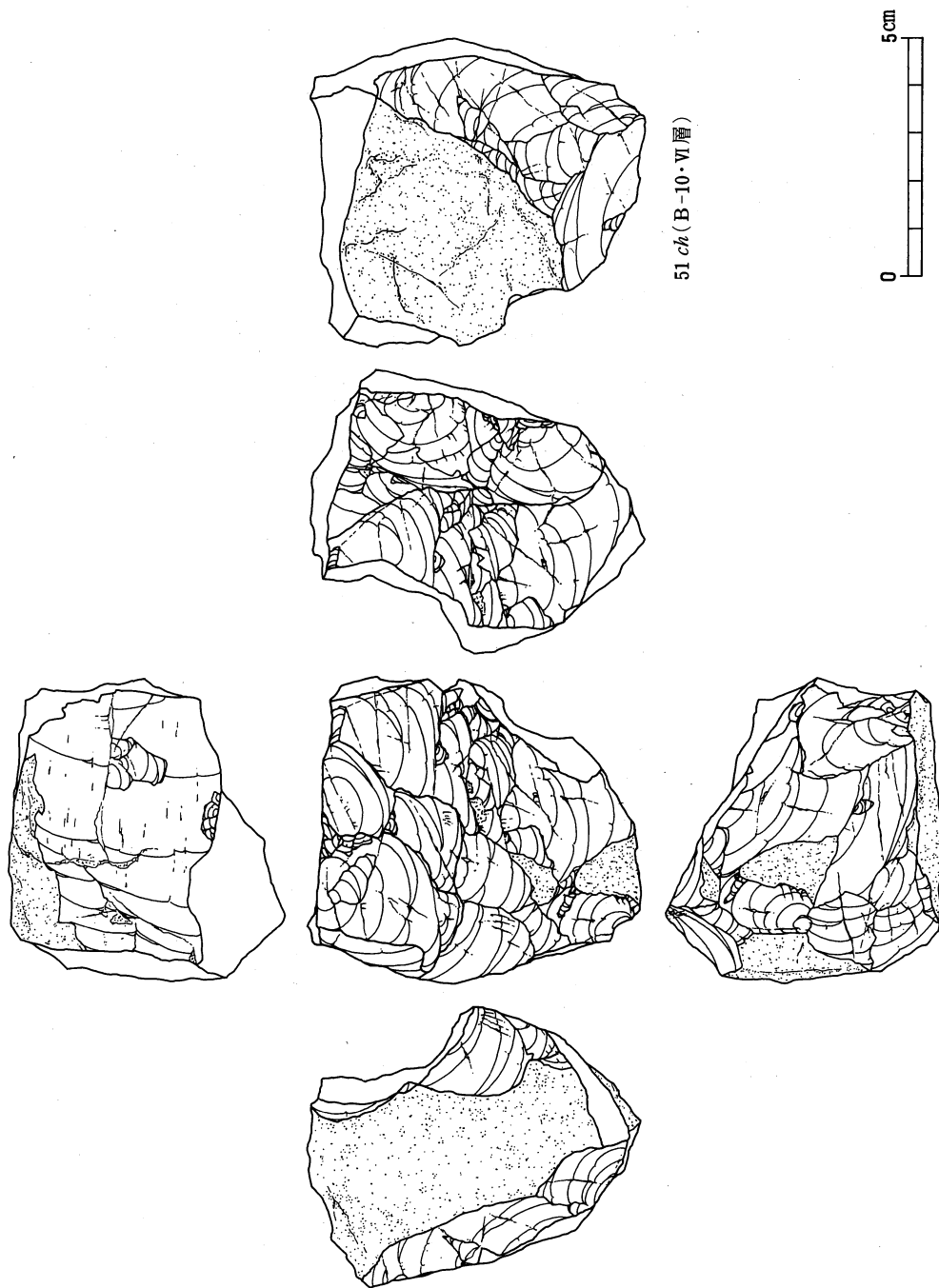


第127圖 第1次調查出土資料 石核

第5節 第1次調査出土資料

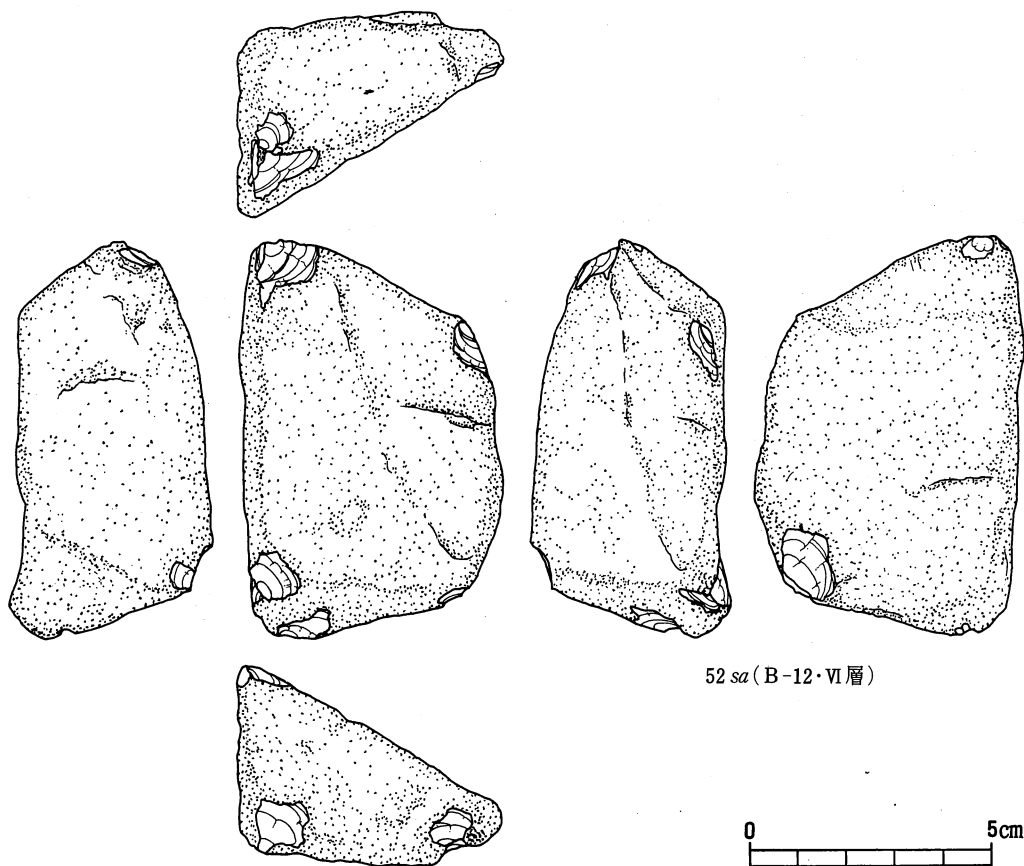


第128図 第1次調査出土資料 石核



第129図 第1次調査出土資料 石核

第5節 第1次調査出土資料



第130図 第1次調査出土資料 敲石

第6節 母岩別資料

(1) 母岩別資料1 (第131図～第137図)

この母岩は、第1次調査報告書に掲載の母岩別資料Aである。第Ⅵ層文化層における剥片剥離技術の特徴を検討する上で最もまとまった良好な資料であるため、第2次調査で出土した資料を追加し、ここで改めて報告する。

石材 チャート。石材の縦横に多数の節理が見られるが、石質は均質かつ緻密で脂肪光沢がある。割口は貝殻状断口を呈し、剥片剥離に適した良質の石材である。色調は薄い紺色で、所々に黒色の節理が含まれる。

資料 石核1点、縦形削器1点、抉入石器1点、細部調整剥片4点、石刃状剥片1点、剥片52点が含まれる(第131図～第136図)。剥片の中に槍先形尖頭器の調整剥片と考えられる例が1点含まれている。

1は角礫を素材とした石核で、高さ6.80cm、幅6.35cm、厚さ5.36cmである。上面の一部と左側縁裏面に素材の原礫面が大きく残されている。上部の打面は素材の頂部を薄く断ち割るよう右横方向から剥離された平坦な一面の剥離面であり、最終的な剥片剥離は主にこの打面から石核の正面において行われている⁴⁾。打面角は約85°である。しかし、石核の裏面には下方から剥離されたさらに古い複数の剥離面が残されており、剥片剥離の過程で180°の打面転位が行われたことが明らかである。大きな打面調整は行われていないが、作業面に接する打面の端部に部分的な細かい調整が加えられている。右側面には裏面の原礫面を打面として剥離された水平方向の剥離面が見られるが、これは石核の形状を直方体状に整形するための調整と考えられる。2は不定形な縦長剥片で、上部を折断している。背面の下部に石核の古い単剥離面打面が残されており、背面の下部から右側にはこの打面から剥離された複数の剥離面が見られる。それらの剥離の後、上方向から2枚の剥片が剥離されたことがわかる。180°方向の打面転位を示す一例である。3は不定形の縦長剥片で、上部を不規則に破損している。背面の左側面の一部に素材の原礫面を留めている。背面は上下二方向からの剥離面で構成されており、下方から剥離された右下の一面がより新しい。打面転位を繰り返し、上下の打面から交互的に剥片剥離を行ったことがわかる。4は縦長剥片で、打面部は節理に沿って破砕している。背面には対向する上下二方向からの剥離面が見られるが、上方向からの一群がより新しい。5は上下を節理に沿って折断しているため、全体の形状が明らかではないが、背面には上下二方向からの平行的な剥離面が見られ、石刃状の縦長剥片であったことが考えられる。6は上半部を節理に沿って折断しているが、接合状況から縦長剥片であることが明らかである。3と同様に背面には対向する上下二方向からの剥離面が見られる。左側縁の両面に部分的で微細な剥離痕が見られるが、意図的な調整か否か明らかではない。7は、両側縁が平行し断面三角形の石刃状の剥片

で、下部を折断している。打面は作業面側の端部から連続的に細かく調整された調整打面である。背面の剝離面はすべて上方向からのものであり、上部の中央に石核の頭部調整が認められる。背面の左下に残る節理面は素材の大きな分割面である。この面を打面として石核の側面の整形が行われている。左右の鋭い縁辺に刃こぼれ状の微細な剝離痕が認められる。8は石核の原礫面の稜の部分から剥ぎ取られた狭長な縦長剥片で、打面に接する背面上部に比較的細かい剝離面が見られるほかは、全体に原礫面を大きく残している。打面は単剝離面打面である。9は背面の一部に原礫面を残す不定形剥片を素材とし、その腹面側の末端に細部調整を加え、凹型の刃部を作り出している。素材の右側縁と下部を折断している。素材の打面は平坦な節理面である。10は8の剝離と同時に腹面から破碎した碎片である。11は背面に節理面を残す不定形剥片で、上部を折断している。12は背面全体に原礫面を残す縦長剥片を素材とし、その末端の一辺に表裏から細部調整を加えている。打面は石核素材の角礫を大きく分割した平坦な節理面である。13・14は連続して剝離された剥片で、背面に原礫面を残している。14は上部を折断しており、13も上部を節理によって折断している。15は背面に原礫面を残す縦長剥片の右側縁に、比較的平坦で深い調整を連続的に加えた縦形削器で、下部を折損している。刃部の断面角は約30°で、刃部の腹面側にも部分的に細部調整が加えられている。打面は2面の剝離面からなる。16は縦長剥片を素材とし、その直線的な左側縁に細部調整を加えている。打面部は節理に沿って破碎している。17は縦長剥片を素材とし、内側に湾曲した二側縁に細部調整を加えている。打面は原礫面である。18は背面の一部に原礫面を残す部厚い大型の縦長剥片を素材とし、その鋭い右側縁に約3.5cmにわたって急斜度の厚い調整を加え、凹型の刃を作り出した抉入石器で、刃部の深さは0.53cmである。背面に見られる左横方向からの剝離面は、石核を直方体状に整形するための調整であり、背面の左側に石核の二面が交わる稜が形成されている。打面は原礫面である。

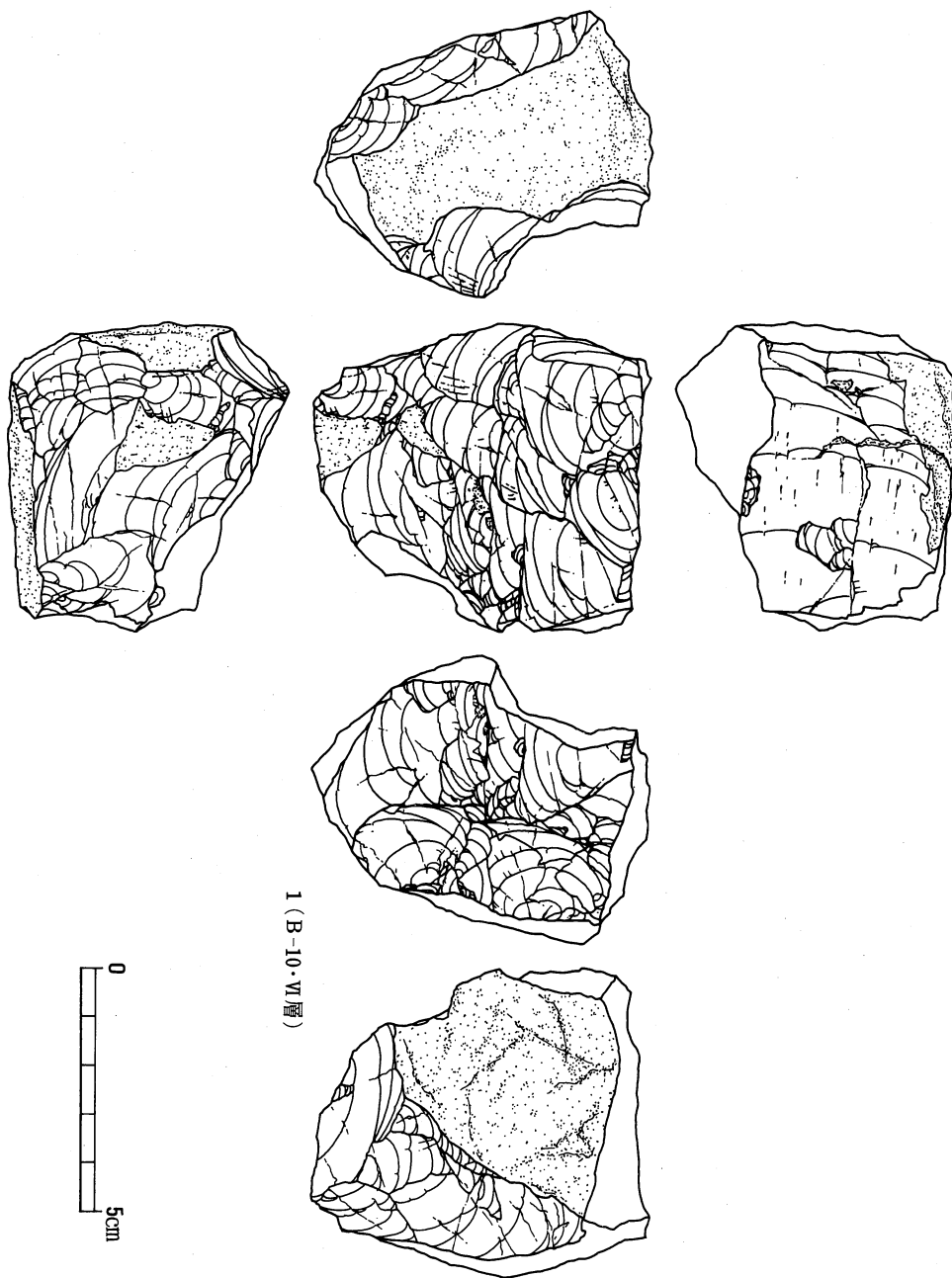
接合資料と剥片剝離工程 石核1、石刃状剥片7、細部調整剥片9・12、剥片2・3・4・5・6・8・11の11点からなる接合資料と、剥片13・14の接合資料の2例が得られた。

[接合資料1] 第134図は石核1と石刃状剥片7、細部調整剥片9・12を含む剥片10点の接合資料である。この接合資料にみられる剥片剝離の順序は次の通りである。

12→11・8⇒7→5⇒6⇒9→3→4→2 (⇒は打面転位を示す)

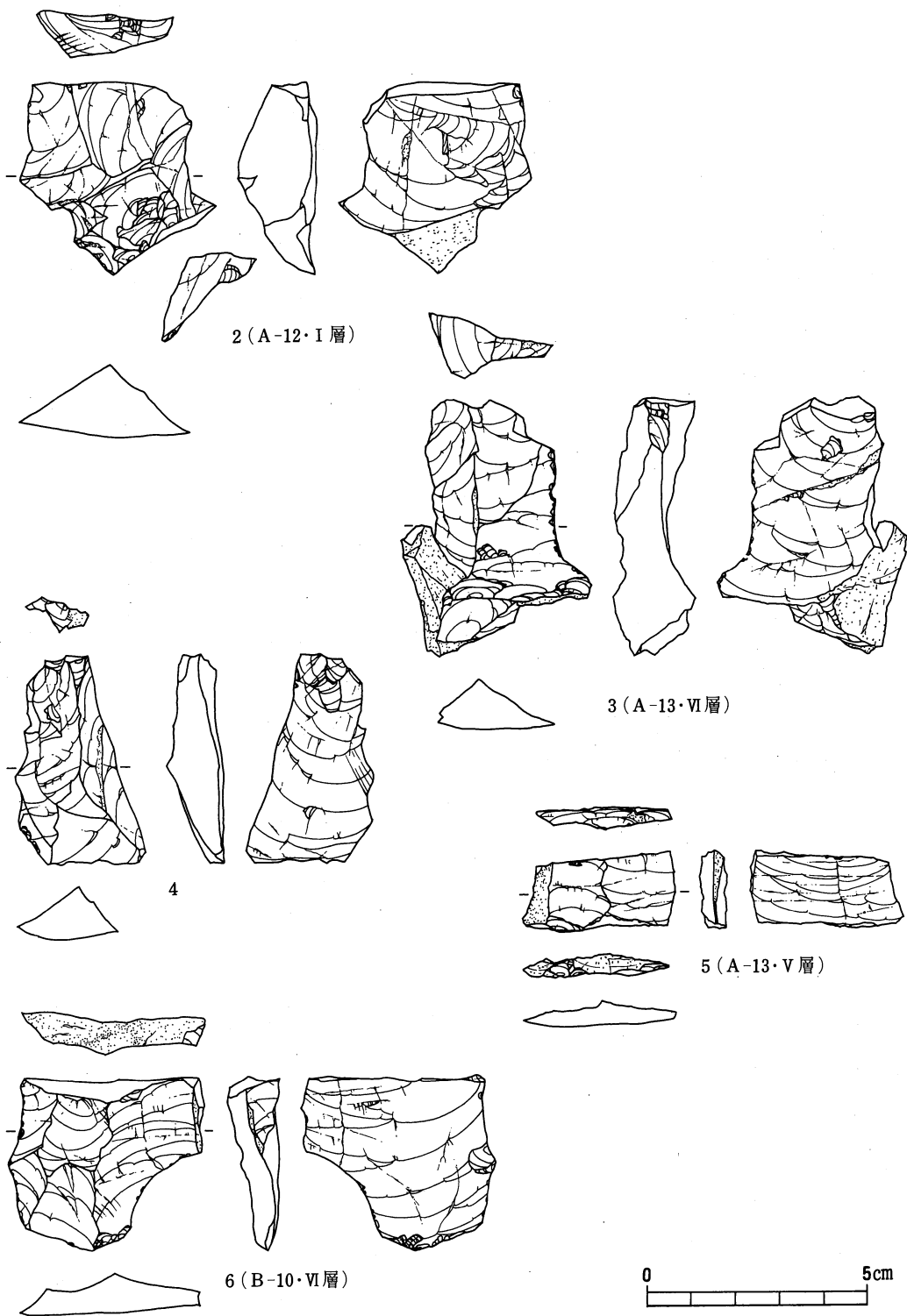
この接合資料によって、素材の分割、石核の整形、打面の形成から、途中打面転位を繰り返しながら剥片剝離を進めていくまでの、次のような一連の工程が明らかにされた。

高さ約12cmの角礫を素材とし、その一部を節理に沿って分割して二側面が正面で交わる形状の素材を用意する。5・7・11の背面や12の打面に残る平坦な節理面は、その際の素材の分割面である。そして7や18の背面に見られるように、素材の稜の部分から横方向の剝離を加え、全体が角柱形となるように石核の整形を行っている。その後この分割面を打面として下端から

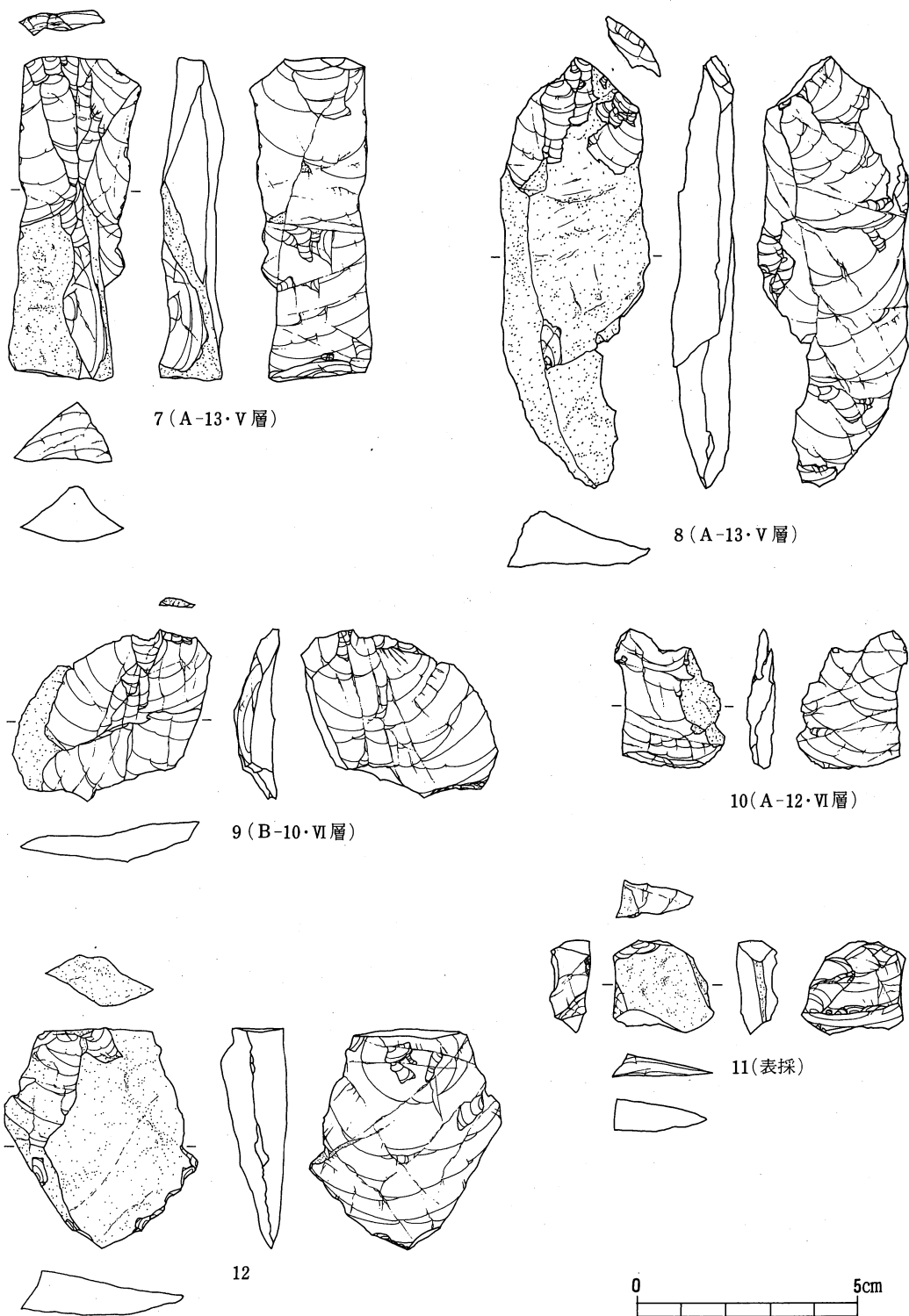


第131圖 第VI層文化層 母岩別資料 1

第6節 母岩別資料

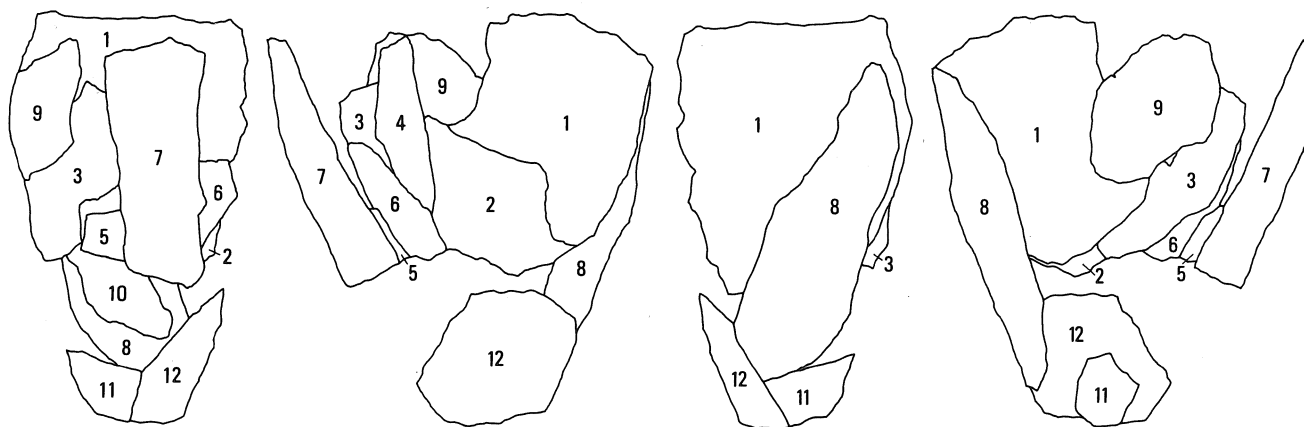
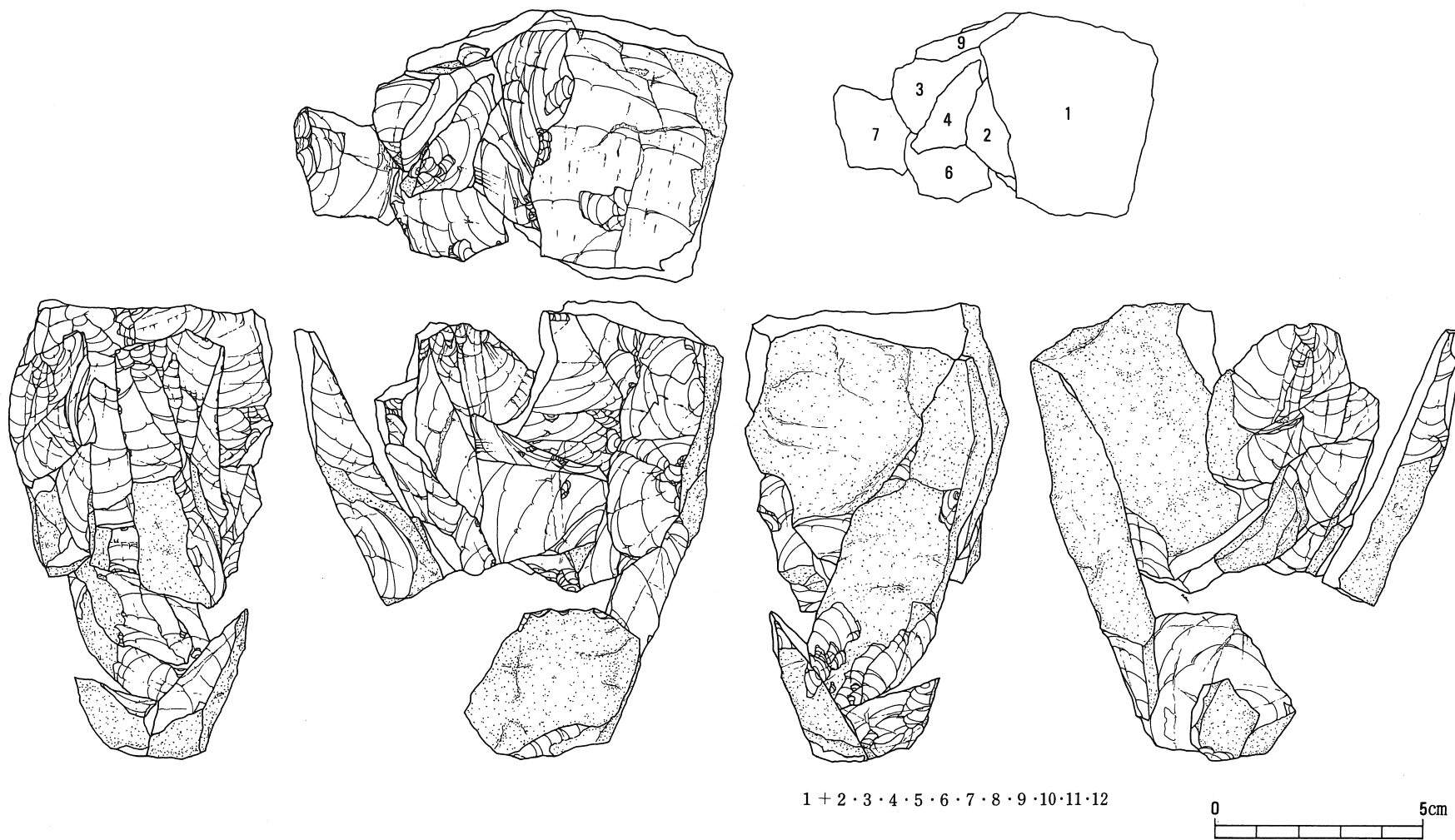


第132圖 第VI層文化層 母岩別資料1

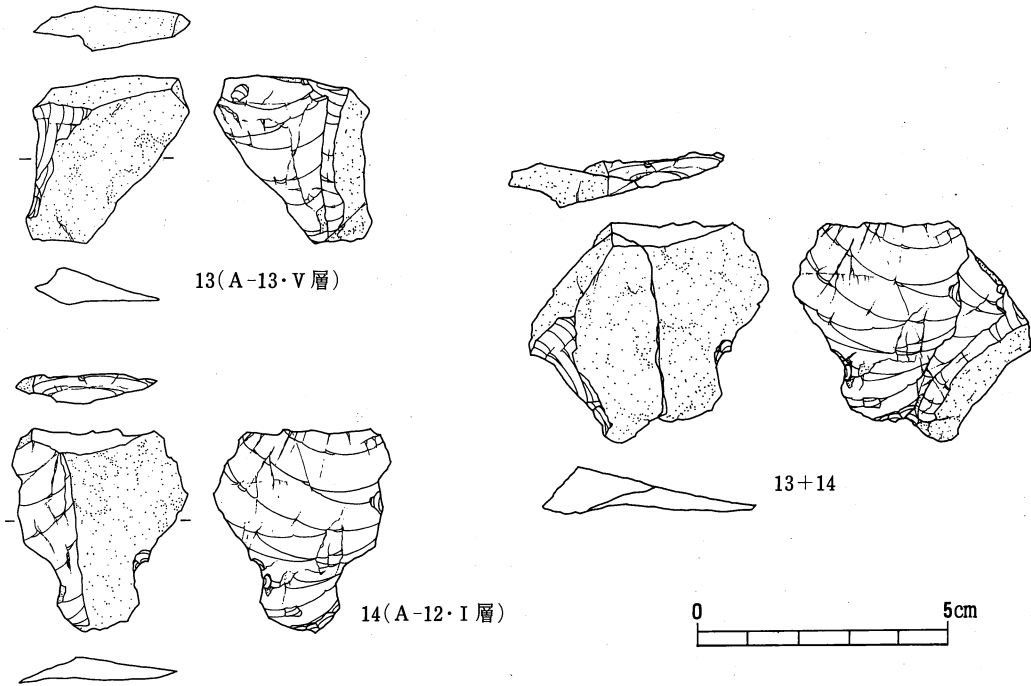


第133圖 第VI層文化層 母岩別資料1

第6節 母岩別資料



第134圖 第VI層文化層 母岩別資料1 接合資料



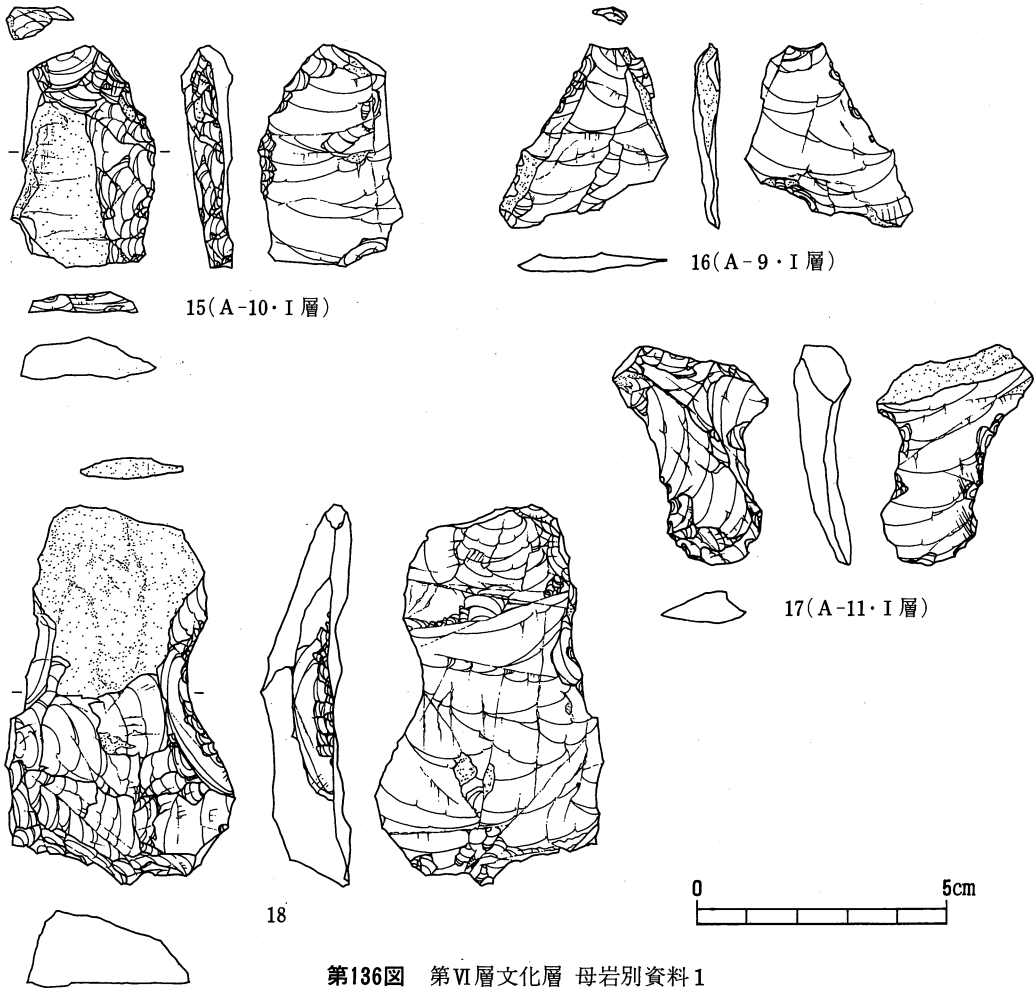
第135図 第VI層文化層 母岩別資料1 接合資料

剥片12を剥離し、最初の打面を形成している。その単剥離面打面から石核表面の原礫面を剥ぎ取るように剥片8・11を含む数枚の縦長剥片が剥離されている。この段階までに石核の表面から剥ぎ取られた皮付きの縦長剥片は、抉入石器(18)や縦形削器(15)、細部調整剥片(12)の素材として利用されている。その後、素材の平坦な上面に右横方向から一面の大きな剥離を加えて新たに打面を作出し、石核の正面において石刃状剥片7を含む縦長剥片を連続的に剥離している。

7を剥離した後、石核の下端にも平坦な単剥離面打面を設け、剥片3・4・5・6・9を含む縦長剥片を、打面転位を繰り返しながら上下の打面から交互的に剥離している。石核1の上設打面と石刃状剥片7の打面に認められるように、剥片剥離の過程で打面の端部に部分的に細かい剥離を加える打面調整が行われている。剥片4を剥離した後、裏面の原礫面を打面として石核の右側面を再び整形しているが、2以後の剥離は、石核1の作業面に見られるようにすべて上設の打面から行われている。

[接合資料2] 剥片13と14の接合資料である(第135図)。いずれも同一方向から連続して剥離されており、背面に原礫面を大きく残している。

分布 第II層から1点、第V層から10点、第VI層から10点が出土した。残りの39点は表面採集および第I層出土である。第V層・第VI層出土の20点の分布状態は第137図に示した通りであり、10～14区の各グリッドに広がっているが、B-10区に石核1・剥片6・9の3点、A-12・

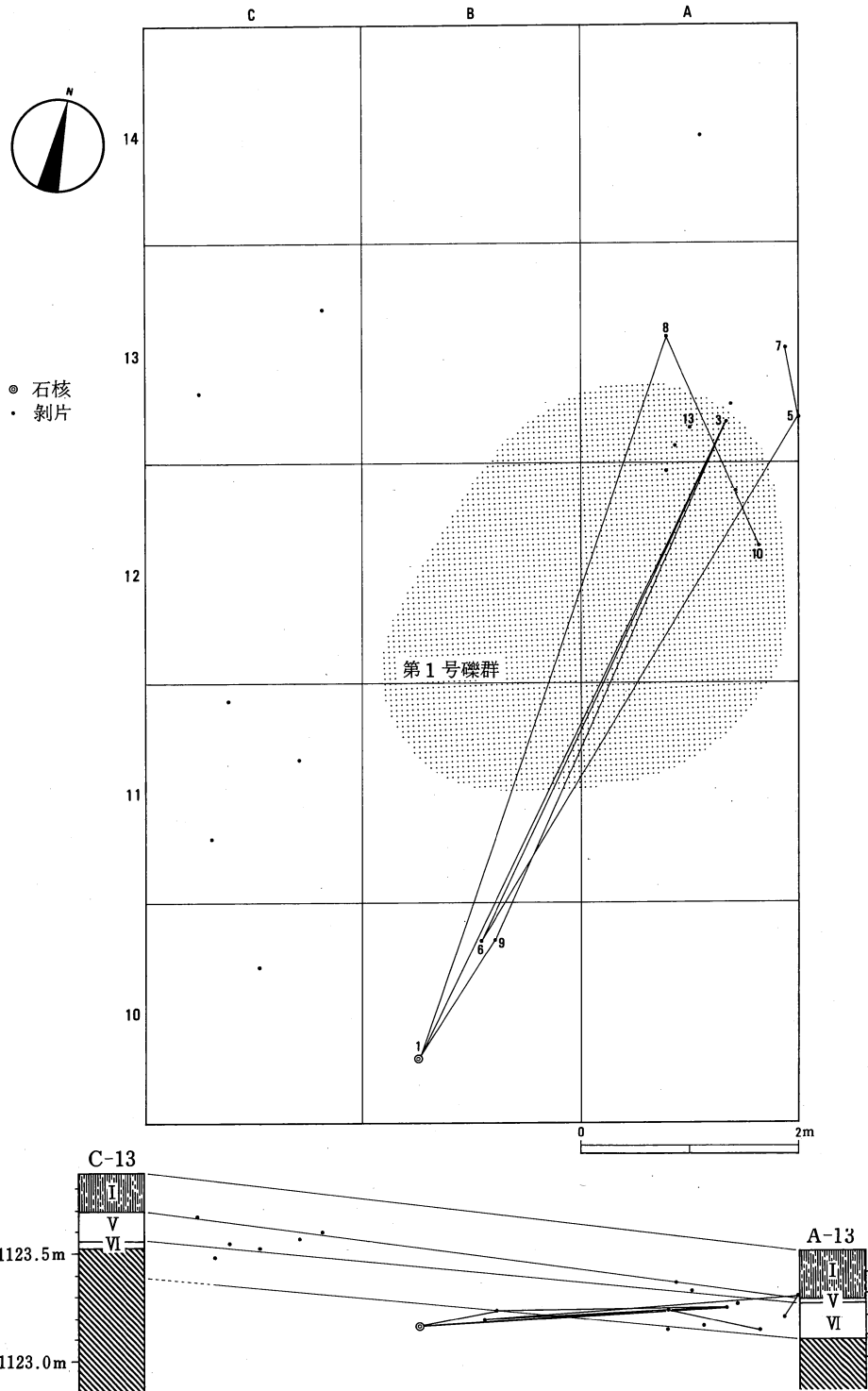


第136図 第VI層文化層 母岩別資料1

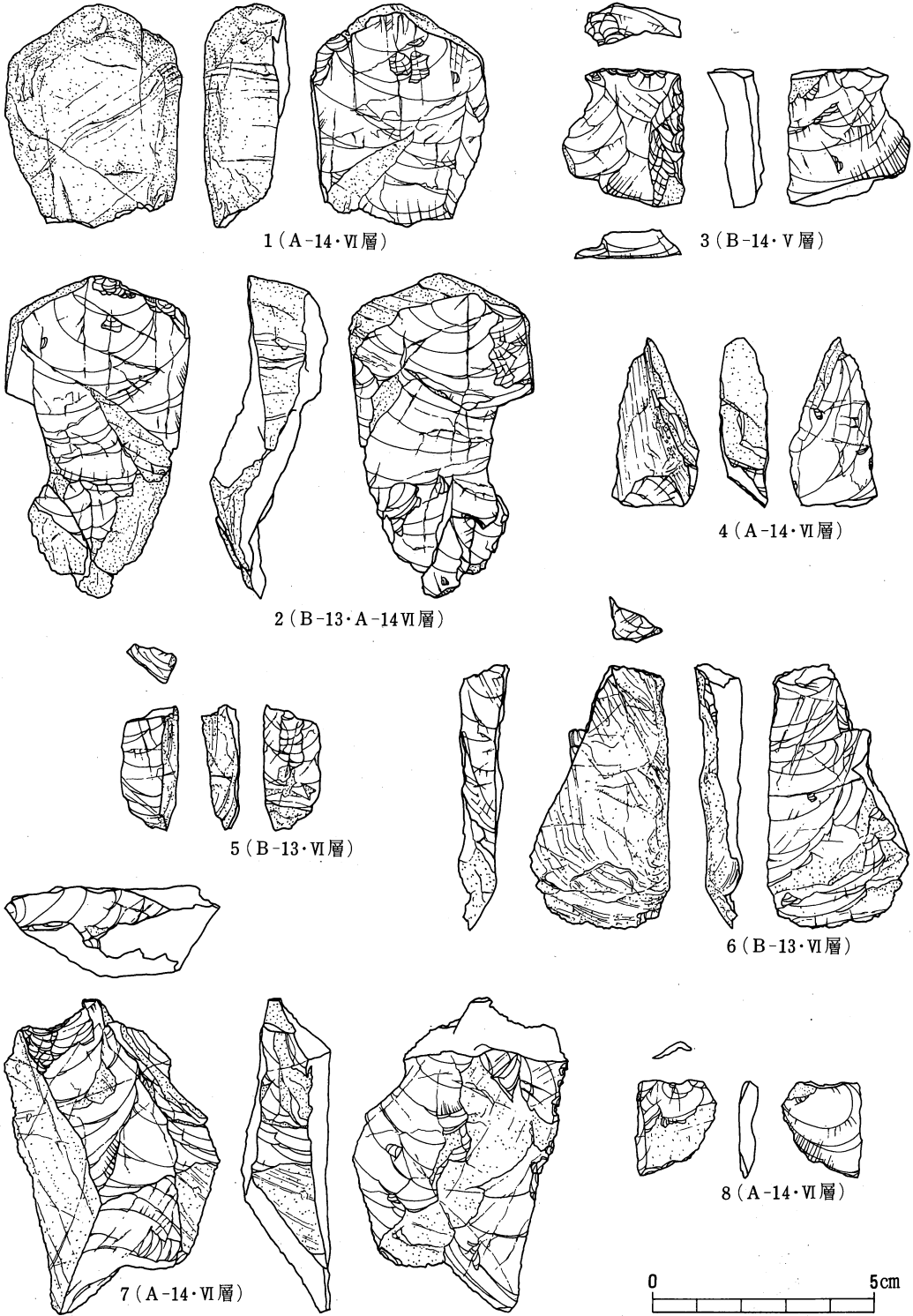
13区に剥片3・5・7・8・10を含む10点がそれぞれまとまって分布している。そして、この2箇所のみとの間で8点の接合関係が認められた。このほかにA-12区出土の剥片13と第I層出土の剥片14の接合関係が認められた。図中のスクリーンは第1号礫群の範囲を概念的に示したものであるが、この礫群を挟むようにして石核と剥片の接合関係が認められており、礫群の南北を小刻みに移動しながら剥片剥離が進められたことが考えられる。また、C列では同一母岩の剥片がC-10区から1点、C-11区から3点、C-13区から2点出土した。なお、図示できなかったが、同一母岩の剥片1点がT-11区の第II層から出土している。

(山本・中田)

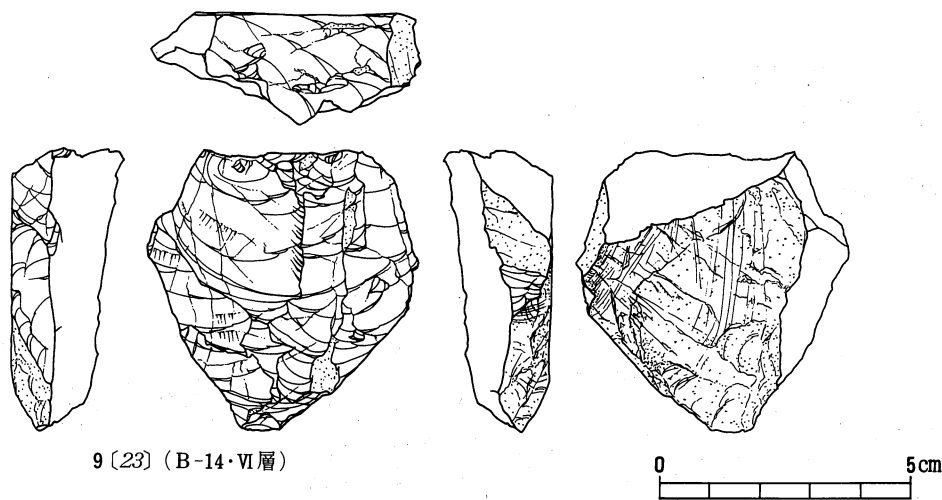
第6節 母岩別資料



第137図 第VI層文化層 母岩別資料1 分布図



第138圖 第VI層文化層 母岩別資料2



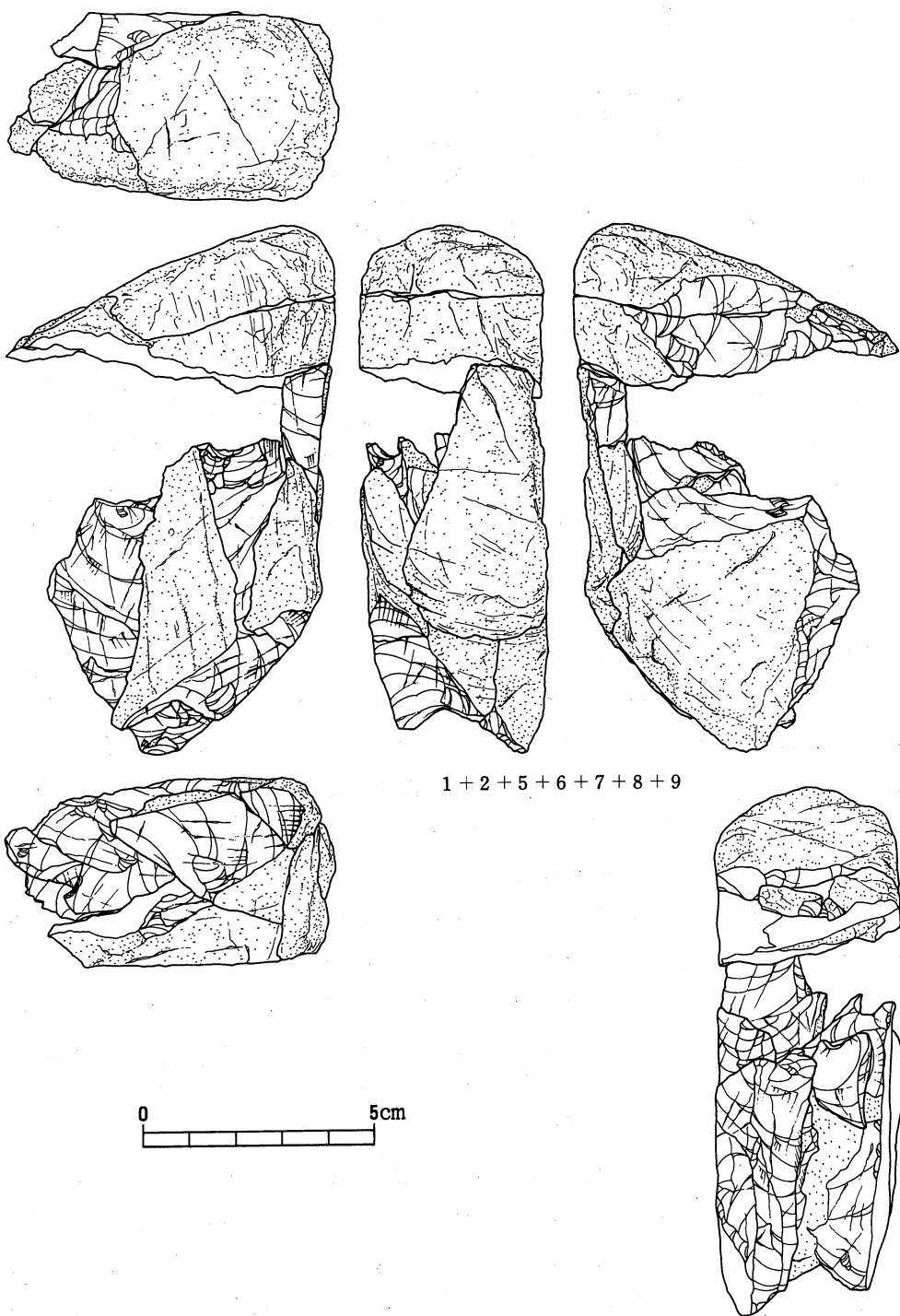
第139図 第VI層文化層 母岩別資料2

(2) 母岩別資料2 (第138図～第143図)

石材 縞状チャート。緻密で脂肪光沢があり、割口は貝殻状断口を呈するが、節理が縞状をなし、部分的に角状に破碎する。色調は全体に青く、剥片は半透明である。

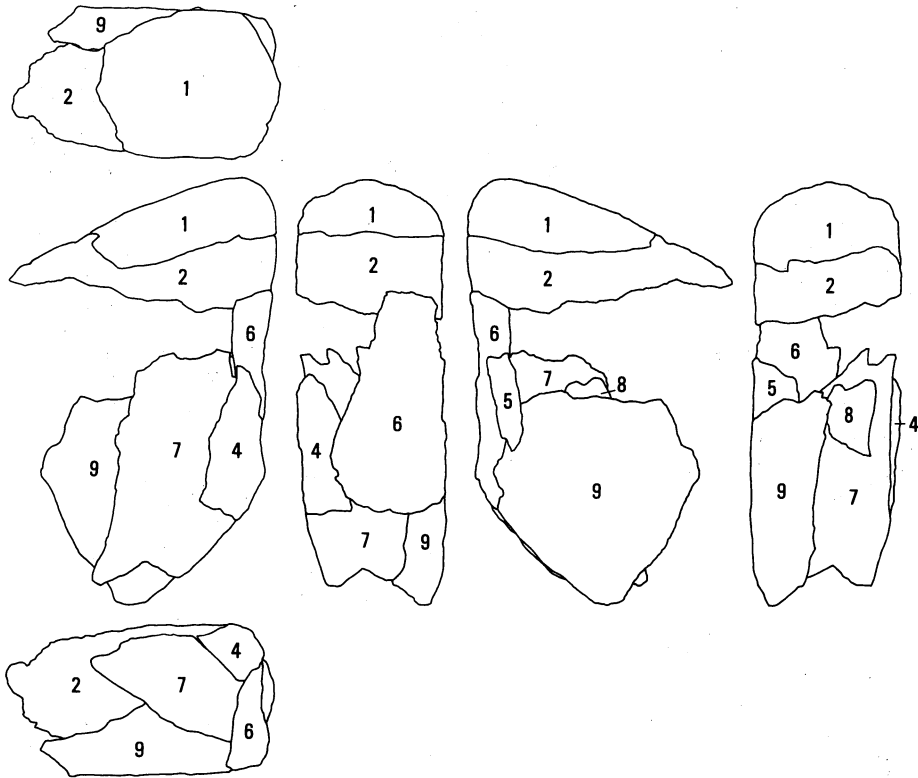
資料 単設打面石核1点、剥片28点が含まれる(第138図・第139図・第142図)。

1は角礫の頂部を断ち割るように剥離された部厚い剥片である。原礫面の稜の部分に打点としており、背面全体に原礫面が残る。末端の一部を破損している。2も同様に角礫の頂部を断ち割るように原礫面を打面として剥離された部厚い剥片であり、背面の一部と両側面に原礫面を残す。末端が節理に沿って破碎しており、2点の小片が接合する。3は単剥離面打面から剥離された剥片で、下部を折断している。背面は同一打面から剥離された縦方向の剥離面から構成され、一部に原礫面を残している。背面に接する打面の端部に、細かい階段状剥離が加えられている。4は明確な打面と打点がなく、節理面から不規則に剥離した剥片である。背面に原礫面を残す。5は縦長剥片で、上部を折断している。背面右側に原礫面を残す。6は背面が原礫面の縦長剥片である。打面は単一の剥離面で、打面調整は行われていない。剥離角は約 105° である。打撃によって縦割れが生じ、左上半が破損している。7は単剥離面打面から剥離された不定形の剥片で、剥離角は約 130° である。打面調整は行われていない。背面には上下方向からの剥離面が見られ、左側と右下部に原礫面を残している。8は単剥離面打面から剥離された小型の不定形剥片である。打面調整は認められない。背面の一部に節理面が見られる。9は単設打面石核で、扁平な残核状を呈する。背面に原礫面を残している。打面は正面方向から剥離された単一の剥離面であり、打面調整は行われていない。正面の一面において縦長剥片を連続的に剥離している。頭部調整は行われていない。10は背面・右側面に節理を残し、腹面側の上部に原礫面を残す不定形剥片である。腹面側の平坦な剥離面を打面として剥離されている。



第140图 第VI層文化層 母岩別資料2 接合資料

第6節 母岩別資料

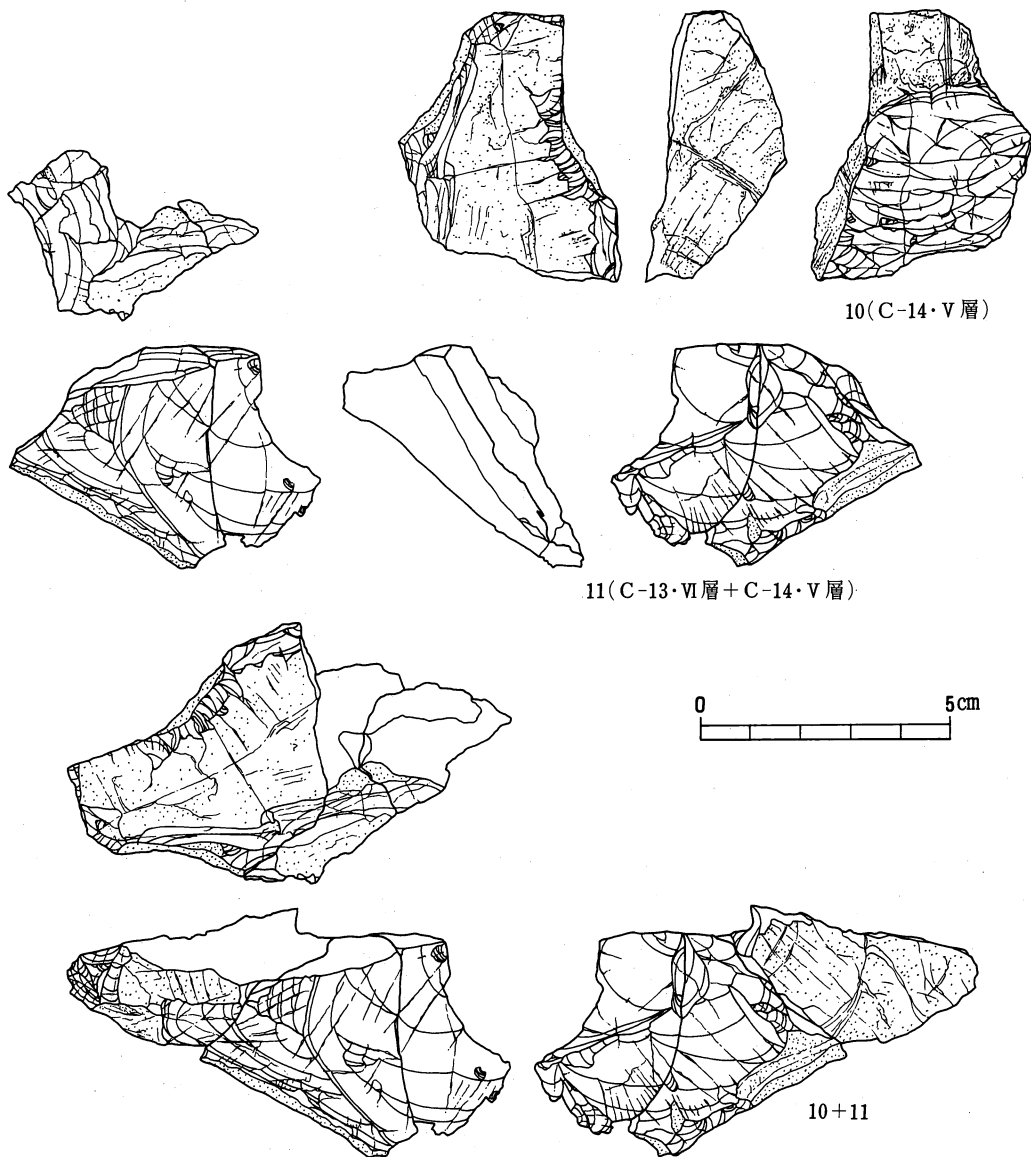


第141図 母岩別資料2 接合資料白図

11は平坦な節理面を打面として剥離された不定形剥片である。剥離角は約 120° である。打撃によって縦割れが生じ、2片に破碎している。このほかに剥片が15点ある。

接合資料と剥片剥離工程 単設打面石核9、剥片1～8の9点からなる接合資料（第140図）と、剥片10・11の2例の接合資料（第142図）が得られた。前者は素材の原礫から打面形成・剥片剥離に至る一連の工程を復元することのできる良好な接合資料である。

高さ約12cm、幅約7cm、厚さ約4cmの細長く扁平な角礫を素材とし、その長軸上の頂部を輪切り状に断ち割るように部厚い剥片を2枚剥離し、最初の打面を形成している。1と2はその際の打面形成剥片である。打面形成に先立つ石核の整形は行われていない。この最初の打面から縦長剥片5・6が連続して剥離されており、石核9の背面の一部にもこの打面から縦方向に剥離されたと考えられる剥離面の一部が残されている。その後、再び正面の原礫面側から石核の上部を輪切り状に断ち割るように剥片が剥離され、打面が再生されている。石核9および剥片7・8の打面は、この時剥離された単一の剥離面である。打面再生後、剥片4・7・8が連続的に剥離されている。8の剥離の後、縦長剥片が連続的に剥離されているが、この間の資料は剥片3の1点のみであり、ほかには得られていない。打面調整はほとんど行われておらず、3の打面の端部に部分的な調整が認められるのみである。この母岩から目的的に生産された剥



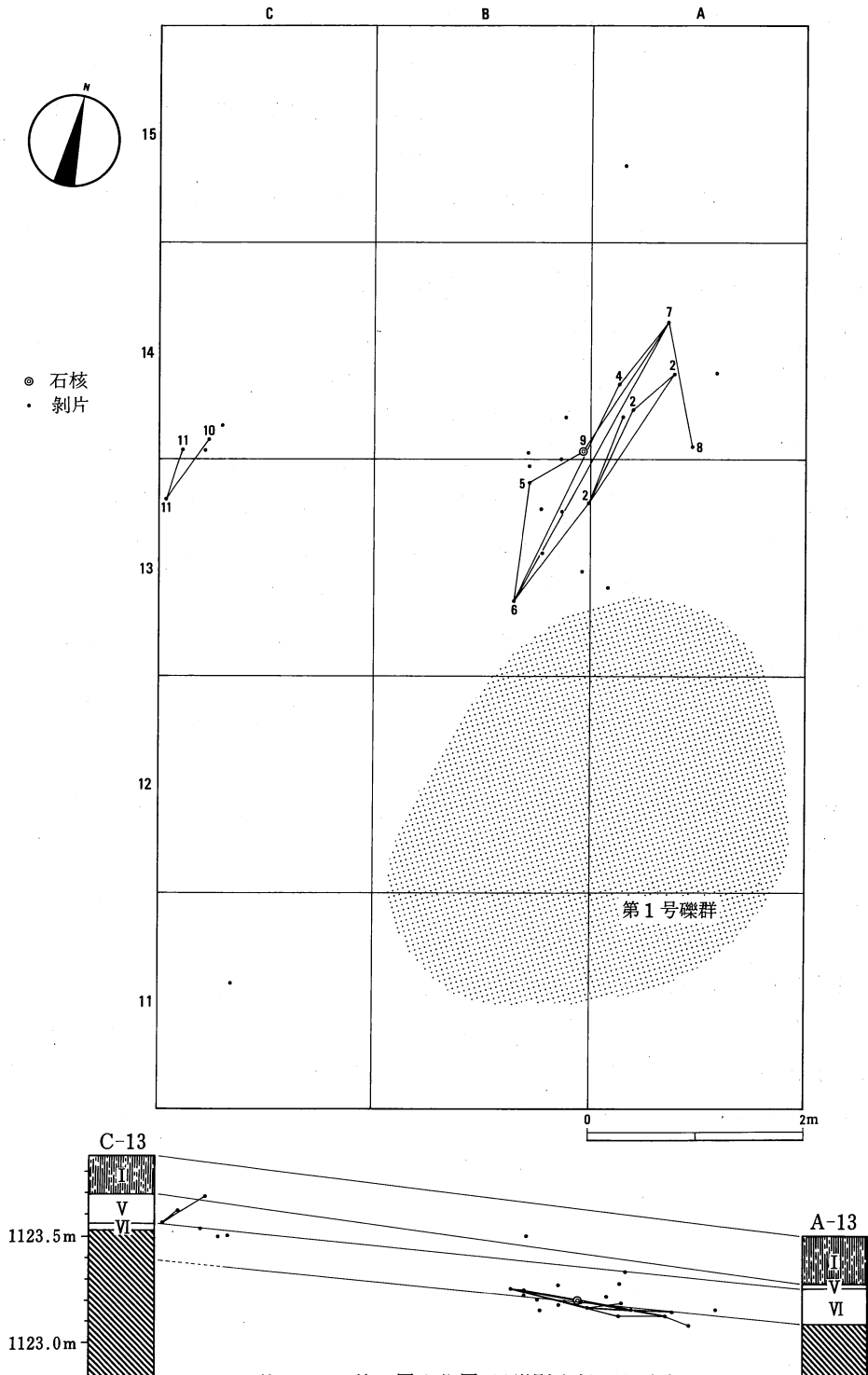
第142図 第VI層文化層 母岩別資料2 接合資料

片は、3に見られるような石刃状の縦長剥片であり、石核9の作業面には、同様の縦長剥片を連続して剥離した剥離面が残されている。この工程を通じて、石核の側面の整形はほとんど行われていないが、石核9の背面の一部と7の背面の下部に、上記の工程に属さず、素材の表面を剥ぎ取った異方向からの剥離面が認められる。

なお、接合資料10・11は、石質が非常に類似しているものの、想定される素材の角礫の大きさからみて、別の母岩に属する可能性がある。

分布 第I層から出土した2点を除き、第V層から7点、第VI層から20点の資料が出土した。

第6節 母岩別資料



第143图 第VI層文化層 母岩別資料2 分布图

第143図に示す通り11～15区にかけて分布しており、特に礫群の北側に位置するA・B-13・14区に集中が認められ、10点の接合関係が認められる。それらの接合資料には、B-13区の剥片2・5・6、A-14区の剥片1・2・4・7・8、B-14区の石核9が含まれる。なお、剥片2はA-14区出土の2点とB-13区出土の1点が接合したものである。同一母岩の剥片がA・B列ではA-13区から1点、B-13区から6点、A-14区から1点、B-14区から剥片4を含め2点、A-15区から1点出土した。またC列ではC-13・14区で剥片10・11の3点の接合が認められる。剥片10はC-13区出土の1点とC-14区出土の1点が接合したものである。同一母岩の剥片がC-11区から1点、C-14区から2点出土した。(山本・中田)

(3) 母岩別資料3 (第144図～第146図)

石材 比較的均質な塊状チャート。色調は全体に暗赤色で、所々に灰緑色の縞が貫入している。脂肪光沢はあまりないが、割口は貝殻状断口で、稜は鋭利である。

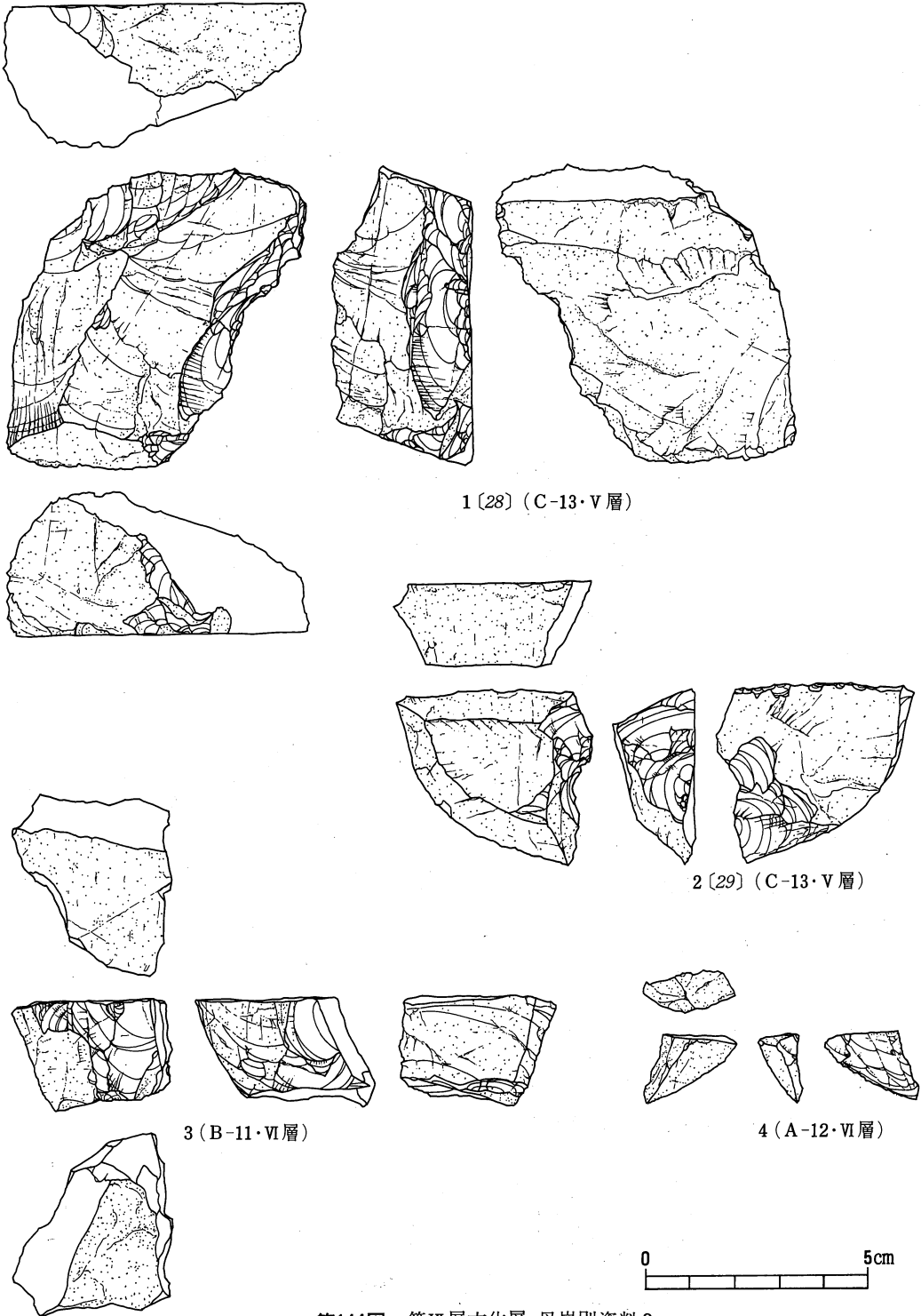
資料 石核状の素材2点、剥片9点が含まれる。このうち接合資料4点を図示した(第144図)。

1は節理に沿って三角柱状に分割された素材の側縁から、小型の不定形剥片を剥離しており、石核用の素材と考えられる。上面・下面・裏面は原礫面である。2も同様の素材であり、右側面と裏面において小型の不定形剥片が剥離されている。上面と裏面は原礫面である。3は節理面に沿って分割された角礫状の不定形剥片で、上面と左側面は原礫面である。4は1の分割と同時に破碎した小型の不定形剥片である。このほかに剥片が7点あるが、うち6点は石核から正則な打撃によって剥離された目的的な剥片であり、それらは一様に脂肪光沢があり、石質が良好である。

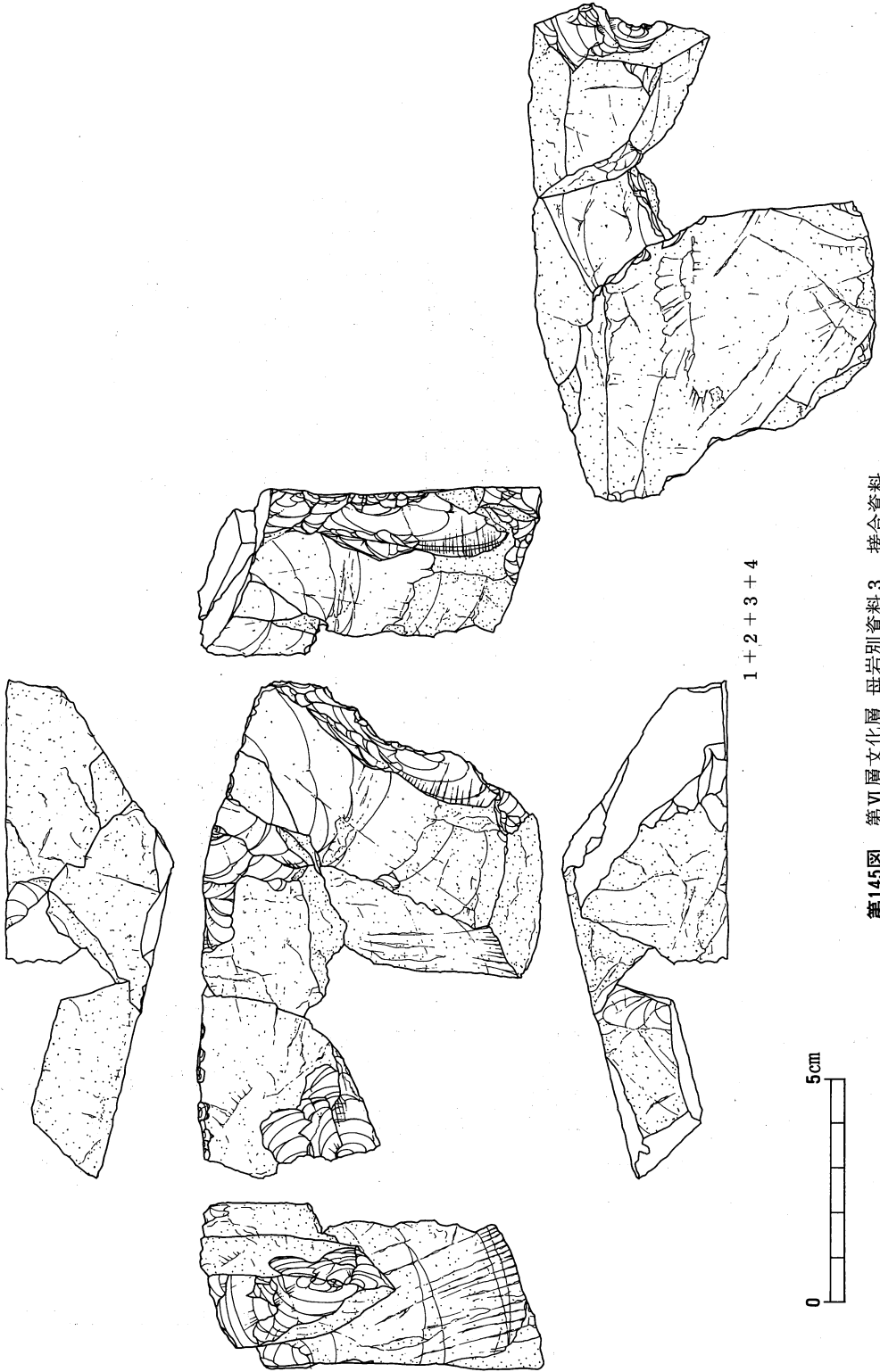
接合資料と剥片剥離工程 第145図は石核状素材1・2、剥片3・4の4点からなる接合資料である。石核の素材を得るために、扁平な柱状の角礫を節理面に沿って大きく分割している。そのうちの1と2からは素材の平坦な原礫面を打面として小型の不定形剥片が剥離されているが、剥片石器の素材となり得る目的剥片を連続して剥離するには至っていない。

分布 表面採集と第Ⅰ層から出土した6点を除き第Ⅴ層から3点、第Ⅵ層から2点出土した。第146図に示す通りB・C-10～13区にかけて分布しており、B-11区の剥片3、A-12区の剥片4とC-13区から出土した2点の石核素材1・2の4点の接合関係が認められる。また同一母岩の剥片がC-10区から1点出土した。(山本・中田)

第6節 母岩別資料

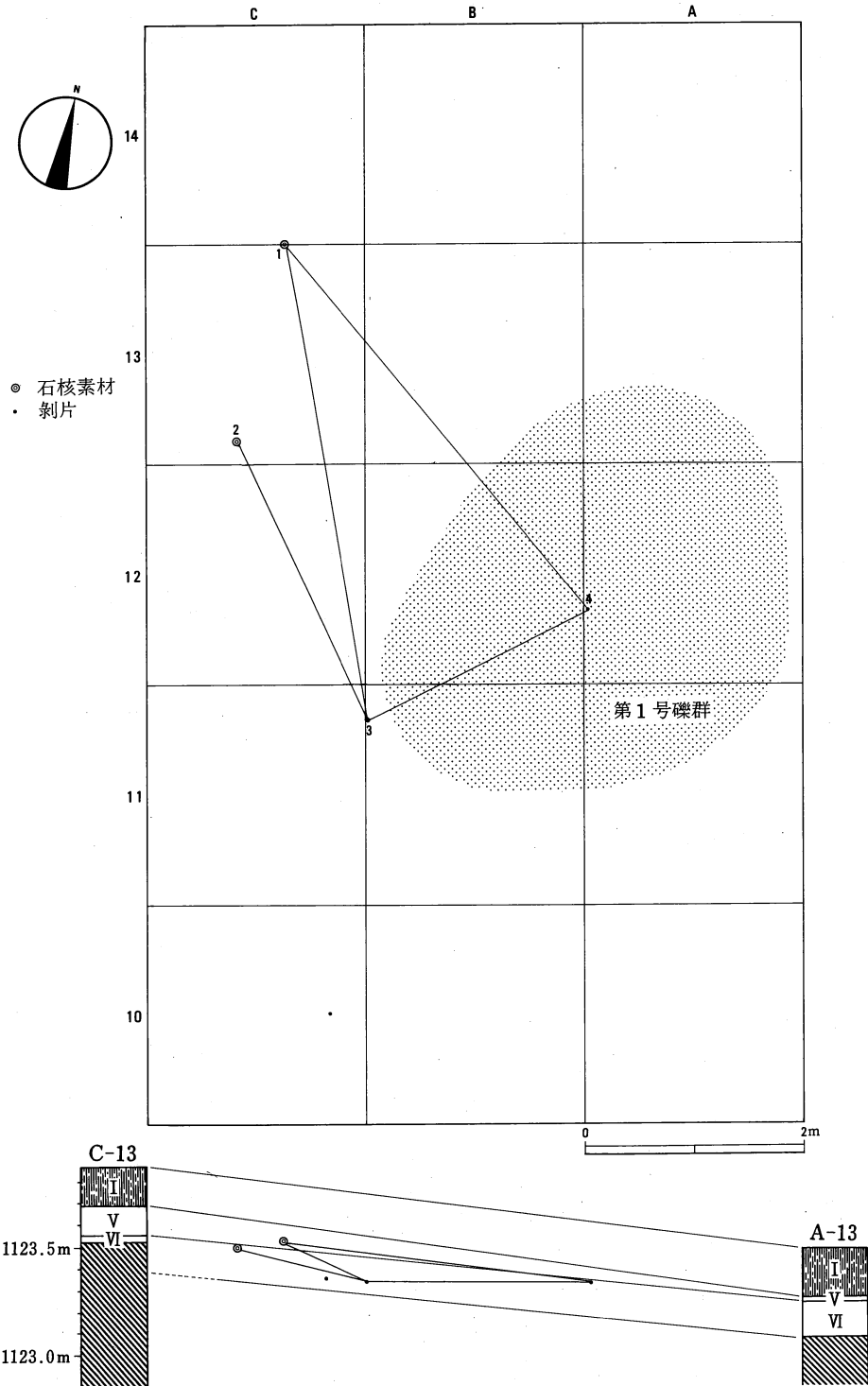


第144圖 第VI層文化層 母岩別資料3



第145圖 第VI層文化層 母岩別資料3 接合資料

第6節 母岩別資料



第146圖 第VI層文化層 母岩別資料3 分布図

第七章 第VI層文化層

第11表 第VI層文化層 母石別資料1—覽表

挿図番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長・高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	作業面長(cm)	打面角	剝離角	重量(g)
1	第131図1 石核	B-10	58	VI層	6.80	6.35	5.36	6.35	85°		263.68
2	第132図2 剥片	A-12	—	I層	(4.36)	4.40	1.77				28.40
3	" 3 剥片	A-13	94	VI層	5.81	4.29	1.85			125°	30.14
4	" 4 剥片	—	—	—	4.74	2.88	1.25			110°	12.07
5	" 5 剥片	A-13	6	V層	(1.75)	3.45	0.61				3.51
6	" 6 剥片	B-10	59	VI層	3.94	4.41	0.86			80°	16.69
7	第133図7 石刃状剥片	A-13	118	V層	7.30	2.86	1.44			105°	26.34
8	" 8 剥片	A-13	55	V層	9.69	3.40	1.38			160°	33.04
9	" 9 細部調整剥片	B-10	60	VI層	3.84	4.48	0.90			105°	11.18
10	" 10 剥片	A-12	319	VI層	3.10	2.49	0.62				3.10
11	" 11 剥片	—	—	表採	2.09	2.29	0.82				4.28
12	" 12 細部調整剥片	—	—	I層	4.99	4.32	1.01			85°	27.23
13	第135図13 剥片	A-13	12	V層	3.32	3.19	0.80				6.54
14	" 14 剥片	A-12	—	I層	4.01	3.46	0.63				7.32
15	第136図15 削器	A-10	—	I層	(4.40)	2.82	0.84			140°	12.39
16	" 16 細部調整剥片	A-9	—	I層	3.67	3.32	0.45				5.66
17	" 17 細部調整剥片	A-11	—	I層	4.34	3.10	0.68				8.52
18	" 18 扶入石器	—	—	—	7.53	4.49	1.46				54.57
19	剥片	A-10	—	—	(1.73)	1.90	0.58				2.05
20	剥片	A-11	—	I層	(1.64)	2.72	0.28			85°	1.44
21	剥片	A-11	—	—	(2.27)	2.80	0.72				4.19
22	剥片	A-12	475	VI層	(2.05)	(2.74)	0.58				2.88
23	剥片	A-12	486	VI層	1.63	0.94	0.58				1.10
24	剥片	A-13	—	I層	(1.48)	1.27	0.40			95°	0.69
25	剥片	A-13	1	VI層	1.88	2.83	0.70				3.45
26	剥片	A-13	101	VI層	1.87	2.84	0.64				3.45
27	剥片	A-13	—	—	1.55	2.13	0.41				2.10
28	剥片	A-14	63	VI層	(1.71)	1.66	0.50				1.41
29	剥片	B-10	—	I層	2.40	2.66	0.31			85°	3.03

第6節 岩別資料

30	剝片	B-10	—	I層	1.44	0.98	0.32				0.34
31	剝片	B-10	—	I層	1.15	2.03	0.60				0.91
32	剝片	B-12	—	I層	(2.50)	1.58	0.23			145°	0.97
33	剝片	B-12	—	I層	1.60	1.34	0.50				0.76
34	剝片	B-13	—	I層	1.76	2.35	0.31			95°	1.50
35	剝片	B-13	—	I層	2.20	2.00	0.56				1.84
36	剝片	B-13	—	I層	(1.22)	1.51	0.26			115°	0.56
37	剝片	B-13	—	I層	1.64	(1.79)	0.35				0.78
38	剝片	B-14	—	I層	(1.84)	1.82	0.44				1.60
39	剝片	C-10	—	I層	(1.26)	0.94	0.24				0.25
40	剝片	C-10	60	V層	4.07	4.54	1.07			100°	20.15
41	剝片	C-11	—	I層	2.57	3.54	1.46				15.16
42	剝片	C-11	—	I層	(3.38)	1.88	0.55				4.14
43	剝片	C-11	8	V層	1.36	1.84	0.27				0.55
44	剝片	C-11	33	V層	3.52	1.90	0.32				1.77
45	剝片	C-11	111	V層	2.01	1.34	0.30				0.66
46	剝片	C-12	—	I層	(1.44)	2.50	0.54				1.83
47	剝片	C-12	—	I層	(1.13)	1.60	0.31				0.48
48	剝片	C-12	—	I層	(1.23)	1.20	0.16				0.23
49	剝片	C-13	—	I層	2.30	3.35	1.13				8.25
50	剝片	C-13	7	V層	(1.59)	2.06	0.27				0.77
51	剝片	C-13	28	V層	1.92	1.07	0.31				0.60
52	剝片	T-11	4	II層	(2.97)	1.39	0.25				0.78
53	剝片	W-11	—	I層	2.53	3.37	0.50			105°	3.95
54	剝片	W-11	—	I層	(1.50)	1.90	0.20				0.60
55	剝片	—	—	I層	3.01	2.03	0.55			110°	3.06
56	剝片	—	—	I層	1.67	1.47	0.20			130°	0.64
57	剝片	—	—	表採	3.47	4.40	0.94			95°	13.28
58	剝片	—	—	表採	(3.03)	2.93	0.85				7.42
59	剝片	—	—	—	2.55	4.84	0.63			100°	6.27
60	剝片	—	—	—	2.08	0.90	0.63				0.82

第Ⅵ章 第Ⅵ層文化層

第12表 第Ⅵ層文化層 母岩別資料2—覽表

挿図番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長・高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	作業面長(cm)	打面角	剝離角	重量(g)
1	剥片	A-14	84	Ⅵ層	5.02	3.95	1.80			110°	48.18
2	剥片	B-13	128	Ⅵ層	7.28	4.14	1.58			95°	49.88
3	剥片	A-14	77	Ⅵ層							
4	剥片	A-14	87	Ⅵ層							
5	剥片	B-14	5	V層	3.14	2.25	1.06			100°	8.05
6	剥片	A-14	85	Ⅵ層	3.80	1.95	1.00				6.29
7	剥片	B-13	120	Ⅵ層	(2.83)	1.32	0.80				2.62
8	剥片	B-13	127	Ⅵ層	5.92	3.18	0.90			105°	15.69
9	剥片	A-14	59	Ⅵ層	7.02	4.82	1.93			130°	54.24
10	剥片	A-14	92	Ⅵ層	2.14	1.79	0.36			125°	1.38
11	石核	B-14	136	Ⅵ層	5.06	5.39	2.96	5.39	60°		61.77
12	剥片	C-14	11	V層	5.40	4.38	2.35				43.64
13	剥片	C-13	113	Ⅵ層	4.40	6.15	2.55			120°	52.03
14	剥片	C-14	37	V層							
15	剥片	A-9	—	I層	3.19	2.79	0.63			105°	4.51
16	剥片	A-13	129	Ⅵ層	1.26	1.64	0.53				0.67
17	剥片	A-14	81	Ⅵ層	1.18	2.02	1.00				1.93
18	剥片	A-15	11	V層	1.37	1.24	0.43				0.65
19	剥片	B-13	70	Ⅵ層	3.14	1.32	0.88				2.70
20	剥片	B-13	121	Ⅵ層	1.33	0.94	0.45				0.43
21	剥片	B-13	151	Ⅵ層	1.53	1.11	0.50				0.63
22	剥片	B-13	156	Ⅵ層	1.85	0.67	0.33				0.30
23	剥片	B-13	162	Ⅵ層	0.84	1.24	0.54				0.34
24	剥片	B-13	178	Ⅵ層	(0.83)	1.25	0.40				0.37
25	剥片	B-14	137	Ⅵ層	2.77	2.51	1.14				8.87
26	剥片	C-11	49	V層	3.69	2.98	0.78			110°	0.20
27	剥片	C-14	70	V層	4.75	3.08	1.73			115°	20.46
28	剥片	C-14	75	V層	5.45	6.69	1.30			125°	44.48
29	剥片	—	—	I層	2.29	3.54	1.08			115°	8.50

第13表 第VI層文化層 母岩別資料3—覽表

	挿図番号	器種	グリッド	登録番号	層位	長・高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	剝離角	重量(g)
1	第144図1	石核素材	C-13	94	V層	6.68	6.71	3.19		139.25
2	" 2	石核素材	C-13	66	V層	3.95	4.36	1.84		33.84
3	" 3	剥片	B-11	203	VI層	2.47	3.40	3.20	112°	33.62
4	" 4	剥片	A-12	116	VI層	1.53	1.66	0.90	90°	1.80
5		剥片	A-12	—	—	3.71	2.95	1.26		9.63
6		剥片	A-22	—	表採	3.02	3.05	0.90		7.61
7		剥片	B-14	—	I層	1.20	1.46	0.39		0.65
8		剥片	C-10	204	V層	2.18	1.97	0.40		1.17
9		剥片	C区	—	I層	3.21	3.28	1.24	115°	11.87
10		剥片	—	—	I層	2.29	1.05	0.41		0.63
11		剥片	—	—	表採	2.74	2.60	0.58		3.65

第Ⅶ章 第Ⅵ層文化層

註

- (1) 1694点の出土層位別の内訳は、第Ⅵ層1643点、第Ⅴ層50点、第Ⅰ層および表面採集1点である。
- (2) 第125図～第130図に再録した石器の、第1次調査報告書での挿図番号は以下の通りである。30（第1次調査報告書第41図110。以下同様）、31（第41図111）、32（第41図116）、33（第42図120）、34（第40図102）、35（第40図105）、36（第44図138）、37（第44図137）、38（第55図177）、39（第47図151）、40（第60図200）、41（第63図219）、42（第63図220）、43（第62図221）、44（第61図208）、45（第60図198）、46（第65図232）、47（第67図239）、48（第67図237）、49（第65図233）、50（第66図234）、51（第70図248）、52（第70図249）。
- (3) 第1次調査報告書では、「上設打面は平坦な節理面」とし、打撃方向を図示していないが、この打面は角礫の上端を節理面に沿って石核の右側方面向から剝離したものである。

第八章 表面採集資料

表面採集および第 I 層出土の石器78点のうち、帰属時期の明らかでない資料が26点ある。その内訳は、ナイフ形石器2点・搔器1点・削器2点・彫器2点・抉入石器3点・細部調整剥片12点・石刃1点・石核3点である。ここではその中から16点を図示した(第147図～第149図)。

(1) ナイフ形石器 (1・2)

1は黒曜石製の剥片を素材とし、その一側縁を刃部として右側縁に厚い刃潰しを加えている。左側縁の基部にも微細な調整を加えている。甲高で断面形が角錐状をなす。基部に素材の打面を残す。打面調整は認められない。2は背面に原礫面を残す黒曜石製の石刃を素材とし、その打面側を斜めに切断した部分調整のナイフ形石器である。基部を切断している。

(2) 彫器 (3・4)

3は玻璃質安山岩製の交叉刃形彫器である。長軸上の背面左上部に槌状剥離を加え、また先端から右側縁にかけて素材を斜めに切り落とすように槌状剥離を加え、異方向に交叉する2面の彫刀面を作出している。左側の彫刀面はほぼ背面の傾斜に沿ったものであり、腹面とのなす断面角は約 35° である。一方、右側の彫刀面は背面・腹面に対してともに直角に近い角度をなす。左右の彫刀面は先端で交叉しているが、先端部分を欠失しており、ともにネガティブバルブが残されていない。右側の彫刀面は、末端の約半分が大きくねじれている。腹面側の下半は、素材の打瘤を取り去るように両側縁から大きく整形されており、舌状の基部が作出されている。また、上部にも彫刀面を作出する前段階に右側縁からの調整が加えられている。4は背面に原礫面を残す断面三角形の剥片を素材とし、その下半部を切断した折れ面を打面として槌状剥離により左右の側縁に彫刀面を作出した側刃形の彫器である。チャート製。左右の彫刀面を設ける際の打面部には、それぞれ微細な打面細調整が認められる。表面の一部にも下方から調整が加えられている。素材の打面を残し、打面調整が認められる。

(3) 搔器 (6)

6は黒曜石製の石刃を素材とし、その両端に急斜度の調整によって直線状の刃部を作出した複刃搔器である。左側縁部にも微細な調整が連続的に加えられ、削器状の刃部が作出されている。右側縁にも微細な剥離痕が部分的にみられる。上下の刃部は長軸に対してそれぞれ約 12° ・ 25° の傾斜をもつ。

(4) 削器 (7・8)

7は珪質頁岩製の縦長剥片を素材とし、その右側縁から下端にかけて急斜度の調整によって弧状の刃部を作出した縦形削器である。上部を折損する。刃部の断面角は約 43° である。8は珪質頁岩製の大型の石刃を素材とし、その左側縁に刃部を作出した縦形削器である。刃部の断

面角は約35°である。右側縁にも刃こぼれ状の微細な剝離痕が認められる。下部および両側縁の一部を破損している。素材の打面を小さく残す。打面調整は認められない。剝離角は約60°である。

(5) 抉入石器 (9~11)

9はチャート製の剝片を素材とし、その末端の一片の背面側に約2.0cmにわたって細部調整を加え、凹形の刃部を作出している。刃部の深さは約0.35cmである。上部を切断している。10はチャート製の石刃状剝片を素材とし、その右側縁の一部に約1.3cmにわたって細部調整を加え、短い凹形の刃部を作出している。刃部の深さは0.29cmである。下部は節理面に沿って折損している。11は黒曜石製の厚い剝片を素材とし、その右側縁の腹面側に約2.5cmにわたって連続的に細部調整を加え、凹形の弧状刃部を作出している。刃部の深さは約0.39cmである。また、右側縁にも微細な細部調整が加えられている。素材の打面は原礫面である。

(6) 細部調整剝片 (12・13)

細部調整剝片は12点採集された。石材別の内訳は、チャート製8点、黒曜石製4点である。ここでは2点を図示した。12はチャート製の縦長剝片を素材とし、右側縁の下部に部分的に細部調整が加えられている。上端を切断している。13はチャート製の剝片を素材とし、その左側縁に連続的な細部調整を加えており、調整後、下部を折損している。素材の打面を残す。打面は節理面と考えられる平坦面である。

(7) 石刃 (5)

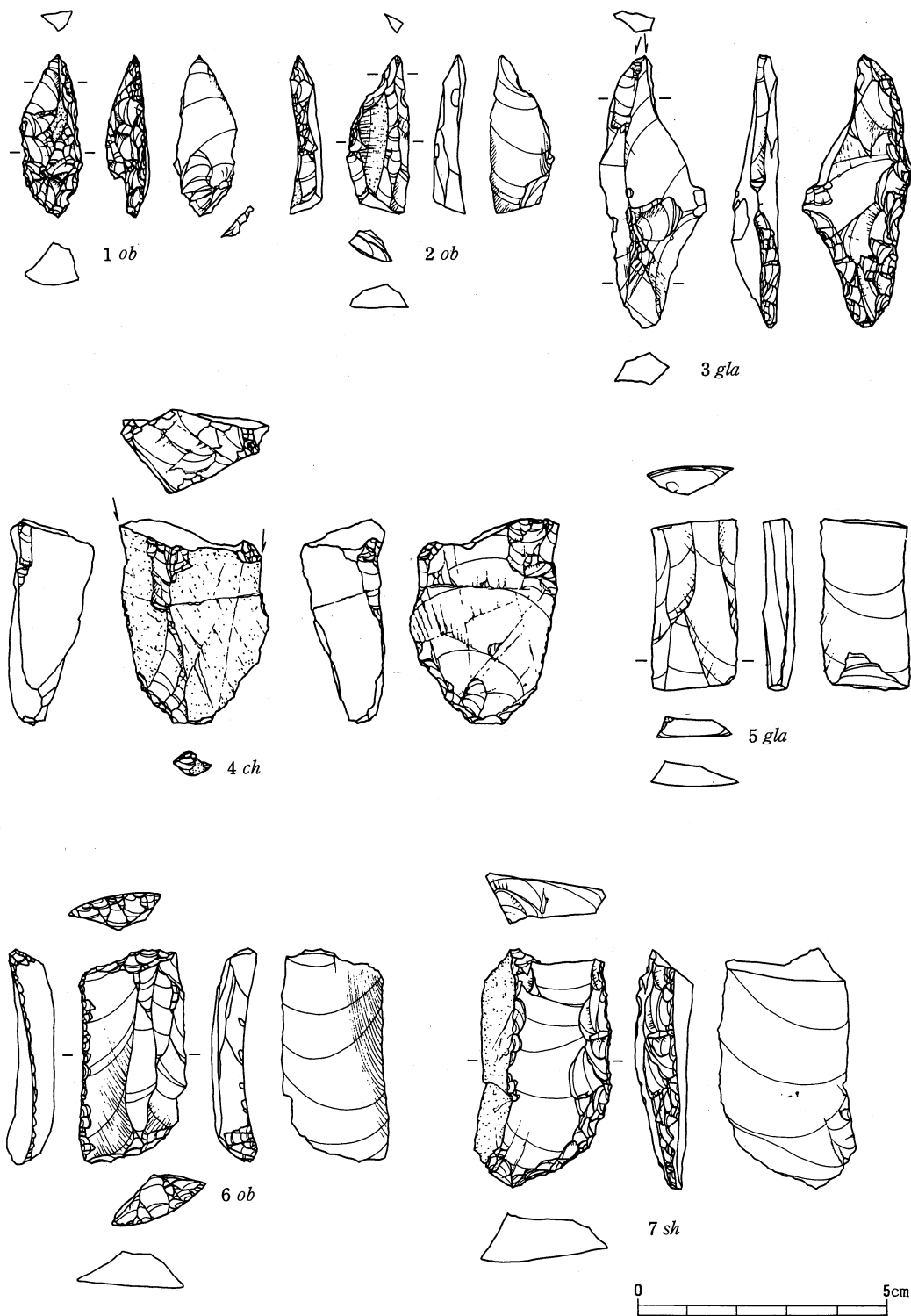
5は玻璃質安山岩製の石刃である。上部と下部を切断する。背面を構成する剝離面はすべて上方向から剝離されており、両側縁に平行する複数の稜線が形成されている。

(8) 石核 (14~16)

14は、節理面に沿って直方体状に砕けたチャートの碎片を素材とする小型の石核である。打面は2面の剝離面からなり、図の正面において小型の不定形剝片が剝離されている。打面角は正面で約68°である。15はチャート製の単設打面石核である。打面は2面の剝離面と節理面からなる。打面調整は行われていない。この打面から図の正面において小型の不定形剝片が剝離されている。右側面に横方向からの剝離面が見られる。打面角は正面で約60°である。16は部厚いチャートの剝片を素材とし、その背面の原礫面を打面として素材の腹面から小型の不定形剝片を剝離している。打面の縁辺部に細かい調整が加えられている。打面角は約75°である。

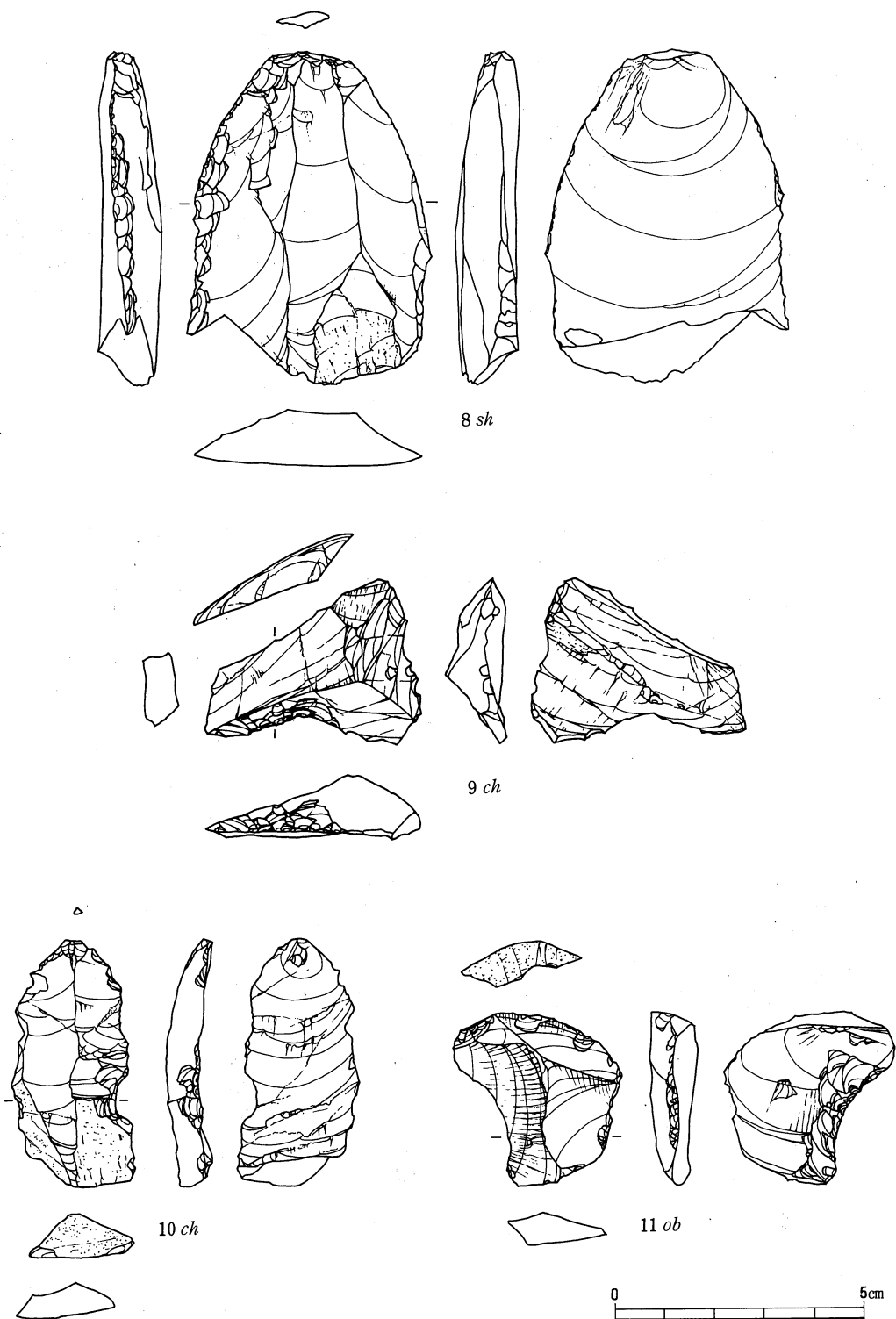
(杉山)

第八章 表面採集資料



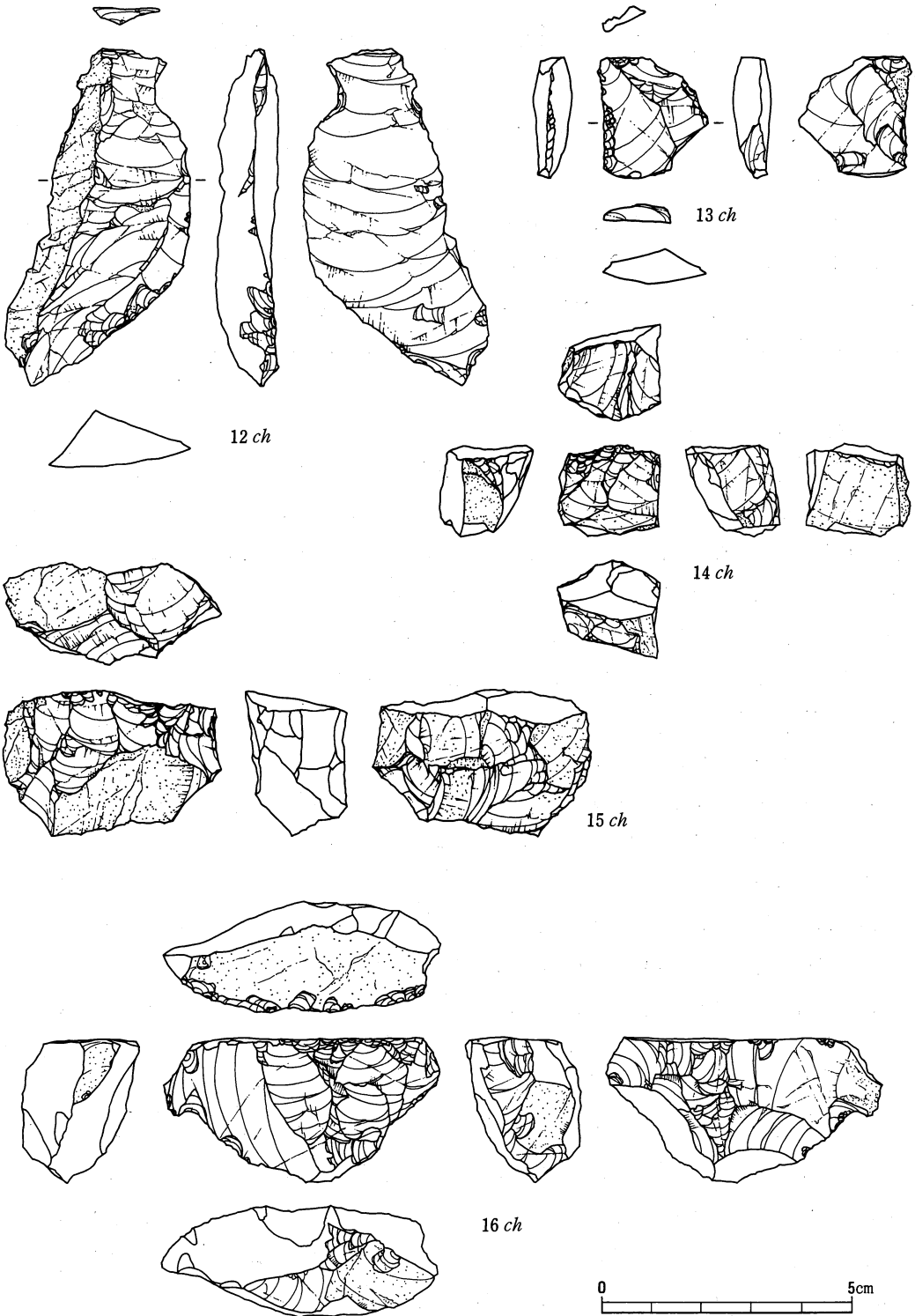
第147圖 表面採集資料(1)

第VIII章 表面採集資料



第148圖 表面採集資料(2)

第八章 表面採集資料



第149图 表面採集資料(3)

第IX章 旧石器文化に関する考察

第1節 細石刃の形態的考察

本遺跡では、2回の調査を通じて合計165点の細石刃が出土した。細石刃の意図的な折断については多くの指摘があるが、本遺跡の細石刃も例外ではなく、大部分がさまざまな部位に折断されている。ここでは165点の細石刃について、①石材別の大きさ、②折断の部位と大きさ、③折断方向の傾向、④側辺の細部調整の4点から分析を加え、その形態的特徴を考察してみたい。

(1) 石材別の大きさ

細石刃165点の石材別の内訳は、黒曜石製114点(69.1%)、玻璃質安山岩製48点(29.1%)、チャート製3点(1.8%)であり、黒曜石製が最も多い。細石刃の大きさを石材別に見てみると、黒曜石製は、端部を折損している7点を除く107点の長さの平均は1.59cm、側辺を折損している5点を除く109点の幅の平均は0.66cm、114点の厚さの平均は0.17cm、長幅比2.41である。玻璃質安山岩製は、端部を折損している2点を除く46点の長さの平均は1.77cm、側辺を折損している1点を除く47点の幅の平均は0.84cm、48点の厚さの平均は0.20cm、長幅比2.11であり、チャート製3点の長さ・幅・厚さの平均はそれぞれ2.11cm・0.79cm・0.17cm、長幅比2.67となっている。黒曜石製には幅がやや狭くかつ短いものが多く、玻璃質安山岩製には幅がやや広く長いものが多い傾向にある。幅の大きさを石材別に示したものが第150図②である。この図からも黒曜石製に幅狭いものが多く、玻璃質安山岩製に幅広いものが多いことがわかる。

(2) 折断の部位と大きさ

細石刃165点の部位別の内訳は、完形12点、頭部35点、中間部51点、末端部16点、末端折断26点、頭部折断13点、頭部末端折断6点、破片5点、不明1点である。折損している6点を除く153点の各部位の大きさを第150図①に示した。以下、各部位ごとの大きさについて記述する。

まず完形細石刃12点の大きさの平均を見てみると、長さ2.43cm、幅0.83cm、厚さ0.20cm、長幅比2.93となっている。細石刃の形態については織笠昭による詳細な検討があるが(織笠 1983)、それによると全国41遺跡の細石刃石核の作業面に残る完形細石刃の剝離痕の分析から求めた完形細石刃の大きさの全国平均は、長さ2.80cm、幅0.55cm、厚さ0.16cm、長幅比5.15となっている。同じ方法で本遺跡の細石刃石核6点から平均値を求めると、長さ3.07cm、幅0.76cm、長幅比4.04となり、幅の値が全国平均を大きく上回り、長幅比が全国平均を下回っており、かなり幅広な細石刃が剝離されていたことがわかる。

次に折断された細石刃の大きさの平均値を部位別に見ると、頭部は長さ1.43cm、幅0.76cm、

第1節 細石刃の形態的考察

厚さ0.18cm、長幅比1.88である。中間部は長さ1.30cm、幅0.68cm、厚さ0.16cm、長幅比1.91であり、末端部は長さ1.44cm、幅0.70cm、厚さ0.17cm、長幅比2.04である。また末端折断は長さ2.20cm、幅0.73cm、厚さ0.20cm、長幅比3.01、頭部折断は長さ2.14cm、幅0.67cm、厚さ0.23cm、長幅比3.19、頭部末端折断は長さ2.15cm、幅0.65cm、厚さ0.24cm、長幅比3.30となっている。織笠によると、折断された細石刃の大きさの全国平均は長さ1.60cm、長幅比2.83である。本遺跡における折断例の大きさの平均値は、長さ1.61cm、長幅比2.27であり、長さ・長幅比とも全国平均を上回っているが、大幅な差は見られない。このように完形例・折断例のいずれの場合においても、本遺跡出土の細石刃は全国平均値に照らして幅広であり、この点に形態的な特徴がある。

(3) 折断方向の傾向

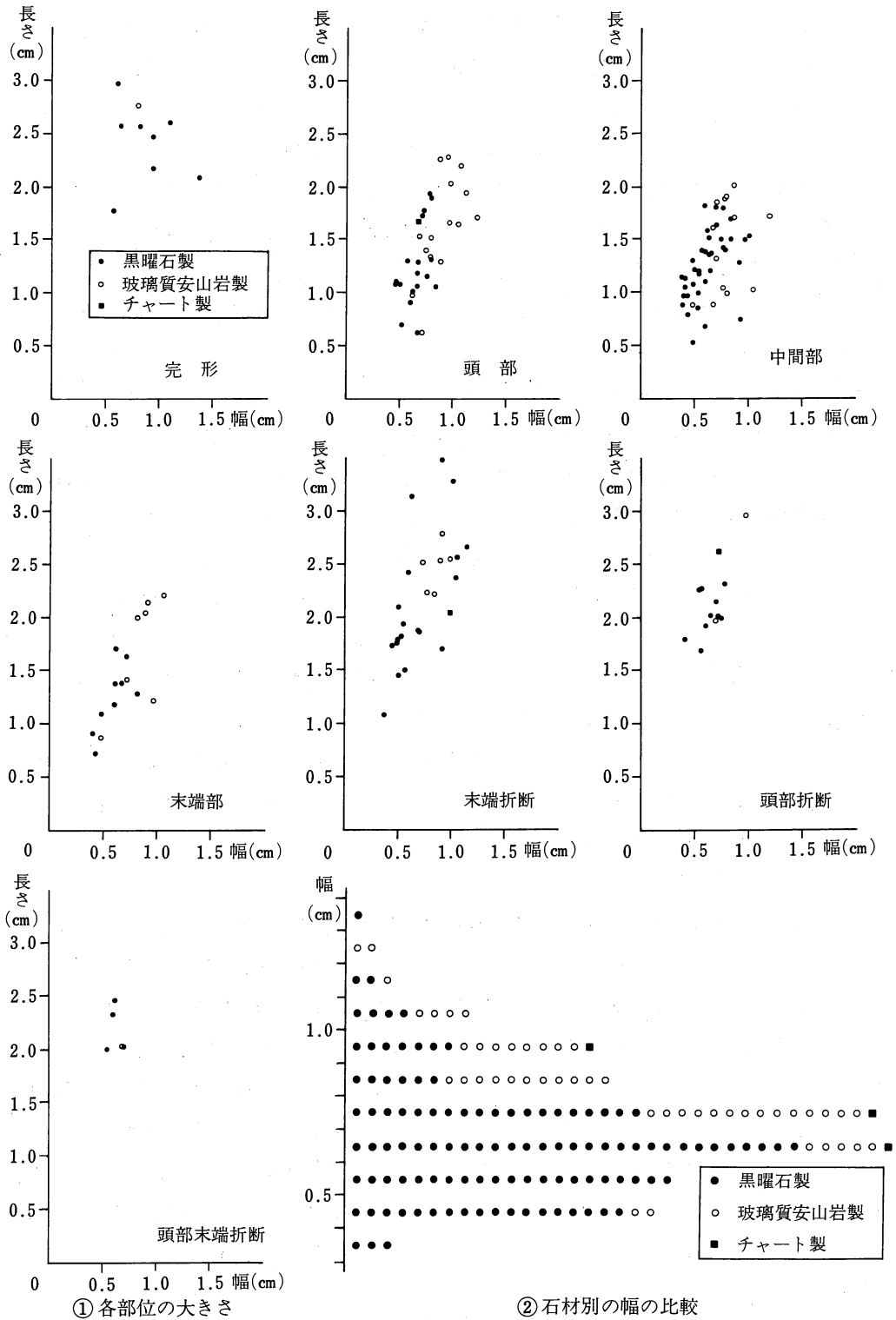
折断された細石刃のうち、破片・部位不明のもの6点を除く147点について折断方向の観察を行った。頭部・末端部・末端折断・頭部折断の各部位には、①背面→腹面、②腹面→背面の2通りがあり、中間部・頭部末端折断には、①上下ともに背面→腹面、②上下ともに腹面→背面、③上端が腹面→背面で下端が背面→腹面、④上端が背面→腹面で下端が腹面→背面の4通りがある。その他不規則な折れ方も見られる。これを総計してみると、背面→腹面が141例、腹面→背面が58例、不規則な折れ方が3例となり、背面→腹面の占める比率が69.8%と最も多い。部位別に数を示すと、頭部は下端を折損している1点を除く34点のうち①が25例、②が9例ある。中間部は51点のうち①が28例、②が7例、③が3例、④が12例、上端が不規則な折れ方で下端が背面→腹面が1例ある。末端部は16点のうち①が11例、②が5例ある。末端折断は26点のうち①が20例、②が6例がある。頭部折断は13点のうち①が8例、②が3例、不規則な折れ方が2例ある。頭部末端折断は6点のうち①が2例、②が2例、④が1例、上端を折損しているが下端が腹面→背面が1例ある。

(4) 側辺の細部調整

側辺部に意図的な細部調整を加えた例は165点のうち18点のみで、全体に占める比率は10.9%となる。折断以外の加工をほとんど行わない点にもう一つの形態的な特徴がある。部位別にその数を見ると、完形2点、頭部3点、中間部8点、末端部1点、頭部折断3点、部位不明1点となり、中間部が比較的多い。石材別では黒曜石製14点、玻璃質安山岩製4点となる。細部調整が加えられた部位に着目すると、背面の左側辺2点、腹面の左側辺5点、背面の右側辺1点、腹面の右側辺1点であり、背面・腹面ともに左側辺に調整を加えた例が多い傾向にある。そのほか表裏から調整を加えた例が1点、末端4点、上端1点がある。両側辺に調整を加えた例は3点あり、背面側が2点、腹面側が1点となる。大きさは長さ0.98～2.93cm・幅0.50～1.11cm・厚さ0.12～0.42cmと広い範囲にわたっており、細部調整を加えた細石刃は大きさに統一性が認められない。

(荻野・山口)

第IX章 旧石器文化に関する考察



第150図 細石刃各部位の大きさ・石材別の大きさ

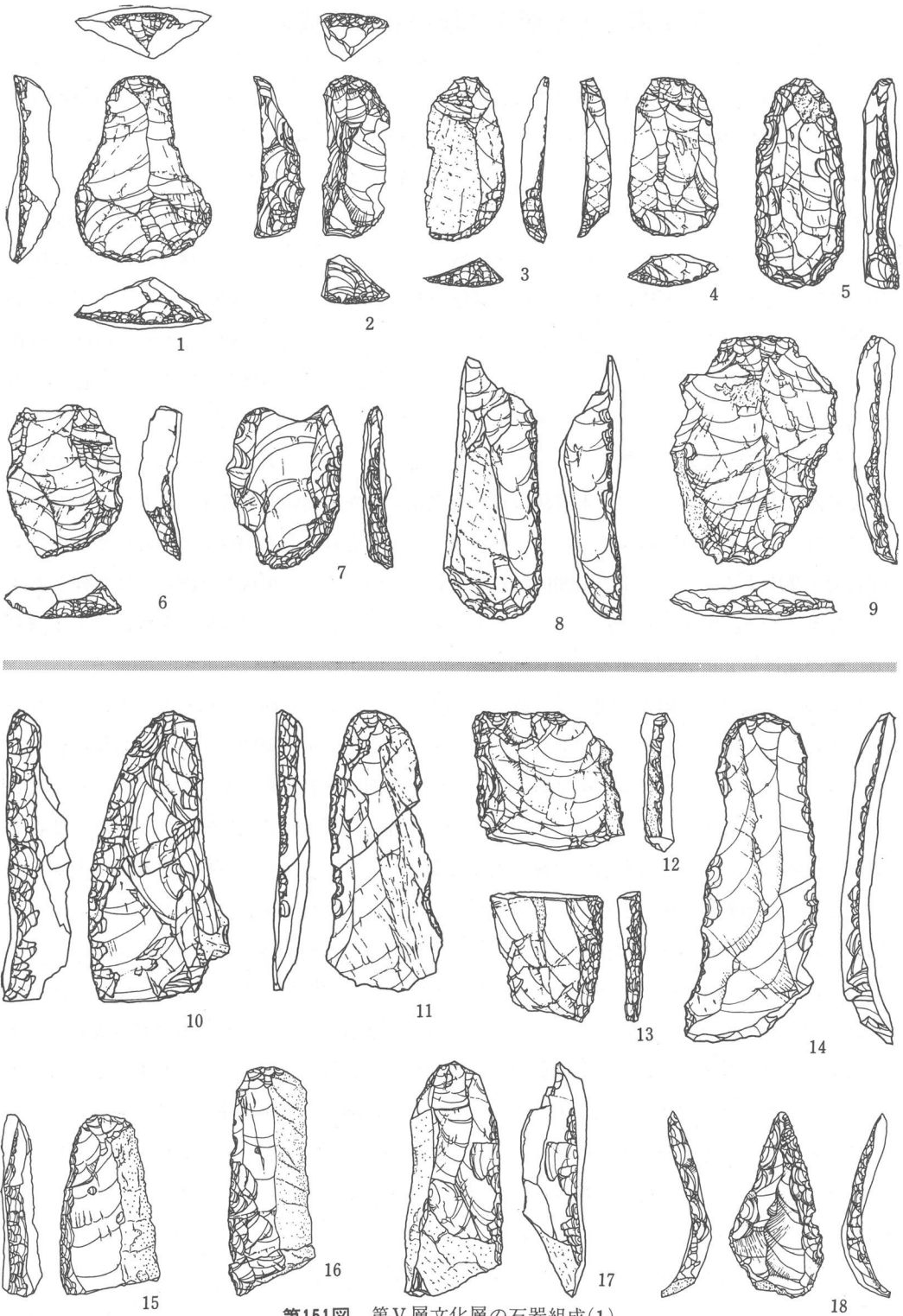
第2節 第V層文化層の石器組成について

第1次・第2次調査の結果、第V層文化層に属する2箇所の石器ユニットの存在が確認され、これによって本遺跡の細石刃文化に伴う石器の器種組成の実態がほぼ明らかとなった。ここではユニットから出土した石器を中心に、石器組成の特徴についてまとめてみたい。

第151図・第152図は、ユニット1から出土した石器を中心に、同一の母岩別資料等を加え、第V層文化層における石器の器種組成を再構成したものである。1～9は搔器、10～18は削器、19～28は石刃・石刃状剥片、29・30は細部調整のある石刃、31～33は細部調整剥片、34は打製石斧、35は礫器である。ユニット1から出土した石器には、細石刃・細石刃石核・打面形成削片等のほか、搔器6点、削器7点、石刃・石刃状剥片25点、細部調整剥片19点、打製石斧1点、礫器3点があり、図示した中では2・7・8・11・12・14～17・19～21・23・24・26～30・32～35が該当する。なお、これらのほかにユニット1とその周辺の第V層中から両面調整の槍先形尖頭器3点が出土している。本遺跡の細石刃文化に槍先形尖頭器が共伴するものか否かについては今のところ確証が得られていないが、出土した3点のうち第54図102に示した1例は、細石刃が集中するユニット1の範囲内から出土したものであり、現状では細石刃に共伴したものと捉えている。図示した石器のうち、4・5・8・10・11・13～17は第1次調査の出土資料で、その他は第2次調査で出土したものである。

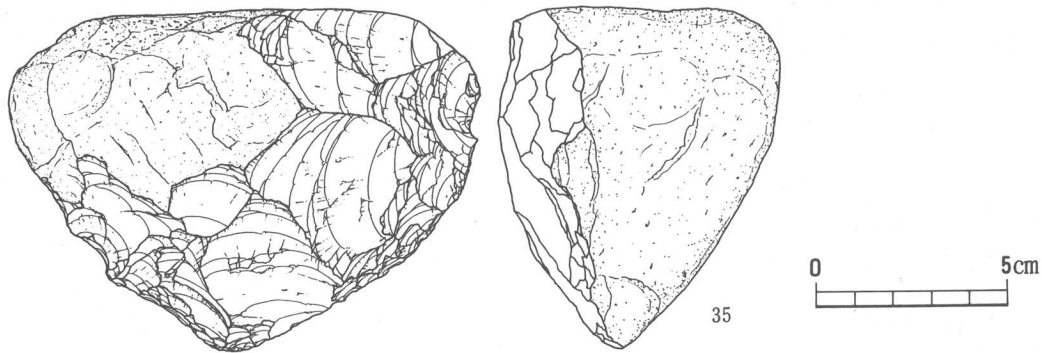
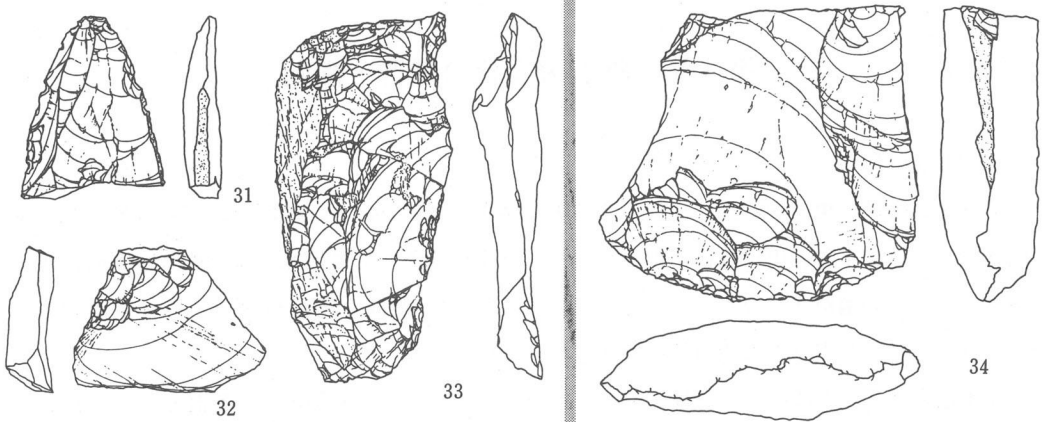
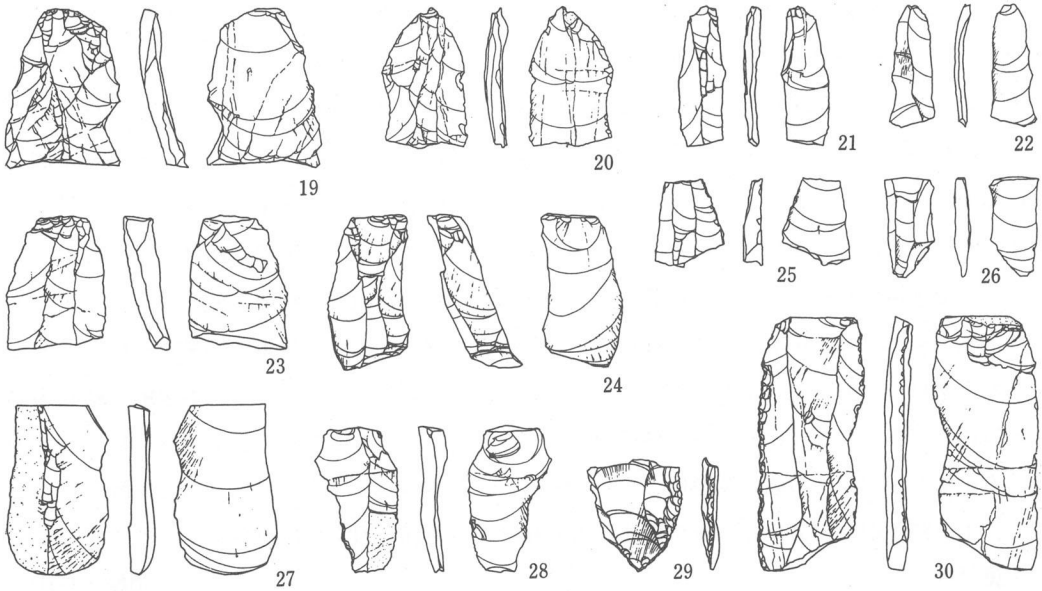
第V層文化層の石器組成に関して注意される点は、第一に一器種または石器の素材として石刃が内在している点である。母岩別資料2・4・5は石刃生産の実態を示す代表的な接合資料であり、こうした石刃の生産が第V層文化層における剥片剥離技術の中心をなしている。また、石器の器種組成の上では、第151図に示したように搔器・削器の占める割合が高い点に特徴がある。搔器は、石刃または石刃状の縦長剥片を素材とし、その長軸上の端部に弧状の刃部を設けた定型的な形態に特徴があり、上下に2つの刃部を有する複刃搔器も含まれている(1・2)。削器はほとんどが石刃または狭長な縦長剥片を素材とする縦形削器で、急斜度の調整によって厚形の長い刃部を作出した10・13・15・16等の形態が最も特徴的である。18は二側縁の刃部が先端で交叉する尖頭形の削器である。これらの搔器・削器は、いずれも石刃や石刃状剥片を素材とする定型的な器種であり、石器組成の中核をなしている。なお、ユニット1・2から彫器は出土しておらず、本遺跡の細石刃文化にどのような形態の彫器が共伴するのかが、今のところ不明である。いずれにせよ、石器組成に占める彫器の割合は本来きわめて低いものと考えられる。その他、これらの剥片石器以外に、濃飛流紋岩・安山岩・ホルンフェルス・砂岩を用いた打製石斧・礫器が共伴する点にも特徴がある。

細石刃文化の石器組成については、織笠昭による詳細な研究があるが(織笠 1984)、その中で、東北日本と西南日本にそれぞれ様相の異なる石器組成が認められ、比較的明瞭な地域性



第151図 第V層文化層の石器組成(1)

第2節 第V層文化層の石器組成について



第152図 第V層文化層の石器組成(2)

のあることが指摘されている。すなわち、東北日本側では各種のスクレイパーが組成の中心となっており、特に搔器の占める比率の大きい点に特徴がある。また、スクレイパー以外にも彫器・錐を伴うことが多い。このほか礫器・打製石斧・敲石等も知られている。搔器をはじめ石器の素材には、石刃その他の定型的な剥片を用いる傾向が強い。これに対して、西南日本側では搔器や彫器の出土は稀で、不定形剥片を素材とする削器の占める比率が大きくなっている。また、円形・横形の礫器も比較的多く、南関東地方などでは片刃の礫器が顕著に見られる。このような地域性に照らして本遺跡第V層文化層における石器組成の特徴を要約すると、定型的な搔器・縦形削器を中心とする器種組成のあり方は、明らかに東北日本に共通する様相であり、石器の素材に石刃等の定型的な剥片を用いる点も同一の傾向を示している。本遺跡の細石刃剥離技術は、削片系の楔形細石刃石核を中心とするもので、北海道から東北地方を中心に広がる北方系細石刃文化との強い関連性を示しているが、石器組成に見られるこうした特徴の上からも、本遺跡の細石刃文化の系統が東北日本方面の北方系細石刃文化に連絡するものであることが裏付けられる。

(岡崎・杉山)

第3節 細石刃文化の礫群・配石

(1) はじめに

第2次調査の結果、細石刃を主体とする第V層文化層において、礫群および配石各1基が検出された。1954年に矢出川遺跡で細石刃文化の存在が確認されて以来、全国で450箇所以上の細石刃文化の遺跡が発見されているが(鈴木 1985)、礫群や配石が検出された遺跡は少なく、管見に触れた限りでは30遺跡にすぎない(第14表)。

辻本崇夫は「細石器文化の遺構」(辻本 1984)の中で、細石刃文化期の礫群として6遺跡8例を挙げ、それぞれの礫群を解説し分類している。そして、礫群構成礫の被熱の有無に着目し、ナイフ形石器文化期に比べて礫群が少ないのは、火の使用形態が礫の熱保存効果を利用する礫群から直接的に火を利用する手段へと変化したことを示すとしている。また、保坂康夫は「先土器時代の礫群の分布とその背景」(保坂 1985)の中で、細石刃文化の礫群を11遺跡挙げているが、問題のあるものが多く、確実な例は鹿児島県上場遺跡の1例のみとし、細石刃文化には基本的に礫群が伴わないと結論付けている。しかし、依然として数少ないものの、後述する通り、最近の調査では細石刃文化に伴う礫群・配石の資料が徐々に増加してきており、一概にそのようには言えない状況になってきている。

(2) 資料集成

細石刃文化に伴って礫群・配石等の遺構が検出された遺跡を第14表に集成した。礫群・配石

第3節 細石刃文化の礫群・配石

第14表 細石刃文化の礫群・配石

	遺 跡 名	遺 構 名	遺構数	文 献
1	北海道増田遺跡第Ⅲ層	小形石組（礫群）	2基	小野・加藤・鶴丸 1972
2	北海道白滝遺跡32地点	積石	1基	吉崎 1961
3	北海道白滝遺跡33地点	石囲い炉 礫群	1基 1基	吉崎 1961
4	北海道立川遺跡第Ⅰ地点	礫群（配石）	2基	吉崎 1959
5	山形県越中山S遺跡	礫群	2基	加藤 1972・1975
6	山形県角二山遺跡第Ⅱ文化層	集礫群（礫群）	1基	加藤・酒井ほか 1982
7	山形県湯ノ花遺跡第Ⅲ層	礫群（配石）	1基	加藤・酒井ほか 1982
8	茨城県額田大宮遺跡第Ⅳ層	礫群	1基	川崎・渡辺・星山編 1977
9	群馬県榊形遺跡	焼け礫	1箇所	関矢 1981
10	千葉県木刈峠遺跡第Ⅲ層	配礫（配石） 礫群	1基 1基	鈴木 1975
11	東京都鈴木遺跡第Ⅲ層	礫群	1基	織笠・金山・桑野 1980
12	東京都野川中州北遺跡第Ⅲ層	礫群 配石	1基 4基	千葉・西村 1989
13	神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層	配石	1基	堤・中村ほか 1983
14	神奈川県栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層	配石	1基	鈴木 1984
15	神奈川県代官山遺跡第Ⅱ文化層 第Ⅲ文化層	礫群 焼け礫	8基 3箇所	砂田 1986
16	神奈川県上和田城山遺跡第Ⅰ文化層	礫群	2基	中村ほか 1979
17	神奈川県上野遺跡第Ⅰ地点第Ⅲ文化層	礫群	2基	堤 1986
18	神奈川県上草柳第Ⅰ地点遺跡	礫群	2基	中村・安藤・堤ほか 1984
19	神奈川県上草柳第Ⅲ地点東遺跡	礫の集中	2箇所	中村・安藤・堤ほか 1984
20	神奈川県上草柳第Ⅲ地点中央遺跡	礫群	1基	中村・安藤・堤ほか 1984
21	静岡県広野北遺跡Ⅳ層	配石	3基	山下 1983、鈴木ほか 1985
22	長野県柳又遺跡C地点第Ⅲ層	礫群	3基	整理中
23	新潟県大平遺跡第Ⅲ層	礫群	1基	小野 1988・小野ほか 1991
24	新潟県大刈野遺跡第Ⅳ層	礫群	1基	佐藤ほか 1988・佐藤 1988
25	大分県市ノ久保遺跡	集石遺構	10数基	栗田 1988・1989
26	大分県松山遺跡Ⅲ層	礫群	3基	橋編 1990
27	宮城県船野遺跡第Ⅱ文化層	礫群	1基	橋 1975
28	鹿児島県上場遺跡第Ⅲ層	礫群	1基	池水 1967・1975
29	鹿児島県榎崎B遺跡Ⅶ層	礫群 配石遺構	9基 1基	青崎・宮田 1991
30	鹿児島県西丸尾遺跡Ⅶ層	礫群	6基	青崎・宮田 1991

等の遺構名称は、引用文献の記述に従っている。

北海道常呂郡訓子府町増田遺跡（小野・加藤・鶴丸 1972）

1971年10月に訓子府町教育委員会により発掘調査が行われ、細石刃石核5点、削片2点、細石刃47点等に伴い、2基の小形石組が検出された。いずれも小礫が小ピット内の径約40cmの範囲に20点ほど積まれた状態で検出された。礫群を構成する礫に被熱の痕跡は認められず、焼土や炭化物も伴っていない。

北海道紋別郡白滝村白滝遺跡32地点（吉崎 1961）

1959年に白滝団体研究会によって発掘調査が行われ、細石刃石核や大量の削片を含む石器群に伴い、発掘区の一部から積石が発見された。積石は、長径4m、短径2mの範囲に大型の礫が集中して分布し、遺物の集中部分から約5m離れて検出された。

北海道紋別郡白滝村白滝遺跡33地点（吉崎 1961）

1959年に若生達夫により発掘調査され、地表下40~50cmの深度から細石刃石核、削片、荒屋型彫器等の石器に伴い、径約1mの赤く焼けた焼土と、それを取り囲むように人頭大から拳大の礫が20数点検出された。また、約2m離れたところに石片が約160点まとめて置かれていた。

北海道磯谷郡蘭越町立川遺跡第I地点（吉崎 1959）

1958年11月と1959年5月に函館博物館により発掘調査が行われ、第I地点から細石刃29点、忍路子型を含む細石刃石核、船底形石器、彫器、スクレイパー等の石器群に伴って、上部ローム層中から2基の礫群が検出された。1基は主に安山岩質の人頭大の礫を16点ほど配置した礫群（配石）で、火熱を受けた痕跡は見られない。他の1基は、そこから3mほど離れた所から、それよりやや小さな礫5点が密集した状態で検出された。

山形県東田川郡朝日村越中山S遺跡（加藤 1972・1975）

1972年10月から11月にかけて加藤稔らによって発掘調査が行われ、鶴岡ロームに密着して細石刃を主体とする石器群が検出された。石器群は南北12m×東西10mの範囲に分布していたが、そのほぼ中央部から、やや大きめの3点の礫からなる礫群が検出された。礫に被熱の痕跡は見られない。また、遺物の集中部分の北東端でも、2m×2mの範囲から多量の小礫が検出された。

山形県北村山郡大石田町角二山遺跡（加藤・酒井ほか 1982）

1970年に加藤稔らによって発掘調査が行われ、第3層から細石刃石核15点、削片14点、細石刃約1300点等が出土し、第2文化層として把握された。細石刃が出土する範囲に隣接して、発掘区の東南部の6m×4mの範囲から、散漫な集礫群が検出された。礫群を構成する礫は、主に安山岩質の円礫で、巨大なものが多く、人頭大のものも含まれている。報文では、2~3の礫群（配石）の集合である可能性が指摘されている。

山形県西置賜郡小国町湯ノ花遺跡（加藤・酒井ほか 1982）

第3節 細石刃文化の礫群・配石

1973年と1979年に発掘調査が行われ、第3層から細石刃石核1点、削片8点、細石刃30点等が出土した。そして発掘区の東南隅の遺物包含層下位から、3m×1.5mの楕円形状の範囲に径5～10cm程度の拳大の礫を数十点散漫に配置した礫群が検出された。礫群を構成する礫の大半は被熱しており、付近から炭化物や焼土が検出されている。

茨城県那珂郡那珂町額田大宮遺跡（川崎・渡辺・星山編 1977）

1977年8月に那珂町史編纂委員会により発掘調査が行われ、第4層から細石刃204点等に伴って、火熱を受けた痕跡のある礫が多数検出された。径約4mの範囲に60点の焼け礫が散漫に分布している。石質は砂岩と花崗岩である。砂岩は密集する傾向があり、調査区の南側からかたまってきた出土している。

群馬県勢多郡宮城村柵形遺跡（関矢 1981）

1978年に相沢忠洋らにより発掘調査が行われ、黄褐色ローム層の上半部より細石刃石核12点、削片5点、細石刃39点等に伴って、火熱を受けた痕跡のある礫と多量の炭化物が検出された。焼け礫の総数は50点で、重量0.1gの微細な礫から2500gの大型の礫までである。ほとんどが安山岩である。報文によると、礫の分布は散漫で密集する傾向は見られない。

千葉県印旛郡印西町木苅峠遺跡（鈴木 1975）

1972年10月から1973年3月にかけて千葉県企業庁・(財)千葉県都市公社によって発掘調査が行われ、第Ⅲ層中から配礫（配石）・礫群各1基が検出された。配礫（配石）は第Ⅲ層中部から検出されたもので、第4ユニットに隣接して径7～10cm前後の4点の円礫が半円状に規則的に配置されていた。円礫は火熱を受けて赤変しているが、焼土・炭化物は検出されていない。一方、礫群は、第Ⅲ層上部の第9ユニットから焼けた円礫の比較的大きな破片が7点まとまった状態で検出されたものである。ただし、第Ⅲ層出土の遺物には細石刃石核2点、細石刃35点のほか、槍先形尖頭器、ナイフ形石器も含まれており、報文ではこれらの遺構が細石刃文化期のものであるとは断定していない。

東京都小平市鈴木遺跡（織笠・金山・桑野 1980）

1977年に鈴木遺跡調査団により発掘調査が行われ、第Ⅲ層中から細石刃とともに礫群が1基検出された。径1mの範囲に拳大の礫が10点散漫に分布している。ただし、同層からの出土遺物には槍先形尖頭器やナイフ形石器も混在しており、厳密にどの時期に伴うものかは断定できない。

東京都小金井市野川中洲北遺跡（千葉・西村ほか 1989）

1985～86年に小金井市遺跡調査会により発掘調査が行われ、第Ⅲ層中から5箇所のブロックと6基の礫群、5基の配石が検出された。そのうち第1号礫群と第1～4号配石は、1号ブロックの細石刃の集中区に伴っており、細石刃文化期の遺構である可能性が高い。第1号礫群は調査区北側の微高地先端部に位置し、他の遺構から離れている。礫群を構成する礫の総数は18点

で、平均重量は42.9g、接合率は33.3%である。破碎礫を主体とする散漫な小型の礫群である。第1号配石は1号ブロックの内部から検出された。配石を構成する礫の総数は23点で、平均重量は606.9g、接合率は13.0%である。1000gを越える礫が8点含まれている。第2号配石は、3500gと110gの2点の礫から構成されるものである。第3号配石は9点の礫から構成され、そのうち1000g以上の礫が2点存在する。第4号配石は4500gの礫1点より成る。

神奈川県海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡（堤・中村ほか 1983）

1981年10月から1982年10月にかけて柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団により発掘調査が行われ、第IV文化層から細石刃石核5点、細石刃石核調整剥片、細石刃約200点等が出土し、その中央から配石遺構が1基検出された。配石は、径1.5mの範囲に火熱を受けていない人頭大の礫8点を配置したものである。

神奈川県座間市栗原中丸遺跡（鈴木 1984）

1980年10月から1982年4月にわたって神奈川県教育委員会により発掘調査が行われ、L1S層より細石刃を主体とする石器群が出土し、12基のブロックが捉えられ、第II文化層として把握された。このうち第12号ブロックから配石が1基検出されている。配石を構成する礫の総数は7個体41点である。完形礫は3点ある。3600gの特に重い礫が1点あるほかは、すべて1000g前後の礫である。ほとんどの礫の表面は赤化しており、ヒビ割れや表面の剥落など焼けた痕跡が見られる。割れた鋭い縁辺に著しい打痕が認められるものもある。石質は火山礫・凝灰岩が多く、他に粗粒凝灰岩・凝灰角礫岩がある。

神奈川県藤沢市代官山遺跡（砂田 1986）

1981年に神奈川県立埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われ、細石刃を主体とする2面の文化層が捉えられた。第II文化層はL1S～B。層から検出されたもので、当該文化層からは細石刃石核4点、細石刃12点を含む計44点の石器とともに礫群が8基検出された。礫の分布状態は非常に散漫で、1基あたりの構成礫数は10点未満である。報文によると、8基の礫群は5集中区に再編することが可能であり、そのうち第3～7礫群の5基は径10mほどの大きな礫の集中区を構成している。第5と第8礫群の間に礫の接合関係が認められる。焼け礫の総数は64点で、重量は約7kgである。第III文化層はB。層下半部～L1H層から検出されたもので、当該文化層からは細石刃石核36点、細石刃461点をはじめ計1502点の石器とともに、径約10mの範囲から焼け礫が疎らに検出された。焼け礫の総数は32点で、総重量約2kgを計る。完形礫は10点で1304.1g、破碎礫は22点で724.3gである。石器集中地点からは炭化物も疎らに検出されたが、遺構を形成したり焼け礫に付随するものではなかった。

神奈川県大和市上和田城山遺跡（中村ほか 1979）

1978年に大和市教育委員会により発掘調査が行われ、第I文化層から細石刃を主体とする石器群が出土し、それに伴って2箇所のブロックと2基の礫群が検出された。遺構確認面はL1

第3節 細石刃文化の礫群・配石

S層である。礫群は第1ブロックと第2ブロックにまたがる範囲で検出されており、散漫な分布状態を示している。1号礫群は第1ブロックに近接し、長径1.5m、短径1mの範囲に約20点の礫が分布している。2号礫群は2箇所のブロックの間から検出されたもので、長径2m、短径1mの範囲に約20点の礫が分布している。各礫群を構成する礫は小さく、被熱の痕跡のない径1.5～6cmの小円礫である。

神奈川県大和市上野遺跡第1地点（堤 1986）

1979～82年に大和市教育委員会により発掘調査が行われ、漸移層からL1H層にかけて細石刃を主体とする石器群が出土し、第Ⅲ文化層として把握された。石器の集中区I群・Ⅱ群・Ⅲ群のうち、I群とⅡ群に伴って礫群が検出された。I群に伴う第1礫群は、9m×6mの範囲に広がる。礫群を構成する礫の総数は51点で、ほとんどの礫は被熱しており、スス状付着物・ひび割れ・表面剥落の見られるものもある。重量4230gの大型礫が1点、500g以上の礫が5点ある。石質は凝灰岩が最も多く、砂岩・安山岩・ホルンフェルスもある。Ⅱ群に伴う第2礫群は、径10mの範囲に広がり、完形礫20点を含む129点から構成されている。多くは被熱し赤化した礫で、ひび割れや表面剥落、スス状付着物が見られる。913gの完形礫が1点あり、500g以上のものが6点存在する。石質は、凝灰岩・砂岩・ホルンフェルス等である。

神奈川県大和市上草柳第1地点遺跡（中村・安藤・堤ほか 1984）

1978年10月から1981年1月にかけて大和市教育委員会により発掘調査が行われ、BB層の中位から細石刃とその関係資料を主体とする石器群と礫群から構成されるブロックが2箇所検出された。Aブロックの礫群は、細石刃石核3点、細石刃石核素材3点、細石刃石核調整剥片90点、細石刃103点等とともに検出された。完形礫2点と礫片5点からなり、分布状態は散漫である。一部の礫には被熱による赤化、ひび割れが認められる。また、長径20cmの細長い大型の焼け礫に伴って炭化物が検出されている。Bブロックの礫群は、細石刃石核3点、細石刃石核素材2点、細石刃石核調整剥片41点、細石刃44点等とともに検出された。13個体16点の礫からなり、分布状態は比較的まとまっている。完形礫2点、礫片14点で、13個体のうち3個体に被熱による赤化・ひび割れが認められた。

神奈川県大和市上草柳第3地点東遺跡（中村・安藤・堤ほか 1984）

1978年10月から1981年1月にかけて大和市教育委員会により発掘調査が行われ、漸移層からBB層上部において、細石刃3点とともに径3cm未満の6点の礫が散漫な状態で検出された。また、L1H層上部の第Ⅰ文化層から2個体70点の礫が検出された。ただし、報文では、この礫の集中が細石刃を主体とする石器群と槍先形尖頭器を主体とする石器群のいずれに関係するのか断定していない。

神奈川県大和市上草柳第3地点中央遺跡（中村・安藤・堤ほか 1984）

1978年10月から1981年1月にかけて大和市教育委員会により発掘調査が行われ、BB層下

部より細石刃石核7点、細石刃石核素材2点、細石刃石核調整剥片121点、細石刃96点等に伴って、礫群が1基検出された。礫群の範囲は、石器の集中区と重複している。10個体分の砂岩からなる構成礫は、重量100～500g前後で、拳大のものが多く、一部の礫は被熱により赤化し、ひび割れている。

静岡県磐田郡豊田町広野北遺跡 (山下 1983、鈴木・保坂・山下ほか 1985)

1982年5月から12月にかけて平安博物館・静岡県教育委員会により発掘調査が行われ、第2b層中に細石刃を主体とする石器群の集中区と槍先形尖頭器を主体とする石器群の集中区が隣接して検出され、同層準から配石3基が検出された。報文では、層位的に所属時期を決定することは困難であるとしながらも、3基の配石遺構は細石刃文化段階に属する可能性があると指摘している。第4号配石は構成礫2点、重量は3000gと1700g、石質はともに砂岩である。第5号配石は構成礫1点、重量は1730g、石質は花崗岩である。第6号配石は構成礫5点、重量は計11754g、石質は花崗岩2点・砂岩2点・凝灰角礫岩1点である。

長野県木曾郡開田村柳又遺跡C地点

1990年に開田村教育委員会・柳又遺跡調査団により発掘調査が行われ、第Ⅲ層中から細石刃を主体とする石器群に伴い、数基の礫群が検出されている。

新潟県北蒲原郡水原町大平遺跡 (小野 1988、小野・菅沼・藤田 1991)

1988年8月に新潟大学考古学研究室によって発掘調査が行われ、第Ⅲ層から細石刃石核1点、細石刃9点等が出土した。この包含層から第Ⅳ層の層位において、花崗岩を主体とする礫群が検出されている。被熱の痕跡は見られない。報文では、礫群に遺物が伴出していないため細石刃文化期のものか否かの断定はできないとしている。

新潟県南魚沼郡湯沢町大刈野遺跡 (佐藤ほか 1988・佐藤 1988)

1987・88年に湯沢町教育委員会によって発掘調査が行われ、第Ⅳ層中の第4ブロックから細石刃2点、調整剥片3点等とともに礫群が検出された。礫群は径約4mで、42点の礫からなり、それらはすべて破碎礫であった。42点のうち32点の表面に被熱による赤化、18点に黒色付着物が認められた。

大分県大野郡犬飼町市ノ久保遺跡 (栗田 1988・1989)

1987年に犬飼町教育委員会により発掘調査が行われ、ソフトローム層中より細石刃石核約120点、細石刃1000点以上等が出土し、それとともに集石遺構が10数基検出された。集石遺構は拳大の角礫を10数点集めたもので、礫には加熱による細かなひび割れやスス状の炭化物が付着していた。

大分県大野郡犬飼町松山遺跡 (橋編 1990)

1987年2月に別府大学付属博物館により発掘調査が行われ、Ⅲ層のソフトローム上部からⅡ層の漸移層にかけて細石刃石核8点、細石刃78点等が出土し、それらの集中地点を取り囲むよ

第3節 細石刃文化の礫群・配石

うに礫が検出された。報文では、礫のまとめり（礫群）が3箇所あるとしている。礫の総数は84点で、石英片1点を除きすべて安山岩である。多くは熱を受け表面が赤褐色・黒褐色に変色している。ほとんどの礫が破碎しており、脆くなっている。重量別の内訳では30g未満の礫が半数以上を占めている。

宮崎県宮野郡佐土原町船野遺跡（橘 1975）

1970・71・72年と3次にわたり別府大学考古学研究室により発掘調査が行われ、第Ⅲ層から細石刃を主体とする石器群が出土し、それに伴って礫群が1基検出された。遺物の集中部分に接するようにして拳大の円礫・角礫が約60cm×45cmの範囲からまとまって検出されたもので、礫群の周辺や下面に掘り込みは見られず、焼土・炭化物も認められなかった。しかし、礫の中には火熱を受け表面が赤褐色に変色し、脆弱で割れているものも存在する。

鹿児島県出水市市場遺跡（池水 1967・1975）

1966・67・68・71・74年の5次にわたり、池水寛治らにより発掘調査が行われ、第Ⅲ層下部が細石刃を主体とする石器群の単純層であることが判明し、第Ⅳ層直上において住居址が2基検出された。第1号住居址の東側約3.5mに、径約1.2mの範囲に94点の拳大の安山岩礫が集積されていた。礫群を構成する礫は火熱を受けて赤化し、破碎していた。礫群の南側に炭化物や灰を伴う焼土が発見されている。

鹿児島県鹿屋市榎崎B遺跡（青崎・宮田 1991）

1990～91年に鹿児島県教育委員会によって発掘調査が行われ、Ⅶ層から細石刃を主体とする石器群が出土し、それとともに礫群や配石遺構等が検出された。礫群は9基確認されている。各礫群は12～120個の握り拳大の自然石を使用しているが、比較的まとめりのあるものや小範囲に散在しているものなど形状は一定していない。礫には熱を受け赤化し脆くなっているものや、割れているものも見られる。焼土や灰・炭化物・掘り込み等は検出されていない。

鹿児島県鹿屋市西丸尾遺跡（青崎・宮田 1991）

1990～91年に鹿児島県教育委員会によって発掘調査が行われ、Ⅶ層中位より細石刃を主体とする石器群が出土し、それとともに礫群が6基検出された。礫の集中度が高いものとそうでないものがある。握り拳大の礫を用いており、火熱を受け赤化やひび割れなどが見られる。

(3) 細石刃文化の遺構

細石刃文化に伴う遺構のうち、礫によって構成されるものには礫群・配石・石囲い炉の3種類がある。

礫群は拳大の礫を多数集積したもので、構成礫に火熱による赤色変化や破碎等が見られる例が多いことから、炉の一形態と考えられるものである。先行するナイフ形石器文化期に比べ、著しくその数を減じてはいるが、集成した30遺跡のうち本遺跡の例も含めると25遺跡からこの種の礫群が発見されており、そのうち15遺跡約50例では明らかに焼け礫を伴っていた。礫群は、

ナイフ形石器文化の終焉とともに完全に消滅するのではなく、細石刃文化にもその系統が継承されていたと見るべきであろう。

礫群の形態に着目すると、(a)比較的狭い範囲に多数の礫を集積した形態と、(b)境界の不明瞭な広い範囲に礫が散漫に分布する形態が区別される。前者は大分県市ノ久保遺跡、宮崎県船野遺跡、鹿児島県上場遺跡、榎崎B遺跡、西丸尾遺跡など、主に九州地方を中心に発見されており、1遺跡内から同種の遺構が多数検出される点にも特徴がある。一方、散漫な形態の後者は、山形県越中山S遺跡、湯ノ花遺跡、茨城県額田大宮遺跡、東京都野川中洲北遺跡、神奈川県代官山遺跡第Ⅲ文化層、上和田城山遺跡、上野遺跡第1地点、上草柳第1地点遺跡、上草柳第3地点中央遺跡、新潟県大平遺跡、大刈野遺跡など、主に本州の東日本地域で発見されており、本遺跡第Ⅴ層文化層の一例もこれに含めることができる。この種の散漫な礫群は、遺構としての統一的な形態の特徴を欠き、今のところこれを炉の一形態とみなす根拠も薄弱ではあるが、主に東日本地域において、細石刃文化に伴う礫群の一般的な形態として捉えることができよう。このように細石刃文化に伴う礫群には、九州地方と本州東日本地域にそれぞれ異なる形態のあることが指摘できる。

この種の礫群に対して、配石は重量1kg～数kg程度の大型の礫を一定の範囲に人為的に配置した形態をとるものである。礫群に比較して構成礫が大型であることに加え、礫群の礫が火熱によって変色・破碎しているのに対して、配石の構成礫には被熱の痕跡がほとんどなく、完形礫の割合が大きいことも特徴として挙げられる。本遺跡での分析でも、第Ⅵ章第3節に記述した通り、配石と礫群はその形態的な差異ばかりでなく、石器群のユニットとの位置関係や構成礫の性質が明らかに異なっており、機能の異なる別種の遺構であることが明らかである。配石はほぼ全国的に検出例が見られるが、現在のところ北海道を含めた東日本地域に多い傾向が認められる。集成した30遺跡では、本遺跡のほか北海道白滝遺跡32地点、立川遺跡第Ⅰ地点、山形県越中山S遺跡、角二山遺跡、千葉県木苅峠遺跡、東京都野川中洲北遺跡、神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡、栗原中丸遺跡、静岡県広野北遺跡などでこの種の配石が検出されている。

一方、細石刃文化期には、特徴的な炉の一形態として石囲い炉が出現する。静岡県休場遺跡で検出された2例が代表的で早くから知られているが、最近長野県信濃町上ノ原遺跡から、矢出川遺跡と同種の細石刃石核等に伴い、同様の石囲い炉が5基並列した状態で検出され、注目された(中村 1990)。同種の石囲い炉は、北海道白滝遺跡33地点でも発見されている。細石刃文化期に至りこの種の炉が出現した背景は明らかでないが、辻本崇夫は、ナイフ形石器文化期の礫群から細石刃文化期の石囲い炉への推移について、礫の熱保存効果を利用する礫群から直接火にかける炉へと火の使用形態が変化した可能性を指摘している(辻本 1984)。しかし、そうした変化の要因や、並存する礫群と石囲い炉の具体的な機能差については、今後主に礫の付着物の化学的な分析等を通じて検討していく必要がある。(上松・伊藤)

第4節 第VI層文化層におけるナイフ形石器の形態組成

長野県地方における旧石器文化の研究は、1952年の諏訪市茶臼山遺跡の発掘調査以来約40年を経過したが、石器群変遷の段階的な把握や層位に基づく編年研究が依然として進展していないのが現状である。中部地方のナイフ形石器文化の中で本遺跡の第VI層文化層が占める編年的・系統的的位置についても、御岳周辺地域における基礎的な編年研究が進展していない現段階では検討することが難しいが、石器群の中核をなすナイフ形石器の形態とその組成には、関東地方の相模野台地や武蔵野台地の石器群に対比しうる諸特徴を見出すことができる。ここでは、第VI層文化層に含まれるナイフ形石器の形態分類を行うとともに、その形態組成の比較から、第VI層文化層と関東地方の石器群との編年的対比を試みる。

(1) ナイフ形石器の形態分類

柳又遺跡A地点では、第1次・第2次調査を通じて合計43点のナイフ形石器が出土している。そのうちユニット1を中心に出土し、第VI層文化層に帰属することが確実な資料が22点ある。ここではそのうち形状の明らかな12点について形態分類を行った。12点のナイフ形石器は、調整の部位と形態によって次の5形態に分類することができる(第153図)。

A類：鋭い先端を持ち、器体の二側縁に調整を加えたナイフ形石器である。石刃を素材とし、切断技法によって素材の形状を大きく変形している。素材の打面は調整によって除去される。いわゆる茂呂型ナイフ形石器である。第117図1・5がこの類に含まれる。

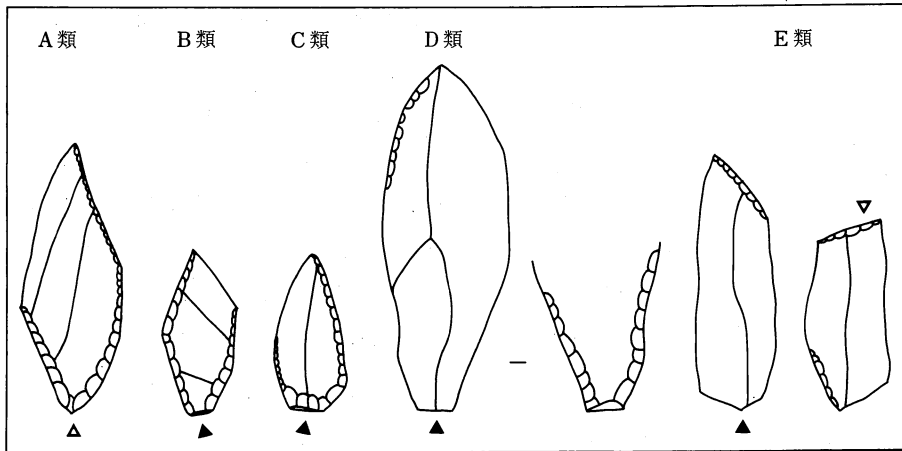
B類：剥片を素材とし、二側縁に調整を加え切出形に整形されたナイフ形石器である。刃部は器体の上部に位置する。小型のものが多く、第117図2・3がこの類に含まれる。

C類：石刃を素材とし、素材の形状をほとんど変えずに一側縁に調整を加えたナイフ形石器である。他の側縁の一部にも浅い調整が加えられている。第117図7がこの類に含まれる。

D類：石刃・縦長剥片を素材とし、その打点側を基部として、基部の両側縁に背面側から腹面へ器長の約半分にわたって調整を加えた基部調整のナイフ形石器である。上半部の側縁にも浅い調整を加えることがあるが、素材の形状をほとんど変形していない。基部の断面形は比較的厚みのある台形状をなす。左右対称の尖頭形を呈するが、A類ほど鋭い先端は持たない。第117図8、第125図30・31がこの類に含まれる。

E類：石刃を素材とし、その長軸に対して先端を斜めに切断するように急斜度の調整を加えたナイフ形石器である。調整部分は直線で、長さが器体の約半分以上に達するものもある。第118図9・10・11がこの類に含まれる。

資料が少ないため数の多少を問題にすることは尚早であるが、現段階ではA類とE類が主体的な形態とみなされる。また、基部の裏面側に調整を加えたD類も特徴的であり、A類・E類とD類の組み合わせを中心とした形態組成が捉えられる。C類は数量が非常に少ない。



第153図 ナイフ形石器の形態分類

(2) ナイフ形石器の素材

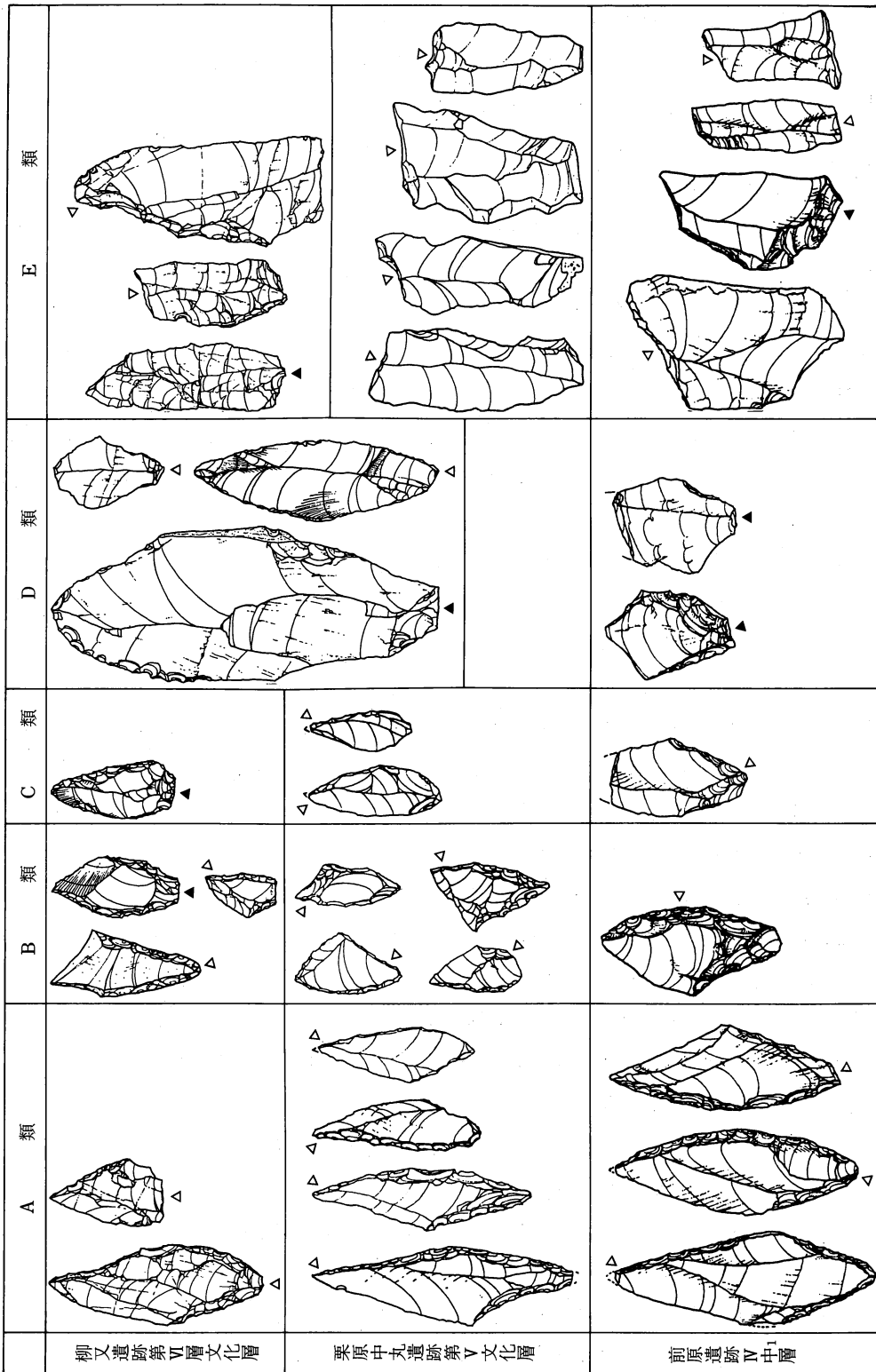
第VI層文化層のナイフ形石器の素材に着目すると、定型的な石刃を素材とした例が特徴的で、数量が多い。特にA類とE類はほとんどの例が石刃を素材としたものであり、また、素材に対する調整部位が規則的で、素材の種類・形状とナイフ形石器の形態との間に不可分の相関関係が見られる。A類・E類の素材とされた石刃は、大部分が母岩別資料2に見られるような単設打面石核から生産されたもので、長さも比較的大きい。D類にも石刃または石刃状の縦長剥片を素材とする傾向が認められる。これに対してB類には、比較的小型の剥片を素材としたものが多く、素材の鋭利な一辺を刃部として全体を切出形に整形するが、素材の形状と調整部位・石器形態との相関関係はA類・E類ほど明瞭ではない。

各形態に対する素材の打点の位置関係と打面の有無に注目すると、E類を除く各形態では素材の打点側を基部とするものが支配的である。このうちA類では、素材の切断によって打点側が大きく取り除かれているが、B類・C類・D類では素材の打面が部分的に残置される場合が見られる。E類には、素材の打点側を基部とするものと、先端にするものの2者が存在する。打点側を先端とする場合には、調整によって打面・打瘤部が大きく取り去られているが、基部方向の場合には素材の打面がそのまま残されている。

(3) 相模野台地・武蔵野台地との編年的比較

第VI層文化層のナイフ形石器については、以上に述べたようなA類～E類の各形態が含まれ、特にA類・E類にD類を加えた形態組成の特徴が指摘されるところであるが、A類・E類の組み合わせを中心とする形態組成とそれらの素材のあり方は、関東地方の石器群に類例を求めた場合、相模野台地では相模野第IV期前半（矢島・鈴木 1976・1978）、諏訪間順による編年の段階VI（諏訪間 1988）、武蔵野台地ではⅡ₀期（小田 1977、赤澤・小田・山中 1980）に特徴的に見ることができる。ここでは相模野台地における段階VIの代表例として神奈川県座間市

第4節 第VI層文化層におけるナイフ形石器の形態組成



第154図 ナイフ形石器の形態組成

栗原中丸遺跡第V文化層（鈴木 1984）、武蔵野台地のⅡ₁期の代表例として東京都小金井市前原遺跡IV中₁層（織笠ほか 1976）を挙げ、本遺跡の第VI層文化層とナイフ形石器の形態組成を比較することにする。第154図は柳又遺跡A地点第VI層文化層、栗原中丸遺跡第V文化層、前原遺跡IV中₁層出土のナイフ形石器を各形態ごとに示したものである⁽¹⁾。

A類は、栗原中丸・前原遺跡のいずれでも最も多く、主体的な形態である⁽²⁾。素材の打点と形態との位置関係に着目すると、柳又遺跡A地点の出土例では基部に素材の打面が置かれ、素材の石刃の末端を先端として全体が整形されている。これに対して栗原中丸・前原遺跡では、打面側を先端とするものと基部方向にとるものが両方存在するが、両遺跡とも前者の方が多い。その場合、素材の打摺は切断によって大きく取り去られている。基部側に素材の打面を置く例では、側縁の調整以外に、打摺を除去するための平坦な調整を基部裏面に加えたものがある。

B類は、栗原中丸・前原遺跡ともA類に比べ出土量が少ない。柳又遺跡A地点では比較的小型の剥片を素材としたものが多いが、栗原中丸遺跡では石刃を素材とし小型の三角形状に整形された形態が見られる⁽³⁾。

C類は、いずれの遺跡でも数量がきわめて少ない。柳又遺跡A地点出土の1点は基部に素材の打面を残しているが、栗原中丸・前原遺跡の出土例はいずれも打点側を先端方向としているため、打面は調整によって取り去られている。

D類は、栗原中丸遺跡には該当する例が存在しないが、前原遺跡には第125図31に類似したペン先形のナイフ形石器が2点存在する。基部の調整を見ると、前原遺跡には腹面側から調整を加えたものと背面側から調整を加えたものが両方存在するが、柳又遺跡A地点の出土例には、背面側から腹面に調整を加えるという調整方法のくせが見られる。素材の打点の方向は柳又遺跡A地点出土の例はすべて基部方向であり、うち2点に打面が残存する。前原遺跡出土の2点も素材の打点側を基部としたもので、打面が残存する。

E類はA類とともに出土量が多く、形態組成の主体をなすものである。栗原中丸遺跡出土のE類は、比較的狭長な形態が多く、長さは4cm前後である。素材の打点側を先端方向とするものが圧倒的に多く、図示した4点はすべて先端方向である。前原遺跡出土のE類は、幅広のものから狭長なものまで形態にややバラエティーがあり、素材の打点の方向も先端方向と基端方向の両方が存在する。基部に素材の打面を置くもののうち、1点には打面が残存している。柳又遺跡A地点の出土例は、形状の点で栗原中丸遺跡の出土例に類似しているが、素材に対する調整部位のあり方は前原遺跡の出土例により近似している。

以上のように、第VI層文化層のナイフ形石器は、A類・E類を形態組成の主体とする点で、相模野第IV期前半（諏訪間編年段階VI）、武蔵野Ⅱ₁期に編年的に対比することができる。当該期の南関東地方では、砂川型刃器技法とも呼ばれる典型的な石刃技法の発達が見られ、これが石器製作の技術的な基盤となって、ナイフ形石器の形態やその組成のあり方をも決定づけてい

第4節 第VI層文化層におけるナイフ形石器の形態組成

たと言ってよいだろう。一般に「砂川期」として包括して位置付けられているそれらの石器群は、南関東地方のみならず広範囲に広がりを見せており、柳又遺跡A地点の第VI層文化層もその一例に含められるであろう。しかしその一方では、ナイフ形石器の形態組成の一角を占めるD類の存在や、単設打面石核を主体とする剥片剥離技術の内容には、関東地方の石器群と同一視することのできない独自の特徴がある。ここではナイフ形石器の形態組成の比較を中心として第VI層文化層と砂川期石器群との対比を試みたが、石器群全体としてははっきりとした位置付けは、御岳周辺を含めた中部地方における石器群の基礎的な編年研究と剥片剥離技術の推移等の解明を待たなければならない。(小林)

註

- (1) 第154図に掲載した実測図の縮尺率はすべて60%である。△は打点の方向を表わし、△は打面が除去されていること、▲は打面が残存していることを示す。
- (2) 柳又遺跡A地点では出土していないが、両遺跡には基部が錐状に尖るように調整を加えた形態が特徴的に存在する。
- (3) 栗原中丸遺跡のB類は、刃部の形態は類似しているが、素材の利用の仕方や調整方法が異なっている。

第X章 第2次調査の成果と問題点

第2次調査の主な目的は、第1次調査の所見を踏まえて、第V層・第VI層の各文化層における遺物の分布状態と石器組成をより詳細に把握する点にあった。各文化層における遺物の分布状態については、第1次調査の段階である程度の傾向が確認されていたが、今回の継続調査によって各文化層にそれぞれ配石・礫群を伴うユニットの存在が確認され、石器組成や剥片剥離技術、層位の問題等に関して、さまざまな所見が得られた。ここでは今回の調査の成果と新たに提起される2・3の問題点を挙げてまとめにかえたい。

(1) 第V層文化層

当該文化層に関する成果の一つとして、細石刃石核Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類の存在とその組み合わせの様相が捉えられ、細石刃剥離技術の重要な要素である細石刃石核の製作工程の特徴がほぼ明らかになったことが挙げられる(谷口 1991)。第Ⅰ類は、両面調整の素材をあらかじめ用意し、段階的な削片の剥ぎ取りによって打面を形成する削片系の細石刃石核であり、湧別技法に代表される北方系細石刃文化との関連を示している。周知のように、削片系細石刃石核を特徴とする北方系細石刃文化は、東北アジアに起源を持ち、日本列島においては北海道から東北日本を南下するように分布している。そして、その分布の南限は概ね中部地方北部から関東の利根川水系を結ぶラインにあり(橋本 1989)、主として西南日本に広がる野岳・休場文化などのもう一つの細石刃文化と対峙していた。しかし、最近中部地方南部では、長野県南佐久郡川上村柏垂遺跡(由井・堤 1985)、長野県南佐久郡南牧村中ッ原遺跡5B地点(由井・吉沢・堤 1990)、岐阜県大野郡高根村池の原遺跡B地点(麻生ほか 1991)で、北方系に属する削片系細石刃石核およびその関係資料が相次いで発見された。また、富山県小矢部市日の宮遺跡(上野・岸本・池野・久々 1978)、岡山県苫田郡上斉原村恩原遺跡(稲田編 1988)でも、北方系とみられる削片系の楔形細石刃石核が発見されている。こうした情勢から、日本列島における細石刃文化の系統と地域性の問題は再検討の必要が生じてきた。本遺跡から出土した第Ⅰ類細石刃石核と削片等の関連資料も、まさにそうした資料の一つであり、この地域への北方系細石刃文化の伝播の時期や、野岳・休場文化(鈴木 1979)に代表される西南日本の細石刃文化との編年的な関係が改めて問題提起されるのである。一方、第Ⅱ類・第Ⅲ類は、その製作工程に定型的な削片の剥離を伴わない独特な楔形細石刃石核である。これらの存在は、北方系細石刃文化が中部地方南部に伝播波及する過程での技術的な変容を示していると思われるが、今後第Ⅱ類・第Ⅲ類に該当する類例の分布の追求がもう一つの重要な課題となる。

また第2点として、第V層文化層から出土した石器群が大きく2箇所のユニットを構成するように分かれて分布する状況が確認され、細石刃に伴う石器の器種組成が把握されたことが挙

げられる。A地点の細石刃文化に伴う主な石器器種には、①搔器、②削器、③細部調整剥片、④石刃、⑤礫器、⑥打製石斧がある。石器組成に関して特記されるのは、チャートや玻璃質安山岩を石材として石刃を生産する技術が内在している点であり、母岩別資料4・5は石刃生産および石刃を素材とする縦形削器などの石器製作の工程を示す接合資料の好例である。石器素材としてのこのような石刃の在り方にも、東北日本に広がる北方系細石刃文化との類似点が指摘される。なお、彫器は今のところ明確な共伴例が得られておらず、今後の検討課題に挙げておく。

また、2箇所のユニットに付随して配石および礫群が検出された。ユニット1では、C-10～11区の境を中心として、比較的大型の礫を円形状に配置した配石が検出され、その周囲から細石刃65点、細石刃石核・同原形等の細石刃生産に関わる石器が出土した。この配石の中心部では、礫器3点が検出されたほか周囲から搔器・削器・細部調整剥片・石刃等の石器類がまとまって出土した。特に配石の南側にあたるC-9区付近では、母岩別資料2・4に示される通り、集中的に石刃の生産をしていたことも把握された。配石自体の性格は現時点では明らかでないが、配石を中心としたこのユニットが、細石刃およびその他の石器の製作の場になっていたことは考えられる。一方、X-11区を中心とするユニット2では、166点の礫・碎片からなる礫群が検出された。礫群を構成する礫には、明らかに被熱変色したものが含まれており、礫群を中心としたこのユニットは、主に調理に関わる場であったものと推定される。このことから、ユニット1とユニット2の関係については、配石を中心とした石器製作の場と礫群を中心とした調理の場という2つの異なる場として対比して捉えることが可能である。これは第V層文化層を今後更に広範囲にわたって調査していく中で、詳しく検討してゆくべき課題である。

なお、ユニット1の範囲内にあるC-9区の第V層から、無文の土器片1点が出土した(第32図)。この土器片が細石刃文化に共伴した可能性も一応考えられるが、このグリッド周辺では耕作によって第V層上部が削剝されていることや、第IV層文化層を含め縄文時代草創期以降の複数の文化層が本来重複して残されていたことなど、土器の時期を決定するには幾つかの問題が残る。この土器片と細石刃文化との関連性については、現時点では見解を保留せざるを得ず、今後の継続調査のなかで再検討すべき課題として持ち越しておきたい。

(2) 第VI層文化層

当該文化層に関する成果の第1点として、第1次調査の際に確認されたA・B-11・12区に広がるユニットを完掘し、その中心に存在する礫群の属性を詳細に分析・検討できたことが挙げられる。当該ユニットに存在する礫群は、合計1084個の礫・碎片から構成され、その総重量は38kgに及ぶ。平面形は直径約4mで、不整楕円形を呈している。礫の多くは破砕しており、完形の礫は3.7%であった。また、破片を接合したところ121例の接合例が得られたが、接合によって完形に復元された個体はなく、多くの個体は残りの破片がこの礫群から失われているこ

とが確認された。

また第2点として、礫群を中心とする石器と母岩別資料の分布状況が把握されたことが挙げられる。当該ユニットからは10点の石核と2点の敲石が出土しており、3つの主要な母岩別資料が抽出された。石器・剥片は礫群の北側と南側に分かれて分布しており、母岩別資料1では礫群を挟むようにして南北の石核・剥片が接合する状態が捉えられ、礫群の周囲での剥片剥離の具体的な在り方が明らかとなった。また、母岩別資料1・2から、剥片剥離技術の特徴とその工程を詳細に把握することができた。

成果の第3点としては、第VI層文化層における石器の器種組成が捉えられたことが挙げられる。当該文化層における石器の器種には、①ナイフ形石器、②彫器、③鋸歯状石器、④揉錐器、⑤石刃がある。特にナイフ形石器の形態組成については、第IX章第4節で詳しく触れたように、A～E類の組み合わせが把握された。

また、第VI層文化層の生活面の層位的レベルが確認されたことも成果の一つである。第1次調査では時間の制約から第VI層を完掘することができず、「第VI層上部文化層」として把握したが、第2次調査の結果、当時の生活面の層位が第VI層の中位から下部に位置することが明らかとなった。

第V層文化層・第VI層文化層はいずれもその一部を明らかにしたにすぎず、今後さらに周囲に発掘区を拡張して全体像を明らかにしていく必要がある。また、第VII層以下に包含されるさらに古い文化層の有無の確認も、今後に残された重要な課題である。

おわりに

今回の調査によって得られた大量の遺物と記録の整理作業は、不慣れな私たち実習生にとって終始苦勞が絶えなかった。実習生一人一人が図面の作成、石器の実測、接合など連日作業に励んだものの容易にははかどらず、結果として報告書の刊行に大幅な遅れをきたしてしまった。反省点は多々あるが、これまでの作業の積み重ねがここに報告書として結実し、実習生一同感激している。結びにあたり、終始惜しめない御指導をいただいた先生方と調査に御協力いただいた各位に心より感謝する次第である。

(若泉)

引用参考文献

- 松村瞭 1911「四千尺の高原にて石鏃を採集す」人類学雑誌27-6、374~377頁
- 藤森栄一 1933「山國夏信」考古学4-6、173~180頁
- 藤沢宗平 1951「長野県西筑摩郡末川古屋敷における小堅穴及び出土遺物について」日本考古学協会
第8回総会発表要旨、3~4頁
- 藤沢宗平 1955a「長野県西筑摩郡古屋敷原遺跡」日本考古学年報3、59~60頁、日本考古学協会
- 藤沢宗平 1955b「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡」日本考古学年報4、53頁、日本考古学協会
- 藤沢宗平・小林国男 1956「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡の無土器文化」日本考古学協会第18回総会発
表要旨、24~25頁
- 藤沢宗平ほか 1956「古屋敷遺跡特集」信州ローム1、1~14頁
- 吉崎昌一ほか 1959『立川 北海道磯谷郡蘭越町立川遺跡における無土器文化の発掘調査』市立函館
博物館紀要6
- 樋口昇一・森嶋稔 1959「木曾開田高原の無土器文化遺跡」信濃11-11、51~60頁
- 森嶋稔 1959「開田高原のアルケオロジカル散歩」木曾教育13、31~37頁
- 樋口昇一 1961「木曾柳又遺跡第1次調査について」信州ローム7、3~9頁
- 藤沢宗平 1961「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡」日本考古学年報9、80頁、日本考古学協会
- 吉崎昌一 1961「白滝遺跡と北海道の無土器文化」民族学研究26、13~23頁
- 樋口昇一・森嶋稔 1962「木曾開田村大原遺跡の石器」信濃14-11、15~20頁
- 酒井潤一 1963a「木曾谷のローム層Ⅰ」地球科学67、13~20頁
- 酒井潤一 1963b「木曾谷のローム層Ⅱ」地球科学68、19~21頁
- 戸沢充則 1964「矢出川遺跡」考古学集刊2-3、1~35頁
- 杉原荘介・小野真一 1965「静岡県休場遺跡における細石器文化」考古学集刊3-2、1~33頁
- 樋口昇一・森嶋稔・小林達雄 1965「木曾開田高原における縄文以前の文化」信濃17-6、59~70頁
- 池水寛治 1968「鹿児島県出水市市場遺跡」考古学集刊3-4、1~21頁
- 木曾谷第四紀研究グループ 1967「木曾川上流部の第四紀地質Ⅰ」地球科学21-1、1~10頁
- 小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦 1967「御嶽火山第一浮石層」地質学雑誌73-6、291~308頁
- 樋口昇一・森嶋稔 1967「長野県西筑摩郡柳又遺跡」日本考古学年報15、73~74頁、日本考古学協会
- 戸沢充則 1968「埼玉県砂川遺跡の石器文化」考古学集刊4-1、1~42頁
- 樋口昇一ほか 1968「御岳高原観光開発地域」『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報
告書-昭和43年度-』67~78頁、長野県教育委員会
- 島田安太郎 1969「木曾川中流の高位段丘と礫層」第四紀研究8-4、111~119頁
- 神村透 1970「開田高原での発掘調査から-有舌尖頭器を求めて-」考古学研究16-3、17~20頁
- 小林達雄 1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」物質文化16、1~10頁
- 伊深智 1971「西又Ⅱ遺跡調査ノートより」木曾教育36、52~57頁

- 小林達雄・小田静夫・鳥羽謙三・鈴木正男 1971「野川先土器時代遺跡の研究」第四紀研究10-4、2
31~270頁
- 長野県教育委員会 1971『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧』その1（昭和25年度~昭和40年度）
- 小野爾良・加藤晋平・鶴丸俊明 1972「北海道訓子府町増田遺跡の第一次調査」考古学ジャーナル71、
6~13頁
- 加藤稔 1972「越中山S遺跡の細石刃文化発掘」庄内考古学11、1~5頁
- 伊深智 1974「西又II遺跡調査ノートより（二）」木曾教育44、21~24頁
- 池水寛治 1975「上場遺跡の住居址から」もぐら10、1~9頁
- 加藤稔 1975「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』2、112~137頁、雄山閣出版
- 小林武彦・大森江い・大森貞子 1975「御岳火山噴出物の科学的性質」地質調査所月報26-10、497~
512頁
- 鈴木道之助 1975「木苧峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ、45~124頁、千葉県
企業庁・(財)千葉県都市公社
- 橋昌信 1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」考古学論叢3、1~69頁
- 森嶋稔 1975「杉久保および弁天島南遺跡」『野尻湖の発掘』205~225頁、野尻湖発掘調査団
- 小田静夫・金山喜昭 1976「前原遺跡IV中2層文化の隣群」考古学研究23-1、116~119頁
- 織笠昭・松村明子ほか 1976『前原遺跡』(I) 前原遺跡調査会
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における石器群の変遷について」神奈川考古1、1~30頁
- 小田静夫 1977「先土器時代の東京-「野川以後」の研究史」どるめん15、32~49頁
- 小林武彦・高木信行・藤井登美夫 1977「御岳火山新期御岳テフラ層の模式柱状図」軽石学雑誌4、3
7~41頁
- 辻秀子 1977『勢雄遺跡 先土器遺跡の発掘報告』更別村教育委員会
- 上野章・岸本雅敏・池野正男・久々忠男 1978『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』富山県
教育委員会
- 川崎純徳・渡辺明・星山芳樹編 1978『額田大宮遺跡』茨城県那珂町史編纂委員会
- 森山公一 1978「折断・折損による両面加工石器の技法の復原とその変遷に関する一考察」『中部高
地の考古学』48~62頁、長野県考古学会
- 矢島國雄・鈴木次郎 1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 154~182頁、
有斐閣
- 織笠昭 1979「中部地方北部の細石器文化」駿台史学47、81~98頁
- 鈴木忠司 1979a「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』1~34頁、(財)古代学協會
- 鈴木忠司 1979b「中部地方南部の細石器文化」駿台史学47、99~119頁
- 田中英司 1979「武蔵野台地IIb期前半の石器群と砂川期の設定について」神奈川考古7、65~74頁
- 中村喜代重ほか 1979『上和田城山-神奈川県立大和南高等学校新築工事に伴う調査報告』大和市教
育委員会

- 赤澤威・小田静夫・山中一郎 1980「第4章 日本の旧石器」『日本の旧石器』136～148頁、立風書房
- 安孫子昭二・館野孝・堀井晶子ほか 1980『多摩蘭坂遺跡』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
- 織笠昭・金山喜昭・桑野一幸・織笠明子ほか 1980『鈴木遺跡Ⅱ 都市計画道路小平2・1・3号線内』東京都建設局・小平市鈴木遺跡調査会
- 開田村誌編纂委員会編 1980『開田村誌』(上)長野県木曾郡開田村
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1980『図録石器の基礎知識』Ⅰ・Ⅱ先土器(上・下)柏書房
- 鈴木忠司・保坂康夫ほか 1980『静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 高木信行 1980「木曾谷の層序とそれに関連した諸問題」軽石学雑誌6、41～49頁
- 関矢晃 1981『榊形遺跡調査報告書』群馬県勢多郡宮城村教育委員会
- 服部実喜 1981「武蔵野台地における礫群研究の現状—最近的研究成果を中心として—」石器研究2、25～28頁
- 加藤稔・酒井忠一ほか 1982「最上川・荒川流域の細石刃文化」『最上川』768～819頁、山形県総合学術調査会
- 長野県編 1982『長野県史』考古資料編(北東信)長野県史刊行会
- 藤本強 1982「常呂川流域の細石刃」北海道考古学18、1～21頁
- 織笠昭 1983「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物』77～104頁、文献出版
- 鈴木忠司 1983「旧石器人のイエとムラ」季刊考古学4、37～42頁
- 堤隆・中村喜代重ほか 1983『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査概要報告』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
- 森嶋稔 1983「柳又遺跡」『長野県史』考古資料編(中信)10～17頁、長野県史刊行会
- 山下英樹 1983『静岡県磐田郡豊田町広野北遺跡発掘調査概報』平安博物館
- 織笠昭 1984「細石器文化組成論」駿台史学60、71～93頁
- 金山喜昭 1984「武蔵野・相模野両台地における旧石器時代の礫群の研究」神奈川考古19、1～34頁
- 鈴木次郎 1984『栗原中丸遺跡—県立栗原高等学校建設にともなう調査』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 高根村史編纂委員会 1984『高根村史』岐阜県大野郡高根村
- 田中英司 1984「砂川型式期石器群の研究」考古学雑誌69-4、1～33頁
- 辻本崇夫 1984a「細石器文化の遺構」駿台史学60、94～117頁
- 辻本崇夫 1984b「礫群研究の現状と課題」東京の遺跡4、東京考古談話会
- 中村喜代重・安藤史郎・堤隆ほか 1984『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告』Ⅱ 大和市教育委員会
- 鈴木忠司 1985「再論 日本細石刃文化の地理的背景—生業論への視点—」『論集日本原史』161～191頁、吉川弘文館
- 保坂康夫 1985「先土器時代の礫群の分布とその背景」山梨考古学論集Ⅰ、7～56頁、山梨考古学会
- 松本盆地団研木曾谷サブグループ 1985「昭和59年度長野県西部地震による地盤災害と御岳山南麓の

第四系（その1）」地球科学39-2、89~104頁

- 森嶋稔 1985「中部高地の楔形細石刃核」信濃37-11、158~168頁
- 山下英樹・鈴木忠司・保坂康夫 1985『静岡県磐田郡豊田町広野北遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 由井一昭・堤隆 1985「長野県南佐久郡川上村柏垂遺跡採集の細石刃石核」古代文化37-6、39~43頁
- 稲田孝司 1986「中国地方旧石器文化の諸問題」岡山大学文学部紀要7、75~94頁
- 神村透・山下生六 1986『開田高原大原遺跡-押型文土器と石器-』長野県木曾建設事務所・木曾郡開田村教育委員会
- 砂田佳弘 1986『代官山遺跡-県立長後高等学校建設にともなう調査』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 堤隆 1986「第IV文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』179~297頁、大和市教育委員会
- 金山喜昭 1987「先土器時代の礫群研究史-その研究意義と今後の課題-」古代文化39-7、36~51頁
- 竹本弘幸・百瀬貢・平林潔・小林武彦 1987「新时期岳テフラ層の層序と時代」第四紀研究25-4、337~352頁
- 辻本崇夫 1987「礫群の形成過程とその意味」古代文化39-7、2~17頁
- 保坂康夫 1987「礫群使用の非日常性について」古代文化39-7、18~35頁
- 稲田孝司編 1988『恩原遺跡 旧石器人の生活跡をさぐる』恩原遺跡発掘調査団・岡山県上斉原村教育委員会
- 植村武・山田哲雄ほか編 1988『日本の地質-中部地方I』共立出版
- 小野昭 1988「大平遺跡」『第2回東北日本の旧石器文化を語る会』17~19頁
- 金山喜昭 1988a「礫群研究の手掛かり 埼玉県嵐山町槻川河原のパーベキュー場の観察から」東京の遺跡27、359~360頁
- 金山喜昭 1988b「礫群の機能と用途」古代文化40-8、1~20頁
- 栗田勝広 1988『市ノ久保遺跡-大分県犬飼地区遺跡群発掘調査概報I』犬飼町教育委員会
- 小林達雄編 1988『小馬背遺跡』國學院大學文学部考古学研究室
- 佐藤雅一 1988a『大刈野遺跡-リゾート型共同住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書』湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1988b「新潟県南魚沼郡湯沢町・大刈野遺跡出土の石器群」『第2回東北日本の旧石器文化を語る会』20~24頁
- 砂田佳弘 1988「相模野の細石器」神奈川考古24、31~64頁
- 諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について-一層位的出土例の検討による石器群の段階的把握-」神奈川考古24、1~29頁
- 栗田勝彦 1989「九州の細石刃文化-大分県市ノ久保遺跡」季刊考古学29
- 小林達雄編 1989『小馬背遺跡1989』國學院大學文学部考古学研究室
- 竹岡俊樹 1989『石器研究法』言叢社
- 千葉寛・西村勝広ほか 1989『東京都小金井市野川中州北遺跡-野川第二調節池工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』東京都建設局・小金井市遺跡調査会

- 橋本勝雄 1989「東日本の細石器文化—東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向—」考古学ジャーナル306、12～21頁
- 保坂康夫 1989「礫群とブロックの関わりについて」山梨考古学論集Ⅱ、39～67頁、山梨考古学会
- 麻生優・岡本東三 1990「岐阜県池の原遺跡発掘調査概要」第三回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨、8～16頁
- 小林達雄編 1990『柳又遺跡A地点 第1次発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室
- 橘昌信編 1990『松山遺跡』別府大学付属博物館
- 中村由克 1990「めずらしい旧石器時代の炉跡」博物館だより25、1～2頁、信濃町立野尻湖博物館
- 由井茂也・吉沢靖・堤隆 1990「信濃野辺山原の細石刃文化—中ッ原5B地点の細石刃文化資料から—」古代文化42-11、1～18頁
- 青崎和憲・宮田栄二 1991「相対する旧石器遺跡—鹿児島県榎崎B遺跡・西丸尾遺跡」季刊考古学34、83～84頁
- 麻生優・下川達彌・白石浩之・岡本東三ほか 1991「岐阜県池の原遺跡調査概要」『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』6～15頁、平成2年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書
- 小野昭・菅沼亘・藤田英忠 1991「水原町大平遺跡の調査」水原郷土誌料22、1～20頁、新潟県北蒲原郡水原町教育委員会
- 谷口康浩 1991「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」國學院雑誌92-2、21～51頁

発掘調査参加者・関係者一覧

考古学実習生 伊藤昌広 上松寿明 岡崎友子 荻野早苗 小林理恵 今 裕司 佐藤多佳子 杉山
真理 橋 史夏 中田真弓 成沢美奈 水野晴美 山内利秋 山口真由美 山本みき 若泉 亮

発掘特別参加者 安西 宏 伊藤慎二 岡 稔 小川岳人 河合 修 木場幸弘 熊沢孝之 小林フミ
子 小森利恵 斉藤英行 佐々木雅裕 新開基史 鈴木美奈子 関口昌次 高橋郁代 高橋真実 竹
内美能里 塚田泰司 徳永園子 東野豊秋 舟木 聡 松村愉文 山本正吉史 山本光明（以上國學
院大學学生） 岸崎浩実 下平博行 中村 大（以上國學院大學大学院生） 坂本めぐみ 竹田なおみ
橋本達也（以上青山学院大学学生） 有岡健司 粟井育子 小笠原秀征 斉藤晴美 関 珠枝 武岡忠
史 水谷志佳子 初山泰秀（以上駒沢大学学生） 井上佑美子 大澤香子 北林春々香 佐藤裕子
篠崎尚子 高橋佳奈 外山敬子 町佳恵 溝上和江 村田美津子 森井美穂子（以上東京女子大学学
生） 越前慶祐（富山大学学生）

整理参加者 有岡健司 粟井育子 安西 宏 伊藤慎二 岡 稔 小笠原秀征 岸崎浩実 熊沢孝之
胡 江 小林フミ子 小森利恵 斉藤晴美 斉藤英行 佐々木雅裕 坂本めぐみ 下平博行 新開基
史 鈴木美奈子 関 珠枝 関口昌次 高橋郁代 高橋真実 武岡忠史 竹田なおみ 竹内美能里
塚田泰司 徳永園子 中村 大 橋本達也 東野豊秋 舟木 聡 松村愉文 水谷志佳子 初山泰秀
森井美穂子 山本正吉史 山本光明

発掘協力者ならびに機関 長野県教育委員会 開田村教育委員会 長野県埋蔵文化財センター 学校
法人市邨学園 開田村郷土館 村上和幸（柳又遺跡地主） 神田正知（開田村長） 千村博男（開田村
教育委員会教育長） 末岡熙章（学校法人市邨学園理事長） 永峯光一（國學院大學文学部教授） 神村
透（王滝中学校） 森嶋 稔（長野県考古学会） 樋口昇一・丸山敏一郎（以上長野県埋蔵文化財センター）
児玉卓文（長野県教育委員会文化課） 松田武重・吉田隆幸（以上開田村教育委員会） 古畑正美（学
校法人市邨学園開田高原研修センター） たけみ商店 嶽見旅館 國學院大學教務課・管理課・総務
課

見学者 赤塩 仁 浅野光洋 安斎正人 池田大助 井澤純 石岡憲雄 石村具美 稲垣尚美 植田
真 宇田敦司 大竹憲昭 岡田 滋 小口達志 小俣邦夫 角張淳一 加藤勝仁 可児通宏 神村 透
川口 潤 川崎 保 川崎義雄 河内公夫 川西健二 栗原文蔵 古池晋禄 古賀 仁 児玉卓文 小
林紀夫 近藤尚義 酒井重洋 佐藤宏之 助川朋広 鈴木圭一 鈴木康二 須藤隆司 砂田佳弘 諏
訪間順 瀬川裕市郎 関塚英一 関 歳晃 関 俊彦 芹澤達夫 芹澤義夫 高橋一夫 高橋 誠 対
比地秀行 千葉剛成 堤 隆 寺島孝典 藤野次史 富樫雅彦 中島庄一 永塚俊司 中原 斉 野村
祐一 橋本康司 旗屋 大 早川 泉 樋口昇一 日々野良一 広瀬昭弘 本多昭彦 前島徳武 丸山
敏一郎 宮尾 亨 宮坂 清 向井朋生 村井 実 諸星良一 山崎和己 山村貴輝 山本 健 山本哲
也 吉井雅勇 和田信行（五十音順敬称略）